

奇譚クラス

9月号



新しい風俗文献誌

1973.

9

昭和四十八年八月二十日印刷 昭和四十八年九月一日発行 九月号（第二十七巻第九号）毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別郵便承認第二〇号

女性モデル求めます

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以来二十数年、多くの女性愛読者の
数多くの告白の投稿やモデルの応募によつて
献誌として、絢爛たる金文字塔を、打ち立て
まいり、期待に、真摯で研究熱心な本誌読者
望まれる方は、どうか御遠慮なく、勇躍をの
て御応募下さるよう、お待ちしております。
○本誌愛読の女性の方々に、お礼を言いた
に、別、年齢など、一切の制限を、遠く近
拾万には、お礼金として、お返しを、遠く近
は、御本人の、お許し、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
を、お書き下さる、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
提、お書き下さる、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
致、お書き下さる、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
幸、お書き下さる、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
○撮影した、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
と、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
表、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
改、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
介、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
成、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
き、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
個、お願ひ、お願ひ、お願ひ、
○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体
重などは、必ずお書き添え願ひます。写真が
あれば、同封下されば、好都合ですが、お手元
に、当分の、大阪市住吉郵便局私書箱第41号
。申込先。大阪市住吉郵便局私書箱第41号

◆本誌三百号突破記念◆

▽賞金△

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽内容△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ
奇譚、ラブ、多き、オニア、星霜を
この、三、多き、オニア、星霜を
その、辛、風俗、多き、オニア、星霜を
の、御、風俗、多き、オニア、星霜を
き、御、風俗、多き、オニア、星霜を
よ、御、風俗、多き、オニア、星霜を
一、御、風俗、多き、オニア、星霜を
て、御、風俗、多き、オニア、星霜を
咲、御、風俗、多き、オニア、星霜を
い、御、風俗、多き、オニア、星霜を
三、御、風俗、多き、オニア、星霜を
実、御、風俗、多き、オニア、星霜を
て、御、風俗、多き、オニア、星霜を
一、御、風俗、多き、オニア、星霜を
す、御、風俗、多き、オニア、星霜を
た、御、風俗、多き、オニア、星霜を
し、御、風俗、多き、オニア、星霜を
嗜、御、風俗、多き、オニア、星霜を
崇、御、風俗、多き、オニア、星霜を
色、御、風俗、多き、オニア、星霜を
テ、御、風俗、多き、オニア、星霜を
に、御、風俗、多き、オニア、星霜を

百萬円懸賞原稿募集

▽規定△

一、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
三、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
入、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
掲、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
削、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
ます、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
故、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
一、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
と、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
下、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
住、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
応、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
性、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
と、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
箱、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、
並、応募作品は、必ず、二百字以上、四百字以下、

奇譚クラブ

昭和四十八年八月二十日印刷
昭和四十八年九月一日発行
昭和四十八年四月二十日第三種郵便物認可
昭和四十八年四月二十日
国政大印特第...
二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



ゝ美しき縛しめゝ とゝ責ゝ のビジョン

塚 本 鉄 三 ・ 撮 影



美
へ
の
憧
憬

△前田真知子▽



昭和四十八年 九月号 目次 △第二十七卷第九号
通刊第三〇七号▽

「退癡の中の美しさ」 △深田菊子▽	南村 俊平	(21)
忍頂寺SM放談『女体開陳迫体験』	忍頂寺 進	(22)
告白密室での「一人プレイ」報告書	村田 恭子	(28)
SM落書帳「エロチカ・グロテスク刺環の魅力」	長谷田 亀治	(34)
手記「僕はマゾヒストだろうか」	麻曾比須人	(39)
連載・時代S小説『紫蘭の門』 (25)	風流極道軒	(44)
憧憬「大振袖花嫁衣裳の被虐美」	高橋 英樹	(58)
ドキュメンタリ「WHY・SPOT・ON・ME？」	みはらひろし	(62)
女と男の散文詩「ある体験」	古井 哲哉	(69)
連載小説『大噴火』 △第六十回▽	千葉 青鬼	(72)
女の鼻に憑かれた男の手記「鼻への誘い」	久保 房夫	(80)
敗戦秘話「ソ連兵の餌食になる日本女性」	鈴鹿 昌子	(82)
ダメな子「不道德「オシメ学」への誘い」	岩手 信夫	(94)
文献研究「女相撲書誌拾遺」 (2)	雄松比良彦	(98)
手記「二人の男性に責められた私」	木村 洋子	(102)
体験告白「私のネクター採取苦心談」	岩本 摩像	(114)
S創作『花いばらは病みぬ』	久留木 栄	(120)
SM随想「責め」の専科	香川絃一郎	(143)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ		
『M女加津子がすすり泣くとき』	塚本 鉄三	(146)
芸妓の哀歌「春情色街責めの手管」	あきのよしみず	(176)
連載・M派交友録 (42) 『グラマーな猛女』	鬼山 絢策	(180)
女囚刑務所体験記「女囚懲罰房」	小坂多美枝	(196)
懸賞体験小説『ミミクリーとイリンクス』	時田 憲文	(200)

美への憧憬・浴室での余情……………前田真知子

マゾに感溺した目……………中川恵子

溢れるナミダ・紐とメロン腹……………南加津子

もがきたい年頃……………西条紀代

操りたいポーズ……………川路むら子

緊縛の法悦境・白い内股の美……………笠井奈保子

カメラの狙う目標・晒す裸身……………鈴木千鶴子

脚を挙げさせる手段……………玉本章子

褲式縛りの謎……………松本たえ

麻縄のトゲに耐う……………三浦純子

股間縛りが痛い！……………江口淑子

白人女性の日本式縛り……………シーラケニ

妊婦の浣腸責め……………南加津子

土足をお舐め・ピールの肴……………春日ルミ

餌物にとびつく女……………逸毛恵須子

美女の尻に敷かれて……………絹川文代

操り人形責め記……………深田菊子

ツインのベッドにて……………荒尾慶子

引き廻しの出発……………富田由美子

プランコ吊りの責め方……………高村浩子

脚光を浴びたMの想念……………木村洋子

「美しき縛しめ」と「責め」のビジョン〔塚本鉄三〕……………

イメージギャラリー「奉仕のごほうび」……………岡たかし(42)

・「楽しい公園」室井亜砂路(48)……………「那都子供花」須坂旭

孝(86)・「足台非情」岡たかし(54)……………「熱い愉悦」M男の四馬

夢(86)・「屈辱のハート」北原純子(90)……………「M男の相

談」岡たかし(116)・「悦虐の後始末」須坂旭(126)……………

・「吊られるう！」志羽利也(179)……………「こぼれ香の尊さ」

・「お食事への招待」春川ナミオ(192)……………「二人の関係」

志羽利也(205)・「耐熱テスト」須坂旭(229)……………

目次フォト……………「土壇場の女囚」……………美木乃々子

……………「猪吊りの女体」……………左近麻里子



セミ・フィクション・ショート・ストーリー

「SM的アバンチュールの一夜」……………乃美 対造……………(209)

耽奇房我楽多控(6)「海外SMポルノ漫考」……………辻村 隆……………(212)

SMハードボイルド「ランウェイ・シルエット」佐原陽一郎……………(221)

読者通信……………編集部選……………(266)

再び咲いた紫陽花の花……………笠井奈保子

夏の浣腸余話……………竹迫 誠也

おれは妬ける……………焼持 焼夫

カッパというアダ名の私……………余田 曉子

「別嬪じゃないけど凄く……………出雲 強造

可愛い娘」に惚れた男……………山口 幸子

モグサと共に青春を……………T・T 生

サロン落穂抄(6)……………T・T 生

「美しき縛しめ」と「責め」……………塚本 鉄三

のビジョン(口絵解説)……………

僕の妄想「絵そらごと」……………秋野 美水

願望「明日も縛りを」……………早木 夢二

マゾ恋歌「静子のうた」……………北川まりこ

M女通信「雨の日の妄想」……………高村 浩子

家畜プレーと道具プレーを……………高岡 三夫

奇クに魅せられた一年……………北 零人

フォト「蛙腹の哀感」……………金原奈加子

「腹ふくらみし頃」……………中河 恵子

奴隷妻「まりこ」に宛てて……………橋 房由

最上卓也氏に期待する……………小池 明男

アゲラタムの花に添えて……………宇津木清子

編集部だより……………編集部

「獣姦部落」の提唱……………甲斐千恵子

刺青と女体責め……………山原 清子

ペット飼育に対する考え方……………田中 或文



マゾに惑溺した目



溢れるナミダ

<中河恵子>



△南加津子▽



＜西条紀代＞

もがきたい年頃

擦りたいポーズ

△川路むら子▽



緊縛の法悦境

△笠井奈保子▽



カメラの狙う目標



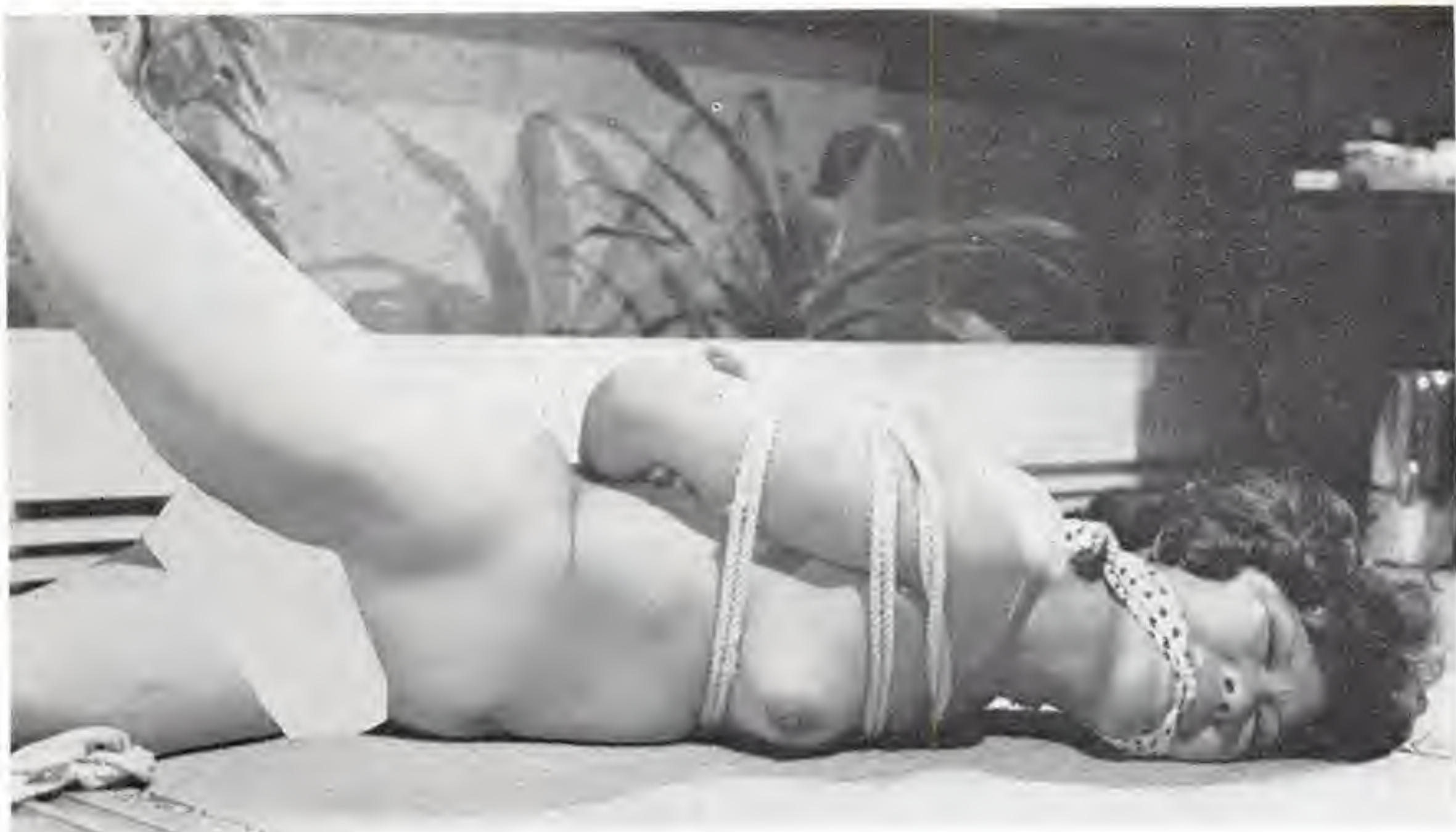
晒す裸身のすべて



△鈴木千鶴子▽



△玉木章子▽



脚を挙げさせる手段

禪式縛りの謎



△松本たえ▽

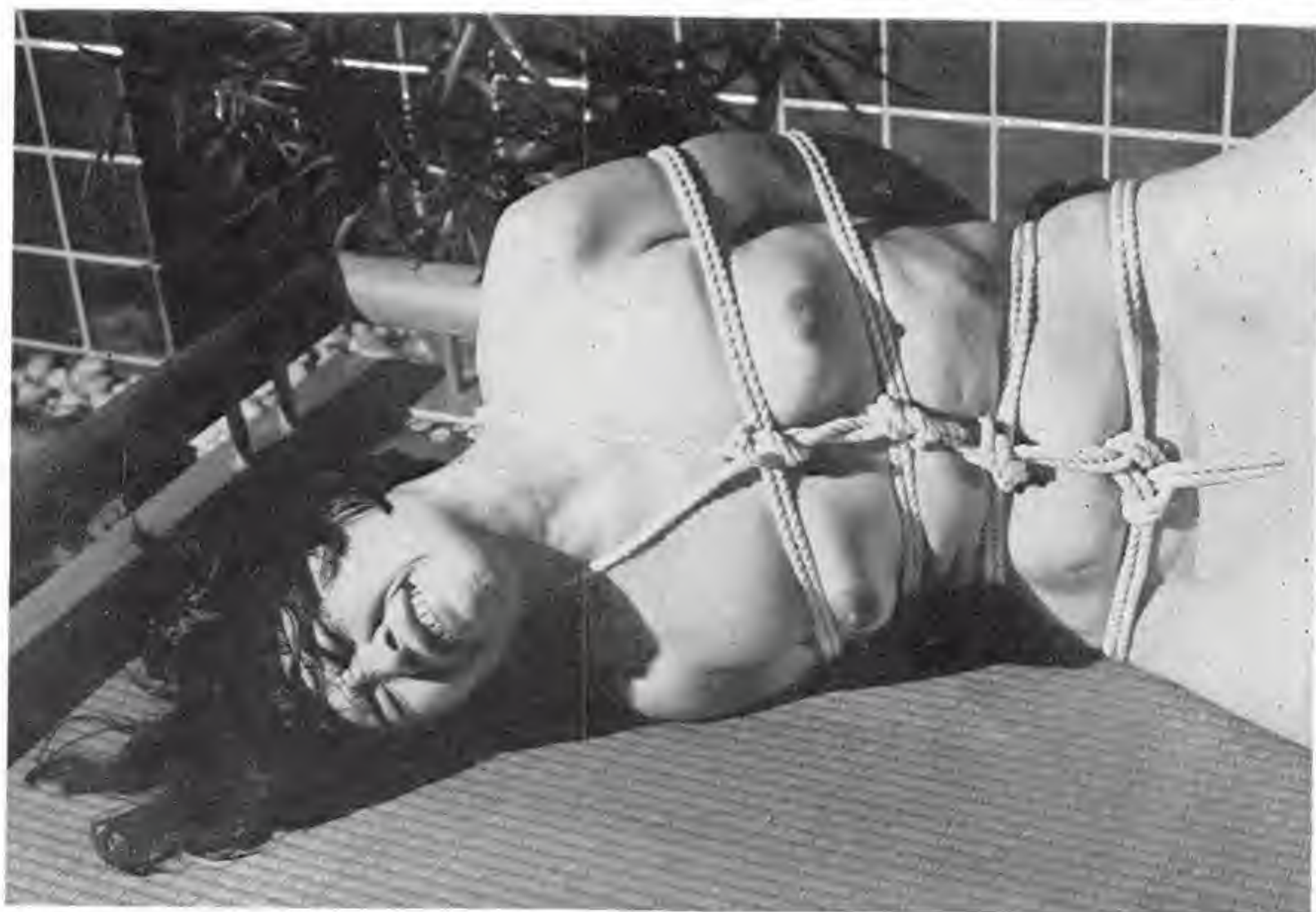


麻縄のトゲに耐う



△三浦純子▽

股間縛りが痛い！



△江口淑子▽



白人女性の日本式縛り

＜シーラー・ケニー＞



妊婦の浣腸責め

＜南 加津子＞



<春日ルミ>

M

フ

オ

ト

土足をお舐め……

△春日ルミ▽



餌物にとびつく女……

△逸毛恵須子▽





〔絹川文代Sシリーズ〕

美女の尻に敷かれて……………〔絹川文代〕



ビールの肴……

セ
ク
シ
ョ
ン

操り人形責め記

△深田菊子▽





繩に操られる人形

＜深田菊子＞



△荒尾慶子▽



ツインのベッドにて

浴室での余情



△前田真知子▽

引き回しの出発



△富田由美子▽

ブランコ吊りの責め方



△高村浩子▽

脚光を浴びたMの想念



△木村洋子▽

紐で強調したメロン腹



△南 加津子▽

白さを見る内股の美



△笠井奈保子▽

奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年九月号

第二十七卷 第九号
通刊 第三〇七号



退廃のなかの美しさ

モデル……………深田菊子

深田菊子の物嫌い、けだるさの溢れたまなざしのなかに、僕は限りない退廃的な美しさを見る。彼女のすべやかに伸びた肢体に絡んだ縄は、彼女の体のなかに秘めた、もろもろのエキセントリックな性癖を、ともすれば外部に押し出そうとしている。この深田菊子のただごとでない美しさは、身を投じてSMに殉じた女だけが見せることの出来る捨身の美といつてよいだろう。僕は心からなる憧憬と敬愛の念をもって、深田菊子の緊縛写真を、見つけている。(南村俊平・記)



覗きたい心理

男性には、不思議と女性の体を覗きたいという心理があり、これが、むしろ正常なのだと思う。私が高校入試のため、受験準備に没頭していた中学（旧制）五年の頃だった。

七月に入って、いよいよ最後のラストスパートだとばかり、連日勉強を続けていた。

与えられた四帖半の奥まった部屋に、閉じ籠り、濡らした手拭いで鉢巻をして頑張り続け、眠くなれば、そのまま仰向けに倒れて眠り、目が覚めたら、また机に向かった。

家は官吏を停年退職した父が始めた煙草の小売商で、両親は一日中、店にいたので、二階の一室にいる私とは、食事以外、殆ど顔を合わすこともなかった。

忍 頂 寺 S M 放 談

女によ体たい開かい陳ちん

追つい体たい験けん

忍にん 頂ちよう 寺じ 進すすむ

七月も中頃になって、今まで順調に進捗していた試験勉強が、あるハプニングによって一頓挫をきたす事件が起こった。

夕暮れ近く懸命に代数の問題を解いていた私は、字が見にくくなったので電灯のスイッチをつけた。天井から吊り下げてあった電球を紐でひっぱって窓際近くに寄せてあったのだが、その位置が思わしくないので、私は直

そうとして立ち上がり、机の上にあがった。紐を締めようとしながら、ふと、下に視線をやった私は、思わず、あっと声を出して身をすくめてしまった。隣の家の天窓から覗いた真正面の大きな姿見に、若い女の人の全裸体が、うつっていたのである。

今の今まで、受験勉強に熱中していたし、家には内風呂があったので、気にもしていなかったが、私の家の隣は、大衆浴場だったのだ。そういえば、家の店には、煙草の外に、石鹸とかタオルとかいった日用品も売っていたのは、風呂屋の客も目当てにしていたのだろう。

私は、すぐ電灯を消して、薄暗くなった部屋の机の上に立って、壁に体を寄せ、その大鏡にうつる全裸の女体を喰い入るように眺めていた。当時十八才の私の胸は、ドキドキと早鐘のように鳴っていた。

腰にタオルを巻いて鏡の前に立つ女もいたが、多くの女は素裸のまま髪を直したりしているの、私の方には真正面の何もかも晒している恰好になった。

私は、一時間余りも、入れ替り立ち替り、鏡にうつる全裸の女人群像を眺め続けていたので、頭は、かっかっ火のように燃えあが

って、とても勉強できるような状態ではなかった。それでも、自制心をふるい起こして、机から下りて、座蒲団に腰を下ろした。

ノートを開いて、代数の問題を解こうとしたが、目が霞んでしまって文字が見えず、それでいて、頭の中では大きな熱球が、渦を巻いて、ぐるぐると回っていた。

△勉強しなければ駄目だ。ここで挫折してしまったら、今までの努力は水の泡だ▽
そういった脅迫観念にかられて、歯を喰いしばって鉛筆を握るが、頭は空虚だ。

△見たい。なんとしても見たい。真白い若い女の素裸が、その窓の向こうの鏡に写っているのだ。今も、どんな綺麗な女が、いるかも





しれないのだぞ。見てみる、見てみる。一回ぐらい見ても、どうということはないじゃないか。勉強は、それからしろV

私は、その誘拐に負けて、電灯を消すと、再び机の上に立った。机の上に座蒲団を二つ折りにして乗ると、大鏡の隅から隅まで見渡せることが分かったし、背伸びすると、女の

背中も少しばかりは見えた。なにしろ、こちらには二階の窓だし、風呂屋の方は平屋だから湯気抜きの天窓を開けると、女の脱衣場が手にとるように、覗くことが出来た。

女の裸を覗くことの、しびれるような楽しさを知ってしまった私は、もう、それからは夕方になってノートの文字が見えなくなると

机の上へあがってしまうのであった。

いけない、こんなことをしては、駄目だ——と、理性では思うのだが、その強烈な誘惑には、どうしても抗しきれなかった。

ホステス風の若くて美しい女が、素晴らしいプロポーションを全裸のまま、鏡にうつして三十分ばかり、お化粧をしていた時は、私は始めから終わりまで見てしまったばかりか、あわてて表へ出て、その女の洋服を着た姿にまで見とれてしまった。

さすがに、あとをつけるというようなことはしなかったが、毎日、その美しい女が入浴しに来る頃になると、私は勉強していても、そわそわして落着かなかった。

慰安婦の検診

大学に在学中は徴兵延期の特典に浴していた私も、卒業と同時に、いつ召集されるかわからない程、戦局は日々に苛烈さを増してきた。大東亜戦争の緒戦の大勝利に引き続いて戦果を益々拡大している時だった。

一兵卒として召集され、何処とも知れぬ戦野に屍をさらすなら、と、南方派遣軍政要員の募集に応ずることにした。大学高等専門学校卒業の資格を有する者から一般公募したの

だが、百二十名の募集に対して、二千数百人の応募者があったにも拘らず、幸いにして合格することが出来た。

陸軍省に出頭して任官の辞令と金壹千円也の支度金を貰った。軍刀は百円、拳銃は四十円ぐらいで買えたから、従軍服や長靴、トランクなどを整えても五百円余り残った。

当時、陸軍が軍政を施していたのはマレイ、ビルマ、ジャワ、フィリッピン、ボルネオの五つの地区だったが、陸軍省へ出頭したとき、任地の希望を第一希望と第二希望に分けて書くように言われた。多くの者はジャワを第一希望に、第二希望にはフィリッピンかマライを書いた。激戦中のビルマと悪熱瘴癘の地と考えられたボルネオは敬遠された。

任地に着くと、二十五才以下の若い者ばかりを選んで三カ月の現地語の特訓が開始された。三カ月の間は日夜を通じて二十四時間、日本語を絶対に使ってはならないという猛訓練のお蔭で、なんとか現地語を解し曲がりなりにも会話が出来るように

なった。

軍政監部の政庁で民政課に配属されたが、その課には、宗教教育班、宣伝班、防疫班と

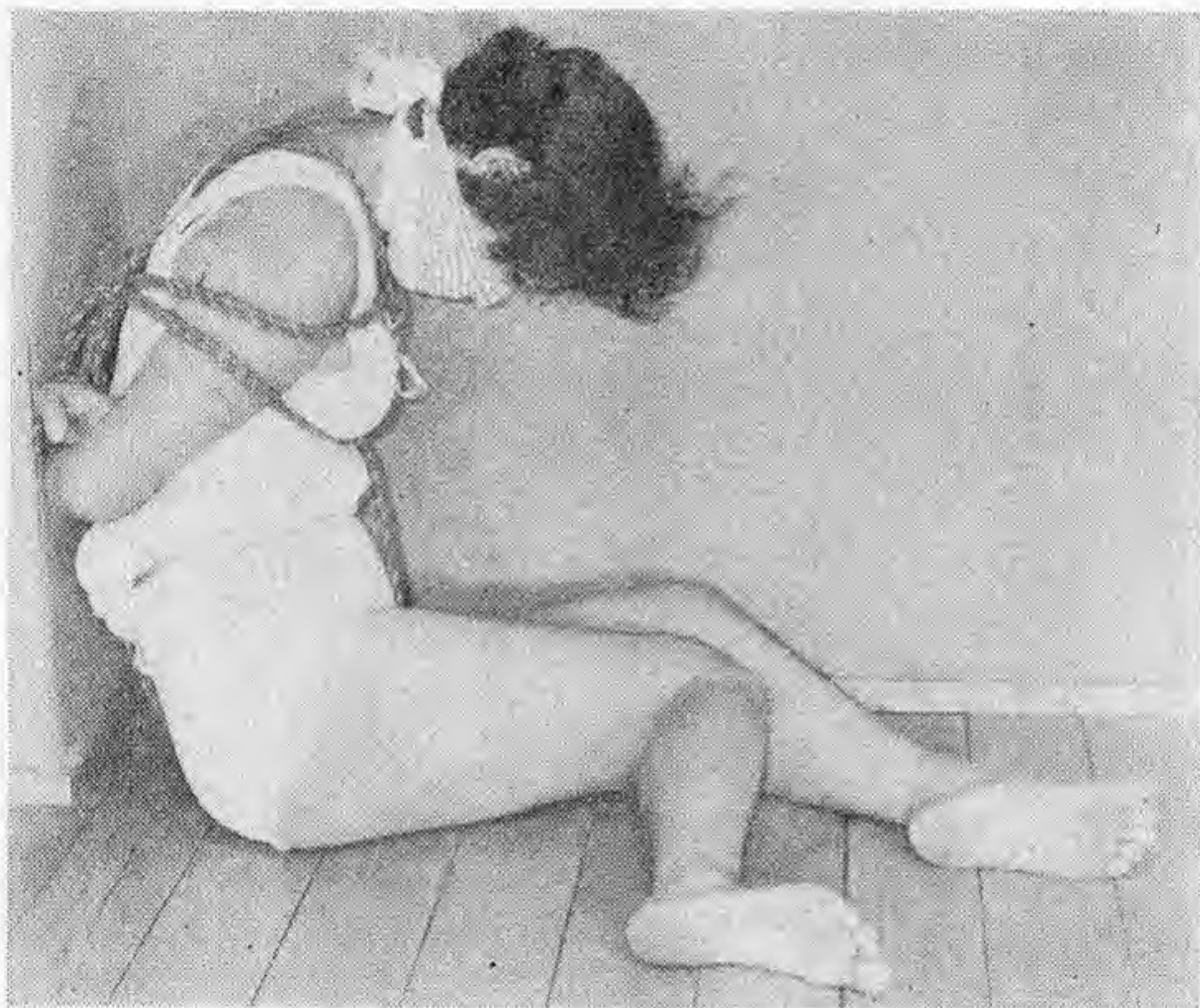
三つの班があるところから、防疫班の仕事として当時二十四才の私は、通訳として医官と一緒に慰安婦の検診に当たることになった。

慰安婦——といっても、今の若い人達には何のことかわからないと思うが、男性ばかりの軍隊の兵士を性的に慰安する女のことである。そうした女性を置いた家を慰安所^やといひ俗にピー家と呼んでいた。

そうした女性達の性病の有無を検査するのが、慰安婦の検診であるがまだ若かった私にとって、これは非常に興味のある仕事であった。十三四才から二十才ぐらいまでの若々しい女性の前を無理矢理、開けっぴろげにさせて、例のクスコと呼ぶアヒルの嘴のような道具で、奥の奥まで覗くのが仕事だから、まさにSM的な色彩が濃厚であった。

なにしろ、県の医務課から出向してきたという四十二、三才になる医官は、現地語はチンプンカンプンだから、勢い私が、すべて検診の段どりをすることになってしまった。

検診に使用する一室へ、女を一名



宛呼び出すと、名前を確認の上、体の異常の有無を訊ねてから、枕を置いた上へ、お尻を乗せさせて、パツと仰向けに寝ころがせて、両足を八の字に開かせる。

外観を肉眼で十分検査してから、潤滑剤を塗った器具を素早く挿入して、内部の検診を行なうのだが、恥かしがって股を閉じようとするのを、私は女の足を掴んで、思いきり開かせておいて、覗き込むのだ。



菓子飲物などを出して歓待し、時間稼ぎをやる。その間に、女たちに洗滌をさせるのである。検査の直前に洗滌をするということは、たしかに合格率を高めることになる。

十三才位で母親になるのが普通だという早熟な南方民族のこゝとだから、そうした所で働く女性も若い者が多く、小学校の高学年ぐらいの身体つきの可愛いものもいた。いつ見ても、色といい、形といい、新鮮で崩れていないのが不思議だったが、本人は天真爛漫で、如何にも楽しそうにしていた。

“街の女”の検診

戦局が逼迫し、通過部隊の数も増えるに従って、慰安婦の増員が要求された。

その補給源として“街の女”に目をつけ、現地の警察官に命じて、街の女狩りを実施させた。名目は、性病の予防と、街の風紀の維持ということだったが、その実は、慰安所要員を、その中から選ばうという魂胆だった。

顔を真赤にして、そむけている女。うっすらと涙を浮かべている女。中には、パツチリと丸い目を見ひらいて、うるんだような瞳でうっとりとおらぬ方を眺めている女もいた。

大体、性病の検診といったって、肉眼で見て、子宮頸管や側壁からの排膿がなければ合格ということだから、まあ、殆どの女が合格

となった。この検診の合格票を芸名の木札の下に貼っておかないと、慰安所に詰めている憲兵が、うるさく監視しているから、所謂、商売をやることが出来ない。

不合格者が多いと、早速、休業者が多くて収入に響くので、慰安所の主人（ピー屋のオヤジ）は、私達が検診に赴くと、別室で果物



現地の警官がキャッチしてきた街の天使たちはホスピタルへ連れてきて、有無を言わせず、股を開いて検診するのだが、これは慰安婦と違って抵抗する者もあって凄かった。

「私は病気だから駄目よ、駄目よ」

泣き叫んで、暴れまわり、どうしても検診台に乗らない女の足とり手とりして、仰向けに押さえつけて、バタバタする足を左右に無

理に開かせて見て驚いた。今まで、幾百人の女たちの、その部分を見てきた私も、あっと声をのんで、鼻を摘まんだ。

完全に崩れてしまつて膿の固まりのようなそれは、たまらない異臭を放って、嘔吐を催すばかり。なんという病気なのか、その女の言うように、確かに凄い病気だ。直ちに御退散願つたのは勿論である。

白人の二号をしていたという欧亜混血の美しい女が来た。

検査すると、頸管ばかりか、側壁からも多量の排膿があり、その排膿孔にブージーを突込むと3センチ余りも入る。白人の血が混じっているだけあってピンク色で美しかった。相当重症の子宮頸管淋だが、素晴らしい美貌で肌の色が抜けるように白く、プロポーションも抜群というので、一カ月ばかり洗滌に通わせてから、慰安所へ送ったら、忽ちナンバーワンの売れっ子となった。

十一時頃になると色とりどりの華やかな服装の女たちが十数人、群れをなしてホスピタルの門を潜ってきた。

治療を受けにくる慰安所要員の女たちであったが、私は、その時間を見はからって、病院を訪れ、次第次第に奇麗になってゆく、彼女たちのその部分を、楽しみに覗きに行くのであった。

十八才の時、風呂屋の脱衣場の大鏡を覗いて感激していた私は、今や、直接、肉眼で僅か数センチの近さで、女の開帳を見ることが役目柄、可能だった。

だが、覗き見るだけでは済まないSM的場面が、更に次々と起こってきたのだ。



<告白>

密室での

『一人プレイ』

報告書

むら 村 恭 子
た 田 恭 子
きょう 恭 子

(カット・マエダヒオミ)

編集長さま――

御機嫌如何お過ごしでしょうか。その節はいろいろと御親切なお便りを頂きながら、御無沙汰してしまい、申し訳ございません。

昨年十二月号には、文にもならぬ雑文を、『蜷責めと浣腸の思い出』という立派な文章に書き改めて載せて頂きまして、本当に有難うございました。早速、お礼申し上げますところ、何かと身辺の雑事に追い回されまして御便りも差し上げませず、本当に失礼申し上げました。

それから、塚本鉄三様には、モデルにならないかと、数ならぬ身に、御親切におすすめ

を頂きながら、その御厚意におこたえするところが出来ず大変申し訳なく存じております。

私がもっと若く、そして、もっと見ばえのする身体でございましたら、自分から進んでモデルにお願い出来るのですが、なにしろ四十キロそこそこの痩せた貧弱な身体ですのでも皆さまの前に晒して観賞して頂くような値うちなどございません。

そんなわけで、お返事も差し上げず、大変失礼申し上げてしまいました。何卒、悪しからずお宥し下さいますよう、編集長様からもよろしくお伝え下さいませ。

編集長さま――

去年七月号より、あちらで探し、こちらで求めました奇譚クラブも、今では十二冊にもなりまして、孤閨をかこっております私の心を、いつとなく慰めてくれます。

私自身、SMというものを、それ程、感心した行為とは考えておりませんし、やはりアブノーマルなものだと思っております。でも異常なものだと信じてはおりませんが、それを止めるどころか、浣腸、自縛、蜷責め、と自分で出来る、あらゆるプレイに耽溺しております今日此の頃でございます。

禁断の木の実は、どうして、この様に美味しいものなのでしょう。余り良

くないこととは知りながら、一人暮らしの気やすさ故か、身の害のない程度（自分では悲しくも、そう思っております）に、自虐行為にふけております。

編集長さま――

私は、ここ一週間ほど、仕事から解放されまして、別段これといって、することのないまま、アパートの一室で、いろいろの責めを自分自身の肉体に徹底して試みてみました。

これから書きますのは、そのレポートでございます。奇ク二月号の山口とき子さまの文『とき子の自縛教室』のように、自分にとりたてて責めのアイデアが、あるわけではなく「何だ、こんなことだったら、自分にだって出来る」と一笑にふされてしまわれるかも知れません。

でも、自分の、自分による、自分のためのSMプレイの実践者としての私のタワ言を、編集長さまの暇つぶしに、聞いて頂きたいのです。

勿論、以前の十二月号のように、奇クに載せて下さい――などと、あつかましいことは申しません。記事に使えるようでしたら、使ってください。お気に召さなければ、机の下の屑かごへなりと、丸めてほうり

込んで下さいまして構いません。少しも、恨みになど思いません。

そのかわりと申しましては、大変ぶしつけではございますが、編集長さまのお暇の節、お目通し下さいまして、じきじきに、御批評でも賜われますれば、これに過ぐる幸せはございません。

かしこ

五月六日

神奈川県横浜市港北区××町一二三

〇〇荘アパート内

村田 恭子

奇譚クラブ編集長さま

× × ×

悲しい性^{さが}の女の手記

浣腸のたのしみ

亡き夫が、生前、しばしば申しておりました、いろいろな浣腸器具というものを、未だに入手しておりません私は、昔同様、やはり細いゴム管と漏斗を使用しまして、自らの体内に液体を注ぎ込んでおります。

使用しておりますゴム管は、長さ一メートルぐらい、直径一センチぐらいの細いもので

その先に管の太さに合う漏斗をとりつけております。そうしまして、管の反対側のフチをハサミで、そのカドを丹念にとります。

これは、挿入時、アヌスを傷つけないためと、いくらかでも抵抗を少なくするための、配慮からでございます。これで簡易浣腸器が出来上がったわけです。

昨年暮れ、大家さんがアパート全体を改築してくれまして、各室にトイレとバスを取りつけて下さいました。それは、私みたいな浣腸好きな者にとりましては、それはそれは、大きな楽しみでした。

以前のように、部屋の隅に、大きなビニールを何枚も敷き、その上にタライを置いて、その中で壁一つ、へだてました他人に気を使いながらするプレイに比べまして、少々の家賃の値上げなど、取るに足らないように思えました。

さて、浣腸器の取り付けでございます。

まず、アヌスをマッサージするように、充分に石鹼液を、ぬります。そして、ホースをよりスムーズに挿入させますため、少し水で濡らします。そうしておきまして、ホースをゆっくりと差し込んでゆけば、準備はすべてOKとなったわけです。

次に、立った姿勢で漏斗を目の高さぐらいの位置まであげて、その中に液体を流しこみます。そうすれば、液体は何の抵抗もなく、ゆっくりと下腹に浸透してゆきます。

最初は、石鹼液、食塩水など使いまして、貯溜していますものを、すべて排出してしまいます。

空っぽになりましたところで、何CCぐらい流入できるかを試すわけです。でも、漏斗を使いましたときは、せいぜい、一〇〇〇CCも入れれば限界に達してしまいますが、灯油用のポンプを使いました時は、その倍近く、一八〇〇CCも入れることが出来ました。

その時は、自分のお腹ながら、よくまあこんなに入ったものだ、ヘンに感心してしまいました。そして、さすがに自分で自分の下腹部に異様なばかりの圧迫感を覚えましてものの五分とたちませんうちに、その半量ぐらいいも排泄してしまいました。

この時、もっとも注意しなければなりませんことは、排泄時におきる異音（オナラ）のことなのでございます。水を体内に送り込みます時、どうしても、一緒に入ってしまう空気が、排泄時には、自分でも顔が赤くなるほどの大きな音となって、外部に飛び出してく

るのです。

その音を室外に気づかれない様にするために、私は自分の臀部を、ポリバケツの中に、スッポリと入れてしまいます。もし、それでも音が大きすぎます時は、水道の水を湯舟にザーザー流しまして、その音で、体内から発する異音を消し去っています。

また、お酒による浣腸も、たびたび行なってみました。亡夫にウイスキーを施されました時は、実に苦しかったことを記憶しておりますが、日本酒の場合は、それほどでもございません。

アヌスから頂くお酒も、口から頂く時と同じように、お燗をつけておきますと、身体全体にアルコールがまわりまして、まさしく、『気持良い』という言葉がピッタリと当てはまるほど、頭がフラフラしてきます。

男性の方が酔っぱらった時も、あのような気持になるのでしょうか。心なしか、自分の吐く息までもが、アルコールの臭いが感じられるように思います。

さらに、私の恥かしい性癖は、浣腸だけでは止まらず、アヌスを責める方法を、次々と考え出します。浣腸のすみましたアヌスに、ソーセージを挿入して眠りにつき、翌朝、体

温でホカホカに温まったそれを取り出したりバナナを食べさせてみたりしました。

しかし、バナナの方は殆ど潰れてしまっていて、うまく入りましたのは、ほんのわずかでございました。亡き夫が私の花芯にバナナをむいてくわえさせ、それを自分で食べながら、最後には自分の舌で奉仕までしてくれたなつかしい頃を、ふと思い出しました。でもアヌスの方は、そうはうまくは、ゆきませんでした。

自分のお部屋にバスルームがありますことは、本当にすばらしいことです。どんなに汚してしまっても、水で洗い流せば、それで終わりですものね。

自縛のたのしみ

自分で自分を縛るということは、一見可能に近い様なお話ですが、何回か試みておりますうちには、なんとなくコツというものを心得まして、それ程、難しいものとは思わなくなりました。

私が自分を縛るときに用いますロープは、市販の木綿のもの、物干しに使いますナイロン製のもの、それにデンセンなどによりまし

て廃品となってしまうましたストッキングをロープに編みなおしましたもの、合計この三本でございます。

どれもみな、一長一短ですが、綿ロープとナイロンロープは、縛りやすく、ほどこき難い点が多分にあります。特に綿などは、かたく結んでおきますと、汗などの水分を吸って結び目が、ちっとやそっとでは、解けなくなってしまう場合がございます。

ナイロンロープは、しっかり結んでおきますと、すぐに解けてしましまして興ざめしてしまうことがあります、また、綿とナイロンは、立ったままで自縛しますと、しゃがみ込んだとき、あるいは坐ったときなど、首から股間を通り、背を通って結ぶ中心ともなるべき縄にたるみが生じたりしてしまします。かと申しまして、それを防ごうとしましてしゃがんだまま、あるいは坐ったままの姿勢で、身体を縛りますと、立ちました時、あるいは、からだを反らしたりします時に、がまんしきれないくらいの痛みにおそわれ、とても、快楽に溺れる行為など、している余裕はございません。

その点、ストッキングの廃品利用のロープは、よく締まりますし、ほどこき時も容易には

どける大変、便利なものです。そして、かなりの力で私の裸身を締めつけながら、肌にうまくフィットしまして、ボディの屈伸にも、よく順応してくれます。

私は自分で考案しました、このストッキングロープが大好きでして、自縛のときは、三回に二回ぐらいの割合で、これを使用しております。

縛り方の要領は、二月号に載せられました山口とき子さんの『とき子の自縛教室』の内容と、ほぼ同一のものです。亀甲縛りは、二八頁から二九頁、七図から十図に載っていたのと同じにやります。

ここで難しいのは、結び玉を作る間隔の問題かと思ひます。とにかく、これがうまく出来たら、足首、膝頭を縛りまして、口一杯にパンティなど、下着類をつめ込みまして、その上から日本手ぬぐいで猿ぐつわをします。

最後に、まだ縛られておりません両腕を背にまわし、七図のように作っておいた結び目の間に手首をねじ込めば、不完全ながら、私の自縛方法は完成します。

また、七図のような結び玉を作っておきますときに、丁度、花圖に当たる位置に、大きな玉をこしらえておきますと、一人縛りの楽

しみが一段と増してまいります。

とき子さんは、吊りを自縛の極致と申されておられますが、確かに、難しさとしるはそうかも知れません。だからこそ、一人では難しく、かと云ひまして、誰かに手伝ってもらえば、これはもう、自縛ではなくて、それこそ、本当に被縛になってしまいます。

しかしながら、私は、滑車を利用することによりまして、『自縛逆さ吊り』の可能性が曲がりなりにもあることを発見しました。

あらかじめ、鴨居にとりつけておきました一個の滑車に縄を通しまして、前記の要領で猿ぐつわまでかけた段階で、その縄を自分の足首に結び、自分で反対側の縄をひきあげるのです。しかし、この作業が、これほどの重労働だとは思ひもありませんでした。

たかが四十キロの自分の体重が、これほど重く感じられたことはございません。チェンブロックのようなものがありましたら、こんなことを考えずにすんだのでしょうか、女一人の身で、あのようなものを購入出来るわけがありません。

結局、肩と首とが、どうしても床から離れず、中途ハンパにおわってしまいましたが、それでも、逆さ吊りの感じだけは味わうこと

が出来ました。今後は、あれこれ考えまして自分の納得のゆく逆さ吊りを完成させてみたいと思っています次第です。

責めの小道具について

〔ローソク〕

私をSMの世界に誘ってくれたローソク、私に責めの楽しさを味あわせてくれたローソク。でも、最近は浣腸の魅力にとりつかれてローソクには、月に一回か二回しか、楽しませてもらっていません。

ロー責めで一番困りますのは、蠟涙を繁みにでもたらそうものなら、なかなかカスがとれませんし、それに、何よりもプレイの後片付けが厄介です。畳にローがついてしまったら、それこそ、大がかりな拭き掃除をしなければなりません。でも、やはり、ロー責めの魅力にひかれて、たまには、やります。

あの蠟涙のジーンと、しみるような熱さ、花びらが咲いた瞬間の、あのえも云われない感覚は、何といっても最高ではないでしょうか。SMの極致といってもよいでしょう。

〔洗濯ばさみ〕

四月号で早坂信治さまの『愛妻への特訓プレイ』の中の郁子様のお写真を拝見しまして私も自分の肌を洗濯ばさみでつまんでみました。でも、痛いほうが先で、すぐやめてしまいました。

下腹部や胸部などは、それでもなんとか我慢できましたが、乳首や花園の花びらなどとはとても洗濯ばさみのパネの強さには、辛抱できませんでした。涙が出るほどの痛さに、すぐにやめてしまいました。

早坂様の奥様に対する特訓プレイは凄いと思いました。洗濯ばさみだけでも痛いのに、まして、コケシ人形を吊り下げるなんて、考えてみただけでゾッとしました。

六一頁には両方の乳首に一つずつ、それにお臍のまわりに六つもの洗濯ばさみが挟んでいますもの、きっと郁子さまは痛かったことでしょう。五九頁には乳首からコーラの瓶をぶら下げられているのも凄いですし、また五五頁では、大きなコケシを二つも、右と左の乳首から吊り下げています。

やはり、愛する御主人さまからの責めだから我慢が出来るのでしょうか。私は見ていて

思わず身体中が、かっかとしてしまい、胸を両手で、つかんでしまいました。

〔水道〕

浣腸のところでの補足になります。水道による浣腸も、水流の強弱を自由に加減できる点で刺戟があって面白いものです。

水圧によって、いくらでも流入できますが何CC入ったものやら不安です。また、その危険性についてもわかりません。おまけに、身体が冷えることも考えまして、寒い間は、あんまり、しないことにしています。暑くなれば、また、したくなるかもしれません。

〔剃毛〕

以前に、主人から罰として剃毛されたことがあります。でも、一人暮らしの今は、自分で剃ってみました。

忘れもしません、三月十二日の夜のことでした。(忘れない筈です。手帳の曆に赤エンピツで丸をしているのですもの)

軽便カミソリを使ったのですが、くすぐったいのと、危いのとで、かなり時間がかかりました。剃り終わりました、すべすべした白い肌を、なでてみたり、さすってみたり、あ

げくは、鏡を前にしまして、花びらを指でつまんで「赤ちゃんになったのね」などと、鏡にうつった自分に言い聞かせたりしました。

あれから二カ月半。なんとか、もとの繁みに戻りつつありますが、完全に復元するにはもう一、二カ月ぐらいは、かかりそうです。

伸びかけてきました頃の刺戟で、当初はプレイの回数が割合、増えたほです。

「あきビン等」

これはバイブレーターと共に、一人暮らしの私を慰めてくれますプレイの小道具です。

一人プレイには欠かすことの出来ないものですし、私の生活のなかで、最もいやらしい面の告白になってしまいますのでスゴク恥かしいのですが、次の機会には、ゆっくりと書いてみたいと思っております。

もし、誌上にお載せにならないで、編集長さま、お一人がお読みになられるのでしたら恭子は、ありのまま、自分一人の夜の生活を書きつづりたいと思います。

こんなことを考え、それをペンにしますだけで、私は興奮してしまっております。

去年の夏から約一年近く、私は自分のマゾ性が急上昇してゆくのを、はつきりと見定め

ながら、それをやめようと思うどころか、ますます、それに溺れてしまっています。

アパートでの一人暮らしの生活をよいことにして、以前、亡き夫と楽しんだ二人だけの秘密の行為を頭に描きながら、今は自分一人でそれを行なっているのです。

夫が私の身体に残してくれましたSMの世界の楽しさと、奇譚クラブという本によりまして、夜な夜な異常とも思える行為に耽る私を、もし他の人が見ましたら「何という変態女だ」と思うことでしょう。

私のこんな性癖は、単にマゾ的なものみに止まっております。自分の裸身を、自分の花園を、自分のアヌスを、機会があれば、人々の前に開帳したいなどと、恥知らずなことを考えたりしているのです。

何気なしに、手持ち無沙汰でぼんやりしている時など、また快楽のひとつきが過ぎ去って虚脱状態になっている時など、そんなアブノーマルな自分の性癖に、つくづくアイソがつきてしまいます。

それでいて、夜になってまいりますと、私の心の奥底にひそむSMの虫が、むくむくと頭をもち上げてきて、昼間とは打って変わった別の女になってくるのです。女のハイドに

なっているのです。頭の中は、すべてアブノーマルな虫に支配されてしまい、身体はただそのロボットにすぎなくなるのです。

もし、こんなハイド氏に交身した時の私に「モデルになりなさい」と一言いわれたら、即座に納得して裸になっているでしょう。

これが、村田恭子の、いつわりのない生活なのです。

「食塩水やお酒のかわりに、一体、なにを流腸しましょうか」

「お酔なんか、どうかしら？」

一人暮らしの私は、いつとはなしに、そんな独り言を言う習慣が、ついてしまいました。「さあ、下着を脱ぐんだよ」

私は、自分と自分の手でパンティをとってゆきます。冷々とした外気が、お尻に触れますと、私の心は、いやが上にも昂ぶります。「流腸をするのだわ」と、そう思っただけできつと、私の目の色も変わっていることでしょう。注入しては排泄し、排泄しては、また注入する……。

そんなことを繰り返しながら、いつしか私は、お風呂でアクメに達しているのです。

——(おわり)——



刺環しかんといえ、刺青いれずみとともに、人間の装飾本能を満たすため、原始時代から広く行なわれてきた風習です。

耳や鼻に孔をあけ、環状の飾りを固定する

△ S M 落書帳 ▽

エロチカ・グロテスク

刺環の魅力

長谷田亀治

——未開土人の間では、今でも盛んに行なわれていることは、ご存知のとおりです。

文明社会では、さまざまな装身具の発達によって、いつの間にか、この風習も、すたれ忘れ去られていました。

ところが最近、刺環の持つ新しい魅力が発見され、かなりの人たちの間に、深く、静かに浸透し始めました。とくにヨーロッパでは一種のブームすら、呼んでいるといえますから、マニアにとっては、うれしい傾向といえるでしょう。

それでは新しく発見された刺環の魅力とは

——いったい、为什么呢？ それはなんと性器への刺環によって得られる妖しいSMの世界のことなのです。

人間の身体の中、刺環が可能などころといえ、耳、鼻、乳頭、それに性器の一部くらいなものです。このうち、ブームを呼んでいるのは、女性の乳頭と、男女両性の性器の一部分、とくに後者に行なわれるものであることは、いうまでもありません。

この特殊な刺環が性感の強い部分を、なおいっそう刺激して、今まで知ることのできなかった甘美なエクスタシーをもたらすばかり

ではなく、強烈きわまるSMの世界まで、のぞかせてくれるという、まことに神秘的な魔力を持っていることが発見されたからなのです。

ただ単に人間の裝飾本能を満足させるだけのものなら、こうまでブームを呼ぶことはなかったにちがいありません。

ところで、この性器に対する刺環ブームに火を付けたのは、コールガールをめぐるセックス・スキャンダルで英内閣を大きくゆさぶったロンドンの観樂街ソーホーや、飾り窓で有名なハンブルグのレーパーパンの売春業者だといえます。

彼等は「商品」の価値を高め、性の効率を倍増させる手段としてこれに目をつけ、強制的に娼婦たちに、どんどん実施していったのです。こうしておけば容易に客をSMプレーを中心としたアブノーマルなセックスに誘い込むことができ、法外な割増し料金をガッポリ取ることができます。

セックス産業のチャンピオンとして、世界に、その名をとどろか

している彼等だけに、すばらしいアイデアといわねばなりません。

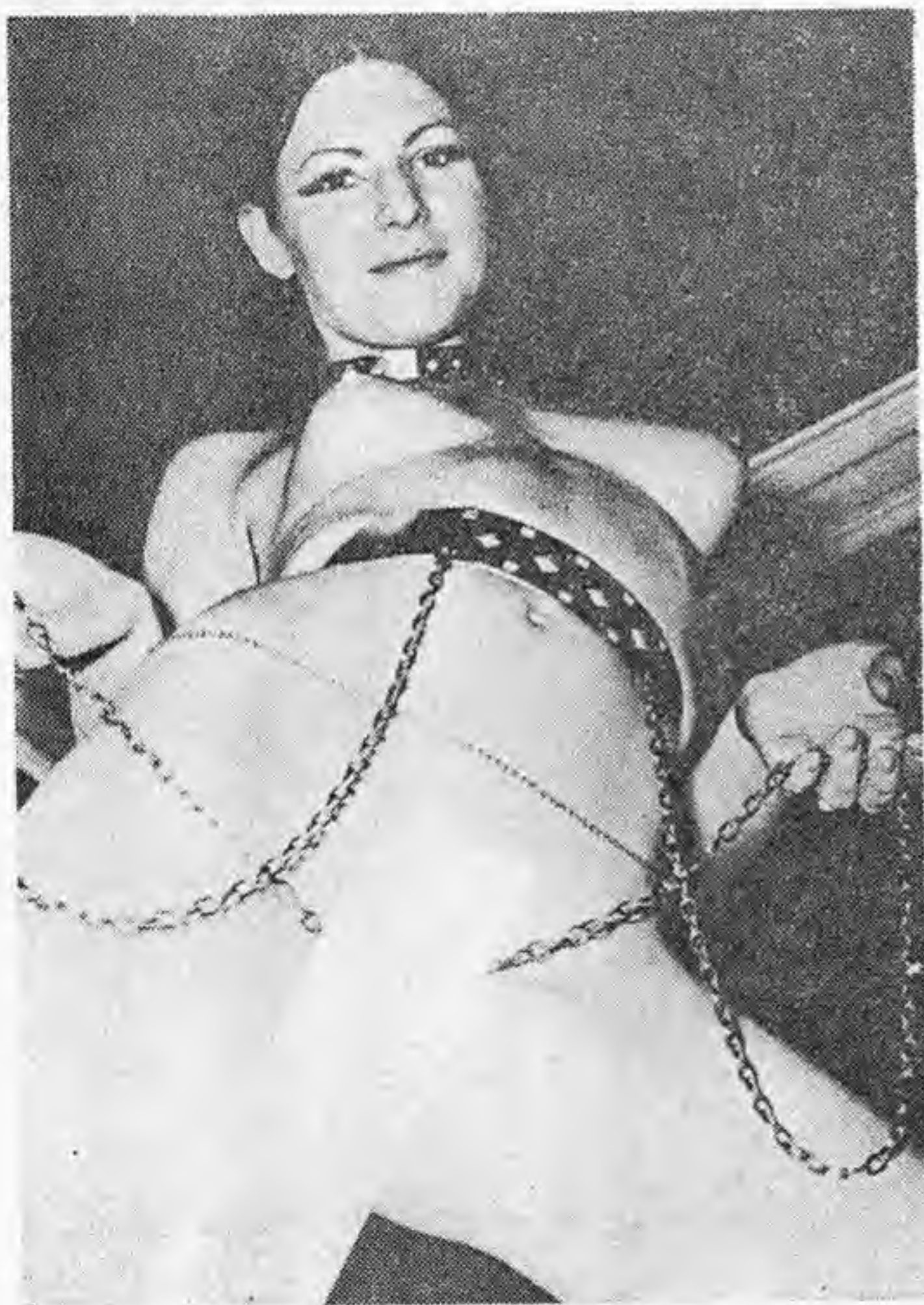
果たして彼女たちと交渉を持った客たちはたちまち刺環の持つ妖しい魅力のトリコとなり『妻や恋人にも……』という思いに駆られたのも、これまた当然のなりゆきでしょう。

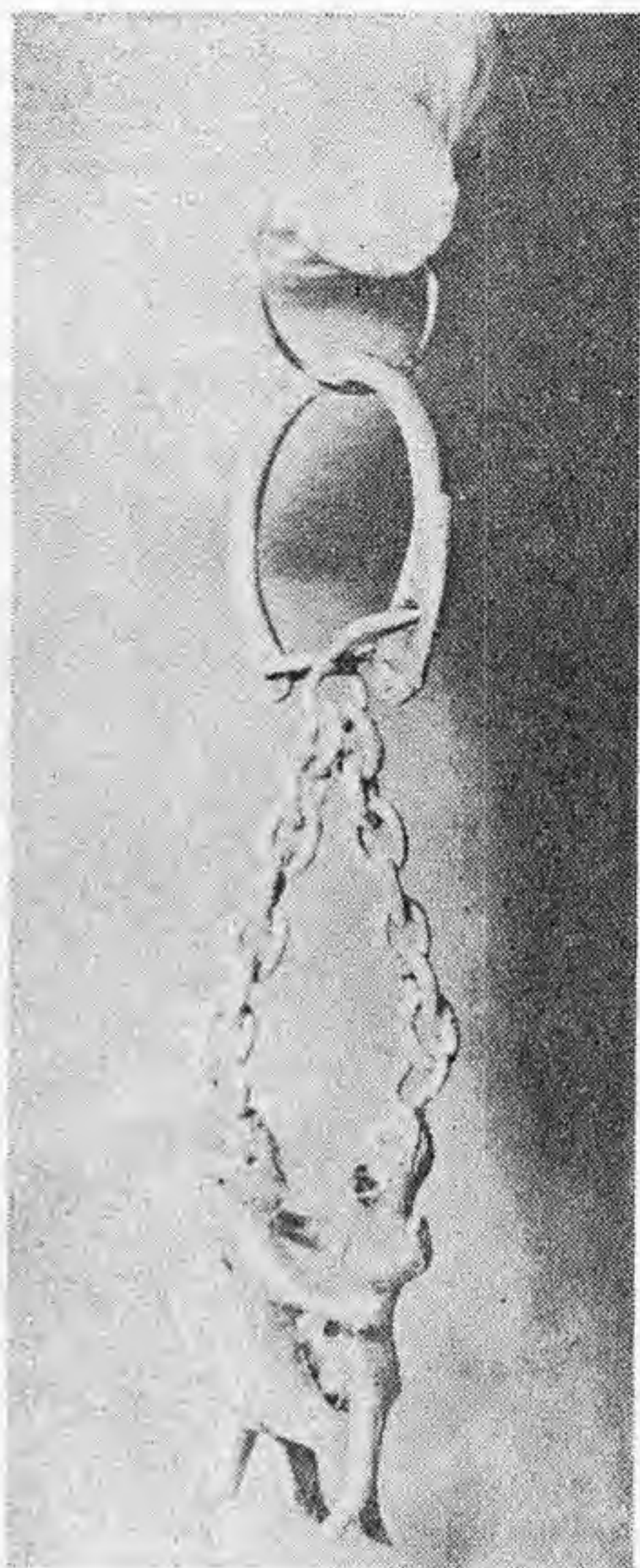
このような経過をたどって刺環は一般家庭から上流家庭まで、まるで遼原の火のように広がっていきました。性モラルの頹廃ぶりは

日本の比ではないヨーロッパのことです。コペンハーゲンや、ストックホルムのセックス・ショーに出演するモデルのなかにも、この刺環を行なっているものが、めっきり増え、これを利用した強烈なSMショーの人気は大変なものだということです。

なにしろ最近のヨーロッパはノーマルなポルノグラフィイを探すのに骨が折れるというくらいですから、刺環はそうしたアンユーズルな現代の風潮にぴったリマッチしたわけです。

したがってこの特殊な刺環についての研究も進み、女性の性器に、はめ込まれるリングも驚く程豊富に出回っています。ステンレス製の普及品？からプラチナや金を使った優美な高級品。その構造もバネ式になっていていったん、はめ込むとヤスリで切断しないと取りはずせない精巧なもの。あるいは自由に取りはずせるもの等々……。





むろんサイズもお好み次第です。穿孔についても専門医をわずらわさなくても、刺青師や観楽街の美容院などで簡単にやってくれるといえますから、まったくうらやましい話です。残念ながら日本では、まだまだ暗中模索の状態ではないでしょうか。

女性性器に対する刺環は左右の小陰唇に行なわれるのが普通です。この部分は皮膚というより、むしろ粘膜に近く、耳朶や鼻朶にくらべると、はるかに簡単に穿孔することができます。うがたれた左右の孔にはリングが貫通し、固定されますが、あまり大きなものは邪魔になりますから直径1センチ前後のものが好まれるようです。

そして、このリングに鎖を連結すれば、たちまち、さまざまなSMプレーが楽しめるという趣向なのです。ちょっと考えただけで次から次へと斬新で、強烈な責めのアイデアが浮かんできます。

そのまま、柱などにつないだり、犬の散歩のように引き回す単純なもの。胴鎖のように後ろに回し、ぐっと引きしぼる、ワイド・オープン。錘りを、ぶら下げる引き伸ばし。左右の足首につないでの、よちよち歩き。あるいは乳頭、鼻朶のリングと連結しての屈曲責め——ETC……

その上、鎖の長さを調節することによって女性に与える苦痛と、悦楽を思いのままに変

えることができます。それに、なんといっても性器と直結しているだけに、男性の加虐感女性の被虐感は強烈そのものといってもよいでしょう。SMの醍醐味をきわめたような気分になるのではないのでしょうか？

男性に対する刺環は龟头裏側の反転した包皮に行なわれます。この孔に両端にネジがきつてある直径2ミリ、長さ1・5センチ程度の軽金属のパイプを通し、パイプのネジが入るようボーリングされた二つの小さな金属球を、それぞれ取り付けます。

この金属球も大小さまざま、ミリ単位でそろっていますし、材質も女性用のリング同様きわめて豊富です。これが女性に対して異物の挿入による独得の刺戟を深く、広い範囲に与えることになります。

強烈なSMプレーによってすでに被虐の喜びに浸りきっている女性にとって、追い打ちのかたちで加えられる、この刺戟は、まさに止どめを刺すに等しいものがあるに、ちがいません。

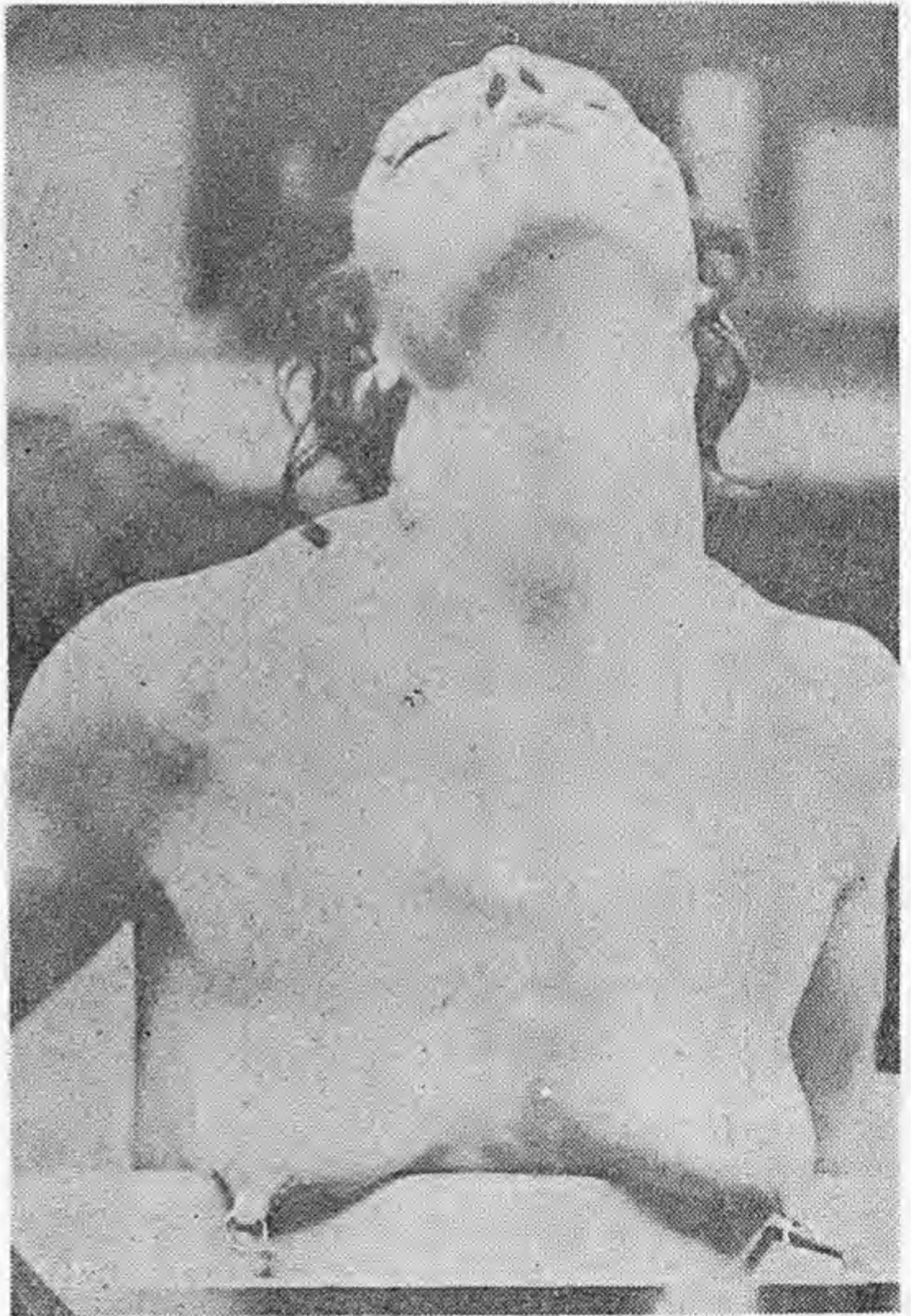
『入れて行なえば、常に十倍の喜悦を覚ゆ』（春情ふじの雪）といわれ、昔から好事家の間で珍重された日本の性具「りん玉」もこれと同じ原理です。女性への刺環が隷属、あ

るいはMの象徴として行なわれるのにくらべ、男性への刺環は、一部のM男性を除き、女性に性の深淵の喜びを知らせるためのものといえるのではないだろうか。

残念なことに日本ではこの種の性具は市販されていませんから、貴金属の加工業者に別注するか、あるいは輪ゴム、オペロンの糸などを通して代用するより手はありません。

私もかつて、刺環を行なったことがあります。うがたれた孔が小さかったためすぐ癒着して失敗しましたが、今度は夫婦そろって行なおうと、妻を説得しているところです。友人である泌尿器科のドクターが『いつでもOKだよ』と引き受けてくれているだけに心強いのですが、妻が『そればかりは許してください』と容易に承知しないので弱っています。

もっとも妻が拒み続けているのも理由あっ



てのことなのです。妻は独身のころイヤリングをつけるため穿孔していました。結婚後はその必要もないまま、放置していたところ、いつの間にか跡かたもなくなってしまったのです。そこへ私の失敗例です。

この二つの例を持ち出して、日時がたつにつれて孔が小さくなり、リングがはずせなくなるのを心配しているわけです。

私にとっては、それこそ望むところですが、もし手術の必要な病気にでもなった場合、抜毛されているうえ、リングまではめられているのですから『恥かしくって入院もできない』という妻の気持ちもわかるのです。

Aの拡張に始まって花電車の特訓など、相等なMに飼育してきたつもりでしたが、残念ながら、まだまだ前途は遼遠のようです。

ところで私が妻に刺環を強要するのは女性の性器に対して奇妙な好みがあるからです。

体毛の薄いこと、花卉の大きいこと。この二つが満たされれば容貌には、余りこだわりません。したがって剃毛や抜毛は性器を、より大きくみせますから、私には一石二鳥の効果を与えてくれます。

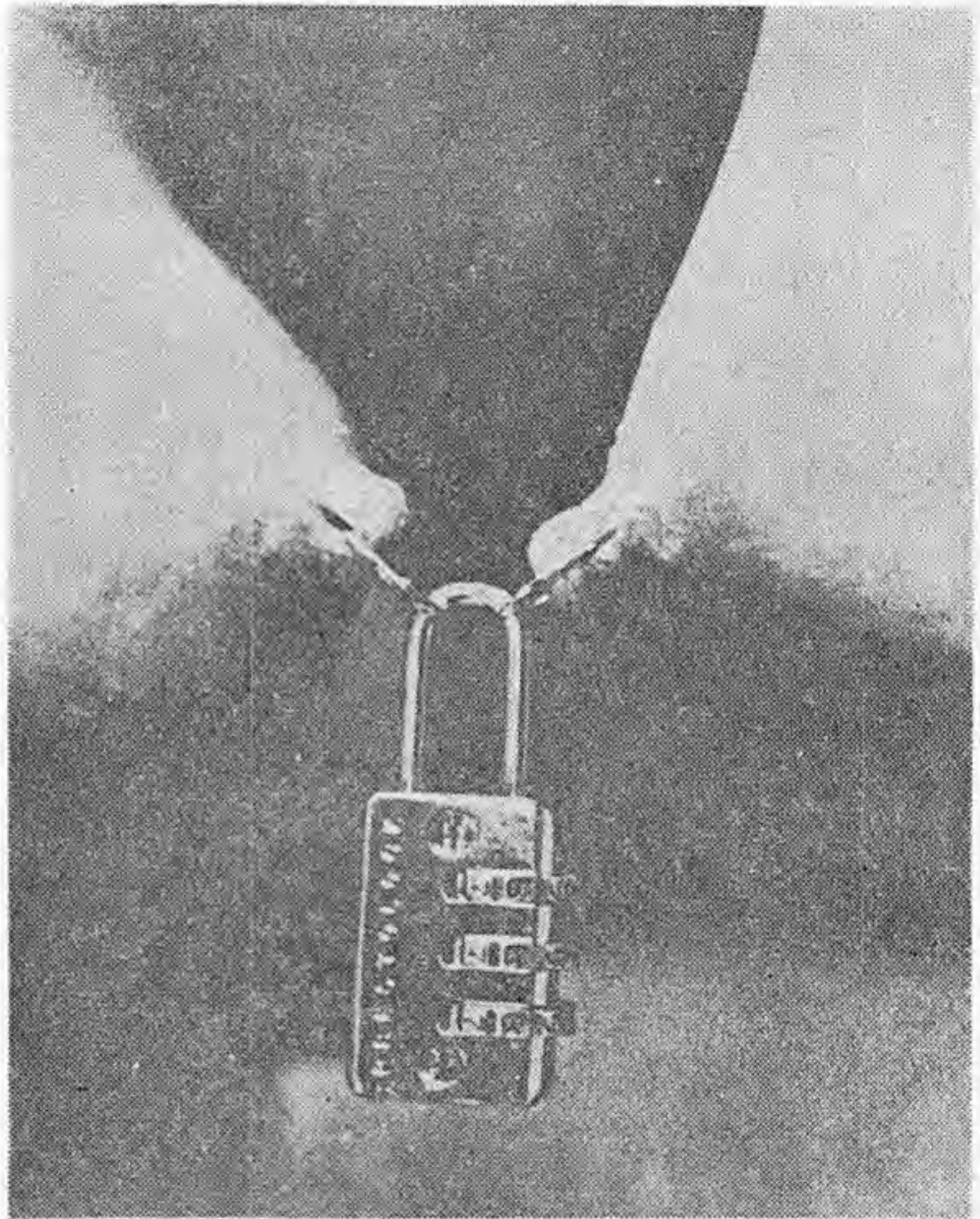
妻はすでに抜毛していますが、私にしてみればリングを利用した特訓で、花卉に刺戟を

加え、大きく肥大させて理想に近づけたい——という欲望を抑えることができないのです。

それにつけても7月号『奇クサロン』でお呼びかけをいただいた伊勢氏ご夫妻の夫唱婦随ぶりはおみごとというよりほかはありません。

大きく穿孔すれば孔のふさがる心配はないと思うのですが、皆様のなかで妻の不安と、心配を解消する、なにかよい刺環の方法を、ご存知の方がいらっしやいましたら、ご教示いただきたいものです。

添付しましたフォト①—⑤は性器に対する刺環です。①は鎖を左右へ引っ張って、大きくオープンしたところ。②は足元まで垂れ下がった鎖が鍾りの役目をして花卉は信じられないほど伸びきっています。③はそれを真下から仰角撮影したもの。④はアクセサリーと



して小さな鈴を1箇ずつ、つけて乳頭にもリングが、はまっています。これらの女性のリングは直径1センチ前後の小さなものが使われていますが⑤はなんと直径3センチにも達する大きなリングが貫通し、プレーの影響で、いちじるしく肥大しています。

⑥—⑧は乳頭に対する刺環です。⑥は左右のリングを中央に引きしぼり、施錠したもの。⑦はどっしりと重量感のある金属製の奇怪なアクセサリーが、ぶら下がっています。⑧は横木に打ち込まれた釘にリングを固定され、責めを待っているポーズです。

いずれもデンマークのポルノグラフィイから比較的、おとなしいものばかりを選びました。強烈なものはいくさんありますが少々修正しても公開をはばかられるのが残念です。公序良俗にしたがう——ということ、この程度のもので、ご辛抱を願いたいと思います。

——(おわり)——

編集部註。本稿の筆者「長谷田亀治」氏から、添付用にと貴重なフォト八点のご送付をいただいておりますが、氏の云われる通り「比較的、おとなしいもの」にもかかわらず、修正すれば肝心の刺環をも隠さざるを得なくなる関係上、折角の資料ながら割愛させて頂きました。



＜手記＞

僕はマゾヒストだろうか

麻 曾 比 須 人

僕は両手をうしろで縛られると、凄く興奮した。時には、手を括きぎられていと思うただけでも興奮した。

僕はマゾヒストだろうか。

平凡な結婚をし、一児の父親として平穩に暮している僕に、今まで、そんな兆きざしは、いささかもなかった。片鱗はしさえもなかったといつてよい。いや、むしろ、家庭では、暴君とまではいなくても、亭主関白に近かったし会社においても、新進の係長として部下にもきびしかったし、女性に対して、やに下がるというようなことは絶対になかった。

それが、ある一女性を知ったことから、僕の生活のリズムが、がらりと変わった。

それは会社の帰りのことだった。同僚と飲んだあと、誘われて近くのホテルへ入って、

女のマッサージを呼んだ。

こんなことは、僕にとっては、始めてのことだったが、その悪友が、すべてを心得て、手配りをしてしてくれたので、僕は部屋で風呂へ入って、ただ待っていればよかった。

僕の身体を、もむためにやってきた女は、ヒナ子と自分で言っていたが、どんな字を書くのか、僕は知らない。

三十年輩の、上品で落着いた物腰の女だった。彼女は、もう数年も、こうした商売をしていたとかで、揉むのが非常にうまかった。

僕が、腰とか足がこるというと、腰のつけ根の背骨の両側、お尻の両側、胫、足の裏と急所のツボを巧みに指圧した。

大して力を入れていそうにもないのに、ジーンと痺れるような痛さがあつて、それがまた、たまらない快感になった。

下着をつけていなかったのも、浴衣の前を押しひろげて、興奮していることが、その女に知れはしないかと僕は気にした。

その日の、あの疼くような指圧の快感が忘れられず、僕は数日して、会社の帰りに、そのホテルに寄ってヒナ子を呼んだ。

落着いた物腰と、上品な言葉づかいが僕の

気にいった。

例によって、首筋から肩、そして、だんだんと下がって、胃の裏から、腰、尻、太股、胫から足の裏へと、ヒナ子のしなやかな指が這いまわると、僕は、うずくような痛さが、そのまま、たまらない快感となった。

「まあ、お元気なこと」

浴衣の前がはだけて、興奮のしるしをヒナ子に見つけられたときは、僕は真実、恥かしくて、顔が赤くなった。

恥かしさに耐えきれないでいる僕を見るとその女は、大胆に浴衣をめくって白い指を僕の内股に這わせてきた。

指の動きは、まことに巧みだった。

内股の柔らかい肉を、つまむように刺戟して、僕の感覚を最高に高めた。

擦ったさプラス痛さ——、それが、たまらない快感となって、僕は最高に興奮した。

女に、見られているということが、また、それが、僕の興奮を倍加させた。

ヒナ子は、大きくて立派だと言った。それに格好がスゴク良いと、ほめた。

その日も、最高に快感を味わって帰った。一週間もしないうち、僕は再びヒナ子を指

名した。彼女は休みとかで、他の女が来たが味も素気もない揉み方だったので、時間も延長せず、一時間で帰った。

その次、ヒナ子と呼んだときは、上半身はこっていないから、と言って、下半身だけ頼んだ。

彼女は僕の浴衣の前をめくるなり、やにわに、内股のツケ根を掴んだ。

擦ったさと痛さのミックスした奇妙な感覚に、僕は忽ち最高に興奮した。

「こないだいい格好の、見たことないわ」

ヒナ子は、そう言いながら、僕の内股のやわらかい筋肉を、ところ嫌わず、つまみまわった。しなやかな指先に、どうして、こんな強い力があるのだろうか。

僕は、口から、たえず呻き声を洩らしながら、足をピンピンはねて悶えた。

下半身でも、腰、尻、胫、足の裏、拇指のツケ根、なんかに、彼女が軽く圧さえると、飛び上がるほど痛い個所があった。

その痛さは、決して不愉快な痛さではなかった。なにか、ジーンと痺れるような快感が身体の内底から湧いてきて、僕は、そのどこを指圧されても、すぐに興奮した。

「ツボだから痛いよ」

彼女はそう言って、僕が凄く興奮するのを眺め、僕が呻き声を洩らすと、自分もまたハアハアと荒い息を立てた。

僕が出張で、二十日ばかり来れなかった。帰社すると、その翌日、ヒナ子と呼んだ。

「もう、来ないのかと思ったわ」

ヒナ子は、そう言って、ほほえんでから、自分の身の上話を、しだした。

結婚して女の子が一人あると言った。

「主人は結婚して三年目になくなったの」

ヒナ子は、そう言って淋しそうに、顔を伏せてから、子供は田舎の母に預けて、一人で働きに出てきているのだと喋った。

時々、田舎へ帰って子供の顔を見るのが楽しみだというヒナ子は、地味な服装をしているので、ふけて見えたが、見た目よりは、二つ三つ、若いのかも知れない。

うつ伏せになっている僕の背中にまたがって、僕のお尻を押しているとき、僕はチラッと、彼女の白い素足を見た。

きれいに爪が切りそろえてあって、ふっくらと、肉づきのよい指や踵、それに甲なんかは、やはり二十代の女のもののようだ。

今日で、ヒナ子と逢うのは六回目である。

「こんなもの、邪魔になるから」

ヒナ子は僕の浴衣をはぎとってしまった。

「お手々も、こうしておきましようね」

僕の手を浴衣の紐で縛ってしまった。

それは、極く軽く、腰のあたりにまわした僕の手首を括ったのだったが、もう、それだけで、僕は忽ちに興奮した。

ヒナ子は、なにか、僕の興奮するツボを、心憎いまでに知っているような風だった。

両手が使えない——と、いうことだけで、

僕は精神的にスゴク興奮していた。

「今日は、少し荒療治をしてあげるわ」

布団の上に、あお向けにされただけで、僕は最高に、いきりたっていた。

彼女の指が、僕の内股にぐっと喰い込んで強い力で搦んだ。肉をえぐり取るような、凄惨な衝撃であった。

「あっ、ううう、うーむ」

僕は、その痛さに、思わず呻いた。

ヒナ子の目が輝いて、じっと僕を見つめている。頬がピンク色に染まって、口からは、ハアハアと荒い息が洩れている。

彼女の指は、内股の柔らかいところばかり

を狙って、攻撃をしかけてくる。

僕は両手が使えないので、全裸の体をさらしたまま、呻きに呻いて悶えた。

そんな姿をヒナ子に眺められているということだけでも、僕は最高の悦楽を味わった。

内股の痛さは、不思議と少しも感じなくなっただけか、それが、また、凄惨な快感と交わっていったのである。

ヒナ子は、刺戟する場所を巧みに変えていった。決して、一カ所ばかりを連続で攻撃するということはなかった。

それ故、僕は、いつも、新鮮な刺戟を味わって、喘いでいた。

両手が使えないということが、これほどまでに僕の官能を昂ぶらせることになるのか。

彼女の強靱な指先が、僕の会陰部をわしづかみにしたとき、僕は思わず叫声を挙げて失神しそうになった。

だが、その日の荒療治は、それだけでは終わらなかった。僕の男性の文字通り急所を、彼女の指が驚づかみにしていた。

「あ、うう、うう——」

僕は脳天を貫くような痛さに呻いて、両足を伸ばして、ブルブルと痙攣させた。

このまま、もう死んでしまうのかとさえ思った。なにしろ、両手を縛られているので、どうにもならなかった。

それでも、あとから考えてみると、今までにない異常なまでのショックであった。

僕の日常生活には何ら変化はなかった。

家庭でも、また会社においても。

僕は、一週間か十日に一回の割りでヒナ子に逢うのが楽しみだった。

僕が彼女に好感が持てたのは、服装も清潔で上品な物腰、それに、言葉づかいも丁寧なことだった。

それに、あのフィンガー・テクニクの素晴らしさ。エッチなことは、いささかも口には出さないのに、男心をぐっと掴む、あのテクニクだけは、最高に素晴しかった。

時たま、彼女を呼んでも、仕事に出ていないときがあった。そんなとき、僕は、今まで感じたことのない嫉妬の念に燃えた。

「ヒナ子さんはサービスがよいから、指名のお客さんが多くて忙しいでしょう」

それとなく聞くと、彼女は、あれっという風に、おどろいて見せ、

「そんなことないわ。私なんか。いつも指名

イメージギャラリー

『奉仕のごほうび』

岡 たかし



して下さるのは貴男ぐらいのもんよ。お店には、若くてきれいな人が沢山いるもの、私なんか、駄目ですわ」

「そんなことあるもんか。僕はキミが一番素晴らしいと思っているよ。いつも、僕をあんな

に満足させてくれるんだもの」

「それは、貴男のモノが、ご立派だからよ。あんな大きくて格好のよいの、私、見たことないわ。それに、持続性があって、凄くかたいんだもの、誰だって、参ってしまうわ」

「それもみんな、キミの腕のおかげだよ。キミにマッサージしてもらうと、他の人に揉んでもらう気がしないね」

「あら、そんなに言ったら、私、うれしいわ。ほんとうのところ、私も、見ていて興奮しているのよ。だから、好きな人には、つい、あんなことしてしまうの。でも、あんなの、貴男にだけなんよ。私って、嫌いな人には口もきかないわ。だから、馴染みのお客さんで、そんなにないのよ」

「本当かな、そんなには見えないけど」

「本当よ。貴男だけは別。あんな立派なの、私、今までに見たことがなかったから、参ってしまったのね。そりゃ大きいのだったら、いくらもあるわ。でも、形とか色とかが駄目なのね。私、貴男のに惚々しちゃったのよ。それに、感度も抜群にいいわ」

もう、その頃になると、彼女は部屋に入ってくるなり、僕を素裸にして浴衣の紐で後手に括った。

それだけで僕は忽ち興奮の極に達した。僕のそんな風を見ると、ヒナ子の息も荒くなって、僕の耳にも、はっきりとわかる。彼女の指圧のツボは次第にきわどくなって

きて、アヌスの周囲や会陰部にも及んできたが、決して一個所を執拗に責めるということはなく、足の裏の土ふまずのところや、拇指の根元に、飛び上がるほどの痛点があるのを僕は彼女によって始めて知らされた。

痛さが、次第に快感に変わってゆく過程で僕は幾度となく呻き、足を痙攣させ、全身を海老のように曲げた。

見られているということと、後手が括られているということが、不思議な相乗効果を發揮して、僕は最高の悦楽を味わった。

「ああ、アレツ、アレツ」

ハアハアと荒い息をしていたヒナ子が、時折、感にたえかねたような奇声を発したが、それは、僕が、もうこれ以上の愉悅はないという場面に到達したときであった。

僕のそんな場面は、幾度となく訪れた。そして、回を重ねる毎に、その狂乱の程度が激しくなっていた。

彼女が僕を後手に括るのは、自分を自由にすることを防ぐためなのか知らないが、自分では一回も洋服を脱いだことはなかった。

白い上っぱりとストッキングを脱いで、たんで部屋の隅に置くだけで、いつも洋服は

着けたままだった。

僕の方は全裸にされていたが、彼女は手と足を出しているだけである。下半身もズボンをはいているので、外に出ているのは、僅かに足首だけだった。

十数回も呼んだ頃だろうか。ヒナ子が頬を染めながら言った。

「あの、お願いがあるんだけど……」

「ええッ、なんのこと？」

「なめさせて頂けないかしら」

「なんだ、それだったら、僕の方から、頼みたいくらいだよ」

「まあ、うれしい。貴男に、こんなこと頼んだら、怒られるかと思ってたの」

彼女の唇が、口が迫ってきた。

ヒナ子のオーラル・テクニクは、彼女のフィンガー・テクニク以上に素晴しくも巧妙だった。

幾度となく、絶頂にまで追い上げながら、決して果てさせるようなことはしなかったばかりか、彼女独特のテクニクで、僕の全身をしびれさせた。

彼女の舌先の動きは絶妙だった。僕は生れて始めて、尿道の感覚というものを知った。

それは、両足が激しく痙攣して、宙に浮きながら止まらない程、凄いものであった。

あとで、彼女は疲労回復のために、全身の指圧を施してくれた。

僕は、そんな物凄い快感を、幾度となく、連続的に味わいながら、少しも疲れを感じることなく、気分は爽快であった。

僕は相変わらず彼女にだけは、縛られている。こんな僕は、果たしてマゾヒストなのだろうか。僕の日常性には、いささかも、そんなところがないのに、ヒナ子の前でだけは、僕は完全にマゾヒストなのだ。

僕はヒナ子の肉体に手を触れたこともないばかりか、キッスをしたこともない。彼女の口とキッスをするのは、いつも僕の俤の方であって、僕は手を握ったこともない。

僕は、むしろ、彼女に逢いたくなくなるときがある。この頃になって、やっと彼女は、僕に自分のアパートの電話番号を知らせてくれた。僕は彼女の声が聞きたくて、衝動が起きると、電話を掛けた。

受話器を通して、彼女の声が耳に入ってくると、それだけで僕は興奮した。

こんな僕はマゾヒストなのだろうか。

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

カット・マエダヒオミ



お 鈴 口

右足首にからみつく荒縄のおぞましい感触

ていた荒縄は、雅子の右足を、畳から一尺く

手元の荒縄をグイッと引く。
「アッ、アレッ！」

すでに、華奢な足首にがっちり巻きつい

ていた。

しまい、上体は左方へ大きく傾くに、きまっ

(25)

女のサガが強者に惹かれるように
男の精神には征伏意欲が潜在する
双方の希求が火花の如く飛び交い
男と女の真実の物語がはじまる

風 流 極 道 軒

に、雅子は、おもわず
「お、おやめ下さいま
せ！」

と叫び、右膝で種彦
のあごを押しつけよう
とした。

が「おっとっと……
危ねえ、危ねえ」

——蹴上げられるのを
予想していた種彦は、
とっさに身をかわずと

らいも宙にうかせ、バランスを失った女体を
ぐらつかせた。
「フッフッフ、姫、残念でした。少し遅かっ
たようですね」

得意気にいった種彦は、縄の一端を雅子の
右頭上の牢格子に懸けて、
「これをひっぱると、どうなりますかな。さ
ぞかしみものでしょうて」

牢格子を背にして立ち縛りにされている雅
子にしてみれば、その右足首を吊りあげられ
たら——右脚が太腿のつけねから上へと、の
びて、左脚の上に右脚がつぎたされたならば
横「下」の字——つまり「十」の字になって
しまい、上体は左方へ大きく傾くに、きまっ
ていた。

上体が傾くのは、別に気にするほどのことではなかったが、両脚が一本の棒のようになるといふことは、女の身として耐えられないことであつた。

「お、お許し下さいまし！ 種彦先生、佐渡さま！ 許して下さいまし！」

崩れた深川鬚の乱れ毛の一房が、頬で揺れるのにまかせながら雅子は、必死で訴えるのであつた。

いくら罵られることを覚悟しているとはいへ、予期されるその姿態は、あまりにも惨めなものではないか！

不安と羞恥に、長い睫毛をふるわせて哀願する雅子の耳に、佐渡の冷たい言葉が吐きかけられた。

「雅子姫。ひとつ、お訊ねしたいのじゃが、江戸にお下りになつてから何人の男に、お抱かれになつたかの。五人か十人か、それを、ひとつ教えてもらいたいのじゃ」

サアーツと雅子の顔が蒼ざめたが、それを意にも介しないように、

「それに、もうひとつ。いつ、どこで、どんな瞬間に、いちばん強く羞恥を感じたか、それも、あわせて答えてもらいたいのじゃ。その答次第では、片脚吊りの責めを許してやっ

てもよいのじゃが……」

狐のように細い目が掛燭の光をうけて不気味にひかつたが、それは、どんなに些細なものであつても、自分の利益・快楽になるものなら、ぜったいに見逃がさないという狡猾さにみちていた。

「ぞ、ぞんじませぬ、そ、そのような事！」

乳房の上下を厳しく縛りあげられている裸身をふるわせて、雅子は叫んだ。女心を無視した何という残酷な問いであろう。

が、しかし、あからさまに問われて思い返してみると、ほぞを噛むような屈辱の日々がつづいていたことは否みようがないのだ。捕われの暮しを送っている日本橋の元禄屋の本宅で、またここ小梅の別邸で、老中領田下野や羅卒の鞭兵衛たちに、どんなに、もてあそばれてきたことか。

大蔵大輔柳原宗忠の妻であつたころを思い出せば、まさしく悪夢のような日々の連続であつた。

さりとて、いま、佐渡の問うままに、一切合財を口にするには、女の身として、とうていできないこと。

頬で揺れている黒髪の一房をグイッと紅唇にくわえて、長身の佐渡を見上げる雅子の大

前号まで——小紫のお景を救出すべく麻布の別邸を襲撃した徳夜叉は鉄砲傷をうけて丹沢山塊の隠れ家におちのびた。一方、小梅の寮では、戯作家・為永種彦と勘定吟味役・佐渡刑部が、元禄屋から借り上げた久我雅子を責め罵り、その姿を浮世絵師・鳥尾芳年が「女責め・二十八佳撰」として写し描くべく、絵筆を走らせている。

きな瞳には、ありありと憎しみのかげがもえていた。

「フッフッフ、白状せぬという目の色じゃのう。ならば、いたしかたあるまい。種彦、やりなされ。思う存分、吊りあげてやりなされい！」

牢格子にとおした縄を握っている種彦に異論のあらうはずはなかった。

言下に、グイ、グイ——と吊りあげ用の縄が引かれる。

「ア、アッ、アッ……」

炎のような喘ぎが洩れ、吊りあげられまいと、せめても右足に力を入れてあらがう雅子の裸身に、荒縄からとび散った、いくつもの毛羽が火の粉のように降りかかった。

「フッフッフ……姫、それ、そおれ！ も

う一引き。それ、それ、そおれ！」

いったん「く」の字に曲がった右脚は、種彦のかけ声とともに、はかないあらがいを楽しむかのように、じわじわと、まっすぐに引きのばされ、

「ア、アウ、アワワ……ア、アッ！」

やるせない呻きとともに、やがてピーンと張りつめて斜め上へ——というよりも、辛うじて躰のバランスをとっている左脚と垂直にたかだかと吊りあげられてしまったのであった。

京紫の湯文字が下半身をおおっているというものの、見るも無残に破り裂かれて、わずかに腰のあたりにまとわりついているだけであり、冷たい空気が、雅子の羞恥を、いやがうえにも、かり立てる。

それにしても掛燭のあかりに照らし出された琥珀色の太腿の輝きは、現代風に形容すればアレキサンドライトのような燦めきと、いえようか。さすがは、やんごとなき高貴の姫にまぎれもなかった。

「白状したくないと云うならば、やむを得まいのう、種彦。もはや、その鈴をつけるほかはあるまいて」

いくつも並んでいるなかから、径二寸はあ

ろうか、大型の赤く塗られた鈴をとりあげた佐渡刑部は、

「まず、たっぷり心地よい音を楽しむことにしようて」

その鈴の上部の環には、紐でなくて、黒い糸がとりつけられてあったが、黄金製であるにも拘わらず、ことさらに塗られている真紅の絵具とあいまって、赤と黒との妖しい雰囲気、あたりにただよわせている。

「お手伝いしましょうか、佐渡さま」

「フッフッフ、さてのう。この分なら」

身動きひとつできない雅子を、じっくりと見上げ、みおろした佐渡は、

「大丈夫じゃ。ひとりでやれる」

いいざま左手が、右太腿を掴んだ。

弾力のある肌であった。撓性が強いといってもよい。掴むとおもしろいほど掌中で肉がはずむし、離すと、なにごともしなかつたように、もとにもどる。

「搗きたての餅とても、こうはいくまいの」二度、三度、雅子に哀しい喘ぎをあげさせて、

「では、ぼつぼつと、お目通りといくか。御簾をあげるようなものじゃわ」

いくつかに裂けて垂れさがっている京紫の

湯文字をひとまとめにして、ひとおもいにサア——と、はねあげる。

「アウ！」

瞬間——裸蠟燭の焰をあてがわれたような衝撃が、上と下とに裂かれている両内股から下腹へと、はしった。

五体が燃え、眼の前が、太陽を直接、見つけたように眩しく輝き、血が逆流する。

「ア、ア、アッ……」

すこしでも男たちの視線から逃がれようと、して、くねらせる太腿が、生きている巨大な宝石のように燦めく。いや、宝石とよぶにはあまりにも「なまめいた」風情と云えよう。「フッフッフ、じゃじゃ馬には、鈴をつけておかぬと、どこへ行ったのか、わからなくなるによってな」

佐渡の右手が、なんのためらいもなく宝石の肌に迫った。

と、種彦が、別の鈴を取りあげて、「佐渡さま。上のほうは私に、おまかせ下さいまし」

手伝いはいらぬと云われたものの、どうしても雅子の肌に触りたくなったのであろう。ななめまえから一歩踏み出して右脇に迫るとふっくらした二の腕のつけねから、はみ出し

ている腋毛を、なぶり始めた。

上のほう——といったのは、どうやら腋毛のことらしいが、それがまた、色艶のよい黒曜石を、こなごなに砕いて糸状にしたのかと思われるほどの美しさであった。

その腋毛の一房を——十数本から二十本くらいであったろうか——摘みあげた種彦は、それを、ヒョイ、ヒョイツと、ひっぱってみて結構、鈴をつけてもきれいなことはないと判断すると、真赤な鈴の環につけられている黒い糸を、腋毛のおもとに結びつけていくのであった。

毛というものは、腋毛にかぎらず艶っぽいもので、魚を釣るときのテグスと同じく、なかなか結びあわせることが難かしいもの。そのうえに雅子が、しきりに身を揉んで反抗するものだから、一度結んだ黒い糸がスーッと滑り抜けて、

——ライン、リン、ルン、ローン！

じれったそうに鳴りひびいた。

「そちらはどうですか、佐渡さま！」

チラッと眺めると、佐渡も種彦におとらず苦心しているらしく、吊りあげられている右脚に顔をあてがって熱中している。

「フッフッフッ、あせることはなからう」

佐渡が身動きをしたとたん、ほのかに漂ってきたのは、沈丁花の馥郁とした香りであった。

「匂ってますよ、ますます匂ってきますよ」

手を休めた種彦は、鼻をヒクヒクうごめかせて芳香を胸いっぱい吸いこんでから、

「今度は、うまく、いきますように」

願いごとでもするようにいうと、腋毛をたばね、鈴についた黒い糸を、それに結びつける仕事に取り組んでいくのであった。

由来、鈴は、日本人には、このほか愛されるもので、古くは八千年前の縄文式文化期に土製の鈴があり、弥生式時代に入ると銅、木製、鉄、そして錫と、各種のものが発見されており、古墳文化期以後の所謂、歴史時代に入ると形状も複雑多岐となり、足、腕、腰首は申すに及ばず、剣や鏡などにも多く飾りつけられるようになった。

ところで——。

この鈴は面白いことに、あるときは男陽を象徴し、あるときは女陰の異称となる。

川柳に、

若殿は、神代からある鈴で出来

とあるのは、後者のことであろうし、

鈴の緒を外して御戸帳ひんまくり

というのは、前者の例であろう。

それぞれ異なった祕語・縁語を持つのが普通であるのに、この鈴だけが両者に共通するというのは面白いことといわねばなるまい。

江戸城——一般の大名屋敷においても——表と大奥との間に、せまい通路があり、ここに赤い紐のついた鈴を吊るして鳴らし、相互に連絡しあうという。いわゆる「お鈴口」であり、ここから奥へ入ることのできるのは將軍だけ。それにしても、お鈴口とは、いい得て妙ではないか。川柳に曰く、

お鈴口、二つの鈴の勇み場所

鈴を待てば、鈴がくるなりお鈴口

とまれ——、どうやら成功したらしい種彦が、二度、三度、鈴を鳴らすと二歩三歩と後退して、満足そうな微笑をうかべた。

「こちらも、できたぞ！」

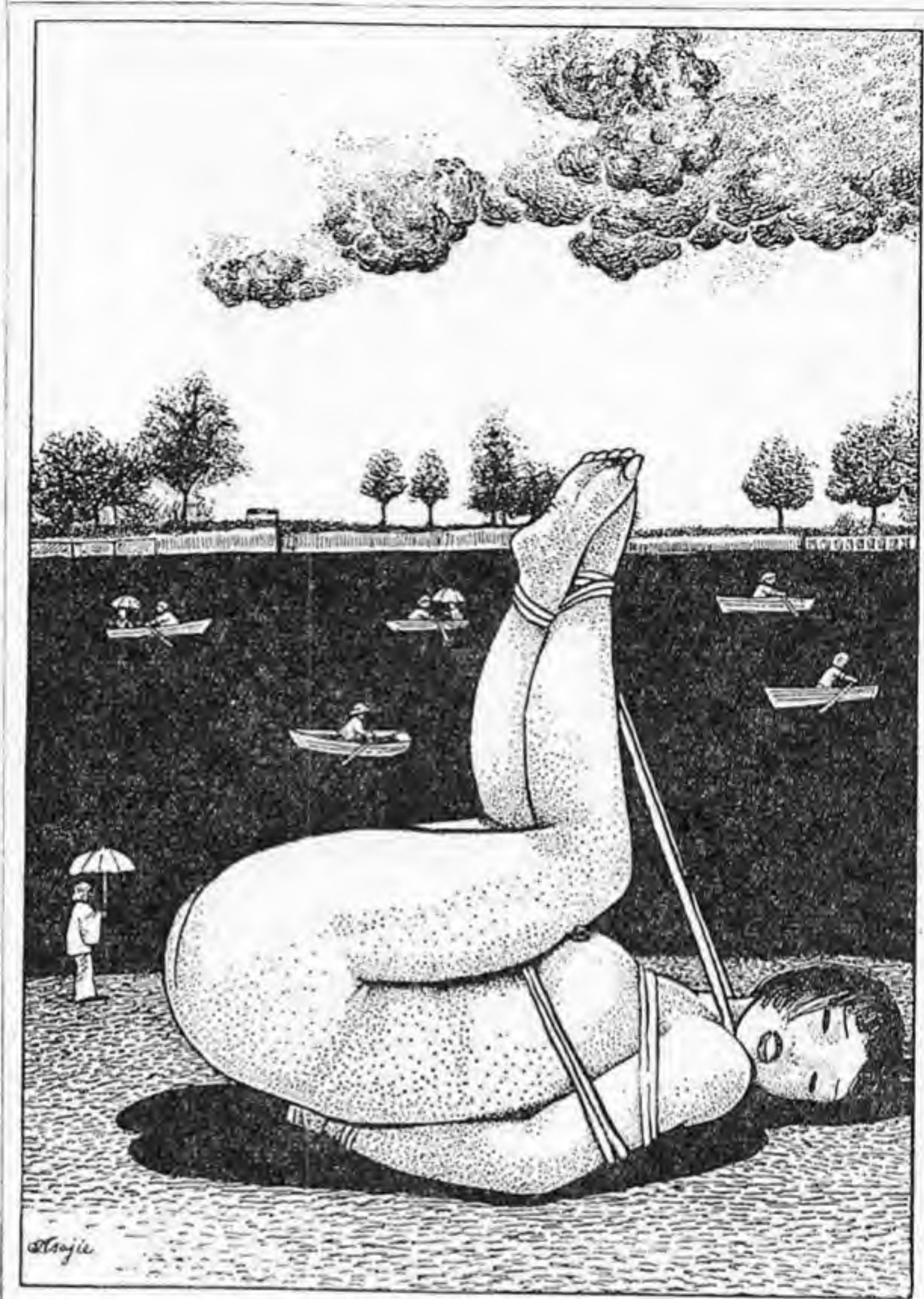
苦心さんたんした挙句のことだけに、佐渡も、また鈴を二、三度、ひっぱってみて、雅子の肉体に鳥肌に似たものをうかびあがらせ苦痛に眉をひそめさせてのち、両手を打ってたち上がった。

が、その指先を突然、鼻にあてがうと、

「香木になったようじゃ、この指々がのう」

「どれ、どれ」

僕のイメージ画集 『楽しい公園』 室井亜砂路



佐渡の手首をとって、鼻先に近づけた種彦が、うっとりとした表情を顔にうかべて、
「まっこと！ 『明石香』の香りにまぎれもありませんや。花にたとえれば、沈丁花！」
「さすがは、やんごとなき姫よのう。駄のつ

くりは目、鼻、口に手足やへそと、江戸の女となんの変わりもないが……肝心かなめの女の匂いが、いかにも優雅じゃ。フッフッフそれにしても懐かしい匂いじゃわ」
鈴を飾りつける間に、えも言われない匂い

の染みこんだ指々を、舐めんばかりにした佐渡であったが、

「どれ、ひとつ妙なる天上の音楽でも聞かせてもらおうとするか」

と、ひとりごちると、床の間におかれていた孔雀の羽を二本とりあげ一本を種彦に渡し「種彦は上。拙者は下。よいな、へそが境目じゃぞ」

とニヤリッと笑って念を押し、
「フッフッフッフ、踊るがよい、悶えるがよい。踊れば踊るほど、鈴の音が、いっそう美しく鳴ってくれるじゃろうて。それ、ここはどうじゃ」

サアーツと突き出された、きらびやかな孔雀の羽が、高く吊りあげられている右足の太腿を襲う。

「アッ！ ア、ア……」

咽喉をのけぞらせて雅子が呻くと、

——ラ、ラーン、リン、リン、ロン。

鈴が、澄んだひびきを、無心に奏ではじめる。

「フッフッフッフ。ここでは、どうじゃな」

むっちりとした肉ののった、月光をあびたように蒼白い膝の内側。そして、ふくらはぎへと孔雀の羽を躍らせると「ア、アアアッ！」せ

つなげな呻きが洩れて「ここは、どうじゃなここは！」と、やすむまもなく顔と同じ高さに吊りあげられている右足の指々、さらには足の裏の土ふまずの凹みへと微妙な、くすぐりを繰り返していった。

一方、上半身を受け持った種彦は、咽喉もとから腋、妖しくくねる脇腹へと、間をおきながら巧みな攻撃をつづけていた。

「ア、ア、アウ……ア、アアウ！」

裸身を這いまわる二本の羽に、われ知らず雅子の唇がひらき、縄目のあいだで乳房がゴムまりのように弾む。

「フッフッフ……白状するか、姫。何人の男を寝た。どうだ、ありていに白状するのじゃ！」

種彦の羽が、雅子の鼻孔をくすぐり始めたのをチラッとみつけた佐渡は、

「こちらは、いよいよ本陣へと迫ろうか」

吊りあげられている右足はともかく、全体重を支えている左脚のほうは、くすぐってもあまり効果はないと判断したのか、ふくらはぎのあたりに触れさせただけで、羽の先端を一転させると、逆さ小富士に沿って横一文字に這わせていく。

「ア、アッ、お、おやめ、おやめ下さい！」

豊かな腰がくねり、

——ラン、リン、ロン、ロ……ン

激しく鈴が鳴りひびく。

「なんで止めらりょうものか。ほれ、今度はここを」

小富士の稜線にそって撫でおろされた雅子は、もう、孔雀の羽が鋭い白刃であるかのよう感じられて、

「お止め下さいませ。許して、許して下さいませ！」

と悲しくも訴えつづけるのであった。

そのとき、どうしたはずみか、たくりあげられていた湯文字が、ふわっと垂れて、麓から湧き起こって、忽ち頂まで、おおい隠してしまう雲のように、小富士を押しつつんだ。

「女主人の身を護ろうとするのか、けなげなやつよのう。フッフッフッフ」

揶揄するような言葉を洩らした佐渡は、

「無駄な抵抗をするものじゃ、目障りじゃ」

二尺もあるう孔雀の羽を小脇にかいこむと雅子の腰を抱きかかえるようにして湯文字の結び目を解いていった。

もはや無用のものに近いほど裂かれてしまっている布ではあったが、それが腰にあるというだけで、なぜか心強い——これが女心と

いうものであろう。

その布を取りさられる！ ほんとのアカ裸にされてしまう！

「や、やめて、下さいませ！ 佐渡さま、それだけは、お願い。ゆ、ゆるして！」

京紫色の湯文字が、部屋の隅に向かって大きな弧を描いたのは、雅子の絶叫が、まだ部屋にひびきわたっているときであった。

「ア、アア、アア、アア……」

嗚咽がながく尾をひき、鈴が、ラン、リン、リン……と、雅子の胸の鼓動を、あらわすように高鳴った。

と、

バサッ……という音がしたのは、佐渡の投げた湯文字を、あたまからもろにかぶった鳥尾芳年が、それを払いのけたせいであった。

真剣に絵筆を走らせて、責められる雅子を描きつづけているこの浮世絵師にとって、沈丁花の香りも鈴の音も何の関わりもない。

音や香りは、絵にはならない。

芳年の血走った眸にあるのは、久我雅子の江戸では、まずお目にかかることのできない高貴な裸身であり、その盞きであり、何よりも、その肌の色つやであった。

「鳥尾先生、いかがかの。満足したものが描

けるかの」

佐渡の問いにも返事は、かえってこなかった。それもそのはず、芳年は雅子の美体に、われを忘れていたのである。

絢爛たる錦絵

それは、人間がまだ誕生していない遙か遠い太古。碧空に亭々と生いしげっていた龍王樹の樹脂が、宇宙のかなたから訪れた未知の妖しい光線をうけて、一瞬にして凝結したと言われる琥珀を思わせた。

方三尺の琥珀——もしもそれが、現実の世にあれば、ゆうに一國を傾けるであろう。

いま、雅子は、まさしく傾国・傾城の蠱惑を秘めて、琥珀色に煌く肉体のすべてを、あからさまに曝け出したのであった。

方三尺といえば、一メートルの球体と云えようが、いま、それが牢格子を背に、立ち縛りにされ、右脚を高々と吊られて六尺に一尺四、五寸にひきのばされて喘ぎ悶えている。

「美しい、見事じゃ。みごとなものじゃ」

絵筆の軸を物尺にみたてて、あらためて女体各部分の比例を確かめた芳年は、

「どンドンと責めて下されい。早描きでは人

後におちぬこの私ですじゃ。次々と姿態を変えてくれてもかまいませんぬ」

早描き——つまり、クロッキーのことであろうし、姿態はポーズのことであろう。モデルのポーズを次々と二人の男に変えさせて、黒、赤、丹、紺青……と各種の絵筆で、速写していく才能は、江戸でも一、二を争うと云われていた。いや、早描きの才能だけではない。いま、雅子をモデルに描こうとしている「女責め・二十八佳撰」は、多くの地本問屋（絵師や彫師、摺師の総元締め）から、すでに引く手あまたであった。

そもそも「浮世絵」は、「閨中秘戯」を描くのが本来の姿で、喜多川歌麿にしても葛飾北斎、鈴木春信にしても、数多くの「秘画」を書いたものであり、それが当時唯一の交際国であったオランダ人の目にとまり、ヨーロッパ各国で有名になったもの。現在ではスエーデン、デンマーク、西ドイツが、その道の先進国と云われるが、そもそもは、我が日本こそ、「ポルノグラフィ」の本来本元といえるのである。これは奇矯の言のように聞こえるかも知れぬが、さにあらず、寛政の改革で有名な松平定信は、浮世絵、即ち春画と規定しているし、ヨーロッパ各地で現在も、なお

徳川時代のウキヨエが家宝として父から息子へ母から娘へとうけつがれているのである。

鳥尾芳年はいま、ウキヨエ以上のもの、歌麿や春信の閨中秘戯画以上の境地を、「責め絵」に求めている。

この世のなかでなにが美しいといったって美女が責められるのにまさる光景はない——というのが芳年の持論であり、それを、いかにして錦絵に絢爛と定着させるかに熱中していたのである。

その眼前——

牢格子に生けられたサザンカの花のしたで七彩の孔雀の羽が妖しく躍っていた。

逆さ小富士の稜線をくだった尖端が、いよいよ、その頂へと迫っていく。

芳年はもちろん種彦もその手を休めて、佐渡の手もとと羽の尖端に灼けつくような視線を、おくりはじめた。

「ア、アッ、アッ、アアア……」

もう雅子は（おやめ下さいませ！）とは訴えはしない。はり裂けるほど上と下へと割られて太腿に、青い静脈をうきあがらせて狂おしくなるほどの羞恥に耐えていた。

「それ、それ、そうれ！」

くるくる、くるくると七彩の羽をもてあそ

びながら佐渡は、攻撃の機会を待つ。

もはや獲物は掌中にある。あとは、どこまでも焦らせて刻一刻と恥辱に喘がせ、最後のとどめをさすばかり――。

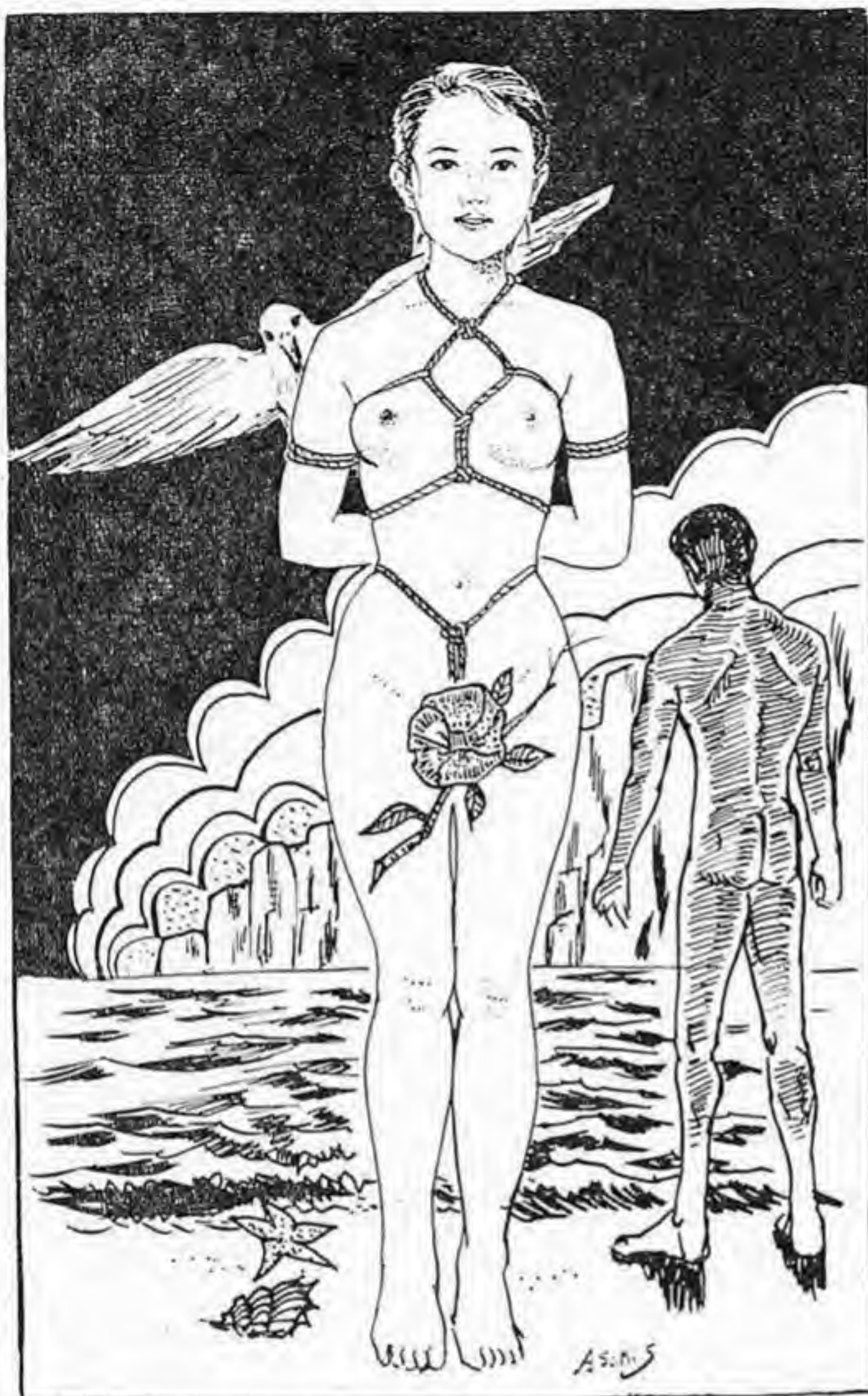
「フッ、フッ、フッ。姫、白状したらどうじやな。こんなにまで恥かしい目を見ずに、すむものを。五人か、それとも七人か……フッ

フッ、フッ、それぞれ！」

富士山の頂上には小さな湖があり、その湖のほとりには一面に、すすきが揺れているという。

小富士にとりつけられた真紅の鈴が、ラ、ラ、リンと、やるせなく響く。

「ア、アウ！ アウ……ウ、ウウッ！」



イメージギャラリー

『那津子供花』 須坂

旭

顔をふったとたんに、頬にかかった黒髪の一房が乾いた唇に触れると、それを思わず知らずグイッと噛みしめて、潤んだ瞳を、あらぬかたにうっとりとしらいて見せる雅子の姿は、まさしく妖美な一幅の錦絵といえよう。芳年が、眼は雅子に向けたままで絵筆をとりあげ、大判の美濃紙をひきよせた。種彦が、ゴクツと生唾をのみこんだ。

と、――

「姫、参りまするぞ。それ！」

戯れていた孔雀の羽が、いったん羽搏きを止めたかとおもうと、次の瞬間、湖に身を躍らせる若鳥のような逞しさを帯びてみえた。

そのときの雅子の絶叫は、表現することが出来ない。ア行の五文字にもハ行の五文字にもない。しいて形容すれば、

「イイイッ！ ヒ、ヒイイ……」

と、やはり云うほかはなからう。ともかくやんどとなき姫の唇から洩れるにしては、あまりにも、けだものじみた絶叫であった。

そして、五体はその一瞬、龍王樹の樹脂が未知の光線をうけて凝結したという琥珀そのものと化した。

咽喉をのけぞらせ裸身を大弓のように反らせたまま微動だもしない「長い長い一瞬」が

過ぎていった。そして、

掛燭の光が揺らいだとき——今度は、媚を含んでいるとさえ思われる「ア、ア、ア、ア……」という喘ぎが洩れて、一挙に吐き出された甘い息が、フウーッと佐渡の、そして種彦の顔に、ふりかかった。

佐渡が、孔雀の羽を、くるくると竹とんぼのように廻したのは、その一瞬であった。

今度は、両腋につけられた鈴が、烈しく鳴った。

「イヤ、イヤ、イヤ！」

三声、叫んだ雅子は、なおも語尾さがりの甘えるような声を吐き出す。

ここで、ニヤッと佐渡が、うすら笑いをうかべたことは云うまでもない。

そして、グイーッと二尺余の羽を手もとに引いた。孔雀の羽には、無数の枝があり羽毛がある。その枝々が、逆毛立って雅子を責める。

「キャアアアア！」

まえにもまさる絶叫が、ほとばしり、鈴がけたたましく鳴った。

そのひびきのなかで、

「イ、イヤアア！ イヤ、イヤア……」

アという金切声が、あるときは高く、ある

ときは低く、部屋中にひびきわたった。

芳年の手にした絵筆が、ひとりで紙面を這いまわり、雅子の姿を描き出す。

もう我慢しきれなくなったように、種彦の手が、のびはじめた。

「チィ！ まだ手を出すんじゃない！」

佐渡の一喝が、とんだ。

「ア、アウ！ ム、ムムム」

齒ぐきを喰いしばって疼痛に耐える雅子の富士顔には、うっすらと玉のような汗がにじんできたが、佐渡は、孔雀の羽をそのままにして、ゆったりと正面の脇息にもどった。

何人の男と

「女を哭かせるのも、手間ひまのかかるものよ。う。疲れるわ」

心とはうらはらのことを呟きながら酒盃をあげる佐渡をよそに、芳年は絵筆を動かしつつづけていた。

こつてりと凝脂ののった太腿が掛燭に映えて琥珀色にかがやき、珊瑚樹の実のような乳首が、かすかに息づいている。

その色彩を、いかに美濃紙の上に表現することができるか——。

左頬を、なかばおおった黒髪が肩で波打っている微妙な光景や輝くような肌を妖しく飾っている七彩の孔雀の羽を、いかに画面に定着させ、芸術として昇華させるか——鳥尾芳年の眼には「責め画」画家としての執念のようなものが、めらめらと燃え上がっていた。

と——

——ラーン、ラン、ラーン、かすかに鈴が鳴ったのは、雅子が身動きをしたせいであろうか。

誘うようなその響きに、ふらふらと種彦がたち上がった。「鎖格子女之拷問」につづく作品を書こうとはしているものの種彦には、芳年ほどの美的感覚はない。

鈴が鳴るのは、男を呼ぶため——と、そうひとり合点をしたのであろう。青畳の上にちらばっている鈴のなかから、中指大の黄金の鈴をとり出すと、雅子の右側に立つ。

「佐渡さま。もうすこし遊ばせてもらいますよ。ただ眺めるだけでは虎穴に入って虎兇を得ないのと同じですから」

人のちかよる気配に、おもわず開いた瞳に種彦をみとめた雅子は、

「た、たねひこ……さま……」

すすりあげるようにいい、鼻でおおきく息

を吸いこんだ。

じいっと種彦が見守るなかで、せわしげにその息が吐き出される。

二度、三度、形のよい、その鼻のうごきを楽しんでいた種彦は、

「雅子姫。その鼻をすこし、いたぶってあげようね」

猫撫声でいうと、サア—と左の鼻孔に小鈴を突き入れたのであった。

「ア、アウ……ム、ム……お、おやめ下さいませ……」

言葉は、当然、鼻にかかった不明瞭なものになったが、それが、またなんとも云えない悩ましさを、ともなっていた。

「もう一方にも、ほれ」

右に左にと、ふりたてられる顔を押えこみ甘い息吹きを顔中に吹きかけられながら種彦は、まんまと右の鼻孔へも小鈴の詰めこみに成功した。

鼻で呼吸ができなくなったのでは、どうしても唇を、ひらくほかはない。

象牙のような歯並びがのぞき、綺麗な舌があわただしく上下し、咽喉のおくが、肉感的な装いをみせて、迫ってくる。

「フッフッフ……まったく申し分がありません

せんや。佐渡さまも、ぼつぼつ、お始めになっちゃあ、いかがですか」

——ラ、ララン、ル、ルル——

両腋で鈴が鳴りわたり、肩よりも高く吊りあげられた右足のさきで、五本の指が、いぎたないくらいに伸び縮むのを眺めた佐渡は、酒盃をおいて、すっくりと立ち上がった。

そして取りあげたのは、これまた黄金製の径一寸四、五分くらいの鈴のまわりに七つの小鈴が装着されている七宝鈴とよばれる女責めに、もってこいの鈴であった。

それを雅子の眼前につきつけた佐渡は、

「種彦、鼻の小鈴を出せ。そのままじゃあ、白状しようにも、できやあしない」

「でも、佐渡さま」

せっかく詰めこんだのにと、いささか不満そうな種彦に、

「口のなかに入れさせてやるから、ともかく鼻からは、ひきずり出せ」

強い口調で言われては、しかたがない。紫色の紐を二本、同時にひくと、鼻孔から小鈴が姿をあらわす。その鈴を、鼻孔からひきだされた小鈴を、ポイポイと二つとも口の中にほうり入れたところを見ると、種彦の雅子に對する愛慕の念は、よほど深いものと云わね

ばなるまい。

あきれたように種彦を見つめた佐渡は、あらためて雅子の左頬にかかる黒髪をかきあげると、

「姫。この七宝鈴は、種彦の鈴とはチトちがいまするぞ。早く白状なされたほうが、身のためではあるまいかのう」

桜貝のように染まった耳朶に、いままでの鈴よりも、はるかに強い音がひびいてきた。

由来、鈴が、リーン、リン、リンと鳴ると一般に云うが、それは空耳である。鈴を構成する物質によっても異なるが、金属の場合は最初にキーンとひびく。つづいてギーン、もしくはジーンと聞こえて次にラン、ラン、ラインと鳴りわたる。ときとしてル、ルーン、レーン、ローン、ロン、ロンと鳴く時もあり、ビィー——ン、ジィ——ンと啼くこともあり、ガラ、ガラ、ガラツと単に音を立てるものもある。

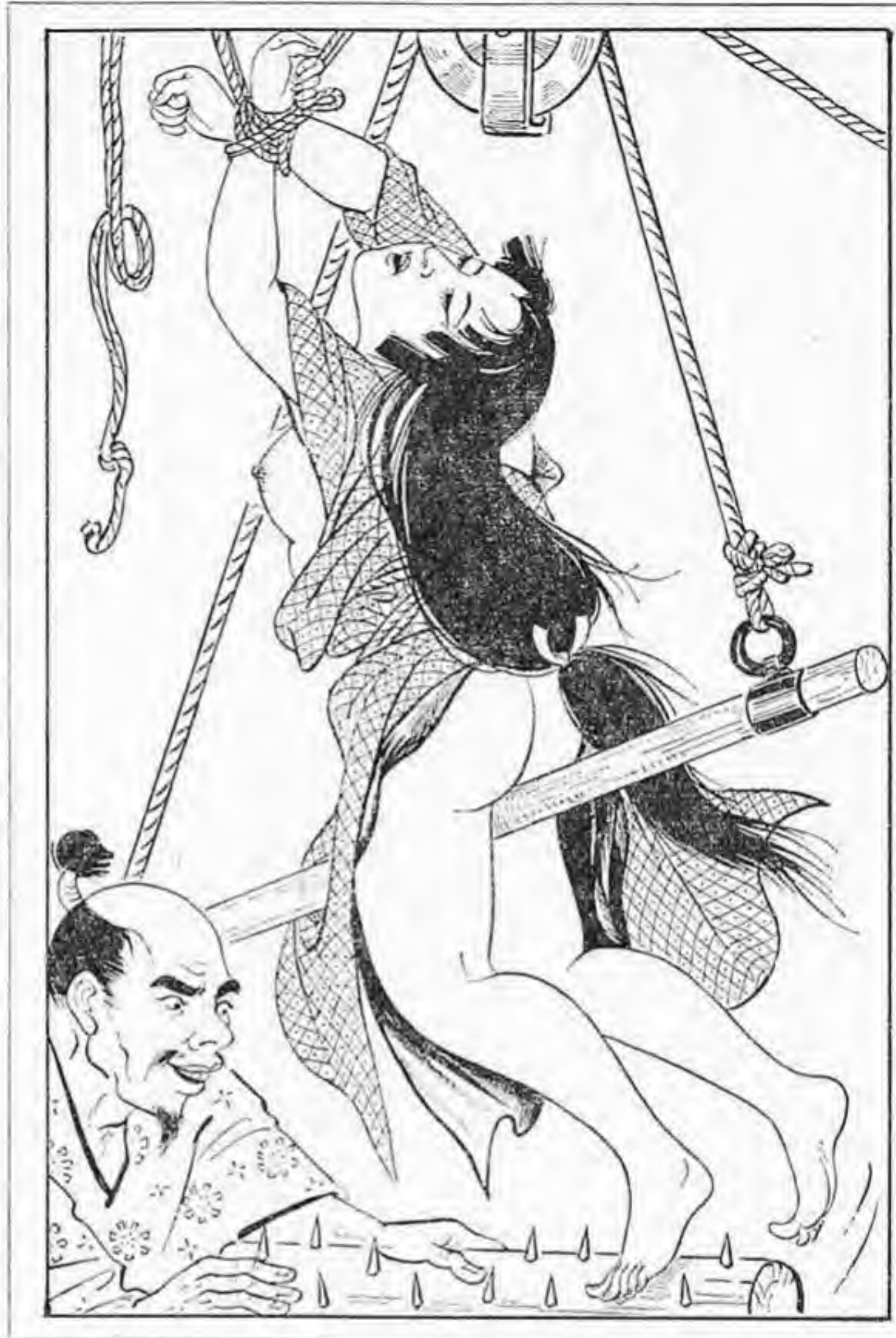
いま佐渡の手にある七宝鈴は、七つの小鈴をもつだけに、

ジン、ジャン、ジャン、ジ——ンと、ひときわ味のある複雑な音色をあげて雅子の耳に迫ってきた。

「お、お許しを……」

イメージギャラリー 『足台非情』 岡

たかし



酒くさい佐渡の息を吐きかけられながら雅子は、顔をあげた。

「何人に抱かれたかと尋ねておるのじゃ。正直に、お答えなされい」

「そ、そのようなことは……存、存じませぬ……」

「フッフッフ、強情なお方よのう」

うっすらと開かれた雅子の瞳に恐怖の影が刷かれた。孔雀の羽だけでも激しい羞恥に襲われているのに、このように大きな鈴を仕掛けられては、たまったものではあるまい。

「お、お許し下さい……ほ、ほんとに、もう

これ以上、お嬲りになることは！ お、お願いでござりまする……」

ものがなしそうに鈴が鳴った。

「お、お許しを……佐、佐渡さま」

すすり泣くような声で訴えたが、佐渡の狐のような眼には、憐憫の情はなかった。

「何人の男と寝た！ 姫、答えるのじゃ」

今度は七宝鈴がたかだかと鳴りひびいた。

「ア、アウ……お、お許しを……妾、妾……」

耳をおおいたくなったのであろう。背後で縛られている両腕がくねり、縄と柔肌とが烈しく擦り合う音が、ジン、ジャン、ジン、ジャンという響きを縫って、きこえた。

「何人じゃと申すに！」

佐渡の怒声が、これに加わった。

と、凄艶な顔をあげた雅子は、じいっとう唇の端を、かみしめて佐渡を見つめた。

いままで激しく波立っていた豊かな乳房が一瞬、氷結したかに見えた。

「答えい、姫！」

異様な沈黙のなかで「……五、五人でござりまする……」と云いおわった雅子は、がっくりと首を折った。黒髪が顔を覆い、肉の盈ちた肩が、烈しく羞恥を示して揺れた。

「嘘を申せ！ 五人だなどとは、また大嘘。

五十人、いやさ、百人を越える男どもに哭かされておるはずじゃわ！」

これは佐渡のしかけた言葉の畏であつたが雅子は、う・ま・う・ま・と、その畏にかかった。

「な、なんでそのような！　なんで五十人も百人もの殿方を妾が……」

「ならば何人と申すか、三十人か、二十人かそれとも十五人か」

「……十、十、十数人……十数人でござりまする。それ以上は、とても、とても存じあげてはおりませぬ」

「フッフッフ……やはり十人から二十人の間であつたか。フッフッフ……よく白状したな、姫」

たばかられたか！　と雅子が気づいたときは、すでにおそく、真実に近い数を、なんなく白状させられてしまつていたのである。

はじめに最少限度、予想される数字をあげ一転して女が驚くほど大きな数字をあげて責めたてるといふこの「畏」は、面白いほど女に真実を自白させるものである。「嘘」と思われる読者諸賢は、御令閨さまに仕掛けてみられるとよい。「俺の女房にかぎって、大丈夫」と、鼻の下を長くして愛妻家ぶつておられるお方ほど実は危ないのであつて、「あな

たよりほかに男のかたなど存じあげてはおりませんわ」という御令閨さまに、う・ま・う・ま・と騙らかされておいでになる。女というものはどこまでも隠しとおす才能も、あわせ備えてゐるものである。それ、「俳風柳多留」にもあるではございませぬか、

知らぬとは、女房知つての証拠なり

あなた一人よと、女、誰にでも言い

一人でも二十人でも女同じなり

いかがです、諸賢よ。ゆっくりと御令閨さまの唇から「知らぬはず」の男たちの名前をお聞き出しになられては。そして、いつ、どこで、一番楽しく恥かしかつたかも、あわせ白状させてみては。もしかするとあなたの御令閨さまが、一人の男（もちろん、これはあなたではない）ではなくて、三人も五人もの男たちのまえ、しかも抵抗し羞恥に悶えるのを、ズタズタに下着を破り裂かれて——剥ぎとられたのかも……知れないではありませぬか。

閨室には、何の花が咲き匂っていることでしょう。ここ、小梅の利倉屋の寮では、並べたてられた拷問道具を背景に、牢格子の、隅のサザンカの枝が、真紅な花を咲かせています。

艶めく湖

「十数人か。よからう。ときに雅子姫。その名をひとつ、あげてくれぬか」

白状はさせられたものの、具体的に名をあげるとなるといふその羞恥が雅子を襲う。名をあげるごとにその一人一人の顔がうかびいつ、どこで、どのような姿態でと、ありありと過去の出来事が臉のうらによみがえってくるものであり、女は息苦しくなる——つまり、そのときの悦虐を「追体験」して、ひとりでに身を灼くことになるだろう。

佐渡に名をあげる——と迫られたとき、まず雅子の臉にうかんだのは、かつて京都にゐる頃から自分に横恋慕し、袖にしつづけていたにも拘わらず、つい先頃、骨身にしみるまで罵られ縛られ犯されることになつてしまつた葉室邦行の顔であつた。

（憎い！　八つ裂きにしても飽きたりぬくりに憎い！）

だが、女にとって愛憎は必ず一如のもの。憎い、憎いと怨む反面、もう胸のあたりがジーンとしてきて、乳首がなんとなくむずがゆくなってくるのも、いなめない事実である。

「フッフッフ……元禄屋、元禄屋の名が、まず第一にあがるであろうが」

佐渡が仕掛けた第二の罠であった。

佐渡は、葉室という勅使として下ってきたにやけた公卿に雅子が誰よりも激しく徹底的に罵り抜かれたことを利倉屋から伝えきいて知っていた。であるにも拘らず元禄屋の名をあげたのは、これまた女心を知りつくしているせいであった。

女というものは、より大切な秘密を守り抜くために、案外、小さな秘密は、かんとんにしゃべってしまうものである。対して、大きな秘密を先に自白させてしまうと、後悔が先にたって、小さな秘密に関して、かたく口を閉ざしてしまう——従って一挙に核心を衝く訊問法よりも、じょじょに楽しみながら小さな出城、出城を陥していった、最後に本丸を攻め取るのが得策というものであろう。

即ち、「葉室であろうが」と尋ねたら、雅子は首を大きく振って、かたくなに口を閉ざしたのであろうが「元禄屋であろうが」と十数人のなかの一人には違いないが、より羞恥を感じなくてすむ人の名をあげられて、ホーッとなり、

「ハ……ハイ……」

と、答えてしまったのであった。

「フッフッフ……それから誰じゃな。さあ神妙に答えてみい！」

「利、利倉屋さま」

これもいわば「小さな秘密」であった。

「ほかに」

「ア、アウ！ ど、どうしても申し上げなければならぬのでしょうか」

「これがイヤならばな」

七宝鈴が耳のそばでひびいた途端、雅子は思わず悲鳴をあげた。

それは鈴のせいではなく、佐渡が、孔雀の羽を動かしたせいであった。

「早く申せ！ 申さぬと……」

片側の白壁にうつっている羽の影が、急激に伸びたり縮んだりした。

「ア、ア、アッ、アッ……お、お許し下さいませ！ 昭、昭吉さん……」

「昭吉とは誰だ、どこの男だ！」

知っておりながら佐渡が意地悪く訊ねた。

「元禄屋さまの一番番頭……ご、ごぞんじのはずでござります。ア、アウ……」

「何回、何回じゃったかの」

佐渡が訊問の鋒先を突如、人名から回数に変えると、思わず、つりこまれた雅子が、

「五、五回……」と答えたもののハッとなり、

「嘘、嘘ですことよ。今のは、間違い！」

「フッフッフ、五回で間違っていたとするとは、十回かな。それとも二十回ですか、姫！」

「そ、そんな！ そのようには……」

五回という雅子の答が、真実であることはまず間違いはなかった。

「和吉にもだな、姫」

「ハ、ハイ……」

「それから、ほかに」

「鞭兵衛さまと五人の子分衆たち……」

指おり数えた佐渡は、

「これで十人になったわ。これに姫の別れた夫・大蔵大輔柳原宗忠を加えると、十一人ということになるのう」

「ハ、ハイ……」

短兵急な訊問が、やっと終わったとおもったのだろうか、雅子が、ホーッと溜まっていた息を吐き出し、うっすらと瞳を開いたときであった。

「嘘を申すな！」と佐渡の叱声がとび、

「御老中領田さまは、どうした！ 勘定奉行の肥田さま、はどうであった！ よもや知ら

ぬとは申せまい。姫！」

虚をつかれた雅子の顔が、みるまに蒼ざめていく。そう云われてみれば、領田下野が、「みごとじゃ」と、金股流修羅縄をかけられ

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	四〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一二〇〇円 (送共)
半年分	6冊	二四〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四八〇〇円 (送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛（郵便番号五五八）表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、（切手代用は一割増）振替（大阪四二七八三番）』のいずれかをご利用

ている雅子を弄んだとき、この佐渡は、たしかに同席していた。

「姫、どうじゃな！」

「申しわけありません……」

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金（切れました）ときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

白壁にうつった孔雀の羽とともに、真紅の鈴が音をたてて躍りまわる。

「申しわけないではすむまいぞ！ 姫、この上は、この七宝鈴をその肌で受け、白酒のふるまいでも、してもらわずばなるまいのう」

中国の古書「洞玄子」に、「津液」なる語がある。「抱朴子」では「玉液」と名づけ、

日本では「白酒」「移し露」「ふのり」「情の水」「菩提水」と云うが、なかでも「一休

諸国問答」によれば、ずばり「生命の水」と讃えられ、回春の妙薬とされている。

男にとっては「回春の妙薬」であろうが、女にとっては、まさしく、「あられもない痴態」を曝け出すことであり、これ以上の「羞恥」はないであろう。

はたして、雅子は、理性ではどうにもならないこの被虐の場で、人非人の攻撃にあらがいつづけることが可能であろうか。

そのとき――

立ち上がったのは鳥尾芳年であった。みれば両手に幾本もの絵筆を握っていた。

そのなかで、ひととき大きく真新しい筆は、彼が、元禄屋から借りうけてきたもので、穂は、ことごとく、女の体毛でつくられたものであった。

――（つづく）――

憧 憬 〳和 装 意 地 悪 責 め〳

大振袖花嫁衣裳の被虐美

高 橋 英 樹

(写真 は 山本五郎氏提供)

山本五郎様の振袖花嫁緊縛写真を拝見し、やむにやまれぬ気持で書いた、つたない投書が一月号に掲載され、それも山本様のすばらしい写真と一緒に大きく一頁に扱われたことは、望外の喜びでした。四月号では山本様からお目にとまった旨の記事も載り、私の趣旨に共鳴して下さることがわかって、大変嬉しく思っております。

私が山本様の写真に魅力を感じるのは、何といっても据綿入り三枚重ねという大時代な大振袖を使い、本格的な着付けをした花嫁をモデルにしているところにあります。山本様のお話では、衣裳・かつらで11キログラムもあるとか。想像はしていましたが、やはり相当な重量で、これだけのものを身につけてプレイ用花嫁になられる奥様の、ご苦労がしのべれます。

いつの頃からか大振袖に巾広帯の豪華な娘姿に興味を持ち、美しい装いをしながら、衣裳、かつらの重圧にあえぐ女性や歌舞伎の役者さんたちの話を好んで読んだり聞いたりして参りました。

たとえば――

『男の人はいいですけど、女は大変なんですよ。衣裳は重たいし、大きな帯を締めてるからお手洗いへ行っても苦しくて、しゃがめないんです。それに、どうしても、お嫁さんのほ

うが、おじぎをする回数が多いですから、和室での披露宴では花嫁さんは、とてもつらい思いをしなくちゃならないのよ』(高名な美容家と、雑誌記者の対談から)

といったような記事を見ると、何かゾクゾクしてくるのです。

「子役時代からで慣れてはおりますけれど、女形で何がつらいかって申されますと、帯でございませぬ。女の帯は、いろいろございませぬが、殆ど娘か、お姫様役ばかりですので、いつも巾広の帯で胸を締めつけられて苦しゅうございます」(中村歌右衛門丈・ある評論家との対談から)

「重いかつらで頭をおさえつけられ、大きな帯で胸を締めつけられているので、初心のうちには、気分が悪くなって吐く人もあるくらいです」(尾上梅幸丈)

「和装は重たいし、暑くてかたまりません。大きな帯を締めますからイスに坐っても苦しくて写真撮るのに一日中、着せられっぱなしのことがありますけど、もう重くて暑くて苦しくてボートとなっちゃいます。自分のときは絶対、洋装の花嫁衣裳にするわ」(あるファッションモデル)

こんな、和装による苦しさの記事は、私を魅了してやみません。

なぜ、こんなに振袖姿に魅かれるのか自分

でもわかりませんが、美しく着飾った女性の優越感と、それによって、身動きままならぬ屈辱感が混在するところに、その秘密があるように思います。

考えてみると、大振袖の花嫁姿には、女性のあらゆる感情が、こめられている、といえるのではないのでしょうか。

満座の中で最も美しく着飾り、皆の視線を一身に集める晴れがましさと優越感は、誰よりも美しくありたいと願う女心を満足させずにはおきません。しかも同時にまた、かつらの重さ、重ね着、巾広帯の締めつけによる、暑さ・息苦しさ・身動きの不自由さなど、女性のマゾ感を満足させる条件も、そろってい



ます。

分厚い花嫁草履をはき、重く厚ぼったい裾をからげて、お仲人夫人に手をとられながらのヨチヨチ歩きには、ピチピチと、はねまわれない劣等感があります。加えて、これから男性に身も心もささげることに対する期待と不安。嬉しさと恥ずかしさ。これらの感情が混然一体となって異常な興奮状態にある花嫁その美しい花嫁が無残な姿に縛られ、目のさめるような振袖姿のまま、世にも恥ずかしい恰好をさせられたとき、その哀美感は最高のものとなり、花嫁の女性が受ける羞恥・屈辱感は頂点に達するでしょう。

このような情景を現実化し、和装縛りの妖

しい美しさを、追及される山本五郎様のご努力に敬服すると共に、羨望の念を禁じ得ません。花嫁のモデルとなる奥様はMでないそうですが、Mでないことが、いっそう縛られた花嫁の哀美感を情緒あるものに行っていることが、写真から、うかがわれます。

花嫁の髪が型通り、かんざしきらめく高島田であることも私を魅惑する大きな要素となっていますが、なによりもモデル自身に日本髪・振袖姿の花嫁を表現するにふさわしい雰囲気があるように思われてなりません。このように良いモデルに恵まれ、そのモデルに好みの衣裳を着せ大きな帯で締めあげて、思いのままに「和装縛りの美」を追及される山本様は、本当に幸福な方だと、うらやましく思います。

さて、今回は私好みの着付けをご紹介し、山本様のお力で、なんとか実現して頂きたいものと、勝手な夢を見ております。

縛りはともかくとして、私は女体を打った叩いたりといった、肉体に対する直接的ないじめ方を好みません。私の好きなのは、意地悪責めなのです。ですから、花嫁衣裳のような女体を苦しめる美しい責め道具に、たまらない魅力を感じます。

ある服飾評論家によりますと、振袖というのは着るきものでなく『着せられるきもの』なのだそうです。そういえば、たしかに、花

嫁衣裳などは、ひとりでは着られません。着付けにせよ、帯結びにせよ、みんな他人の手にかかるわけです。帯にしても、締めているのではなく、締められているといったほうがあたっています。

大振袖に巾広帯の花嫁姿やお姫様姿が、女性のマゾ感を刺激しないといったらウソになるでしょう。逆に男性は、女体を締めつける大きな帯にサド感を、持ちはしないでしょうか。そんなことから、つぎのような着付けを考えました。

意地悪責めの着付け ①

「姉さま人形」

1、長襦袢までは、ふつうの和装と同じように着付けます。

2、モデルの体形により、バスタオルを胴に巻くなどして、くびれた部分を埋め、形をととのえます。

3、八寸巾の夏帯を、そのまま胴に巻きつけます。このとき、腰紐と伊達締めで、基礎が、しっかりできていることが大切です。八寸の帯ですから、巾が広くて締めにくいですが、一巻きごとに、しっかり締めつけてゆき、充分に締めあげたら、腰紐で仮止めしておきます。

4、伊達巻きをとり、腰から締め始めて胸へかけて締めあげてゆきます。途中で仮止めの腰紐をはずし、伊達巻きを締め終わった

ところで腰紐をかけ、本止めします。夏帯のとき強く締めなくても、このとき伊達巻きをきつく締めますとモデルに与える息苦しさを強めることができます。こうして腰から胸に至るまで、モデルの胴が帯によって円筒状になるように仕上げたら、振袖の着付けに移ります。

5、振袖は、ふつうに着付けて頂き、あとは帯だけというところまでできたら、モデルの両手をピッタリ脇につけ、二の腕と手首のところに、それぞれ腰紐で縛ります。丁度、胸と腰に縄がかかった形ですが、二の腕も手首も紐を一巻き、からげておくと位置ずれがおきません。両袖は腰紐をかける前に、形をととのえておきます。腰紐の位置は、上に締める帯でかくれるところを、えらんで下さい。

7、いよいよ、帯にかかります。両腕の上から巻きますから、丸帯でも袋帯でも巻きつけ分だけで一本必要で、背中には、好みの帯結びを別の共柄の帯で作らなければなりません。帯は腰から胸へかけて巾一ぱいに巻き、力いっぱい締めつけて下さい。両腕は帯の下で、モデルの緊縛感は最高に近づきます。帯を締め終わったら手早く細紐で胸と腰を縛り帯がゆるまぬようにします。

8、帯結びは好みの形で良く、作り帯をつけても、別の帯を一巻きして本式に結んでも

よいのですが、衣裳にふさわしい豪華な形をえらびましょう。

9、帯の中央に丸ぐけの帯止めを締め、帯揚げと抱え帯で、胸と腰に縛った細紐をかくします。お好みにより、抱え帯のかわりに「しごき」を締めても結構です。

10、はこせこ、扇子といった小物を着け、花嫁草履をはかせて、でき上がりです。

かつらと足袋は着付けの始めにつけておくことは、いうまでもありません。

さて、これで、私のあこがれの「姉さま人形」ができあがりました。あとはお好みのように扱い、意地悪責めにかけて頂けばよいのです。

たとえば、まず正座しておじぎをさせる。でも、この格好では坐ることさえ容易ではありません。立っているだけでも息がつまりそうなのに正座したら大変な苦しさです。それでも、やっとこらえて、おじぎしようとする、上体は帯で締めかためられていて、折り曲げが困難ですから、お尻が浮いてしまします。無理に曲げると重心が前に移って、つんのめってしまうでしょう。でも、両手で支えることはできず、美しい顔で受けなければなりません。

お手洗いへ行かされたときの、なんという苦しさ、恥ずかしさ。誰かに裾を、まくり上げてもらい、ウンウンいいながら腰を折って



しゃがむのです。むき玉子のような白いお尻が丸見えになっている。用を足せば他人の手で始末をしてもらわなければならない。花嫁姿の姉さま人形は、羞恥の極で全身がほてり衣裳の暑さも手伝って、火の玉のようになってしまっしょう。

まだ物足りない方は、あといくらでも『吊り責め』『開股縛り』『衣桁磔』など、お好きなプレイで、この美しくも残酷な責め衣裳の『花嫁人形』の美を鑑賞して下さい。

意地悪責めの着付け ②

「花嫁こけし」

1、姉さま人形の4まで同じです。ここで両腕を胴に固定し、その上から振袖を着せま

2、形がととのったら、帯を締めて、でき上がりです。

『姉さま人形』と『花嫁こけし』の、ちがいは、振袖を着せてから手を縛るか、手を縛ってから振袖を着せるかの、ちがいで、モデルの女性は両腕の自由を奪われる点で、ちがいはありませんが、手が振袖の下になる、『花嫁こけし』では、腰の折り曲げのとき、手首も一緒に曲げられるため、あまり無理をすると危険です。『こけし』のときは、立ちん棒か吊り責めで、いじめてあげるのが良いと思います。

長襦袢のところで巾広の夏帯を使うのは緊縛効果を上げるためで、広い帯の上から伊達巻きで締め上げますと、かんたんには、ゆるまず、ちょうど金属製の棒でも締められたような感じで、女体の受ける圧迫感は大変なものです。

この『姉さま人形』にフルコースのお食事をとらせたり、何回も階段の昇り降りをさせるなど、意地悪責めの夢はつきませんが、余り長くなりますので、今回は、これで終わりたいします。



カット・岡

たかし

☆ドキュメンタリー・フィクション☆

ハード・ボイルド・S M

WHY・SPOT・ON・ME?

みはら・ひろし

☆

俺はジュリアの部屋に三泊続け、彼女の部屋から勤めに通った。驚いたことは、ジュリアは処女——すくなくとも、本人がそうだったのだ——だった。

ポップが出て行ったあと、いつの間にか、俺とジュリアは抱き合っ
て、唇を重ねていた。そして、ぎこちないながらも、激情こもっ
た二人の愛の行為が終わったあと彼女が、そうだったのだ。

「絶対に私を離さないで。一緒に日本に連れて行ってね」

彼女は俺に、ひしとしがみつき、俺は彼女のショート・カットの
栗色の髪の毛を愛撫しながら、どんなことがあっても、彼女と結婚
するんだ、と自分に云い聞かせていた。

彼女は俺に対して春のそよ風のように、やさしくしてくれた。

二人は夏の嵐のように激しく愛し合った。

俺は新婚の気分に、ひたった。

事務所です仕事していても、頭の中には、ジュリアのことしかなかった。愛蓮アイリンのことは、すっかり念頭を去っていたのだ。

俺が愛蓮アイリンの部屋に戻ったのは、四日目の夕方だった。愛蓮は鏡台の前に坐って唇を塗っていた。彼女は細い吊り上がった眼で、じろりと俺を睨んだ。

彼女の俺に対する眼差しは、いつでも、それは、けいべつでも嫌悪すらでもなく、憎悪そのものが、むきだされる。

なんで俺を、そんなに憎むのか、俺に、はっきりしたことが、わかる訳ないが、愛蓮は自分が白人の目を相手にすることで、そして白人の男達は、形式的には、女を大事に扱うから、なおのこと、自分も白人と同じレベルであるという優越感を味わい、その唯一の優越感を、自分と同種族である俺の存在が幻滅させ続けるのが、心底氣にくわないのだと思う。

そんなことは、ともかくとして、いま、愛蓮が俺を睨んだ眼には憎悪の色がなかった。

「白人女と一緒にだったんだってね。知ってるのよ」

彼女は悲し気に云った。

「その女のところに、怒鳴りこんでやろうかと思ったけど、よししたわ。あなたは、きつと戻ってきてくれると思ったから。あたしも、いろいろ反省したの。ほんとに、あなたは、よく尽してくれたわ。やっぱり、あたしたちは、あたしたち同士で一緒にならないと、結局うまくゆかないわ。そりや、遊ぶには白人相手だって、いいけどね。でも、もう遊びなんてやめて、ほんとに、まじめに先のことを考えるべきだわ。あなたは、あんなに、あたしに尽してくれたのにあたしはいい気になり過ぎてたと思う。お金を要求しすぎた面もあるわ。でも、あたしにとって相手の愛情の深さを確かめるのに、相手の出してくれる、お金を判断の基準にする習慣が、もう長いこと身についてるのよ。だけど、もう、要求しないから……」

愛蓮アイリンは化粧台の前から、じゅうたんの上をにじりよって、ベッドの端に腰をおろしている俺の前に坐り、俺の太腿に手をかけて俺を見上げた。

指で押し潰したように低い鼻。二つの鼻孔が殆ど正面を向いて、ぽっかり、あいている。厚い唇が、ひび割れて、塗りかけたルージュが、まるで垢のように、こびりついているという感じだ。

「ねえ、ここに一緒に、ずっと住んでくれるなら、もう何もお金、要求しない。オナラだって、ただで嗅がしてあげる。それに、あなたの望み通り、オシッコもウンコも、直接、あなたの口の中にしてあげる。ねえ、だからここで一緒に棲んで……」

彼女は、そこで、ちよつと、ためらうようにしてから、唇をとがらせて、ぺっ、と俺の顔に唾を吐きかけた。

「ただなのよ……」

俺は、戦時中、動物園で、もう何日も餌えさが切れた飢えた象が、そうすれば、餌がもらえるんだと信じて、自分から必死に後足で立ったり、逆立ちしたり、芸をしてみせた、という話を思い出した。

俺は立ち上がって、胸のハンカチを、とり出して顔を拭いた。

その象は結局、射ち殺された、と聞いた。

愛蓮アイリンは目を見開き、何か叫ぶように口を開けて、大きく息を吸い込んだ。俺の両手が彼女の首に、がっちり喰いついた。

☆

一千万円を超す使い込み、そして殺人。

その尻尾を握られていたら、いいなりにならないで何とかしようという方が、どうかしている。

ボブが楽しそうに穴を掘っている。密林^{ジャングル}の奥の沼地だ。もうボブの腰から下は、穴の中にかくれている。俺を埋める穴だそうさ。

「……しかし、中央情報局で開発した『人間行動指向設定』の理論が、こうまで、ぴったりと結果を出すとは驚いたよ。君のあらゆる生活環境、性格、嗜好を調べ上げ、これに適合した資料^{データ}を提供してやる。そうすると、君はまさに、こっちが、あらかじめプログラミングに組んだ通りの行動をしてくれた。という訳だ。タイミングもぴたりだ。実は東京の我々の組織からソ連の諜報破壊活動班が君に関する、あらゆる調査に動いている、という情報を随分、以前に入手したんだが、その目的が、どうしても判らなかつた。確かに君は商社員としては優秀な腕利きだが、それだけのことで、今迄の調査では、諜報関係の線は全く出てこなかつた。しかし、ソ連の組織が何らかの意味、或は目的で、君に目をつけていることは確かなので我々は君をワナにかけた。君のとびつきそうな女を用意する。女は君から金を絞り立てる。そして——破局だ。ただ、目算が狂ったのは、ここまでお膳立てをととのえてやったのに、ソ連側が全く反応を示さないことだ。女の死体は我々が始末してやった。テロや誘拐が、日常茶飯事となってるサイゴンで、淫売女の一人が、急に姿を消したって、問題じゃない。それに君の使い込みの穴も、我々が埋めておいた。そして、君自身は、踏査団の一行と共に、ボートが転覆して行方不明、と、ここまでは筋書き通りだ。しかし、それでもソ連側からは何の手ごたえもない。或は、我々のやって来たことは無駄だったのかも知れない。ソ連は、もう君を必要としなくなった

のかも知れない。いずれにしても、君はソ連側に対する餌としての役に立たなかつたし、それはとも角、君がソ連側にとって、何らかの為の目的の対象であったことは事実だから、ここで君を消してしまふべきである、との結論がでたのだ。踏査団の連中と一緒に溺死してもらっても、よかったんだが、ジュリアが、どうしても君に対して、腹いせをしないことには気がすまぬ、というのでね。相当ひどい、なぶり殺しにされることになるだろう。ところで、そう恨めしそうな顔をしないでくれ。これが小説だと、主人公が絶対絶命の破目に追い込まれる。そこで悪玉が、得意気に、手のうちのからくりを、ぶちまける。主人公は、超人的な活躍をして難局を切り抜ける事件は、一挙に解決。めでたし、めでたし、ということになるんだろうが、これは小説ではない。それに、君は主人公という役割じゃないんだ。残念だが端役に過ぎんのだよ」

俺は縛られた両手を木の枝に吊られて、ぶらさがっていた。穴はもうボブの首にまで達していた。

ボブは最後のひとすくいをしてから、スコップを放り出した。

「どうやら、端役は、ひとりだけじゃなさそうね」

穴の縁に立って、それまでボブの土掘り作業を黙って見ていたジュリアが、穴の中のボブにピストルの狙いをつけたまま、俺の方に寄って来て、俺の縛られた両手の縄を、左手を使ってナイフで切り放した。

「自ら墓穴を掘るっていうけど、折角、掘ったんだから、そのまま一生、入って貰うことにするわ。ボブ」

「オ、オイ、悪い冗談は、よしてくれよ」

ボブは穴の端に両手をかけて這い出そうとした。



「こういうのを冗談というんなら」
ぶしゅっ——。

サイレンサーに消されたピストルの発射音がして、ボブは、ひい
っ大悲鳴を上げて、左の耳を押えた。

指の間から血が流れ落ちる。ボブはまた、穴の中にずり落ちた。

「もっと続けて上げてもいいわよ」

ジュリアはピストルを上げて、今度はボブの右耳を狙った。ボブ
が慌てて、穴の中に首を引っこめた。

「ロッシィ、そのスコップを使って、穴をお埋め！」

ジュリアが俺に命令する。

「ひいっ、ゆ、許してくれ。許してくれっ！……」

泣き叫ぶボブを無視して、俺は穴のわきに盛り上げられている土
を、スコップですくっては、穴の中に放り込んで行った。

ジュリアは、無表情に、つつ立ったまま。しかし、風向きは変
わったらしい。

穴は殆ど埋められて、ボブの首と、それから二本の手が手首から

先が土の中から生えた全く別の生き物のように、うごめいている。

ジュリアが歩み寄って、ブーツで、ボブの首と二本の手首の生え
出している軟い土を踏み固めはじめた。

「ジュリア……。どうして、俺をこんな目に！ お願い
だ、助けてくれ」

涙と血と泥で汚れたボブの首が、哀願し、二本の手が、ジュリア
の足に、すがりついた。

「まだ、冗談を続けたい気なの？」

ぶしゅっ、また音がして、今度はボブの右の耳から血が、とび
散った。

ジュリアは、ボブの首の真正面、殆ど三十センチも離れてないと
ころに両足を開いて立ちほだった。

「いのちを助けて欲しかったら……」

首を見下ろしながら、ジュリアが残酷そうな笑みを浮かべた。

「両手を合わせて、わたしを拝みなさい。何も、ほかのことは考え
ず、ほんとうに、心の底から、わたしを神だと思って、拜んでごら
ん！」

ボブは両手を合わせて、頭上にそびえ立つジュリアを、真摯に祈
るような眼差しで、見上げた。

一分……二分……

ジュリアは楽しむように、足許のボブの首を見下ろしている。

突然——ぶしゅっ、

みたび発射音がして、ボブの額に、ぽっんと黒い穴があいたとみ
るまに、けいれんするように、かくんと首が、うつむき、両手を合
わせたまま、祈るような恰好になった。

「さ、これで端役の出る一幕目は、おしまいだね」

ジュリアが鋭く口笛をふくと、今迄、どこに隠れていたのか、米軍の戦闘服を着て、自動小銃を手にした三人の白人が、姿を現わした。何かの気配を感じて振り向く間もなく、俺は後頭部に激しい衝撃を受けて昏倒した。

☆

独身で、家庭にうるさい係累のないこと。事故とか、なんとかで本人の姿を抹消させても大して問題にならないような環境に居ること。それに本人がある素質を有している事。こういった条件から、ソ連の組織は俺に目を付けたのだ。

米側に察知されたことは、いち早く、逆情報で流れてきた、中央情報局には、ジュリア以外にもソ連側の組織の人間が入り込んでいたのだ。

俺は米側の手で、つまり米側の送り込んだボブとジュリアの手で消されたことになった。踏査団ボートの転覆事故である。直ちにソ連側の報復措置がとられた。

ボブとジュリアは拉致されて、ボブは惨殺され、ジュリアは九死に一生を得て逃げ帰った、という筋書きが、その通り実行された。

俺が送り込まれたのは、モスコワ郊外の洗脳訓練所である。

まず基礎訓練が一カ月。普通は、これに三カ月はかけるのだが、ソ連側は時間に迫られていた。この基礎訓練を受けるにも、素質が必要で、素質がなければ訓練の効果はあがらない。

俺の訓練にあたったのは、イルマという調教師である。三カ月の訓練を一カ月であげようというので、彼女の仕込みは猛烈だった。全身を包む黒く光るゴムの調教服とヒールの高い革のブーツで、

俺の調教を担当したイルマは、一米九十糎近い大女で、日本人専門だった。既に彼女の調教を受けた日本人の男が十数人いるというところだったが、日本に駐在して任務についていた彼女が、俺の調教の為に、呼び戻されて、一時帰国してきたのである。

イルマと俺は、一カ月を、俺の調教の為に割当てられた一室から二人とも一歩も外に出ずに過ごした。

一室といっても、その広い部屋は二つに分けられていて、イルマの居住する半分は、ちょうどホテルの一室と同じで、床にはカーペットが敷き詰められ、隅の方にベッドとテーブルや応接セット、安楽椅子などの調度品、それに、バス、トイレ、洗面所が作りつけになっていた。

俺の方は板張りの床で、隅の一角にコンクリートのピットがあった。天井には滑車が、はめこまれていて、鎖が下がっている。

部屋は四方を厚い防音壁で囲まれ、イルマの居住区劃と俺の方との間には、仕切りはなかった。

俺は全裸で殆ど休む間もなく、イルマの残虐なトレーニングを受けた。俺は全裸ではあったが、手を縛られている訳でもなく、イルマに手向かいするのは自由だったが、鞭一本を武器にするイルマに全く手向かうどころか、徹底的な恐怖を、いやというほど、思い知らされた。

イルマには、彼女の居住区側にある唯一のドアから、時間になると食事が差し入れられたし、ベッドの傍にある冷蔵庫の中には、冷たい飲物やビールなどが準備されていて、彼女はテーブルに向かつて食事をし、トレーニングのあいまには、よくビールをラップ飲みしたが、俺に対しては、飲食物は一切、与えられなかった。

俺はコンクリートのピットにしゃがんで、イルマの見ている前で犬のように排便せねばならなかった。

「もっと、って、お願いおし！」

全身に鞭を浴びて、お許しを乞いながら、床の上を這いずって逃げる俺に、イルマの冷たい声がとぶ。

「いうことが、きけないのかい？」

俺の背中に、焼けつくような一撃、二撃、そして、三撃……。

俺は激痛に耐えかねて、いわれた、せりふを口にする。

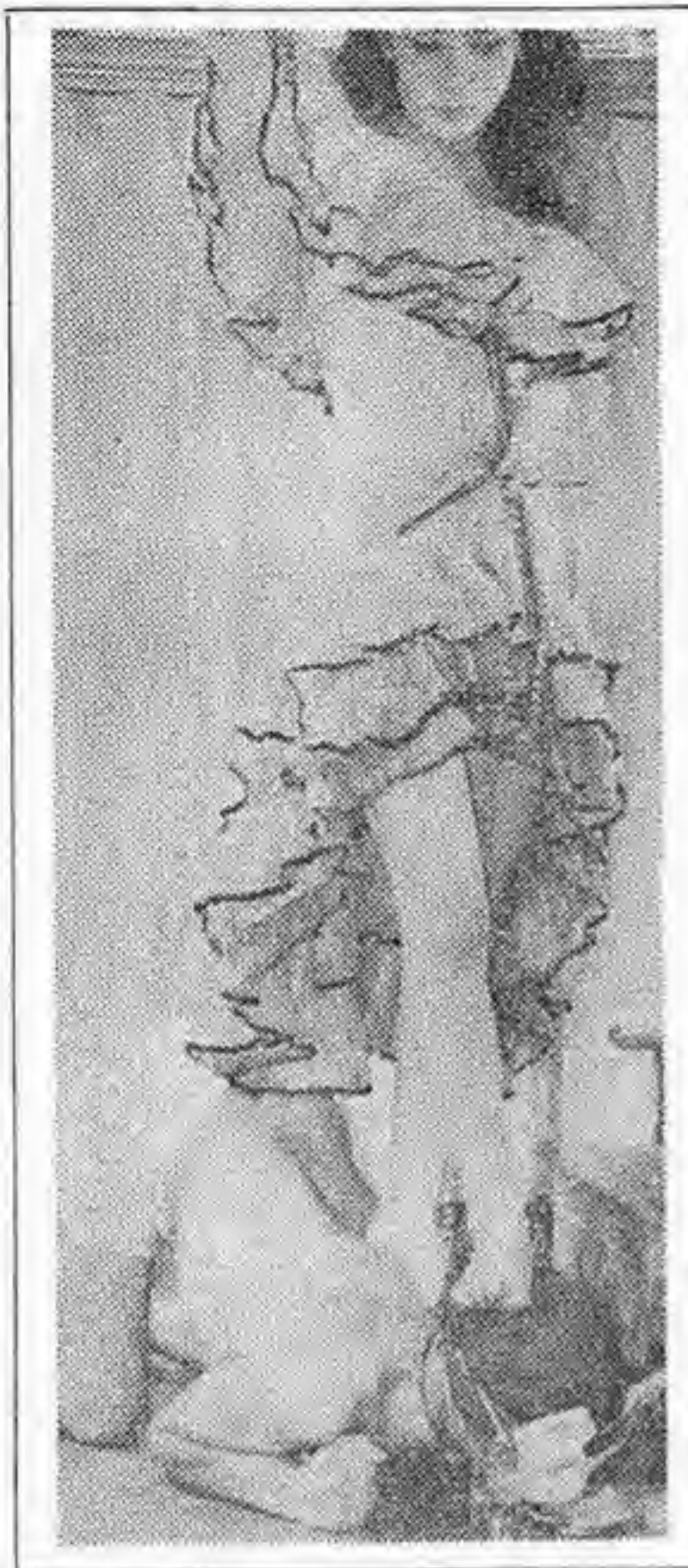
「もっと、って、何を！」

また一撃！

「ど、どうぞ、もっと、鞭打って！」

「ふうん、これだけ打たれて、もっとやってほしいのかい。ようしじゃあ、望みどおり、さあ、どうだっ！ これでもかっ！」

「あうっ、ひいっ、お、お許し……下さいっ……。ひいっ……」
「もっと、って、お願いおし。もっと、強くって！」



イルマの非情な命令。

「ああっ、うっ、ひいっ、も、もう、止めて……お、お願い……」

「まだ、あたしのかわさが、わからないんだね。いうことがきけないんなら、思い知らしてやるから……。それ！ どうだっ」

「ああっ、ど、どうぞ、もっと……もっと、強く、鞭打って……」

「あら、そうなの。まだ、てぬるいってんだね。ようし、だったらもう、手加減なんかしないわよ」

俺は悲鳴をあげて、床の上を、のたうちまわる。

「お礼！ お礼は、どうしたのっ！」

俺は鞭の嵐の下で悲鳴をあげながら、お礼の言葉を、つぶやく。

打たれて、そんなに有難いんなら、お情けだから、もっと鞭打ってやる。と、イルマの意地の悪いトレーニングは延々と続くのだ。

打ち疲れると、彼女は俺を鎖につないで、天井から吊っておいてベッドに横になる。

まず、喉の渇きが耐え難いほどになり、俺は息を、ぜいぜいと喘がせて苦しんだが、そんな俺の前で、イルマは、うまそうにビールを飲み、音をたてて便器に放尿した。

二日目になり、鞭を浴びて頻死の俺を仰向けにして、口に大きなプラスチックのじょうごを、くわえさせた上に、またがったイルマが放尿してくれた時、それが俺にとっては、いのちを救ってくれるこの世、最高の甘露に思えた。

同じように、俺が餓え切って、目がかすみ鞭打たれても反応出来ないほどに消耗しつくしたときに、じょうごにまたがって、食べさせてくれたイルマのからだを通過して排泄されたものが、俺としては彼女の前に土下座して、泣きすがって哀願したあげくの感涙にむ

せぶ、御下賜品となった。

「ふっふふ、お前も、とうとう、あたしの便器の仲間入りさ」

一カ月経って、イルマが俺をさげすみきった目でみていったが、俺はもう、彼女の便器であることを心から望むようになっていた。

☆

続いて、実地訓練の二カ月。

まず俺は髪型を変えられ、両眼にはコンタクトレンズをはめこまれて、強度の近眼にさせられた上で、度の強い部厚い眼鏡をかけさせられた。

頬にはプラスチックを注入され唇は手術で薄く切りつめられた。

歯は全部、削がれて、黄色いプラスチックの歯並みの悪い不揃いの義歯を、はめこまれ金歯を入れた。

スクリーンには、このように変身させられた俺とそっくりの男が写し出され、歩き回っていた。

テーブルの上には、その男の書いた書類。俺はこの男の歩きぶりから、動作、筆跡、しゃべり方、一切を完璧なまでに身につけさせられた。

その男が、友人や家族に書いた手紙は、全部、写しがとられていて、その男の交友、家族との関係、ものの考え方、文章の書き方で、徹底的に仕込まれた。

その男は、紅花商事のモスコ駐在員だった。俺は、この男と、そっくり入れ変わらねばならない。その男は、どうなるのだろう、などと構う余裕はない。

俺は、ソ連が食糧難であること、米国から小麦や雑穀類の輸入意図があること。しかし米国に於ける集荷、積み出し、或は決済方法

などの問題から、クッションとして、こうした操作に熟達した日本商社を起用しようとの動きがあることなどを、しかるべき情報源をあげて、東京の紅花本社に流した。

本社からは、担当重役が出張してきた。

俺は現地駐在員として、身代りの役を見事にこなし、重役はソ連の食糧大臣との会談の後、米国にとんだ。米国産麦の大量買い付けは成功したが、俺にはソ連の目的などは興味ない。

一カ月の基礎訓練の役目を終えたイルマは既に日本に、戻っている。日本にいる彼女に仕込まれた他の黄色い便器^{ジャパニーズ・スレイプ}どもを管理する為である。

昨日、紅花商事モスコ駐在員だった男の妻と一人息子が、交通事故で即死したとのテレックスが、紅花本社から俺宛てに入った。

これで俺は内地に帰国する事になるが、俺の次の任務は、日本国内の米の買い占めである。これも、その目的は俺には、どうでもよい。日本に帰ったら、任務を遂行している限り一週間に一度だけ、イルマに便器として、使って貰えるのだ。

鞭打たれ、踏みにじられながら、彼女の足許に這いよって哀願のあげく――。その味だけが、今の俺の生き甲斐になってしまった。

モスコ発、羽田行きの明朝の便がブックしてある。

俺は妻子を不慮の事故で失くした不幸な男の役を演じねばならない。

俺が、その役目をうまくやれば、必ずイルマから呼び出しがある筈だ。



女 と 男 の 散 文 詩

あ る 体 験

古 井 哲 哉

カズの部屋

春の社内旅行も、T観光の貸切バスがB町の角までくると全員下車で解散した。

バスの中で飲み過ぎて、どうにか、それまで辛抱していたが、外の冷気にあたったのと解放感から、尿意は急に激しくなった。

夜、十一時。小さな街の商店街は殆ど表戸を閉じ、ところどころにネオンが点滅する程度で、人通りは全くない。

路地を少し入って溝をまたぐと、悠々と事をすませた。

暗がり目が見えなると、少し向こうで三人が、しゃがんでいるのが見えた。私の方が終わる頃次々と立ち上がったのを見たが、さほど気にも止めずに元の道へ戻ろうとした時、「ちょっと、ちょっと」

若い女の声背後から受けた。

立ち止まった一瞬、私は三人の娘達に囲まれてしまった。一人は小さいが他の二人は私より五センチ以上は大きいジャンボ女性だ。

私の前の一人が、男物のGパンのチャックを下ろした。暗がりの中でも、その中身が生まれたままの姿で、何一つ、下着をつけていないのが、わかる。

私はドンとした。狐に化かされているのではないかと、自分の顔をつねってみるまでには、かなり時間を要した程、一瞬の出来事である。

「うちら、今夜は、あぶれてヒンケツなの。何か食べさせてよ。そしたら、三人で楽しませてやってもいいわ」

「……………」

「どうなのよ。少し位、お金持ってんやろ。」

それとも、うちに恥かかす気なんか？」

「いいよ、少し位は、まだある。今日、旅行で帰ってきたばかりやさかい、心細いけど、ラーメン位なら一緒に食べてもええ」

「チー、シケてんのやなあ。まあ、ええわ。」

ラーメンでもないよりましや。なあエツ子」彼女達は、私を囲むようにして、表通りへ出ると、さっさと屋台に首を、つつ込んだ。

先ず、酒やかんに目をつけると、

「おっさん、それ一杯ずつ、入れてんか」

一番、小さい娘が言った。

またたくうちに、酒、おでん、ラーメンと食欲は凄い。一金壱千七百四十円也を支払って、そこを出るのに、三十分とは、かからなかった。

「トン子、どこへ行こうか。三人分のドヤ代払わせるより、その分、小遣いにもらっちゃ

「おうよ」(勝手なことを言ってるやがる)

「そうだ、八幡様のお堂がいい」

「いやだ。フーテンじゃあるまいし、それに夜中は、まだ寒いよ」

「カズのところは、どう？　うちがキイ持ってる。あいつ、まだ、二、三日は、富山から帰ってこない筈よ」

「なぜ、それを早く言わないんだ。チビ！」

そのカズのアパートに辿りついたのは、十二時を少し過ぎた頃である。

ホステスやトルコ娘などの多い様子で、まだ、どの部屋も外から南京錠が掛けられてあって、留守の部屋が多い。

通り道の廊下には、処狭しとパンティやネット・ブラジャー等が干してある。

それを手でよけるようにして、一番奥から二つ目の部屋の前で、チビと呼ばれた娘が止まると、南京錠を開けて中に入った。

後から皆がつづく。電灯がついて、上がるが早いか、不意に後から腰のあたりを蹴られて前によろけるように、ひっくり返った。

と、すかさず、トン子が馬のりに、胸の上に尻をおく。トン子はミニの下は何も、はいていなかった。

足もとからチビが、トン子を手伝って、私

のズボンのチャックに手をかけると、ブリーフごと、脱がしてしまった。

エッチちゃんが、大きな足で、両手を二の腕のところで踏みつけている為、私の掌は次第にシビレてくる。

チビは私の坊やを思いきり吸い込んで、舌で可愛がってから、ブリーフのゴムをちぎって抜くと、それで、坊やの首を、ぐるぐる巻きつけてきた。

坊やにお化粧してやると言って、口紅をつけたり、ミルクをあげると言って、オロナインのチューブの先を坊やの口につけると、中へオロナインを、しぼり込んできた。

よだれを出すと、行儀の悪いのは、親のしつけが悪いからだといって、それをチリ紙にとって、私の口にねじ込んでくる。

娘のよだれはいいが、坊やのは、どうも苦手であるが、この場合、どうすることも出来なかった。

坊やの方は、すぐくいじめられているので紫色に変色し、鼻血さえ出そうな状態になっている。このまま居ては、何をされるか解らない。

考え抜いた末に、トイレに行くと言って、エッチちゃんのGパンを借りて部屋を出た。

トイレどころの騒ぎではない。彼女達を後にして、スタコラサと帰途についた。

半分は心残りもあり、またとないチャンスのようにも思えたのだが――。

後日、朝、回り道をして、そっと、そのアパートの近くまで行ってみたら、カズの部屋の外には、窓からロープを張って吊ってあった黒のスリッパや黄色のビキニ、水玉のパンティ等が風に、ゆれていた。

カズも、あの三人のようなズベ公かも知れない。今朝も誰かを連れこんで、彼女達は楽しんだ後を、寝こんでいるような気がしたがそのまま通りすぎてF化成の門をくぐった。

どの顔も皆、至極真面目そうな顔をしているが、この娘達の中にも、ひよっとしたら、あの三人のような夜の牝豹が、爪をといでいるかもしれない。

お互いに、その機会にめぐりあえないだけで――。

恵子の思い出

「男世帯に蛆がわく」

などという諺があるが、どうして、どうして、ものぐさ女性にかかっては、その比ではない。

紡績の女従業員の寄宿舎や、一人暮らしのホステス、ナース寮の天使たちの中には、おどろくほど放漫な娘が居るもので、それも美人程、ものぐさが多いようである。

シワだらけのシーツに、体液のしるしのついたと、あきらかに思えるのを平気で使っている娘や、三面鏡の角には、生乾きのパンティが、ひっかけてあったり、押入れの中は、汚れたままの下着がつっ込んであったり、アンネのついたスリッパ一枚で、ガムを噛みながら、化粧に熱中していて、人が入って来ても気付かないでいるのもいる。

「もう、はじまったの？」

「どうも、昨日から気分が悪いと思っていたら、早々とお客さんやわ。ちーとも、知らなかった」

などと、人に聞かれてもスマシ顔の娘もいる。けれど、本当は、そんなものぐさ娘の方が、飾り気がなくて、フラッパーで、悪意など爪の先程もないので私は好きだ。

肝臓を悪くして、二年程前に、L病院に入院していた時、しばらく交際していた恵子は丁度、そんなタイプの娘だった。

病人の制服であるパジャマと、ネグリジェのまま、近くの川原へ、よく散歩にも出て、

いつとはなしに、最後の線を越してしまったが、院内で恵子の部屋で遊ぶときは、いつも内から錠をかけてしまう事にしてあった。

ベッドの下へ、恵子のスリッパを並べやると、必ず私の頭か背中に、一度、足をのせてから、私に片方ずつとらせて、足を入れてくる。

わざと足の裏をくすぐってみたりすると、そのはずみで、足先で私の顔を蹴ったり、口の中へ指を入れてきたりする。いたずら好きの恵子。

その時の白い足、可愛い指が、今でも頭の中に浮かんでくるようだ。

一枚敷いてある、付添人用の畳の上に坐って、菓子や果物を食べながら、花札をしたり脚相撲をとったりして戯れて楽しんだ。

そんな時も、食事の時と同じように、恵子は必ず胡坐を組んでいた。

ネグリジェから、はだけて見える雪のように白い肌。パンティから、はみ出た若草。実にすばらしかった。

トリコモナスの為に、いつも指でさわることも手伝って、パンティはすぐに汚れる。何時も汚れたままのが、まるめてベッドの布団の下に、つつ込んであったが、それを部屋を

出るとき、そっと、私のブリーフの中へ、かくしてきて、夜中、それをかぶって芳香にひたったり、口に入れて少しずつ吸いとりながら寝るのが一番たのしい一刻であった。

アンネが近づくとき荒っぽくなり、少しでも自分の気にいらぬことを言われたりすると、私の部屋で遊んでいるときでも、私の背にのりかかってきて、両股で首をしめつけたり、私の顔の上にパンティのままのヒップを、どかりと降ろしたりした。

私のパジャマの前を開いて、臍の中へクリンシングクリームをつめてから、マッチの棒に脱脂綿を巻きつけてゴマとりをするやら、坊やにふざけたりした。

そんな時、次第に恵子のパンティも濡れてきて、顔一面にべっとりつけられるのが常である。私の舌運動が一段と激しくなり、舌の付根あたりまでが痛くなるのも、その頃であった。

「夢よ、もう一度」

想いは積れども、今は、もう一児の母となった彼女。余韻のみが、色も淡むらさきと交わって、今日も流れる。

ひたすら、恵子の幸せを祈りつつ――。

――(おわり)――

双 胴 船

深い深い水底で、もがいている悪夢が続いていた。呼吸が苦しい。それなのに、いつまでもたっても水面に浮かび上がれないのだ。

チクツとした痛みが走った。同時に遠くの方で有明の声が聞こえてきた。

「しっかり、しっかり……」

あおむけに寝かされているようだ。そして床がムクムクと揺れ動いている。

「あ——」

あわてて百合子は上体を起こそうとした。

支えようとした掌が、やわらかな乳房を掴んでしまった。

「イヤッ」

はずかしさに、こらえかねて、いそいで手をはなして顔を覆った。そのため、かえって倒れそうになるのを、有明がガツシリと抱きかかえた。百合子には、もう男の手を避けようとする気力さえ、残っていない。

それなのに上体を起こされた途端、腹圧がかかった故か、ああ、又しても例の不快音が「ブウウ——」

高らかに鳴り響いたではないか。赤い輝はまだ外されてなかった。そればかりか、百合



第六十回

前号までⅡ秘密裸女王国の独裁主有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強要している。彼女等は、その「材質」に応じて五段七階級に分類され巧妙な統制管理を受けている。有明の日本人至上主義により、他人種の蒙るハンディは大きい。今有明の関心は、F号作戦で彼が獲得した最高の美女、山本百合子を如何に馴致するかにかかっている。百合子も又、数カ月に亘る異常な体験の連続から、次第にこの王国の持つ奇怪な雰囲気と異としくなりはじめていた。このことは有明に對する慕情に転換されて、一層その傾斜を強めつつあったといえよう。

子の衣紋には乱れ一つ、ない。

真赤になった百合子は、それでも、お召しの裾をあらためて、正座しようとしたけれど、蠕動をくりかえす人肌の上では、何としても坐り心地が悪い。

「ハッハッハ。こんなところじゃあ、チャンと坐ろうとしたってダメだ」

その通り、有明は、もう足を投げ出して寝そべってしまったている。

百合子が失神したのも無理からぬことと言いたい。それ程、この双胴船の甲板は異様だった。十メートル四方の甲板には、ビッシリと裸女がハリツケられていて、さながら人肌のカーペットを形づくっていたからである。

強化ガラスの甲板に、美畜は首とVとをロックされている。そして、その両手両足は、強化ガラスにあけられた大小の穴を通して、根元まで下面に突き出さされる。さらに夫々の手首には50センチ程の櫂が、又、夫々の足首には例の鰭が永久ロックされていて、これらで直下の水面を掻いで船を進ませる仕組みだった。その上、彼女たちは頭部まで、その位置に穿たれた穴から下面に差入れることを強要されている。胴体は隙間がないようにビ

ッシリ一列に並べられるから、勢い、極度にうつむいた襟首のあたりを、前の女体を肩車にしているような具合になる。

鞘から舳にかけて、白い脊中の列が幾列となく並ぶ。そして列間を埋めるように、今度は仰臥した裸女が並べられていた。

アマゾン女兵の一人が、大きな太鼓をドーンと叩く。その音につれて美畜の手足は、あたかも一体となったように整々と動いた。

余談になるが、仰臥した女体と伏臥した女体では身分が違うのである。前者は肉体家具となるべき物位（最下位）の女囚だし、後者は、ウマと呼ばれる畜位女囚に分類される。前者が動くことすら許されないのに比べて、後者は手足が動かせるだけ、まだしもというべきであろう。

あかるく照明され、しかも透き通った水を切りわけながら双胴船はドッシリと進んだ。激しい労働だった。うつ伏せになった女体はムクムクした振動を単調に繰り返しているように見えたが、その実、もう全員が息を切らしていたのである。哀れにも彼女たちは船の動力であると同時に、物位女囚とともに自らの脊中を甲板として捧げていた。

滝のような汗が流れてガラス板を濡らし、それがかえって四肢の動きを滑らかにしていた。不思議なことに、汗は圧迫された面に、よけい、かくような生理がある。だから、甲板となった脊中は、それ程しめりが来ないのだけれど、次第に体温が上昇してくるのと、肌に赤味がさしたことで、疲労の程度を付度（そんたく）することが出来た。

合唱の声がハタと止んで、岩上に腰かけていたサカナ（人魚）が、一斉に水の中に、とび込むのが見えた。さつきからの歌声は、彼女たちの合唱だったのである。普通、畜位物の女体は発生機能をロックしてしまうことになっていて。しかし、サカナだけは特別で鉄のグループ専用の声帯枷（声帯にハメ込んでしまう小さなステンレス製の金具）の装着を免れている。有明がサカナを造ることにしたとき、彼はローレイの人魚を思い浮かべていたという。それと同じような理由から、普通だったら、ツルツルに剃られてしまう筈なのに、逆に出来るだけ長髪を伸ばすよう要求されている。

ホンの僅かな下腹部の傷、それだけのハンディが美囚達に想像を絶する差異を与えてい

る。又、それだけに露出した上体は、信じられない程の美しさだった。まことに、ラインを下る漁師たちを狂わせたのは、このような人魚かと思うばかりである。

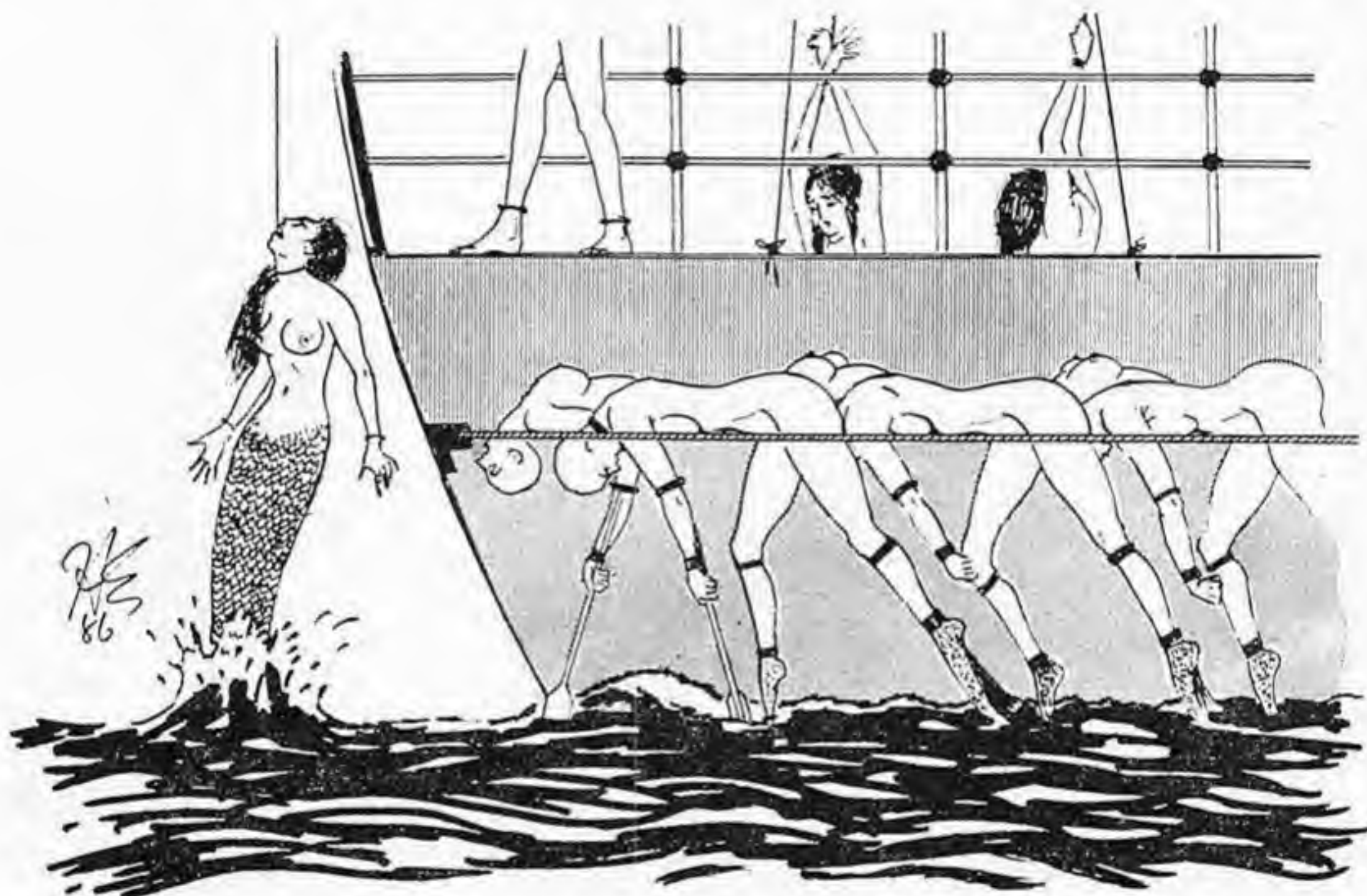
人魚たちは双胴船に近づき、そのあとを群がって泳ぎはじめた。二百を超す美しいサカナの群れが、水に濡れて艶々と輝く肌を摺り合わせるようにして明るい水面を浮き沈みする光景は、この世のものとは思われぬ壮観だった。

有明にうながされて、百合子は船尾の端に坐った。太い釣竿が設けられている。大鰐を釣るときのように頑丈なものだった。

「舟遊びと言ったのは、このことなんだ」

有明は釣りの仕方を教えた。細いワイヤーの吊り糸は百キロの力でも切れないこと。ボタンの操作一つで、吊り糸が伸縮自在であること、等々だった。

「餌は、これだ」



と言われて一目、見た百合子は、忽ち顔を赤くして、うつむいてしまった。プラスチック製のらしいが、それは男形をリアルに形どっていたのである。

「コレで釣れるんだから奇妙なものだ」

有明はニヤリと笑いながら、つぶやく。そんなことがあっていいものだろうか。誰が、このような馬鹿らしいエサに、とびつくものか。

心の中で、そう言いきかせる百合子を見無視して、有明は二人分のエサを水面に投げ込んだ。スルスルと吊り糸が伸びて行く。

百合子は、果然と目を瞠っていた。

信じ難い現象だった。群がる人魚たちが、たった二個のイヤらしい餌に向かって、争って飛びついて行くではないか。

はげしい斗いだった。水音と叫喚が水面に爆発する。髪を掴み、首を締め、押しつけ、餌に殺到するのである。ラグビーのスクラムを組んだように、裸の脊中が入り組んで、水面に躍りあがった。

有明は、ワザと糸を操って、容易なことでは餌に喰いつかせないようにジラしていたけれども、何一つ、手をつけていない百合子の方

の釣餌には、忽ち競走に勝った一尾が、ガブリとばかり噛みついた。

「おいッ。ホラ、喰いついたじゃないか」

側から有明が言つて、百合子の握っていたボタンを押させた。

ビューン、とモーターの音がしたかと思うと、餌をくわえた人魚が、激しい水しぶきと共に跳び上がった。両手は自由なのだけれど餌を手で握ることは許されないらしい。

必死に喰らいついている餌に繋がっているワイヤーに吊られて、キラキラ光る裸身が、はげしく揺れ動いて、下半身に植え込まれた金のウロコがサヤサヤと鳴っていた。

それも束の間、人魚の裸身は水しぶきを散らしながら、百合子の頭上を飛び越えて、人肌の甲板に、ドシンと叩きつけられる。太い釣竿のバネは、人間の体重さえ、軽々と跳ねあげたのである。

いくら柔らかな女体の上だからといっても叩きつけられたのでは、たまらない。美しいサカナは一声高く叫んだかと思うと、ぐったりと伸びてしまった。

アマゾン女兵が一人、乳や臀の上を平気で踏みつけながら近づいて人魚に活を入れた。

そして素早く両手首を一つにまとめて縛り、縄尻を持ってズルズル引きずって行き、エイとばかりに船縁の外に投げ出す。あらかじめ縄を舷側の手すりに結びつけておいたから、サカナは舷側甲板から一寸、顔を出した位置に真っ直ぐ手をのばしてブラ下がった。

獲物は、つぎつぎに、こうして舷に吊り上げられるのである。百合子の釣竿（といっても百合子は、ただオロオロとするばかりで実際には何一つ、出来なかったのだが）には、続けさまに三尾もかかったというのに、有明は一つも釣りあげなかった。というのも、意地悪く糸を引いたり伸ばしたりするものだから折角、喰いついた人魚も、思わず餌に逃げられてしまうのである。

「ここでは、なかなか釣りあげないことを競走するのだよ」

と言われて見れば、なる程、三尾も釣りあげた百合子は、何もしなかった自分の為に捕えられなくてもよい美しいサカナに、あたら痛む目を見せてしまったことが気の毒に思われ、よし、これから出来るだけ餌に喰いつけないように糸を操作しようと、急に熱心になるのだった。

それからは、二人とも、なかなか釣り上げなくなってしまうたのであるが、サカナの群れはというと、一層はげしく餌に喰いつこうと争い出したのである。

有明は、前から狙っていたこともあって、ミス・フィリップスのペルラ嬢が喰いついたときだけは、糸を引かずにソツと引きあげてやった。実際のところ、尾鰭には股から足首まで、一本のパイプがロックしてあったから当りどころが悪いと肌を痛めつけてしまうのである。そこで、お気に入りサカナは、痛めないように、ソツと下ろしてやる必要がある。

釣りの間中、ドロドロと鳴り響いていた太鼓の音がハタと止んだ。有明が合図をしたからである。その間、凡そ三十分位たったであろうか。

すると、驚いたことに、助かった筈の釣り残しのサカナなども、一斉に悲鳴をあげ、夢中になって島の方へ泳ぎはじめたのである。もう、その頃は島から大分、離れてしまっていたから、一番、早い者でも五分程、力泳しなければならなかった。その一番目のサカナが辛うじて岩の上に這い上がった頃、再び有明の合図があって、今度はラッパの音が高

らかに水面を渡った。

舷側にブラ下がった人魚たちが悲鳴をあげながら、揃って尾鰭を90度、引き上げはじめた。これは大変な作業だった。何故なら、パイプを通しているために膝を曲げることが出来ない。しかも、ソツとやらないと、彎れて痛い。そんな無理をして尾の先を水面から離そうとする理由は何か。

百合子の疑問は、すぐそのあとでハッキリと解答された。

それは余りにも残酷な解答だった。

水面に阿鼻叫喚の聲が、ワンワンと轟きはじめたからである。

水の中に電流が流されたことは直ぐにわかった。死なない程度の電流だったが、それでもサカナ達を襲った苦痛は大変なものだったらしい。手をよじり、顔をゆがめて水面をもがく姿が一層、悲惨だった。

こんなことなら、一人でも多く、引きあげておいてあげればよかったのに——と再び後悔が、こみ上げてくる。はじめて体験した百合子には、胸のつぶれてしまいそうなショックだった。

哀れなサカナたちが、あれ程、狂奔して釣

り上げられようと競った理由も、今はマザマザと思い知らされたのである。

T パ イ プ

昂奮と衝撃に息をハズませている百合子を連れて、有明は漸く、もとの小舟に戻った。来たときは逆に、水門に入ってハッチを閉めると、水面が次第にセリ上がって行く。

ベニスのゴンドラのような、二人乗りの軽舟が、帰りには重く沈んで見えた。それもその筈、有明は何を考えたのか彼が釣りあげたペルラ・ティニオと、もう一人、百合子が釣った白人娘とを舳に、ころがしている。四人プラス漕ぎ女で、五人分の体重がかかったのでは、吃水が深くなるのも当たり前のことであつた。ペルラ達は暴れないように後手に縛られている。足の方は四六時中、縛られているのも同然だったから、手さえ、くくってしまえば、全く自由を奪うことができる。舟底にころがって身動きも出来ないでいる二匹は今や全く諦め切ってしまった様子で、コソとも動かない。固く閉じた瞼のあたりが潤っているのは、水に濡れたのではなく、あとからあとから流れ出てくる泪の故であつた。

昇りつめたところから、狭い水路を通行くと華清湖に出る。その先が東館の池につながっている。

前にも触れたと思うが、この湖は有明と彼が特に許した者以外は何人も立ち入り禁止だった。わずかに、有明が乗る小舟が予備を含めて三艘、配属されている。この三艘を動かすために控えを含めて五人、いや五匹のガリ一畜（漕ぎ女囚）が待機している。これらの基地は、目立たない洞窟の奥に設けてあり、二人の老婆、矛備役要員が管理して、船の手入れ、ガリ一畜の飼育、調教にあたる。したがって、厳密に言えば、この連中だけが、湖の中で生棲を許されたイキモノというべきであらう。

小舟は、ゆっくりと進んで行った。漕ぎ手の意思は全く顧慮されず、ただ有明の指が操作する小さなボタンが電流となって美畜のVに伝わり、その刺戟によって、彼女は左右の掻き足を、あるいは早め、あるいは遅らせて舟の向きを指図通りに交えるのである。

華清湖の真中にも、直径十メートル程の小さな島があつた。小舟を、そこに繫留した有

明は島に置いてあったT字形のパイプを持ち上げた。一メートルのパイプの中央に、ほぼ同じ長さのパイプが直角にとりつけてある。

ヒューッ、ヒューッ。

有明の口笛が湖面を渡って、不気味なエコーとなって帰ってきた。

次の瞬間、何ということだろう。後手に縛られている二匹の人魚が、必死に上体を起こし、相ついで水の中に躍り込んだのである。後手で果たして泳げるのだろうか。いや、それにも増して、口笛の意味する命令が絶対だったであろう。泳げるか泳げないかを考える前に、美畜たちは、先ず主人の命令に従うよう調教されていた。たとえ溺死したとしても、命令に従わなかったときの怖ろしい処罰に比べたら、まだましだったに違いない。

小舟が激しく揺れたので、百合子は舷にしがみついていた。それでも、後手に縛られた人魚たちが、アップアップと、もがき、死にもの狂いで有明の立っているコンクリートの岸边に泳ぎつこうとしている様子を、驚きの表情で追っていたのである。

シンクロ・スイマーだったペルラ・ティニオにしても、もう一人の白人娘、それはヴォ

リュームのあるシドニーの水泳選手だったが二人とも水を得手にしているだけあって、両手両足の自由を封じられている割にしては、辛うじて有明の足もとに、すがり寄ることに成功した。

しゃがみこんだ有明は、たくみにT字型パイプの横棒の両端に、夫々の首輪を繋ぎとめた。そして、縦のパイプの先を小舟の舷にネジ留めする。そこは、ジョイントになっていて、舟の進行方向にのみ、上下出来る。

水の中に手をつ突っ込んだ有明は、こうなっではじめて、二匹の人魚の縛めを解放してやった。

再び、百合子の側に戻った有明は、小舟のちやい綱を外して、舟を湖に乗り出させた。

「ヒューッ」

「ガボッ」

「ワッッ」

舟の前方で、激しい水音とともにペルラとオーストラリア娘との悲鳴が、聞こえはじめた。悲鳴をあげた途端、水に突き込まれてしまいうらしく、その声は、すぐに水を含んだ、くぐもり声に変わってしまう。

まことに簡単な装置だった。しかし、それ

が如何に効果的に、二人を苦しめることになるか、百合子には肝がつぶれる程の驚異だった。今はハッキリと仕組みが了解出来た。

つまり、漕ぎ女（ガリー）が舟を進める。

二人が何もしないでいると、T字形パイプの縦棒が、二人の首を水中に押し込む働きをする。二人が必死に前に進むと、やっこのことで首を水面に出すことが出来る。だから、息をするためには、どうしても舟のスピードより早く、むしろ、舟を引っばるように泳がなければならぬ。ゴンドラのような小舟は、シャープで、よく訓練されたガリーの脚力によって相当な速度が出せるから、人魚たちは夫々、全力をふりしぼって泳がなければならぬのであった。

凡そ三十分程も走り廻ると、二匹の美しい人魚は息も絶え絶えに力尽きて、ともすると沈みっ放しになってしまった。水もタラフク呑んでしまったらしい。

そうやって、はじめて有明は責めるのを止めた。舟は速力をゆるめ、舷からT字パイプが外されグッタリした人魚がコンクリートの島に引きずり上げられる。

夫々の尾鰭にある環にフックが、ひっかけ

られる。シェーンというモーターの音が起って、二匹の人魚は忽ち逆さに吊るされてしまった。小島の中央にあるポールは、デリックの役割も果たしているらしい。

ペルラも、オランダ娘も、鼻や口から、おびただしい水を吐きはじめた。吐くこと自体が余程、苦しいらしく、身をよじり、ありったけの声をふりしぼりながら、それでもとまらずに水を噴き出していた。

百合子は、舟に坐ったまま身動きも出来ず、そのように怖ろしい、地獄図絵のような光景を、恐怖のため、かえって目をそむけることも出来なくなつて、とぼけたように見つめていた。

やっこのことで、水を吐き終えた人魚を、有明は再びコンクリートの上に降ろし、縦パイプの先をポールの根元にある、突起にネジ込んでしまふ。首輪の方はロックだったから合鍵がなければ外せないのだけれど、こちらの端は錠

前でも何でもない、ただ簡単にネジ込んだだけであるのに、二匹の人魚は外そうとしても出来ぬ。何故なら、いくら手を延ばしても、ネジ込みの位置に届かないからである。

このことは、二人に新しい拷問を企てている。というのは、こうして繋ぎ留められてしまふと、尾の部分を水に漬けることは、不可能になる。パンパンに乾いた網が、収縮して人魚の足を、締めつけることは明らかであつた。

た。

それを敏感に知っていたのは、誰よりも当のペルラと豪州娘だった。

口を揃えて哀願するのを、英語だったから百合子は完全に理解出来た。

「オーケー、アイ・ノウ・ザット」

有明が平気で切り返した。

「ウィル・ビー・レスキュード・バイ・ジス・レディ」

人魚の苦しみを助けるのは百合子だと、指さして言うのである。

「君に一つ仕事を与えようと思う」
舟に戻った有明は、泣き叫んでいる二匹の人魚を尻目に、百合子に話しかけた。その間にも、舟は静かに小島を離れて行く。

「あのサカナどもは鰭を乾かしてしまふと、下半身が締めつけられて酷く苦しむ。それを助けてやるのを君の役にしよう。毎日、朝晩ここに来て、あいつらを運動させてやってほしい。なに、どうやってするのかというのかね。それは簡単だ。今さっき、私がやった通りに、舢につない



で、湖面を一まわりするだけでよい」

その一まわりだけでも、あの方たちは死ぬ程の目に遭わされるんでしょう。

百合子は、心の中で思った。

「どうかね。引き受けてくれるかね。ついでに餌をやることも頼む。君がやらなければ、やつらはそれこそ、ヒモノになってしまいうだろう」

例によって、相談でも頼みでもない。まるで脅迫だった。しかし、急速に変化しつつある百合子は、もはや地上的理非を忘れてしまったのか、言葉は出さなかったけれど、幽かにうなずいて承諾の意を示したことだった。

次の日から、百合子の日課が始まった。

明石の局が木戸を開けてくれると、それからは暗いつづれ折りを一人で歩いて行かなければならない。舟着場には、いつも例の小舟がポツンと舫^{もや}っていた。

百合子が乗ると、何もしないでも漕ぎ女は心得たように両足を動かすはじめる。

島に着くと、T字パイプを外してやる。網タイツの収縮で曳いていたサカナたちは、いそいで水に飛び込む。舳にパイプをL型に固定する。そして、有明がやったように、ゆっ

くりと湖を一周するのである。

何日かのうちに、要領を覚えた人魚たちは頭を水に押し込まれることもなく、むしろ、舟を引っ張る位の勢いで泳ぐようになった。運動が終わると、再び小島に戻ってボールの根元に繋ぎ留められるのであるが、そのあとで餌があたえられる。鉄のクラス（畜位、物位）には人並みの食事は与えられない。排泄を少なくするために宇宙食のようなものが作られている。味覚も香りもない小さな丸薬が、それであった。營養価は満たされても、美畜の胃は絶えず空腹感に、さいなまれている。

数日して、椿事が勃発した。

いつもの通り、T字パイプを外し、人魚を水に入れた途端、足を払われた百合子は、体勢を支える暇もなくモロに湖の中に墜ち込んでしまったのである。

やったのはペルラだった。

フィリップスの混血（ハーフ）は、もともと非常に気位が高い。その上、かつて祖父母を日本兵に殺されたという記憶が拭えないまま、彼女は依然として日本人を心の底で憎んでいた。

そこへもってきて、この国での苛酷なまでの理由なき差別は、齒ぎしりする程の口惜しさだった。

それでも、有明によって加えられる責め苦は、まだしも絶対的な力に圧倒されるという意味で、辛うじて納得出来るものがあつた。それなのに、たかが同じ年ぐらいの小娘、それも増むべき日本人に、いのように曳き廻され、餌を与えられることになったのでは、ペルラには何としても、こらえられなかったのである。百合子が、やさしく世話をしてくれればくれるだけ憤懣はますます、つのるのであつた。

そして、とうとう、それが爆発した。

百合子だって相当、泳げるのだけれども、突然のことで動転したのか、ただ夢中で、もがくばかりだった。その上、キチンと着付けをしているので、濡れた衣類が、まとわりついて、据さばきも容易でない。

ギョツと髪の毛を掴まれて、そのまま水底にズ、ズーツと押し込まれた。

したたかに、水を呑んで、忽ち気が遠くなつて行く。

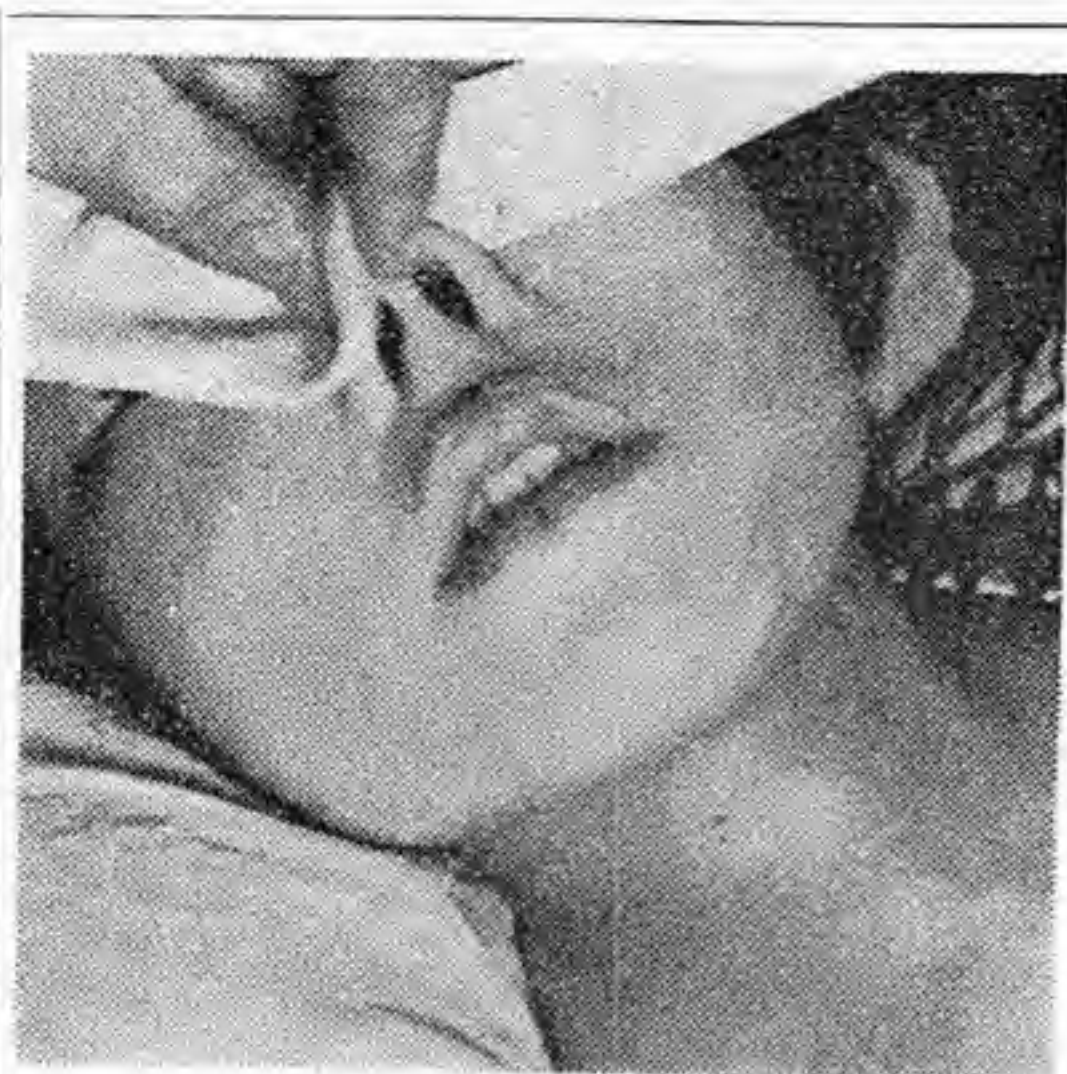
——（未完）——

／＼女の鼻に憑かれた男の手記／＼

鼻への誘い

鼻麻尼会提唱者

久保房夫



ムードに揺れる酒房に於いても、愛欲に二人で濡れ合う密室に於いても、美しい鼻筋見とれる鼻孔の女が、そこに居ることが、私の情念を、たぎらせます。

鼻筋、鼻翼、鼻孔、鼻柱の姿形は、その美しさ、繊細さで、又、鼻孔内粘膜、鼻毛、分泌液の感触（舌触り）などは、その女の体中の状態を感知させ、私の心をゆさぶります。

その鼻の形相を細く観察したり、手に触れて探ることは、その女を裸にしたような立ち入った心境になり、女も亦、自ら全てを晒しものにした幻想に陥って了うのです。

顔の中央に位して隠くすことの出来ない宿命の鼻は、好むと好まざるに拘らず、その女の刻々の感情と心中を全ての男性の面前に晒け出して、どうすることも出来ません。

テレビ画面の美女のアップも、鼻孔の表情をとらえて、生々しさを訴えるものが常道でカメラマンの観点に共感します。

気どって道ゆく女も、昼夜を問わず、その鼻は自らの素っ裸を世の男性の前に晒け出し

放しで、私共を楽しませています。殊に、対話している時、或は密室で行為の時ともなれば、眼前で息づく鼻孔の細かい動きは、全身と全心をブチつけて、私に迫ってくるものがあります。

巧まずして、全裸の状態を物語っている鼻を、私の眼前に晒す彼女たちは、私の意の尽に全身を任せているのと同じです。

女性の誇りとする鼻、自分以外に触れることを避ける美女の鼻（美女ならずとも）を思うままに弄られる彼女は、全くマゾの境地であり、その美しい鼻をいじめて、盆栽のように曲げたり、突き上げたり、装飾したりすることは、男性のサド性を、かきたてます。

鼻頭は性感度が強いところ（訓練によって第一級の性感点になります）で、お互いに意気が合えば、時計も止まったように、時間を忘れて、二人一体の深淵に沈み込んで了います。

どんなに美しい女と言われても、鼻筋、鼻孔が美しくなければ魅力はない。醜い女と言われても、鼻さえ美しければ、凄く美女として迫ってくるものがあります。

私は鼻の美しい女を愛し、その鼻を弄びた



い衝動に駆られます。道を歩いていてもアツと思えば何処までも追って行き、電車中で出会うと下車先も忘れて、その女の全裸の姿を鼻孔の中に描き出して独り興奮状態に陥ります。この鼻を責めたい一念の幻想で、周囲は暗く掻き消されて、鼻孔だけが生物のように眼底に焼き付いてきます。

私は一日に三人以上、惚れ込む鼻孔の女性と出逢うために街を歩き回っています。タバコを止められないニコチン中毒者のように、私は鼻女中毒の重患です。これは生後に芽生えた症癖ではなく、私のは生まれつき身につ

けた鼻の奴隷であると思います。

六才の頃、遊んでいた女の子に、僕の部分の白い垢を、いつも掃除してくれる子がいましたが、仰向けに寝ている私の垢を取っている彼女の鼻孔が、夕陽の中で異様に美しかった思い出が、今でもクッキリ脳裡に灼きついています。

又、小学校二年の受持の女先生が、凄く鼻孔の美しい先生だったので、授業中、うっとりと放心状態になっていました。女先生が怒って他の生徒を罵倒していた時、教壇の真前にいた私は、先生の荒い息づかいに鼻孔が、微かにふるえて、昂奮状態を表わしているのに、胸をとどろかしたことも、忘れられない記憶です。

その後の授業時間中に、それを想い出してどうしたとか、失禁してしまい、床一面に洩らして、女先生をはじめ級友たちから、嘲りの眼で見すえられて、自己放棄状態に沈溺して了ったことも、もう一度、浸りたいようなシーンです。

更に、中学の初め頃、親戚の顔に自信のある高慢な女の子が、ある時、私をつかまえて『索引力』の意味を知っているかと、長々と

説明してくれたことがあります。自分から鼻孔の整って美しいことを見せつけ乍ら、顔を上向けたり、首をかしげたりして、気をそそってくる年上の女でした。どうしても、忘れられない女性です。

高校の頃は、どうしてか、勉強に励むことで日々を送りました。思えば、そんな年代の環境だったかも知れませんが、大学に入ってから、その反動の故か、女友達を近づけ、又求め、街の女を漁る夜も多く、大学四年の学生生活も夢のように過ぎて了いました。

接した女は、全て鼻に魅力ある女であったことを顧ると、鼻に対する激しい性癖は、私の生まれつきであるということを感じて、益々自ら、その道に耽溺させてゆきます。

私の思うままに、鼻を任せてくれる女は、私のものです。体をまかせても、鼻に触れることを拒む女は、心から私のものではありません。鼻まで捧げる女こそ、私の情念を昂め私の欲情を吸い取り、私は止まるところなく誇り高い彼女の鼻を責めて、責めに悦ぶ女との愛情を濃く深めて行っております。

その体験告白は、次回に報告したいと存じます。

敗戦悲話北満哀歌

悲惨な戦争の最大の被害者は、いつの場合でも可弱い女性だった。大東亜戦争の末期、無敵関東軍の敗退という事態は、王道楽土を夢見て北満の地に渡航してきた幾千、幾万の大和撫子の身上に、如何なる惨劇をもたらしたのか。これは、その一体験者の語る生々しい告白手記である。

ソ連兵の餌食になる日本女性

鈴^{すず}鹿^か晶^{あき}子^こ

カット・室井亜砂路



はじめに――。

(鈴鹿晶子)

人間は、一生のうちに、これだけは、どんなことがあっても、他人には話したくはないという事柄が一つや二つ、あるものです。

私も、もう、これだけは、口が裂けても、喋りたくないという思い出があります。死ぬまで誰にも話したくないと、強く思い定めていました。

あれから二十八年の月日が経ちました。街の書店に氾濫する雑誌の中から、はからずも貴誌を拝見してからは、自分の胸にひとり秘めていた、この貴重な体験を、ここま埋



めてしまうのが惜しくて、遂にペンをとって
みました。ただ、私は平常、物を書くことを
仕事にしているわけではありませんので、どれ
だけ正確に文に書けるか不安です。

それでも、私の本名は伏せて頂けるとい
うことですので、拙いながら投稿してみます。
もし、掲載して頂けるようでしたら、この後
の分も書いてみたいと思います。

襲いくる餓狼の群れ

「キヤーツ、だれか、助けてえーッ」
「い、いやよ、いやよ。止めて、止めてった
ら。ヒューッ」

突然、待合室が騒がしくなり、女の悲鳴に
混じった、野獣の咆哮にも似た男の怒号が起
こったのでございます。

男達の声は？……そうです。私達の一番、

怖れていたロシア語でございました。

ビタミン注射の準備をしていた私は、驚き
のあまり、注射器を床の上へ落としてしま
いました。唇がこわばって、わなわなとふる
え頬の血の気が消えてゆくのが、自分でも、よ
くわかりました。

「ああ、とうとう襲ってきたのだわ」

智恵子先生も、美しい顔を恐怖にひきつ
らせて、診察をなさっていた手を止めて、は
っと私の方を顧えられました。

「晶ちゃん、ロシア兵のようすわね」
声をはきつらせて、おっしゃいました。
「はい、とうとう来たようすわ」

私は頷いて先生の傍へ走り寄りました。

「奥様、どうやら、ロシア兵が押し寄せてき
たようすわ。しばらく、我慢なさって下さ
いましね」

先生はベッドの上に、おお向けになって診
察を受けていられた高松夫人の上へ、急いで
毛布を掛けて隠してしまわれました。

見習看護婦の圭子ちゃんは、くりくりした
丸い目を一層まるくして、おびえたように、
私の横へ寄り添ってまいりました。

「晶子お姉様。圭子、こわい……」

私は圭子ちゃんの細い肩を、力いっぱい抱
きしめていました。

昭和二十年八月十日。北満のある小さな都
市のことでございました。

半年ほど前までは、街には勇ましい関東軍
の兵士が満ち溢れ、活気のある街でございま
したが、一月ほど前、何か新しい作戦命令が
出たとかで、街に残っていた男達を根こそぎ
非常召集した上、全員、どこへともなく去っ
て行ってしまったのでございます。

「この街にもロシア軍が侵入してくるかもし
れない。今のうちに、早く南満へ脱出してお
く方が安全だ」とか、「いや、近いうちに、
関東軍が新しく部隊編成をして、この街の警
備にやってくるそうだ」とか、いろいろの流
言蜚語が、とびました。

後に残ったのは、女と子供ばかり。それは
それは、不安な毎日でございました。それで

も、元気な方達は、あわてふためいて、南満の長春、旅順方面へめざして汽車を求めて逃げだして行きましたが、私共のように、産婦人科病院に勤務していて、患者さんを預る身では、そんな勝手なことは出来ません。

東京の女子医大を卒業され、許婚者のあとを追って、この北満の地まで単身渡航され、現地で結婚式を挙げられるとすぐ無慈悲にも御主人は軍医中尉として召集されてしまった二十四才の美しい智恵子先生。女手一つで、この病院を守っておられるのでございます。

それに、やっと二十才になったばかりの間知らずの看護婦の私。女学校を出たばかりの見習看護婦の圭子ちゃん。家事を見て下さる女中のお八重さんの四人が総勢でした。

毎日毎日を、不安におびえきって送っていたのでございますが、それが、とうとう、噂が現実となつて、私達の身にふりかかってきたのでございます。

「いけませんわ、止めて下さい。お願い。アア、アア、止めて、止めて下さいーい」

「ヒューッ、けだもの、痛いーッ」

待合室の甲高い女の人達の悲鳴は、やがて泣き声に変わってきました。ロシア兵達は、患者の妊婦さんに、一体、なにをしていると

いうのでしょうか。私は悲鳴を聞いてみると、体がふるえて、どうしようもありません。

と、——その時、

ドアが蹴破られるように大きな音を立てて乱暴に開け放たれ、熊のような髭づらの大男四人が、なだれ込んできたのでございます。

服装から判断しますと三人は将校で、一人は兵隊のようでした。その兵隊の服を着た男が、何やら訳のわからない言葉をわめき散らしながら、手にしていた自動小銃を私達につきつけました。

身の丈は二メートル近くもあり、顔中、真黒いヒゲに埋めつくされ、見るからに、身の毛もよだつ、悪魔のような形相をした男達でございました。

しきりに、なにやら大声でわめいています。が、ロシア語を知らない私達には、なんのことも全然わかりません。ただ、呆然と、立ちすくんでいるばかりでございました。

「ミナサン、ソコへ一列ニ、並ビナサイト言ッテマス」

ロシア兵の後から、アクセントのおかしい日本語がして、満服を着た男が出てきたのでございます。私は、その顔を見て、あっと驚きました。時折、郊外から、卵や野菜を売り

にきていた、あの、お人好しの李さんだったからです。

私は、日本語をきき、しかも、それが顔見知りの李さんだったということで、地獄で仏というのでしょうか。何とはなしに、ほんと安堵の胸をなでおろしたのでございます。

“この人の良い李さんが一緒にいるのだからロシア兵達も、あまり無茶な悪いことはしないだろう”

智恵子先生も、私と同じ思いになられたのでございました。

「李さん、お願いです。今、妊婦の方を診察中ですの。ちょっと、お待ちになって——」

平静にかえり落着いた声で頼まりました。

それを聞くと、李さんはロシア兵と、一言二言、話していました。そのうち、あの悪魔のような顔をしたロシア兵が、満面を朱に染めて淫らな笑みを浮かべながら、ツカツカと診察台へ近づき、あっと、止める間もなく、毛布をはぎとってしまったのでございます。

私達は、啞然として息をのみました。

「イヤーッ、ヒューッ」

毛布の下で息をひそめておられた高松夫人は、おびえきった甲高い悲鳴を挙げ、思わず海老のように体をちぢめられました。でも、

診察中の恰好そのままでしたので、和服の前は大きくはだけていて、裾はあらわにひろがっておりまして。

むっちりとした肉づきのよい白磁のような太腿から、ようやく、ふくらみかけた妊娠五カ月のお腹まで、あらわに目に触れました。

それを見ると、くだんのロシア兵は、狂ったように覆いかぶさってゆきました。でも、将校服を着た三人の男達は、止めようとせずニタニタ笑って見ているのです。

「な、なにをなさるのですッ」

気丈な智恵子先生は、ロシア兵を引き離そう駆け寄られました。

「ウォン」

ロシア兵の腕の一突きで突き飛ばされ、床にひっくり返ってしまわれました。

「い、いやよ、いやよ。いけないわ、いけない。いったら。やめてーッ、あ、ああ、あっ」

高松夫人は、激しく身をもんで必死に抵抗されました。しかし、夫人の悲痛な絶叫も、ロシア兵の唇で口をふさがれてしまい、次第に弱くなり呻き声に変わってゆきました。

抵抗が弱まるのを知ると、ロシア兵は、まるで猫が小ねずみを料理するように、舌なめずりをしながら、帯をほどき、着物の前を、

すっかりはだけてしまったのでございます。

ロシア兵の太い腕には、ドクロに蛇がからんだ入墨をしていましたが、その入墨がまるで生きている蛇のように絡み合って、無気味にうごめくのでございました。

「チエ子先生、アキ子看護婦サン、圭子サンモ、ソコヘ一列ニ、並ビナサイ」

李さんは、ニヤニヤ笑いながら、手に持っていた細い革のムチで部屋の隅の少し広くなつた所を指すのでございます。

「言ウコトヲ、キカナイト、コノ、ムチガトビマスヨ」

ムチを二度、三度、素振りをしてみせました。ムチは、ヒュウ、ヒュウと澄んだ音を鳴らし、床を叩いて、プチッという怖ろしい音を立てました。

私は愕然としました。今の今まで、お人好しの満人の農夫だとばかり思っていた李さんが、ロシア兵同様、野獣の一味だったとは。気も動揺する驚きだったのでございます。

私は恐怖に足がひきつり、しびれたようになって、立っているのが、やっとの有様でした。圭子ちゃんも、夢中で私にしがみついてふるえています。

「何ヲ、モタモタシテイルノデス」

李さんは怒鳴るなり、智恵子先生の腰のあたりを目がけて、一ムチ振り下ろしました。

ムチは尻もちをついて李さんを見上げている先生の腰に、生き物のように喰い込みます。

「ヒエーッ」

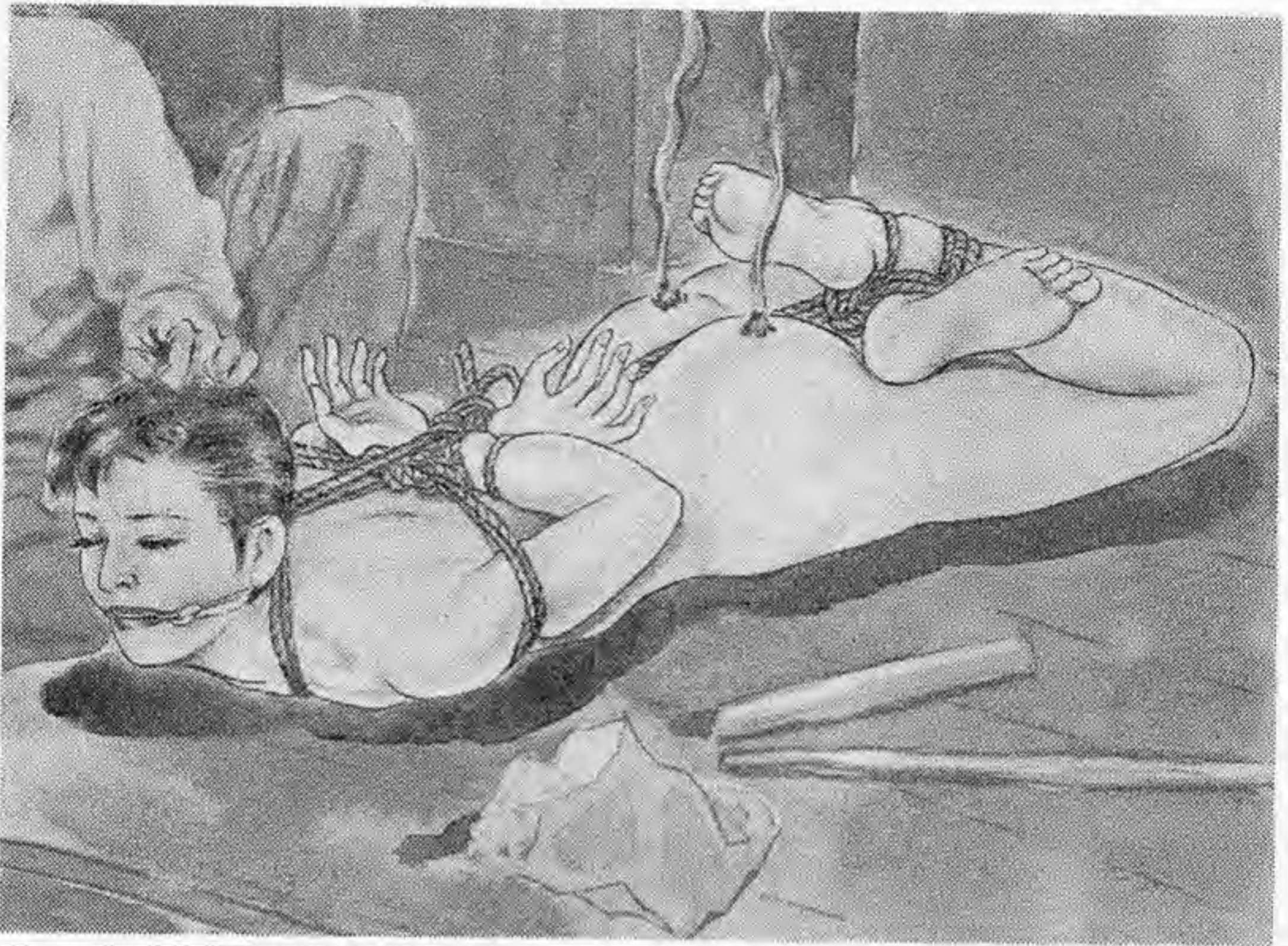
先生は悲鳴を挙げて、私達の方へ、にじり寄ってこようとなさいました。ところが、それが合図でもあったように、後で見えていた三人の将校が、私達三人に襲いかかってきたのでございます。

私は、むんずと胸のあたりを、グローブのような手で掴まれ、引きずられるようにして部屋の隅へ、つき倒されました。必死にしがみついていた圭子ちゃんは、長い髪を引っばられて、泣き喚きながら、私の上へ叩きつけられました。

智恵子先生も、軽々と抱きかかえられ、私達の所へ連れてこられたのです。三人はお互いに抱き合い、恐怖におののきながら、救いを求めるような悲しい目つきで、将校たちを見上げていたのでございます。

目の前でロシアの兵士に押えつけられていた高松夫人の泣き声は、いつしか荒い鼻息となって、やがて、いかにも切なそうな呻き声に変わってしまいました。

イメージギャラリー『熱い愉悦』四馬孝



「私達も、いつかは、
あのように辱かしめら
れるのだわ」

私は聞いてはならな
い高松夫人の呻き声を
聞きながら、じっと身
を固くしていました。

ところが、案に相違
して将校たちは、そこ
にあった椅子に坐り、
煙草を吸いだったので
す。それを見て、私は
二人に囁きました。
「助かるかも知れなく
ってよ」

助かるという表現も
おかしいのでございま
すが、外に、適当な言
いあらわし方が思いつ
かないほど、気持が動
顛してしまっていたの
です。

「そうだと、いいので
すけれど……」

智恵子先生は、さっ

きぶたれた跡が、まだ痛むのでしょう。目に
一杯、涙をためて腰のあたりを、そっとさす
っておられます。

「あのムチ、とっても痛いよ」

「ハハハ、三人寄ッテ、何ノ相談デスカ」

李さんは勝ち誇ったように笑っています。

「智恵子先生、コンニチハ。旦那サンカラ、
オタヨリアリマスカ？ 新婚ソウソウ、別レ
別レデ、サゾカシ、オ淋シイデシヨウネ。キ
ヨウハ、私タチガ、タップリ、ナグサメテ、
アゲマスヨ」

何やら、意味有り気に、将校たちとロシア
語で言葉を交わし、私達にウインクして見せ
るのです。

「アノネ、先生。ココニイラッシャルノハ、
コノ街ノ占領軍ノ司令官殿ト、参謀殿タチデ
ス。ダカラ、女ニハ不自由シナイノデネ、兵
隊タチノヨウニハ、ガツガツシマセン。今カ
ラ、皆サント、楽シイ、オ遊びヨシタイト、
イッテイラッシャルノデス」

私達が、高松夫人のように、すぐに襲われ
なかったわけが、わかりました。

「楽しい、お遊び」と聞いて、

「そうだったの。お遊びというのだったら、
どんなに、はじめになっても、せいぜい、お

酒のお酌ぐらいかもしれないわ。良かった”

今まで張りつめていた緊張がとけて、急にほっとした気持ちに心も、なごみました。

「李さん、楽しいお遊びって、一体、どんなことをすれば、よろしいんですの？」

内心の安堵を、更に李さんの返事で確かめたくて訊ねてみました。

「へへへへ、ソレハソレハ、トテモ楽シクテトテモ面白イモノデス」

そこへ、高松夫人をいたぶっていた大男のロシア兵が、のっそりと起き上がって、けだるそうな足どりですいてまいりました。

高松夫人は背中をこちらへ向け、顔を手で覆っておられますが、丸い肩がピクピクと小さきみにふるえているのは、きっと泣いていられるのでしょうか。しばらく、そうしておられた夫人は、はだけた着物の前をつくるわれて、チラッと私達の方を御覧になりました。

「先生。私、くやしいッ。ワアッ」

声を挙げて泣き伏し、激しく身をもだえていられるのでございます。

と、そのとき――

「晶子サント、圭子サン」

李さんが、私達を呼びました。

「は、はい」

「今カラ、私ノ、イウコトヲ、カナラズ、守リナサイ。ソウシナイト、コノムチヲ、オミマイシマスヨ。イイデスネ」

「はい」

「ソレデハ、二人デ、智恵子先生ヲ、ハダカニスルノデス」

「え、えッ？ 李さん……」

「二人デ、先生ノ着テイル洋服ヲ、ミンナ、ハギトルノデス」

私は、びっくりいたしました。

「嫌です。そんなこと、出来ません」

「コレハ、司令官殿ノ命令デス」

「李さん、お願い。それだけは許して。そのかわり、お金でも、指輪でも、好きなだけ、持っていて……」

智恵子先生も、床に手をつき、ひれ伏して哀願なさいました。

「ソナモノ、イラナイ。アナタチハ、司令官殿ノ命令ニ、ソムクノデスカ。コノムチガ、ホシイノデスカ」

「李さん、助けて。本当に、それだけは……」

「ウルサイ、晶子サン、早くシナサイ」

ピシッ、ピシッ。細くて、しなやかなムチが、私の腰で鳴りました。目もくらむような痛さに、私は思わず、悲鳴を挙げました。

ピシッ！

今度は、圭子ちゃんの番です。

「きゃっ、助けてーッ」

圭子ちゃんも、魂の消えいるような絶叫を挙げて、のたうち回っています。

ピシッ、ピシッ、ピシッ。

「二人トモ、早く、先生ヲ裸ニシナカッタライツマデモ、ムチヲ御見舞シマスヨ」

「晶子お姉様――ッ」

圭子ちゃんは、私の胸元にくぐり込むようにして、ムチを避けています。しなやかなムチは、私の体にも情容赦なく降り注ぎます。「ま、待ってくださいッ。ムチで打つのは、止めてくださいッ、お願いです」

みかねて智恵子先生がおっしゃいました。

「李さん、あなたは、それでも人間ですの」「へへへ、ジャア、先生、日本人ハ人間カ。

今マデ、私タチハ、何百回トナク、日本人ニムチウタレ、土地ヲ追ワレ、品物ヲ奪ワレ、娘タチヲ、犯サレテキタノデスヨ」

「そ、それは、一部の人達のしたことです。私達は何も、していませんわ」

「アナタハ、シテイナイカモシレナイケド、ホトンドノ、日本人ハ、皆、ケダモノダ。私

モ踏ミ込ンデキタ日本兵ノタメニ、家ハ焼カ

レ、妻モ娘モ、私ノ目ノ前デ、ナブリモノニサレタ。妻ハ殺サレ、娘ハ氣ガ狂ツテ、自殺シテシマッタノダ」

将校が、なにやら喚きました。途端に、ムチが一段と激しくなったのでございます。

ピュー、ピシッ、ピュー、ピシッ。

「司令官殿が怒ッテオラレル。早く脱ガサナイト、御自分デ脱ガスソウダ。シカシ、ソウシタラ、罰トシテ、晶子サント、圭子サント二人ニハ、ムチヲ千回ダトヨ」

「そんな無茶なことを……」

「ウルサイ。言ウコトヲ聞キナサイ」

ムチは狂ったように、振りおろされます。

「先生ッ。晶子お姉さまッ。圭子は、このままだったら、殺されてしまうーッ」

圭子ちゃんは、髪を振り乱して、泣き喚くのです。それを見て、先生は意を決したように、おっしゃったのでございます。

「晶子さん、お願い。かまわないから、私のお洋服を、脱がして頂戴」

「だって、先生。私には、とても、そんなこと、出来ませんわ」

「いいのよ。私さえ、恥を我慢すれば、いいんですもの。この人たちだって、私の裸を見さえすれば、満足なさるのでしょから」

「でも、それでは、晶子、旦那様に、なんと申し開きをして、いいものやら……」

「いいえ、彼は、きっと許して下さるわ。さあ、早く脱がして。そうしなかったら、あなた達、殺されてしまつてよ。さあ、晶子ちゃん、圭子ちゃん、早く、早くう」

話し合っている間も、ムチは間断なく、振りおろされるのであります。可哀そうに、圭子ちゃんは、もう悲鳴を挙げる力もなく、ぐったりとしています。

「さあ、早く、遠慮しないでいいのよ。晶子ちゃん、早くってば……」

智恵子先生は、泪をいっぱい、ためた眼で二人を優しく促し、しかも、御自分で脱ごうとさえ、なさるのでございます。

「先生ッ、すみません」

私と圭子ちゃんは、泣きながら、先生の白い診察コートに手を掛けました。ムチの痛さのための泪ではございません。こんな残酷なことを、しなければならぬ口惜しい気持。

野獣のようなロシア兵たちの目の前に、汚れなき白い肢体を、さらさなければならぬ先生の辛い気持を察しての、悲憤の泪だったのでございます。

私達の手が、先生の診察着にかかるのを見

ると、途端にムチは止まりました。

白いコートの下は、ピンクの半袖セーターと、黄色のタイトスカートでした。

「先生、こんなことをする晶子を、どうか、お許しになって……」

私は、先生のセーターに手を掛けて、引っ張り上げながら、許しを乞いました。

「いいえ、いいのよ。晶子さん、心配しないで。これも運命ですもの」

先生は脱がし易いように御自分から、体によじって下さるのでございます。

圭子ちゃんは、スカートのホックを外しました。真っ白いスリッパを透して、黒のブラジャーとピンク色のパンティが、淡く浮かび上がっております。

そこまでで、私達の手は、ハタと止まりました。とても、これ以上のことは、できそうにもありません。私達がためらっているのを見ると、李さんのダミ声がありました。

「コラッ、早く、脱ガシナサイ」

「晶子さん、もう地獄に落ちたも同然よ。構わないから、早く、しなさい。圭子ちゃんも遠慮しないでいいのよ。さあ、早く」

私は顔いてホックを外しました。白絹製のスリッパは、さらさらと先生の体にまつわり

つきながら、滑り落ちてゆきました。スラリとした先生のつややかな肢体が、まぶしいように輝きました。

あとは、黒いブラジャーと、ピンク色のパンティだけしか、残っていません。

「李さん、これでよろしいの？」

先生は祈るような声でおっしゃいました。

「駄目デス、駄目デス。素裸ニナルノデス。」

生マレタママノ裸ニナルノデス」

「そ、それだけは、許して。李さん」

「駄目、駄目。晶子サン、早く、脱ガシナサイ。司令官殿が、怒ラレマスヨ」

ムチは、私の頬をかすめて、床の上で激しい音を立てました。

「スツカリ脱ガスマデ、承知シナイゾ」

「晶子さん、早く脱がせて。貴女のためではないのよ。わたしのための。早く、早く。」

体に傷をつけられたりしたら、和夫さんに、申訳ないわ。だから、早く脱がせて……」

「すみません。先生ッ」

私は圭子ちゃんに目くばせをしました。

「あなたはブラジャーを取るのよ。私はパンティをとるから……」

でも、とても、目を開けてなどは、出来そうにありません。私も圭子ちゃんも、横を向

き、目をつぶっていました。

「圭子ちゃん、いい。一、二、三で一緒に外すのよ。さあ、一、二、三……」

「ウウ、ウウム」

一瞬、男たちの間から溜息のようなものが洩れ、生つばを呑んで目を瞞っていました。

まさに、天使というのにふさわしい智恵子先生の御姿でした。はっと、女の私でさえ、思わず息をのむ程の美しさでございました。

先生は両の腕で、しっかりと乳房を隠しておられました。バターに濡れた白磁の器のように、なめらかで、しっとり潤んだお肌、むっちり豊かに盛り上がっている胸の二つの丘。きゅっと蜂のように、くびれているウエスト。妖しくも見事なふくらみの曲線を描いているヒップの線。

神々しいような気品のある先生の美しさがあたりを圧しているものでございました。

先生は、つぶらな瞳に、溢れるように真珠のような涙をためておられました。私は、そんな先生を正視することが出来ず、顔をそらしていました。すると、李さんのダミ声再びしたのでございます。

「晶子サン、目ヲアケテ、ヨク見ルノデス。先生ノ裸ヲ、ヨク見ルノデス」

ムチがヒュウと鳴って床を打ちました。

「は、はい……」

「先生ッ、コチラヲ向キナサイ。司令官殿ニトックリト、ヨク見テイタダクノデス。駄目駄目デス。ソナニ、手デ前ヲカクシテイテハ、イケマセン。両方の手ハ、上ヘアゲテ、頭ノウシロデ組ミナサイ」

李さんは、先生の体に当たらないように、気を配りながら、ムチで床を叩いては、先生をおどすのでございます。仕方なしに、先生は李さんの言う通りに、なさいました。

「ソウソウ、両手ヲ頭ノ上デ組ンデ、両足ハ右ト左ニ、大キク開クノデス。モット、モット、大キク開クノデス」

「李さん、とても、そんな恥かしいこと」

「ウルサイ、私ノ言ウコト、聞キナサイ。モット、モット、大キク開クノダ」

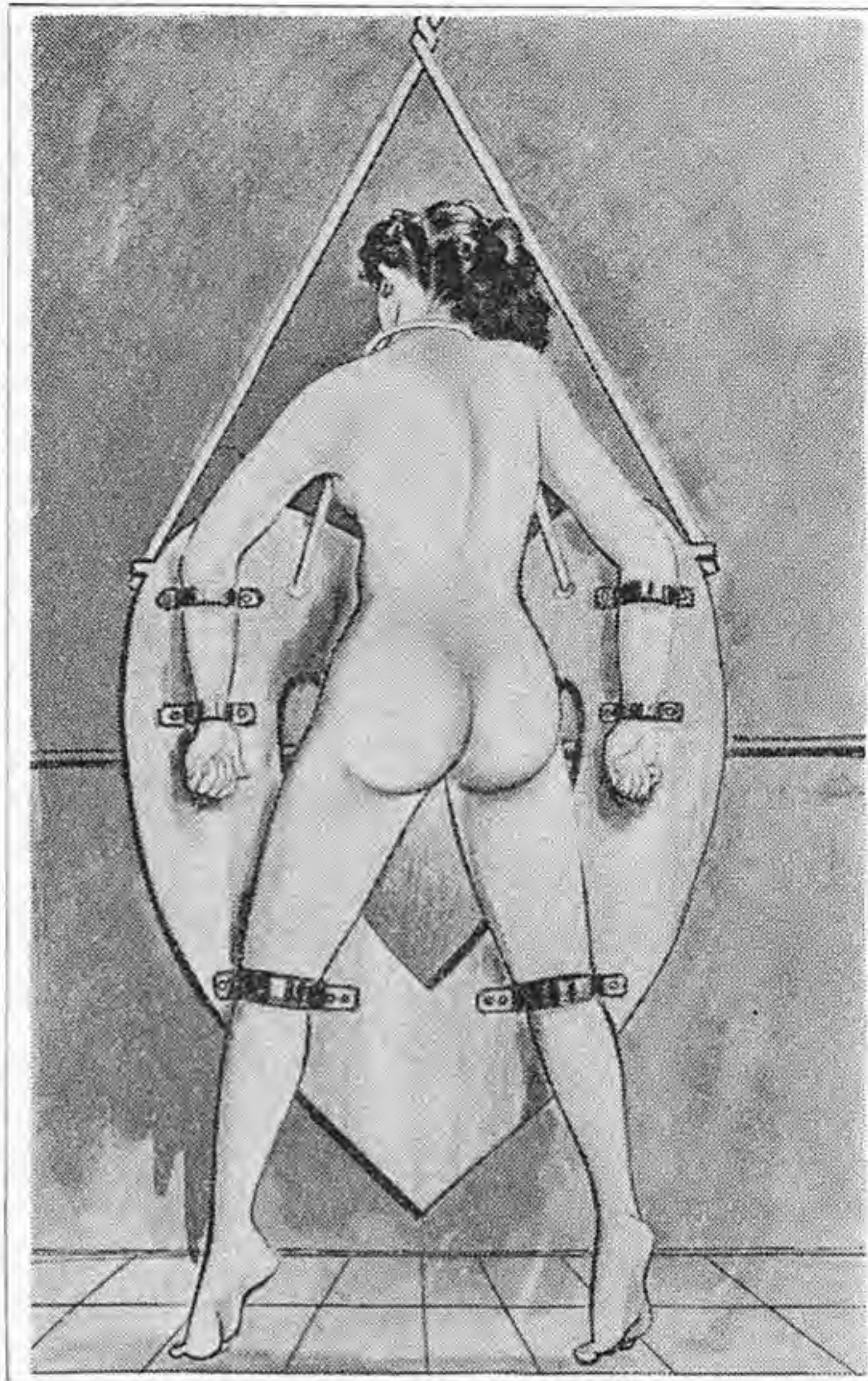
声が荒くなり、ムチが床を打つ音が激しく響きます。

「これぐらいで、よろしいんですの……」

「マダマダ、モット、思イキッテ、大キク開キナサイ。モット、モットデス」

将校の一人が、高松夫人を襲った兵士に、何か言いつけました。すると、その男は、入口に置いてあった鞆の中から、小さな瓶のよ

イメージギャラリー 『屈辱のハート』 北原純子



「アソコデス」

なんと、李さんは、女性の最も恥かしい、隠れた部分を指さしているのです。ごさいます。

「ええッ」

「アソコへ、タツプリト塗りナサイ」

「そ、そんなこと、とても……」

「出来ナイト、言ウノデスカ」

言葉よりも早く、ムチが鳴りました。私は自分の体のどこにムチが当たったか、わからずクラクラと目まいがして、私は李さんの脚元にヘタヘタと崩れ折れてしまいました。

「コレデモ、マダ、出来ナイト言ウノカ」

「晶子さん、私は、もう、どうなってもいいのよ。李さんの言う通りになさい。そうでないと、私も、貴女も、それに圭ちゃんまで」
「でも、先生。このクリームが、もし、お体にでも、さわったら……」

「いいえ、それは普通のクリームじゃないのよ。ある種のお薬なの。だから、大丈夫、心配いらないわ」

「本当ですの」

「ええ、貴女なんかは、まだ知らないでしょうけど、和夫さんも、時々塗って下さったところがあるのよ。だから、さあ、遠慮しないでたっぷり塗って頂戴」

うなものを取り出し李さんに手渡しました。

「ヨシ、ソレデヨロシイ。ジャア先生、今カラ、トテモ良イ気持ニシテアゲマスヨ。晶子サン、コチラへ、イラッシャイ」

李さんは、私を手招きしました。私は恐る恐る、彼の前へ進みました。

「晶子サン、コレヲ、先生へ塗ルノデス」

李さんは瓶のふたを開けて私に差し出しました。薄茶色のドロリとしたクリーム状の液体が入っており、薄荷の香りが、ほのかに私の鼻先に漂ってきました。

「これは、なんなのでしょうか？」

「塗ッテミレバ、ワカリマス」

「先生のどこへ、お塗りするのですか」

「本当に、よろしいんですの、先生！」

「心配いららないから、早くしなさい。早くしないと、また、ぶたれるわよ。ねえ早く」

「は、はい」

人差指で大きくすくってみますと、肌理が細かくて、高級化粧品のような感触がしました。私は先生の前に跪き顔を近づけました。

「早く、塗ルノデス」

李さんの怒声が私を鋭く促します。

「先生。こんな、はしたない事をする晶子かどうか、お許しになって下さい」

「いいのよ、晶子さん。さあ、思いきってなさい」

「はい、先生」

私は、指先に、そっとすくったクリームをこわごわ塗りつけました。私のそんな仕草を見ていた李さんが言いました。

「駄目ダ。ソナ、オ上品ナコトデハ、駄目デス。モウースクイ、タツプリト、奥ノ方マデ、十分ニ塗り込ムノデス」

「は、はい、こうですの」

言うことをきかないと、また、激しいムチの雨が降るに違いありません。私はあわてて今度は二本の指でタツプリとクリームをすくい、奥の方まで指をくぐらせて、充分に塗り

込んだのでございます。

智恵子先生は、うっとりとしたように、私のなすがままになさっておられます。

「ヨウシ、ジャア、晶子サン、次ハ先生ヲ後カラ抱イテ、乳ヲ責メルノデス」

「責めるって？ 一体、どんな事をすれば、よろしいんですの」

「フン、世話ノ焼ケル娘ダ。ソレ位ノ事モ知ランノカ。先生ノ後カラ抱イテ、乳ヲ揉メバイイノダ。圭子サン、アナタハ、シャガンデ先生ノ両方ノ足首ガ動カナイヨウニ、キチント、押エツケテイナサイ」

私は先生の背後に回り、そっと、ふくよかな胸のふくらみの上に手をのせました。掌にドキンドキンと波うっている鼓動が、温かく伝わってまいります。圭子さんも、李さんに言われた通り、先生の前にしゃがみ込んで、左右に大きくひろげられている両足首を、しっかりと握っています。

「フムフム、ヨロシイ。ジャア先生、アナタハ、自分ノ指デ、自分ノモノヲ、コレカラ責メルノデス。司令官殿ニ、イジクル所ヲ、オ見セスルノデス。サア、ヤリナサイ」

「嫌です。李さん、貴方は、どこまで私を恥かしい目にあわせれば気がすむのです」

「ヨロシイ、自分デ出来ナイノデアレバ、晶子サンニ、サセマス」

「そ、そんな無茶な事……。私、とても、自分でなんて……」

「ウルサイツ、早クスルノダツ。司令官殿ガオ待チカネダツ」

李さんの手がムチにかかるのを見ると、先生は悲しい決心をなさり、白魚のような指を伸ばされ、じんわりと、うごかしはじめられたのでございます。

「ソウダ、ソレデイインダ。デモ、モットキツク、激シクコスルノダ。晶子サン、アナタハ、手ヲ休メテハイケマセン」

余りのことに、顔をそむけ手をお留守にしていた私は、あわてて、乳房の上の手を動かしてはじめてました。すると、先生の頬に、次第に紅がさし、鼻息も、心なしか荒くなってこられたような気がいたしました。

「先生、痛くはございません？」

そっと、耳元でささやきました。

「ありがとう。痛いどころか、晶ちゃん、とっても優しくして下さるので、心持ちが、よろしゅうございますわ」

「先生に、そう言っていたら、晶子、とても嬉しいですわ。こうすれば、よろしいの

ですか。痛ければ、おっしゃって下さい」

「そう、ううう。お薬が効いてきたらしいですわ。奥の方が、痒くて……。あ、あ、あ、火照って、きましたわ。ウウムム……」

先生が、呻き声をお出しになられたので、私は、驚いて手を休めてしまいました。

「ウウウ、痒いっ、たまらないわッ」

先生は、にわかに、腰を前後左右に揺すられて、奥歯をかみしめて、何事かを必死に耐えておられる御様子です。首筋には、うっすらと汗が浮かんでいます。私は、先生の、そんな取り乱した御様子を見るのは、これが始めてでした。

「先生、智恵子先生、どうか、なさいましたの？ 御気分でも、お悪いのでは……」

「ううう、あの、体中が火照って、熱くて、とろけてしまいそう。ああ、たまらないわ。い、いい、痒い、痒い。晶ちゃん、お願い、もっと、きつく、抱きしめてエ」

「こ、こうですの、先生！」

「そう、そうなの、ううう……」

私は両腕で抱えるように、先生の上半身をかき抱き、掌の中の柔らかい乳房を、力いっぱい握りしめていました。それに伴って、先生の指の動きも一層、激しくなったようでご

ざいます。

私の腕にかかる先生の体重が、だんだんと重くなってまいります。

「コラッ、圭子サン、チャント、先生ノ足ヲ押エテイナイカッ」

左右に大きく開かされていた先生の足は、ともすれば、つぼめよう、つぼめようとなさいますが、その力は、可弱い圭子ちゃんの手では止めようもなかったのでございます。

「は、はい。でも、先生が、大変な力で、つぼめようとなさいますので……」

「文句ヲ言ウナ、才前ガ、チャント押エツケテイナイカラダ」

ムチがびゅっと鳴って、床でばちっという不気味な音を立てました。

「す、すみまん。先生、足を、足を、あんまり、お動かしにならないで——」

圭子ちゃんもムチで威されて必死でした。先生の肩口から胸へかけて、べっとりと汗の玉が噴き出てまいりました。フーフーと、肩で荒く、大きな息をされています。

「智恵子先生、モット、モット、激シク責メルノデス。司令官殿ハ、モウ少シデ、許シテヤルト、言ッテオラレマス」

「李さん、もう駄目、とても、これ以上は、

ああ、耐えられませんか。勘忍して下さい」

「イケマセン。モット、力ヲ入レテヤルノデス。奥ノ方マデ、熱心ニ、モット、モット」

「こう、こうですの……」

「ソウダ、ソウダ、ソノ調子デ続ケルノダ」

先生の喘ぎは、すさまじく、喉の奥から、しぼり出すように洩れてきます。胸の鼓動は早鐘をつくようで、真白いお腹が、大きく波打っているのをごさいます。

さっきのクリームは、なんというお薬なのでしょうが、私には、何のことかわかりませんでした。先生のただならぬ御様子に、ただただ、気も動顛するばかりでした。

「先生、顔ヲチャント上ゲテ、コチラヘ顔ヲ見セルノデス。両手ヲ使ッテ、ソコロ、モット激シク責メルノデス。モット、ヒロゲテ、司令官殿ニ、ヨク見エルヨウニ……」

李さんは、ムチの素振りをくれながら、すかさず、いろいろと細かい指示をします。

「は、はい、こうですの？」

先生は、うっすらと目を開け、顔を起こされると、必死に、言われた通りになさろうと努力なさるのでございました。

「ウン、イイゾ、イイゾ。ソノ調子デ、イツマデモ続ケルノダ」

「いつまでも続けるだなんて、とても、そんなこと、駄目だわ。体中が、とろけるようなんですもの。手足に力が入らなくて……」

喘ぎながら、そう求められる先生に、私は思わず知らず、抱きついていました。

それまで黙って見ていた将校二人が、一緒に立ち上がると、まだ、こちらに背を見せて泣きじゃくっていた高松夫人を軽々と抱え上げて、診察室に続く奥の部屋へ連れて行こうとしました。

「ヒューッ、いや、いや、許して……」

両足をばたばたさせて、絹を裂くような悲鳴を挙げている高松夫人の後姿がチラッと視野に入りましたが、可哀そうですが、今の私

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

達には、どうにも、してあげられないのでございしました。

先生のお体は、ほかほかと温かく、びっしりと汗ばんでおられて、甘ずっぱい女の体臭が、むんむんと匂っておりまして。

「先生、大丈夫ですか？　しっかりなさって下さい。私達、どうやら、これで助かったらしいですわ。お気をたしかなさって……」

私は先生を、ゆり動かしました。でも、先生には私の声は聞こえなかったのでしょうか。

体は棒のように硬直したまま、私の腕の中に全体重を預けられて、じっとしておられるのでございます。前に投げだされた膝のあたりがピクピクと、けいれんしているのが、妙になまめかしく私には見えました。

こうして、私達は、その日を境として、ロシア将校たちの慰め物とされてしまったのでございます。運命のいたずらとは申せ、なんという不運な星の下に生まれてきた私達だったでしょうか。

私たちの病院は、進駐してきたソ連軍の司令官の宿舎に指定されたのでした。

そして、智恵子先生、私、圭子ちゃん、高松夫人、待合室にいた患者さん三人、それに四十すぎの女中のお八重さんまでが、逃げだ

してはいけないというので、物置代りに使っていた地下室へ監禁されてしまったのでございます。

「私タチヲ、充分満足サセルヨウニシテクレバ、日本へ早く帰レルヨウニシテアゲル」李さんやロシア兵たちのそんな言葉を唯一の頼みとして、屈辱の毎日を過ごすようになったのでございました。

思えば、それはなんという、はかなくも哀れな約束だったこととでございましょう。国家の保護をすべて失ってしまった、丸裸でほうり出された可憐な女である私たち日本女性が敵地の真只中で、辿っていった運命というのは、それはそれは苛酷なものでございました。今、思い出しても、ぞっとするような身の毛もよだつ日々の連続でございました。

でも、人間というものは、生きている限りどんなにじめな境遇に陥ってしまったも、やはり、そこに、一筋の淡い希望を抱くものでございます。薬にでもすがりたい気持ちが、次々と打ちくだかれてしまいましたが、また、なにかしら、新しい夢に、そこはかたない望みを托して、せい一杯、生き抜いていったのでございます。

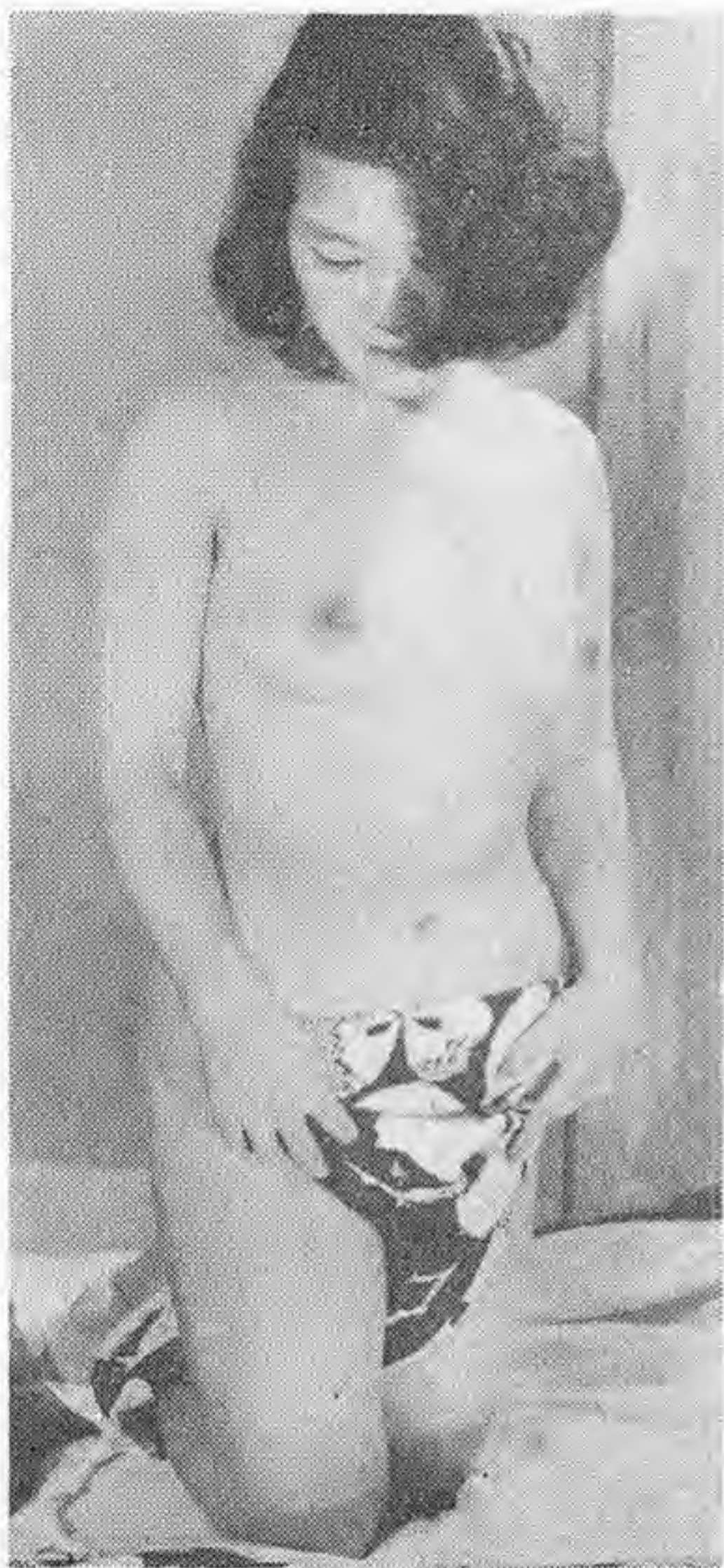
——(この項、おわり)——

|| ダメな子への幻想 ||

不 道 德

『オシメ学』

への誘い



岩 手 信 夫

△前号の小見出し▽

- (一) オシメ思想の現況
- (二) ゴムカバー懐古
- (三) オシメに寄せる好意
- (四) 育児評論家業の成立
- (五) オシメ思想の商品化

(六) 量の多い赤ちゃんの謎

東京都内の某デパートのオシメ売場に「量の多い赤ちゃん用」のカバーやブルマーがあります。また他のデパートには「夜間用」とか「外出用」とかが、あります。そして、どちらも「通気性の良い」カバーをショーケースに安置してあります。

「量の多い赤ちゃん」などというものが存在するとは思えませんから、この表現は何か裏があるとした、思えません。

母親たちの中には評論家の説に従わない人もありますが、だからと言って影響を受けていないわけではありません。昔のように「放っておいても洩れないカバー」を公然と買うときは何か、ためらいを覚えるのでしょうか。

「夜間用」とか「外出用」とか、「量の多い赤ちゃん用」を手の届く所に無難作に山積みしておき、「通気の良い理想的なカバー」を大げさなショーケースに仰々しく安置しておくという商品配置は、デパートとしての態度

が評論家向けと消費者向けの二本立てになっていることを思わせます。

「大小便は決して洩れず」とか「いか程多量の大小便でも、もれ又は、しみ出る事なし」と明快に言い切った昔の広告の卒直さは今はなくなりました。しかし、同じ心が、「量の多い赤ちゃん」として「夜間用」「外出用」として、明らかに今でも、売場に生きています。評論家は体裁よく祭り上げられているようです。そして多くの母親は、洩れないカバーを使っています。

(七) オシメ歓迎派への風当たり

昔の日本家屋の便所は遠く、暗く、寒くてお化けが出そうでしたから子供が自分で行ける安全な場所ではありません。幼児がオシメをしているのは、そのような背景の中では当然だったのでしょう。

親から見ると、子を一人でやることは危険なので、行くとなれば付いて行かなければなりません。昔は大抵、数人の子を育てましたから、下の子の世話をしなければならぬ母親としては、上の子を放っておくためにオシメを当てる必要がありました。

最近お・か・だ・れ・い・こ・という人が「不道德育児学」(潮出版社昭和47年刊)の中で、上の子にもオシメを当てる育児法のことを述べています。上の子がオシメと縁が切れないうちに

下の子が生まれたときは、上の子も完全にオシメにしてしまおうと楽だそうです。上の子は自分が赤ちゃんと同じように扱ってもらえることを喜び、赤ちゃんのオシメ交換をしようとする、どこからともなく飛んで来て、自分を先にと、せがむそうです。

著者が「不道德育児学」と称する理由は、躰けないでオシメを使い続けるからです。あきらかに育児評論家に対する挑戦です。自分が楽をしたいから躰けないのだというのは、母親にとって自然な願いだという含みです。そして、オシメを外す躰けなるものが作られた仕事であって、現実には全く不要なことを示します。自分の子がオシメを好んでいて、濡れても平気であることが、著者の自信を支えます。

近所の母親たちは自分の子どもが、とうの昔にオシメを卒業しているのに、まだオシメを着けている子を発見して驚きます。今の母親たちは本音を言えば、もう少し長くオシメを当ててやっても良かったのではないかという後悔がありますから、長期使用者に対して攻撃を、しかけます。自分の子の場合、脅したり、騙したりして無理やり外したので、同年の子でオシメをしている子があると、具合が悪いのです。

「手数が大変でしょう」と迫る人を追い返すと、次には「子どもさんが可愛そう」と迫る

人がやって来ます。

お・か・だ・れ・い・こを驚かせたのは、自分の子にオシメを使うことが今や社会的制裁に近いほどの婉曲な非難を浴びるという現実でした。

昭和45年9月23日の朝日新聞「ひととき」欄に、五人の子を次々に育てた若い母の声がかかっています。これも似たような考え方で育てていますが、同様に近所の優等生ママたちに攻撃されています。そのたびに「うちじゃ二年半たたなきや、みんな教えないの」と怒鳴り返すそうです。この人は自分も子どもも大らかに生きて行くために、オシメの躰けを無視しています。

早くオシメを終わらせた優等生ママたちがいつまでも使っている母に対して、「許さない」気持ちになるのは、オシメを早く終わらせる動機が、外部から与えられたものであるからです。もし本心からしたのであれば、優越感に浸って悠然としていられるでしょう。そうでないのは、何か損したような——しかし何が損なのか説明できない——気がするからです。

それは、「抱き癖をつけるな」という評論家の説に従って、わが子を抱きしめないまま成人させてしまった母親が、人の見ている前で、わが子を心から抱きしめる母親と、その子に対して、悠然としていられないのと同じです。

(八) ひかげの商品——おとな用

昭和46年11月4日の東京新聞によると、おとな用おむつカバーはメーカーも宣伝しないそうです。こればかりは宣伝するわけに行かないそうです。

さきに引用しました五十年前の広告には、大人用が、当然のように堂々と書かれていました。自力でできない人は、大人でも赤ちゃんでもオシメの対象です。それが今では、おとな用と聞くと変な顔をする人が多いという有様です。

昔は洩らすからオシメを当てるという考えでしたから、幼児でも大人でも洩らせばオシメを使いました。洩らしても使わない人は、洩らすことが知れると困るからだったのでしょう。だから、洩らすことが知れてしまった場合や、洩らしても無理がない事情の場合にはオシメが使われました。

年老いた母が娘に向かって、いざという時のためにオシメを用意してあるのを見せておくという、一種の身だしなみも普通でした。現代の年寄りで、自分の体が効かなくなったときのために、オシメを用意しておく人が何人あるでしょうか。

昔の家庭看護書で、現在も旧版のまま再版されているのを見ますと、オシメが一つの手段として述べてあります。今の新しい思想で

書かれた本の大部分は、病人の世話の仕方を細かく述べていながら、オシメについては触れていません。救急品の中にオシメカバーを入れておくように述べている本が、上出来のうちでしょう。

昔、洩らす人に当てるものだったオシメはいつのまにかオムツと混同され、今では、小さいうちに外してしまうものに変わってしまいました。洩らそうが洩すまいが何でも良いから、標準より早くオシメと縁を切るという育児思想が、大人のオシメ使用を禁止してしまったのです。

今日、オシメをする大人は、普通の意味で「人」ではありません。それは事実上、というよりは、人々の意識の上では、この世の人とは見なされません。つまり、オシメをする大人は廃人だという思想です。これは本誌昭和44年10月号の暗闇太郎氏の告白にも見えている思想です。メーカーが宣伝できないのも家庭看護書が扱わないのも理由は同じです。

育児評論家がオシメを罪悪視させようとした結果、オシメを悪だと考える母親が多く現われたのは、狙い通りになったのですから当然でしょう。しかし、それが大人のオシメにまで波及しているのです。オシメは本来、オシメであって、赤ちゃん用と決まっているわけではないのです。ですから赤ちゃん用のオシメを罪悪視することは、大人用も巻添えに

することになります。この文の冒頭に述べたように、オシメは赤ちゃんの必需品でなくて文明社会の必需品なのです。

愛好者は、もし罪悪感がなければ愛用者になれる筈です。現実には、オシメカバーが、そうであるように『日かげ者』意識から抜けられずに迷っています。もし前進したければ不道德宣言をする必要があります。

(九) オシメ罪悪感からの脱出

オシメに対する罪悪感は評論家によって作られたものですが、それを言い出した評論家は、どこから罪悪感を得たのでしょうか。それは快感に対する罪悪感です。昔、この罪悪感は性に向けられています。

フロイトが幼児性欲を発見した年代と、オシメ罪悪説の発生は、符合しています。幼児が放尿に快感を覚えないうちにオシメを外そうというのが、罪悪思想の基本的な考え方です。

オシメ愛好者の中には、大きくなるまで使っていた記憶のある追憶型と、発生原因の解明しにくい不明型とがあります。後者は、おそらく禁欲的な育児の結果として、幼児性欲である放尿の快感が中絶されたまま成人したからと考えられます。

少なくとも、原因不明型で、かつ洩らしたがる愛好者の成立は、これで説明できそうです。

す。前者にはオシメ罪悪感とは軽微ですが、後者は強い罪悪感を持っています。禁欲的快感中絶型の愛好者は、大人とは言いながらも精神的には不安定で、大人としての能力を持ちません。

かれが安定するためには、赤ちゃんになつて洩らす以外に方法がありません。この人々は、愛好者であるという点で、同じ不安定状態にありながら愛好者でない人に比較して、人間復活に一步、近付いていると言えますがその人が愛好するオシメによって人間復活への道を現実に進むためには、オシメ罪悪感との困難な闘争に勝つ必要があります。

不道德宣言とは口先でするのでなく、心身ともにすることが必要です。それは、オシメを当てたとき赤ちゃんのように洩らしてしまう心境になることです。その方法は大体、つぎのようなものです。

まず、自分が母親になったとして、量の多い赤ちゃんを一晚、そっと寝かしておくときに、心から安心できるようなオシメを用意します。そして、これを当ててみて、最も気持ち良くなるように着用します。そして寝床に入つて放尿します。不安があったらオシメを強化します。

放尿の結果、粗相すると、その後の精神統一が困難になりますから、最初のうちは全身ゴム衣を着けるとか、二重、三重のカバーや

ブルマーを用いて行ないます。オシメの量も多すぎるとわかつている量を用います。そして少しずつ、装備を簡略化して行き、簡略化しすぎないように、粗相皆無のオシメを確立します。この間に濡れの快感を体得しておきます。

次はオシメに心理化に没入することです。濡れの快感と粗相皆無の実績を長いこと積み重ねれば、没入の可能性は高まりますが、罪悪感が邪魔になるので、現実には困難です。

この点は、自己暗示で乗り切ります。渾やゴムや女装などの、罪悪感のない人の告白を読み、手放しで飛び込む心境を文章で体験すると、暗示効果が生じます。特に大切な点は「ないと生きられない」ことです。

オシメがないと生きられない状態が、渾がないと生きられないのと等価であると悟ったとき、洩らすことが恐怖でなくなります。渾マニアは名文家が多いので結構、強い暗示が得られます。

一度、洩れると習慣になつて、オシメを当てると大抵（洩らなくする事情が他にない限り）洩るようになります。そしてオシメがないと生きられない実感がします。それは、オシメがないと自分が存在しないという感じで洩らす危険を感じるからではありません。

洩れるとき、少しもあわてず、うっとりとして洩れるに任せられるようになったとき罪

悪感が消えています。そして、悪い癖のついた赤ちゃんがオシメから脱けられないのと同じく、オシメの保護下から脱けられなくなるのです。

(十) 結 び

オシメに関する限り『良い子』は愛好者になつても愛用者にはなりません。『良い子』が愛用者になるためには罪悪感——良い子を良い子たらしめている——を脱出しなければなりません。

五十年前には私たちの祖母の年代の人々がゴム製のオシメカバーを用いて育児をしました。洩れないことの有難さを親も子も満喫しました。ゴム製カバーは日本の伝統的育児法に良く合っていました。それが日本独自のオシメ愛好者を作りました。

その愛好者を苦しめているのは外国生まれの罪悪感です。

もうこの辺で脱却してオシメのよろこびに酔い痴れたいものです。悪い子だけが味わえるよろこび、それが洩らす快感です。早くから良い子の演技をさせられていた私たちが置き忘れて来たよろこびです。

愛好者のみなさん。不道德宣言をして、洩らしましょう。そして、人生の原点に帰りましょう。

研究 文献

女相撲書誌拾遺

(2)

雄松比良彦

(カットも)



○「東京日日新聞」(「毎日」の前身) M二十三—十一—二十八 A : 女相撲の停止 B : 回向院の女相撲は一昨夜警視庁がにわかに見合せを命じ、櫓太鼓と、その下の女の顔触れ看板をとりつけさせ、唯力持等の芸は差支えない旨を達した。C : 本興行にふれている書物はすべて引用している。

○「同」T十五—三—二十五夕刊(二十四日刊)(一九二六) A : ダンスと女相撲・警視庁から厳しいお達し・ダンスには戸簿を作り・女相撲はまかりならぬ B : (ダンスの方は略) 浅草仲見世で興行中の女相撲は肉シャツ一枚の上に「ふんどし」をつけ、男の飛入り勝手の看板をあけ風俗上面白くない行為があったため警視庁は中止を命じ、二十四日附で東京府下では女相撲一切まかりな

らぬという厳しいおふれを出した C : 明治大正昭和世相史(前出)他多数。D : 「読売新聞」(東京)同日附朝刊および、「朝日新聞」同日附朝刊。

○「同」同日附朝刊(特別かこみ記事) A : 日日講座・追はるる女相撲・古書の示すその起りと、彼女等の今の生活。B : (夕刊の報道にふれ、日本書紀、嬉遊笑覧の、比丘尼「義残後覺と混同している」を引用して) 女相撲の職業化は明治初年で、山形の本間某がはじめた。その元祖が今度禁止された高玉一座である。分身の第二部が目下尼ヶ崎を、第三部の石山興行部が九州を巡業中。女力士は農家の出で、十五、六才と二十七、八才の独身、自分でなったのもあり、男にだまされて売られたものもある。三十人ばかりでのべつ取ってはたまらぬので、三味線入りの相撲甚句八木節、ドジョウすくいなど民衆芸術をやってくれる。力は太したものではなく、力芸はコツでやる、大関級が向うまかないで月百円位

の収入、以前は柔道着みたいなものを着たが、このごろは肉シャツで許された、なんで警視庁がさしとめたのか、高玉興行部では男など絶対よせつけていないという。

○「同」S五―六―二十一、A：「洋服も剣道の極意サ」と大麻剣士・賑かに鹿島立・女相撲も春洋丸で初の洋行（写真入）。B：郵船サンフランシスコ航路春洋丸で剣術士と女相撲が米国へ立って行った。三等船客に山形市旅籠町の石山兵四郎氏の連れた女角力団十八才で二十五貫の戸塚きくゑさん一行、二十五名。芸妓時代男ざらいで石山さんのところに転がり込んだ秋田美人渋谷きくのさんは語る：はじめての洋行だから、どんなことになるかわかるもんではありません、ハワイから米国へわたるかも今のところ決っていません。

○「同」S五―十二―八、A：アメリカの水兵さんを、双笈で突張り出した。ハワイ巡業の女相撲団帰る（写真入。写真説明：帰朝した女相撲・片や西の大関三部しんさん・片や東の大関館山みよさん）、B：（上記の）「大日本勇婦団」東大関館山みよ子さん（十八才）二十四貫の団子みたいな体を一匁も減らさず、西大関三部しんさん（元秋田芸妓）

も美しいのを一層みがき立て、二十八名が七日朝九時横浜入港の春洋丸で帰朝。めでたいのは西関脇中村なみさん、太平洋の真ン中で未来の関取り洋子さん（名付親は和田春洋丸船長）を分べん。船中大人気、五百円の御祝儀。花形玉椿こと三部しんさんの気炎、ハワイの水兵さんが塩をまくのはなぜかときくので、勝負を神聖にする日本相撲の礼儀なのよと説明。日本で芸者手踊を見た水兵さんが相撲踊りの方がダンス的だと私のところへ来て踊ってくれとせがむのよ、私じゃ日本の恥だと思ったから双笈で突張り出してやった、そしてたら日本ムスメ、力が強いと無性にうれしがるのさ。C：平井通（蒼太）氏諸著、およびそれを孫引きした諸氏の著。D：出帆の方だけ「東京朝日」同日附。

○「朝日新聞」（東京）S九―七―十三、A：地方雑信、B：佐賀県神埼郡仁比、（山？）村での美女四十余名の雨乞い女相撲、C：中山太郎氏の「歴史公論」の文（「雑考」参照）「奇ク」にも岡平氏の紹介あり。氏の文は博渉であるが、書名、日附に、しばしば誤りがある。

○「毎日新聞」（東京）S二十六―十二―二十四、A：（一面カコミ記事）東京フィナ

ーレ、B：高田馬場にかかった女相撲の取材福湯豊氏。図は那須良輔氏。D：「内外タイムス」S二十七―一―八、写真入り紹介

○「佐賀新聞」S二十九―四―一（伊万里など新市の誕生の記念行事について記している、波多津女相撲）（予告）

○「読売新聞」（大阪）S二十九―五―十六附夕刊、A：（グラフ）「女場所」B：第一面全面をあてて、波多津女相撲の写真紹介場所入り、呼出し、土俵入り、取組み、などにかんたんな解説。

○「佐賀新聞」S三十七―四―十一、A：五年ぶり女相撲（写真入）B：波多津女相撲が、高尾山金比羅で行われた報道。E：「奇ク」S三十七―七に伊万里進氏は、この催しが「毎日新聞」の「雑記帳」欄に同日附で出ている旨報じられているが、わたくしのしらべた各版（西部も）にはない。佐賀地方版のものであろう。又、本文中S三十二にも催されたとあるが、この報道は拾っていない。

○「長崎新聞」S四十一―十一―十九、佐世保相ノ浦のおくんちの報道、その由来に女相撲があったとのべている。属平氏の御指摘で拾い出した。

以上の他にも、平井氏の諸著にある京都、大阪、滋賀、北海道などの興行の報道もあるのではないかと思うが、まだ拾えない。又、これは少し別物だが、村松梢風氏の「仇討女角力」の広告が「朝日」（東京）S十二—八一五にある。

将来とも報道の拾集には心掛けねばならないが、非常な労力を要する仕事である。

なお、テレビジョンでは、NETアフターヌーンショーS四十二—三—二十に山形県温海（あつみ）町VS長崎県式見町のものが出た。「日本TV」の十二P・Mの「女相撲日本一決定戦」の、放映日は次のようである。一：S四十六—六—十六、二：七—十四三：八—十八、四：十一—十、五：S四十七—一—十九、六：五—二十四、七：七—十九八：九—二十、九：十一—二十二、十：S四十八—二—七、十一：三—二十八。この第十回は一月二十四日の予定で、当日の各新聞の番組欄には予告されているが、当日ベトナム停戦の大ニュースがあり、十一P・Mもこの特集にかわった（この番組の司会はいつも三木鮎郎氏）。二月七日の各紙番組欄には当然又出ているから、もし後日、この番組を新聞のみで拾う人があれば、一回多く見える。

上記の明治以来の報道による調査も、これに類することがいつどこに混入しているかもしれない。なにによらず、後世の調果の困難なゆえんである。

◎書誌類補遺

「雑考」作成時不明のもの等を補っておく。

○「乗穂録」（へいすいろく）属田挺之（新川）著。二編二巻、四冊随筆。寛政七年初篇（一七九五）（原、活）。一卷下に「明和年中に、婦人の相撲はやりしことあり。司馬温公集に、論三上元令婦人相撲二状あり。唐土にもありしことなり」これをみると、静軒居士の文と全く同じで、こちらの方が古い。従来、唐土女相撲を江戸女相撲についてふれたのは「江戸繁昌記」以来だとされているが、居士は、どうもこの新川を引用したものらしい。新川は学者として要職にもつき、当時ひろく知られていた人である。この唐土の話については、中国文献の不自由のため、まだ明らかにしていないが、「資治通鑑」は五代までで宋のことは出ていないし（静軒居士が趙宋とかいている）、京都大学人文科学研究所の「索引」にもないので、「司馬文正公集」八十巻を見ればよいのではないか。

○「風俗画報」第二十三号、M二十三—十二—十（一八九〇）。上記しばしばふれたように、回向院興行を報じている。表題：女力士。

○「猥セツ風俗史」宮武外骨著。M四十四、（一九一一）雅俗文庫。上野山下に男女相撲違式註違条例。

○「檣重雜筆」小出檣重著。S二（一九二七）中央美術社。一四五ページ以下に「足の裏」という文があり、「私達の小学校時代、活動写真はまだなく、生人形、地獄極楽、化物屋敷、かがみぬけ、クロ口首、奇術、軽業女相撲、江州音頭、海女の手踊、にわか、など……」とあるのを、平井氏が年代的に計算して（小出画伯はM二十大阪の生まれ（一八八七））M三十ごろとされたもの。この本は愉快な本で、奈良の女鹿が屁を放った話など秀逸である。

○「変態見世物史」藤沢衛彦著、S二（一九二七）文芸資料刊行会。男女相撲、違式註違条例。

○「江戸文化」（雑誌）第二巻第十号。S三—十一（一九二八）六合館、江戸座談会、（五六ページ）の広田星橋氏発言に、「山下で按摩と女の相撲がありました。（二行略）」

女ばかりの相撲があったが、好い女が悪い女とやる、皆が好い女の倒れるのを待つ。どうせ八百長であるが、取組んでから度々危機一髪で好い女が負けさうになる、アハヤ投げられんと見物に、手に汗を握らせて、ドッコイと立直る、トド汚い女が倒れるといふ云々」

○「らぶ・ひるたあ」酒井潔著、S四（一九二九）文芸市場社。「性的見世物考」の項に女相撲、盲と女の相撲。

○「グロテスク」（雑誌）、S四一八（一九二九）文芸市場社。「古今見世物展覧会」に女相撲、絵（和田信義文、渋谷於寒画）

○「江戸繁昌記」口語訳、佐藤進一訳。S四（一九二九）春陽堂、（新版あり：S四十七・九一十三崎書房）

○雑誌「民俗学」第四卷第二号、S七（一九三二）民俗学会。「米代川中流扇田附近の土俗」今井晋、明石貞吉著。ひろく引用されている雨乞い習俗の原文。職業女力士の来たこともあるなど、なお調査すべき資料。

○「新要目による運動会催し物選集」小学校体育研究会著、S十一（一九三六）三友社すこし珍しい資料で、今は入手にくいので原文を抄録する。：「三、相撲行進、相撲行列。かつて視察に行った時鳥羽の港で……そ

の夜女子青年団の人々の「相撲取力士」の女相撲行進を御馳走された……。海女の仮装としてふさはしく云々。異色、女子青年団の相撲。かつて地方力士として名を馳せた「神明山」や南部藩御免の行司「福柳」を生んだ土地柄のスポーツは近代文化の浸潤に押されて男性から漸く忘れ去られようとするのを慨し角道復興の母性を作るべく雄々しくも岩手県下閉（伊？雄松注）郡津軽（石？同）村字荷竹の女子青年団はさる九月二、三日の両日地方川井村の鎮守の月例祭に招聘され、男子選手に交って、すばらしい力闘ぶり、囃し方の太鼓のさ中にエイヤーオー、と掛声も勇ましく女行司のハッケヨイヤで土俵せましと荒れ廻る姿は巴、板額、そっちのけの女丈夫ぶり。見れば仕切から土俵の作法はおろか土俵入りにはお粗末ながら土俵名の若桜、隅田川の化粧廻しをしめるといふ本格だが、体当りの物柔かさ、投げられて転ぶ姿のしなやかさ、さすがはお嫁入前の娘だ」戦時体制へ向かう女子青年団と土地の風俗の結合した記録として注目される。これは新聞記事の転用のようにも思われるが、まだ明かにしていない。又、上記の昭和X年九月二、三日以前後にも、当然、こういった催しはあるはずであ

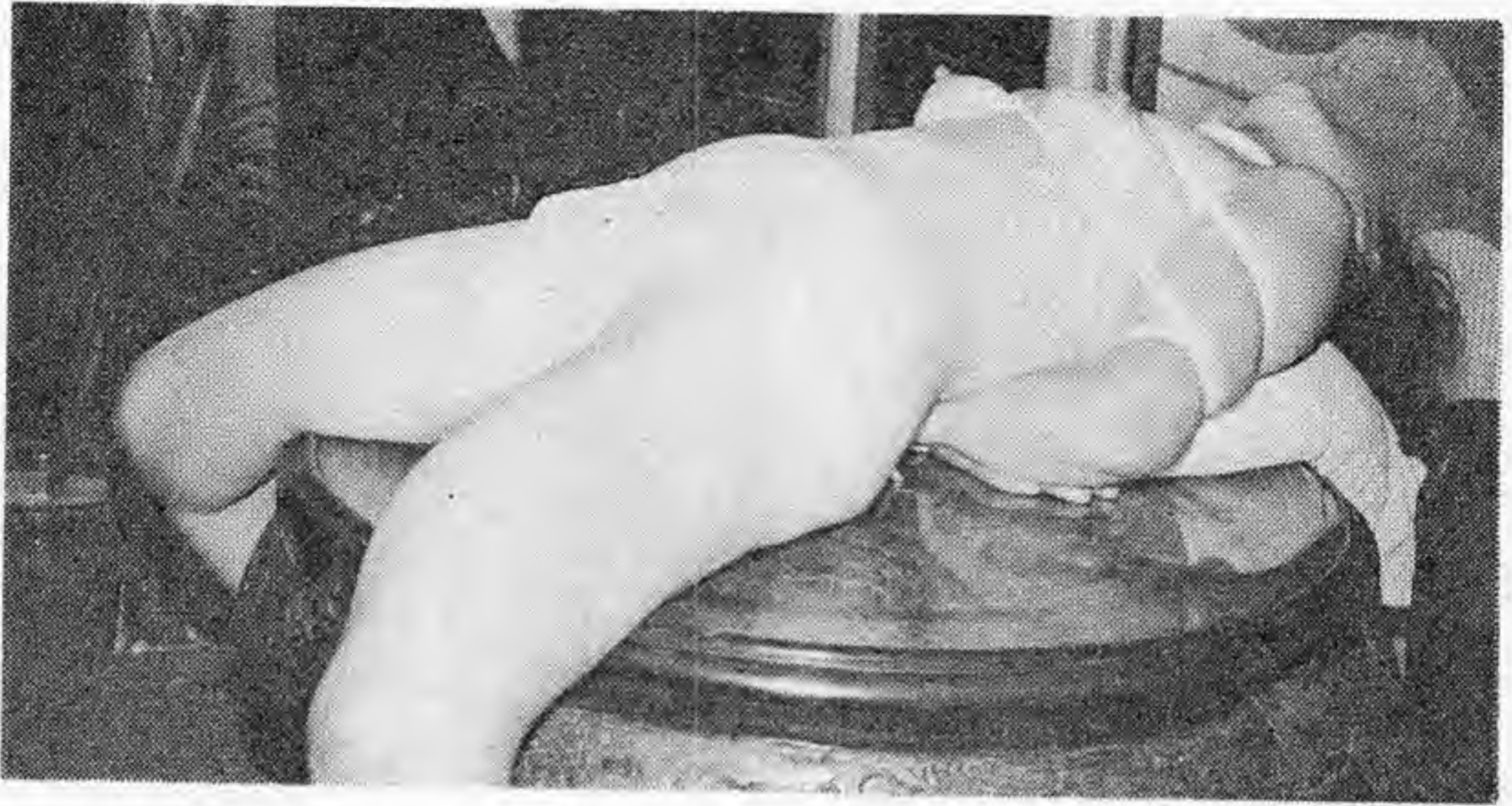
り、今後の調査を要するものであろう。

○雑誌「民間伝承」、第九卷第八号S十八—十二（一九四三）。潔川清子氏の「雨乞いその他」として秋田県鹿角郡毛馬内町においてその年農家の主婦たちが女角力をとったため長期の干天にもかかわらず雨がふった、とある。「奇ク」に岡平氏も紹介済み。瀬川氏はここで女相撲などの「女のわざおぎ」の拾集をよびかけておられる。

○「話の大事典」日置昌一、S二十五（一九五〇）万里閣。略史。

○「民俗学事典」柳田国男編、S二十六、（一九五一）東京堂。扇田の雨乞い。

○「綜合日本民俗語彙」第一巻、S三十、（一九五五）平凡社。扇田。なお、この本の女相撲の項に愛媛県御旗村のことをあげているため、これを引用して同地に女相撲の習俗があるとの説が流布しているが、これは「女だけの雨乞い」の例としてここに入っているもので、女相撲ではない。従って、四国にも女相撲があるという説は（これからなら）誤りである。この項の「山村手帳」というのは、「山村生活の研究」（柳田編、S五、岩波）の原稿で、ここに関敬吾氏が雨乞いをかいているなかに、このことが出ている。



手記

二人の男性に責められた私

木村 洋子

七月号で、私の奇妙な性癖について、誌上に載せていただいたところ、さっそく、沢山の読者の方から、お便りを頂戴しました。私の連絡場所が局留だったせいもあって、お返事を差し上げるのが、大変おくれてしまっていていろいろと、御迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

今日は、そのなかから、二人の男性の方から同時に責められたことについて、申し述べてみようと思います。その方は、お二人ともカメラを持ってこられ、私の責められている姿を、何枚も何枚も、写真にとられました。六十枚ばかり送っていただいた写真のうち同じようなポーズのものも幾枚もありました

から、ここに十三枚ばかり選んで、同封いたしておきますから、もし、およろしければ誌上に御発表下さってもかまいません。

私は一人の男性に一对一で責められるのも勿論、好きですが、二人の男性から同時に責められるのは更に大好きです。

一人の方に見られるよりも、二人の男の方に見られるという愉しさは、たまらないのです。殊に、二人の方が、私の素裸の、なにもかくすことのない体の特徴を指さして、お互いに、ヒソヒソと、批評して、色や形について、蔑みの言葉を交しておられたりしたら、もう、全身がわくわくしてしまいます。

その場合、男性の方ばかりではなく、女性

の方が混じっていると私は更にみじめになって、より興奮してしまうのです。本当に、私って変でしょう。以前に、大塚啓子さんや山原清子さん、それに東浦さんなんかに見られてからは、そうした機会を得たいものだと、常に考えておりました。

それから、私が、かくすことの出来ない部分を見られたり、いたぶられたりするのは、やはり、手足を縛られて、無理矢理、そうされている、と、自分で諦めている方が、より好きです。

痛いことは随分、辛抱はしますけれど、痛くされること自体が、決して好きなわけではありません。

けれども、私は今まで申し上げました通り、マゾの性癖ですので無理じいに、痛い目に合わされるのでしたら、それは好きではありませんが、強制されることによつて、痛さが痛さでなくなることはよく経験することです。最初、痛いと思っても次第に、それが、うずくような快さに変わってゆくのです。

私がお便りをいただいた奇クの



読者の方は、お手紙に何も書いておられなかったもので、私は最初、その方が、お一人で来られるものとはばかり思っていました。それがいざ、お約束の場所へ行ってみたら、男の方がお二人だったので、私は、びっくりしました。

顔がほてって、胸がドキドキしました。これから、二人の男の方から責められ、すべて

を見られるのだ、と思うと、体の奥底からの気持よさが、つき上げるように湧いてきて、身も心も、うきうきしてきました。

私は、車の後の座席に乗せてもらって、街の中を、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりしました。まだ陽は高く、その街並みはひっそりしていました。二人の方は、前の座席で顔を寄せて、ひそひそと話し合っておられました。やがて車は、半ば地下になった薄暗い駐車場の中へ入ってゆきました。

こうして、二人の男性の方に捕まってしまったからには、もう私は、この人達の言いなりになる女奴隷なのです。ですからどんなことをされても、言いなりになって責められるのです。そう考えるだけで、私は、天国への階段を登るように幸せでした。

現実には、階段ではなくて、駐車場からは、エレベーターで四階の部屋まで直行します。「責め道具の準備は、余りないんだが、とにかく、二人がかりで責

めてやるからな」

部屋へ入るなり、私は二人の男性に抱え上げられてスプリングのよくきくベッドの上へ、ぽいとはりなげられました。

何をされるのかと身構える私の体へ、二人の手が伸びてきました。

「いや、いや。なにをするのよッ」

「何を言ってるんだ。お前はマゾなんだろ。文句を言わずに、言われた通りにしろ」

一人の男が、そう言つて、起き上がろうとする

私の胸を、ぐっと突きました。私は弾みで両足をパツと蹴るような格好で、思わず仰向けに倒れてしまいました。

私は口惜しいと思いました。たしかに、私はマゾです。男性の方にいじめられ、責められて喜ぶ女です。現に、私はこの部屋へ入るまで、そうした妖しい期待で、胸をふくらませてきました。



それが、部屋へ入るなり「お前はマゾだから……」と言われると、急に反発した気持ちが湧いてきました。胸をつきとばされたから尚更、そんな気持ちが起ったのでしょうか。

これがプレイの熱が高まっている時でしたら、同じ乱暴なこと、いや、もっともっと、ひどいことをされても、快感にこそなれ、嫌悪の念など、起こりようもなかったのです。

れようとなりました。

「四つん這いになって、食べる」と言つて足の指にお菓子を挟んで差し出されたとき、私は思わず顔を、そむけてしまいました。

どうして、そんなお菓子が食べられまじょうか。私の冷えきった気持ちが、少しも昂まつてはこないのです。屈辱的な気持ちだけで、どうしても被虐の快感が湧いてこないのです。

仰向けに寝かされた私の顔の上に、べったりとお尻をじかに置かれても私は汚いと思うよりも、その先に、全身がしびれるような快感で、思わず知らず、舌を伸ばしてアヌスを求めている私でした。

以前、このような経験がありました。

縛られてもいず、裸にもされていない普通の状態の私に「お前はマゾだそうだから」というだけで、足の指に挟んだお菓子を、無理に食べさせら

足の指を口の中へ押し込まれて、ペロペロと舌を出して舐めながら、その塩辛い味に、体がとろけてしまいそうな快感を味わったことのある私が、何故、このお菓子が食べられ

ないのでしょか。

今の場合も同様です。ベッドの上へ、洋服を着たままで、放り出された私に、お前はマゾだから——と、

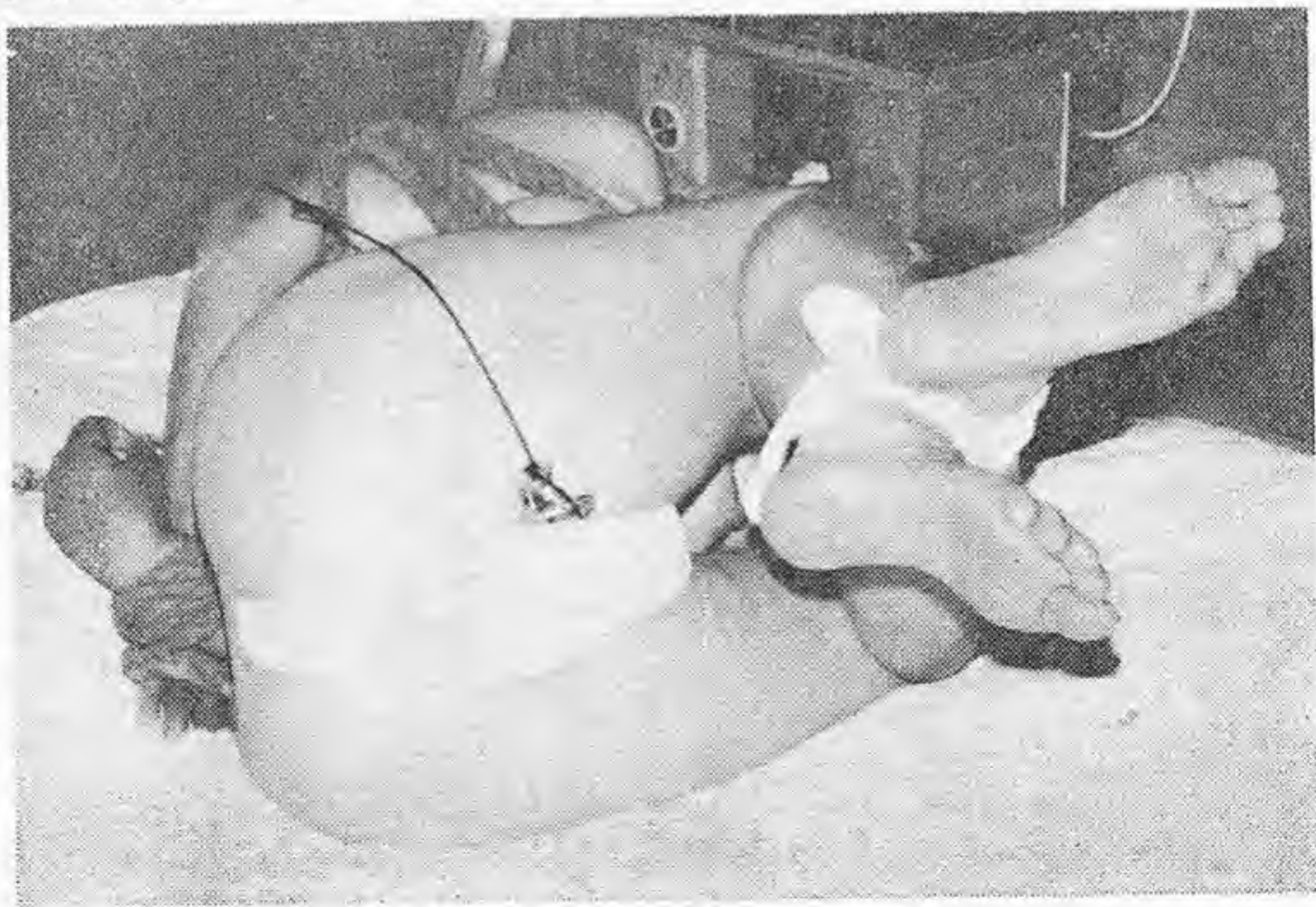
いう理由だけで、手荒なことをしたって、それが、私の被虐の心につながらない限り、少しも快感となつて反応してこないのです。

私は、すねたように体を二つ折りに曲げて布団の上で、じっとしていました。

「余り、手荒なことをするなよ」

一人の男にたしなめられた乱暴な男は、口笛を吹きながら出ていって

浴室へ入ってゆきました。今日は何故、燃えてこない



のだろうか。と自問自答してみました。

「すまん、すまん。あいつは、気短かな奴で

ね。人はいいんだが、手が早くて困るんだ。まあ、気を悪くせんでくれよ」

私の文通していた彼は私をそうとりなしてから、自分も風呂へ行ってしまうした。

二人の男性が入浴をすませてから私も風呂へ入りました。上ってくる、二つしかない浴衣は彼ら二人が着ていますし、脱いで置いていた私の洋服、下着も、そこには見当りません。私がタオルを持ったままで、うろうろしていますと、カメラを持った二人が近寄ってきました。

「さあ、奴隷に、着るものはいらないだろ。こっちへ来るんだ」

前を押えていたタオルを剥ぎとられ、両方の腕を左右から二人の男にとられました。

途端に、私のマゾの血が、かっかっとならえさかってきました。風呂上がりのせいもあったでしょうが、急に汗が全身から、にじみ出てきて、初めての二人の男性に見られる自分の裸が恥かしくなりませんでした。



のようなもので、括られてしまいました。

両方の手が括られてしまって、もう前へは、回せないのだ、と思うと、体の前面の掩うものとして何もない涼しさが、急に現実の無防備感となって、心もとなさが襲ってきます。

「ああ、待って、待って、少し待って……」

私も女の身。いかにマゾとはいえ、風呂から上がって、すぐにしたいこともあるのです。

それに彼等二人は、十分、体も拭き終わっていない私をつかまえて紐で括ってしまったのです。胸に二筋ばかり掛かっているだけでしたが手の自由のきかないことには変わりありません。

私の願いも無視して、二人は私をベッドの上へ、ころがしました。下は柔らかい布団ですし、括られているのは紐ですから、少しも痛くはないのですが、これから、何をされるのか、と思うと、不安な気持を、かくしようもありません。私は二人の動きを、じっと見守っていました。

両膝を合わせて、よたよたするのを、腕を持ち上げるようにしてベッドのある部屋へ運んで来られるなり、後手首を背中中、白い紐

二人の目は血走っていて、吐く息も心なしか荒く感じられるのです。もとより、私は男を知らない女ではありません。いや、男の、その時の欲望を、誰よりも、よく知っているつもりです。それなのに、私は、そのことに対しての欲求を、不思議と積極的に持っていないのです。

ベッドの上に、素裸で縛られてところがされている私の前に、浴衣一枚の男が二人、目をらんらんと輝かして立っているのです。

これが、もう何度もプレイしている相手でしたら、次に迫ってくる順序も、凡そわかっていて、私は、そのことへの期待で、胸をおのかせるところなのですが、始めて会ったこの二人の男は、一体、私に、どんなことをしようとするのか、その不安感で、私は少しばかり異和感に、さいなまれました。

「おい、やろうか。お前、そっちをやれ」

二人は打合せをしてから、どっと一度に、私に襲いかかってきました。一人は右の足へ他の一人は左の足へととりついてきたのです。

「ああ、いやいや、やめて……」

私がそう言ったのに、二人はハァハァ荒い吐息を洩らしながら後手首を括った紐の余ったのを右と左に振り分けておいて、両方の膝

に通して、締めつけたのです。

「あああ、やめて、やめて……」

私の哀願もものかわ、両方の太股は、大きく左右に、無理に開かされてしまいました。いつもは、ぴたりと合わさっている内股が、ぱっくりと、口をあいたように、ひろがっています。

女として、かくしておかなければならない個所が、すっかり、むくれあがったように、表へ出てしまったのです。

二人の視線が、期せずして、その部分へ痛いように注がれています。私は、むずがゆいようなジンジンする気持ちに、お尻を思わず、むずむず、させてしまいました。



ああ、両手の自由がきかないということとはなんと、やるせないことでしょうか。いくらお尻を振っても、二人の突き刺すような視線からは、逃がれることは出来ないのです。

それでいて、私の一つの心は、もっと、もっと、大きく、股が張り裂けるように、もうこれ以上、開ききれないというくらいに、股を開いていたいという矛盾した気持ちになっていました。

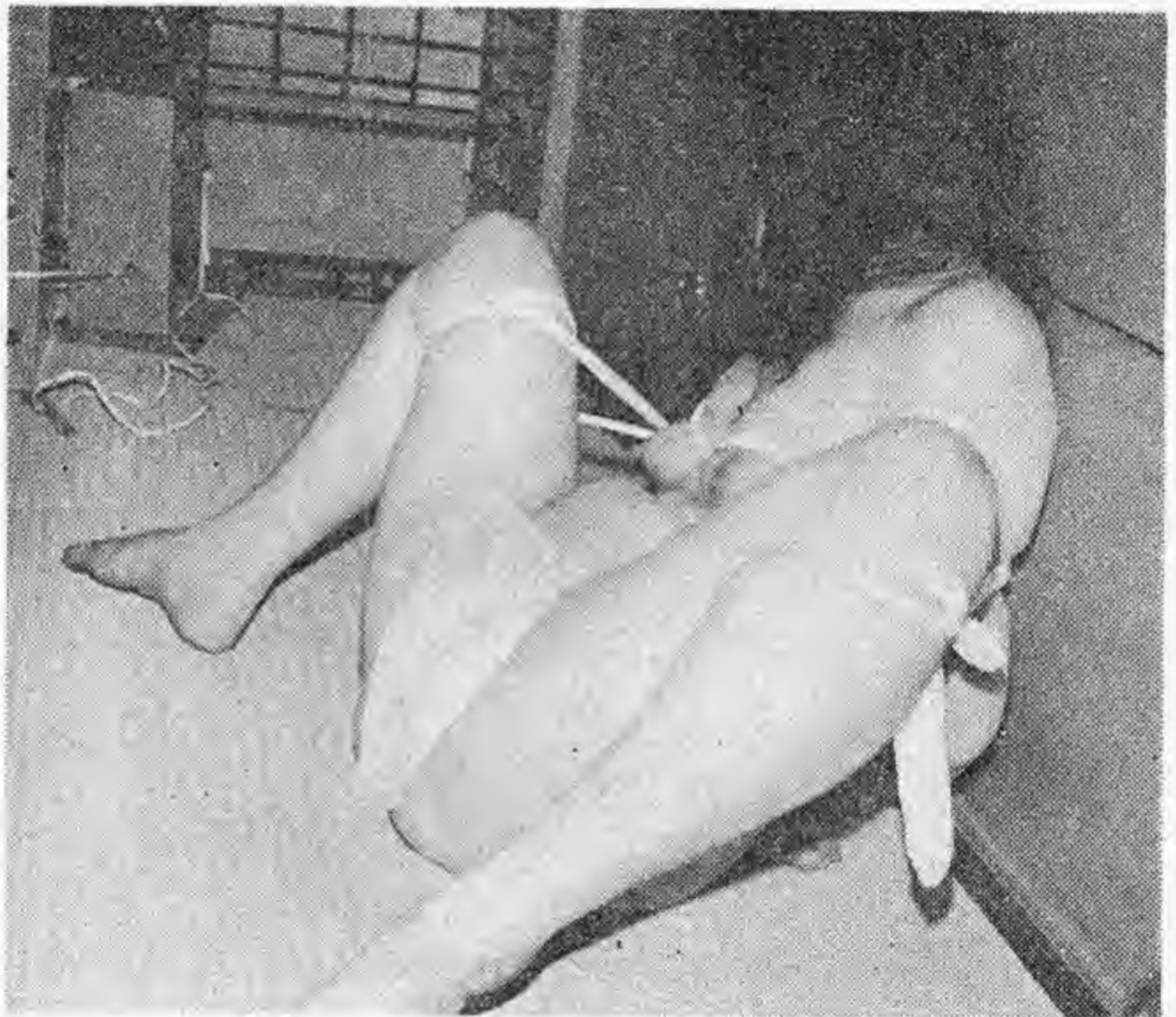
消えいりたいような、たえられない恥かしさの反面、心臓がドキドキンと脈うつ快感が私を、たまらなくしていました。

「おい、案外うすいじゃないか。ねえ君、ちょっと、見てみないか」

「ふん、そうだな。この辺は、全然ないじゃないか。色はピンクで、余り使ってなさそうだが、いっそのこと、きれいに、一本残らず、むしり取ってしまおうか」

「そうだ、そりゃ面白い。責めの手始めに、禿山にしようか。こりゃ傑作だぞ」

「いやよ。一本でも大事にしてるんだから、抜いたりしたら、いやよ」



う、ないも同然に、なってしまおうのです。

「ハハハ、抜かれるのが、そんなに恐ろしいのかい。それだったら、抜くのは勘忍してやるが、その代りに、いみ割れたところへ、いろんな責めをやらせて貰うよ」

「僕は、ローソクとパイプを鞘の中へ入れて来てるんだが、あれを、とってくるよ」

「うん、それも面白いが、その前に、この太筆を水に濡らして、一丁、やってみるか」

どんな淫虐な責めをされても、もう私は、狂ったように、身をふるわせて呻き、悶えるだけで、どうすることも出来ません。

背中の下敷きになった後手首が、柔らかな布団のおかげで、余り痛くなかったのが、せめてものことでしたが、その代り、そっくりかえったように、むきだしになった部分への責めは、二人の手で替るやられました。

一人が責めている時には他の一人が見ているというのが、私の興奮を一層、昂めまし

二人は勝手なことを言っているのです、私はあわてて、そんな責めを断りました。私はもともと、大変にうすいんです。上の方だけほんのまばらに、それも中央部だけに集まっているので、こんな格好にされてみると、も



た。私は、責められている時でも、犯されている時でも、他の第三者に見られていると思っただけでも、たまらなくなるのです。

入れ代り立ち代り、二人にカメラで幾枚も写真をとられました。写真を一わたりとり終わると、軽々と抱え上げて今度は畳の上へ、ころりところがされました。下が今までの布団と違って畳なので、肘や手首が急に痛くなったのでお尻を振って身をよじったので、一層、股が開いたように感じました。

一人が写真をとると、他の人も負けじと、またカメラを持ちだしてきます。写し終わると足で蹴とばして私をころがし、ポーズを変えておいて再びシャッターを切っています。

「おい、早く、これを使おうや」

待ちきれなくなつて、ローソクに火をつけて一人の男が持ってきました。

私はさっそく、お尻を上、頭を下にしてポーズをとられ、上になった両足を左右にひろげさせられ、その足首に紐を結んで両方から脚が一直線になるくらい、思いっきり開かせられました。こんな時、責め手が二人いると大変に便利です。私の脚は、右と左と同時に、引っぱられて縄止めされました。

私の足は一文字に開かせられたまま、もうすぼめることが出来ないのです。お尻が上になっていて、首が床についていますので、私は下から逆に天井の方を見るような格好になっています。

二人の男たちは、何やら、話し合っています。一人は火のついたローソクを持っています。もう一人の男は、バイブとクリップ、そうです。あの書類なんかを挟む金属製のクリップを三個ばかり、手にしています。

私を、そんな、あられもない格好にしておいたままで、これから、どれで責めようかと二人で相談しているのです。何で、どんなにして、責められるのだろうか。と、そう思っただけで、私の体がジーンと熱くなってきました。体の熱さが、中心部が全身に移って

くにつれて、お恥かしいことですが、紐で括られた両方の足が、ブルブルとふるえてきて、どうしようもないのです。

自分で止めようとしても止まらず、それが二人に見られていると思うと、恥かしくて、一層激しく、ふるえが出てきます。それに、

あからさまに天井を向けられて、さらされた部分が次第に変化してくるのが、自分でも、よくわかっているのです。

「あああ、ああ……」

それが

私は、

何を叫んだのか、

自分でも

はっきり

とは覚え

ていませ

ん。手術

台にのせ

られた素

裸の小羊

ですもの

自分の意志では、どうする

ことも出来ません。手の自

由も足の自由も、一切、き

きません。只、自由に開け

る口で、呻き、喘ぎ、そし

て、何か、言葉にもならぬ



言葉を出していたようです。

ローのとけた熱いしずくが、柔らかい肌に一面に流れてきたのを覚えていますが、責められる悦びに、のたうちまわっている私にはそれを熱いと感じる余裕など、ございませんでした。次から次へと、襲ってくる快美感に

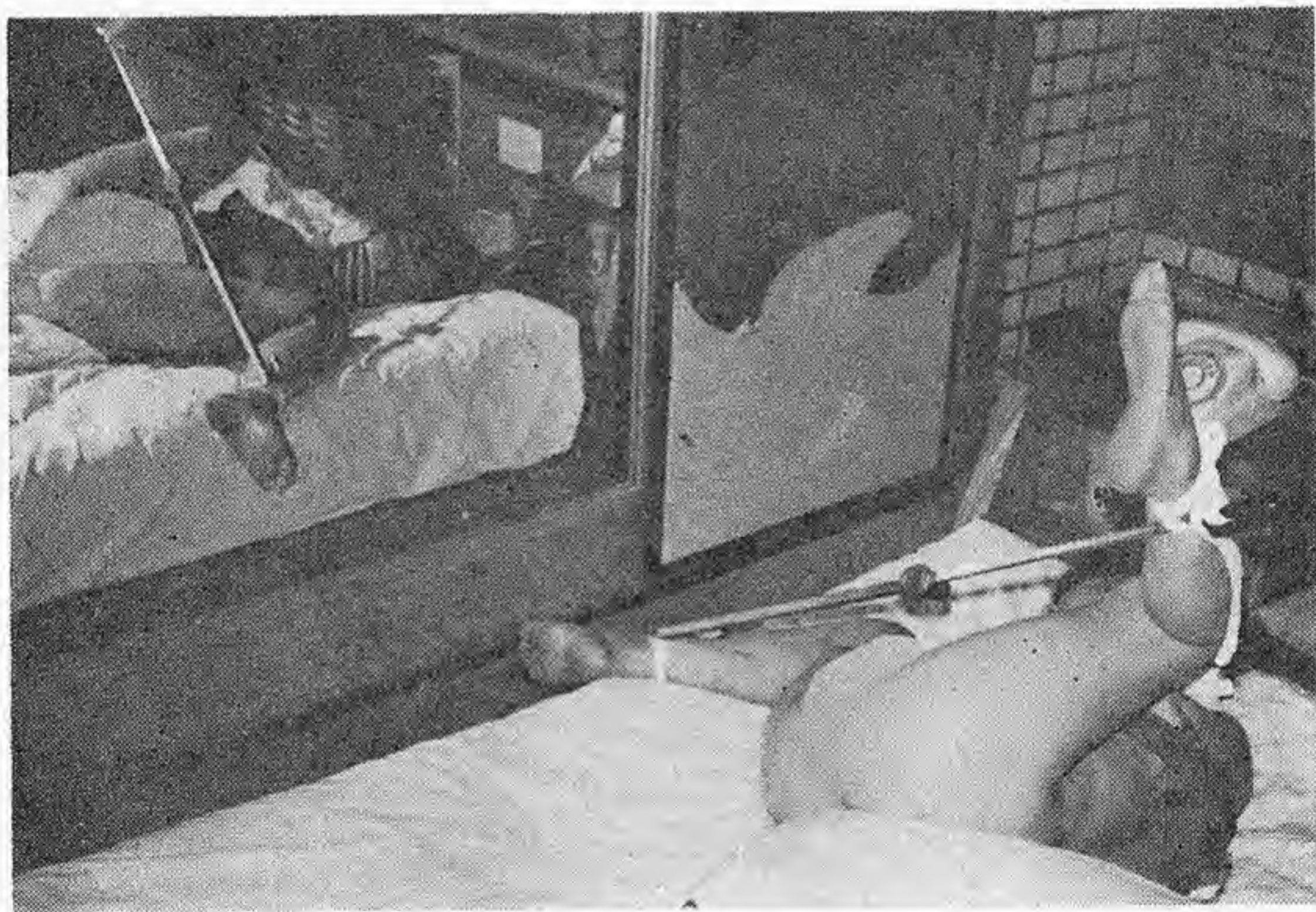


只、身体を、ゆだねているばかりでした。

一つの責めが終わると、私の体は、ぐったりとして、どこにも力が入りませんでした。心は先程の快美感の名残りが、ほのかに残っていて、体の奥底で、くすぶっていました。二人で競争の様に写真をうつしてから、カメラをテレビの上へ置いて、一休みもしないで次の責めにうつってゆきました。

伸ばすと二倍の長さになる金属製の銀色の棒を持ち出してきました。話によると、車の盗難防止の錠なのだそうです。縛られている私には、それがなんだが、魔法の杖のように思えて、不気味でした。予想していました通りその棒の先で私は大切なところを、さんざん、おもちゃにされその場面をもう一人の男から写真にとられました。

みじめで、あさましい、そんな姿をさらしているながら、プレイによって昂揚してきていた私の心と体は、逆に、次の責めを求めて燃えていました。二段に伸ばした棒で、両方の足首を左右に開かせられて括られた時も、そんな



格好で写真にとられながら、もっと、変わった責めをしてほしいと思うほどでした。

今まで、使っていた白い紐の代りに凄く太い縄で後手に縛られました。見た目は、ごつごつとしていて痛そうでしたが、縛られてみると案外そうでもありませんでした。白い紐を、その太縄につないで、股間縛りに、されました。でも、股間縛りといっても、股間縛りではないのです。紐を二本使ってその部分で、いみ割れるようにするのです。

そんな股間縛りのままで、私の受けた羞恥責めは、パイプ責めとクリップ責めでした。

もし、パイプによって、私のマゾの心に火がつけてられなかったとしたらあの金属製のクリップによって挟まれる痛さには、とても耐えきれなかったでしょう。

今はもう、普通だったら、痛くて、痛くて辛抱できる筈のないクリップによる挟みつけが、それこそ、最高の悦楽なのでした。

本当に、不思議なものですわね。痛いということが、普通だったら、当然痛くてたまらない刺戟が、これほどまでに快いとは、一体、どういうわけなのでしょう。

そんな責めをしている時の、あのきらきらと光っている男の人達の目。そして、ハァハァと荒い息を吐いている姿を、眺めていますと、一層、私も、そのプレイの中に没入してゆきます。冷たい目で見られるよりも、熱い目で見られる方が好きです。

ここで、勢いの赴くまま、一つの失敗をしました。畳の上よりも、この方が、よく見えるし、写真にうつしよいから、ということとでガラス張りのテーブルの上へ乗せられたのです。丸いテーブルに一枚の大きなガラスをのせてある上へ、私がすえられたのです。

開股縛りにされた私の前が、すっかり、そのガラスにうつってしまうので非常に恥かしいのですが、男の人達はそれを面白がつて盛んに、シャッターを切っています。そうして、じっと、している間はよかったのですが「お前は、セリ市に



かけられている売られゆく女奴隷だ」とか言って、そのガラスの板の上で、あっちゃ、こ

おいでもらって、チクチクチクと針でつつくんだ。面白いぜ」

っちへ、ころがされている時です。パシッ、という鈍い音がして、私があっと声を挙げる間もなく、ミチミチと、二つにひびいてしまいました。ころげそうになった私は、あわてて抱え上げられましたので、無事でしたがガラスの丸板は、物の見事に真二つに割れてしまいました。

あとで帰りに、モーテルの人から、一万円の弁償金をとられたそうですが体重を片寄ってかけたために、割れたのでしたが、大変な失費をかけてしまいました。

そんなことで、今の今まで、順調に進んでいたSMプレイが、急に、ここで、一頓挫してしまいました。そのために、やっと、私はここで縄を解いて休ませてもらうことが出来ました。

「凄いマゾだせ。どんなことでもさせよる。次は、あれをやってみるか」

「それもいいけど、これなんか、どうだ。こんなマゾじゃなかったら、なかなか、出来っこないぜ。お前に押えて



「俺は、アヌスの方がいいな。そこら中にある、なんでも突込むんだ。石鹸を割ったのなんかもいいし、あの、シャンプーの瓶ね、あれを逆さに入れてみるよ。傑作じゃないか。ポマードやクリームあるしな」

二人は、好き勝手なことを言っています。一度、プレイの峠を越してしまった私には、

聞きよい言葉ではありませんでしたので、席をはずして、トイレへ向かいました。

トイレのドアを閉めようとした時、ふいつと手ごたえがして、逆に開けられてしまいました。バスタオルを腰に巻いたままでしたので、そのまま、しゃがもうとしていた私は、はっとしました。カメラを手にした二人の男

がドアの外に立っているのです。

「こっちを向いてするんだッ」

いくらなんでも、カメラで狙っている方へ向かって出来る筈ありません。中腰のままおろおろしていますと、腰に巻いていたバスタオルを剥ぎとられてしまいました。もう、こうなったら、お尻を向けていても、正面に向いていても、すっかり見られてしまうことには違いはありません。

さつきから、いろんな責めで飼い馴らされてしまった私は、次の男の言葉で、素直に、それでいて、いかにも仕方なさそうに、ドアの方へ体を向けて、しゃがんだのです。

ここへ来てから、まだ一回もトイレを使ったことのない私でしたから、尿意はあるのですが、真正面からカメラを向けられては容易なことでは出そうにありません。

次第に足が、しびれてきます。

見られている。見られているのだ。

そう思うことによって、私の体の中のマゾの火が、燃えてきました。足のしびれも、そして、目の前の男の人達のこと、一切、わかりませんでした。

パツ、パツ、と、目もくらむような光が目に入って、あとは真暗闇でした。

.....<体験手記>.....

私のネクタール採取苦心談

岩 本 摩 像

私が兄の会社を手伝うために、大阪へ来たのは大学を卒業した年の初夏のことだった。もう十年程も昔のことになる。兄夫婦の家は、阪急の沿線にあって、駅から歩いて十分程の、環境の良いところであった。

暫くは私は、そこから東区の小さなビルの二階にある事務所に、出勤していた。しかし、かさ高い大の男が、いつまでも兄のところに居候しているわけにもいかないので私は、アパートを探すことにした。

アパートは、すぐに見つかった。兄の家から、それ程、離れていない場所に、建築中の一棟があった。長い間、放ったままにしてある田圃の一面に建てていて、まだ周囲に余り家もなく、静かな環境であった。私は中を見せてもらい、その日のうちに入居の予約をしておいた。そして、約二カ月程後に、出来上がりと同時に引っ越した。

私の入った部屋は、二階の南西の角にあった。小さな台所がついた六畳一間で、真夏には南日が暑そうであった。だが、私がそこを選んだ理由は、南と西に窓があって明るいこと。外が広く見渡せること。部屋を出たところが廊下の端の非常口になっていて、玄関口まで、わざわざ遠廻りしなくても、手軽にそこから出入りができること。そして、もう一つ、部屋のすぐ前がトイレで便利であることなどであった。トイレに関しては、私は始めからネクタールの採取を考えていたわけではなかった。ただ便利だという理由にすぎなかったのだから、トイレの存在は、この時の私には、むしろ第二義的なものであった。

アパートは、少しずつ部屋が塞がっていった。一階の中央の部屋には、いつの間にか新婚の夫婦が入っていて、よく窓辺に、派手な



カット・室井亜砂路

模様の布団や、ピンクの下着などが干されるようになり、暫く忘れていた、私のフェチスチックな血を騒がせた。物干からそれを盗るだけの勇気を、持ち合わせていない私は、熱っぽい眼で、離れたところから見つめているだけであった。

私は、二階にも、私好みの、できたら独身の女性が住みついていることを願っていた。私の部屋とは反対側の端に、私と同年輩の男が入った。その隣の部屋には、中年を過ぎた夫婦が、そして私の隣には、三十前後の夫婦が入ったが、私をがっかりさせたのは、そのいずれもの女性が、女性とは名ばかりの、魅力のない姿態を晒していることであった。

ある日、私が勤めから帰ってみると、空いていた真中の部屋に明りが灯っていた。好奇心が頭を上げたが、期待外れになった時のことを思うと、それもすぐに萎んでしまった。しかし、私はその部屋の主と、数分も経たないうちに、ところもあるうに、トイレで顔を合わせる破目となった。そのことが、私を、ネクタール採取に腐心させる結果となったのだが。

部屋に帰った私は、背広を脱ぐと、尿意を覚えていたので、すぐにトイレに直行した。私が小便器に向き合おうとした時、女性用の方のドアを開けて、出て来た女性がいた。彼女は、ちらっと奥で足を広げている私を見た。私も彼女を見た。初めて見る顔で、彼女が新しく引越して来た人であることは、すぐに、わかった。ほんの一瞬だが、髪を後で無難作に束ねた丸顔の美人であることを、私の眼は、しっかりと捉えていた。そして、それよりも私のマゾヒストとしての鋭敏さは、彼女の豊かな胸と、肉の張った腰を、適確に素早く見極めていた。

彼女の後姿が消えると、私は水滴を振るのももどかしく、そっと彼女のたった今出ていったばかりのトイレに、身を滑りこませた。彼女の残していった、体臭の混じった化粧品の匂いが鼻を衝いた。そして、その匂いの中には、彼女のネクタールから発散されたものもあるに違いなかった。私は胸一杯にその匂いを吸いこんでから、おもむろに眼を下に落とした。蛍光灯の冷たい明りに照らされて、新鮮な水幕が、白い便器を、一面に濡らして、きらきらと輝いていた。私は、しゃがんで顔を近づけてみた。そして、そのまま便器に鼻を押しつけて、思い切り舐めたい欲望に駆られた。私は、その欲望を抑えねばならなかった。

私は人一倍、激しいマゾヒストだと、自認していた。人一倍、強いフェチシストだと自覚していた。だが、一方で私は人一倍、潔癖な男でもあった。崇拜する女性の前では、私は虫けら同様の存在でしかない、と己を卑下していた。少なくとも、そう考えることは、私の限らない喜びであった。ドミナの眼の色を、おどおどと窺い、喜びの時は、ほんと胸を撫で下ろし、怒りの時は身を震わせて許しを乞う。そうした卑屈な、恥辱にまみれた生き方を、私はどんなにしたいことだろう。そうして、私の心の奥底では、ネクタールや、黄金に埋もれ、息絶える自分の姿が、一つの憧憬の象徴として、いつもあった。

しかし、その反動のように、一方で私は、外の世界の人間に対しては、反感と嫌悪を、常に内在させていた。それは、あたかも、神経質な動物が、己の縄張りを守ろうとして、外の世界に対して、敵意をこめて身構えるのに似ていた。

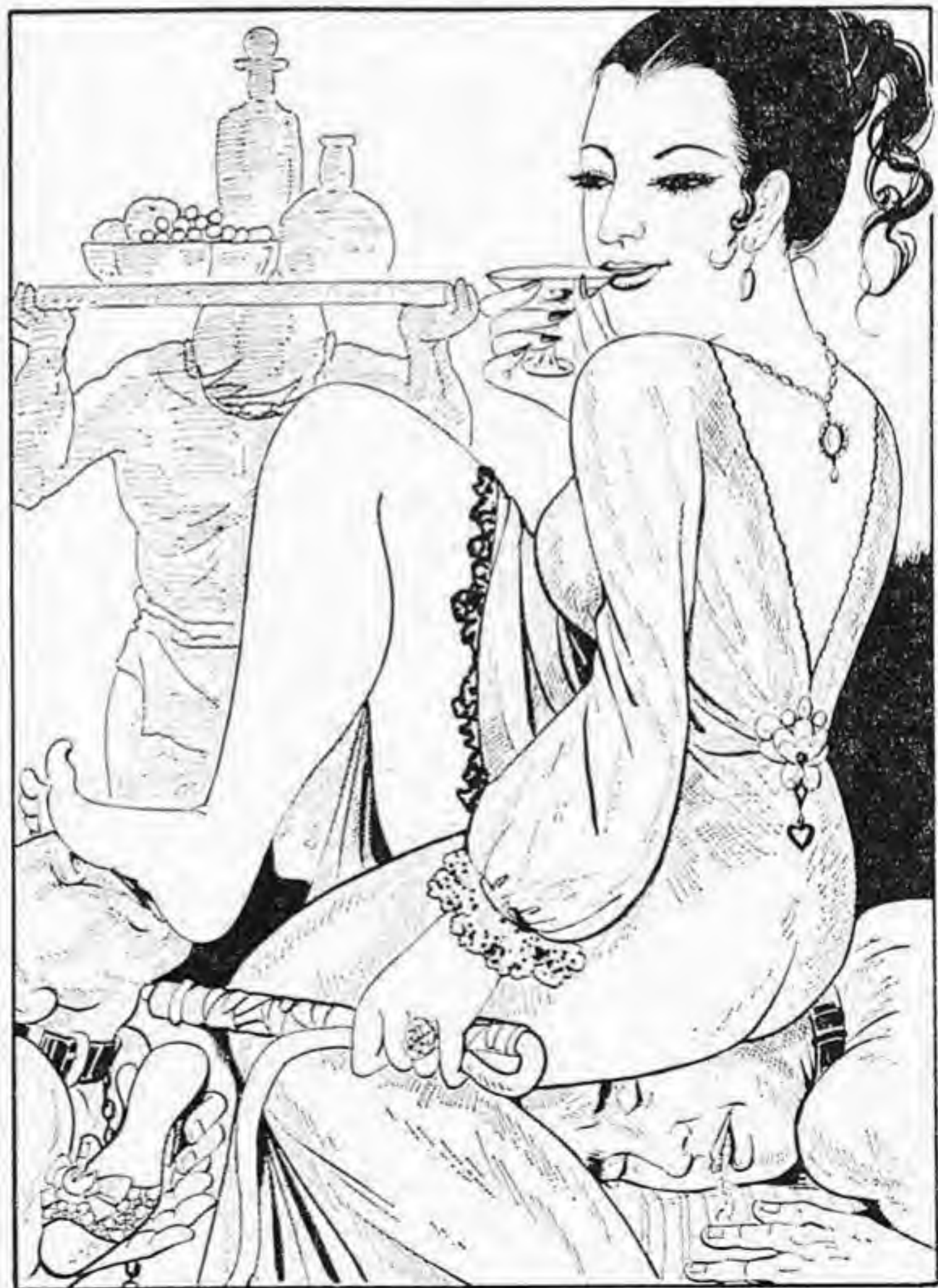
反感と嫌悪の対象になるのは、先ず同性であった。その次に、性

的興味を外れた（反性的な）女性であった。私は肉感的な、グラマラスな女性の中に、いつもドミナの映像を作る。そして、ドミナに対する傾倒が極めて性的であるが故に、私の同性や、反性的な女性に対する反感と嫌悪もまた性的であり、生理的であった。私が便器を舐めることを躊躇したのは、その便器が、既に他の人によって使用されたものであったならと疑ったからであった。同じ階には醜惡な躰つきの夫婦達が住んでおり、そんな人達や、男の尿と一緒に舐めてしまうかもしれないと考えることは、私には、嘔吐を催す程、気分が悪いことであった。

しかし、そのままトイレを後にするのは、非常な心残りであるには違いなかった。で、その夜、私はどうしたらいいかを真剣に考えた。床の中へ入っても、頭が冴えて、明け方まで、まんじりともできなかった。無理に眼を閉じると、彼女の白い裸身の幻影が私を悩ませ、豊満な彼女の臀部の肉が、私にのしかかってくる幻想に神経がたかぶるのだった。

二つの小山を分けて谷が奥深く続き、熱気の籠る沼地とジャングル。突然、音を立てて進む神秘的な滝。ジャングルは洗われ、沼池はたちまちにして溢れ、激しい水勢が川を創る。

次の日の勤め帰り、私は用意すべきものを買って歩いた。昨夜、



イメージギャラリー

『M男の艶夢』

岡

たかし

床の中で殆ど寝ずに考えたことを、実行に移すためであった。私の買ったものは、ビニールの小さな袋、セロテープ。そして短い柄のついた掃除用のたわし。それから、液体と、粉状の洗剤などであった。それらを抱えて、私はアパートに飛んで帰った。会社を一時間早退けたこともあって、共稼ぎの多いアパートの中は、まだひっ

そりとしていた。

服を脱ぐ間もどかしく、私はすぐに作業にとりかかった。トイレ全体は細長く奥に伸びていて、女性用が窓際に四つ、その向こうに男性用小便器が二つ並んでいた。床は白いタイル張りで、入口で専用のサンダルに履き換えるようになっていた。

私はまず洗面器に水を汲むと、入口に近い、一番手前のトイレにそれを流した。その上から、液体と粉状の洗剤を一面に、たっぷりと振りかけた。陶器製の便器は、まだ尿による曇りがなく、新しい白さを失ってはいなかった。排泄物の臭気も、落下孔から昇ってこず、代りに塗らたてのモルタルの臭いがしていた。私は、たわしを持つと、丁寧に便器を洗った。手の動きにつれて、細かな泡が、次々に無限に生まれ出た。手もたわしも、終いに泡の中に没して見えなくなった。洗い終わると、洗面器の水を何度も代えて、泡をきれいに流した。その後に現われたのは、輝くばかりに美しい、滑らかな表面であった。

少しの間、私はその美しさに見惚れていた。次に、私は同じことを、その隣の便器にも行なった。注意はしていたが、その間、誰も入って来る人がいなかったのは、私の作業を、やり易くした。ぼろ布で水気を拭きとると、私は今はその白い輝きに、愛着さえ覚え始めていた。

私の仕事は、まだ残っていた。セロテープを適当な長さに切ったものを、いくつか用意して、それらを、ビニールの袋の口、数カ所に貼りつけた。それから、袋から足のように伸びている、もう一方のテープの面を、便器のタイルに強く押しつけて留めた。その場所は、飛散したネクターが、最後に集まって落下しようとする処、

孔の入口であった。私の計算では、落下したネクターは、それ程上手くいかなくても、袋の中にある程度は溜まる筈であった。

ただ、彼女がトイレに入った時に、変なものが、ぶら下がっていると、気づかれはしないか、という危惧はあった。しかし、気づいたところで、それがどういう目的であるのかわかる筈もなかった。あるいは、彼女がSMを知っていたなら、私のネクター採取がわかり、それ以上の発展を期待できるかもしれない。何よりも心配なのは、袋が一杯になった時に、重さでテープが剥がれはしないだろうか、ということであった。同じ作業を、私は隣の便器にも施した。

私が、トイレを一番、入口に近いところと、その隣にしたのは、それなりの理由があった。つまり、男でも女でもそうであるが、特に女性は、排尿をぎりぎりの瞬間まで我慢することが多いということ。そして、膀胱を一杯にして駆けこんで来た場合、人間の習性として、やはり一番手近な、そうでなければ、すぐ隣のトイレに跳びこむに違いない、と判断したからであった。私の判断がまちがっていなかったことは、それから暫くして証明された。

部屋に戻ると、私は最後の作業に取り掛かった。私の部屋を出たすぐのところ、非常口になっていた。その戸は半分から上が、ガラスになっていた。私は濃い色の包装紙を、適当な大きさに切ると外から、ガラス戸にテープで留めた。そうすることによって、ガラス戸は鏡の役目をし、部屋のドアを細目に開けると、廊下を歩いて来る人の姿を、中から窺うことができた。

総べての用意は、これで終わった。時計を見ると三十分余りが過ぎていた。満を持して、私は部屋の中に待機した。具合の悪いこと

には、坐ると鏡が見えないので、私は立って部屋の中を、ぐるぐると歩き廻っていなければならなかった。時間が少しずつ過ぎていった。そのうちに、何人かの住人達が帰って来た。その中に、隣の奥さんもいた。だが、目指す人は仲々現われなかった。彼女も夫婦共稼ぎをしているのだろう。突然、ガラス戸の鏡に写った影が、廊下の向こうから、こちらに近づいて来る。それが、奥に住んでいる、中年過ぎのおばさんが、トイレに来るのだと気がついた時、私は間髪を入れずに、しかし、何気ない風を装って廊下に跳び出した。あのトイレを他人が使用したら、私の苦労は水泡に帰してしまう。私はサンダルをつっかけると、おばさんの眼の前で、わざとらしく、件のトイレにゆっくりした動作で入り、音を立ててドアを閉めた。案の定、おばさんは、私に遠慮して、一番奥のトイレに入り、私の作戦は成功した。おばさんの足音が廊下を遠ざかるのを慥めてから私はまた部屋に戻って、同じ姿勢を続けた。

彼女は仲々帰ってこず、私は二度程、同じことを繰り返さなければならなかった。しかし、やっと私の努力が報われる時が来た。彼女の姿が、鏡の中に認められたのである。その途端、私の胸は、早鐘のように鳴り始めた。三分袖のブラウスを着た、豊かな胸が、鍵を開けるために、部屋の前で横を向いた。胸の隆起が、挑発するよう突き出ている。それだけで、私は思わず溜息をついた。彼女はすぐに視界から、いなくなった。また、それから待たねばならない時間が私には、もどかしかった。しかし消えたと思った彼女の姿はまたすぐに鏡の中に帰った。と、思う間もなく、そのまま、どんどんこちらに近づいて来て視界一杯になって止まった。トイレに来たのだ。期待が私を締めつける。再び、ふっと消え、サンダルの音と

トイレのドアの閉まるボタンという音が続いて、後は静かになってしまった。

彼女の秘めやかな動作を、私は頭のスクリーンに映写してみる。今、スカートの下に伸びた指が、白い小さなパンティを窮屈そうに、押し下げてゆく。今、パンティは膝のところで止まった。豊満な双丘が、今、便器を跨いで、ゆっくりと落ちてゆく。そして、今すっかり踞みこんだ。今、一筋の滝が、さっと迸り出る。それは、みるみる勢いを増して、やがて激しい飛沫を跳ね上げる。

私はそこまで想像して、じっと耳を澄ませてみた。しかし、何の音も伝わっては来なかった。私は神に成功を祈らずには、いられなかった。居ても立ってもいられなかった。

小さい方にしては、少しばかり長い時間が過ぎた。静かな時間が私には堪えられない程に長く感じられた。やがて、またドアの閉まる音と、サンダルの響きが続いて、鏡が彼女を捉えた。その後姿が部屋の中に消えるのを待ちかねて、私は注意深く、しかし脱兎の如くトイレに走る。ドアのノブを引く手が、微かに震える。素早く身を滑りこませると、私の嗅覚は、その瞬間に、敏感に彼女の匂いを性感に伝えていた。体臭と、化粧と、それに、小さいのだけではなく、大きい方の臭気も混じった独特の臭いを。今や、彼女が、期待通り、ここに用を足したのは間違いなかった。内から錠を下ろすと高鳴る胸を押さえて、私は下を見た。白い便器が、きらきらと光っているのを私は認めた。もはや間違いはない。しかし果たして、あれはあるだろうか。踞んだ私の眼は、満々とネクターを湛えた袋が今にも落ちんばかりに、辛うじてセロテープに、ぶら下がっているのを見た。私は歓喜のあまり、思わず声をあげるところであった。

私は注意深く、手を添えながら、セロテープを剥ぎ取った。温もりが手に伝わった。顔の前にかざしてみると、美しい琥珀色の液体が私を魅了した。しかし、私を驚喜させたのは、それだけではなかった。ビニールの袋の片側には、べったりと黄金が附着していた。こすれたようになっていいるのは、恐らく、落下していく途中で服らんだ袋の腹を撫でていったに違いなかった。思い掛けない天（啓）の恵みだった。

急いで部屋に帰って、袋をこぼれないように処置すると、私はすぐにまたトイレに引き返した。苦心してやり遂げた仕事に、有終の美を飾らなければならなかった。私は便器を跨いで四つ這いになっ

た。そのまま、静かに顔を便器の中に埋めていった。そして、私の舌は、神の酒を、女王様の体液を、この世の甘露を、ペロペロと、夢中で舐め廻した。私は奴隷の法悦に浸った。その美味に酔った。ネクター派のベテランにとっては、私の体験は如何にも子供じみて写るかもしれない。そして、ネクターは、直接拝受するところに価値があるので、袋に採ったり、便器を舐めたりなどは、などという批判も聞こえてきそうな気がする。だが、そんなことは私にはどうでもいいことで、今振り返ってみると、ネクターに対する憧れが、執念のようになっていて、苦勞して手にした琥珀色の液体を、そっと口に含んだ時、あらゆる世事は念頭から消滅していた。私には、それは何にも増して、尊い宝であったのである。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたものの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

ネクターは、一遍に全部を飲んでしまうのが勿体なくて、ちびちびと舐めていたら、陽気の故で、しまいには醗酵したようになり、味が変わってしまった。あの時の黄金の味も、忘れられない。

勿論、それから以後も何度か採取を試みた。しかし、最初の時のように、うまく目的が達せられることはなかった。誰かが先に這入った、袋が流されてしまったりして、私はその都度、落胆させられたものである。

ネクターと黄金に対する執念は、今でも少しも衰えていない。

S 創作

花いばらは病みぬ

オー・ローゼ・ゾウ・アーツ・シック（ウィリアム・ブレイク）

久留木

栄



と訴えつづけた。嚴重に
さるぐつわをしてもらい
一寸も動けないようにさ
れても、心で、そう訴え
続けた。

わたしは罪人なのだ！
鉦山の下罪人だ！

知可子は、そう思っ
ていた。

「もう、やめようよ」

と、みていたマリが、知可子を縛りあげた
爪生に、いった。爪生も、びっしり汗を、
かいていた。

「そうしたいが……それでは知可子のタメに
ならないだろう。いまは苦しむときだ。苦し

むだけ、苦しむがいい」

端整な顔をしかめて爪生は、マリに向かっ
て、つぶやくように、いった。

「それもそうネ」

そういつて、マリはその場を、はずした。
つづいて爪生も去って行った。知可子は素裸
のまま、身動きもならず、マリのベッドの上
に放置されたのだ。

苦しい。どうにもならないほど、苦しい。

背骨がきしみ、肩がうずき、手首足首が痛ん
だ。足も、ひきつるように、こわばる。だが
それを逃がれることはできなかった。

嚴重にくい込んだロープは手首から足首を
からめ、肩から胸、二の腕、さらに両足をか
らめ、また手首に、もどっているらしい。い

序 章

両手両足を背中一つに縛られると知可子
の体は弓のように、のけぞった。それでも知
可子は我慢して「もっときびしく縛ってえ」

くらもがいても、知可子の体は微動だに、しなかった。

そんな姿勢で、五分、十分、十五分、と知可子は耐えねばならなかった。体の色が汗でぬれ、赤黒くなり、やがて青白くなるまで約一時間、毎夜、スタンバーになってから、知可子のこの責めは行なわれた。知可子の希望で、果てしなく続けられる苦行……。

それが何の意味があるう。何のタメになるう。そう思っても、知可子は、それをやめる気にはならなかった。

燃える罪火の中で知可子は、どうしてこうなったか……。

トトロと妖しかった、この一カ月間の出来事を振りかえるのだった。

— (一) —

一カ月前だった。

ある夜……。

「やあ、こんにちわ」と入ってきた爪生を見たとき、知可子の胸は、うずいた。ママの男であることは、わかっていた。わかっていてそうなるのは、やはり爪生の、マスクのせいだ。知的な、それでいて精悍な感じの相貌に黒い冷たい目が鋭く光っている。炭坑町の男

らしからぬ風情である。知可子の愛人で連撃の四郎とは全く違う人種であることが一目でわかった。それだけに、できれば抱かれてみたいと思う——。

「ママは？」

爪生は、見回して店内にいないとわかると知可子に聞いた。

「二階なの。酔って、苦しいって」

「そうか。又、何かあったのかな」

爪生の勘は冴えていた。その日、ママは経営者との間に知可子たちの給料値上げ交渉をしたが、うまくいかず、結局はヤケ酒に飲みつぶれたのである。その途中、ママが爪生に電話していたことを知可子は思い出した。

「二階にいらっしゃるけど、グロッキーのママの姿が、おいやでしたら、私が代りに、お相手してもいいんですよ。ママに、そう断わって置いたもの」

どこを押せばそんな言葉が出るのだろう。

知可子は、自分の口からウソが、すらすら出るのが不思議だった。

ママには「爪生が来たら知らせて」と頼まれていたのだが、爪生に気のある知可子は、わざと知らせなかったのだ。

「ともかく、のみましようよ」

知可子は誘った。爪生は、まだママに未練げだったが、何か考えるところあってか、気を取り直したように知可子の相手を始めた。

爪生は酒がつよい。ウィスキーのストレートを水で割りながらグイグイあふる。知可子も強いが、つきあっているうちに、ぐんぐんアルコールが回るのが、わかった。いい気持である。いい加減酔ったとき、ママが降りてきた。

「あら、爪生さん。来てたの？」

「電話で、君が呼んだんじゃないか」

「そうだったかしら。そんな気もするわね。」

きょうは、何か、くしゃくしゃして、ヤケ酒飲んじやったんよ。ねえ、爪生さん。ウチがこの子たちの給料を上げると決めても、悪いはずはないじゃないネ。それをケチくさい。川田の奴、文句ばかり言うんだもん。知可子

お酒！ ウーイ

「ママさん、もう毒よ」

「わかってる。もうスタンバーだよ。ウーイッ。知可子、戸締まりしておくれよ。爪生さん、行く？ どうする？ 二階、きたないわよ。掃除もしてないんだから……。それとも、知可子と行く？」

「どちらも、ごめんだネ……」

「あーら、ごめんなさい。きよはう爪生さんにもふられちゃった。知可子、酒、酒だよ。それから、爪生さんを頼んだよ。酒、酒、酒だ——い」

「ママの花村マリは、盛んに荒れようと、つとめているかのようなだった。爪生は苦笑しながら、ママを抱きかかえたり、酒をのませたりする一方、知可子をうながして戸締まりさせ、知可子に手伝わせ、すっかりグロッキーになったマリを二階に運んで、バアヤの静を呼んで、あとをまかせた。」

寝台に寝せつけても苦しいらしく、しきりにブツブツ言っては、酔態の限りをつくしているマリに同情をし、しばらくつき添っていたが——爪生は、なんとなく、やりきれないものを感じ、知可子を誘って外に出た。

ママが完全にグロッキーになっていたせいもあって、爪生も知可子も生酔いだった。

「親切ネ、爪生さん」

「何が？ バカ。チンクソだから仕方がないだけだよ。それより気分転換に、もう一軒、行くか。どうだ、つきあうか？」

と、爪生は知可子を誘った。

知可子は、のぞむところだった。

×

×

×

夜の十二時を過ぎると町は、ひっそりしていた。灯りも殆ど消えていた。風俗営業はできないので、あいている店といえばスナックか軽食堂、すし屋ばかり。爪生は、そのスナックの一つ、リヨンに案内しようと思った。知可子を抱くようにして夜道を歩くと、なんとなく甘ずっぱい知可子の髪の毛の香が匂ってきた。若い青臭い体臭である。炭塵の香の立ち込めた町に爪生は——不思議と、そこに年の差を感じた。それと同時に若い女の息づきを浴びるような気がした。

スナック「リヨン」は、すぐそばだった。薄暗い街灯に照らし出された文字を読みながら、爪生は左手でスナックの扉を押した。中には明るい灯と男と女の体臭、酒と食物の香りが、みちみちており、にぎやかな話し声があふれていた。爪生と知可子のはのかなムードは忽ち吹き消され、夜の宴が随所に展開されていった。知可子をスタンドに案内しながら爪生は、

「スナック・リヨン……か」

と小声で、つぶやいた。

「いらっしゃい」と、ボーイの福田力夫がムシタオルを持ってきながら「何にしましょうか」と聞いた。

「ウィスキー水割りダブルで二つ。リヨンサージン。それから欠食児童に特製のテキを」爪生は、あいそよく応じた。いかにも、いかす応待と知可子は思った。しかも爪生は、自分のバー「花」のときと、ちよっとも態度も素振りも、変わらないのである。カッコイイ！ と言いたいくらいである。

知可子が、爪生と会うのは三度目である。十八才だが、十六才で岡山のバーに売られていた。年がバレて強制送還され、家に帰って、この「花」に入った。四郎とできたのもただ夜が寂しいからで、好きではなかった。しかし男なしではいられない——この爪生が四郎のように若く激しかったら、どんなに頼もしいだろう——と想像していた。

爪生は、たんと酒をのみつづける。

「おいしいかい」

「おいしいワよ」

まるで親子の対話である。本質的には似合わないカップルだと思う。しかし、何となく白痴美的な知可子の肉体に、疚きを感じる爪生でもあった。爪生は、ゆっくり知可子を

鑑賞する。いま誘ったら、ついてくることはわかっていた。どう料理したら、おいしいかと考える。無心にテキをパクつく姿からは、女らしさは感じられなかったが、逆に、そこに魅力があると思った。

リヨンを出ると、二人は当然のように近くのホテルに消えた。

爪生は中央の通信社の支社長で、独身だった。妻と二人の子供があったが、妻は五年前に交通事故で死亡。子供の一人は大学を卒業そのまま東京に就職したばかり。次男は、いま大阪の大学にいた。一年生である。だから爪生は、まさに自由だった。ママと深味に、はまったのも理由のないことではない。マリは亡妻に似たタイプの女であり、世話好きであつた。それにくらべると、この知可子は、一種のベビードールだと思った。

裸にしてみると、いいプロポーションをしていた。バスケットの選手だったというだけに足の形がよかった。乳房も盛り上がって大きく、弾力があつた。膚は小麦色だが、きめ細かで、生まれは東北ではないかと思われるようなところがあつた。

「いい、からだだネ」

「皆、そういって、ほめてくれるのよ」

と、この女は、にくいことを言う。

「いったい、何人ぐらい楽しんだ？」

「さあ、わかんない。数えたことないワ」

爪生の横に素裸で、もぐりこみながら、いけしゃあしゃあと、そんな話をする。マリから「知可子は相当のものよ」と紹介されていた言葉が突然、浮かんできた。

爪生は、ゆっくりと知可子の方に手をのばした。

(二)

「あんなに酔ってはダメだせ。じゃあ、いつものところで……」

爪生からマリのところに電話がかかってきたのは、二日後の夜九時ごろだった。その電話を受けたとたん、マリの気は軽くなった。

知可子が、同じホステスに爪生のことを得意げに、しゃべっていたと「花」の居付きのホステス頭、初枝から聞かされたとき、案の定やっぱ、とマリは頭に來た。しかし、そのスキを与えたのは自分なのだと自戒した。ママともなれば、そんなことに、かかずらうては、いけないと思つても、ことが爪生のことだけに腹が立つ。仕事とは別に、知可子に何か復讐をしてやりたいと思つた。しかし知

可子の肉体の素晴らしさと幼稚な頭を考えるとその気持ちも、にぶる。所詮は、さざ波にすぎないのだ。「ある男とある女の、ありふれた話」と考えて気を、まぎらわせた。

だから、スタンバーになって戸締まりしたときも何となく、そわそわしていた。爪生から誘いの電話がかかって、こんな気になるのは久しぶりだった。われながら、それが、おかしくもあり、爪生とて、刺激がなさすぎたのではないか——と考えてみたりした。

初枝や知可子が帰って行ったあと、「遅くなるワ」と、ばあやの静に言つて裏口から外に出た。

「爪生さんですネ」

ばあやが送つてきていう。

「そうよ」

「じゃあ存分に甘えるのですネ。奥様は、このごろ、いらいらしていらっしやいます。もつとりラックスしてお遊びを……」

「そうネ」

そういいながらも、マリは気がはずんだ。

× × ×

ホテル「瞳」は、岡の上に白くにじんで、闇にとけるように立っていた。その傍に赤いネオンが美しい。ゆっくりとハイヤーから降

りと薄暗い敷石をふんで玄関に向かった。
「いらっしやいませ。お連れ様は、もうお待ちでございます」

顔見知りの老女が、そういつて下駄をしまった。マリは赤いジュウタンの廊下を二階に上がりながら、着替えてきた結城つむぎの、奥様風の和服のえり足を、ちょっと鏡に映してみた。ヘアーも気に入った形に整っているかな——と気をつかった。それから、ゆっくりと87号室の前に立った。

ノックすると「どうぞ」という爪生の、はりのある声が聞こえ、中に入るとマリは、急にこらえていたものが、せきを切ったようにこみあげてきて、思わずそこに突っ立った形になったが、つぎの瞬間には、小走りで爪生の胸に、とびこんでいた。

「あなたあ——」

あまえ声で言い、バカ、バカバカと肩や背を、かるく叩いた。

そんなマリを爪生は、がっちり受けとめ、やがてマリを、あやすように、ゆっくりと髪を、たぐり、背をさすって、爪生は女の落ちつくのを待った。

長い——キッス。

そこには理由も説明も何も不要だった。二

人の間には、もうそんなものは、いらなくらいの年月があった。爪生は、いつものように英国風のツイードの背広を着ていた。褐色のシックなホームスパンが好きで、いつも端然とした姿で、マリを待った。マリもそれを心得ていて、服装には常に気を使っていたのだが、その服装が気にならないくらいの激しさだった。

ゆっくりと爪生の手がマリの帯にのびた。まず、いっしょに風呂に入る。これが二人のいつものコースだった。その日も、そのルートからは、はずれなかった。ただ、いつもと違うのは、何となく濃厚なムードがあったことである。——

× × ×

約一時間後、二人は、ぐったりして広いダブルベッドの上に、のびていた。

天井をみながらマリが、しみじみした口調でいった。

「知可子に手をつけたのネ」

「ああ」

「それはいいけど、用心してちょうだい。四郎がつけねらっていますワ」

「え、どうして？」

「知可子が、あなたのことを同僚に話してい

たそうですの。あの子はバカだから、その結果がどうなるかわかっていません。ホステスたちは、きつと四郎に、つげ口して、あの子と四郎の痴話喧嘩を、楽しんでいるでしょうネ。四郎と、あなたの、さや当ても演出しますワよ」

「そうか困ったな。ま、面白いじゃないか。ひとつ、あすか、あさって、君の店に行つて

知可子を肴にのんでみようか。どんな喧嘩をしたのか、とちめるのも面白いよ」

「いやだわ。そんなこと、悪趣味よ」

「とはいっても君は、しかえしがしたいのだろう？ それなら、つきあえよ。演出してあげるからサ」

「悪い人ネ」

「おれたち知識人には、肉体とは別の遊びもあるのさ。——でも、妙なことになったな。

こんどの浮気で、遂に君と、また一つ、別の深味に、はまったような感じだよ——。結婚もしないで、すまん」

「いいのよ——。でも、本当は、少し寂しいのかな。でも私も、結婚はもう、こりごりですから」

「逃げ出した亭主のことか——何もかも忘れろよ」

爪生は再びマリの肌を手を、のばした。その手が暖かく、ふとマリは爪生の胸に顔をうめて泣きたくなってきた。その心を見抜くかのように、爪生がまた求めてきた。こんなことは、ここ一、二年、ついぞなかったことである。マリは、やっと満足し、安心した。

× × ×

そのころ、知可子は地獄におちていた。

その夜、知可子が帰ったとき、珍しく四郎がきていた。

「まあ！ 四郎さん」

「待ったぜ。なにしろ、三日も逢わなかったもんネ」

「お酒、のむ？」

「ううん、いい。それより——」

四郎は、いきなり知可子を抱き、激しくキッスを求めた。

「こんどの輸送は、また東京なの？」

「そうだよ。金になるからネ。また三日ほど逢えないよ」

「寂しいなあ！」

「寂しくないよう、きょうは濃厚にやろう」

「いいわ！」

二人は、またキッスをした。

「こんどの仕事で寄った神戸のステーション

で、同僚の太田が、こんな写真をくれたぜ。こんど帰ったら、こんな具合に女房を縛るんだってサ。——また神戸であったとき、お互いに報告しようというんだがナ」

四郎は、そう言いながら、一枚の写真を、とり出した。

その写真を同僚から、もらったという四郎

の言葉は嘘であった。ほんとうは、知可子と同じ店のホステスで、しかも隣部屋に住む由利枝から、もらったものなのだ。もう大きい娘のいる由利枝は夫から捨てられ、食いつめてきた、うば桜だった。それだけに若い知可子に、しつとを感じていて、その日は早く帰り、部屋で知可子を待っていた四郎に、その写真をみせて、たきつけたのだ。

しかし知可子は、そんなことは知らない。写真を手にとって、しげしげと見詰めた。ひとりの女が高手小手に縛られていた。それだけの写真である。

「ひどい写真ね」

「サジズムとか、いうんだそうだ。男は、好きな女ほど、縛りたくなるのだと彼は、いうんだ」

「ふうん。それで、四郎さんは？」

「縛りたいさ」

「私を？……私は、いやだワヨ」
「いやか。じゃ知可子は、オレを愛してないのか」

「愛してるワ！」

「じゃあ縛らせろよ」

「……」

「どうだ？」

「仕方ないわネ」

「よし、契約成立だ。きつと、きょうは忘れられない日になるぜ」

「痛くないようにしてネ」

「わかったよ」

四郎は、しばらく辺りを見回していたが、洗濯物を干すロープがあるのを見付けて持ってきた。そして、しばらく前にキッスをし、上半身を裸にして知可子の手をうしろに回し、がっちり縛った。そして写真をみながら、後ろ手を首に吊るようにして菱縄をかけた。

「どうだ、よく似ているぜ」

「こんなに強くしばると痛いわよ」

「少しぐらいは、がまんしろ」

そういいながら、あたりを見回していたがユカタの帯があるのを見つけると、

「おう、こりゃ、いいや！」

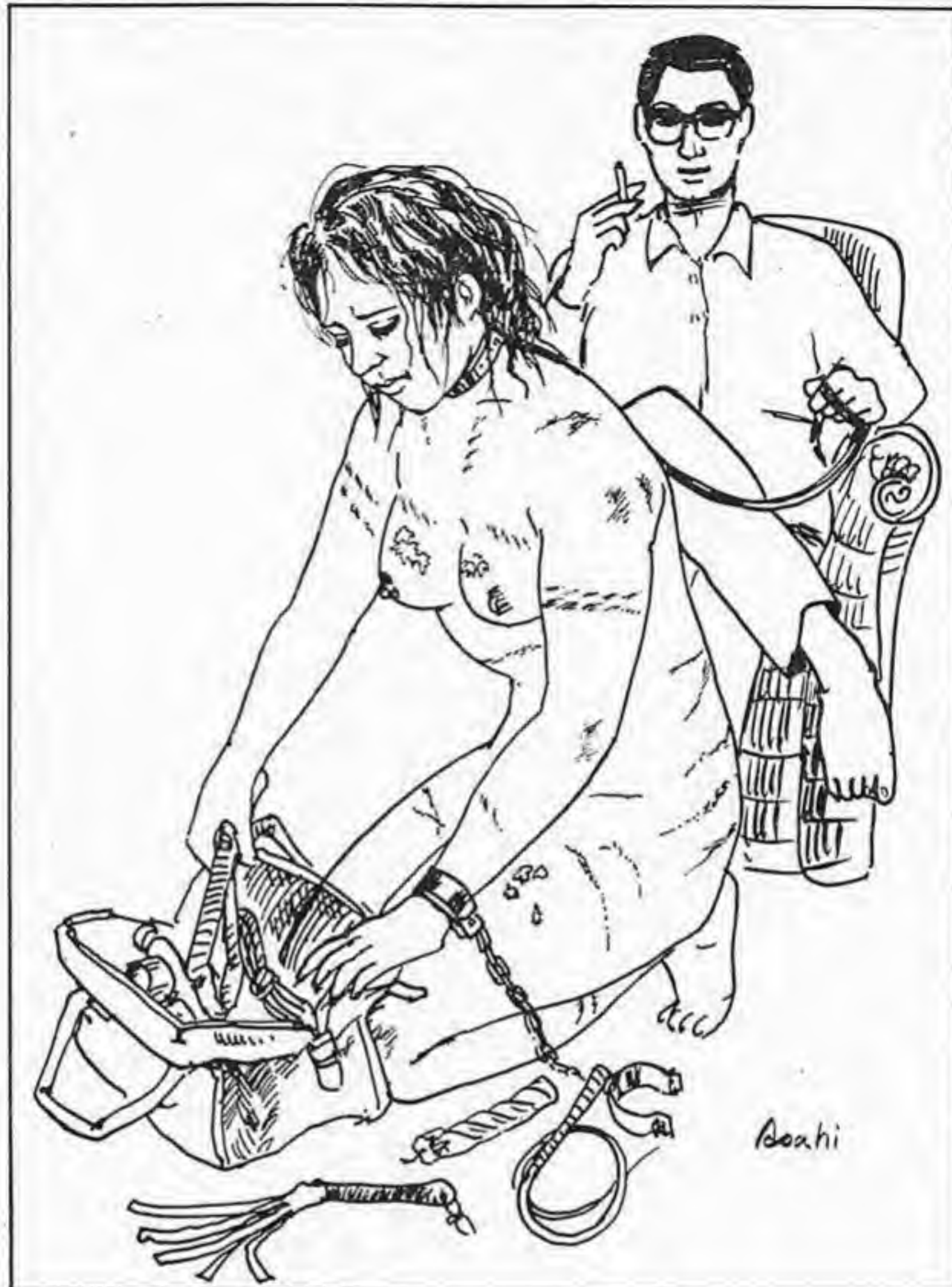
と、それをとって、うしろに回った。

イメージギャラリー

『悦虐の後始末』

須坂

旭



「何するの？」

知可子は不安げに聞いた。四郎は写真を知可子に見せて笑った。

「このとおり、サルグツワをするのさ」

帯は顔を三回まわって、頭のうしろで止められた。最初の一まわりは齒を割ってかませられ、あとの二まわりは鼻の上から、ぎゅっとしめられた。

そう縛ったあと四郎は、ゆっくりと知可子の下半身を裸にした。それから四郎は、もってきたフロ敷包みを、といた。そこに真新しい綿ロープが現われた。

四郎は、それを、わざと知可子の前に、ちらつかせて見せた。

「どうして縛ったか教えてやろうか、おバカさん。お前、爪生と浮気したんだってねえ。ええ、おいッ！ 男の復讐がどんなものか、お前は知らないだろう。バカヤロー！」

そういうながら、手にしたロープで知可子の肩を、ぴしりと殴った。それと同時に左手のストレートが知可子の顔面に爆発した。知可子は「ヒーツ」と悲鳴をあげ、うしろに、どーんと倒れたが、悲鳴はくぐもって声にならず、恐怖にひらかれた左目に殴打のあとが赤く、ついた。

「バカめ！ バイター！ 泥棒猫！」

と四郎は、あくたいをついて、乱暴に知可子を、うつむけにすると足首も縛り、背中に四肢をあつめて嚴重に荷造りした上で、また別のナワで、知可子の腹が、くの字になるくらいに強く縛りあげてから、再び仰向けにした知可子の胸の上に尻をおろし、乳房を、つねりあげた。それからワキ腹をくすぐり、さ

らに下腹部を責めた。ひとしきり責めて、疲れるとバイブレーターを取りだした。それらのことを教えたのも由利枝である。

四郎も知可子同様、もともと頭が弱い。だから、ひとりでは何もしきらないのだが、こんどは背後に軍師がついていた。その軍師が悪かった。しかも、その軍師は隣の部屋の人で、電気を消して寝たふりをしていたが、実は二人のケンカを戸のすき間から見てニタニタ笑っていたのだ。

四郎は、ざまあ見ろと思いつつ、縛ったままの知可子を犯して寝た。そして朝、目がさめると、再びそのままの知可子を抱いたあと、しばらく放心したように坐っていたが、知可子を、ぽかぽか殴って、仕事に出て行ってしまった。

知可子は、すっかりグロッキーになっていた。きびしい縄目に朝までねむれず、何となく異様な四郎が、ただ、こわいばかりで、興奮とか愛とか、そんなものは、ひとつも感ぜられない状態だった。そんな状態で肉体だけはムリに発情させられ、そして干切れるような苦しみの底で朝を迎えさせられたのだ。四郎が出て行くまでは、それでもよかった。四郎がいるというだけで、心のよりどころがあ

る、という感じだったが、いなくなると、見栄も外聞もなくなり、うめき声をあげた。

そんな、うめき声を聞きつけたふりをして

由利枝が入ってきた。

「うるさいわネー。あらッ！ まあ、まあ、いったい、どうしたのよ、知可ちゃん」

由利枝は、そういうと知可子を助け起こすふりをしながら、さるぐつわだけを外した。

「苦しいワ。お姉さん、ほどいて——」

知可子は訴えた。

「私、といていいのかしら！」

「どうして」

「だって、四郎さんが縛ったんでしょ？ 勝手なことして、うらまれたら、こわいワ」

「そんなことはないワ。ネ、後生だから、ほどいて」

「ほんとに、いいのかしら？ じゃあ、とにかく足だけネ」

そういつて由利枝は、上半身のナワだけを除いて、すべて、といてくれた。それで、かなり楽にはなったが、まだ手足はしびれ、知可子は立つこともできなかった。そんな哀れな姿で、由利枝に頭を下げ、やっと自由を回復したのは昼近くだった。自由になっても知可子は、動くことが、できぬくらい疲れてい

た。由利枝に、今夜は店を欠勤することの伝言をたのみ、ドロのように眠った。

(三)

由利枝の報告で、知可子が休むことを知ったマリは、何かあったなと感じた。しかし由利枝はママには、知可子が休むとだけしか言わなかった。マリには、真相はわからなかった。しかし、その夜、酔った由利枝が初枝たちに「知可子が四郎に縛ってと頼んで、全裸で天井から吊り下げられたのよ。あの娘はマゾよ。すごいんだから」と身ぶり手ぶりで話しているのを見て、大方の想像は、ついた。バカな奴が——と思いつつ、その翌朝マリは知可子の家をたずねた。まず由利枝の部屋をのぞくと由利枝は化粧の最中だった。

「あら、ママさん。お見舞い？ それとも敵状視察？」

「心配なのよ」

「そうでしょうネ。まだ、ねてるワよ」

そういわれて知可子の部屋を覗くと、知可子は、せんべいぶとんから顔だけを出して寝ていたが、マリの顔をみると、すまなさそうに、すぐ窓側を向いた。そばによると泣いていた。

「心配したのよ」

「ごめんなさい。わたしが、ヘンなチョッカイを出したのでバツを受けたのよ。ママさんごめんね。わたし、当分、お店には出られないワ、この顔だもの……」

見ると、左目の辺りに紫色のくまどりができていた。腫れは、一日、冷やしたせいかな、もうひいていた。

「厚化粧すれば、わからないワ。もう他にケガはないの？」

「ケガはないけど、こんなになっちゃったのよ！」

と知可子はフトンの端から両手を出した。その手首にも、紫色のナワのあとが、ついていた。

「ともかく、出ていらっしゃい。気が晴れるわよ」

と云い置いて、その日は見舞だけでマリは帰った。夕方、早めに知可子は店に出て来たが、洋服では、みられたさまではないので、二階にあげ、知可子に似合った、銘仙をさがして着せた。化粧をしないおすと、まあまあ程度になった。

こうしてまた、知可子は店に復帰した。

爪生が来たのは、その翌日である。知可子

は、もうけろっとしていた。

(四)

爪生は、例の褐色のツイードの背広を、しっくりと着こなし、店に入ると、ゆっくりと見回した。あいにく、お客が、いっぱい、ボックスは満ぱいしていた。緑色の木の葉模様のお召を着たマリは、一番奥の席で医師の戸田たちのグループの気嫌をとっていた。

遠くから流し目をくれるのを受けて爪生はとまり木にこしかけ、だまってバーテンを見た。バーテンの若木は初子の愛人ということだが、愛想のよい男だった。

「いつもの」

「いつもの、OK」

と常連だけに、以心伝心である。

ヒメ貝のひものを、えさにウイスキーを含むと、何となく心が、くつろいだ気になる。しばらく一人で飲んでいると、マリがやってきた。

「いらっしゃい」

「やあ、元気にしてるんだな」

「待ってたのよ。ちょっと、面白い話があるの」

「例の話だろう？」

「あら、もう耳に入っただの？」

「いや、何も聞いていない。しかし、想像にかたくはない」

「まあ……いや！ いやらしい」

「ハッハッハ」

話しているうちに、知可子の客が立ち上がった。送って出た知可子が戻ってくるなりマリが手招きして言った。

「知可ちゃん。しばらく爪生さんのお相手をしてちょうだい」

「はい……」

と、素直に答えた知可子は、爪生をボックスに案内して、飲みものを持ってきたが、爪生と並ぶのを少し、ためらった。

「どうぞ」

と、爪生にすすめられてから、遠慮がちにこしかけると、

「この前は、ありがとう。えらいめんどろをかけたってネ。ごめんよ」

と、爪生が知可子の手をとって、ゆっくりと、さすった。そう言われると知可子は何も言えなかった。

「ボクは知可ちゃんに首ったけになっちゃったんだが、そのことで四郎ちゃんから、いじめられたりしなかった？」

「それが、ひどいの……」

知可子は、うそが言えないらしい。ずっと爪生の肩に顔をよせ、軽く、おえつしはじめた。

爪生にまだ何も話さないうちに、マリが向かい側に坐るのが、わかった。

「ねえ爪生さん。知可子は、四郎ちゃんに縛られたんですってよ」

「縛られたあ？　へえ、ほんと！　ほんとなの？」

爪生は、さも驚いたように聞いた。

小さく、うなずいた知可子は、手首のアザを見せながら、いった。

「私が帰ると、いきなり、ガーンと顔を殴られたの。それから、浮気代をよこせていうの。そんなの持っていないといったら、じゃ本気だなんて……。あとは、もうメチャクチャよ。ネ、本があるでしょ、今はやりのSM問題特集とかいう……。あの本を見ながら、縛りかたを真似すんの。がんじがらめに縛られちゃったわ」

「それだけなの？　あの四郎ちゃんが、ただ縛っただけで許すことはないと思うけど……」

マリも、なかなか、ずるい。

「ええ、縛られただけじゃないわ。天井から

吊るされたの。エビ責めにもされたワ」

と知可子は、まだされていけないことまで付け加えて誇張する。

「それに、裸にされてくすぐられるでしょ。

そりゃ苦しくって。隣に由利枝姉さんがいるので、泣くに泣けず、結局は朝までなのよ」

「ふうん。で、四郎ちゃんは、結局、許してくれたんでしょ」

「どうだか。でも、すごく興奮していて、二回も求めたワ」

「あなたも満足だったでしょ」

「そんな！　いやだわ。こちらは苦しいばかりよ」

「ほんとかねえ。こんども又、縛って抱いてねって、泣いて頼んでたという話じゃない」

「あら！　うそ、うそよ！」

と、知可子の声は大きくなる。爪生は、そこで始めて、口をきいた。

「まあ、素質は十分ということだろうな。知可ちゃん。同じ縛られるにしても楽しい縛られ方というものもあるものなんだよ。マリさんは、その道のベテランだ。心配ごとがあったら皆、わけを話して相談するんだな。四郎君は、まだ若いので、猪突猛進を、するんだろう。しかし、それが知可ちゃんを愛している

証拠なんだよ……」

「そうかしら？」

「そうだよ」

「ところで、朝まで放っておかれて、どうだった？」

「苦しいばかりだワ。となりの由利枝姉さんが、うめき声を聞いて、入ってきて解いてくれたの。四郎は、そのまま仕事に行っちゃったのよ。あの人、あたしを愛していないんだワ……」

と知可子は泪声になる。

「そんなことはないだろう。愛していない女を、男は縛れない筈だから」

「そうかしら？」

「そうだと思う」

「それなら安心だけど。ね、ママさん。本当に、そう？」

「そりゃそうよ」

そう断言されると、知可子は本当に安心した様子で、再び快活になった。

「よし。きょうは徹底して飲もう」

と、その夜はスタンバーまでグラスを傾けつづけた爪生は、ふらふらした足どりで店を出た。

知可子が洋服に着替え、爪生とは店の前で

わかれ、由利枝に連れられて家に帰ると、四郎が来ていた。

「おかえり」

「あら、四郎さん」

「いらっしやい」

二人の女は、口を揃えていった。

「この前、この由利枝さんに解いてもらったのよ。お礼、言って……」

「どうも、迷惑をかけて……」

四郎は頭を、かいた。

「もっと大切にとり扱わないと、愛する彼女が、こわれちゃうワよ。好きなんでしょ？」

「ハイ……」

「じゃあ、大切にして、うんと、いじめなさいよ。きょうも、この子、爪生さんと熱々だったのよ」

「ほんとか？」

四郎の顔色が、さっと、変わるのがわかった。

「バカタレ！」

いきなり、知可子の頬に四郎の平手打ちが音を立てた。

「そう、そう一気にするからいけないのよ。それじゃ怖さだけしか残らないでしょ。もっと大切に、ジワジワいじめなさいよ。そうし

ないと知可子の体が、まいるワ。それに、そんなことでは一步一步、逆に知可子を、爪生さんの方に近づけるばかりよ……」

「そういったって、すぐカッとなるんだ」

「そこを抑えるのよ。愛しているんでしょ」

「そうだ！」

「じゃ、そのように、いじめなさいよ」

知可子は叩かれて床に泣き伏していたのだが、叩いた四郎を憎いとは思えず、由利枝の言い方が憎らしくて、その方に腹が立った。

しかし、隣部屋の住人であり、店では先輩である。どうしようもなかった。その知可子の体にかかり四郎が抱き起こしてくれた。

「すまなかったな、乱暴して」

と涙のあとを手拭いで、ふいてくれた。そう言われると知可子の気持はスーッとする。

そのくらい知可子の心は、ふるえていた。

「いったい、どうしたというのだ？」

「爪生が店へきたのよ。それで腕や首のアザをみつけて、しつこく聞くの」

「で、話したのか」

「そうよ。そうするより仕方なかったもん」

「バカな。君は爪生に、まだ、気があるんだろ」

「そんな……」

「正直にいえよ。由利枝さんもアツアツだといっている」

「そんな……」

「じゃ、証拠を見せろ」

証拠といわれても、あるものではない。だが、そう言われると頭の弱い知可子は返事に困った。しかし由利枝に助言をたのむ気にはならなかった。

「証拠は、ないのか！」と、四郎が詰め寄り

「じゃ、からだにきいてやる」と言う。

「そんな！ また、あんなひどいことを……ごめんよ、ごめん……」

と、知可子は手を、すり合わせて拝んだ。

その手を、バシッと四郎は細引きで叩いた。そして、その場に知可子を押ししたおし、後ろ手に縛りあげた。そして、さあこれからどうしたらよいかと問いかける表情で、由利枝の方を眺めた。由利枝はニタニタ笑っていた。

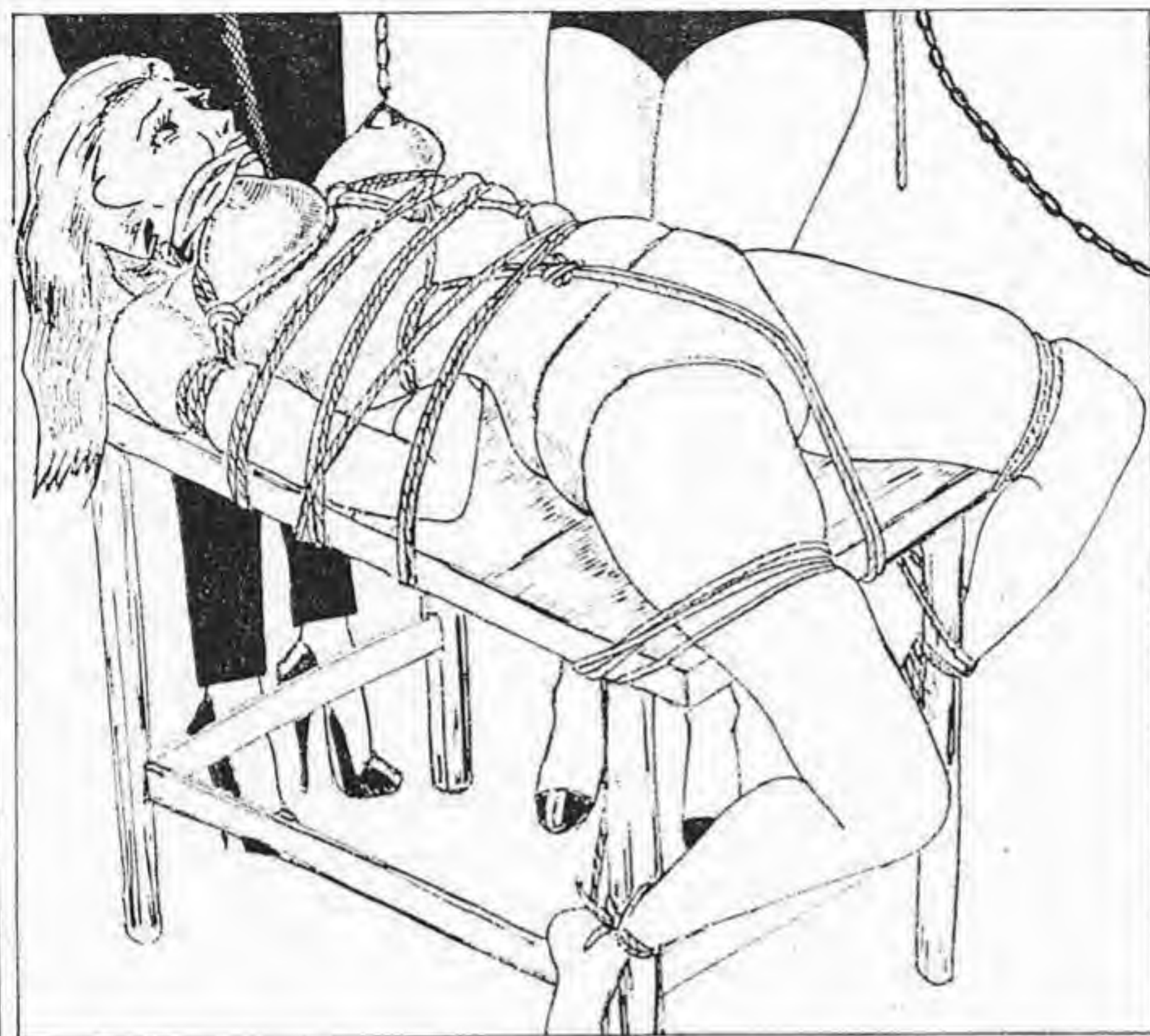
(五)

由利枝は、きょうは多分こんなことになるだろうと、娘を親類にあずけていた。それでよかったと思った。

「由利枝さん、手伝って下さい」

四郎は由利枝に懇願した。それをよいこと

イメージギャラリー 『相 談』 名古屋S生



に由利枝は豹変した。

「ごめんなさいネ、知可子。旦那様の御依頼だから、うらまないですよ。さ、最初にサルゲ

ツワをしましょうネ。おとなしく、するんですよ。さもないと四郎さんが、また、ぶん殴るといっていますよ」

由利枝の言葉

には、毒があった。それと同様に、仕ぐさにもとげがあった。知可子は、もう何をいってもダメだということをも本能的に知っていた。堅く口をつぐんでアゴに力を入れ歯がみをしていた。「おや、抵抗をするの？ ムダな抵抗はやめなさいよ。やめなさいの？ じゃ、四郎さんに、かせいしてもらおうワネ。四郎さん暴れないように

上体を押えつけておくれ」

由利枝は、さも楽しそうにいう。四郎がその言葉どおり、体ごと知可子のヒザの上に乗ると、知可子はもう抵抗しようもなかった。

由利枝は、あたりを見回し、知可子のストッキングが二つ、タタミの上に放置されているのを見ると、それを持ってきてクルクルと、まるめ、それから壁にかかっていた四郎のヘコ帯も用意した。そんな動きをみながら知可子は必死に、体中に力を入れて耐えていた。

「フ、フ、フ……。何を、そんなに力んでいるの。バカネ」

そういったかと思うと、グイッと顔を仰向けさせ、ヒザで、うしろから頭をはさんで、片手にストッキングをにぎり、片手で知可子の鼻の頭を力いっぱい、はじき上げた。

ズーンと脳髓に染みる痛みがつきあがり、知可子は思わず口をあけた。そこへストッキングが——。あつという間もない手練のわざだ。分が小さな知可子の口の中に消えた。その口を割ってヘコ帯がアゴに喰い込み、頭のうしろで止められた。そのあとで、由利枝は余ったヘコ帯を存分に知可子の顔に巻き、力を入

れて縛りあげた。

「四郎さん、女の責めはサルグツワが第一なのよ。知可子の気持が口から逃げ出さないように、まず口を封ずるのよ。本当に知可子が四郎さんを好きなら、これだけでも喜んで、ズイキの涙を流すのよ。本当に、知可子が爪生を好きだったら泣き乱れるでしょう。そのときは存分に打ちすえるのよ。うれし涙のときは、こそぐるといいワ……ともかく口を封じなくては面白くないのよ」

由利枝は一席、講釈を、ぶった。四郎は、なるほどと思った。

「それに口を縛ると、悲鳴が隣近所に聞こえなくていいでしょ。だから安心して責められるのよ。口を縛ったら、その次は裸にするのとネ。女は、たとえ好きな男の前でも、素裸は恥かしいものなのよ。まして縛られているときはね。また、目の前に同性がいるというのが一番にこたえるのよ、さ、いっしょに着物を剥ぎましょう」

そううながされて四郎は勢いよく、知可子のブラウスに手をかけた。うしろに由利枝、前に四郎。そして足の上に四郎に坐り込まれ後ろ手に縛られていては、どんな抵抗をしてもムダだった。ブラウスは忽ち手首に集まり

ブラジャーも、あっという間に剥がれ、形のよい乳房が、むき出しにされた。夜の仕事でのまされた酒が体中をめぐり、乳房は桜色に色づいていた。

それが、いちじるしく四郎の官能を刺戟した。思わず、わしづかみする。その手を制して由利枝は、

「ボンボンね、四郎さんは。まるで、うえたケダモノだね。そんなにカッカすると知可子にナメられるワ」

という。だが、由利枝も知可子の乳房の素晴しさは、みとめていた。

上半身を裸にすると、あとは下半身だけである。四郎は膝の上から身をひき、うつむけに知可子を押して倒した。こうしておいて、パンティをはぐと、それは、あっさりといれ、知可子の足が宙をけた。

その足を二人がかりで押えつけ、縛りあげるのに五分と、かからなかった。こうしておいて二人は知可子の手を、いったんほどき、衣類を、すべて抜きとって、再び嚴重に縛りあげた。手と足と二つを連絡すると、逆さエビ縛りの型になった。そのからだを上向けると、それだけで、知可子は四肢の痛みで、うめいた。

「こうすると、とても痛いよ。自分の体重で、自分の四肢が締めつけられるわけね。本当に責めるときは、あなたがこの体の上に乗るといいワ。西洋ではムチで叩くというが、日本ではムチがないのでズボンのベルトでたたくのよ。でもネ、四郎さん。女には、そんな残酷な責めより、もっと優しくて、もっとつらい責めがあるのよ。その一つは、くすぐり責め。いま一つは軽打法よ。くすぐり責めは、いつでもできるので、軽打法を教えるワネ。ちょっと待ってて」

そういつて由利枝は、となりの自分の部屋に入って行くと、すぐまた出て来た。その手には、長さ三十センチぐらいのセルロイドの長定規を二本、持っていた。

「この定規で、たたくと音は鋭いが、それほど痛くはないのよ。だから腹やふとももなど脂肪の厚いところでは、いくら強くたたいても、せいぜい赤いスジがつくくらいなの。でも、定規を縦にしてカドでたたくと骨身にしみくるくらい痛い。この方は、あとで肌に炎症をおこすこともあるので要注意よ。私が知可子を逆さエビ縛りにしたのは、この定規のムチの柔らかい方で乳房を、たたきたかったからよ。腹やふとももには、こたえなくても

乳房は痛いよ。軽くたたけばたたくほど、こたえるの。そのうち、頭がポーツとなってしまいいは、からだがかっかして、マゾヒストになること、請け合いね。さ、いっしょにリズムにのせて、たたきましようよ。何かレコードをかけてよ。そのリズムにあわせて、私が左側を、たたくわ。あなたは右側よ」

そういつて由利枝は長定規の一本を四郎に渡した。四郎はそれを取り、レコードをかけた。アルゼンチン・タンゴが盤面に乗っていたとみえ、軽快なメロディが流れ始めた。

そのリズムに乗って由利枝は乳房をたたきだした。四郎もそれにつられ、それに合わせた。四肢を一カ所に縛られ、口を封ぜられて全く動けない女体が、その軽い一撃で大きくはずみ、獣のような悲鳴を挙げた。それから相つぐ打撃に、そのたびごとに悲鳴をあげ、体をコチコチにして耐えているのが、四郎にも由利枝にも、よくわかった。乳房は、みるみる内に赤く色づき、ぴんと乳首が立って、火のように熱くなっていた。

一曲終わると、また一曲。結局、四曲、打ち続けたが、いつの間にか悲鳴が途絶え、うめき声に変わり、明らかに知可子が燃えだしているのが、二人にわかった。

「どう？ 四郎ちゃん」

由利枝も、さすがに興奮していた四郎に手をかけた。すると四郎は、

「たまんない」

といつて由利枝を、みつめた。

「バカねえ」

そういいながら由利枝が四郎を引き寄せる。と、四郎は由利枝の腕の中に、くずおれた。由利枝と四郎は、互いに抱き合い、キスをした。

——とうとう、あたしの網にかかったワ。おばちゃん——

そう由利枝は思った。娘を親類にあずけたのも、こうした下心があったからだ。由利枝は身体の中からゾクゾクした喜びが、わいてくるのを覚えた。そんな由利枝の誘導で四郎は思うままにあやつられ、獣のような、うなり声をあげて、由利枝に組みしかれたまま年増女の餌食になった。

知可子への責めは、全く異なところへ暴走してしまったのだ。

それと知り、知可子は、うなり声をあげてもだえたが、四郎には、その声も耳に入らなかった。また知可子も四肢を嚴重に縛られ、その上、がっしりと口中に、つめ物をされて

いては、それ以上に阻止するすべもなく、またその場から逃げだすこともできなかった。

(六)

四郎は、バツの悪そうな表情で坐っていたが、やがて知可子のナワを聞いた。由利枝が何かいおうとしたが、四郎がそれを制した。知可子は縄をとかれると、ふらふらと立ち上がったが、手足がしびれ、腰がまだ定まらなかった。かといつて、その場には、いたたまらなかった。一度、坐り、二度、立つと、裸のまま、ワンピースを一枚かかえあげ

「四郎のバカ！」

といったまま、きびすをかえして階段をかけおり、泳ぐようにして夜の町に、とび出して行った。四郎は追いかけてようとして玄関で立ちどまった。

四郎は、まだ裸のままだった。それに追っでもムダだという気もした。なんだか空しかった。その半面、こういう事件を引きおこした由利枝と自分に、無しように腹が立った。その由利枝は、がっくりとして畳の上に坐り込んでいた。その姿を見たたん、感情が爆発した。カッとなった四郎は、いきなり由利枝に襲いかかっていった。

四郎の体の中には、何かしら得体の知れないものが燃え上がっていた。怒りともつかず絶望ともつかないもの。その煮え沸ったドロドロのものを誰かに、ぶつけたかった。知可子に注がねばならない愛情を由利枝に取られた。オレは道を間違えたのだという自己嫌悪とともに、このドロドロのものが憎悪となり暴力となって、ほとばしり出た。

一方、由利枝には、してやったりという勝利感があつた。普通なら、とても自分の方に見向いてもくれない四郎が、自分を愛してくれたのだ。ウソの愛でもよい、とにかく自分は、愛を獲得したのだ。そういう満足感があつた。しかし知可子が、とび出したあとは、そういう満足感より以上に、恐怖が、めばえた。それは、怒った四郎が何を、しでかすかわからないという恐怖だった。何とかせねばならない、という気持が逆に四郎に、しがみつかせた。その行為が、四郎をさらに怒らせ逆上させてしまった。

四郎は突っ立っている裸の由利枝を、あつという間に大外刈りで投げ飛ばした。畳の上で、したたか腰を打ち、うめいている由利枝に乗りかかると四郎は、さきほど知可子にしたと同様、手と足を一気に、力のかぎり縛り

あげた。知可子の時は、まだ手加減があつたが、由利枝のときは何の斟酌もなかった。だから、それは、すさまじい勢いだった。投げつけられたときから、由利枝は完全に抵抗力を失っていた。恐怖だけが目先を、くらくし大きな悲鳴を、あげた。金切声が、あたりの空気を、くだいた。その悲鳴を、ふさぐように、いままで知可子の口につまっていたものが由利枝の口につめこまれ、口と顔は全く知可子の時と同様、ヘコ帯で、嚴重に緊縛された。状況は、そっくりそのまま前に戻った。だが対象の女は変わっていた。責め方も変わっていた。四郎は皮のベルトをズボンから引きぬくと、力いっぱい由利枝の体に打ち下ろした。乳房といわず、腹といわず、当たるを幸いに打ちまくった。赤い筋が乳房をいろいろ、肉がはじけ、血が、したたった。下腹部も無残に打ちすえられ、さきほど四郎を歓喜させた、年増女の肌が、はれて赤黒く変わっていった。

ひとしきり打ちのめすと、四郎は放心したように坐りこんだ。由利枝は、ぐったりして体をひきつらせ、目をむいていた。四郎は、しばらく部屋の片すみを見つめていたが、思ひ出したように号泣し、それがすむと衣服を

正し、由利枝をほったらかしにして外に出て行った。

四郎は、それ以来そこには帰らなかった。

(七)

知可子は素足のまま町をさまよっていた。持って出たグリーンの地に花模様のプリントのワンピースは、いつしか頭から、かぶっていたが、髪は振りみだし、目を血走らしていた。生まれて、はじめて、どこかに行つて死にたいと思った。だが人気のない神社に行くと、恐怖がつつて死ねそうにもなかった。ただ、むやみやたらに腹が立ち、からだをハツ裂きにしたかったが……それもできなかった。

町であう人は恐れて道をあけた。深夜の町である。それも十二時を過ぎていた。会う人といっても酔眼もうろうとした人ばかりだったが、それでも知可子の素振りには、見知らぬ人を恐怖におとし入れたらしい。だが知可子を、よく知っている人たちにとって、そんな知可子は何とも言えず哀れっぽく、色気があふれていた。このようなできごとは、知可子の乏しい頭では、どうにも判断できない問題だったのだ。感情の嵐がすぎると知可子は途

方にくれて、結局、バー「花」の扉をたたいた。

「ママ、ママ！ ママさーん。あたい」

と言っただけで、知可子は扉にとりすがって、おいおい泣き出した。あわてて起きてきたのか、ピンクのネグリジェ姿のマリが出てきて、

「仕方のないコね」

と、知可子を抱きおこした。その傍に小間使いの静が心配そうに顔を、のぞかした。

知可子は、しゃくりあげながら、二人に抱えられて、中に入った。

「知可子！ もっとしっかりしなくちゃダメじゃないの！」

「だって、だって……だって、くやしいんだもん。ワーン」

と知可子の泣き声は、甘えも加わってか、一そう強烈になった。そんな知可子を、マリは幼女をあやすようにして元気づけ、足をふいて、とりあえず二階の居間に連れ込んだ。そこで気付けに水を飲ませ、それから、じつくりと、いきさつを聞き出した。

四郎と知可子の行為はわかるとしても、由利枝のしうちは断じて許せないと、マリは知可子の話から判断した。だが四郎が由利枝の

手練手管に乘せられてしまった、いまとなつては遅すぎる。遅すぎるだけに、弱い女の立場を知っているマリには許せない。考えれば考えるだけ腹がたった。こうなつては、知可子と四郎の仲も、もうこれで、おしまいになるのではないかと思った。それほどショックを知可子は受けたに違いないのだ。

興奮しきった知可子を、なだめすかして、マリが事情を詳しく聞き出すのに、たつぷり一時間以上かかったし、その間、終始、縄目も痛々しい手首を、さすりながら泣きじゃくる知可子を見てみると、怒りよりも哀れさが先になった。いまさら、由利枝にどなりこんでも、どうなるわけではない。あとで脂をみっちりしぼっても、由利枝が他の店に移るくらいで、事態は好転するとも思われない。ともかく知可子の落ち着くのを待たねばと、その場は、ていよく相槌を打ちながら、マリはともかく、知可子の興奮がおさまるのを気長に待った。

知可子は泣くだけ泣くと、すすめられた果物を、うまそうにたべた。それでやっと自分をとりもどしたのか、改めて、

「ママ、ごめんなさい」

と、あやまった。

「何を……。そんなこと、いいのよ」

そう答えながらマリは、知可子のそんな子供っぽさ、人のよさが、あわれだった。

「さ、着替えて、もうねましよう」

とマリは、ま新しい下着類を出してやりながら、静の手をかり、自分の衣裳で艶やかに変身して行く乙女を不思議な生き人形を見る思いで見つめていた。

やがて知可子は、卵色の清楚なネグリジェに包まれ、マリの寝台に横になり、安堵したのか、疲れからか、すぐに心地よい寝息を、たてはじめた。

マリと静は、思わず顔を見合わせた。マリは静をうながし、ソファを二つ、あわせて応急の寝台をつくり、その上に寝ころんだがバカらしいやら、気になるやらで、なかなか寝つかれなかった。

(八)

翌日は、うららかな好天気だった。マリも知可子も、お昼近くまで眠り込んでいた。目が覚めて、静の作ってくれた食事を済ますとマリは改めて、どうしようかと考えた。しかし知可子は、もう、きょとんととして、まるで昨日のことは、忘れたかのような素振りだった。

僕のイメージ画集 『赤とんぼの頃』 室井亜砂路



た。だが、マリが、
「どうする？ 家に帰ってみる？ 着物も、
はきものも、とりに行かなきゃならないワ」
と聞くと、

「そうね。でもイヤ。当分あの部屋を見るの
もイヤよ。着物など、どうなってもいい。マ
マが貸してくれなかったら裸で暮らすワ。四
郎が、にくい！」

と、思いつめたように言い、ネグリジェを
脱ごうとした。マリはあわてて

「そんな気でいったんじゃないの」

と知可子の手を押えた。知可子は、その手
をにぎって思い出したように、しゃくりあげ
部屋の片隅を見つめていた。

四郎が知可子を縛りあげ、そのあとで由利
枝とできたことが、この哀れな娘に決定的な
憎しみを植えつけたらしい。知可子の精神は
まだ、振り子の針のように、ふれていた。

「それじゃ、初子が出て来たら必要なものを
とって来てもらいましょう。それまで、どこ
にも行っちゃダメよ。まあ気分転換になる
から、テレビでも見てたら？」

「うん。でも、テレビなんか見たくない。何
もしたくないのよ。ママ。私ってバカね。バ
カ、バカ。バカだから死にたい。死にたいの
ウウン、私が悪いの。私が爪生さんを、好き
になったばっかしに、こんなことになったの
よ。罰よ。ネ、罰だよ。いい気味だって、笑
ってよ。私がママの恋人をとった罰なのよ。

ネエ、ママ。私を縛って！ 私を叩いて！
私を、くびり殺して！」

と知可子は、また取り乱して泣き始めた。
マリは、もう黙っていた。こんな娘に手を出

した爪生も爪生だと思ったが、マリにはベヒードールに手を出す男の気持が、わからないではない。知可子には、そんな妖しい女らしさがあつた。マリは、しゃくりあげている知可子の傍に坐り、まるで母親が子供をあやしぐさで、自分よりも大柄なマリの背中を、なでさすつた。そんなマリの膝の上に突っ伏して知可子は、また、ひときり激しく、しゃくりあげ、縛ることを要求した。

マリは仕方なく、ゆっくりと腰ひもで知可子の両手を縛ってみた。すると急に何となく憎らしくなってきた。知可子が、ある時は清純に、ある時は妖艶に見えるのが羨ましかった。マリは細引きを持ってきて、とうとう知可子を、きつく縛りあげて寝台の中に横たえ毛布でグルグルまきにすると、そのまま部屋を出て行った。

マリは、それでも気が落ちつかなかった。不安な思いが身を責めた。まるで知可子の不安が乗り移つたようで、静と顔をあわせると「やるせないワ」と、こぼした。

「みんな、お若いですから」

と静は妙に落ち着いている。濃い緑茶を入れてもらい、暗い仕事場のボックスの一つに

腰をかけ、ぼんやりと灯の消えたシャンデリアを見ていると、やっと人心地が、ついてきた。

やがて日暮れごろになり、初子が出勤してきたので、マリは、いそいで初子を知可子の下宿にやるべく手短かに話をし「お願いするワ」というと、ホステス仲間では年長者の初子は、

「世話のやける人たちネ」

と笑いながら承知してくれたのだが、出て行つてしばらくすると、その笑い顔に救われた思いのマリのところに、当の初子が大あわてにあわてて電話してきた。

「ママさん、大変よ。大変！ 由利さんが縛られて虫のイキなの。部屋を片付けて、河村先生をよんだけど……」

「えっ！」

マリは、とびあがつた。初子の声も上ずり興奮しているのが、目に見えるようにわかった。すぐにも、かけつけねば、とマリは思った。

「すぐに行くわ。知可子を……」

といって、マリは知可子を縛りあげたままにしていることを思い出して絶句した。

「知可子が、どうしたの？」

「ううん。ともかく、すぐに行くわ」

そういつてマリは受話器を置いた。それから、すぐに爪生に電話し、手短かに話をして「花」に来てくれるように頼んだ。

それからマリは静をよんで、帰るまで知可子の縄を、とかないでほしい。その他のめんどうをみてくれるように頼んで外に出た。

由利枝と知可子の下宿は、歩いて約二十分の距離にあつた。その距離の長かったこと。

かけつけると初子が、かいがいしく知可子の居間の掃除をしていた。窓が開け放してあるにもかかわらず異臭がまだ残っていて、異様な雰囲気、かもしだしていた。

「どうだったの？ 由利枝は」

「とりあえず、隣にねせてあるワ」

「河村先生は、まだ？」

「もう見えたワ。ずんぶん衰弱しているそうよ。心臓が弱っている上に、一昼夜、痛めつけられたままで放り出されていたので、すっかり精神的にも、まいっているようよ。でもいい気味だわ。河村先生は、ぐっすり半日も寝れば大丈夫だろうって、強心剤に栄養剤、沈静剤に、ねむりぐすり、を、調和してくれたのよ。生命には別条ないんですって」

「そう。でも、一体どうなっていたの」

「私が、この階段を上がってきたら、この部屋の畳の上に由利枝が素っ裸で縛られていたのよ。ああむけになって口にはサルグツワがかかっていたわ。一本は、すっかり、かみ切られていて、残りの一本が半分ほど切れていてね、口の中に詰められていたらしい物は吐き出していたようだけど、ぜいぜいと肩で息をしていたワ。オッパイが赤くはれて血がにじんでたし、お腹も腿も、ムチか何かで、めった打ちにされたあとがあるの。白目をむき出して、手と足は、ロープで背中一つに縛られ、手首も足首も白くなってたし、冷たくなってたから、すごく、しびれていたと思うワ。オシッコも大便も垂れ流し。おまけに部屋中に着物を放り散らしているし、全くの落花狼藉よ。すごいったら」

身振り手振りで話す初子の顔は、真っ赤に上気していた。

「とにかく縄を、とかなくっちゃと思ってネ解こうとしたんだけど、結び目が固くって手に負えないのよ。どうにもならないので包丁で切って、それからタオルで、からだをふいて、とりあえず由利枝の部屋につれて行ってねまきを着せてから寝かせたの。そしたらムーッ、ムーッ、うなっては、ばたばたと暴

れるので、仕方なくしばらく押えつけていたんだけど、タオルでゴシゴシ体中をこすってやると、やっと血の色が出てきたので、知可子の部屋の窓をあけ、河村先生を呼んだの。それから、あなたに電話したってわけよ。知可子の部屋は見せられたものでないので、河村先生は、由利枝の部屋だけに案内して、何とか、ていさいをつくらったけど。手首や足首のナワの跡や、体のムチの跡が消えるのに二、三週間もかかるでしょうって。痴話ゲンカも、ほどほどにしないと、こんどは警察に言いますよって云ったけど、縛り方からみて強盗じゃないだろうってよ。だけど一体、何があったのかしら？」

初子は、まだ興奮していた。店着の和服の裾をまくって、艶な姿がこの場の空気にそぐわない華やかさを、まきちらしていた。

「四郎の仕業と思うワ。きのう、四郎と由利枝は、また、知可子が爪生と浮気したといって、二人がかりで知可子を、いじめているのよ。そのときの知可子の格好が、そっくりそのまま由利枝の縛られ方らしいわ。知可子をいじめているうちに四郎は燃えだし、由利枝の誘惑にのって、知可子の目の前で、できちゃったらしいの。そのあとで知可子は縄をほ

どかれたそうだけど、四郎を罵倒して、家をとび出したっていうのよ。だから、四郎と由利枝が、そのあとどうにかなったのかねえ。四郎が由利枝に腹を立てて、知可子の代りに復讐したとも考えられるし、そのへんから、どうなったかは、知可子も、みてないんだから、わからないワ」

「へえ。そんな複雑な事情があった？ ママさんから痴話ゲンカで家出らしいと聞いてはいたけど、想像もしなかったワ。そんなじゃ由利枝の自業自得じゃない。そんなことがわかっていたらナワを切るんじゃないかと思ったのに。いまから、また縛りあげてもいいわ」

「私もそうしたいくらいなの。でも考えてみれば、由利枝もかわいそう」

「そりゃ、みんな、お互い様よ。わたしたちの世界に住む女は、みんな日陰者よ。だからお互いに体を寄せあって生きているのよ。知可子がママの爪生さんにチョッカイを出したとき、誰も、よく言う人は、いなかったワ。だけど、あの娘は頭が弱いし、別に悪意があつての浮気ではないから、可哀そうに思っただけで、同情していたのよ。だけど、それをよいことに、分別もある由利枝が四郎をたぶらかして、二人で知可子をなぐさみものにして欲

望をみたそうとしたのは許せないわ。だからいまからでも、うちのめしたい」

初子は、まだ怒りが、おさまらないようであった。それにしても、四郎はどこに行ったのだろう。

マリは初子と一緒に由利枝の様子を見に行ったが、ぐっすり眠っているのを見て、話はあると思った。そこに、ちょうど中学生の娘の啓子が学校から帰ってきた。啓子は昨夜、親戚に泊まったので何もしらないという。マリも初子も詳しくは話さず、疲れているので河村先生が安静させるようにいったと伝えただけで、あとを、まかせた。

マリは再び知可子の部屋に帰り、タンスから下着類やワンピースなどを四、五枚、風呂敷に包んだ。

「知可子は、どうしてるの？」

と初子が聞いた。

「うちにいるワ」

「荒れていないかしら」

「大丈夫、縛りあげてきたの」

「まあ、縛って！」

「そうよ。爪生をぬすんで、ごめんなさい。

縛って、だってさ。だから、渡りに舟。いま動き回られては大変と思って……」

「知可子らしいワネ。縛られた、あのコの姿を見てみたいワ」

「初子も案外、悪趣味ネ」

「お互い様でしょ」

「そうね」

二人は外に出た。ふらふらするような、何となく、落ち着かない気持ちで帰ってきたとき「花」の前で、呼び出した爪生にバッタリと出会った。

爪生は相変わらずの英国紳士スタイルでウィステッドの渋いダークグレーの背広を着て一分のすきもない身だしなみだった。

「どうしたのママ。えらい、あわてぶりで」

「大事件なの。話したとおりよ。でも、あらかたは片付いたワ。これからが、どうしてよいか、手に負えないのよ。原因は、そもそもあなたなんだから、力を貸してちょうだい」

マリは、いきなり、そうきめつけた。たかぶった感情が、ムキ出しの話しぶりだった。

爪生は、ゆっくりとバー「花」の中に入りボックスに腰かけながら、

「一体、どういうことなんだ？ もっと詳しく話してくれなくちゃあ」

と、マリに話の先を、うながした。マリは初子と並んで爪生の前に坐り、昨夜、知可子

が素足で、たずねて来たことから、いま由利枝を娘に引きわたしてくるまでの出来事を、かいつまんで順序よく話した。

爪生は、ふむ、ふむと相槌を打ちながら聞いていたが、聞き終わると「フーッ」と溜息をついた。

「どうしたらいいの？」

「まあ、そうせいしても、そんなに早急には解決は出てこないさ。いくらバカだと言っても、純情な知可子の受けた傷が、そう急に、なおるとは思えないしさ。その上、由利枝は由利枝で、彼女なりの悩みや言い分はあると思う。四郎に受けた仕打ちのウップンを人にぶちまけるわけにいかない哀れな女だ。四郎は四郎で悩んでいるに違いなからう。当分、みんな、そっとして、いたわり合って生きていくより仕方なからうが、問題は四郎だな」

「どうして？ 四郎というところ……」

「オレは男だから、よくわかるのだが、四郎は、まだ知可子を愛していると思う。由利枝とできたのは全くの過ちだろう。だが、過ちだと言いつくすれば、知可子の目の前で由利枝を犯したのだから、知可子がよけい傷つくと考えるのが常識だ。すると、弁解はできない。四郎が外向的性格で激しい男なら、ママ

たちの心配するように、ぼくを、つけねらったかもしれない。しかし、いまのところは、そんな形跡はない。由利枝の誘惑に引っかけ、るくらい単純な若者であれば、自暴自棄に、なりかねない。単純な奴がヤケになる。これが、こわい」

「何かまた、やらかすのでしょうか」

「それなら、まだ救いはあるさ。が、自殺したり、それができなければ、それに近い暴走を、しかねない」

「ほんとかしら」

「四郎は車の運転手だったな。多分、今夜あたり警察から電話が、かかってくるのじゃないかな。そうになったら、また一騒動だ」

「困ったワ、私」

「困ったのは、お互い様だ。これもスエ膳をくったムクイかな」

「そうよ！ 憎らしい人！」

「アウッ、ツ！」

ぎゅっとマリが爪生の太ももを、つねったので、爪生は思わず、とびあがった。初子はそれをみて思わず笑った。マリも初子の笑いにつられて笑った。爪生が来たせいか、マリは初子の笑いに誘われるだけの心の余裕を、やっと、とりもどしていた。

「知可子は、どこにいる？」

「二階よ」

「そう。じゃあ知可子と、しばらく話してこよう。二人だけにしておいてくれないか」

「いいワ。だけど、ちょっと待って」

マリは、あわてて立ち上がり初子に目くばせすると二階にあがって行った。初子はマリが知可子の縄をときに行ったことを知った。「部屋が乱れっ放しなのですよ。女の城ですからネ、少し待ってあげて下さいよ」と初子は爪生に説明した。

「そう」

と爪生は、さもわかったような風をしたあとで、ヒタイに手をあて、何か真剣に考え込んだ。初子は、爪生のこんな、まじめな表情をみたのは、初めてだった。男らしい姿だった。ママや知可子が、ほれるのも当然だと思う。自分もスキがあったら奪いたいと思う、そんな魅力が爪生には、あった。

マリは、そのころ、あわてて知可子の縄をとうとうとしていた。知可子の手先は、しびれ赤黒く変色していた。だからマリが、とうとうとすると痛むのか、しきりに手をふった。

「イヤ。解くの、イヤよ！」

「強情張るのやめなさい。みっともないワ」

「イヤイヤ！ 一生、縛られてるウ」

「また、あとで、うんと、縛って上げるからさ。爪生が来ているのよ」

「爪生さん！」

とたんに知可子の抵抗が弱まった。マリは憎らしいと思った。だが感情は、このさい、禁物なのだ。とにかく早く解こうと焦った。だが、なかなか解けない。それでも必死の思いで、ようやく解くと、知可子は、寝台の上で、くるりと向きをかえ、マリの目を、じっと見た。マリは、その目が、まぶしかった。

知可子は、ひたすら、爪生を愛しているらしい。マリは、爪生にかけるものが、それほど一途ではなかった。もっと生活に根ざしたものの、自然なものであった。

「ママ、愛しているのネ」

低い声で知可子が、いった。マリは、ゆっくり、うなずいた。すると、いきなり知可子はマリを引きよせ、胸に顔をつけて、むせびないた。まだまだ神経のたかぶりは直っていないようだった。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と、くりかえし言った。マリは、その知可子を、あやし、寝台の周辺を、ととのえろと爪生を迎えに降りていった。

爪生が、いそいそと二階にあがるのが、わかった。それを見送りながらマリは、軽い目まいを覚えた。初子が支えてくれなかったらその場に倒れていたかもしれない。そんな激しいものが、マリの胸の中に渦巻いていた。

二階の寢室の戸をあけると、知可子はマリの部屋の寝台の上に寝ていた。卵色のネグリジェを、まとい、大形の夕顔が、しおれてい

るような感じだった。

マリの部屋は、思ったより清潔で豪華だった。マリとは、もう気心を話し合い、体を合わせ、裏も表も知り尽したという交際をしていながら、爪生はまだ、この部屋に入れてもらったことはなかったのだ。爪生にとって、神聖な部屋のような感じがして中々踏み込めなかった部屋である。マリには、そんなきびしいところがあった。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありま

未入手の向はお早

局私書箱第41号

略号『花』

定価五〇〇円(送共)

その部屋の中央に、幼い妖婦が寝ていた。知可子は軽く目を閉じていたが、爪生が近づくと目を、ぱっちり、あけた。遠い他国の出来事でも思い浮かべているようだったが、爪生の姿を認めたたん、急に現実引きもどされたという、感じに変わり、爪生を凝視した。

「だれに聞いたの？」

知可子は、そういったまま、じっと爪生をにらんだが、爪生がだまってみていると、大粒の泪が両の目に湧いてきた。

「爪生さん」

そういつて知可子は、両手を爪生の方に差しだした。幼稚な甘えをムキ出しにして、知可子は爪生を迎えた。しかし、その手に、まだまだ生々しい赤い縄の痕があるのを、爪生は見逃がさなかった。

「どうしたの？ 知可子」

そういいながら爪生は寝台の縁に坐り、その手を取り、顔を知可子の顔に近づけ、額に軽くキスした。

「四郎と、けんかしちゃったの。四郎が浮気しちゃったの。四郎を許せないのよ。聞いて聞いて。何もかも聞いてネ。本当は私が悪いのよ。ママにもそういつて、あやまったわ。」

だから、いままで、そのロープで縛ってらっていたのよ。だから、爪生さんが腹を立てたら、私を縛っても叩いてもいいのよ。四郎の時のように腹を立てたりしないワ。いじめても、殺してもいいのよ。知可子は悪い女なの」

言うことで興奮を呼ぶのか、しずかに話した知可子だったが、しだいに自分の言葉に酔い、あとは一気かせだった。

だから爪生は、それに水をさすように、すこし、間をおいた。

「そんなことはないよ。知可子は正直な、いい女だよ。知可子が私を好きになっても、誰も知可子を責めることは、できないんだ。男は一度に何人もの女を受け入れ、愛することができるが、女は、愛は一つと思っているものなんだ。その違いで、人は皆苦しむんだ。」

だから、知可子が悪人ということはないのだよ。四郎だって、四郎なみの悩みはある。四郎が知可子を縛りあげ、他の人の誘惑に陥ちたからといって、四郎を悪人扱いにはできないよ。だから知可子も元気を、お出し。悩んでも、どうにもならないことだから」「そう。そう思うワ。でもわたしは、本当に爪生さんが好きになったんだもの。抱かれた

かったのよ。だから、この前の時、死ぬほどうれしかったの。それに四郎は腹を立てて私を縛りあげたのよ。さんざん、いじめたワ。

どうして私とあなたのことを四郎が知ったかわたしには、わからないワ。けれど四郎から縛られたことについては私は何とも思っていない。私の方が悪いんだから仕方がないと諦めて素直に暴力を受けたワ。だけどその次にまた縛られたとき、由利枝姉さんが私をいじめたワ。四郎がよいといったといつて……。それが許せないのよ。きつと由利枝のワナね。それと知らずに、四郎はワナに落ちたんだワ。最初いい気持と思っただが、口惜しくって、口惜しくって、由利枝をハツ裂にしたかった。だけど私は縛られたままだし、四郎は、すっかり、いかれてしまうし。とうとうたまらなくなって四郎から縄をとかれた途端に逃げ出したのよ。いまからでも押しかけて行って由利枝を殺したい、くらいだワ」

「その由利枝がどうなったか、君は知らないんだらう？ 四郎から復讐を受けたんじゃないかね。君は、ママからまだ話を聞いてないから知らないだらうが、ママが、君の下着を取りに行くのをかねて初子さんを君の下宿にやっただが、そのとき由利枝は、逆さ蝦型

に緊縛されたまま素裸で放置されていたそう。ムチウチされたらしく、全身が紫色にはれて、イキもたええだったということなんだ。それで、もう十分じゃないかね」

「そうなの！ いい気味だワ」

爪生は知可子の手をにぎった。知可子はその手をひっぱり、乳房の上にのせた。乳房の下をドドッ、ドドッと血が走り、知可子の生命の若さを伝えていた。爪生が知可子をまぶしい思いで見たときマリがあがってきた。

知可子は今も爪生が好きといったが、よく考えてみると、知可子の好き嫌いは、もっと単純で素朴な三段論法から構成されている。つまり、こうだ。知可子はママが好きだ。初めて人間らしいママさんにあったと寝る。

だから知可子はママが好き、ママは爪生が好き。だが一方、知可子も爪生が好きだということである。好きと決まれば、理屈ぬきで膚にふれ、身にしてみても確かめたい。そういうのが知可子の生き方であり、そこには他人の迷惑や人の迷惑など、割り込む余地はなかった。

「爪生さんに聞いたの。みんな水に流して私働くワ。ね、洋服、借りていいでしょ」

知可子に、もうかげりは、なかった。

「無理しないでいいのよ、きょうは……」

「大丈夫！ わたし、ママさんと爪生さんに全部しゃべってしまったら、スッキリとしたのよ。ママさんには悪いけど、爪生さんを余計に好きになっちゃった。ごめんなさい。うん、別にママさんから爪生さんをとろうというわけではないの。私は、重箱のスミでもいいから、手足を縛って、そっと二人の傍においていてくれたら幸福だワ。それでいいのよ。さあ、ママ、私、もりもり働くワ。うんとお金もうけして、ママに立派な家を建ててやりたい。爪生さんといっしょに住んでもらうのよ。で、その時がきたら、私を犬小屋にでも置いてよネ」

知可子は陽気に、はしゃいでいた。しかしその素振りの中に一抹の不安と寂しさが、ただよっているのをマリも爪生も見逃がさなかった。つかい棒になって支えてやらねば、このこは、どうなるだらう——マリと爪生は期せずして、いっしょにそう考えていた。

× × ×

その夜突然、神戸の警察署から電話がかかってきた。マリが出てみると、それは爪生が予想していたとおり、四郎の事故死を知らせる電話だった。マリは思わず受話器を、とり落とした。



(一) あるSM論

「なぜ、女を縛るのが好きなのか」
全く野暮な質問である。とにかく好きだから好きなんだ、とでも答えるしかあるまい。しかし、考えてみると全く不思議なことである。

本来、女にかぎらず、人を縛るということは、逃亡をふせぐのが目的である。その意味では、外国の例に多く見られるように、簡単な手縛りで目的は達せられる。ところで、伊藤晴雨の『責め』にはじまる今日の『SMプレイ』で女を縛るのは、そのような目的は全く無い。

女のヌードを見るためだろうか。

S M 随 想

責め の 専 科

香川 紘一郎

カット・マエダヒオミ

セックス行為を、好きなようにするためだろうか。

もし、そんな理由なら、わざわざ縛る必要はあるまい。だから、縛るという行為そのものが目的になっているといえる。

わたしたちは、日常、女性に接する場合、種々様々の感情が動く。

美しい、可愛い、品がよい、魅力的、セクシー、等々。教養のあふれた女性、知性的で何となく物の言い難い女性。しかも、日常生活では、それらの女性が、他人であるだけに指一本、ふれることもできない。

町や乗物の中で出会う女性の中には、こんな女を素裸にして後手高手小手に雁字搦めに縛りあげたら素晴らしいだろうと思うことがよくある。だが「あなたを裸にして縛りたい」などと、その女性に云ったら、それこそ、と

んでもないことになるだろう。

つまり、われわれが日常、接する女性は、妻も含めて、皆人間なのである。

ところで人間という動物は大変厄介な動物である。思想だの信条だのというものを持っていて、それが人間の動物的行動をきびしく制約しているのである。文明が発達した社会ほど、この制約はきびしい。そこにサディズムとマゾズムが生まれ発展する原因がある。未開社会では、おそらくSMの心理というものはないであろう。

江戸時代でも、女を縛る、また縛られるということが快楽につながる心理は、今日ほど一般的には無かったに違いない。

人を縛り、海老責めや吊り責めにかけるといふことは、刑罰というものの持つ陰惨で恐ろしいものという観念の方が、はるかに強く

とうてい今日のプレイの心理には結びつかなかったに違いない。もし、そのような心理が本来的に縛るという行為につながるものなら刑罰として用いられたということ自体が極めて奇妙なものになってしまう。

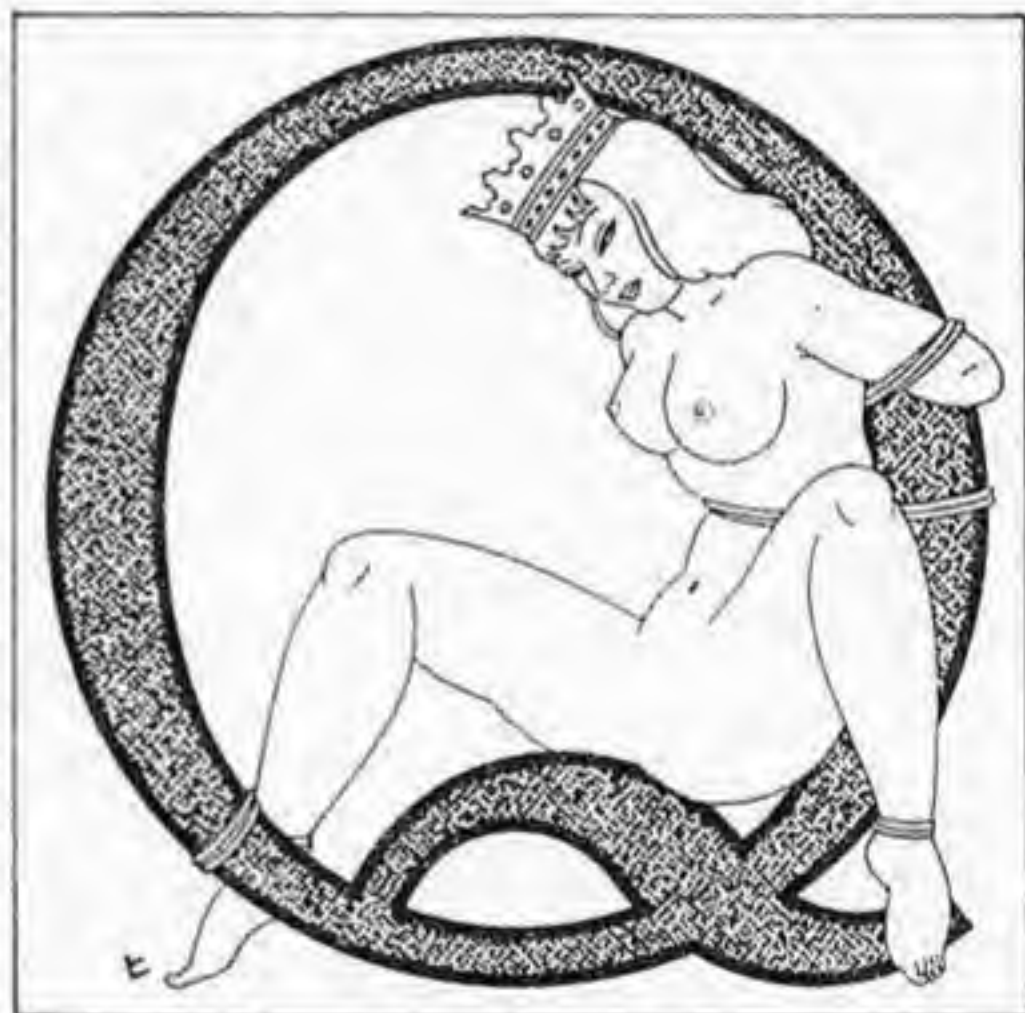
さて、そこで現代のSMプレイ、特に縛るという行為についてだが、縛る側の心理としては、縛られる以前の女性と、縛られつつある、そして縛られた女性とは、全く別の存在として、うつる。

その事を端的にあらわしている事例として責めの大家、故伊藤晴雨氏の表現に見る事ができる。晴雨は自分の妻をモデルとして責めの実験を行ない、その結果を発表しているが彼は自分の妻を、ことさらに女という言葉で表現している。そのことについては、晴雨自身「妻」あるいは、その「名前」の代りに「女」と呼ぶと、ことわって使っている。

つまり縛られる以前の女性は、所謂「人間性」を持つ人間だが、縛られた女性は、もはや道徳も倫理もヒューマニズムも、つまり、サディストの欲望を、さえぎっている面倒な観念を失った女という名の肉体なのである。

後手高手小手に縛りあげられた全裸の肉体は、教養や知性の仮面をはぎ取られ、肉体の美しさと動物としての性質しか示し得ない。

足が自由で、その足で女性自身を、かくそうとするなら、足を縛りあげるがよい。



自由な口でサディストの行為を非難するなら、サルグツワをはめて黙らせればよい。

美しい目で、あるいは、きびしい目で見るとなら（昔から目は口ほどに物を云い、というように、視線は相手の行動を制する有効な手段である）目かくしをしてしまえばよい。

かくて人間としての女は、完全に動物としての女に変身してしまうのだ。

サディストが好んで使う言葉「めす豚」とか「めす猫」という言葉の意味は、こういうことなのである。こうして「めす」化した女から、あなたは更に徹底的に人間性の残滓をしぼりとってしまうのだ。

目と手で、女の身体のすみずみまで、なでまわし、動物的な悲鳴や快樂の叫びをあげさ

せるのだ。それでも、まだ転げ回って「人間性」を守ろうとするなら、吊るしあげてしまえばよい。

屠殺場の肉のように、全裸にむかれ縛りあげられて吊るされた女の肉体は、女を動物として表現する最高のものである。だから縛りの魔力にとりつかれたサディストたちが、必ず最後に到達するのが吊り責めなのである。大の字に吊るのもよい。外国のように両手を吊るのもよい。後手高手小手で吊るのは、もっとよい。逆さ吊りもよい。

かくてサディストは、人間の仮面をかぶった女を完全に、純粋な動物に還元するのだ。

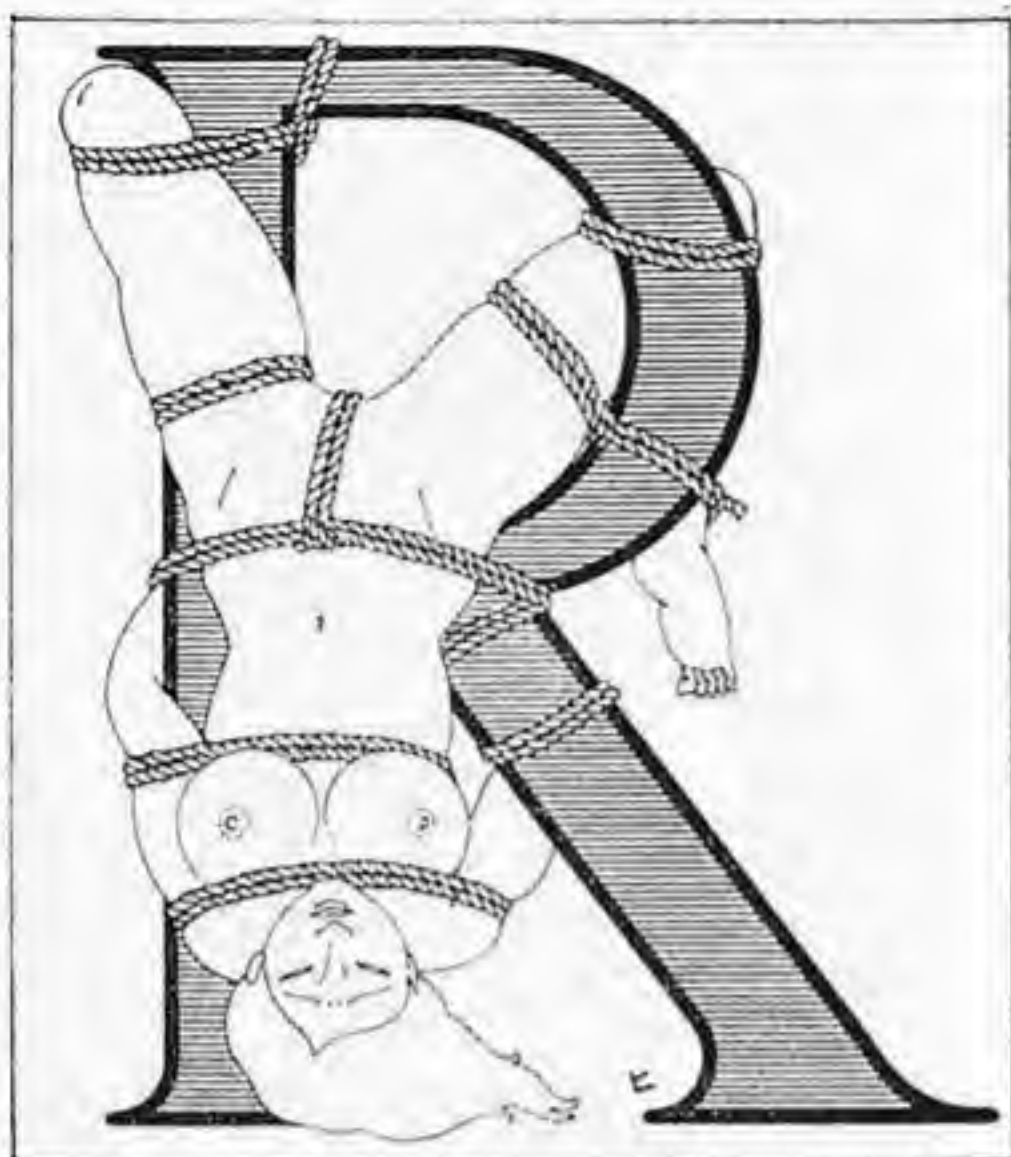
マゾヒストの心理は全くこの逆である。自ら動物に、わずらわしい人間の性質から脱却し一個の動物に還元したいという欲望から、徹底的に人間としての扱いを嫌い、動物として扱われることを願う。中世に行なわれた拷問は、このようなマゾヒストの願いに空想としてマッチする。

このように考えると、サディズム、マゾヒズムの背景には、現代社会の複雑な動きがあり、サディスト、マゾヒストにインテリが多い理由がわかる。だから、このような心理は今後一層、増加するであろうし、その形態も一層、多様化するに違いない。山本リンダの歌の文句ではないが『どうにもとまらない』ものなのだ。

(二) SMのある風景

国道一号線は公害で有名な四日市から二十号線に入る。二十三号線を伊勢市に向かって走り続けると、伊勢市の手前の玉城町という所にドライブインがある。ボーリング場があるので、すぐ分かるが、ここに国際秘宝館と銘うった建物がある。

入場料は八百円と一寸、高いが、いささか興味ある場所である。インドのカーマストラにヒントを得たとか云う性愛の図をはじめ所謂、性の展示会場なのだが、いささか、この種の他の展示会場と違うのはSMコーナーである。だがSM愛好の士には物足りないし



『SMセレクト』という雑誌に発表されているものが殆どだが、十五号ぐらいはあろうかという大きな画面にカラー写真で緊縛された女の額が、ずらりと並べられているのは壮観である。

伊勢の方へドライブする機会があったら、是非一度、御覧になるとよい。入場料八百円(女性は七百円)は一寸、高いが、ボーリングゲーム無料とある。

(三) モデルの心理

SM誌の氾濫? に伴って、多くの緊縛フォトが発表されている。また読者の投稿写真も発表されていて仲々楽しみなものである。こういうフォトを見てみると、いつも思うのだが、モデルになった女性(読者の投稿フォトのモデルを含めて)たちは、自分のあられもない全裸の縛られた写真が、全国の店頭で多くの人に見られ、買われていることを、どういう感情で受けとめているだろうかという事である。

特に、市井の名もない平凡な人妻などの場合、非常に興味ある問題である。顔もはっきり写されているから、身近な人が見れば分かるはずだし、地下出版ではないのだから、その危険? は充分にあるのだ。彼女らが完全なマゾヒストなら、これは非常に大きな刺激

であるに違いないが、平凡で、人並みにまじめな生活を送っているOLや人妻の場合、もし近所の誰かに知られたらとか、友人なり知人に見られたら……という不安は、ないだろうか。

近所の奥さん達が二、三人も寄って立ち話でもしていると、つい、ヒョッとしてあの写真のことが話題にされているのではないだろうか……などと、カンぐってしまうようなところもあるのではないかと思う。すれ違った誰かに声を掛けられでもしたら、それが単に道を訊くためであっても、一瞬ドキリとなるようなこともありそうな気がする。

全裸で縛られている写真などというものはいかにポルノ解禁だのSM氾濫だのと云っても、まだまだ一般的に受け入れられるものではない。

ただ幸いなことに人間の視覚というものは案外、不確かなものである。例えば今までの奇巧のモデルになった女性たちを町の中で見かけたとしても、まず当人だと見分けることはできないだろう。せいぜい、よく似ているぐらいにしか思わないだろう。また世の中には、よく似た人間は案外、多いのである。

それにしても、勇気? のいることではないだろうか。モデルの女性たちの告白を是非聞きたいものである。

のルポルタージュ

すすり泣くとき

鉄 三

S Mの共犯者意識

私は机の上に両足を挙げて、回転椅子にのけぞりながら、電話のプッシュボタンをピアノの鍵のように、ポンポンポンと叩いた。

南加津子の青白い静脈を浮かべて、ぼつてりと可愛いく膨らんでいた腹部が、妙に生々しく、私の目に蘇ってきた。

朝、八時に彼を送りだしたら、夕方の六時頃までは、私一人きりなの。だから、ベルが鳴って誰も出なかったら、マーケットへ買物に行ってるか、お医者さんのところへ行ってるかだわ。だから、そのときは、また掛け

直して下さいネ”

この前、別れ際に、そう言っていた南加津子だったので、私は安心して、電話のプッシュボタンを押していた。押し終わって暫くの空白の時間を置いてから、ジージージーと呼出音が断続する間もなく、ガチャリと受話器を把る反応があった。

「モシモシ、南加津子さんですね」

「はい、加津子です」

「僕だよ。どう？ わかる？」

「はい、わかります。ウ、フフフ」

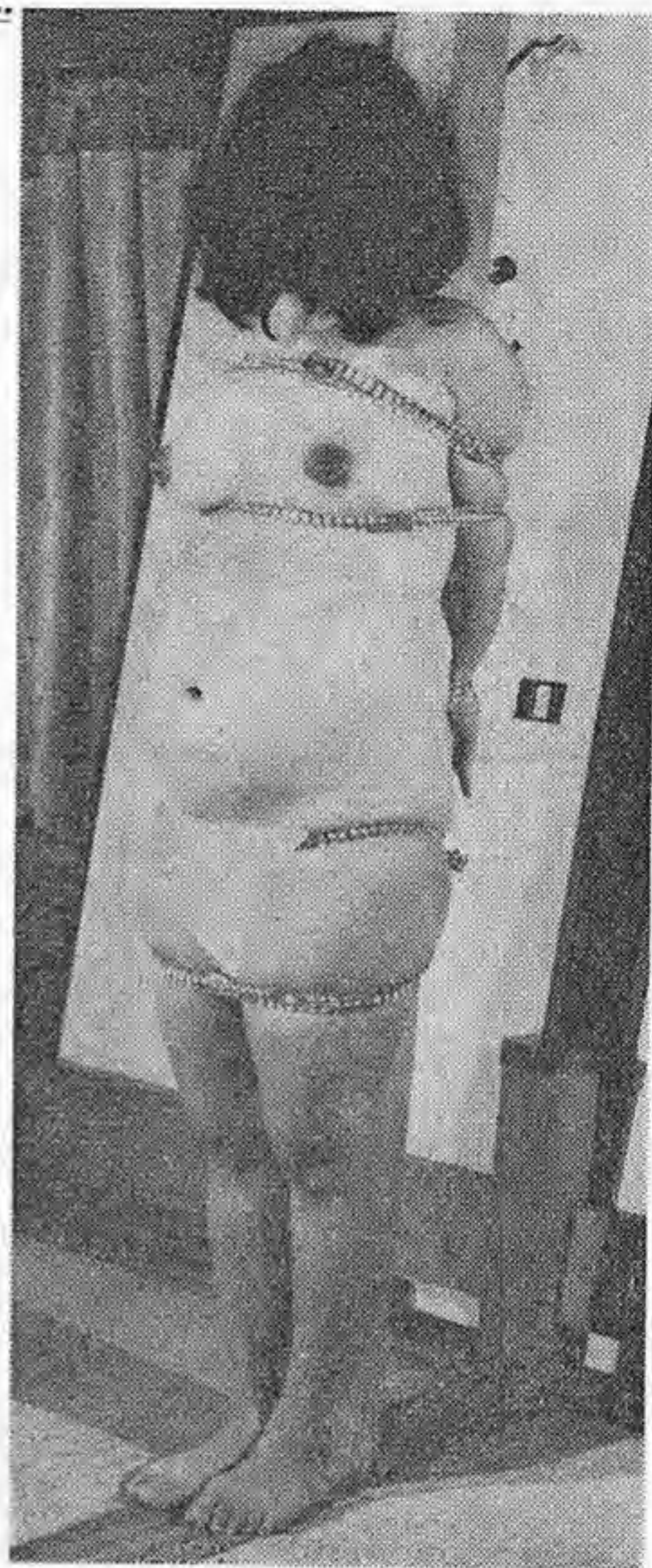
「なにがおかしいの？ 笑ったりして……」

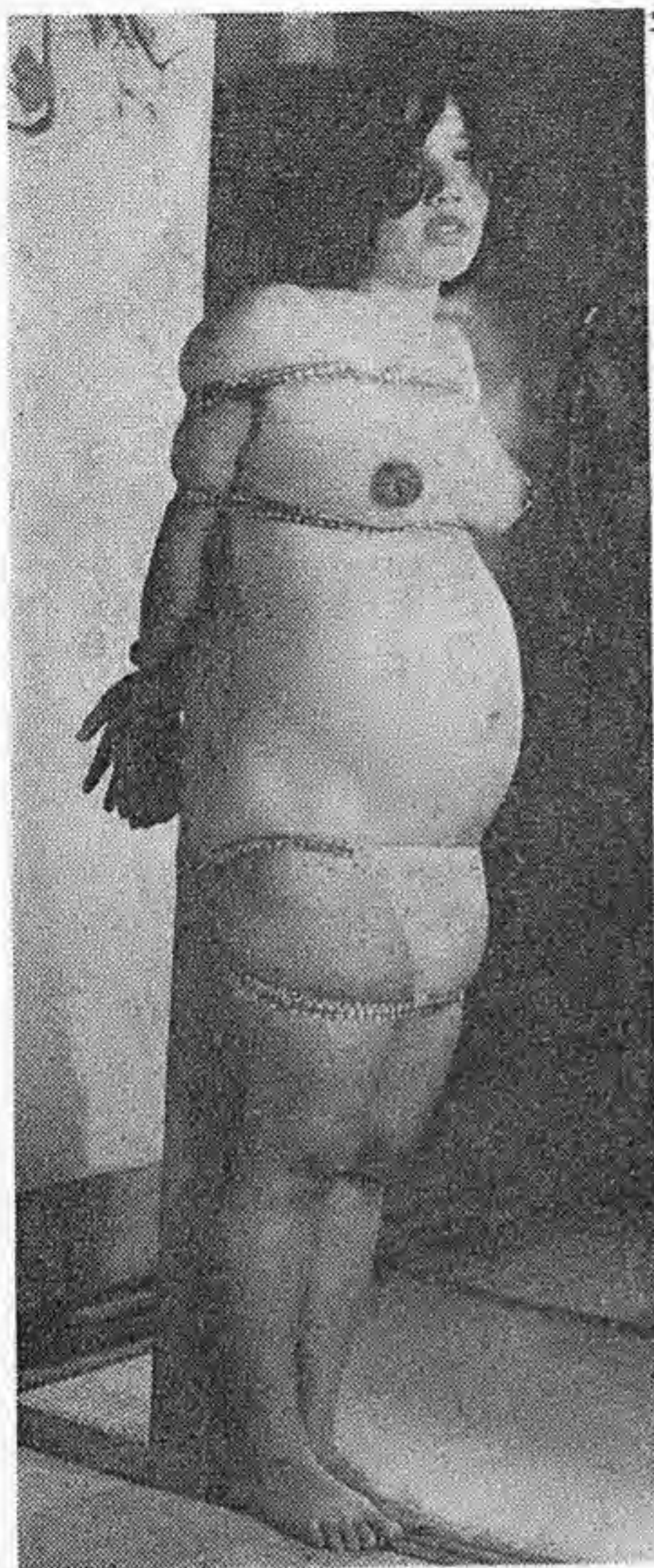
「でも、真面目な声で、電話してくるんだもの。おかしくって、つい。ごめんなさい」

「なあんだ。それだったら、もっと、不真面目に掛けようかな。それはそうと、身体の方は、元気？ この前、ちょっと、きつく縛りすぎたからね。内心、心配してたんだよ」

「元気ですわ。お蔭で、お腹の方も、大きさも変わりありません。あれから、まだ五日か経っていませんものね。あたり前ですわね。膝の裏が縄でこすれて、少し痛かったただけで他に何ともありませんでしたわ」

「彼に話したの？ 実は、あの日の翌日に、すぐ電話しようと思っていただけ、君が





〔カメラ〕と〔ペン〕

M女加津子が

塚 本

彼に話して、騒動でも起こっていないかと思
って、電話するのを控えていたんだよ」

「まだ話してませんわ。だから、このことは
彼には内緒なのよ。だけど、いずれ、カメラ
ルポで雑誌に載せるんですよ。そしたら一遍
に彼に、ばれてしまうわ。それまでに、話さ
なけりゃと思っているのよ」

「雑誌が出るまでには、まだ、大分、日があ
るからね。うまく機会を見て、話すんだね。
僕が話してよけりゃ、彼に逢ったって、いい
んだよ。君さえ、構わなけりゃ……」

「いいえ、私から話すわ。彼を、びっくりさ
せてやろうと思うの。そしたら彼、急にあわ
てて、私をひどく責めるかもしれないわ。そ

う思うと、おかしくって。ウ、フフフ」

「そんな、笑ってる場合じゃないだろう？」

「彼が、内緒にそんなことをしたって、怒った
ら、一体、どうするんだ」

「怒って、私に罰を加えるんだったら、望む
ところだわ。彼にだったら、私、いくらでも
責められるわ。その方が、面白いじゃない」

「うーん、そこまで決心してるんだったら、
安心だがね。とにかく、次にプレイするとき
までには、彼には話しといてくれよね」

「ええ、そうするわ。それで、次は、いつ頃
の予定をしておいたら、いいの？」

「そうだね、一週間あとにしておこうか。来
週の今日だ。ええと、九日になるかな」

「九日だったら、私もいいですわ」

私は、そのとき、ふっと、この前、南加津
子を、自分の両腕でぎゅっと抱きしめた、あ
のえも言えぬ女体の感触を思いだしていた。

私の腕のなかで、がたがたと、オコリのよ
うにふるえていた彼女は、本当に新鮮で、嗜
虐心をふるい立たすのに充分であった。

驚きのためか、初めての男に責められると
いう恐怖心のためか。私には、南加津子の、
あの、おびえきった表情が、たまらない魅力
だった。

それだからこそ、最初に、逢ったばかりでしかも、プレイをやるうなんて、打合わせは少しもしていなかったのに、あんな強烈な責めを展開させてしまったのだ。

私が奥歯をかみしめて、無我夢中で縄を打ってゆくと、彼女は、そうはさせまいと、脚をすぼめて激しく抵抗した。その抵抗を、はかないものにするため、膝頭に掛けた縄を、私は、ぐいぐいぐいと、締めつけていった。

あのときの、全身が波をうっているように大きくうねっていた南加津子の表情が、私の臉に灼きついて離れない。

「もしもし、どうかなすって？ 九日の、時間は、この前のように一時でいいんですの」
受話器を通して伝わってくる南加津子の声に、私は、ふっと現実に戻された。

「ああ、ごめん、ごめん。実は、この間のプレイのことを思い出していたんだよ。あのときの君は、実に素晴しかったよ」

「何を言ってるの。五月二十日から、大阪市内も電話は時間制になったんじゃないかって。長電話をしてたら、電話代がかさむわよ」

「それがね、ここから西宮へは、大阪から兵庫県だろ。だから、もともと市外で、時間制



なんだよ。さあ、それで、九日の時間のことなんだが、一緒に食事をしようか。差支えなかったら十一時ということでしょうか？ 場所は例のお宮さんさ。駐車場で待ってるから」

「はい、私は、いくら早くても結構ですわ。」

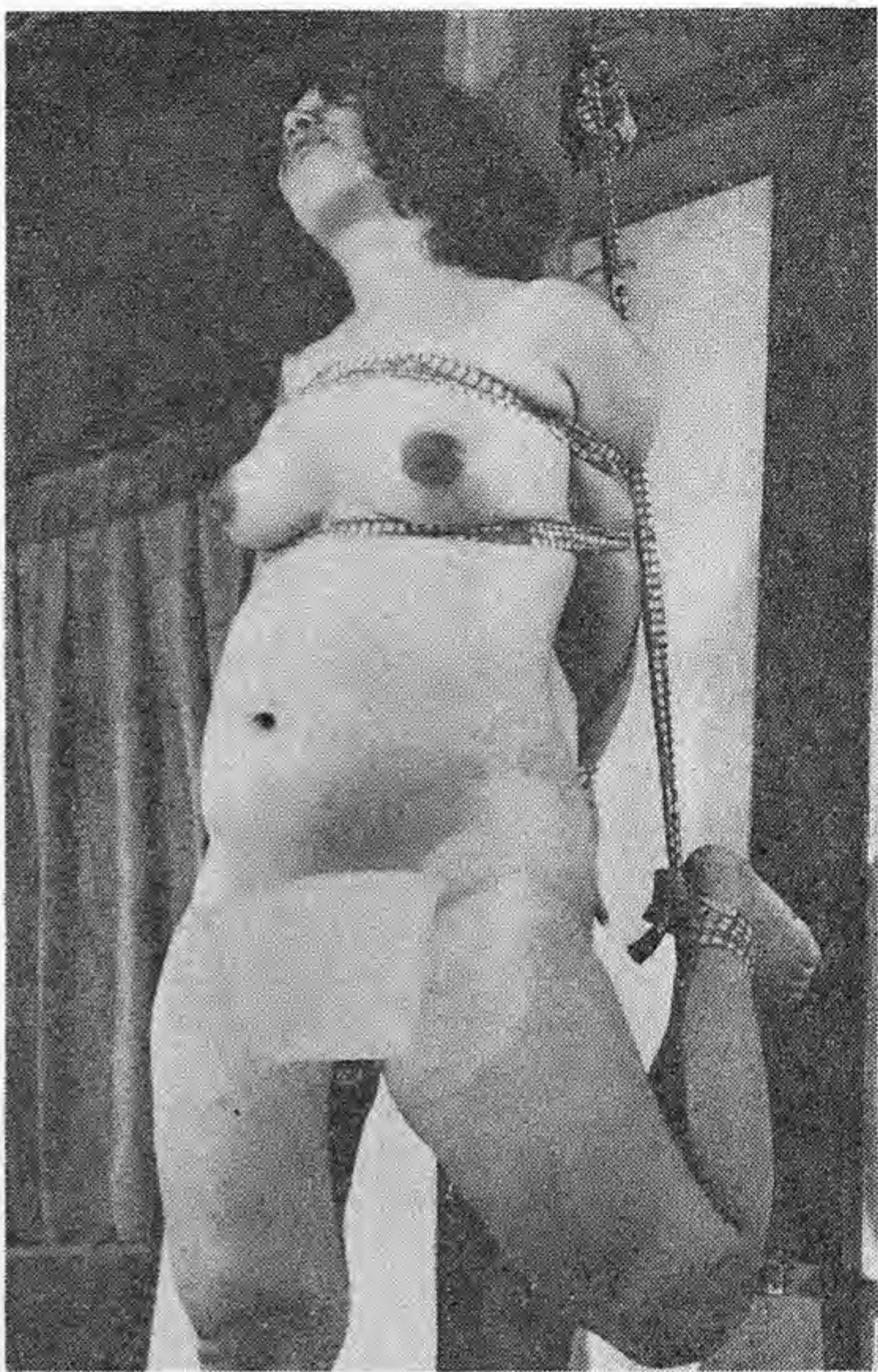
それでは、九日の十一時に……」

「じゃあ、それまでに、彼には話しといて下

さいよ。では、お元気で、身体に気をつけてね。来週、また、お逢いしましょう」

「さようなら。それでは、よろしくね」

私は受話器を置いてから、新聞紙を顔の上へのっけて、回転椅子を倒して長々と寝そべった。五月晴れの空は、あくまで青く澄んでいて、窓を開ければ新緑の香ぐわしい、そよ



風が肌に、しみわたるように吹いてくる。

忙中閑あり——。

SMというものが、自分の日常生活の中で占める割合が、何分の一か、或は何十分の一かの比率なのに、今の私には、南加津子という女性が、大きなウェイトを持って、迫ってくるように思えてならなかった。正直なところ、今の時点での私の心は、完全に彼女によ

って占められているといってもよかった。

奇クの読者の方々も、きっと、そうだろうと私は思う。朝から晩まで、いつもいつも、

SMのことばかり考えている人なんて、いる筈はない。ある一時期だけ、そのことに心身を燃焼させているのに違いないのだ。今の私は丁度、その状態だった。

△妊娠▽——という女性のみの持つ生理的変

化によって、まるまっちく、肉づきよく太った南加津子を、一糸まとわぬ全裸に、ひんむいて、思いのままに、責め抜くということはなんという愉しいことであらうか。

彼女が、幻想的な被虐の心に、さいなまれている女性だけに、汲めども汲めども、尽きせぬSMの泉が、そのプレイの中から溢れ出てくるように思えてならなかった。

読者通信に寄せてきた南加津子の、あの文面を、現実にとのように展開させてゆくか、私は、この前の第一回で見せた、彼女のあの喘ぎようからして、次には、こうもやりたいああもしたいと、大きい夢を持っていた。

あの第一回目のプレイのときに見せた赤裸々な彼女の姿態は、彼女と私だけ二人の秘密のようなものだった。△これだけは、誰にも話さないでおこう▽と二人で固く約束していた、あの事柄。いわばSMについての共犯者意識が、その秘密を、一層、強い二人の絆にしていた。

△妊娠▽という生理的現象のためか。或は、マゾという彼女の性格からきた、それは、彼女一人だけの特異な現象だったのか——。

私は、あの日の激しい肉迫的なプレイのことを逐一、追体験しながら、原稿用紙の上へ



ぶつけるようにペンを走らせていた。

君子は豹変す

六月五日に西日本の梅雨入り宣言が発せられて、六日、七日と三日間、梅雨特有の鬱陶しい天候で、断続的な雨が降ったり止んだり

した。それが、梅雨の中休みというのか、今日は、朝から、からりと晴れ渡っている。

空港ビルの中華料理の食堂で昼食をすませて阪神高速道路で市内へ入ると、夕陽ヶ丘で一般道路へ出て、谷九のホテル街へ向かう。

「どう？ 彼には、話したの？」

「ええ、あなたから電話があったでしょ。あ

の日に話したわ。う、フフフ、そしたらね、おかしいのよ。他人に責められるくらいなら僕が責めてやるって、縛りにくるのよ。私がね、縛られたら、凄く興奮するってこと、彼も、よく知ってるのよ。だから、口実だと思っただけど、その晩、プレイしたわ」

「土曜日の晩だし、よかったんだろう。今まで言わなかった罰だとか、なんとか言って、物凄い責めを受けたんじゃないのかい。そんな場面を期待してたんだけどな」

「それが、案外、あっさりしてんのよ。君のことだから、それくらいことは、するだろうって、思ってた」とか言って、けろりとしてんのよ。それで、私も、こんなこともされた、あんなこともされた——って、いろいろ挑発してやったのよ。そうしたら、僕も責めてやる”って言って、負けん気、出してきたってわけ。だから、あなたに比べたら、ほんの真似ごとみたいなもんよ」

「平常は、そんなこと、おくびにも出さないで、お淑かな若奥様でございます——って、すました顔していても、いざ、プレイとなったら、凄いいんだものね。びっくりしたよ」

「あんなことを言って。あれは、みんな、あなたが仕組んだ筋書きなんですよ。私は只、

言われた通り動いていた人形のようなものですわ。凄いだなんて、どんなことが、ありまして？ 私、全然おぼえてませんわ」

「いやあ、僕もね、貴女が妊娠中だからと思って、大分、手加減はしたんですがね。それが、SMプレイののっけから、パイプを使わなきゃならないように迫られたくらいだから如何に激しかったか、おわかりでしょう？」

「わかりませんわ。それもみんな、あんな風になるよう、仕向けられた人の罪ですわ。その方は、一体、どのどなたなんでしょう」

「僕はね、実際、あのとき、テレコを持ってきたらよかったと、後悔した位だからね。テープにとっておいて、あとで君にきかしてやりたかったほどだよ」

「私、そんなに、声を出しまして？」

「出したって、言うような生やさしいもんじやないよ。素晴らしい泣き声だったもんなあ」

「うわあ、恥かしい。そんな声を出しましたの？ 私って。それ、嘘でしょ」

「君子は豹変する——って言葉があるけど、君のは、まさに、それに値するね。始めて逢った日から比べると、今日は二回目だから、相当リラックスしてるね。だから、今日のプレイは、前よりもっと激しくなるかも知れな



いと思うと、わくわくしてくるからね」

「あんなことばかり言って。私、全然、そんなこと、覚えてませんもの。いくら言われたって、信じられませんわ」

「大体、君はカマトトだよ。真面目な顔で、僕に変なことを説明させるんだからね」

「ええ？ そのカマトトって、一体、なんの

ことなの？」

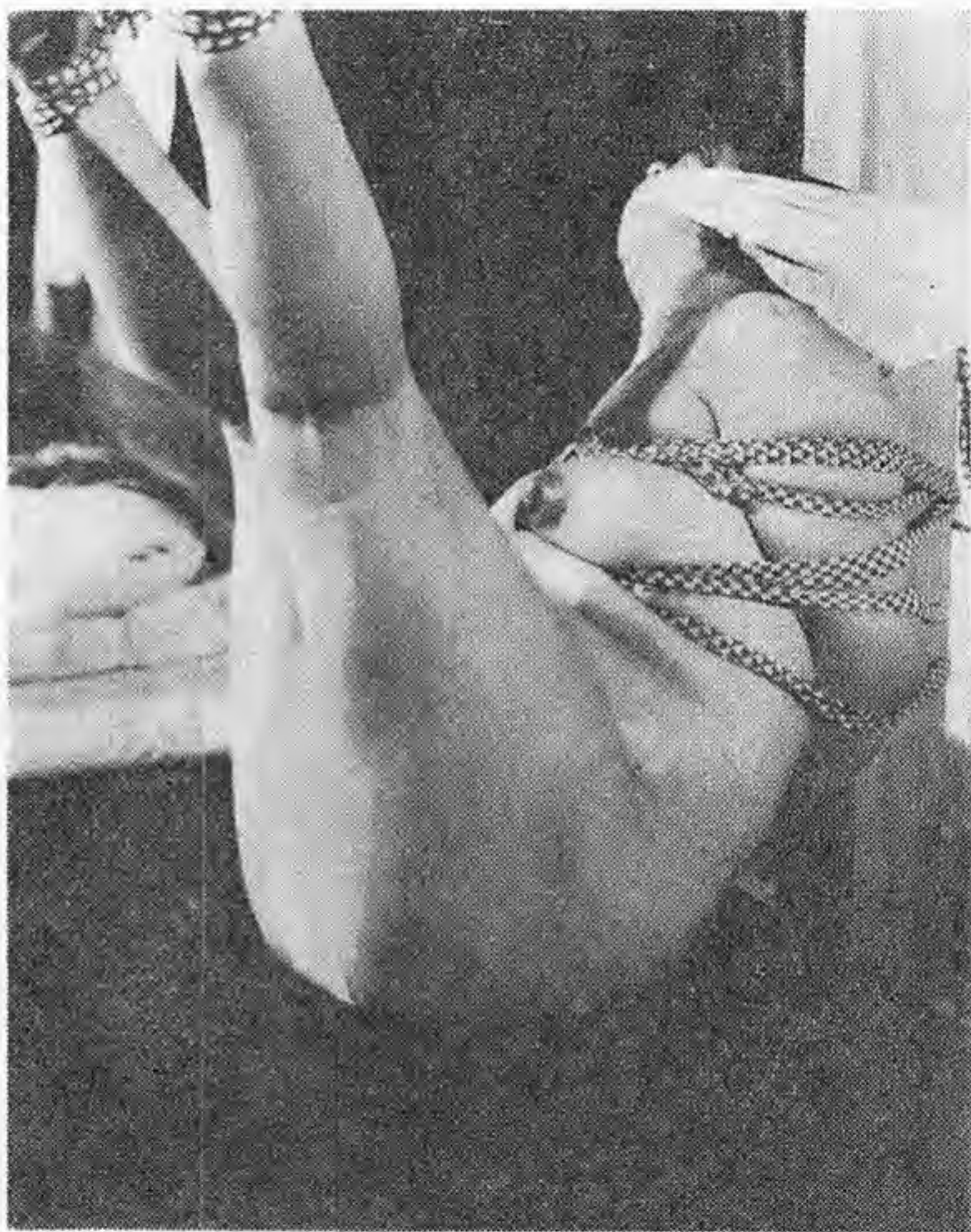
「それを、僕に解説しろって言うのかい。雑誌に、あれだけの文章を投稿するくらいなんだから、カマトトぐらい知ってると思うけどな。本当に知らないって言うのなら、君が今度、カマトトぶったときに知らせてあげるからね。実際、加津子は天使のように天真爛漫

でいいなあ。羨ましいよ」
「うわあ、それ、ほめてんの？ それとも、けなしてんの？ うち、かなわんわあ」

そんなことを言ってるうちに、車はガレージの中へ滑り込んでいった。リフトのカウンターが明滅してシャッターが開いた。リフトの枠の中へ車を入れるのはなんだか、檻に入れられたようで気持ちがよくない。

運転席の窓を開けて手を伸ばすと、その壁に運転用のボタンが、いくつも並んでいるので、「上」のボタンを押す。車に乗ったまま、部屋まで直行というわけか、これだったら、たしかに人目につかないわけだ。
エンジン止めて、サイドブレーキをしっかりと、おかけ下さいV

そんな注意書きを読んでいるうち、リフトは停まって、自動的に前の扉が開いた。



華麗なアニマルぶり

“女性が妊娠すると、より動物的になる”とよく言われるが、妊婦を素裸にしておいて、つくづく、よく眺めて見給え。

美しいことは、美しいに違いないのだが、

そこに動物的な臭いが、ぶんぶん匂ってくる。例えばだが、メロンのように、まんまるく膨らんだ妊婦のお腹を見てみるとこれは平常、あんなにスタイルを気にしていた、若い女性なのかと、びっくりするくらい不格好なのだ。養豚場の檻の中で、のそりのそりと歩きまわっている白豚のようだと言え、きつと、妊婦マニアに叱られるだろう。

だが、よくよく、眺めてみると、これがまた、流石に女性の肉体の一部だけあって、膨隆した太鼓腹の頂上にある、お臍のまわりに生毛が、ぼしゃぼしゃと密生しているのなんかでも、

まことに、優しくて美しいのだ。

人間の、しかも、若い女性の身体の一部だという感じじゃなくて、動物の身体の一部のように思えて、それでいて、また、とてもエロチックなのだ。アニマル的なエネルギーを内に秘めながら、それでいて、若い女性特有の優しさと美しさを持っているともいえる。

若い妊婦を責めるということは、動物を虐待するときの、あの苛責のなさの愉しさがあのような気がする。女ではなしに、動物としての妊婦を責める——。これは、なんという嗜虐心の満足であろうか。

それに第一、責めの対象としての妊婦は貴重な存在である。女の一生の中でも、妊娠している期間というものは、そう長い間ではない。最近、アサヒカメラをはじめとしたカメラ雑誌にも、妊婦のヌードが貴重品扱いで掲載されている時代であるが、責められるマゾの妊婦ともなれば、そうザラにころがっているものではない。

私の手がけたマゾの妊婦としては、中河恵子、金原奈加子、増田みゆき、富田由美子、福井桃子などが特に印象に残っているが、今、私の傍には南加津子というSMに對して、理解以上の理解を持っている芳紀まさに二十四才の妊婦が寄り添っていているのだ。

この前の第一回目のSMプレイで、私は表面的には、南加津子の全貌を知ってしまった。今日は更に深く掘り下げて、彼女の内面の秘密を奥の奥まで剔抉してみたいという嗜虐的な気持が胸にいっぱいだった。

正直なところ、写真も撮らなくてもいいし文章も書かなくてもよいという、自由な立場で、心ゆくまで彼女とSMプレイをやりたか

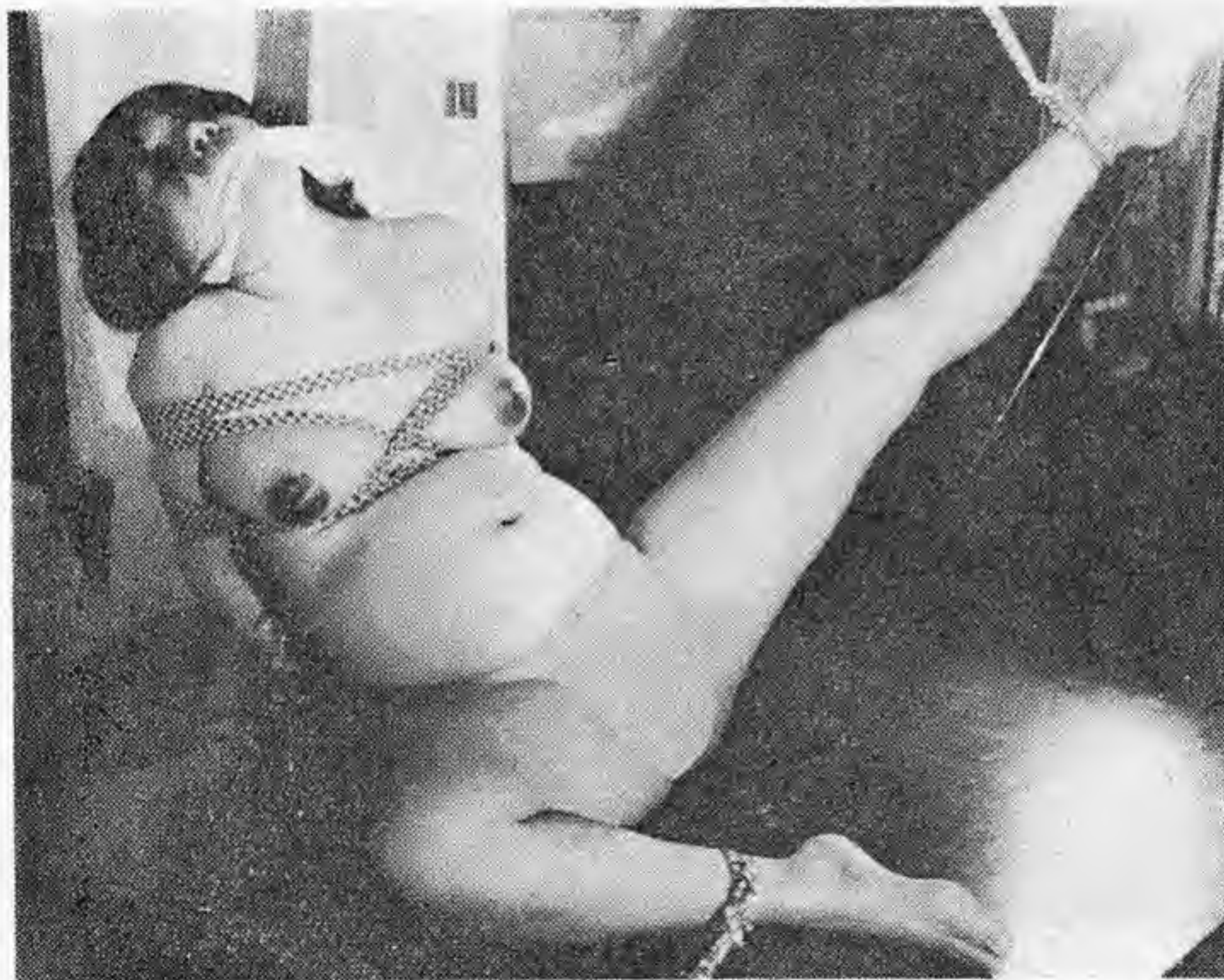
った。辻村隆氏が、写真を撮ることの苦痛、ハントの文章を書くことの労苦を、いつも洩らしていたが、その気持はよくわかる。

お客をゲラゲラ笑わせている、あの漫才師が、果して、自分が人を笑わせるように、楽しんでやっているだろうか。それはノーである。私は漫才師に知り合いはないが、友人に漫才の脚本ほんを書いている男があった。

お客を笑わせるために、原稿用紙にペンを走らせている彼の、脂汗を流しながらの苦吟を見ていると、何だか妙な気持になる。しかも、そのネタによって練習をやり何回も何回も、同じことを舞台上で披露する漫才師の苦労たるや、並大抵のものではないだろう。

しかし、まだ漫才師は、顔も覚えられるし名も売れるが、漫才作者の方は、完全な縁の下きずかの力持ちで、隠れた存在でしかないのだ。

リフトで車に乗ったまま、六階まで来て下りると、変な具合だ。自分の今、歩いているのが地上一



階、即ち、道路と同じ高さなのだと錯覚してしまう。例えば、トイレでないとところで用足しをしているような妙な気持だ。

窓のない密室。エアーコンディショナーの効率を考えて、そうしてあるのだろうか、こうして、人の顔も見ずに、地上六階の密閉された一室（といっても、玄関、廊下、バス、トイレ付きの三間続きという完全な一戸建ての、様式になっているのだが）へ入ってきてみると、なんだか場違いな感じがしないでもない。土足のままで畳の上を歩いているみたいな異和感が、南加津子のマゾの琴線に触れたのだろうか、私の腕にとりすがって、ぴたっと寄り添ってきた。それとも、この密室へ来たことで、彼女の演出したSMプレイのお芝居が既に始まったのだろうか。

「わたし、こわい。人が誰もいないし、窓がないもの、お化けが出そうで、こわい！」

「お化けや幽霊が、この世の中にいるもんかね。お化けなんかより、生きた人間に注意し



ろよ。その方が怖いんだから。さしあたり、加津子なんかも、怖い生きた人間の一人じゃないのかね。こうして、おかない……」

彼女の巧みな誘発のゼスチュアに、のせられた風をして、組んでいた手をうしろに、捻じあげるように回して、部屋の中へ押しだしていった。

カメラや道具を入れた靴は、廊下に置いたままである。今の私には、一本の紐さえ、持っていない。だが、私はすでに、この妖しい密室のムードと、加津子の誘いのポーズによって、発情期の牡のように、いきりたっていた。控えの間を通りすぎると、ベッドルームの掛蒲団の上へ彼女を押し倒した。「何をするのよ、止めて、止めて。わたし、セックスをするのは、大嫌いなよ」

先日の第一回るときとは、彼女も私も、すっかり変わってしまった。風揺れる秋海裳のように、おののきふるえていた加津子は、ふてぶてしく居直っている風にさえ見える。私にしかたって、そうだ。慎重に相手の出方をうかがってから、徐々に雰囲気盛りあげるのに苦心していたのに、今日は、どうだろう。いきなり、部屋へ入ってくるなり、蒲団の上へ、押し倒してしまったのだ。

「わたしを犯すのなら、縛って、縛ってからにして。そうでないと、わたし……」

「彼に申訳けないとでも言うのか？」

「そうじゃないけど、わたし、そういうことは、大体、好かないのよ。だから、貴方が無理にするというんなら、あきらめるけど、自分からは、嫌なのよ」

「とかなんとか言って、いじめられたくて、責められたくて、うずうずしてるんだろ。この前は、体の隅々まで、あれだけ責められて大声を挙げて、泣いたくせに……」

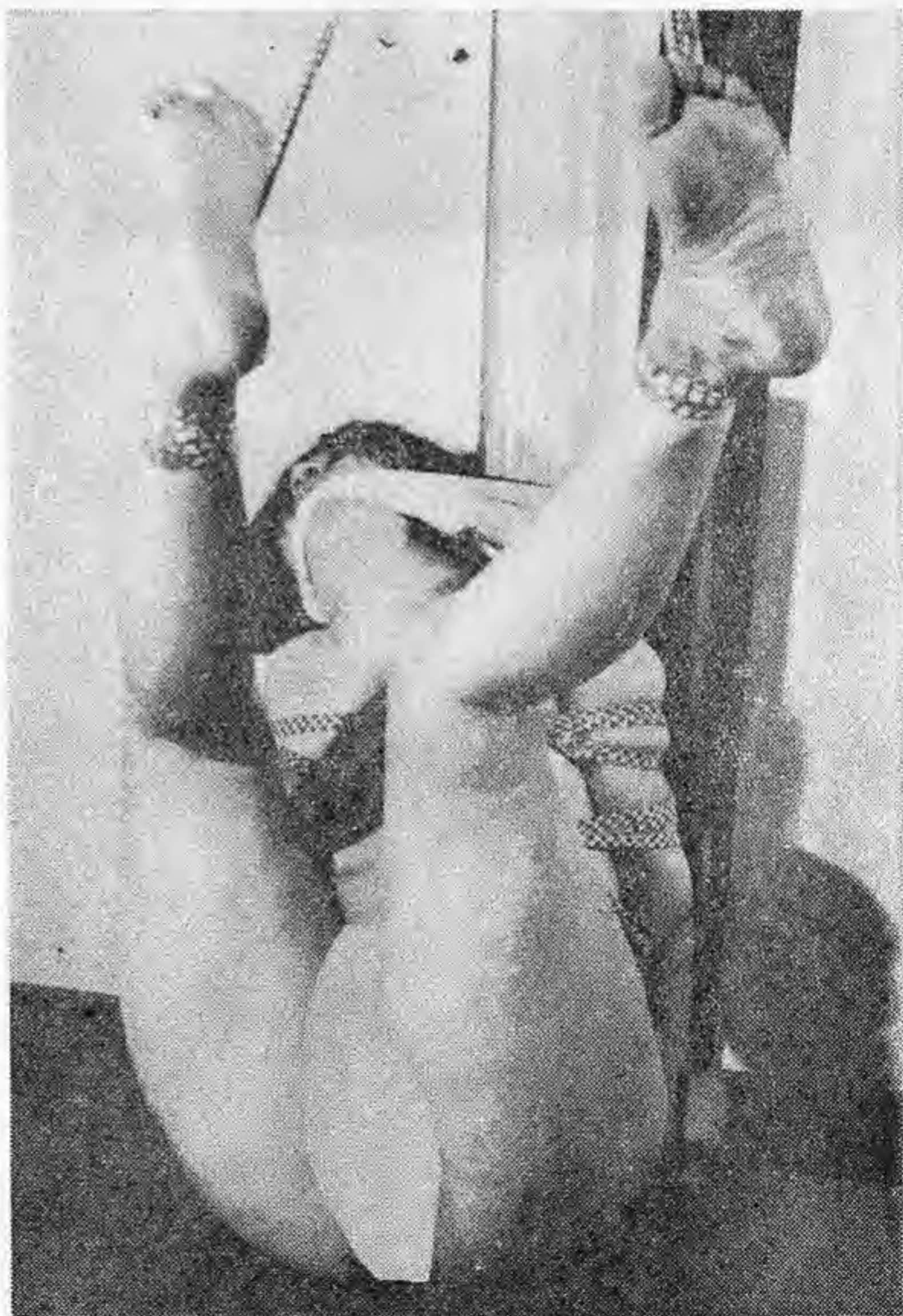
「言わないで、言わないで。そのあとを聞くくらいなら、貴方の言う通りになるわ」

「それだったら、その洋服を、今、ここで、すっかり脱いでしまえ。僕の見ている前で、素裸になるんだッ。さあ、早く」

縄もカメラも、もう何も、いらない。この白豚のような女を、今、ここで、徹底的に辱かしめ抜いてやりたいという気持が、急激に起こってきた。S Mプレイの一番最後に盛り上がってくる筈の場面が、この密室に入ってくるなり、忽ちにして兆^{きざ}してきたのだ。

「待って。言われる通りに、裸になるから、一つだけ、約束して。お願い」

「約束？ 今更、何を約束するんだ。事によ



っては約束してもいいが、何だね、その約束することは？」

「貴方、こんな、お腹の大きい女でも、かまわないの？ ねえ、一体どうなのよお」

「お腹の大きいってことは、男性にとってはとても魅力的なんだよ。中河恵子って、いう人なんか、臨月の出産間際まで責めたけど、

魅力的だったし、福井桃子という人は、月を追って、段階的に変化してゆく妊婦の生態を記録しながら責めていったものだ。だから南加津子の妊婦姿も、その人達と比較して責めてゆくということは、非常に興味があるんだな。もっとも、妊娠前の加津子を知っていたら、もっと、よかったがね」

「そうじゃないのよ。深田菊子さんとか、前田真知子さんのような奇麗な方を責めてらっしゃるでしょう。ですから、今更、私のような孕み女を相手にされなくなつて……」

「おや？ 深田菊子や前田真知子の名前を知ってるのかい？」

「そりゃ、奇譚クラブは毎月読んでいるんですもの。高村浩子さんだって、あの西条紀代

さんだって、みんな覚えてますわ。前田真知子さんなんか大好きですわ」
「ふん、ふん。それで、その約束しろって、いうことだけど、一体、なんなの？」

「あおう、言いにくいんだけど、どんなことがあっても、セックスだけはしないって、約束して。これだけは、お願い」

「なんだそんなことか。それだったら、堅く約束するよ。指切りゲンマしてもいい。だから、その洋服を自分の手で脱ぐんだ」

彼女は、マタニティドレスを脱いで、蒲団の上で、たたもうとした。

「脱いだものは、そこへ、そのまま置いて、次々と脱いでゆくんだ。素裸になるまでナ」
ブラウスを脱ぐと、真黒い輪のような乳暈が、むっくりと顔を出した。一カ月を経過して、私には相当大きくなったように見えた。

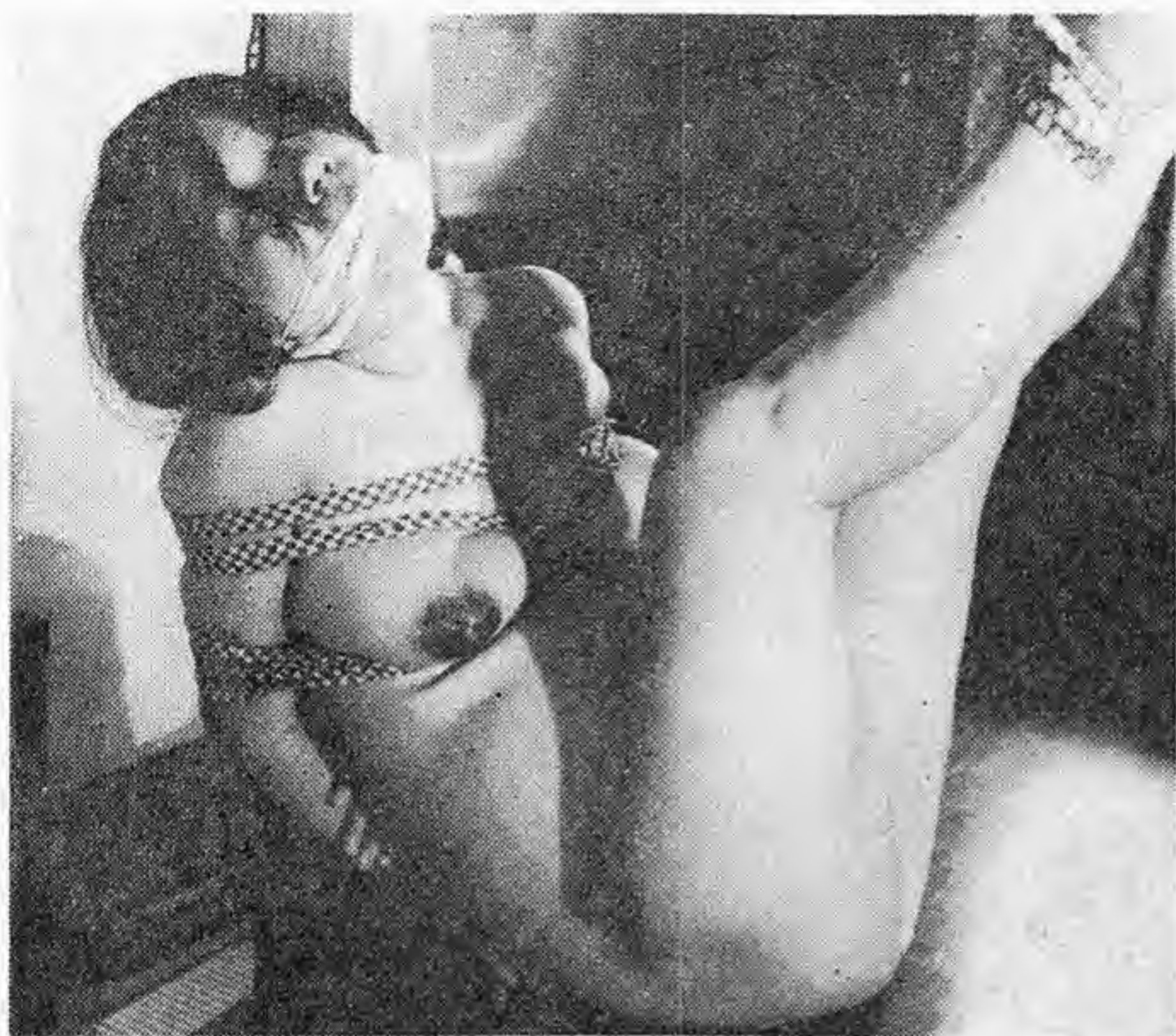
その下には、晒木綿の腹帯が、幾重にも幾重にも巻かれていた。中山観音へ安産の祈願に行ったとき、授てきたという腹帯だそうだが、もう大分、水をくぐったとみえて、色も変わり、くたくたになっている。

腹帯が解かれると、ふわっと、急に、お腹が大きくなったように見えた。

「洋服をたたむのは、あとでいいから、とにかく、こちらへ来るんだ。この前の時と、身体が、どのように、変化しているか、検査してやろう。暴れるといけないから、手だけは縛っておくよ」

「検査って、一体、どんなこと、するの？」
「それは、今にわかるよ。まず、こうして、お腹の大きさを計っておこうね」

私はメジャーで、腹囲を計る。だが、それは、気休めの検査をしているに過ぎない。後手首を括っていた紐を前へ回して、乳房の上下を縛ってゆく。乳房とお腹とが、このように大きくなってしまつと、縄をかけるといっ



ても、至極自由がきかないのだ。縄は乳房とお腹の二つの山の谷間に落ち込んでしまう。それで私は、第一回の際の緊縛のやり方から考えて、今日は、絹と木綿のやわらかい紐と、それに晒木綿を裂いて作った紐を準備していた。縄で、膝のうしろあたりを、ぐいぐい締めつけたりすると、プレイの最高調期には、痛さも忘れてしまうのだが、あとで、その部分が、ひどい縄擦れを起こしてしまう。今日は、それを防ぐために、柔らかい紐を用いる代りに、思いきり羞恥縛りを敢行して南加津子のM度が、果して、どの程度のものか、ためしてみようと思った。

M度一二〇のボルテージ

考えてみれば不思議なものだ。

あとになって、あれほど、激しい狂ったようなSMプレイを何度も、何度も、やっておりながら、関谷富佐子にしたって、中河恵子にしたって、一番最初の日には、パンティを穿いたままで縛っていたものだ。

それが、最近では、逢うなり、のっけから素裸にして縛ってしまう習慣になっている。

玉本章子なんかは、専ら開股縛りばかりで

責めたてて、しかも、綿ロープと麻縄とで、遠慮会釈もなく、縛りまくったものだから、縄目のあとが、身体中についてしまった、あとで大分、文句をきいてしまった。しかし、なんといっても、女性には、やはり素裸に、ひん剥いて縛るに限る。「私、ハダカにされたら、もう、それだけで

興奮してしまうのよ」って、ぬけぬけと言うM傾向の若い女性が少なくない昨今であるから、SMプレイだ縛りプレイだ、責めだ——といったって、所詮、素裸にしてしまわないことには面白くない。

もっとも、人は好き好きだから、長襦袢の裾から、ちらりと覗いた白い素足のチラリ



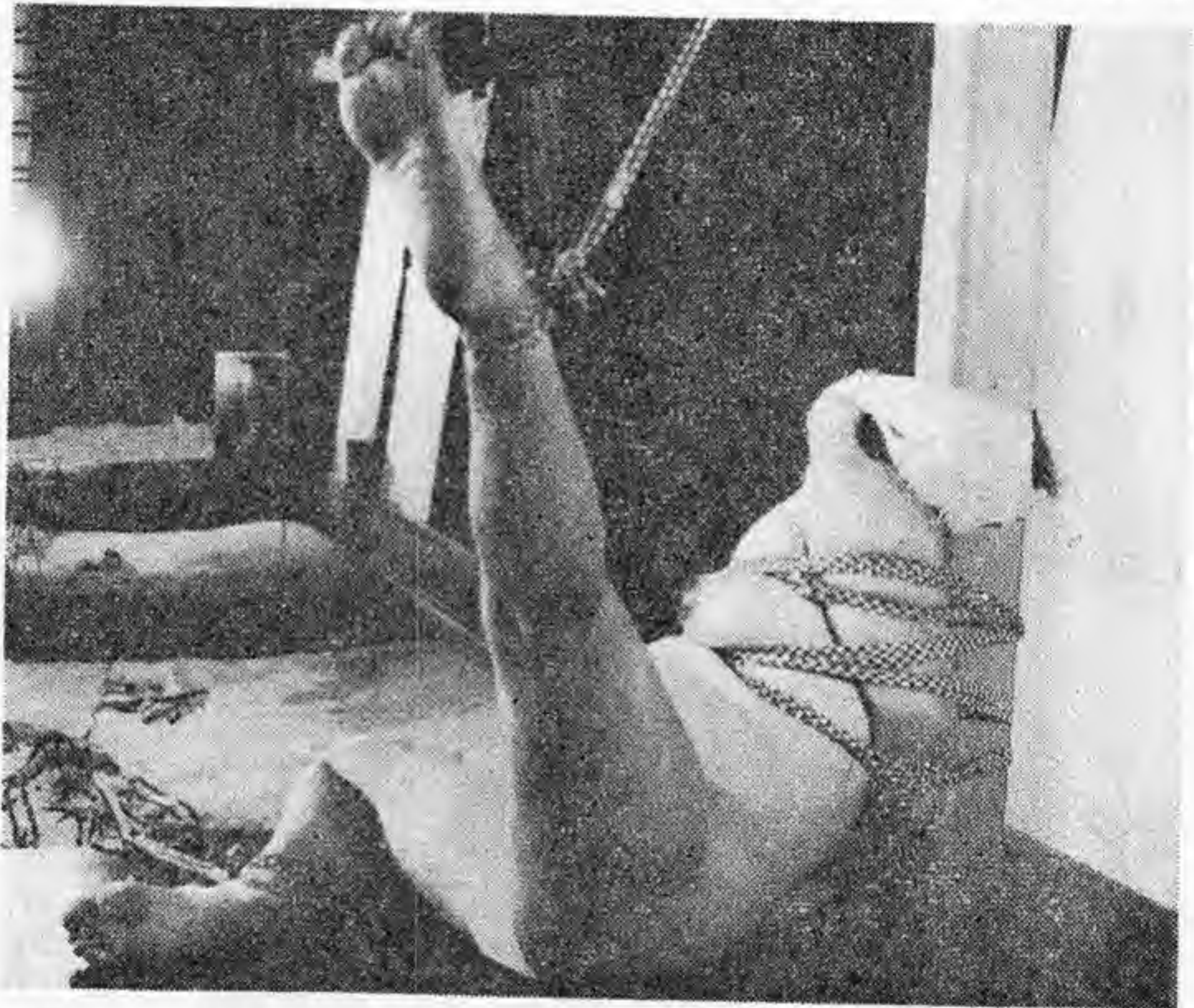
ズムを愛でたり、真紅の腰巻に、こ
よなく、エロチシズを感じる人もあ
る。そして、時には貞操帯やメンス
バンド、オシメカバーを着けた女性
に、最高の魅力を感じる人もいる。

変わったところでは、ネグリジェ
浴衣、白足袋、ブルーマ（女学生用
の黒色）、革衣裳やゴム衣を着けた
女性に対して、嗜虐的な気持を沸き
たたせる人達も、いるにはいる。

私は、そうした人達の性向を否定
する気持は、いささかもないし、ま
た、実際に、私はそうした女性の緊
縛写真を、いくらか撮影してきた。
そして、その良さというものも、そ
れなりに、理解してきたつもりであ
る。

だが、今、この南加津子を目の前
にして、私は一本の腹帯でさえも、
つけさせたくない気持であった。若
い妊婦の体の隅々までを、とっくり
と、この目で確かめるためには、縄

や紐は最小限必要ではあっても、裸身をかく
すようなものは、この際、邪魔になるのだ。
もっとも、このあと、浣腸を施してから



秘めては来たが、果して、それを使う
チャンスがあるか、どうか。今のとこ
ろ、これからのプレイの展開を待たな
ければならない。

私は縄つきならぬ紐つきの加津子を
ベッドルームから隣室へ追い立ててい
った。仕切りの襖をはずして、柱のう
しろへ立てかけておいて、彼女を正面
へ向けて、柱へ括りつける。まんまる
いお腹と瑞々しい乳房を、無抵抗にさ
らして、恥かしさのために、ともすれ
ば、足を、くずして前をかくそうとす
る。

「こら、これから身体検査をするんだ
から、足をちゃんと揃えて膝を真直ぐ
に伸ばすんだ。膝を曲げるんだったら
ここも縛ってしまうぞ。乳房から、お
臍。それに、ここも、ゆっくりと調べ
るからナ」

「いやン、いやン。そんなとこ、さわ
ったら擦ったいわ。手を離して……」

私は加津子の顎に手をかけて、上向
かせておりてから、膨隆した乳房に手を当て
て、絞るように、しごいてから、お臍を指で
ひらいて、ゴマを取る。彼女の悲鳴を一しき

便器を使うか、オシメカバーを当てさせて、
オシメカバーの中へ排便させるプレイをやっ
てみよう、一応、オシメカバーを鞆の中へ

り聞いてから、太鼓腹を手でさすり、お尻の方へ手をすべらせて、そのまま前へ回って、肝腎のところの検査に移ったが、彼女が足をバタバタさせるので、太股と膝頭に縄を掛けて、柱にぴったりと固定してしまう。

今日はプレイ本位で、南加津子のM度探検が目的であるが、さりとて写真が全然ないというわけにもいかない。私は、彼女を晒しものにしておいたままで、悠々とカメラの準備をすすめていった。乳房も、お腹も太股も、掩うことも隠すことも出来ないまま、加津子は、房々とした毛深さを、秘めるにすべなき羞かしさに耐えて、じっと顔を、うなだれていた。

ストロボの閃光を放ってから、近寄り、ムチムチと張りのある臀部に手をやる。皮下脂肪が厚くて、いかにも、遅しい。私は急に、この若き妊婦へのいとしさの気持が、美しいものを虐げたいという気持へ、異常に変化していった。掌の中の、若い女の肌、特有の手ざわりを賞めて、

その快さを味わうばかりか、指で思いっきり抓ってみたくなった。

指で抓ったときの感触を味わってみたかった。

たのか、それとも、そのときの女の悲鳴や悶えを見たかったのか、結局は、その両方を賞味したかったのだろう。

「いた、たた。痛い、痛いわ。やめてやめて……」

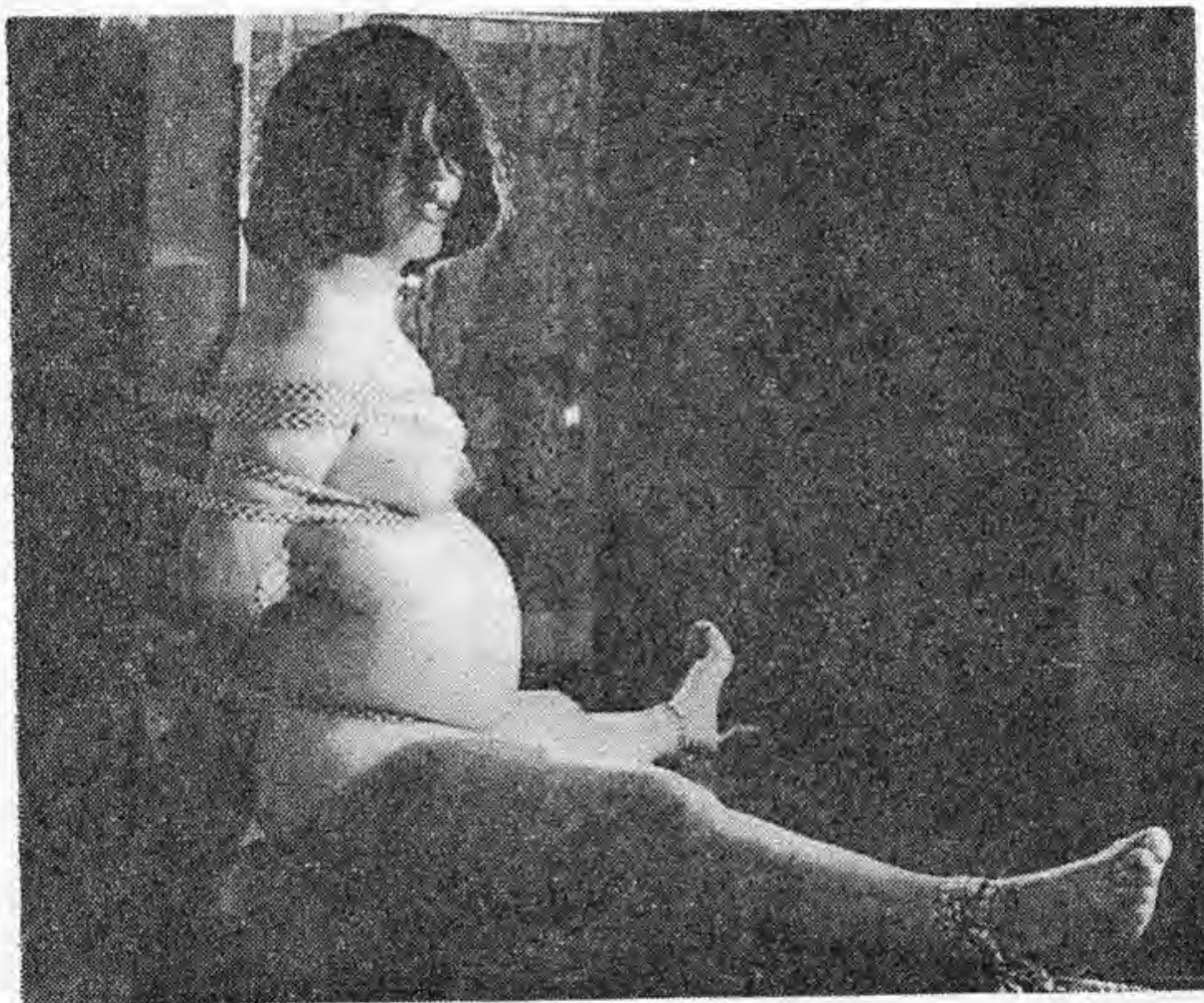
指先にジンと弾性を帯びて返ってくる快い感触——。私は、上下の歯で下唇をきゅっと噛んで、その快さに耐え更に場所を変えて指先に力をこめて、思いつきり抓る。

そのたびに、彼女の口から洩れる悲鳴が、SとMの伴奏曲だ。更に力をこめて抓る。

「あああ、ああ、擦ったくて、痛い……あああ……」

加津子の上半身が左右に揺れ、畳についた足が、地団太ふむように爪先が右へ左へと、いそがしく動く。私の指が、臀部から離れて前へ回り、内股のつけ根へと移行するに従って、彼女の上半身は前へ倒れかかる。

汗を浮かべた彼女の顔を、私は下から見上げる。おくれ毛が、べっとりと額から頬に貼りついて、いかにも責めに乱れたといった表情である。Mのポ



ルテージも、ようやく上昇したきたようだ。エンジンが始動して、これから、いよいよスタート開始だ。

私は、膝頭と太股のつけ根を括ってある紐を解いた。さあ、これで足は自由になった。

両足が自由になったということは、更に、これから羞恥責めが、し易くなったということの意味する。私は左足の足首に紐を括りつけて鴨居に作った輪に通して引っ張る。足首が徐々に上がるにつれて、お腹は益々、前へ突き出され、両股が開き気味になって、前がむきだしになってくる。

縄止めをしておいてから、私はどっかりと彼女の前に胡坐あぐらを組んで坐る。

「いや、いや、見ないで……」

加津子は、顔をそるように仰向けて、哀願する。だが、私の目的は見ることはない。房々した漆黒の奥にあるものの、手指による未開拓地の探求である。一カ月前と、今と、どのような変化を来たしているだろうか。「いいいい、いや、いや。かんにん、かんにんして……。おねがい」

宙に吊られた足が激しく揺れる。

体重を支えている一本足が、床をにじって悶えるので、柱に巻いて固定した絹の紐が、

きゅっきゅっ と澄んだ音を出す。

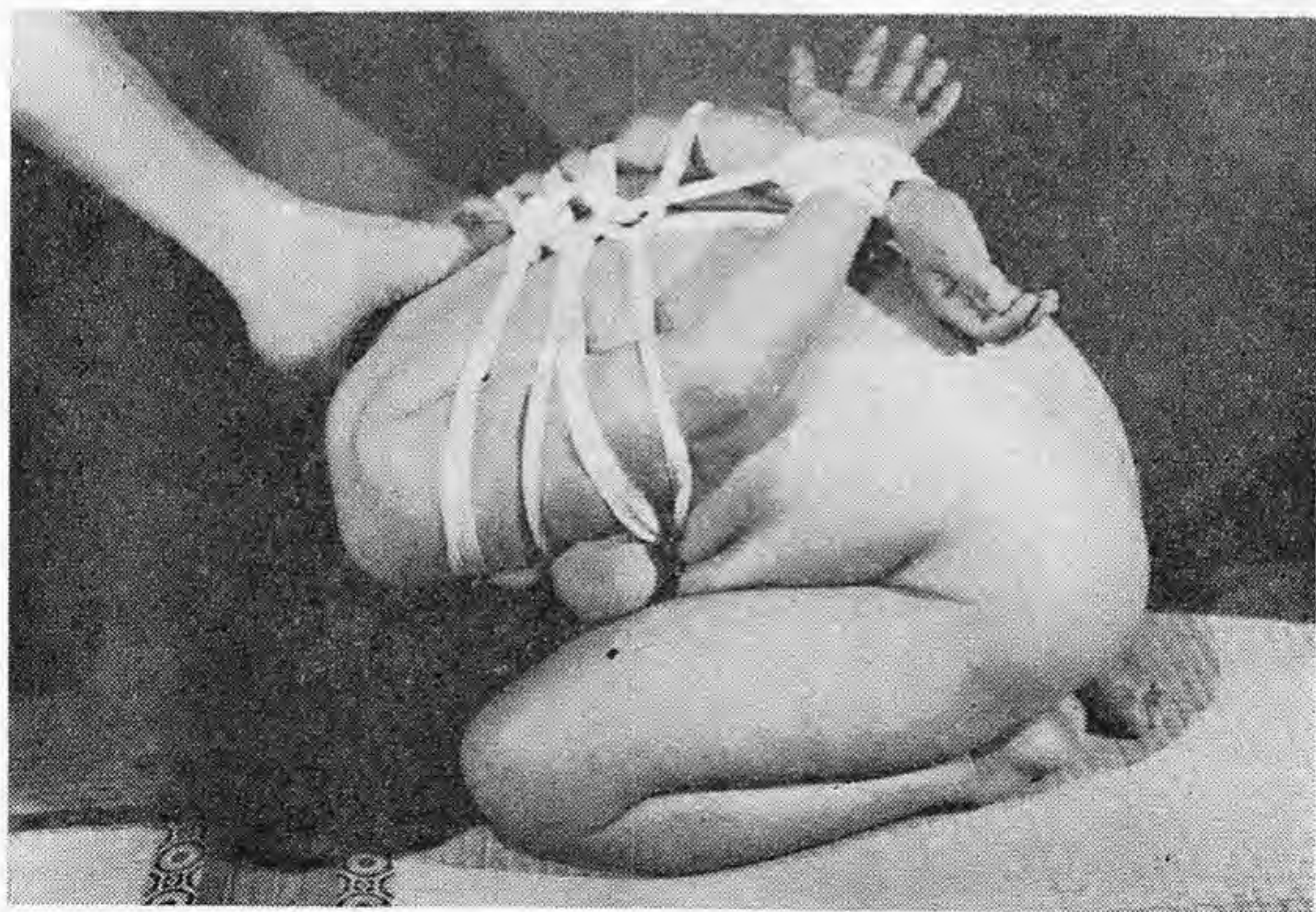
私は起きあがって、上半身を右に傾けている加津子の肩口に手を当てて支えてやる。首すじが、汗びっしょりである。フウフウと、鼻で息をしているのは、一本足で、しかも、吊られている片足が宙ぶらりんで固定されていない不安定さによるものだろうか。

私が紐を解くと、肉感的なポリウレームのある女体が、くたくたと両腕の中に、ころげ込んでくる。そのまま抱えて隣室の蒲団の上へ運んで、仰向けに、ころがす。

「どうだ。少しは疲れたかい？」

「いや、いや。寄らないで。」

彼女は体を右横に倒すと、膝をくの字に曲げて、両手で顔を掩った。その手首には、紐のあとが三筋ついていて、



うっすらと赤くなっている。

目の前の真白い太股の肉感的なこと。うっすらと汗ばんで如何にも煽情的に、私の目に迫ってくる。ウブ毛のような淡色の毛が疎生している胫から、きれいに爪が切り揃えられている足の爪先へ視線をやってから、私は、彼女の背後へ体を横たえた。

両手で顔はかくしているが、その他の裸身は、一糸もまとうこともなく、私の眼前にさらしているのだ。だが、私が、彼女の肩に手をかけるや、その手をぱっと払いのけて、私の胸を両手でパタパタと叩きだした。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿。寄っちゃいやッ」

それがM女加津子の誘いの合図なのだろう



か。私は胸を叩くだけ叩かせておいてから、



その手首を掴んで広げ、彼女の豊満な双丘の間に顔を埋めずめていった。

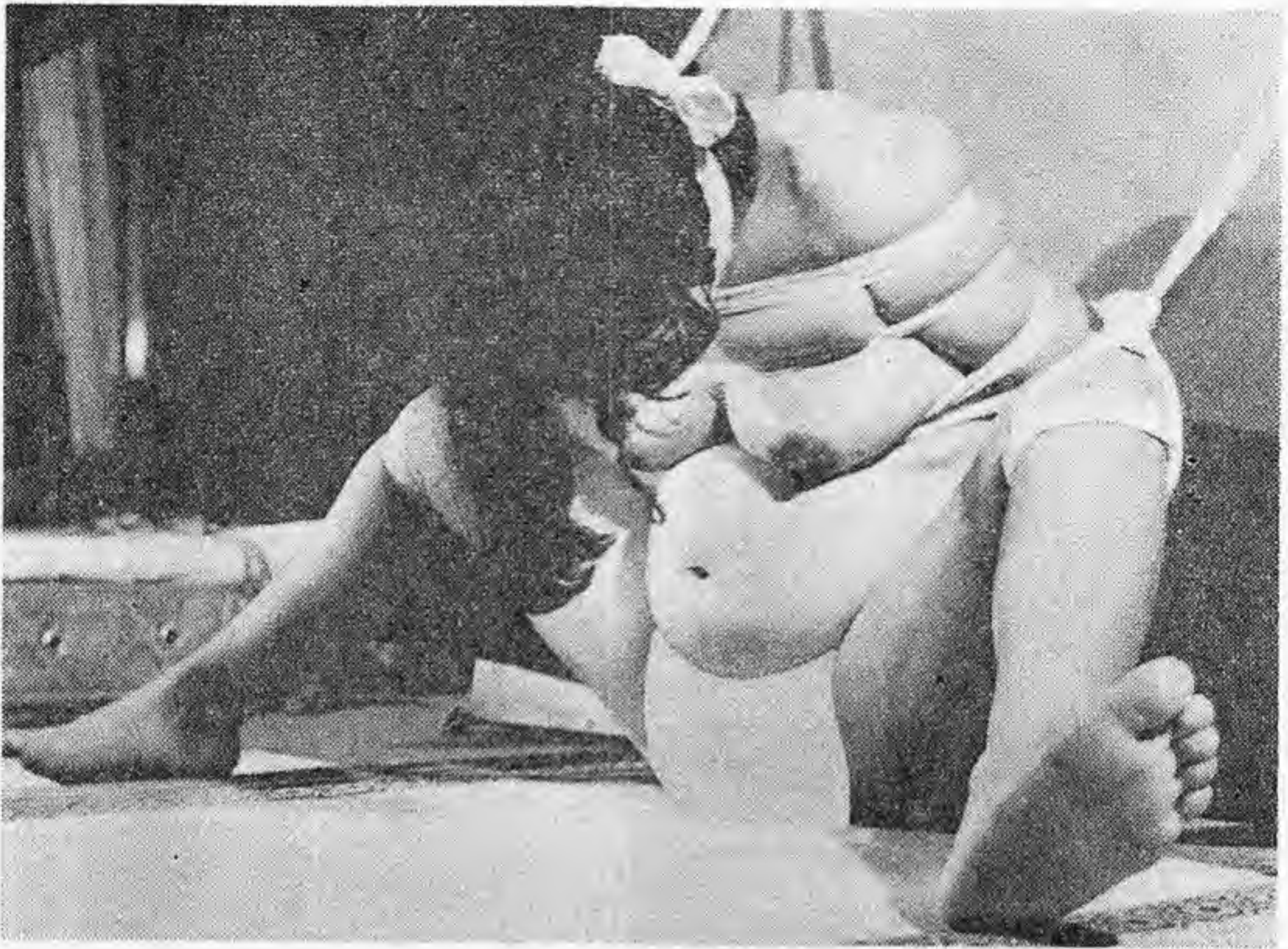
かすかに、甘ずっぱい乳汁の匂いがした。乳児の頃、母の乳房を口に含んでいたときのような安らぎが、そこにあった。

M女の本領とは、果してなんだろうか。

こうした没我帰一が、その本能を、即ち母性本能を満足させるものなのだろうか。

私は、ここで、M女の謎というものを、南加津子によって、いやというほど、思い知らされたのであった。

かぐわしい双丘の谷間から下って、小山の



ような肉塊の頂点にある
臍窩へと、私の唇が移っ
ていったとき、今まで大
人しかった彼女が、急に
激しく抵抗しはじめた。

「セックスするのは嫌い
いやいや、私は犯された
いのよ。寄らないで、寄
っちゃいや」

両手、両足を使って、
加津子は私を寄せつけま
いと暴れる。安定期に入
っているとはいえ、私は
彼女のお腹を慮った。

ほどほどにあしらって
おいてから、紐を両方の
手首に巻きつけて軽く括
っておく。両手の自由を
奪うと、不思議なように
彼女は静かになった。

M女というものは、普
通の女性と違って、そこ
に至るまでの手続きが複
雑で面倒なので手練とか
手管とかが、必要という

ことなのだろう。その代り、そうしたSMP
レイというお芝居が、そのあとの快楽を、如
何に、高いものにしてくれるか、知る人ぞ知
る、経験者のみの知る秘密でなくてなんであ
ろう。

いけにえの祭壇

食卓を柱の前に、でんと置いた。

南加津子という美しいいけにえを、この祭
壇の上に捧げて、その悶絶寸前のかずかずの
ポーズを鑑賞しようというのである。

「テーブルの上へあがって坐るんだ」

私の命令に対して、彼女は素直に食卓の上
へ足をかける。坐り方を指定しないしていると
柱を背にして、ちゃんと膝を揃えて正座をし
て待っている。私は両腕を揃えてあげさせ、
手首を柱に括りつけて固定してしまう。

萬歳をしたような格好で無防備に伸びきっ
た腋の下に、私の指先が、蛆虫のように、も
ぞもぞと這いまわる。

「くくく、くるしい。くすぐったい——」

触れるか、触れないくらいの軽いタッチで
チロチロチロと位置をずらしながら、指先が
這いまわり、決して、強くはしない。

正座していた脚がくずれ、腋の下が、一層操り易いように緊張し、私の指先のうごきが忙しくなる。彼女の脚が伸び、卓の上で開いたり閉じたりしている。

だが、この操り責めは、祭壇のいけにえにとっては、ほんの序の口であった。紅白まだらの木綿紐で後手高手小手に縛り上げると、柱にきっちり固定した。

そうしておいて、両方の足首に紐を括りつけて、鴨居に作った輪に通す。いわゆる操り人形の羞恥責めである。滑車はなくとも、紐の輪に紐を通しただけで、緩急自在に、引いたりゆるめたりすることが出来るのだ。いや滑車よりも扱い易いのは、抵抗があるから、引くときは確かに重いが、そのかわり、一旦引いてしまうと、急には元に戻らないという利点があって、却って扱いよいのだ。

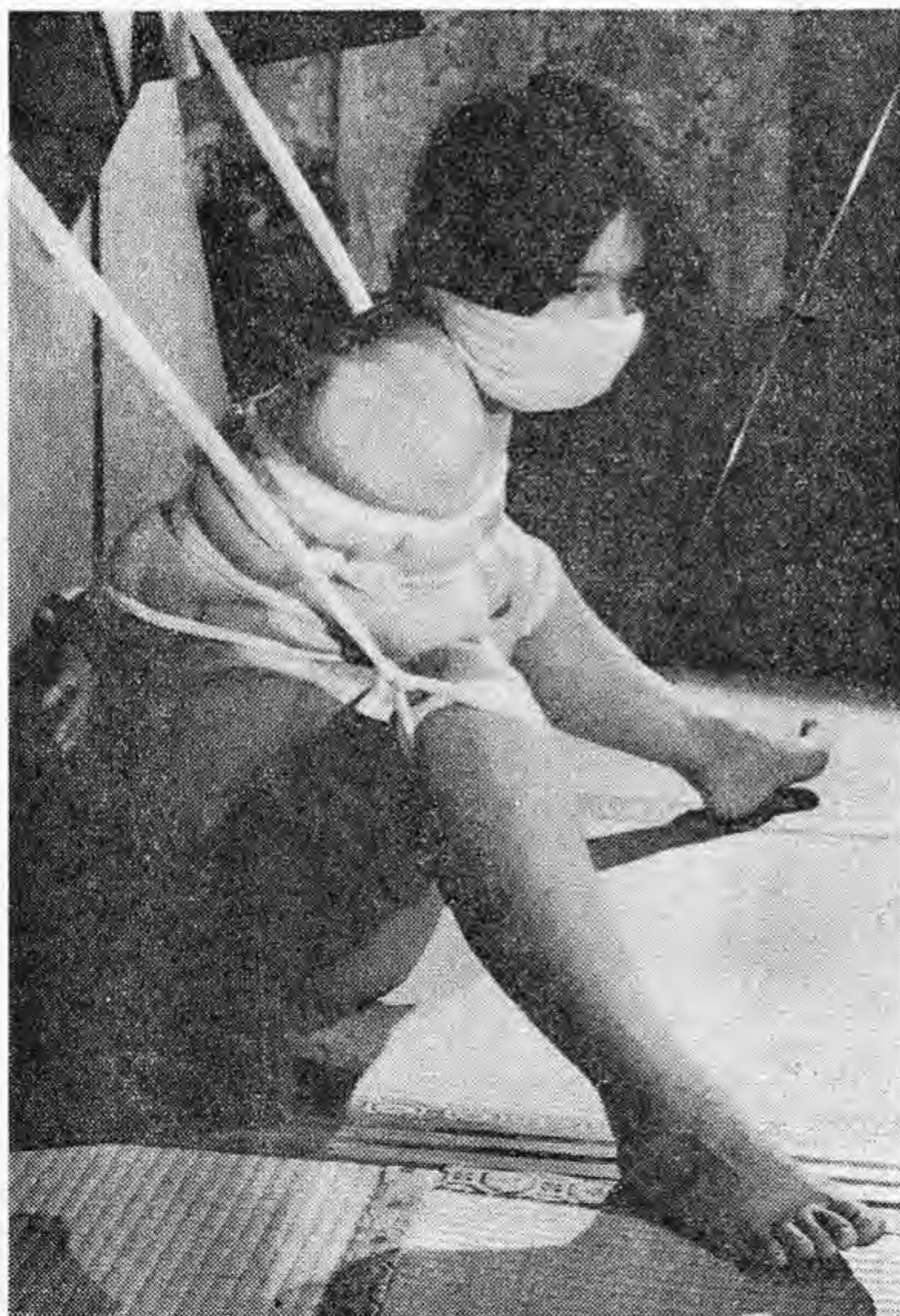
紐を引いて片足を挙げさせる。足首が上へあがってゆくので、いやでも股が開いてしまう。更に他方の脚も引きあげると、両方の足が上に向いて、大きなお尻が突き出たようなあられもないポーズになってしまう。

いずれにしても、加津子は、自分で隠しておきたいところを隠すことすら出来ないのがある。操り人形の両足は、私の紐の操作によ

って挙げたり降ろしたり、自由自在に、その微妙な動きに至るまで見られてしまうのだ。「鏡にうつしてやるから、よく見るんだよ」猿ぐつわをされている加津子は、声が出せないで、「ううう」と呻いて、顔を上下に振っている。承知という返事だろう。私は、鏡台を彼女の正面に持ってくる。

両足を高々と、自分の頭よりも高く上げさせられた、あられもない姿が、はっきりと正面の鏡に、すべて映っている。「さあ、見るんだ。これが、お前の姿なんだぞ。どうだ、どんな気持がする」

鏡に写った加津子は、まるで市松人形のように可憐に見える。二つの股の間から、上眼



づかに自分のあられもない姿を、鏡の中に
見ている彼女。

殆どのM女は、自分の縛られた姿を、鏡に
写して見るのを喜ぶ。それは、自分の緊縛写
真を見たいという心理と同じなのだろうか。

私は鏡台の位置をずらして、よく見えるよ
うにしてやる。それを眺める彼女の眼が、次
第次第に、妖しく、うるんでくるのだ。

むきだしになった部分の、あきらかな変化
で、私は、鏡の中の自分の映像を眺めている
うちに、彼女の心の中に、どのような兆しが
あったのかを、はっきりと知った。

そういえば、第一回目よきの写真を今日
持ってきて、見せてやるのを忘れていた。

深田菊子や前田真知子、それに高村浩子、
笠井奈保子、西条紀代の縛られた姿の中に、
きつと自分の分身を見ていたのだろう。

それが、今、鏡の中に、分身ならぬ自分の
あられもなく責められている姿が、くっきり
と写っているのである。

私は、たまらなくなって、パイプと、イボ
イボのついた指サック、太筆をとりだした。
「うう、ううう、うーうむ」

猿ぐつわをしているので声は出ない。

全身がのけぞって、もう、鏡の中を見てい

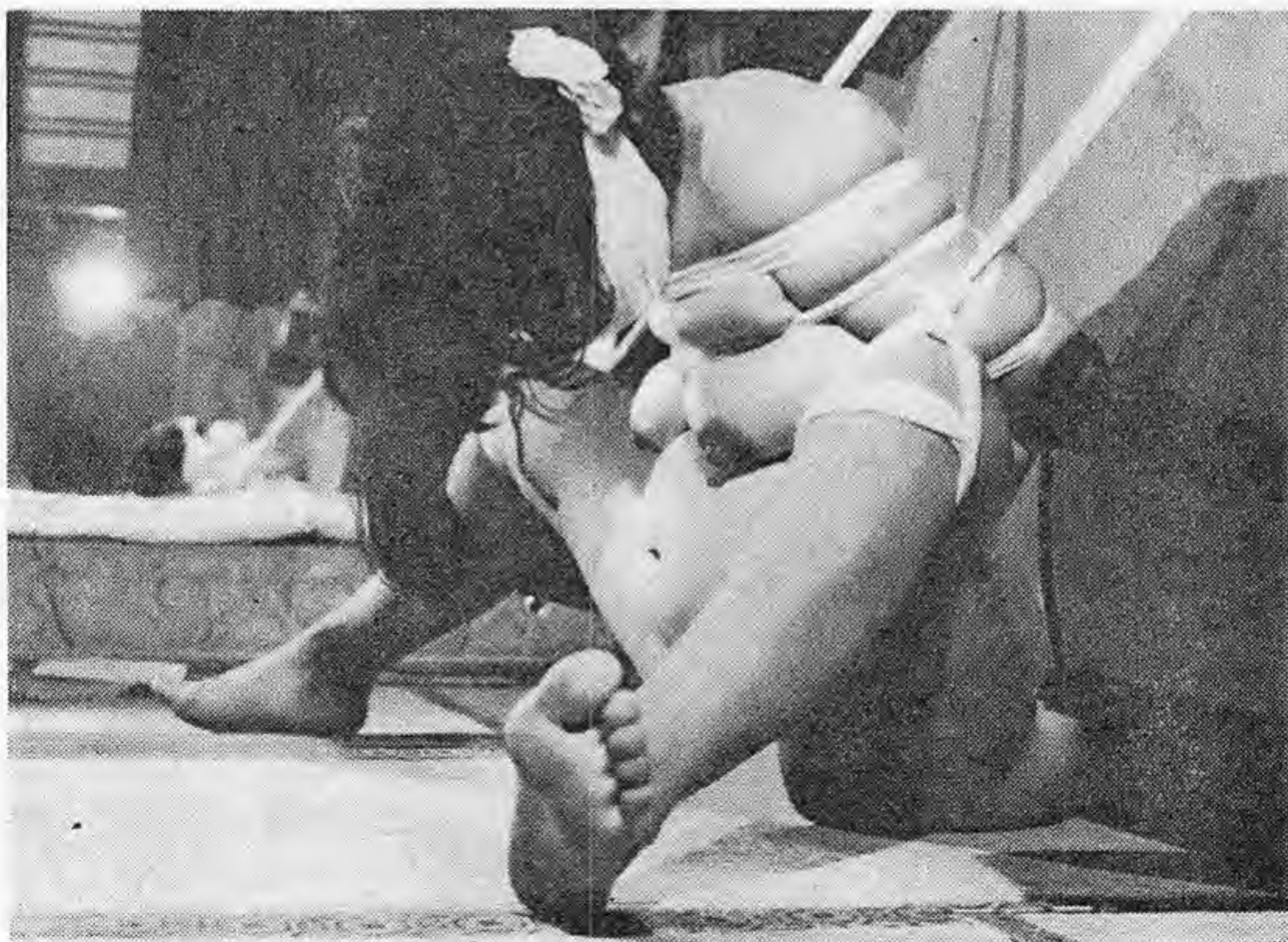
る余裕など、加津子には
ない。だが、正面に置か
れた鏡は、鮮かに、彼女
の悶悦のポーズの、すべ
てを、写しだしているの
だ。

私は、操り人形の紐を
緩急自由に操作し、責め
の小道具を、巧妙に交換
して使用した。

熱気は密室の中に充満
し、香ぐわしい汗の匂い
が、そこはかとなく漂っ
てきた。

祭壇のいけにえの宴うたげが
果ててみれば、正面の鏡
台は、いかにも空しいも
ののように見えた。私は
あわてて鏡掛を降ろす。

のけぞって、上になっ
たお腹が大きく波打って
いるのは、快楽の余韻が
まだ長く尾をひいて、彼
女の体内で燃えさかって
いるためだろう。女性と



男性の生理の違いが、こんなところにも現われているのを思い知らされた。

私はといえば、もう、次の責めに移りたくて、うずうずしていたのだ。ぐったりとのおびたようになっている加津子の紐を解くと、そのまま畳の上へころがしておいて、一枚板の一人で動かすのは重いような食卓を引き起こして立てかける。

羽化登仙の境地をさまよっている体の加津子を立たせて白晒木綿の紐で高手小手に縛りあげる。肌ざわりのよい、やわらかい紐なので、麻縄のように手加減する必要はない。皮下脂肪の豊かな肌に、喰い込んで紐が埋没してしまうくらい、ぐいぐい締めつける。

第一回目ときは、あれほど、縄におびえ縛りによってエキサイトしていた加津子も、今になっては、縛られ

ることが当然といった受入れ態勢で両手を背後へまわし、喰い込む紐の感触を、じっと噛みしめて味わっている。

「坐れ」

命令すると、肉づきのよい太股をぴたりと合わせて正座する。白い太股の稜線に電光が映えて、ぬめぬめと光っている。

私は彼女の髪の毛を掴んで、前へ押しつけて女体を二つ折りにする。身籠った大きなお腹と乳房とを圧迫されるので、手を放すと、再び元に戻ってしまう。頭を押えると、苦しくなって、お尻を持ちあげようとする。

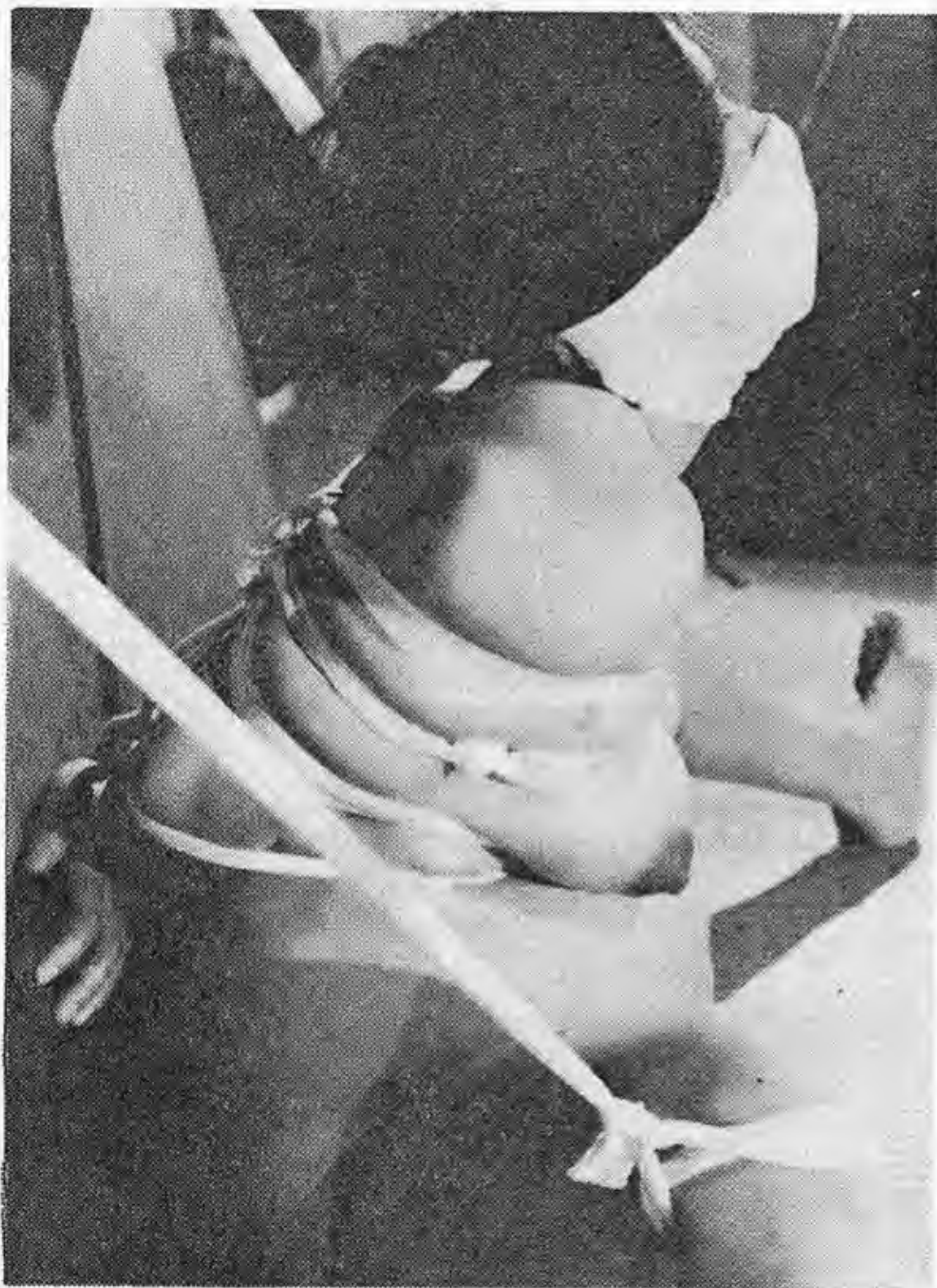
その遅いお尻へ、私は平手打ちを、ペチャペチャと与える。冷たい化粧石鹸のような肌ざわりが、如何にも快い。

ふと、私は叩いていた手を止めて、すべすべと丸味を帯びた双臀を掌ですべらし、その谷間に鎮座します菊花へと指先を移行させる。

途端、お尻が、ビクッとびくついて、前屈みの上半身が起き上がる。

「誰が、起きろと言った。二つ折りになっていないかッ」
「だって、そんなとこ、擦るんだもの」

「擦ってるんじゃない。さっきからの責めでアヌスが、どいう風に変化しているか、調べているんだ。頭を下げて頭を下げて」



私は加津子の頭に足を掛けて踏んだ。
く、く、く、く……。

彼女は、腹部圧迫の苦しさに耐えきれず、
徐々に、お尻を持ち上げてくるのだった。
私の指が、再び襲ってゆく……。

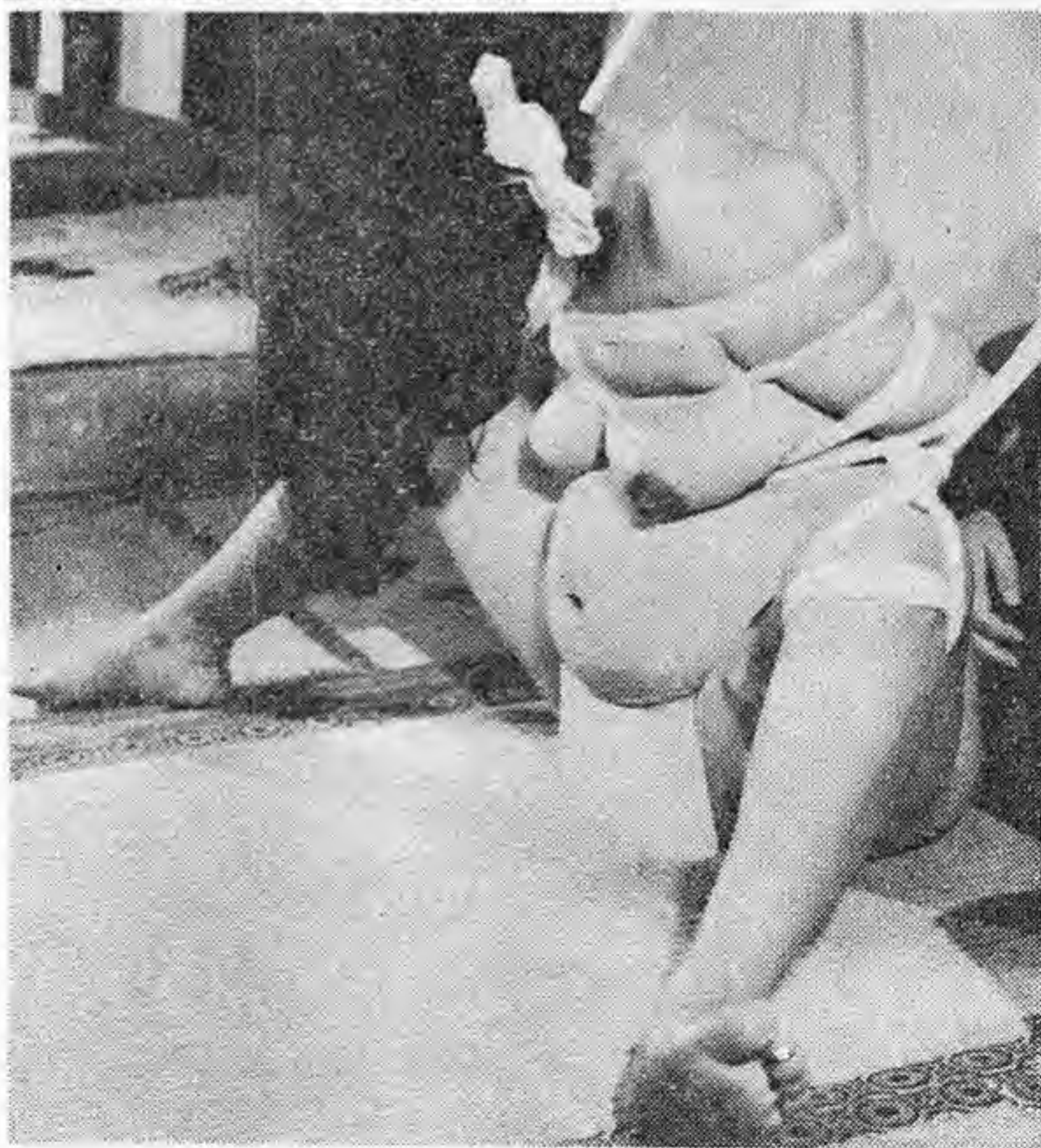
すすり泣く加津子



立てかけた食卓は
四つの脚が、こちら
を向いている。最初
畳に近い下側の脚に
加津子の足を左右に
開かせて縛ったが、
これは只単に、両足

を八の字ぐらいまで
に開かせただけで、
さして面白味が、な
かった。

そのあと、私は、
食卓の上の方の脚に
その紐を括りつけて



引っぱったとき面白い発見をしたのである。
両方の膝頭を、卓の左右の脚に掛けて、ぐい
ぐいと引きしぼると、加津子の両方の足は、
いやでも両側へ引き寄せられ、股は、あられ
もない格好に、ひろがってゆく。そうは、さ
せまいと、彼女は必死になって、両股をすぼ
める。

私は卓の脚にかけた紐を、じりじりと締めつけてゆく。彼女の股は、それにつれて開いてゆく。と、そのとき、立てかけてあった食卓が、彼女の足をすばめようとした力によって、前に倒れかかった。彼女の背中へ倒れてくる寸前、私は手で止めて元へ戻す。

卓をうしろへ倒すと、加津子の股が、いやでも開いてゆくということを、私は発見した。

開股縛りの彼女の正面に、さっきの鏡台を持ってきて置いた。化粧用の鏡が、とんだ責めの小道具に早変わりしたものだ。

私は食卓のうしろに立って、前へ少しかしいでいるテーブルを、ぐっと立ててみる。面白いように、加津子の足が、両方の膝頭の紐で引き寄せられ、股が徐々に開いてゆく。

正面の鏡台にうつった加津子の、そんな姿が、私の目に、はっきりと見えているのだ。

「目を開けて、よく自分の姿を見るんだ」

目をつぶっていた彼女は、うっすらと目を開けて、鏡にうつっている

自分の姿をちらっと見たが、すぐ目を伏せてしまう。

「パツチリと目を見開いて、自分の縛られた姿を、とっくりと見るんだ。うつむいたり、目をつぶったりしたら、このテーブルをうしろへ倒して、足を開かずぞ」

加津子は、仕方なさそうに、顔をあげて、

鏡にうつった自分の正面の姿を、じっと眺めている。それが、私が彼女の背後に立っているが、鏡があるばかりに、私には、手にとるように、よくわかるのである。

私は意地悪く、食卓を少しずつ、うしろに倒してみる。もう、これ以上、股が開かないと思うほど、両方の膝頭を括った紐が、股を

左右に引きつける。

鏡にうつった、そんな自分のあられもない姿を、自分の目で見なければならぬ加津子の羞かしさは、如何ばかりだろうか。猿ぐつわをされているので、声を出すことは出来ない。しかし私が、そうして、卓に手を掛けて倒している間にも、くぐもった、すすり泣きの声が彼女の口から洩れてきた。

私は鏡の中の、没我放心状態の南加津子の肢体の動きを、何一つ



見のがすまいと、じつと目をこらして、見つめていた。

なんという美しい被虐の肢体であろうか。

足の甲が畳から離れて、指先が徐々に反りかえっているのが、私の目に灼きついた。

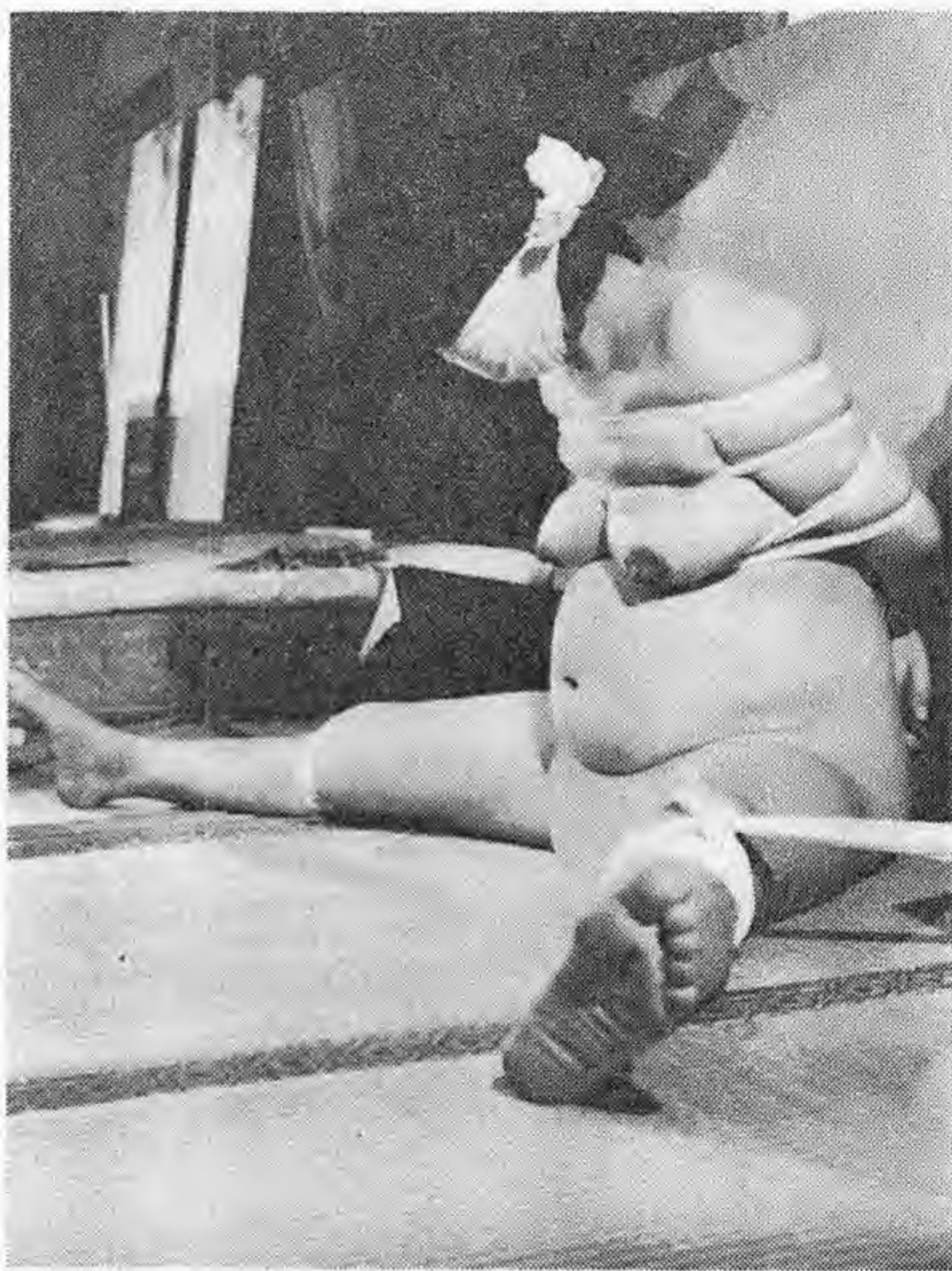
いついつまでも、このままで放置しておきたい気持であった。

加津子は、もう目は閉じていない。ぱっちり目を開けて、自分の姿を凝視していた。「さあ、今度は、もっともっと、悶え悶えて

悶え抜くポーズを鏡に、うつそうね」

私は、さっきも使用した責めの小道具の中からパイプを手にて、彼女の前で腹這いになった。途端に、今まで、うっとりとした表情だった加津子が、急に猿ぐつわをした顔を左右に振って、もがきだした。

私は、それに構わず、鏡に邪魔にならない



よう腹這いのまま、姿勢を低くして、ブーンと軽い電動音を発するその小さい悪魔を、そっと彼女に近寄せていった。

妊婦の浣腸

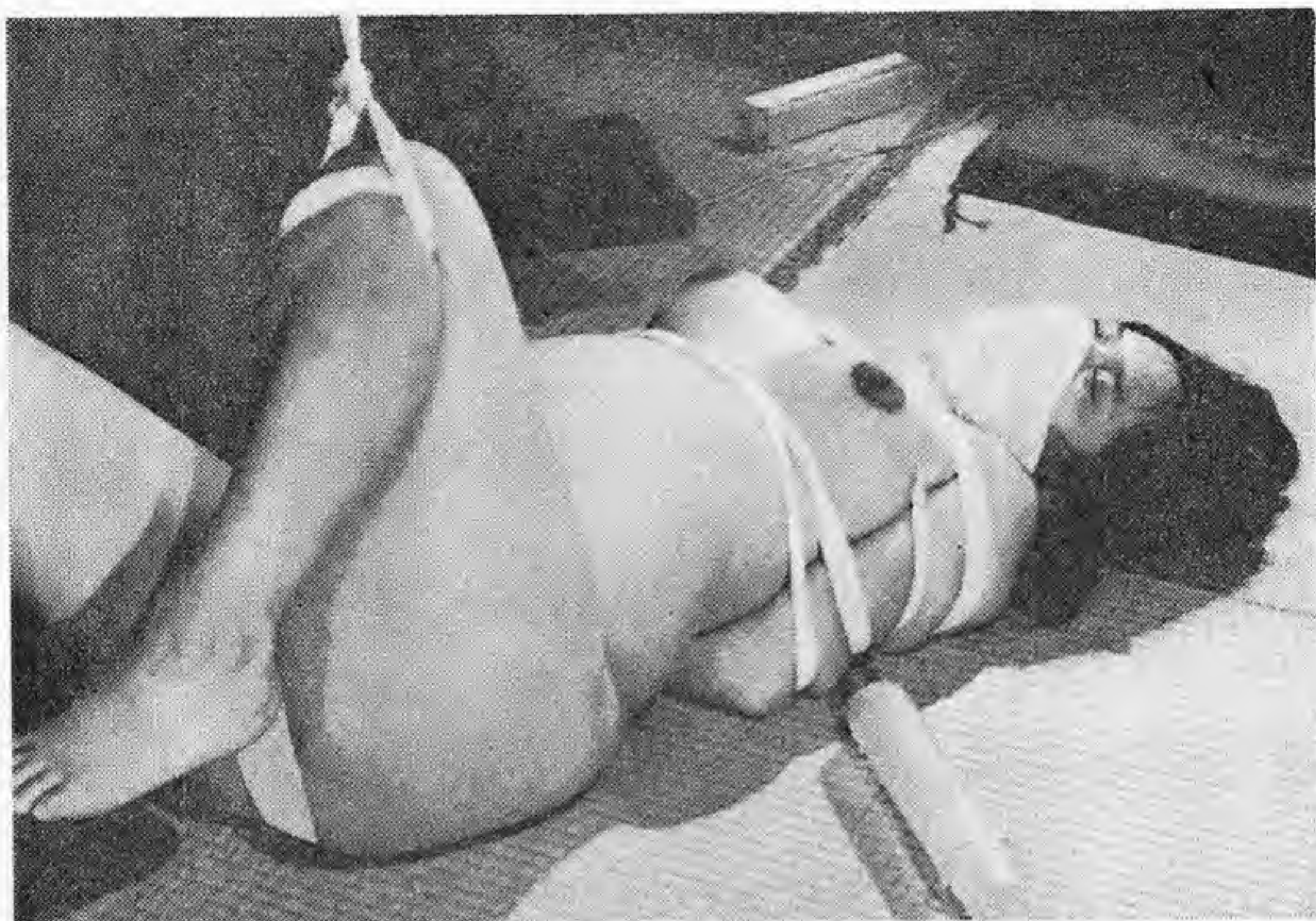
秘めたる女の生理と生態のすべてを、これ

ほど、あからさまに見られてしまふと、爆発したあとの爆弾のように、抜殻か破片だけになっでしまつて、無我の境地を彷徨でもしているように、南加津子は、うつろな表情で、ぼんやりとしていた。

そのままの緊縛姿態で、落花狼籍のまま、放置しておいた方が、彼女のために、よいのであろうか——と、思うくらい、そのムードを楽しんでいるような風でさえあった。

正直なところ、私にしてみれば、一旦、興奮がさめてみればその興奮が激しければ激しいほど、そんなままで彼女を放置しておくのは耐え難い気持であつた。一刻も早く、紐を解いて、次の責めに移りたかった。

「貴方だったら一つの責めが終わったら、すぐ縄を解いてしまうので、つまらないわ。もっと、そのままにしておいてほしいのに——」そんな声をM女性の側から聞いたこともある。もっとも、これは私が、いろんな緊縛姿



態や縛り方の変わったものを写真に撮りたくて縛っては解き解いては縛ったりした事に対する不満を訴えていたのだろうか、女性というものは、責めに於いても、その余情を楽しみたいという点では男性とは違っている。

私は次の小道具の準備をする間も、加津子を鏡台の前で開股縛りにしたままで放置しておいた。「終わったんだったら、もう解いてよ」と言えば、すぐ解いてやるつもりで猿ぐつわだけとっておいたが彼女は一向に、そうした訴えをしない。

私は二〇〇CCの浣腸器と便器と、オシメカバーとを取りだしてきた。

南加津子は、読者通信では浣腸や排泄のことについて、少しも触れていない。だから責めの中で、そういうことが好きなのか、嫌いなのか、私

にとっては未知数である。

出来れば二〇〇CCぐらいの石鹼液を浣腸するか、場合によってはイチジク浣腸を一本か二本、施してやって、便意に苦しむ彼女の表情を、とくと眺め、辛抱できなくて排便するに至る決定的な瞬間を、カメラでキャッチしたかった。

へ妊婦の浣腸Vという構想が、私の脳裡を快感曲線となって、よぎってゆく。

私は食卓の左右の脚に縄止めしてあった紐だけを解く。彼女は忽ちにして、支えていた支柱をはずされたように、くたくたと畳の上に、くずれてしまった。

後手高手小手の紐は、そのままである。

私は二〇〇CCの、少しばかりグロテスクなばかりに大きなガラス製の浣腸器を、にゅっと、仰向けに倒れた彼女の目の前に差し出す。空ではあるが、それは不気味なくらい、大きく見えた。

「あらッ、浣腸するの？ それだけは、やめて、お願い。私、浣腸はダメなの」

「ダメなことなんか、あるものか。いやだと言うのは、食わず嫌いなのださ。一遍、浣腸責めを受けたら、忘れられなくなるもんだよ」
「そんなこと、ないわ。わたし、浣腸だけは



嫌なの。やめといて、お願い。この前、前田真知子さんの浣腸の写真、載っていましたからね。前田さんに浣腸したの？ わたし、前田真知子さん、大好きだけど、浣腸されるなんて、考えられないわ」

「前田さんばかりじゃないよ。キミの知っている高村浩子さんだって、深田菊子さんだっ

て、みんな浣腸をやったよ。あの、鈴木千鶴子さんなんかは、特に浣腸が大好きでね。それは、それは凄い浣腸責めをやったね。だから、キミも、すぐ浣腸が大好きになって、浣腸してくれて、せがむようになるさ」

「そんなこと、絶対にならないわ。わたし、浣腸って、大嫌いなんですもの」

「好きか嫌いか、やってみないことには、わからないだろう。とにかく、やってみよう」
「いや、いや、やらなくたって、わかってるわ。あたし、あんなの大嫌い……」

そのとき、私は猿ぐつわをしてしまった。晒木綿で括った高手小手縛りは、そのままであるし、両膝頭を括って開股縛りに利用した紐も、そのままにしてある。

私は浴室へ行って、湯を洗面器に汲んで石鹼液を作り、二〇〇CCのポンプ一杯に吸いあげて部屋へ戻ってきた。

彼女は、私が部屋へ入ってくると、足をバタバタさせたり、お尻を左右に振って、私の手にした浣腸器の嘴管をアヌスへ近づけようとさせない。

右へ、左へ、うろろうしている間に、私は知らず知らずのうちに、ポンプの把手を押してしまふので、石鹼水が、そのたびに、チュチュッと、迸り出て、彼女のお尻を中心とした、そこら中を、べとべとに濡らしてしまった。

豊かな臀部が、むくむくと微妙な動きを見せ、お尻のえくぼが、私の目を、こよなく楽しませてくれるのはよいが、これでは浣腸を施すことは出来ない。

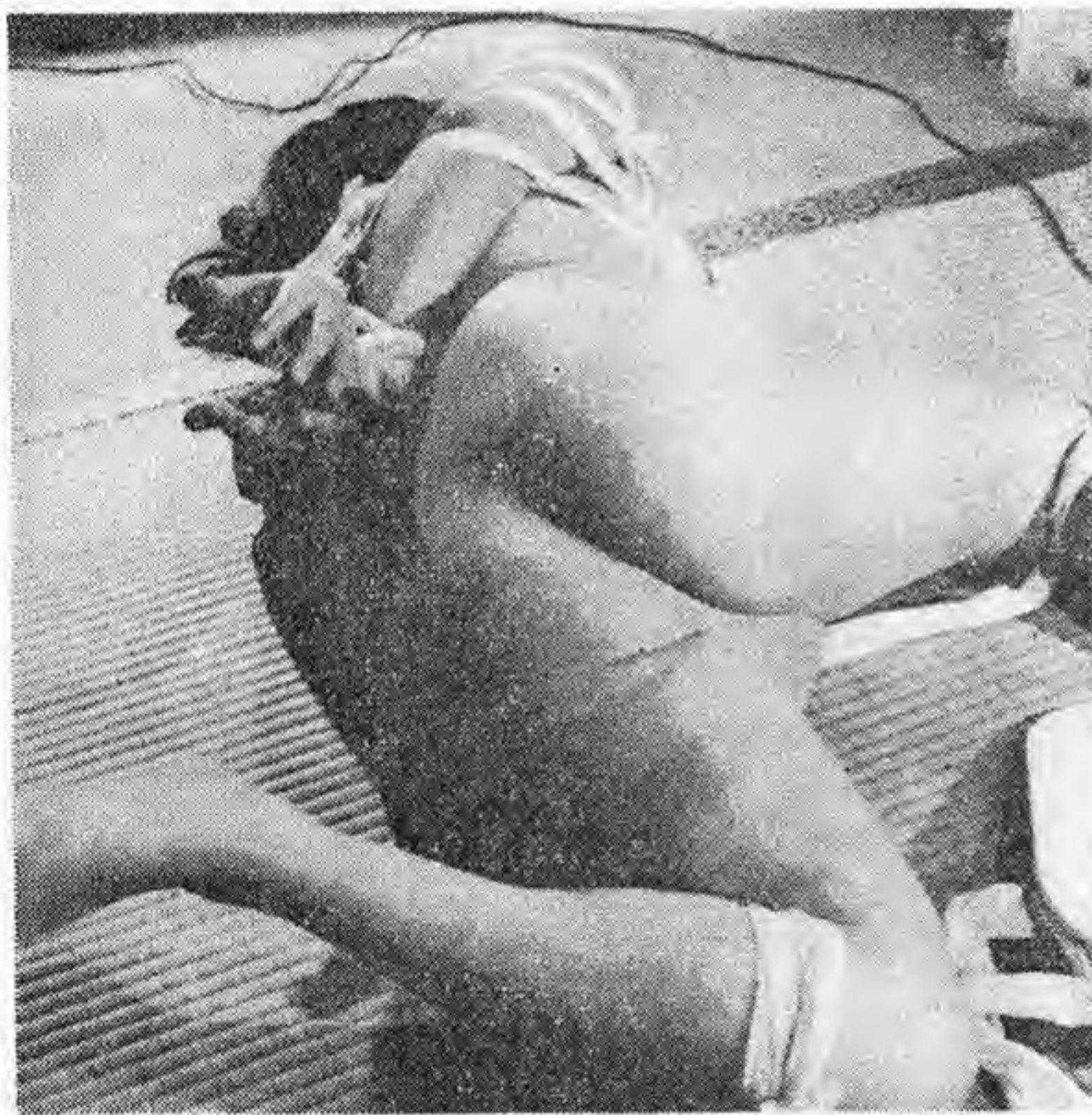
二〇〇CCの石鹼水が、ポンプの中で半分に減ったところで、私は、このガラス製の浣腸器での浣腸を諦めて、洗面器へ筒每戻した。そのかわり、イチジク浣腸の嘴管に穴をあけておいて、むんずと、加津子の小山のような、お尻の上に腰をおろした。

ひとしきり、足がバタバタ、お尻がむくむく、激しく動く。私は彼女の疲れるのを待って、むちむちと肉が盛りあがって魅力的な臀部の感触を掌で楽しみ、そして、ちがくたびに、チラリチラリと瞥見する菊花のたたずまいを、目で心ゆくまで楽しんだ。

そうしているうち、暴れ疲れた彼女の動きが、少しにぶくなったところを見すまして、私はイチジク浣腸を、狙いすまして、さっと挿入するや、一気に薬液を注入した。まもなく、嘴管に唾液をつけて、痛くないようにしていたのは勿論である。

それは、あっという間の出来事だった。

加津子にしても、いつの間に、浣腸されたのか、わからない、早業であった。



両手は背後で括られているのだから、自由になるのは、両足だけだが、このように、お尻を持ち上げるようにして、うつ伏せになり、そのお尻の上に、でんと腰を下ろされては、そのバタバタする両足の威力も殆どない。度肝を抜かれて、あっと放心するスキに、私は二本目のイチジク浣腸を注入してしまっ

た。二本といっても、量にしたら、グリセリン溶液の薬量は、大したことはないだろう。私は、畳の上を、ころげまわるようにして悶えている加津子の肢体をカメラに収めてから、猿ぐつわの手拭いを、とってやる。「いやいや、あれだけ、浣腸がいやだって、言ってるのに、とうとう、浣腸してしまったのね。いけない人だわ」

「おや、なんのことだね。キミが暴れるので洗面器の中へ、すっかり戻してしまったよ。浣腸なんてなんの話だね、一体？」

「ウソ、ウソ、なんだか、冷たいものを、お尻へ、入れたじゃないの？ あれ、浣腸だね。きつと、そうよ。そうに違いないわ」

「そうだとしたら、どうだね、お腹が痛くでもなって来たかい？」

ええ、どうだい」

「ええ、そうよ。なんだか変よ。早く、早く、この紐を解いてよ。」

ねえ、お願い……」

「そんなに慌てなくなつて、いいよ。浣腸したって言っても、イチジク浣腸だから、そんなに辛抱で

きない程、激しいもんじゃない。ホラ、ここに便器も準備してあるから、ゆっくりと排便するんだな。始めから終わりまで、とっくりと見せてもらうよ」

「こんなところじゃ、嫌。トイレへ行かせて。トイレでだったら、見てでもいいから。ねえトイレへ行かせて。お願い」

「なにも、そんなに、せかなくてもいいよ。今、どのくらいの便意が襲ってきたか、正直に言ってごらん。さあ、言っごらん」

「あーあ、お腹がしぼるように、痛くなってきたわ。やっぱり、浣腸したのね。出そうだな。早く、立たしてよ」

「心配しなくたって、横になったままでも出来るように、この便器を当ててやるよ」

「そんなことで出来る筈ないわ。ねえ、ちょっとでいいから、起こして頂戴」

「起きあがったところで、しゃがんで、便器を当ててみるか。その方が、よさそうだな」

「意地悪いわないで——。トイレでだったらいくら見ても構わないわ。私、思いつきり、出してしまおうから、写真うつしてもいいわ。ねえ、早くう。もう、待てないわ」

「とか、なんとか言って、排便してるところを見られたいんだろう。僕はね、絹川文代と

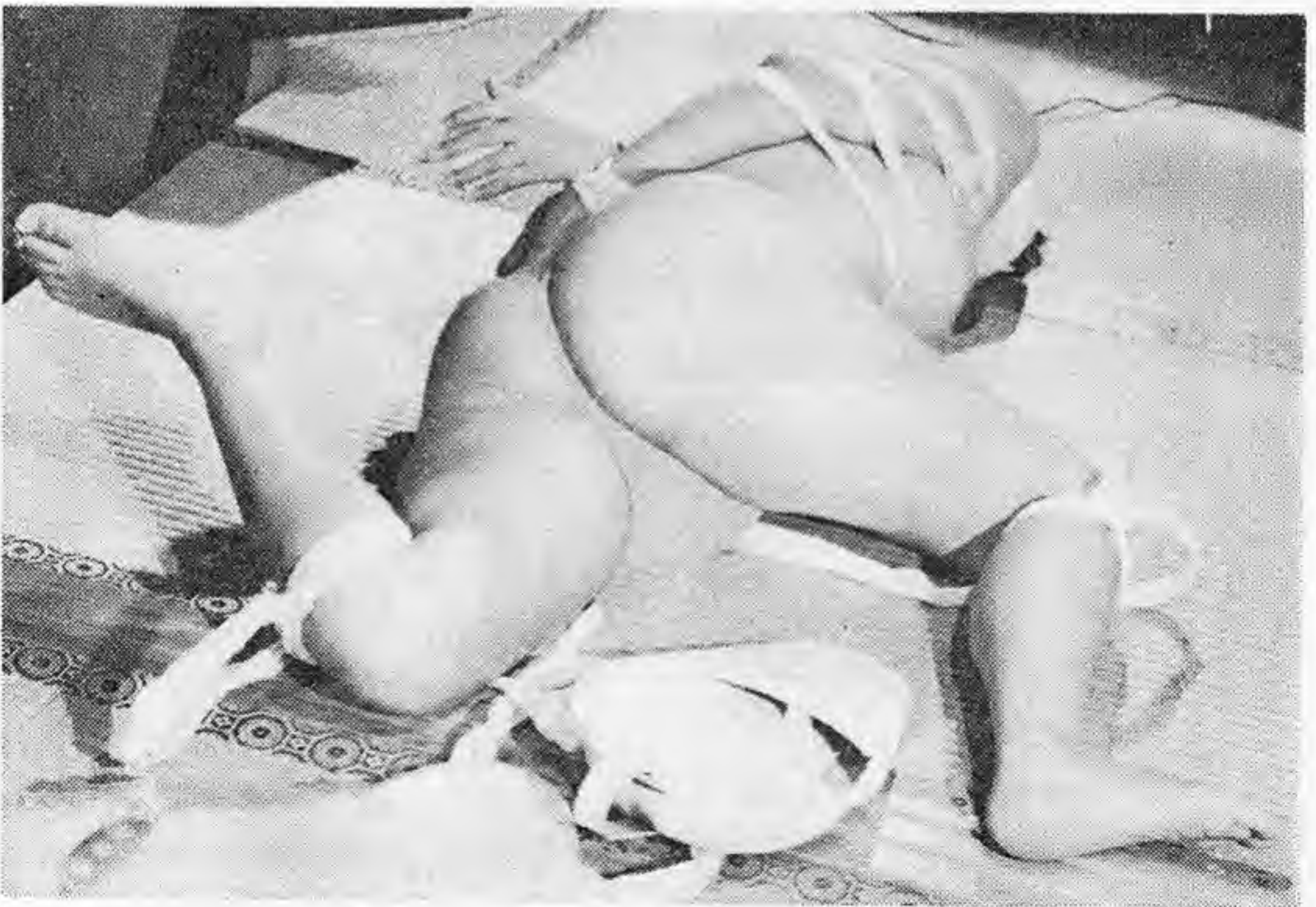
いう女の人の排便してるところを、トイレで何枚も何枚も撮ったことあるんだけど、そのときは浣腸なんか、しなかったナ。本人は、一番恥かしいところを見られたかったんだろうが、彼女が美人だっただけに、凄く美しかったよ」

「絹川文代さん——なんて、私、知らないけど、どんな写真か見せてほしいわ。私、他の女の人の、そんな写真、見るの、大好き」

「大分、以前のことだから、ネガのままで、焼付けはしてないんだけど、コプロ趣味がこれだけ一般化してきたんだから、一つ、誌上に紹介してもいいかもしれないナ」

「あーあ、もう、お腹がゴロゴロしてきて、今にも出そうよ。早く起こして。こんなところへ洩らしたら大変だわ」

私は、彼女の首へ腕を通して起こしてやる。





勿論、上半身を括った紐は解かない。

彼女は、よろよろと、小走りに内股でトイレの方へ向かう。私はトイレの扉を開けて彼女を招じ入れる。スリッパを履くのも、もどかしく、便器を跨いで私の方へ、遅しい双臀を向けて、しゃがんだ。

私は、あわてて、カメラとストロボを取りに部屋へ、戻る。とって返して、カメラを構えようとしたら便壺に堆高く盛り上げられた黄金色の塊。と、見る間に、水流が激しく迸って、それをも洗い流してしまった。

あとには、微かな異臭が、そこはかとなく漂っているばかりだった。

ああ、おそかりしか、私は地団太を踏んだ。

罰を受ける加津子

「トイレへ行ったんだから、ねえ、お風呂へ入らせて——」

「お風呂へは、どのように後始末をしたか、その検査をしてから、入らせてやる」

「でも私、両手が括られてるんだもの、後始末なんか、出来っこないわ」

トイレから出てきた加津子は、お尻をもじもじさせながら前屈みで中腰になっている。

「出すところを見せると言っておきながら、許しも得ずに出してしまった罰だ。後始末をしなかったら、どれだけ汚れているか、これから、とつくりと検査をしてやろう」

「ごめんなさい。だって、とても、辛抱できなかったものですから、つい……」

「つい、僕が見ていない間に、出してしまったというんかい。まあ、それは仕方ないとして、その罰として、加津子は、人身御供ひとみごころにされるんだ。いいかね？」

「ヒトミゴクウ——って、なんのこと？」

「それはね。加津子がね、余りにも可憐だから、エロ爺さんのお目鏡にかなって、これから肉だけじゃなしに、骨まで、しゃぶられる

ことになるんだよ。どうだ、怖いだろう」

「骨までって、どんなこと？」

「それは、今から、こちらへ来ればよくわかるさ。マゾはマゾらしく、怖かったら怖いで、思いつき泣くんだナ。紐は解かないけど、猿ぐつわだけ、勘忍しておいてやろう」

「ねえ、その前に、ちょっとだけでいいから紐を解いて。私に紙を使わせて……」

「あっちへ行ってからでも、使えるさ」

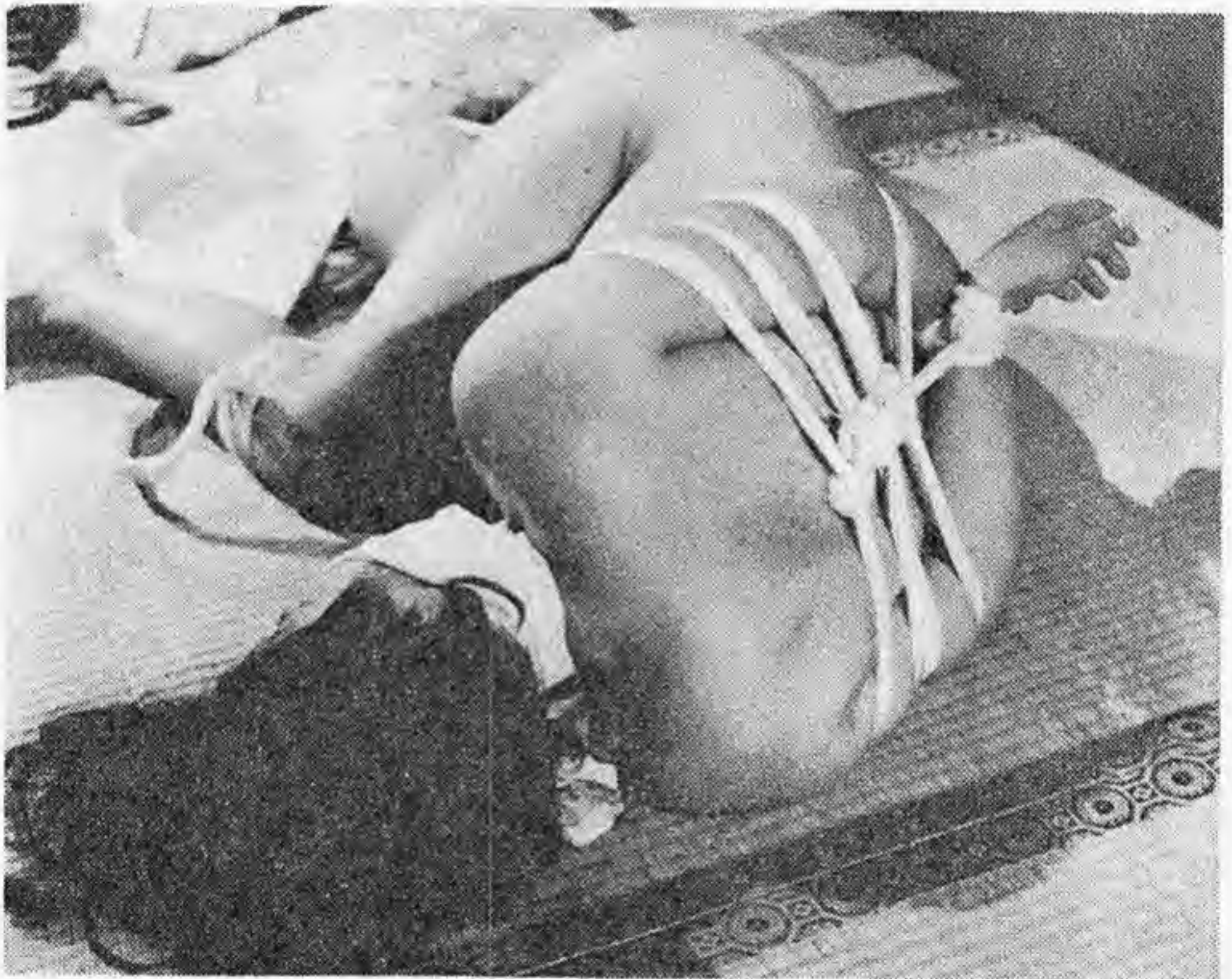
私は加津子を追いついて、奥まった部屋の蒲団の上へ連れてきて坐らせる。

「この紐、解いて下さるの？」

「うん、解いてあげるよ。キミが素直に、僕の身体検査を、すっかり受けたらね」

「わあ、ずるい。それだったら、もう何もかも終わってしまうじゃないの」

「そうさ。このプレイが終わったら紐も解いてあげるし、お風呂へも入らせてあげるよ」



彼女の足の力は至って強かった。

私が両膝に手をかけると、仰向けに倒れながらも、足で私を蹴って寄せつけまいとして激しく抵抗する。私は、その足を払いのけ、払いのけして、彼女に肉迫しようとする。

そのとき、私も彼女も、あっと声を出して思わず手を引っ込めた。私が、はずみで彼女の足に掛けた手をすべらせて、お腹に掌をついてしまったのである。

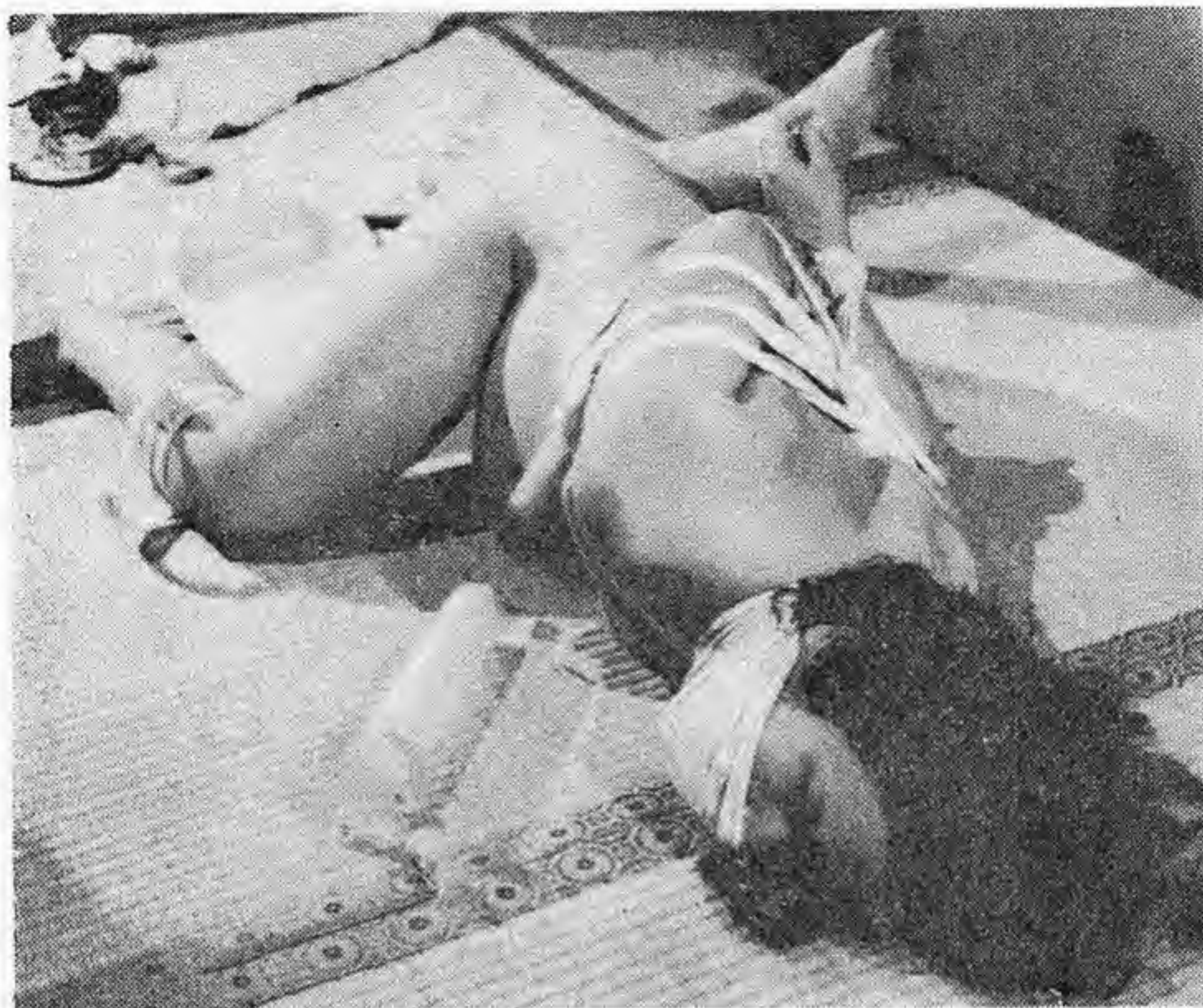
ぐにゃつとした掌の感触に、私はびくつとした。お腹には、すでに胎動を感じるくらい赤ちゃんがいるのだ。

このハプニングで、彼女の抵抗が急速に弱まった。私は、その機を逸せず彼女の片足を抱えあげて、その内股のやわらかい肉に唇を当てて、歯型がつかない程度に噛んだ。味というものがないのに、上下の歯に当たる柔肌の感触がジーンと、歯を通して快く全身にしみわたってくる。

強く噛みたい——という気持がある

が、歯型を残してはいけないという懸念が先行して一個所を長く噛んでいるということとは

「ああ、許して、許して。そんなこと、しないで——。拭いてないのよ」



出来なかった。軽い噛咬を、場所を変えて、次々と繰り返してゆく。

「うう、ううう、う——」

微かな呻き声を洩らして、喘ぎながら顔をのけぞらして、彼女は、全く、私のなすがままになっている。

もう、どこを眺めてもどこを開いても、歓喜の情を漏らしこそすれ、拒否することは、いささかもない。完全に飼育された人身御供の妙なる女体でしかなかった。

私は、洗面所で熱湯にタオルを浸して蒸しタオルを作り、排便したまま後始末のしていない彼女の個所を、念入りに清掃してやる。

加津子は、じっと、私のなすがままに身をまかしている。湯気のたつようなタオルで拭っては眺め、眺めては拭っているうち、彼女もまた、私が作業のしよいように、お尻を持ち上げて、股を開いてゆくのだ。

蒸しタオルが冷えてくると乾いたバスタオルで丹念に水分を吸いとってから、そのバスタオルを、お尻の下へ敷いた。

加津子のMのボルテージが、刻一刻と上昇してゆくのが、私の目にも、はっきりとわかった。それがまた、私の嗜虐心を一層あふりたてる結果となった。

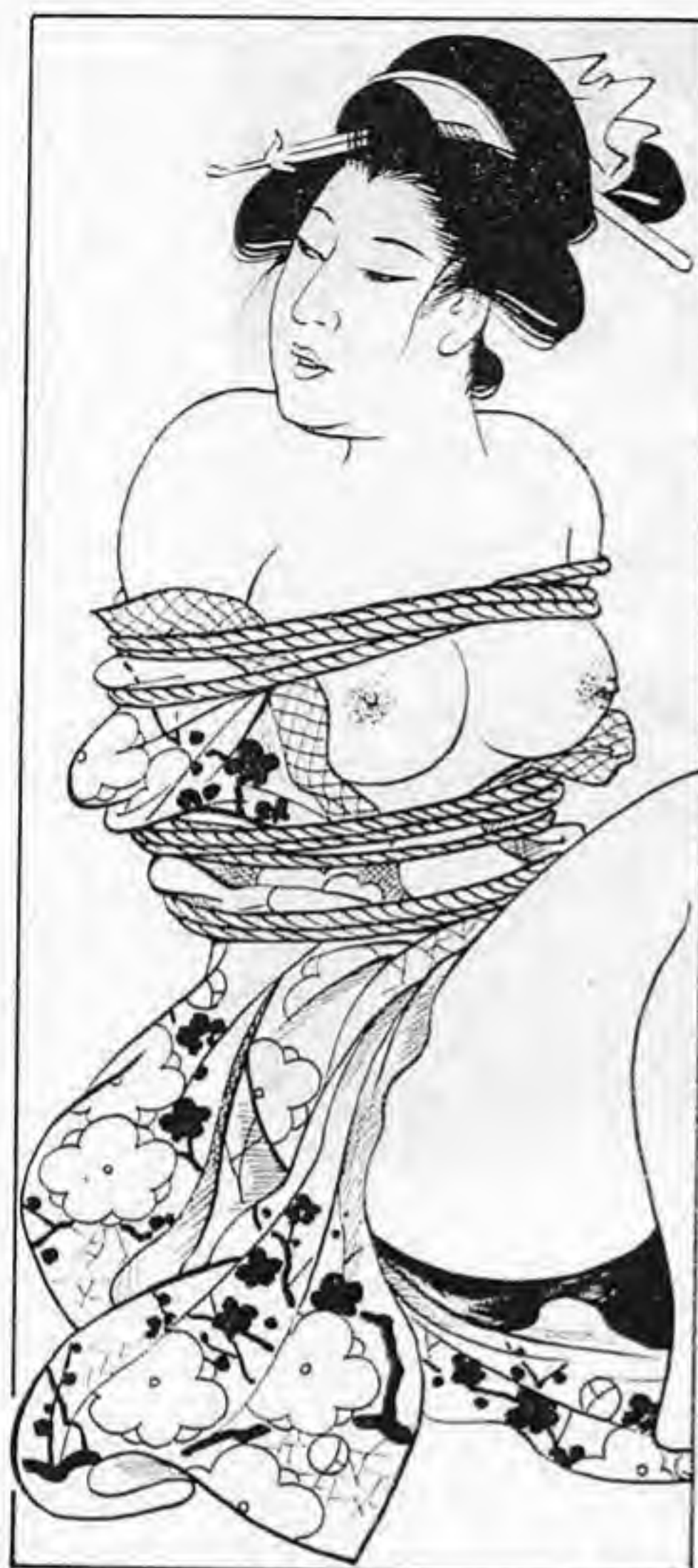
胸がドキドキと早鐘をうち、目が血走ってくるのが、自分でも、よくわかった。刺戟が刺戟を呼び、私の動作が激しくなればなるほど、彼女のMの反応が大きくなった。

目で見、声を聞いて、私はエキサイトしてきたが、彼女の方は直接、肌に責めを感じて叫び声を挙げたい気持であつたろう。

だが、それを、はしたないと考えた彼女の躰のよさが、やがて、妙なるすすり泣きに変わっていった。「坐れ」といえば、素裸のままでも正座する育ちの良さが彼女の物腰の端々に現われているのを私は好ましく思った。

加津子のすすり泣きは、いつ止むともなく続いている。私は暑くなって、着ていたアンダーシャツを脱いで部屋の隅へ投げすてた。あたりは静かだったが、熱気だけは、むんむんと部屋中に漂っていた。

——(おわり)——



△芸妓の悲しくも哀れな物語▽

春^{しゅん}

情^{じょう}

色^{いろ}

街^{まち}

責^せ

め

の

手^{から}

管^{くり}

あきの・よしみず

カット・岡 たかし

琴美^{ことみ}が、祇園町から姿を消した時、町中は騒ぎになった。

普通、芸妓が身を引く時は、配り物をしたがり、別れの宴を催すのが、しきたりであるが琴美は、それすらもなかった。

売り出し中であつたので、騒ぎも大きかったのである。その時、琴美は二十二だった。

製紙会社の社長である琴美のいい人は、彼女に京都の外れに、美しい庭のある家を与えて住まわせた。

一年ほどは何事もなく過ぎた。男が琴美の所へ来るのは、月のうち、五、六度だった。始めの間は、男の言うがままにしてきたが月日が経つうちに、芸妓だった頃の思い出がなつかしくなり、男のおとずれる回数も少ないせいもあって、寂しさに耐えかね、とうとう、芸妓当時の妹にあたる弓子を、時々呼ぶようになった。

祇園に背くようにして身を引いた手前、琴美が、いくら祇園に戻りたいと思っても、それは決して出来る事ではない。

「弓子ちゃん、今日は、泊まっていて、おくれやすなあ」

「そやかて、お姉ちゃん……」

「いいや、帰さしまへんえ。あんたのお母^かは

んには、うちが、よう言うとかさかいに」
 そのようにして、弓子は、しばしば琴美の
 所へ泊まるようになった。

弓子が琴美の家へ行くのは、男のいない時
 だけだったから、弓子は琴美の旦那が、どん
 な人か知らなかったのであるが、それが、あ
 る日、弓子が泊まった夜おそく、旦那がやっ
 て来て泊まる事になった。

そのまま帰れば、何事もなかったのだが、
 夜もおそいし、琴美にすすめられるままに、
 離れに泊まることになった。

ふと、夜中、弓子は眼を覚ました。女の悲
 鳴のようなものが聞こえてくる。二度、三度
 どうにも気になって、弓子は部屋の外へ出て
 みた。

琴美の部屋は、明かりがついており、障子
 戸は半分以上、開け放たれている。声は琴美
 のものらしかった。

弓子は中の様子を見ようと庭へ降りた。
 木蔭から見えた部屋の中の有様は、今年十
 七才の弓子にとっては、あまりにも大きなシ
 ョックだった。

「もう堪忍しとくれやす」

「駄目駄目。そうら、もう一度——」

男は手にしていた細竹で、琴美の尻を打っ

た。琴美は一糸まとわぬ雪のように白い裸身
 を妖しげに、くねらせながら舞い始めた。

琴美の動きが奇妙なのは、両足首を一つに
 結えられ、動きにくいためらしい。

「もう、あきまへん」

琴美は苦しげに横たわり息をするたびに乳
 房が大きく上下するのが、はっきり見える。

「こら、誰も休んでいいと言っていないぞ」

男は言いながら、琴美の腿へ、背中へと、
 細竹を振り降ろした。

「イタッ、タッ。堪忍どす。もう堪忍しとく
 れやす」

琴美は泣いているようだった。

「さあ、罰に、松の木にでも、縛りつけてや
 ろうかのう」

その声を聞いて弓子は、あわてて部屋へ戻
 った。胸は早鐘のように激しく鳴っている。

「いったい、どういうことなのか。弓子には
 まるで理解出来ない。ただ、琴美の苦しげな

涙顔が悩ましげにゆれているのと、ふだんは
 透きとおるように白い肌がピンク色に染まっ

ているのが、着物をまとっている時よりも、
 いっそう美しく感じられた。

庭で物音がしたので、弓子は部屋の障子を
 細く開けてみると、琴美がやはり裸のまま

松の木に縛られていた。

「解いとくれやす。弓子が目、覚ましたら、
 困りますかな」

初老のその男は、琴美の身体の隅から隅ま
 で、なめていく。

「ああ、あきまへん。弓子が、弓子が……」

男が何かする度に、琴美は声をもらした。
 とうとう弓子は、最後まで、二人から目を

離さなかった。そして、琴美が本当は喜んで
 いるのだということだけは確信できた。

次の日の朝おそく、男は帰った。

弓子は琴美の顔を、まともに見ることで
 きなかった。琴美は昨夜の出来事など、なに
 もなかったように、いつもの姿に、もどっ

ている。
 「ほな、お姉ちゃん。うち、帰らしてもらい
 ます」

「ええやないの。今日は、ゆっくりしていっ
 ても、ええのやろ」

「うち、ここへ来るの、もう……」

「ええ？」

琴美の顔を見る事が出来ず、うつむいてい
 た。弓子が、ふと眼を上げると、昨夜、琴美
 が打たれていた細竹が、壁に立てかけてある
 のに気がついた。

「弓ちゃん。あんた、まさか……」

細竹を、じっと見つめる弓子に、琴美も、すぐ納得したらしい。

「そうか、見てたんか。えらいとこ見られてしもて、ああ、恥かし」

琴美の顔が、ぽっと赤らんだ。

「あんたは、まだ子供やから、ようわからへんやろうけど、世の中には、いろんな事があるんえ。あんなうち見て、さぞ、嫌いになつたやろな」

弓子は下を向いたまま、首を横に振って、いやいやをした。

「無理せんでええのよ。うちかて、こうやって落着いて考えてみると、恥かしいて……」

「そんなことあらへん。ほんまのことどす。うち、お姉ちゃん、きれいやな、思うて、見てました」

「まあ、この子いうたら」

二年後、旦那が死んだ。

琴美には、住んでいる家と、何年かは遊んで暮せるだけの金を残していった。

それから、間もなく、弓子は祇園町から足を洗った。

弓子が高校を出て、大学へ行くようになった頃には、琴美の所へ通う回数も増し、少し

宛ではあるが、奇妙な生活の深みに、のめり込んでいった。

「あれっ、お姉ちゃん、どないしたん？」

ある日、弓子が琴美を訪ねると、琴美は寝間着姿のまま、両手を縛られていた。

弓子に見られ、恥かしそうにうつむいた。

「なんでもあらへんのや。一人で遊んでるうちに、外れんようになってしもて……」

「おかしな、お姉ちゃん」

細紐を解きながら、弓子は笑った。

「なあ、弓ちゃん、悪いけど、もう一ぺん、くくってくれまへん」

朝から一人で遊んでいるうち、たかまってきたのか、そんな恥かしい言葉が、琴美の口をついて出た。

「まあ、なんでやの。うちが、お姉ちゃん、結くやなんて、そんなこと、でけしません」
とんでもないという風に、弓子は横を向いてしまった。

「弓ちゃん、堪忍しとくれや。阿呆なこと、言うてしもて……」

琴美は恥かしそうに、着がえのため、立っていった。二人は、いつものように、お茶を飲み、菓子をお口にしながら、さっきの一件があるので黙り込んでいる。

「お姉ちゃん、怒っては嫌？」

「いいえ、なんで、うちが怒らんなんの」

「うそや、やっぱり怒ってはる」

琴美は、寂しそうに庭を眺めている。

「お姉ちゃん。うち、言うこと、きいてもええんよ」

それが始まりだった。庭に面した廊下に琴美は、うつぶせに横たわり、両手を背中へまわし、手首だけ縛られた。

弓子は琴美の側へ坐り、意味もなく琴美の長い髪をといっている。身体に触れられることに琴美は喜び、弓子もまた、そうすることを嫌とは思っていなかった。

私が弓子と知り合った時、彼女は大学の三年生。私は二十六の時だった。

何度か弓子と会った後、ホテルへ行った。

私は彼女が始めてだったことに驚いた。むろん、彼女が琴美という女性と深い仲だということも、奇妙な間がらだということも、知りしなかった。

私と会う前の日に、弓子は、よく琴美の所へ行った。

「イタッ、痛いわ。弓ちゃん、ああ苦し」

舞いをするだけに琴美の身体は柔らかい。

弓子が少し力を入れて縛るだけで、琴美の細

い身体は、弓のように反って、足の裏が頭につく。そのままの格好で、弓子は琴美を縛りつけてしまった。

「弓ちゃん、もう堪忍え。苦しい、息が……」

伸びきった琴美の腹を、たたいた。

「あっ、弓ちゃん。ひどいこと、せんといとくれや。痛っ、弓ちゃんいうたら」

弓子が打つたびに、琴美の腹筋は、びくっと動く。自由になっても、琴美は横たわったまま、大きな息をして、あえいでいるだけだった。

そんな琴美を、弓子は再び後手に縛り、軽く弄んでいく。子供が人形に対するように、身体中を、吸ったり噛んだりして、いたる所に赤いアザをつけた。

乳房を足の指でつねってみたり、鼻をつまんで息のできないようにしておいて、口からタバコの煙を吹き込んでみたり、それはまるで幼児が遊んでいるのと同じように見えるが、当の弓子は、自分でも意外な程、琴美をいたぶっている時は冷静で、琴美の喜んだり、苦しんだりする表情を見つめ、次は、どんなこ

とをしようなどと考えていた。

弓子と私は、お互いに口に出すことはなかったけれども、結婚ということについて、十分、意識していた。

その時、私は本気で弓子を愛していたのかどうかは、はっきりしない。ただ私は、親のすすめる見合が嫌で、父とケンカをして老いた母の泣き顔を見る辛さもあり、父に出て行けと言われると、これ幸いとばかり、家を出てきたので、その反動で愛情もなく、弓子と交渉を持ったただけだったのかも知れない。

私は泊まる所がなく、友人の家を泊り歩いてしたが、ある時、弓子に金がかからないで寝泊まりできるような所はないか、と、たずねたところ、いい所があるといって、連れて来られたのが、琴美の家だったのである。

私は、今では完全なマゾヒストになっている琴美と結婚をした。

琴美が私を奪ったと信じている弓子は時々私達の所へ来ては、特に琴美に対しては犬に對するようふるまっているということだけを記しておこう。

この三人の奇妙な生活の話は、また、いつか筆をとりたいと思っている。

イメージギャラリー

『吊られるうー!』 志羽利也



——(おわり)——



カッ・岡 たかし

連載・M派交友録

(42)

グラマーな猛女

△植座たき子の巻▽(5)

鬼山 絢 策

買い物包み

「あ、来たらしいわ」

たき子は安井の部屋で、インターホンから流れる自分の部屋の物音に耳をすました。

「四時ね。何でこんなに早く来たのかしら」

「ちょうど時間とありませんかあしたあーか」

安井は、たき子を抱きしめてキスした。し

ばしの別れのキスである。

「フフ、お勤めだからね。あたしの出勤時間よ。ウフフ、じゃあ、またね」

「待てよ。爺さんは一人の時、どんな風にしているか、少し様子を見てみないか」

橋本宇吉が、たき子を訪れる時は、ほとんど、電話で知らせてきたのだが、この頃は突然、前ぶれなしに、やって来ることがある。

疑ってるのかしら？

安井にも、そのことを話した。

「うん、そろそろ感づいても、いい頃だな」

「冷たいのねえ、その言い方」

「思った通りを言ったまでさ」

と安井は突き放すように言って、不敵に笑った。そのふてぶてしさに、男性的な魅力を感じた。『悪の魅力』というのであろうか。

扉のボタンと閉まる音がインターホンからした後、ガサガサと紙をいじる音がした。

「あたしの描きかけの絵を見てるのよ」

「ウン、そうらしいな」

安井は、たき子の頬にキスし、更に唇にも

って行った。

「少し焦らせてやるのもいいさ」

「フフフ、疑ってるんだわ」

「おい、もう一ぺんやろうか」

たき子はパンティだけは穿いていたが、安井は、そのパンティに手をかけた。

「だめよう。疑ってるんだから。あんたも悪党ねえ」

「悪党には誰がしたんだ」

安井はベッドに、たき子を押して倒してキスを重ねた。そうしながらも二人はインターホンに耳をすませているのだ。

扉の閉まる音が二、三度した。ベッドや浴室を見て回ってるらしい。

「あたし、行ってくるわ」

たき子は安井を押しつけて服を着た。

「たんと可愛がってやれよ」

「フフ、何言ってるのよ。今度はインターホン、つけっ放しなんてヘマは、やりませんかね」

「そうしてもらいたいな。サ、これから俺は仕事だ。君のお蔭で仕事が一ぱい溜まっちゃったよ。締切り過ぎてるのが、いくつもあるんだ。今夜は徹夜だよ。今夜は、もう来るなよ」

「畜生！ インターホンで、聞かせてやるから」

たき子は捨てぜりふを残し、安井の部屋をあたりを見まわして廊下に入りのないのを確かめて出た。自分の部屋は、目と鼻の先にある。だが、たき子はエレベーターの所まで行って、そこからコツコツと靴の音をさせて自分の部屋まで戻り、鍵を出して扉をガチャガチャいわせた。扉に鍵は、かかってないことは橋本が居るのだから分かっていたが、芸の細かいところを橋本に見せるためである。橋本は、いつものガウンに着替えているところだった。

「あら、いらっしやい」

「電話したんだけど留守のようだったから」これは橋本の嘘である。たき子が留守と見て出た言い訳だが、電話がかかって来ないのは、たき子は、ちゃんと知っている。

「すみません」

たき子は安井の部屋から持って出た買い物包みをテーブルに置いた。

「なに買ってきたの？」

「エ？ フフフ」

たき子は笑いにごまかしたが、内心は背筋に水を浴びせられたほどゾーッとしていた。

何を買ってきたか、包みの中に何が入っているのか、たき子は忘れてしまっているからだった。

この買い物は、いつしたんだろう。エエとあの時、買ったんだから、ちり紙と……これは画用紙だけど、あとは何だったっけ？

もういく日も前に買って、安井の部屋に置いておいたものだった。見ると包装紙のかが少し破れて、何となく古びた感じがする。

たき子は包装紙を破いて、ちり紙や、画用紙を、とり出した。あとの一つは男性用ヘアーローションだった。たき子は、やっと思いついた。

一週間も前に買った品物だったのだ。

「これ、パパ使うでしょ」

ヘアーローションを見せると、橋本宇吉はニッコリ笑った。

男は女の僅かな心遣いを大変、嬉しく思うものなのだ。

「今日は、また早いね」

「うん、仕事が早く片づいたもんだからね。今夜は君と食事でもしようと思ってね」

「あら、うれしい！」

そう言えば、この頃、宇吉は、たき子を食事や散歩や買い物に連れて出るのが少なくな

っている。

このマンションに移った当座、宇吉は一週間のうち、五日ぐらいは来たが、二年後の今は一週に一度か、二度ぐらいになってしまった。もっとも最近、また足繁くなって、二度か三度、来てはいるが。

「君の絵、なかなか、うまくなったね。売れるの」

「ええ、忙しいのよ」

「いいことだ。今度、僕の知ってる出版社にも紹介してあげよう。これ位、描ければ大したものだよ」

「出かけるんなら、あたし、ちょっと、お風呂へ入るわ」

たき子は風呂のガスをつけ、寝室へ入ってワンピースを脱いだ。

「サリー……」

寝室へ宇吉が入ってきた。安井の所へ行く時にはブラジャーを、はずして行く。だから今も洋服を脱ぐと、パンティ一枚になっていた。宇吉は、たき子を抱いて乳首を舐めてきた。ブラジャーがないことには気がつかないらしい。

「ウフン、くすぐったいわよう」

宇吉は、そのまま、たき子の前に跪き、パ

ンティを引き下げようとした。

「アラだめよう。もう出かけるんじゃない」

「まだ、早いよ」

「じゃ、お風呂へ入ってからね」

宇吉の両手は動きをとめず、たき子のおさえる手を押しのけるようにパンティを足許まで、落としてしまった。

「だめよ、ダメ。じゃ、お風呂の中で」

たき子は見られるのが恥かしかった。

見破られてしまうんじゃないかしら？

ふだんなら誇らし気に老人の前に突きつけてやるのだが、今日は両手で掩いたかった。

いつも、そんな真似をしてないから不自然だし、老人が気づくのではないかと、宇吉の顔色を上から見下ろしていた。

宇吉は構わず、たき子の大きな腰を抱え、と、躊躇なく唇を寄せてきた。

もはや、たき子は観念した。

太ったサリー

あの時、急いでいたから、大してよく拭きもせずに、安井の部屋を、とび出してきてしまった。

老人の舌は、いつものように愛撫する。何

の疑いも、もたぬようだった。

もうこうなってしまうてはしようがない。

たき子は、いつもやるように片足をグイと持ち上げて、老人の肩へ乗せた。

老人は上向き加減になり、奉仕する部分の拡がっただけ忙しくなった。

いつもと違った味じゃないかしら。

こうすれば嫌でも老人の口に流れて行く。

老人は、それをどう受けとめるだろうか。

そんな危惧を感じながら、それとは別に、たき子は、しびれるような快感をジーンと感じてきた。

別に宇吉老人の舌が上手になったわけではないはずだ。いつもと同じである。にも関わらず、たき子は、こたえた。

ええい、もうこうなったら、行くところまで行ってやれ……

肩にかけていた足を、背中の後ろに落としたり。宇吉の顔は横向きになった。

わからないんだわね……

もともとは男女を問わず無味無臭のはずである。

どちらかと言えば女の方が、やや味がついていられるかもしれない。だから、それに男のものが混じれば、女の味に同化してしまうの

かもしれない。

いや、臭気は両方ともあるが、十代の若者のが一番強く、二十代になれば、かなり薄れ三十代になれば、更に匂いが、なくなる。それに、それ以上の強烈な体臭に、かき消されてしまうのだ。だから、無臭に感じられるのである。

感情が昂ぶっている時には夢中で注意力も鈍ってしまうのかもしれない。

宇吉の額は紅潮して血管が、みみずのように浮き出ている。

平素は犯しがたい威厳を備えている総明な橋本宇吉が、いまは全く腑抜けのような顔になっている。

あたしが、とめるのにきかないんだもん。

パパが悪いのよ……

もう、たき子は遠慮はしなかった。

こうなれば好きなだけ、やらせてやるわ。

いつものように、思うところヘリードして行った。

フフフ。どんな、りこうな男でも、この時だけは間抜けなもんね。

安心すると、たき子は急速度に、のぼりつめて行った。

「ああ、ああ、パパ……」

たき子の方から積極的に出た。

宇吉も、たき子のヴァイオリズムと同調するようにテンポを合わせていた。両の手で、自分の前に立っている一本の足を大切そうに抱えていた。たき子の足から尻にかけての肉づきは豊かで、たとえ一本足でも、抱き心地は十分にあった。

横を向いた上、更に仰向けに捻じ向けられているのだから、この姿勢で巨大な、たき子の上半身を支えるのは苦しかった。

それでも七、八分は堪えていたろうか。

最初からだ、十五分以上になる。

宇吉は、たき子の尻をポンポンと叩いた。

遅い両足で、坐ったままの上半身を、は

さまれて身動きもできない状態だったのだ。

たき子は、両足で思いきり宇吉の身体を前

後から締めつけていた力を抜いた。強い臭気

が、たき子の鼻にまで立ち昇ってきた。

「ああ苦しい。首の骨が曲がっちゃったよ」

「フフフ、パパが悪いのよ。せっかちなんだもん。フフフ」

何か、たき子は愉快でたまらなかった。

ふと気がつくと、またインターホンのスイッチを消し忘れていることに気がついた。

インターホンのスイッチは、居間と寝室の

境にあるクローラーの下にある。かなり高い所にあるが、たき子なら簡単に届くのだ。

また聞かれてしまった……

「フフフ……」

あの人、仕事ができないで弱ってるわ……たき子の、いたずらっぽい笑い顔を見て、

「どうしたの。何がおかしいの」

宇吉が、やさしい目で見上げた。

「だってパパが、あんまり、せっかちだからよ。サア、もうお風呂、沸いたでしょ。一緒に入りましょ」

「フン、今夜は、もう来るな、なんて言いや

がった。だから悩ましてやるんだ……安井は、どんな顔をして、聞いてるのかしら。また、晩に聞かせてやろうか。そしたら

あたしを呼ばずに居られなくなるわ。

風呂場では、身体の洗いっこをするのが習慣になっている。

毎日、風呂に入っている、たき子の身体は洗っても垢など出ないが、油っこいものばかり食べているので、脂肪が水をはじいて美しくひかっていた。

宇吉は洗いながら、思うままに、たき子の身体中に唇をつけて来た。そうして楽しむのが、宇吉の一番、幸せな時なのだ。

ナミオM画廊

『こぼれ香りの尊さ』

春川ナミオ



どこを押してもピンと、はりきっている。たき子は自分の身体を眺めて自信をもった。だが、腰のあたりを見ると、確かに、ひとまわり大きくなったような気がする。「君、太ったね」

足を洗っていた宇吉が言った。「いやよ。もう太ったなんて言わないで。気にしてるんだから」太ったと言われることは「情事が、おさかんだね」と言われてるのと同じような気にな

るのだ。ゆう子に「腰周りが太るのは、お盛んな証拠よ」と言われてから、たき子は太るという言葉に、特に敏感になっていた。

「アハハハ、そうかい。僕は君が、もっともっと太ってほしいと思ってるんだけど、君が気にしてるなら、これから言わんことにしよう。しかし、どうだこの皮膚の美しさは。ほんとうに羽二重のようにスベスベして、ああ何ともいえない美しい肌だ」

宇吉は張りきった太股へ唇を当てると、広い皮膚一面に唇を這わせた。

「サリィ。この美しい足で僕の顔を包んでおくれ。お願いだ」

たき子は浴槽にもたれかかって、足の間にうずくまる宇吉の顔を太股で、はさんだ。

宇吉の舌は、あちこちと舐め廻す。だが、もうさっきのような、電気にでも触れたような刺戟は感じられなかった。

「ああ、パパ……パパ」

せつない声をあげたが、それは、あくまでも演技であった。

風呂から上がると六時を過ぎていた。

たき子が化粧する間、宇吉も髪の手入れをし、顔にも二、三種類のクリームを、すりこんだり、たき子と同じ位の時間を費やして、

おしゃれに余念がなかった。

支那料理の好きな、たき子を、宇吉は日比谷の山水楼に連れて行った。ヴァイキングのテーブルに坐ると、たき子は、よく食べた。たき子の皿に盛ってくる料理を、宇吉も楽しそうに食べた。

たき子は、ちょっとあたりを見廻して、素早く宇吉の頬に接吻した。

突然のことに宇吉はテレたが、それは涙の出るほど嬉しかった。現に宇吉は、目頭をうるませて、無邪気に食べる、たき子を、いとし気に見つめていた。たき子としては、何の気なしに、ちょっとやって見ただけで、深い意味はなかったのだが、宇吉にとっては快い大きなショックだった。

安全無害な男

「ねえ先生。臨増の題名、決まりました？」

たき子は、鬼山の顔を見るなり言った。

「いや、それが、まだなんです。筆者が内容の一部を変更したもんでね、題名も変えなきゃならないと思ってるんです」

「ねえ先生。表紙は、あたしに描かせて下さるわね」

たき子はハツとして、インターホンのスイッチが切つてあるかどうかを確かめるべく、壁の上を横目で見上げた。宇吉との話は盗み聞かれてもいいが、この話を安井に聞かれるのは、まずい。

「まあ、担当の浜田君と相談して……」

「またまた。編集長の先生が決められることでしょ」

「そうは行かないんです。会議で、きめることです。じゃ、中扉と挿絵を、お願いしましょうか」

「イヤイヤ。あたし、表紙が描きたいの」
臨時増刊は表紙と中の扉や挿絵を描く筆者とは、いつも違っていることを知っていた。

扉を描くということは、表紙が描けないことを意味している。

「ねえ先生。お酒、召しあがる？」

「この部屋で、お酒を飲んでも、いいんですか。パパさんが来たら、どうします」

「いいのよ、仕事の話ですもの。先生となら大丈夫よ」

「と言うことは、私は絶大な信用があるわけですね。安全無害な男と言う意味で」

「そうよ、先生はジェントルマンですもの」
「さびしいなあ、あなたのような綺麗なおひと

から、そうはつきり言われるのは。ジェントルマンなんて言われるより、ウルフと言われる方が、うれしいもんです。男は」

「ウイスキー？ ブランデー？ 洋酒なら、大概あるわ」

「あまいお酒が、いいですな。リキニールか何か」

「あ、そうだ。あたしのくから送ってきた赤酒ってのがあるのよ。甘いから誰も飲まないの。九州の名産よ」

「へエ、じゃ、それを頂きましょう」

鬼山は、おとそうのようにトロリとした赤酒を二、三杯、飲むと、もう目のふちを赤くしていた。

「先生、表紙、描かしてえ」

たき子は鬼山の傍へ坐り直して顔を寄せて来た。

「安全無害な男を誘惑しようというわけですか」

まつ毛の長い切れながな目に凄艶な魅力がある。つけまつ毛かと思っていたが、そばで見ると、ほんものだった。辺見まりを、もう一周り大柄にしたような顔立ちで、もしも、このひとがモデルになつてくれたら素晴らしい写真ができるがなあ、前々から思っていた

ことだが、更に強い誘惑を感じた。

たき子のこととは安井から聞いて大体のことは知っている。安井との情事や、パトロンの橋本宇吉とのことも、安井は明けっぴろげに話してくれた。その知識をもって見るせいか最初に安井の部屋で会った時のたき子は、まだ少女らしい、あどけなさというようなものが残っていたのだが、僅か半年もたたぬ間にいま見る、たき子は、すっかり成熟した女を感じられる。

「私は仕事と、それ以外のことは切り離して考えることにしているんです。仕事に私情をはさんだら、目茶苦茶になってしまうんですよ。それで失脚した編集屋さんを何人も見てきているんでね。その点で安全無害な男なのかもしれませんね」

ムンムンする若い体臭を、身近に感じて、場合によったら——この女の味を知ってみたという強い欲望を感じているのに、それを自ら、ぶちこわすような拒絶的な言葉が出てしまう。それが、鬼山の性格上の欠点であった。このためにチャンスを失うのだ。

「そりゃそうでしょうね。それでなくちゃ編集長さんは勤まらないわね」

たき子は気にもせず微笑を崩さなかった。

「私は、あなたの絵そのものを買っているのですよ。あなたが、すばらしい美人であることと絵とは何の関係もないことなのです」

「有難うございます。そう言ってお下さる方があたし嬉しいわ。あたしは何も、お色気なんかで売り込むつもりはないわよ。ただ、表紙を描きたいという熱意を知って頂きたいだけなのよ。それはそうと、この間の花井さん、どうでした？」

「うん、ああ、あれね。たいへん、よいモデルさんでしたよ。いいひとを紹介して下さって、ありがとう」

「あのひと、いい身体してるでしょう」

「ええ、美人だしね。ちあきなおみに似てますね。きれいでしたよ、とても」

「身体もいいでしょう。スラッとしていて」

「ええ、でも私は、もっとグラマーな人の方が、いいんですがね」

「写真、できました？」

「ええ、できましたよ。私が現像、焼付、引き伸ばしを、一切やるんです」

「アラそう。その写真、見せて下さらない」

「それは、ちょっと困るんです。御本人には人に見せないと、約束してしまっただけなんですから」

たき子としては極めて自然に、気軽に見せてくれと言ったつもりだった。鬼山も、また気軽に、断わってきた。

「あら、あたし、ゆう子さんの裸なら何度も見えますのよ。あたしなら構わないでしょ」

「ゆう子さん一人ならね。実は、他に、もう一人、パートナーが居るんでね。その人にも人に見せないと約束してあるもんだから」

「あらイヤだ。それじゃセックスの写真？」

たき子は、とぼけて聞いた。鬼山が何と説明するか、どの程度まで説明するかに興味を持ったからだ。

「イヤ、まさか、そんなんじゃない、ありませんよ。男性を、一つのアクセサリーとして使ったのですよ」

「アクセサリーって、どういう意味？」

「アクセサリーはアクセサリーですよ。どうです、今度あなたがモデルになってくれませんか」

「あら、あたしはダメよ」

「あなたなら素晴らしいと思うなあ。あなたのような日本人ばなれのした肉体のひとを一度是非、撮って見たいと思うんですよ」

「アクセサリーつきで？」

「ええ、そう願えれば大変ありがたいが、も

「しもお嫌なら、ソロでも結構です」

「フフフ、あたしはダメよ。主人持ちですもの。そんなのパパに見つかったら、大変だわ」

「そうですね。見せないと約束しても、いつでもどこでどうなるかわかりませんからね」

「ねえ、先生。ゆう子さんの写真、見せて頂戴。あたしなら、大丈夫よ。うちで前にワイルドパーティーやって、ゆう子さんが酔っぱらって、いろんなこと、やったことがあるの」

「たき子はワイルドパーティーの話を、してくれた。鬼山は興味をもって根掘り葉掘り、聞いてきた。」

「そういうくらいの仲なのよ。男性と二人で撮ったというのも、あたしなら、ゆう子さんの性格から見て大体、想像がつくわよ。その写真を見て、先生の写真の腕前がよければ、あたしもヌードぐらいなら、モデルになってもいいわよ」

「うまいね、あなたは。このお酒も、ほんとに、うまい。はじめて飲んだけど、九州の赤酒ってのは、うまいですよ。私の口に、あいます。ところで仕事の話ですがね」

「肝心なところへくると鬼山は、はぐらかしてしまふ。」

「仕事と道楽の話は別ものでしょ」

「そうです。別ものです。ですから別の話に移りましょう。今度、こういう風なカットを描いてもらいたいんですがね」

「たき子は、うまく逃げられてしまった。」

男のこころ

橋本宇吉は相変わらず、たき子を可愛がってくれた。

だが、最初の頃ほどの熱情は、なくなっていた。

やはり馴れてきたのと、まともな男と女のセックスの、ともなわなないことが、恋人同志というよりも、慈父のような愛情の示し方に変化してきたように思われた。

ことによるとパパは、あたしと安井のことを、もう知ってるのじゃないかしら……

時々、たき子は、そう思うことがあった。

自分と寝室で戯れている時は痴呆のような老人だが、何と言っても総明な男である。その位のことは、とうに感づいているのかもしれない。

知らない振りをしているのかもしれない。とも思ってみた。宇吉は、その位の度量の

ある男のように思えた。

しかし、いつまでも、それで済まされるのかどうか？ それとも、まだ何も知らないのかもしれない。

たき子は、あれこれと思い悩んだあげく、ある夜、いつもの情事が済んだあと、

「ねえ、パパ」

ベッドに一緒に寝たまままで呼びかけた。

「あたしとパパのこと、いつまでも、こういう風にしては、いられないと思うのよ。いますぐってことじゃないのよ。将来の話だけといずれ、あたしも結婚しなきゃ、ならないと思うのよ」

「そりゃそうだねえ」

「あたしが結婚するとしたらパパ、許して下さる？」

「許すも許さないもない。その時は喜んで祝福するよ」

「ありがとう。それを聞いて安心したわ」

「当然のことじゃないか。僕は君を拘束するようなことは、一切しないつもりだよ」

「あたしね、前に、とっても悪いこと、考えていたのよ」

たき子は宇吉の瞳を、のぞき込んだ。宇吉は大して興味もなさそうに、

「ホウ、どんなこと？」

「もしもね、パパの奥さんが死んだら、あたしを奥さんにしてくれるかしらって。そしたら、なんだか奥さんが早く死ねば、いいなんて思ったことがあったのよ」

それでも宇吉の表情は、もの静かで、クルクル動く、たき子の目を、いとしいものを見るように眺めているだけだった。

「でも、いまは違うわ。所詮、パパと、あたしは釣り合わないと思ったのよ。いくらパパを愛しても、それは無理だと思うわ」

「そうねえ、それは実際に家内が亡くなってみないと僕の気持ちも分からないがね。いま、どっちに決めるといふことはできないね」

「世間体が悪いでしょ」

「イヤ、僕は、そんなものは全然、気にしない方だよ。人間は、すべて自由だ。世間や常識や身分や、そんなものに縛られるのは愚かなことだよ」

「パパは、あたしを娘のように愛して下さることもあるわね」

「年の差で、しかたがないね」

「あたしもパパを、ほんとうのパパのように思うことがあるのよ。だから甘えるの」

「そこが可愛いんだよ」

「あまえて我がままするかもよ。パパ、怒らないでしょ」

たき子は宇吉の心の中を読みとろうとして必死だった。宇吉が現在の自分を、どのように思っているか、たき子の浮気を感じているか、感づいているか、怒っているか、と言うような探りを入れたのである。

たき子は、いろいろな仮想を立てて「そうだったらパパは、どうする？」という風な解答を求めた。宇吉は、ある点は、はっきりとある点はボカして答えたが、たき子の読みとった感じでは、たき子の想像通り、宇吉は自分が年をとっているという「分を、わきまえた」態度であり、寛容な思いやりのあることが察知できた。

たき子は、もうひとつ、いま住んでいる、このマンションを自分のものになりたいと、それを、ねだりたかったのだが、これは切り出し方が、むずかしいので、今夜は、やめておこうと思った。

この匂いを忘れずに

たき子の住んでいる麻布のマンションは、一階が商店で婦人服や洋品店など高級品を並

べていて、地下は食べ物屋で埋まっていた。その地下にイタリア風のレストランがある。

たき子は自分で料理をつくるのが面倒くさい方だから、よくこのレストランに入った。

遅くまでやっているもので、その夜も十二時頃だったが、店に入っていくと村中二郎が居るのが、すぐ目についた。男の連れと二人で食事していた村中も、大柄な目立つ、たき子を見逃がすはずはなく、目顔で挨拶した。

たき子は村中のことは、すっかり忘れていたが、村中の顔を見たたん、ある計画を思いついた。

村中は、たき子の傍にやってきて、「しばらくです。僕が、どうしてこの店で食事していたか分かりますか。ヒョッとして、あなたにお会いできるかと期待して、ちよいちよい、ここへ来ているんですよ」

相変わず、きざな、せりふが気に入らなかったが、言っていることは、ほんとうだろうと思った。

「久し振りで少し、お話できますか」

「いいわよ」

「ありがたい！ では、あの連れは、すぐ帰しますから待ってて下さい」

村中は自分のテーブルに戻り、こっちをジ

ロジロ見ながら話をしていたが、連れの男が村中の背中を叩いて出て行った。

「あたしの部屋へ、いらっしゃい」

「いいんですか、今夜はパパは来ませんか」

「もうこの時間なら、大丈夫よ」

「ありがたい。何度も来た甲斐があった！」

村中はホクホク喜んでいる。エレベーター

に乗っても、ひっきりなしに話しかける。

「静かにしてよ。もう遅いんだから」

部屋に入ると、たき子はウイスキーと氷と

チーズに輸入物の木の実を、そえて出した。

「ばかにサービスが、いいんですね。パパ

とは相変わらず、うまく行ってますか」

「もちろんよ。へんに勘ぐらないで。それよ



イメージギャラリー 『この足のために』 岡 たかし

り、あんた、今でもパパと会ってる？」

「ええ、仕事でね。時々お会いしてますよ」

「そう、そんなら相談があるんだけどねえ」

たき子はインターフォンのスイッチが切っ

てあることを目で確かめながら、

「いつか、あんたがくれた情報、実行に移し

たいのよ」

「ああ、このマンションのことですね」

「やっぱり、よく考えてみると、あたしのも

のにしておきたいのよ。だけど、あたしの口

から、どうも言いにくいなのよ。だから、どう

やったらいいか、力を貸してほしいのよ」

「だから言ったでしょう。あれは、あなたに

とって重大なことだって」

「恩着せがましく出るんなら断わるわよ」

たき子は近寄せていた身体を離して、キリ

ツとした態度を見せた。

「いえいえ、決して、そういうわけで言った

んじゃないません。僕でお役に立つこととし

たら、何でもやりますよ」

あぶない、あぶない。この女には高飛車に

出ると頭から蹴とばされる。いままで何度も

それで失敗しているんだ。した手に、した手

に出ることだ。

「パパは、あたしに首ったけよ。だから、あ

たしにくれる気は十分あると思うの」

「うん、ちょうど、いいチャンスだ。このマンションは二年毎に管理料や維持費のことで持主と、管理者の打ち合わせ会があるんですよ。あの時、あなたは委しく聞こうとしなかったから言わなかったが、この部屋の持主は名義は橋本くに、パパの奥さんで代理人は僕になってるんですよ。現に権利書は僕が持っていて、判コはパパが持っているんです。だから、この機会に、あなたの名義にすることを橋本さんに、すすめて見ますよ。これは僕でなきゃ、できないことですからね」

また恩に着せるようなことを言ってしまったて失敗^{しま}ったと思つて、たき子の顔色をうかがつたが、大したことはなさそうだ。

「フーン、あんたが、そこまで首を突っ込んだの。知らなかったわ」

「極力やって見ますが、ところで、その報酬は？」

「フフフフ、何が欲しい？ お金？ それとも、あたしのからだ？」

「両方とも、と言つたら？」

「欲が深いだね。両方でもいいけど、お金の方が減るわよ。あたしの身体は、高いんだからね」

「そりゃ、よく承知してます」

シースルーの部屋着で包まれた豊かな胸から腰を舐めるように見やりながら、

この女とは二度も抱くチャンスがあったのに、一度も目的を果たせなかった。今度こそものにしてやる。

「成功報酬二十万、プラスあたし……ってことで、どう？ あたし抜きなら四十万あげるわ。どっちでも、いいわよ。フフフフ」

「前の方で、お願いします」

思ったより気前が、いい女だと思つた。二十万もらつた上に橋本宇吉の女を盗めれば、村中の意地も立つのだ。

「そう。そいじゃ、そう決めた。だけど大丈夫？ いつも、あたしと寝ると失敗ばかりしてるじゃないの。フフフ」

「大丈夫ですよ。僕だって男盛り。インポじゃないとこを、あなたに知ってもらわなくちゃ僕の男が立たない」

「今度はオトコを立たせて見せるってわけ。アハハハ」

たき子は、ひとごとのように笑つた。

大したタマになつたよ、この女も……

不敵に笑う、たき子の口許を見やりながらこの女を征服できるチャンスが、またも巡つてきたことに、村中は期待を大きくした。

村中は気をよくしてグイグイ飲んだ。

「サ、もう用談は終わったわよ。そろそろ、お帰んなさい」

「えっ、こんなに遅く？ もう二時ですよ。泊めて下さいよ、今夜は」

「ダメよ。女一人のところに泊まるなんて」

「ツレないなあ、僕は一生懸命やりますよ。きつとこのマンションを、あなたのものにして見せますから。ねえ、たき子さん、今晚いいでしょう。手つけに、ちょっとだけ」

「何言つてんのよ。それは成功報酬だと言つたでしょ」

「そんなお堅いこと言わないで。ちょっとだけ。ねえ、減るもんじゃないし……」

酔つて度胸がついたのか、地金が出たか、村中は、たき子を抱いてキスしようとした。

「だめよッ！」

たき子が突きとばしたので、村中は、じゅうたんの上に、ひっくり返つた。

「ねえ、お願いだ。たき子さんを、こうして見てると、たまらなくなるんだ、僕」

「フフフ、駄目よ、お預け。うまく行くまではね」

たき子は村中を見下ろして、目の上で大き

く足を組んだ。下から見上げる村中の目に、サツと太腿の奥が覗けた。

それは犬の前にブンブンいい匂いのする御馳走を見せびらかされたようなものだった。

村中は半身を起こし、ネグリジェの裾から割って出た足に、すがりつき、膝の上の方の足に唇をつけた。

「しつけの悪い犬ね！」

たき子は村中の髪の毛を鷲づかみにして顔をグイと引きおこした。

「いいこと。成功したら、いくらでも味あわせてあげるから」

ネグリジェの裾を捲くって、長い足を出す

と、太腿で村中の顔をピッタリ、はさんだ。豊かな肉づきは、村中の頬をゲッソリと、け

ずり、目の上にまで、あふれた。

「ホラ、よく匂いを嗅いでおおき。この匂いを想い出して一生懸命やるんだよ。いいか」

万力のような力で、はさまれて村中は情けなそうな目で見上げていた。

「サ、分かったら、今夜は帰るのよ。あたしこれから出かけるんだから」

「えっ、こんなに遅く、どこへ行くの？」

「係ないでしょ。サア、帰った帰った」

村中を追い出すとインターフォンのスイッチを入れて安井を呼び出し、安井の部屋へ出かけて行った。

やぶへび

村中二郎はマンションの更改手続きの報告を橋本宇吉にした時、この際、植座たき子に名義変更してはどうかと、すすめた。

そこまで話をもって行くには、それなりの理由をつくらねばならなかった。夫人名義では税金関係に影響しないとか、全然無関係の自分が所有者の代行するのもおかしいとかたき子名義にしたところで、本当にやってしまいうけではないから便宜上、都合がいいとか、くどくどと説明した、あげくだった。

面倒くさそうに話を聞いていた宇吉は、最後に、

「そんなこと、君が言うのは、おかしいじゃないか。彼女に譲る譲らないは、君から言わねなくとも、以前から僕なりに考えていたことだよ。差しでがましいことは言わないでくれたまえ」

橋本宇吉は、明らかに不機嫌を顔に出して

一言のもとに、はねつけてしまったので、村中は、あとの言葉が完全に続けられなくなっ

てしまった。

宇吉は溜息をつきながら、ひとりごとのように

「いずれば、たき子に、くれてやるつもりだよ。だが、その時は彼女と僕の間が、お終ま

いになった時だ」

別れる時こそ、彼女に最後の、そして最大のプレゼントをするという。

村中は、宇吉のたき子に対する愛の深さ、愛の寛さに、胸をうたれた。

「しかし、お二人の間に終焉が訪れるということとは当分、ないのじゃないですか。彼女も専務を父上のように慕っていることと思われ

ます。もしあるとすれば——お気を悪くなさらないで下さい。専務に万一のことがあった場合ではないかと思われま

す。その時、今のままでは間に合わないのではありませんか。あとに残られた方々が、仮に専務が御遺言されたとしても実行するかどうか」

「無礼なことを言うのは止してくれ給え。君は、わしの妻を侮辱するの

か。妻は、そんな女ではない」

「失礼いたしました。お許し下さい」

ナミオM画廊

『お食事への招待』

春川ナミオ



「君は別れると言う事柄に対して悲劇的な場面のみを想像しているようだが、必ずしもそうなるとは限らない。ハッピーなエンドもあり得るよ。例えば、彼女に好きな男ができて

結婚するような場合だ。わしは心から祝福して、あの家を贈るつもりだよ」

「彼女に、そんな男が居るのですか」

「ハハハ、君は想像が、すぐ飛躍するね。例

えば、と言ってるじゃないか。しかし、僕は彼女を拘束していないから、彼女も友達を多く、つくっている。その中から、そういう男性も生まれてくるかも知れんよ」

「専務は、お怒りにならないのですか」

「ハハハ、怒ったって、しょうがないじゃないか。年令の差というものを考えなければならんよ。真の愛というものは自我を捨てて相手の幸福のみを願って行動するものだよ」

「それだけ愛していらいっしやるなら、いま彼女にプレゼントすれば、どれだけ喜ぶことでしょうか。そして、なお一層、愛のきづなが強くなると思いますが……」

「そんなことは君が言うべきでない。僕自身が決めることだからね。ところで、君は彼女に最近、会ったかね」

宇吉は疑わし気な目を向けた。村中は、こりゃ、とんだヤブヘビだ……

あまり熱心にすすめたために、こっちに疑惑の目が光ってきてしまった。

「いえ、全然。電話で話したことが一度あるきりですよ」

仕事のことでは何でも相談をかけてくる宇吉に対して、自分は絶大の信用があると過信したのだが、よく考えれば、たき子のこと

プライベートなこと、そこへ、くちばしを入れるのは行きすぎだし、疑いをかけられても無理はないと思った。
完全な失敗だった。

犬畜生！ コリー

「うまく行った。喜んでくれよ。大成功だ」
村中は翌日の夜、たき子の部屋で、ふんぞりかえっていた。

「そう、よかったわ。やっぱりパパは、あたしを愛してしてくれたのね」

たき子は喜んで酒を出して、もてなした。

「そうさ、当てられちゃったよ、ハハハ。パパは君に、プレゼントすると確約してくれたよ。君は大変な財産家になれたよ」

「で、いつ名義を変更してくれるの」

「うん、近々してくれるそうさ。僕も働いた甲斐があって、うれしいよ。そこまで、こぎつけるには僕も苦心したよ」

村中は、宇吉に対して言った事を手柄顔にしゃべった。

「最後にね、専務さんに、もしものことがあったら、どうします。遺言したって、必ず実行されるとは限りませんよ、と言ってやった

ら、しんみりして、全く君の言う通りだ。早速やってくれ給え。君に万事、委すよ、と言ったよ。何しろ僕は、このマンションの持主の代理人だからね。権利書も預かっているんだからね」

村中は馴れ馴れしく、たき子の腰に手を回した。グイと抱き締めると弾力のある手ごたえが快い反応を示してくる。

「あんたでなけりゃ、できないことなのね」

「そうさ。サア前祝いに乾杯と行こう」

二人はチャリンとグラスを合わせた。

「今夜は爺さん、もう来ないんだらう。泊まってるっていいだろうね」

「それ、何のこと？」

「何のこととは、ひどいなあ。金の方は、あとでもいいから、僕はまず君が欲しいよ」

「あら、それは約束が違うわ。すべてが完了した時のことよ」

「堅いこと、言うなよ。もう、できたも同じだよ。ね、いいだろ」

村中は、たき子の首を引き寄せてキスしようとした。

たき子の右手が、しなって、

ピチーン！

村中の頬が鳴った。

「おい！ 何するんだ。俺を怒らす気か」

「アッハハハ、怒ったの。ごめんなさいね」

「俺を怒らせたら、何もできなくなるぞ」

「アッハハハ。とっても、よく似てる」

「なにが？ 俺が誰に似てるんだ」

「コリーよ。フフフ」

「え、コリー？ 外人か」

「バカね。犬よ、犬のコリー。あたし、あんたを人間と思ってないもん。犬畜生だと思ってるのよ」

「いくらなんでも、そりゃ、ひどいな」

「アハハハ。ごめんなさいね。でも、ほんとに、そう思ってるのよ」

「ほんとに怒るぜ。ひとが一生懸命、働いて君を金持ちにしてやったのに、その好意を君は感じないのか。君こそ人間じゃないぜ」

「フフフ、そうやって吠えるところはコリーそっくりよ。あんたは、まともな時は人間だけど、発情すると犬になるのよ」

「冗談じゃない、ばかばかしい。よし、そんなに侮辱するなら、この話は、ぶっこわしてやる！」

「フフフ、いいわよ。こわせるものなら、こわしてごらん。サア、そう決まれば、お前は用なし犬だよ。お帰り」

「このマンションから叩き出してやる」

「うるさいね、まだ吠えてるのか。出てけ」

確かに村中の怒った顔は、口を、とんがらせて、長い顔がコリーに似ている。村中はじっと、たき子を見つめているうちに、またしても、やりそこなったと後悔した。

この女に高圧的に出ると、いつも失敗している。また、その轍を踏んでしまった。

「まあ、そう言っちゃあ何もかも、ぶちこわしだよ。僕も君が好きだし、だから一生懸命、助言して、ここまでもってきたんだからさ、僕の気持ちも察してくれよ。僕は君が欲しいんだ。どうしても欲しい！」

村中は上衣を脱いだ。

「何よ、どうしようっての。あたしに力づくで来ようっての。いいわよ。暴力には暴力でこたえてやるわ。あんた、あたしに暴力で勝てると思ってんの」

この女には、とても勝てそうもない。

たき子は、つと立ち上がると、服を脱ぎスリップもパンティも脱いで素っ裸になった。

「あたし、お風呂に入るのよ。どうする？」

向かって来るなら此処でレスリングやってもいいわよ。ぶちのめしてやるから。降参するなら、お前も裸になって、ついておいで。背

中ぐらいいは流させてあげるわ」

村中に向かつては羞恥心を全然、見せず、真正面を向いて堂々と立ちはだかられると、その見事な均斉のとれた肉体に圧倒された。

村中は輝くばかりの裸身を剥きつけられて激しい怒りと屈辱と野心がミックスした、居たたまれぬような焦燥を感じた。

たき子は振り向きもせず、バスルームへ姿を消した。

どうしても、あの女には敵わない——

いつも頭をおさえつけられているので一度は自分が上に立って征服してやりたい。今度は絶好のネタを掴んだと思ったのだが、イザとなると失敗した。もっとも自分は嘘をついているのだ。今度のことは成功どころか失敗だったのだ。それを成功した如く見せかけたが、たき子は、そんなにあまい女ではなかった。しかし、まるまる嘘ではない。橋本宇吉は行く行くは、たき子にこのマンションを与えると言ったのだから、いっそのこと、ほんとうの事を話してしまおうか。イヤ、それはまずい。それでは俺の働きがフイになる。

村中は結局、服を脱いで裸になると、浴室をノックしていた。

「お入り！」

村中が入ると浴室は女の匂いでムンムンしていた。バスから出て来た、たき子は

「そこへお坐り、コリーちゃん」

村中は、おとなしくタイルに坐った。

たき子は、いきなり足を上げて村中の肩を踏んだ。

「また降参したんだね。あたしの犬になると言うんだね」

「たき子さん、あなたには敵わないよ」

「あたしの名前を呼ぶんじゃない。御主人様とお言い。頭を下げろ！ 両手をついて」

もう村中は、たき子の前に完全に屈していた。顔の前にある女体から発する妖気のとりこになってしまった。言われた通りに両手を突き、頭を垂れた。

「頭が高いよ。もっと下げるんだ！」

たき子は肩へ乗せていた足で頭を踏みつけて、グイと下へ下げさせた。

「いいか。よく、お聞き。このマンションがあたしのものになることは何も、お前の力を借りなくても、あたしがパパに話せば簡単にあたしのものになるんだよ。ただ、少しでも早い方がいいし、管理の継続する時がチャンスだと思ったから、お前にも少しいまい汁を吸わせてやろうと思って、使ってやったんだ

よ。二十万円なんてお金をお前にやるのも、いままで多少なりとも手数をかけてきたからその義理でお前にやろうと思っただけのことだよ。それに何だい、恩着せがましいこと、言いやがって！」

たき子は、村中の頭を蹴とばした。

たき子としては軽く蹴ったつもりだが、癢せた村中の身体は隅にハネとばされて、ひっくり返った。

「痛ててッ！」

「フッフ、吹けばとぶような身体しやがってこのあたしに刃向かおうとするなんてチャラおかしいや」

たき子は追い討ちをかけるように、村中の前に迫った。転がっている村中の横顔へ足を乗せて、

「この野郎。少しあまい顔、見せれば、つけ上がりやがって。踏み潰してやる」

「カ、カンニンして下さい、御主人様」

「フッフ、妨害するなら、してごらん。二十万円、あたしは助かるんだから」

「妨害はしません。今後も協力します」

「協力？ あたしのために働かせて下さいとお願ひしな」

「御主人様のために働かせて下さい」

「よし、そういう風に下手に出るなら可愛がってあげるよ。犬は犬らしく、あたしに忠実に奉仕するんだよ」

たき子は、のせていた足を、どかして、ゆっくりと顔の上に跨がった。

「ホラ、コリーちゃん。お前の舌の芸当をやごらん」

上から男の口を、こじあける時の気持——その瞬間、たき子は、いつも背筋へ抜けるほどの快感が、ほとばしるのだった。

「あたしは約束は守るわよ。このマンションが、ほんとに近いうちに、あたしのものになったら、お前を犬から人間に昇格させてあげるわ。それまでは犬。分かったね。今夜は手つけを打ってやるだけ。いや、足つけかな」

たき子は、村中を見下ろしながら身体を、ゆすって笑った。

「大体、あたしほどの女に、こうして可愛がってもらえるなんて光栄に思わなくちゃいけないよ。たかがヘッポコ会社の課長風情にははなも、ひっかけてやらないんだよ。お前は昔、あたしがお前の会社にモデルに行った時お前は、あたしのことをモデル風情と言ったことを覚えているかい。あの時も、こういう風にしてやった。そしたら、お前は係長に出

世した。そうだろう？」

確かに、そうだ。あの時、毛を一本、飲んだことは、たき子も知らない。

「そのあと、お前は、あたしをパパに紹介した。そのお蔭で、お前の会社の融資が成功した。あの時も、お前をこういう風に、ホラ、こんな風に、してやったろう。そしたら、お前は課長に出世した。あたしにこんなになされるたびに、お前は出世するんだよ。その位、あたしの身体には、なにか幸運を呼ぶものがあるんだよ。だから今度も、いいことがあるよ。フッフ」

全く、その通りなのだ。この女に、ひどいめにあったあとは必ず、いいことがある。だから、これは俺にとって、ひとつの試練なのだ。この苦行に堪えることによって、幸福が、もたらされるのだ——

彼は自然と自ら、すすんで奉仕の精になっていた。

「ああ、膝小僧が痛くなっちゃった」

たき子はスツと立ち上がった。

「加減してやってるからだだよ。有難いと思ひな」

仁王立ちに立ちあがって、存分に、なぶってやった男の顔を見下ろした。 (続く)



カット・三鷹I・0

＜女囚刑務所体験記＞

じょ しゅう ちょう ばつ ぼう
女 囚 懲 罰 房

こ さか た み え
小 坂 多 美 枝

栄子の事

世の荒波に抗しきれずに、何かの法律違反をしてしまい、こうして、女囚刑務所へ入ってくる女たちは、もうそれだけで、社会の落伍者といってもよいのですが、そうかといって、こんな所へ落ちてくる女が、すべて悪人だというわけではありません。

罪を犯して、こんな檻の中へ捕われの身となるまでには、それはそれは、言うに言えない悲しい運命の破局が、彼女たちの身の上に起こっていたのです。女なるが故に、犯してしまったという罪を背負って、日の当たらぬ場所で、人知れず泣き暮している、弱い女も多いのです。

これから話します栄子という女も、悪人というのには程遠い、どちらかといえば、目先

のきかないくらい鈍な世間知らずのところがありました。

あばずれ達の前に引き出された、栄子の裸踊りは続いています。寝そべって眺めている房長の玉江は、

「ジャングル×××、唄が出ないが、お早いとこ、さえずりな」

と、大きな声で弥次ります。「ジャングル×××」とは、吹きだしたくなるような呼名ですが、懲罰房の新入りは、入房の新入りの挨拶の後で、身体を張って商売している者だけは許して貰えますが、それ以外の者は、仇名をつけられます。

大抵は下品で聞くにたえない様な仇名ばかりで、吹きだしたくなる様な文句を、よく考えたものだと思心させられるくらいです。上品な奥さんだった栄子が、あばずれ女から、そんな仇名をつけられて、どんなに口惜しく恥かしかった事でしょう。

あばずれ達が、そんな素人女囚を呼びつける時は、大抵、仇名で呼びますし、それにすぐ従わないと大変です。また、素人女囚が、後手錠の正座から解放されるのは、おトイレへ行く時と食事の時、それに反則の言いかけがつけられて、リンチを受ける時だけですが、おトイレへ行く時は普通なら立ち上がって、直立不動の姿勢で、するのです。

例えば、火付け（放火犯）の三十年増の房江の場合でしたら、

「×××つるつる、火付けのお房、×××××お願いします」

と、大声で云わされるのです。

ところが、栄子の上品で清楚な美しさに、激しい嫉妬の念を抱いている玉江は、栄子にだけは、おトイレ行きの挨拶にも、特別な姿勢を要求するのです。

皆の方に、お尻を向けて、両脚を大きく開き、上半身を倒して前かがみになり、開いた股の間から顔をのぞかせるという、所謂、股のぞきの恰好で、

「ジャングル×××の栄子。××××、お願いします」

と言わせるのです。これは後程、栄子が尿意に耐えきれなくなって、顔をゆでだこの様に真赤にして、そんな恰好で、おトイレ行きを乞うのを見ましたが、スカートは超ミニの状態ですし、ノーパンですから、あられもなく、見られたさまではありません。

さて、玉江に弥次られた栄子は、泣き乍ら踊っていた顔を真赤にして、

「それだけは、許して……」

と哀願するのを、絹子は手にしたスリッパで、栄子のムキ出しになったお尻を、何回も何回も、しばき上げるのです。悲鳴と絶叫の

後で、栄子は耐えきれず、

「恥かしいワ、口惜しいワ」

と泣きながら、みだらで下品な唄の数々を披露するのでした。

私 の 事

私が、この女囚刑務所へ捕われの身となつて送られてきましたのは、戦争が終わって日本の社会のしくみが、がらりと変わった、あの闇市の横行時代でした。

生活の必需品のすべてが、米でもメリケン粉でも、肉でも魚でも、石炭からローソクまでも、ヤミでないと手に入らない時代ですから、今から思うと、想像も出来ないくらい、暗くて、みじめな生活でした。

終戦を境として大きな時代の変遷があったのですから、社会的な今までの秩序が、がらりと変わってしまったのも無理ありません。

田舎の地主階級は転落して、従来の小作人が農地解放で勢力を得、また、大都市の多くは戦災にあつて、大きな工場や商店が没落してしまい、今迄いばっていた社長夫人が、今日は、見るかげもない裏長屋のおかみさんに落ちぶれ、要領のよい闇屋がのさばって、我が世の春を謳っている時代でした。

そんなわけで、従来の女囚刑務所へは、そんな社長夫人や、大商店の奥様が、ぶち込ま

れてくるような事は、殆どありませんでしたが、こんな激動期の混乱時代になりますと、そんな従前の上流社会の人達も、貧しさに耐えかねて、悪い事をするのでしよう。時々、送られて来ました。

こんな時に、彼女達が、かつて牛や馬のようにはアゴの先で召使っていた女。或は、かつての地主のお嬢さんとして、相手を軽べつして口もきかなかったような小作人の娘や女工達が、同じ房に古参の女囚として頑張っていますと、例外なしに酷いことになります。

また、その上に恋の恨みでも、からんできませんと、嫉妬心から、男性の刑務所では見られないような女性特有の残酷なリンチが、くりひろげられるのです。

房 江 の 事

「×××つるつる、火付けのお房」と、あばずれ達に呼ばれている房江は、シャバにいる時は、大衆食堂の女主人だったそうです。

ずっと後になって、一緒にムシヨ送りになり、自由に話が出来る様になってから、涙ながらに話してくれた身上話によりますと、大体、次のようなものでした。

戦争未亡人の彼女は、二人の子供を育てながら、戦後の混乱期のひとときを切りぬけ、ようやく女手一つで、卸売市場の近くに、大

衆食堂を開く迄になりました。やっと店を開いてみると、店の斜め向かいに、以前から商売をしている食堂があり、水商売上りのオカミが経営していました。

なにしろ狭い町のこととて、商売仇きとして、すぐ両家は事ある毎に、いがみあうことになってしまいました。

それが三月のある晩の事、突然、房江の店から火を出し、隣の家にも類焼して、二人もの怪我人を出したのです。苦心さんたんして築き上げた全財産の店を失って、呆然としている彼女に、追い討ちをかける様に、彼女は放火犯として逮捕されたのです。

商売仇きの店の従業員の女の子が、火の出る直前、房江が店を出るのを見たと言証したのですが、焼け跡の検証から放火による出火だという事が、はっきりしています。

残念な事に、その時刻の房江のアリバイが立証出来ず、目撃者の言を証拠に、放火致傷罪で送検されたのです。

私に話しているうち、房江は身体をふるわせて、千代子（商売仇きの店のおカミの名）が、やっさに違いない。店を焼いた上に放火の濡れ衣まで着せて恐ろしい悪女め。出所したら、どんな事があっても、殺してやる。と齒がみして、口惜しがっていました。

ところが、女はどこまでも残忍なもので、

いがみ合っている相手に、濡れ衣を着せるだけでは物足りず、とことんまで苛めないと気が済まないのか、反則もしない房江が、懲罰房に入れられたのも、千代子の差しがねだったらしいのです。

千代子が、どこかへ手を回して、そうさせたとの専らの噂で、事実、千代子は房長の玉江に、どうせいな差入れをして、「新入りの房江を可愛がってやってくれ」と頼み込んでいるのです。

ここで、可愛いがるということは、勿論、苛め抜いてくれとの事です。水商売上りである世の裏道に通じている千代子が考えたいた名案なのでしょう。差入れの薬がきいて、途端に、房江の待遇が変わりました。

今迄は、板の間に正座させられていたのが鉄格子の扉の入った所のコンクリートの土間へ正座させられる事になったのです。しかも両膝を九十度以上、開かされるのです。

さて、房内におトイレがありますが、監視役がついており、素人女囚が使用する時には見張っており、若し少しでも汚せば、忽ちリソチです。

ところが、この房江が、しくじりをしました。それには原因があるのです。あばずれ達は、おトイレの小の時は紙を使用しません。何故か、それは言えませんが、房江が常に、

お腹を悪くしている事から察して下さい。それは残酷なものです。

「×××つるつる、火付けのお房。×××××お願いします」

直立不動の姿勢で、顔を赤らめ乍ら、大声を張り上げる房江に、玉江は、

「今日からは、お前さんもジャングル×××と同じ様に挨拶は股のぞきでやって貰うよ」

つるつるの女性自身を、極度に恥じて、銭湯にすら行った事のない房江にとって、あばずれ達の目の前に、そんな姿を晒すのは、どんなに恥かしい事でしょう。

ももぞと、また定め的位置に戻って、正座したものの、そうそう、耐えられず

「ああ、もう出る出る。いかせて……」

と、たまらずに、断わりもなしにおトイレに、かけ寄ります。とたんに、鬼の様な絹子と洋子につかまえられます。

「大きな顔で、きまりを破るとは、なんと太いアマなんだらう。こいつは——」

怒鳴り乍ら、房江の顔を、二人がかりで拳を固めて殴りつけます。房江は後手錠にさされている身とて、防ぐすべもなく、只ヒューと悲鳴を挙げていますばかりです。

「許して、許して。言われた通りに致しますから、叩くだけは、かんにして……」

半ば泣き声で房江は許しを乞います。それ

でも、尚、笠にかかって殴りつける二人。

お岩の様な顔にされて、房江は耐えきれずに、オーンオーンと泣き乍ら、あばずれ達にお尻を向けて、股のぞきの恰好になります。絹子や洋子達は、手を打って、いかにも嬉しいといった風で、はやしたてます。

「つるつる×××。でっかい×××」

血の出る思いで許しを乞うたお房は、ドタドタと、おトイレにかけ寄って、入るのも、もどかしく用をすましましたが、あまり急いだため、遂に禁を犯して、便器のふちを汚してしまいました。

忽ち、監視役のお俊の罵声がとびます。

「どんなケツしてやがるんだ。定めの通り、ゼニをくわえるんだよ」

すぐさま、壁に立てかけてある食卓が、ひっくり返されると、房内の真中におかれ、その脚の一つの上のくぼみの所に、銅貨が一枚タテに立てられます。

絹子と洋子は、房江の襟がみを掴んで、「さ、ゼニをくわえるんだよ。どこでくわえるか、云わんでもわかってるよな。お前さんの大事な大事な、つるつる×××で、これをくわえるんだよ。早くしな」

革手錠を外され、全裸にされた房江は、最早や、言われる通りの事をする他は、ないことと、彼女の悪戦苦斗が始まります。

素人の彼女には見当もつかず、あれこれ、あられない恰好でやりはじめます。あばずれ達は、その度に、みだらな、からかいの言葉を投げかけて、はやし立て、ゲラゲラと笑いこぼしました。

その日は遂に駄目。次の日も、全身、汗びっしょりになりながら駄目。三日目に漸く、女性自身でくわえ上げたが、それで、このお仕置が終わりになったわけではありません。

全裸、四つ這いの姿勢で、銅貨をくわえたまま、静かに後ずさりして一周し、元の位置まで来て、漸く一巻の終わりで、やっと、お許しが出ます。

房江は緊張しながら、汗びっしょりで、四つ這いのまま、後ずさり始めました。

ところが、あと一米程の所で、この時、後手錠を外して貰って、お仕置の見物をしていた、強盗の見張りで、ほうり込まれたズベ公の芳子が、あばずれ達の欲心を買うため、チリ紙をコヨリによったのを持って、房江のうしろに回り、むき出しになっている、房江のお尻を、くすぐったのです。

突然の事に、びっくりして、ぴくんと身体をふるわせた拍子に、銅貨はボンと床の上に落ち、房江は、あまりの事に床に、つつ伏して身もだえして、よよと泣き出します。

☆

懲罰房に入られますと、差入れは認められますが、面会は禁止になります。但し房長だけは別扱いです。

玉江は人殺しをした様な凄惨いあばずれですが、暴力団の大きな組織の後立てがあり、しかるべき所へも、打つ手は打ってあるのでしよう。刑務所の中では、中々厚遇されているのです。

その玉江の所へ、例の千代子が面会に来ました。既に事実調べも終わって、求刑を待つばかりの玉江には、証拠いんめつの恐れもありませんので、面会立会いの看守は、気をきかせて離れます故、彼女は自由に話が出来るわけです。

玉江は千代子に、房内で房江を、どんな風にして可愛がっているかを、身振り手振りを混じえて面白おかしく話して聞かせます。

「へえー、あの房江が、つるつる。ええ話の種やわ。そいで仇名がつるつる×××、火付けのお房やって？ それは傑作やわ。あいつどんな顔して、挨拶しての。まあ、おトイレへ行く時にも、お尻丸出しの股のぞきの恰好で、そんな恥かしい事、言わせるの。面白いわね。一度、見てみたいわ」

千代子は興奮して喋りまわります。

——(おわり)——

懸賞入選体験小説

ミミクリーとイリンクス

カット・室井亜砂路

ミミクリーとイリンクス



その一

健一がアブノーマルな世界に入ったのは、いつ頃からだったろうか。

思春期の転校。内向的な性格が、ますますひどくなっている頃ではなかったらうか。いや、彼の意識の中には、決してアブノ-

する。ところが健一は、めったに風邪を、ひかなかった。そのことが、よけいに白いガゼのマスクに、異常なまでに心を奪われてしまったのである。

「あの——マスクありますか？ 大きなのが欲しいのですが」

そう言う時の健一のハートは、おどりがり、わくわくしているのが、つねであった。

時 田 憲 文

マルではないという自意識が、つねに存在していたようではあった。

人は風邪をひくと、よくマスクを

顔見知りのいない土地で彼がマスクをしていたとしても、誰も気に止めないだろう。こんな健一には、それ以前の数年間の「耳学」があり、いつまでも同じ地平に止まっていた。はいなかった。

「ハンカチ、ありますか？」

いつのまにか、男物の大判のハンカチを買うようになっていた。ハンカチをスカーフ代りに頭から被るのだった。

最初は密室で被ってカガミを見て満足していたのだが、直に町に出て人に見せなくなつたのだ。といっても、人前でスカーフを被る程の勇氣はなかった。そんな時、公衆電話ボックスが目にとまった。その頃の電話ボッ

クスは下半分が鉄製で、しゃがんでしまえば外から見えなくなるようになっていた。

『そうだ！ あそこなら！』

健一は直ちに実行に、うつした。

健一のポケットの中には、大判のハンカチの他に、どういうわけか小包用の紐が入っていた。およそ三メートル程の長さであった。

彼は周囲に人がいないのを確かめてから、電話ボックスに飛び込んだ。

受話器を取りあげ、また、すぐに降ろし、ポケットからハンカチを取り出し、二つ折りにして三角形を作って棚に置き、小包の紐を二重にして一、二度、しごいた。

それは、まったくの瞬間だった。

しゃかみこむや、小包の紐で、あごの下から頭のとっぺんまで、何重にもまわし、頭のとっぺんで結んだ。次に、棚に置いておいたこげちゃ色の大判のハンカチで頭を包み、あごの下で結んだ。

『ふう——どうかな』

弦きながら、電話ボックスから出た。

百メートル歩かないうちに、向こうから二人連れの女学生が来るのに出喰わした。

「よし、試してみよう」

健一は立ちはだかるようにしてとまった。

「ちょっと、おうかがいしますが、××に行くには、どう行ったら、よろしいのでしょうか？ 道に迷ってしまったらしくて……」

その場所から、かなり離れた所の地名を口に
にした。しかも、その声は紐のためか、うわ
ずり、まったく自分ながら恥ずかしかった。

女学生に自分の姿が、どのように映っているのか知るよしもなかったが、答えている声
が何となく弾んでいるのが、わかった。

「えーと、××にはねえ……あそこの角を曲がって、ずっと行くと……」

健一はそんな説明を聞いてはいなかった。

『普通のかっこうだったら、ひっかけられたのになあ……ちきしょうめ!』

なんとも割り切れない一瞬だった。

『こいつらに、いったい自分は、どう映ったのだろうか。男が、女性のような恰好をして……だが、こいつらの目に驚きの表情は見出せない。ということ、女性と見られているのだろうか。そんなばかな！』

健一は二人連れと別れてからは、振り返りもしないで歩いた。

『違う！ 違うのだ！ あんな瞳ではない、僕が望んでいるのは！』

満足すべき瞬間は、それからまもなくやってきた。

それは寒々とした冬のある日の事だった。午後五時頃、何かを求めて、日暮れの早い冬の夜のとばりがおりようとしている町中、といつても工場地域と住宅街が隣り合わせになつてゐるような所を歩いていた時、そんな場所で一軒の小さな洋品店を見つけたのだつた。

大きなマスクをした健一は、ふらっと中に入った。

四十才ぐらいの女店員一人だった。

「いらっしゃいませ、お寒うございますね」

「本当にネ」

「何を差しあげましょう?」

「スカーフが欲しいのですが」

「スカーフ？ 男物は、ちょっと置いておりません……女物でよろしかったら……」

「女物でも、いいです」

店員は直に、二、三枚、持って来た。

「この寒さですものネ。こちらでしたら、ち
ようど、よろしいかと思いますが」

そう言いながら、ピンクの大判スカーフを取り出し、健一に見せた。

「これでいいです。すみませんが、してもら

えますか」

「はい」

女店員は、スカーフを二つ折りにして健一の頭から被せ、あごの下で交差させ、首の後ろで軽く止めた。

「どうですか？ マフラーなんかより暖かいでしょう？」

「……」

健一の心の中に羞恥がこみ上げて来て、体中が、ほてって来た。

女店員の優しい言葉の裏に、人を軽蔑したような感じを受け取った。

『まあ、男のくせにスカーフなんかして、よくも恥ずかしくないもんだわ』

視線が、そう嘲っているように思われた。

×

×

R・カイヨワは『遊びと人間』の中で遊びというものを大別して四つに分けている。すなわち、『アゴーン』『アレア』『ミミクリ』『イリンクス』であるが、この中で私の注意をひくのは、物真似を意味する『ミミクリ』と、渦巻を意味する『イリンクス』に含まれるとしている遊びである。

変装したり仮装したりする遊びは『ミミクリ』と言う範疇に入り、子供の頃、手を拡

げて体全体を、ぐるぐる回し、空が、地面が波打つように上下左右に揺れ動き、吐きそうな気分と共に、頭から血がスーッと抜けるような、何となく甘酸っぱいような気持ちにさせてくれる遊びが『イリンクス』に入るのである。

ヨハン・ホイジンガが『遊びとはフィクションである』と言う時、おおよその意味において正しいのだが、ノンフィクションとなってしまうものもあるのではないか。

自己の根源的な行動が、『遊び』の世界だけにとどまらず、外へ外へと向かって行く、目に見えない力が存在しているのではないだろうか。

早口に言ってしまうなら、『性交』は男女の遊びにしかすぎない。なぜなら『遊び』の定義を完全に満たしているからだ。

健一の遊びは、その定義から、はみだし、『かまわん、遊びなんて幻想だ！ 自己の本能による行動のみが、すべてである』

とでも叫んでいるようにすら、思われるのではあるが――。

×

×

女店員の視線に満足した健一は、エスカレーターの一途を、たどったのである。

公園のトイレで遊ぶことが多くなった。

大きなガーゼのハンカチを口の中に入れ、マスクをした。次に小判のスカーフを被り、あごの下で結んだ。小包の紐を取り出し、頭の下まで結んだ。小包の紐を取り出し、頭の下まで何重にもまわし、ほほの辺で結び目を作り、今度は方向を変え、マスクの上から、さるぐつわのように、ぐるぐる巻きつけた。

別の紐を取り出し、額に鉢巻のように巻き、ほほを縦に割っている紐が、ずれないように交叉している所で結び目を作り、額の紐が、ずり落ちないように額の中央部で結び目を作って、そこから頭の下まで通って後ろに強く引っ張り、マスクの上から巻きつけてあった紐と連繫させて首の後ろで結んだ。

最後に両面テープを、さるぐつわのように巻きつけて別のマスクを押しつけ、大判のスカーフをかぶって、あごの下で結び、マユが隠れるぐらいに深く折り曲げ、目尻の辺でヘアピンを使って留めた。

以上が健一の最大芸術であった。

もしも健一が女性であるなら、外見上、マスクをしてスカーフを被った女にしかすぎない。決して、このような姿の女性が、この世に、いないわけではない。堂々と町中を歩け

るのだ。

だが男性では、そうは行かない。もし警察官にでも出喰わしたなら、職務質問は覚悟しなくてはならないだろう。そんな危険を冒してまで町中を歩きたいとは思わなかった。

いや、マスクとスカーフだけなら平気かもしれない。多少、他人の視線が、きついかもしれないけど。しかし、今の健一は違う。マスクとスカーフを取り除くと、小包の紐で、がんじがらめにされた顔が出てくる。

『このまま、ほどくのは、もったいないな。何か、ちょっぴり冒険を試してみたいな』

人の気配を気にしながら、公園の周囲を、そっと歩いてみた。

目にとまった電話ボックスに飛び込み、でたらめな番号を回した。

その時は、まったく人の気配など気にしなかった。

『後姿なんか、いくら見られたって平気さ』
受話器の向こうで「リーン、リーン」と鳴っているのが、かすかに聞こえてきた。

「はい、もしもし」

「ウー、ウー」

「どちら様でしょうか」

「ウー、ウー」

「もしもし、どちら様でしょうか……ねえ、変よ。ちょっと代わってみて」

そんな声が聞こえてきた。

「〇〇ですが」

「ウー、ウー」

健一は一生懸命に声を出そうとしているのだが「ウー、ウー」としか、出せない。これでは話せるわけではないので、いつも適当な所で切ってしまうのだ。

『さるぐつわって言うのは、このくらいにしなければならんだな』

健一には、いつか本で読んだ、その方法がおかしくてしうがなかった。

口にテープを張ったり、タオルで唇を割るようになりするのだが、まったくの形式的でしかないように思われた。

『だけど、これだけではあまり面白くない。

相手方の一方通行ではないか』

次には、ガーゼのハンカチを口の中に入れてマスクをしただけで、やってみた。

「まっまっ、つなかさのおたつでつか？」

（もしもし、田中さんのお宅ですか？）

「はあ？ 田中ですが……」

「そっらに、なかつらっん、ってなっでしょか」

（そちらに、中村君行ってないでしょうか）

「はあ、中村ではありませんよ、田中です」

「なつらっん、行ってなっでしょつか」

（中村君、行ってないでしょうか）

「はあ？ 言葉が、はっきり聞き取れないのですが」

「うっません」

（すみません）

こんな感じの会話になってしまっているのであった。舌がハンカチで圧迫されて動かせないから『ウ行』が『つ』でしか表わせなくなり、ア行、オ行などが、かなりきちんと表音されても所詮、会話にはならなかった。

その二

健一は、武蔵野を思わせる雑木林が近くにある都下の某大学に入った。

「ガサッ、ガサガサガサ」

健一は、日に一度、人が通るかどうかもわからないような小道を歩いていった。明後日から前朝試験が始まるという秋の夕方である。

両側にはササが生い繁り、三、四メートルもある名も知らぬ雑木が息づき、それらを被い隠すように十メートルもあると思われる大

木が繁っている。

小道から、だいぶそれた所に、一本の雑木をササや下草が隠すように繁り、しかも雑木の根元の周りには空間が出来ている場所があった。

健一はコートを脱ぎすて、小包の紐を二本取り出し、両足をそろえて雑木と向き合うようにして立った。首から上は、いつもの通りでマスクとスカーフで包まれていた。

つま先を、わずかに開いて足首を縛り、木に、きつく縛りつけ、ひざも大腿部も縛りつけて、ちょうど一本目の紐が、なくなった。

二本目は、先ず腋の下を通して上半身を縛り首、顔、頭と、順に縛りつけ、最後に左腕を雑木に、ぴったり、くっつけた形で縛った。

そこは、まったく人目を気にしないですむ場所であった。仮に他人が近づいて来たとしても、彼の耳は百数十メートル手前で聞きつけ、その場所に真っ直、来たとしても、楽に元の姿に戻る程の準備は、してあった。

健一は、どうやったら抜けられるか考えてみた。体をゆすってみたが、

「ザワワ、ザワワ」

という、小枝のこすれ合う音しか聞こえなかった。そして紐が、よけいに、きつく体に

喰い込み、痛みしか残らなかった。

『以前やったようなサルグツワで、両腕を縛られてしまったいたら、飢え死にになってしまうかもしれない』

体と雑木を結びつけてある紐に弛みが出来た。そのすき間に、唯一の自由な右腕を強引に押し込んだ。

その瞬間、健一の体中がエキサイトして来るのが感じられた。

心臓が高鳴り、顔がほてって来、下腹部がむずむずしてくるのだった。

まばたきと呼吸しか出来ず、顔さえ横に向けることが出来ない健一は、虫ピンで止められた、一匹の蝶のごとく、雑木に止められた一匹の人間でしかなかった。

そこにおいて、

『一定の時間、空間の限界内で完了し、緊張と喜びの感想、日常生活とは違うという意識を伴う自発的な行動、あるいは活動である』という遊びの定義が、健一を包み込むのである。

×

健一は、おもいきって店のドアを開けた。

×

「いらっしやいませ」

「いらっしやいませ——」

口々に云う数人の女性が目に映った。

「どうぞ」

一人の女性が、彼にスリッパをそろえて出してくれた。

健一が、初めて美容院という所に行ったのは、大学に入って二カ月程たった頃だったろうか。どの美容院に行こうかと、一時間も歩きまわった。健一に、いくばくかの『恥かしさ』があったからだ。

やっと決めた、その店は、商店街にあったが、通りから十メートル程、奥に入った所があり、そこへ通じる道は一メートル程しかなく、見られる危険が少ないように思われたからだ。

「どのようなさいますか」

すすめられた椅子に腰をおろした健一に、

そんな質問が發せられた。

「え——と、後の方だけカットしてもらえますか」

「カットだけで、およろしいですね」

「……」

美容師は健一の髪をいじりながら言った。

「お客様、かなり短いようですので、そろえる程度で、およろしいでしょうか」

「はい」

それは二十分程で終わってしまった。
言われてさし出された手鏡の使い方も知らず、肩越しに持ってゆき、正面の鏡に映る姿を見つめていた。

もし、この時

「男の人のカットは、あつかっておりませんのですが」

と言われれば、後の健一は、なかったかもしれない。部屋に帰ってから、

『痛んだ髪にはトリートメント!』

そんな見出しの一文が、新聞の婦人欄に、のっていたのを、健一は貪るように読んだ。

トリートメント剤を頭の地肌に、すり込み熱い蒸しタオルで頭髪を包み、ビニール製のバスキャップをかぶって、二、三十分たてば終わり。だが健一は、それだけではあきたらず、さらにタオルに包み、スカーフを被って首の後で、かたくとめ、夜の町に出かけるのだった。

真っ直、洋品店に足を運んだ。



イメージギャラリー 『二人の関係』 志羽利也

「いらっしゃいませ」

七時を、まわろうとしていた。店内には他に客もいず、健一と女店員だけだった。

「何にいたしましたようか?」

「ちよっと劇で使うもので……パンティーとブラジャーとスリッパと……」

「ええ——と、お客様は……男の方ですね。」

スカーフを被っておられたので、女性の方だとばかり思っていました」

「今、髪をホットカラーで巻いているところなんです」

すらすらと、でたらめが口をついて出た。

「何でしたでしょうか? パンティーと……」

どのような方がつけられるのでしょうか。太った方とか、やせた方とか……」

「わりと太った方です」

「それでは、このくらいのものが、よろしいでしょう」

そういって女店員は、健一に、いろいろ手渡して見せてくれた。健一はこの時、生まれて初めて女性の下着を手にしたのだった。

「女性の身につける物は、他にも、いろいろありますが、いかがいたしましたようか」

「そうですね、ひと通りそろえておきましようか……そんなにあるんですか?」

「ええ、ガードルとか、ストッキングとか、それに、胸の出ていない人は、パットなんかも必要ですしネ」

健一は、店員にまかせて一通り全部、買って、部屋に帰って来た。部屋に入るやカギをかけ、慄える手で包みを破り、真新しい下着類を取り出すと、何のけがれもない純白の下着を、さっそく身に着け始めた。

パットを入れたブラジャーをし、パンティーをはき、さらにガードルをはき、ストッキングを留め、それら全部を包むがごとくスリッパをかぶった。

鏡に映る姿に見とれた健一は、このままでは眠れそうになかった。

『こういう姿には、やはりピンクのネグリジエが最適だ!』

健一はズボンをはき、コートを上から、はおっただけの姿で、それを求めて、再び、さっきの店に足をむけるのだった。

その三

健一が自然に浣腸を好きになったとしても不思議ではなかった。

それは遠い昔の記憶だった。

いつ頃、どうして思い出したのか健一自身にもわからなかった。わかることは、決して想像ではないということだけであった。

浣腸を何回かしているうちに、ハッと思いついたような気もする。

『そういえば、こんなこともあったなあ』
連想的に思い出させてくれたのだ。

小雨がパラパラ降っていた。

健一と正樹の二人は、犬小屋を一まわり大きくした程度の自分達の小屋の中にいた。正樹というのは、健一より五つ年上の遊び友達だった。

その小屋というのは、レンガやカワラを内側に置き、外側に木切れを地面につきさし、ゴザやムシロをたてかけ、屋根の代りにトタン切れを載せたもので、小雨程度なら、なんともなかった。

不思議と、その小屋を作っている時の状況は思い出せなかった。

「もう一回、やってくれる?」

「またかい?」

正樹は、うさんくさそうに答えた。

健一を腹ばいにし、しりをつき出すようにさせ、パンツをずりおろし、下に敷いてあるわらを一本、引き抜き、

「いいかい、動くなよ」

そう言って、十センチ程、健一のアヌスにつきたて、おしりをピシッとたたいて、

「いっちょ、あがり」

と、パンツを、はかせるのだった。

「気持ちいい?」

「うん」

「なあ、今度は、おれにもやってくれよ」

正樹は健一に、たのむのだった。

ちっちゃな自分達だけの小屋を作っては、そんな遊びにふけていたのだった。子供同志だから別に恥かしい気持ちもなく、甘い快感だけが、いつまでも残っていたのだ。

それは遠い遠い思い出だった。仮に健一が忘れていたとしても彼の体が、アヌスが確実に記憶していることなのだ。

健一が、四つか五つ頃の思い出だった。

×

×

健一が初めて浣腸を手にしたのは美容院に初めて行った頃と、ほぼ同じだったろうか。

もし断われたら、いや「売り切れです」と言われたとしたら、あるいは近づかなかったかもしれない。

『浣腸を自分に売ってくれるだろうか? 二十才以上ですか。なんて尋ねられたら、どう

しょうか』

おっかなびっくりで薬屋に入ったのだ。

「浣腸ですか？ 子供用ですか、それとも大人用ですか？」

「大人用ください」

「はい、どうぞ」

まったく機械的であったが、後になって、それが、普通であることがわかった。決して店員は浣腸についての注意やゴタクは並べなかった。

「イチジク浣腸」名前だけは聞いていたが、初めて手にして、その名がピッタリなことに何となく、おかしさが込み上げて来た。

それを使って、初めて遊んだ時のことを、今でも思い出すのだった。

夏の昼下がり、町のほぼ中心にある本屋のトイレの中だった。

ビニールの風呂敷を拡げ、中央部にチリ紙を二十枚程、並べ、二つのイチジクを、またたくまに空にした。そしてチリ紙の部分が、ちょうどアヌスにくるように風呂敷の上に腰をおろし、ビニールテープで、オムツのように胴体から大腿部まで、きっちり留め、ぐちよぐちよにしても大丈夫なようにした。

ズボンをはき、外に出た健一には、便意の

恐ろしさが実感としてまだわからなかった。

一分も歩かぬうちに

「ググッ——、グググググッ」

という叫び声のような音が腹の辺から聞こえてきた。同時に第一回目の便意が襲った。

下腹に「グッ」と力を入れ、何とか我慢した。便意が遠のくと今度は顔から血の気がなくなるような気がして、他人に気付かれないようにと、足速になった。

それは打寄せる波のようであった。

何十秒かの間を置いて確実に健一を襲ったのだ。そのたびに「ブルッブルッ」と身震いをして、こらえたのである。

十分程、歩いて、やっと公園のトイレの近くまで来た。後二、三メートルという所で、お洩らしを、してしまったのだ。

「グシャ——」

排泄を助けるかのごとく、足が二股になつてしまい、立ち止まてしまった。そこからトイレの中まで、ヨチヨチ歩きで、やっとのこと、たどりついたのである。

初めてハンカチを頭から被って遊んでから二年間程は、こうしたものだったが、しだいに小道具が、めんどくさくなって来た。

『もっと簡単にできる遊びはないかな？』

健一は思いついた。

鼻の中に脱脂綿をつめ込み、マスクをし、スカーフを被って薬屋へ行った。

「浣腸ありますか？」

鼻にかかった声で言った。

「大人用ですね」

店員は一箱、取り出した。

「二つ、ください」

「一箱に二つ、入っておりますが」

「二箱、ください」

店員は、めんどくさそうに二箱、紙袋に入れて健一の前に、さし出した。

「あの、それから……内装式の生理用品ありますか」

「タンポンですね」

「内装式の……」

「はい、ございます」

店員の表情は、殆ど変わらなかった。

「ひょっとしたら、女性と違ってくれたのかなあ」

「レギュラーで、およろしいですね」

「はい」

健一には、何のことだかわからないで返事をした。

「やっと、アンネタンポンが、手に入ったの

だ』

うれしくてうれしくて、一目さんにアパートへ帰った。

『どうやって使うのかな』

説明書を読んでも、わからない。一本を取り出し、一時間程、説明書と、つきあわせて調べても、よくわからなかった。

説明書の中の、指サックをするというところや、中央の紐を少し回すというところが、どうしても理解できなかった。

めんどくさくなった健一は、ええいとばかりにコールドクリームも塗らずに、そのままアヌスで試してみた。

「あんずるよりうむがやすし」とは、このことなのだろうか。健一には、すぐわかった。『なんだ、ちっともむずかしいことじゃないじゃないか』

健一は、タンポンにゴム栓の役目を期待していたのだった。

三十グラムの浣腸二つとタンポン一本での実験にとりかかった。理屈からいくとタンポンが水分を吸い、膨張して栓の役目を果たし紐を引張らないかぎり、汚物が飛び出さないはずだった。

だが、結果は、あえない失敗に終わった。

期待をかけたタンポンは、十分に膨張するまでに、はげしい便意によって撥き出されるのが実情だった。

二度目に生理用品を買いに行った時、健一はアンネ以外にもあることを知った。

「タンパックスしかないんですが、これでおよろしいかしら」

「……」

「スーパーとレギュラーがありますが、どちらにしますか」

「スーパーの方を、お願いします」

健一は、まよわず言った。

アンネより、だいが、太くて長い。

『これなら、だいじょうぶだな』

アンネと、同じことをしてみたが、結果は同じだった。

『ちきしょう！ アヌスに栓なんか、できっこないじゃないか！ インチキ作家共、死んじまえ！』

悪態をついた。

コールドクリームを塗っていたので、抵抗はあまりなかったとはいえ、何回も何回も、タンポンでアヌスをいじめているうちに、二十年近く忘れていた快感が呼び起こされた。

酸素のたりない魚のように、アヌスが口を

パクパクしているように思えた。何回も繰返えしているうちに、急にアヌスが、かゆみだし、気が狂う程になることがあった。そんな時、細長い棒でアヌスを封じてやると、ぴたりと、かゆみがおさまるのであった。

「男の生理日」と健一は思っているのだが、毎月二十五、六、七日頃が、それであった。そんな日の前日から、タンパックスのスーパ―二本で、アヌスの気嫌をとっておくのだ。すると不思議に、かゆみとはちがう、うずくような快感が、つたわってきて、平隠無事にすぎるのだった。

「生理日」に外出した時など、タンポンが、きちんと定位置に納まっていればまだしも、ちよつとでも、ずれていると、痛くて歩けなくなってしまうことが、何度かあった。そういう時の一步一步は、まさに空中散歩のようなもので、地面の上を歩いているような気は全然しないのである。

『女の子に浣腸して、アヌスに栓をするとして、十センチ程の長さの、ゴムの棒を使つて、その上から貞操帯を嵌めてやるのが一番確実な方法なんだ。水分以外、絶体に出せないんだから』

——(この項終り)——



△セミ・フィクション・ショート・ストーリー▽

SM的 アバンチュール の 一夜

乃 美 対 造

神戸駅の日本生命ビルの前で、私がタクシーをひろったのは、もう、とくに午前0時を過ぎた頃だった。

風かおる五月の気候の良さは、暑くもなく寒くもなく、肌に快く触れる夜気も心なごむ思いがし、残業で疲れ果てた筈の五体も、なんとなく元気になってきて、のびのびとした気持ちに浸ることが出来た。

ホステス嬢と、もつれあうようにして千鳥足で行く年輩の男達の姿が街灯に浮かび上がっては消えていった。今頃、どこへ行くのか若い男女のカップルが、ぴったりと寄り添うようにして、歩道脇を歩いてゆく。

市電が廃止されて間もない軌道の上を、ふ

っ飛ばしてゆくタクシーの車窓を、元花街色街としてエトランゼの夢を満たした福原のネオンの灯が、かすめていった。

十八年ほど前までは、五百円でチョンの間のあわただしさながらも、色白でぽっちゃりとした関西美女がチョンガの無聊を慰めてくれた、この街も、今は味もそっけもなく、トルコ、浮世風呂にとって変わり、戦前派の私などには佗びしい限りであった。

ふと、同年輩らしい運転手の白髪まじりの後姿をみて、グチの一言も言ってみたくなり「近頃の若い者は可哀そうだね」で始まる、ありきたりの言葉をかけると、人の好さそうな運転手は心もちアクセルをゆるめて「近頃

の若い者は男も女も適当にやってまさあ」と車窓を指さしたので、ふと外を見れば、知らぬ間に車は東遊園地の前を走っており、ライトに照らされて、みるみるアップされてくる景色の中央に、若い男女が、ぴったりと抱きあってキッスしているのが、チラリと目にとび込んできて一瞬、消えていった。

憐れなのは、こっちだな——と苦笑して話題を転じ、昔、福原遊廓の可愛コちゃんに通いつめ、楚々たる風情で恥かしがる女のお手洗い風景まで拝ませてもらったと打ち明けて選ぶ自由もないままに当てがいぶちで高額のペイをとられる現今の、おっかなビックリの一戦では——と笑えば、またまた運転手は額で車外をシャクリ上げ「あそこに見えるマンションは同業者では悪名高い遊び場なんですよ。私は変な紹介をするのは大嫌いだ、貴方に、その気があるなら、外のタクシーで行ってごらん」と言っただけ、大きくハンドルを左に切ってスピードをあげた。

商売する気は、さらさらないらしいが口で言うほど、遊び嫌いでないのが本音のようで、運転手がそれから語った話の内容を要約してみると、次のようになる。

「このサービスの女性達は殆どが素人が教えこまれての、素人上がりの者達なので、少々高くはつきますが、そこはまた、それだけに当てがいぶちに飽きた粹人好みの、相当

変わった遊びも出来まるようですよ」

○
というわけで、スキ好みで奇巧の愛読者を以て任ずる私が経験した一夜というものは、次のようなものであった。

あられもない姿のまま、紹介された若い女は、多分、強制されているに違いない。自己紹介の口上で、名は三枝、二十一才、人妻。

四月二十七日の私鉄ストの際、送ってあげるとの甘言にのせられ、ここに連れこまれてから、現在で十四日間、飼育調教、仕込みは一通り終わり、マゾになりかけの一年生。好きな責めは、A感覚責めと、のたもうた。

六甲連山の一派である麻耶山の山裾は、急な勾配で末ひろがり、昼間なら、さしあたり、この高台のマンションから、お花鳥のように、赤、青、緑のモダンな屋根が見渡せるのだ。

今は真夜中、家並みは暗く、静まりかえっているが、そのかわり、遥か彼方の神戸港に不知火のように、大小さまざまな船が、常夜灯をチラチラ、まばたかせていた。

外の景色とは、うらはらに、目を転じた室内の光景はいえ、熱気をはらんでいた。

男物の枕を双臀の下に、深々と挿し込まれて、見るも豊かな水々しくて真白なお尻が、高く反転して、まるで産婦人科の手術台にのっかったような、あられもない姿を、青白い

螢光灯のもとに晒している。

そのまわりには、めいめいに熱い思いを抱いて覗き込む中年の男達が四人、じっと息をつめているのが、私にも痛いようにわかる。たっぷりと石鹼水を吸い込んだガラスの二

〇〇CCの浣腸器の嘴管がアヌスに触れると必死になって、それを避けようと臀を左右に振って悶え、嫌、嫌をするように、頬を染めて顔をのけぞらす、三枝の表情のなかには、すでにマゾの本質を象徴するかのよう、甘い媚態がのぞいているのを私は感じとった。

八つの目が、ほん一メートルの近さで、凝視しているなかで、三枝は一糸まとわぬ全裸の姿をさらしていた。

洋梨のような乳房に脂汗をうかべて、アヌスに侵入してくる太い嘴管を耐えていた。ぐっと頭の方に曲げられた二股が、ブルブルとケイレンしている。白桃のような双臀も、四人の男たちの興味と好奇心のかたまりのような目の前で、可憐な姿をさらしているのだ。石鹼液が、シンダーによって、ぐぐぐ、ぐ、と、三枝の体内に送り込まれる様子に、私の視線は釘づけにされていた。

「アア、アアア、アーッ」

初めて、三枝の口から悲鳴とも、吐息ともつかぬ甘い声が洩れた。

「じゃあ、お客さん、お好きなように、やって下せえ。ここに縄と便器がござえやす」

黙々と三枝に浣腸していた若い男は、私たち見物人に言葉をかけると身を引いた。

私たち四人は一瞬、お互いに顔を見合わせ、一寸尻込みしたが、直ぐに手分けして作業をはじめた。三枝の足首に縄を巻きつける者、お尻の下に便器を挿し込む者、浣腸器に新しい浣腸液を吸引する者。余った縄で、三枝の後手を縛る者もいた。

「あっしは、用がござえますので、一寸、ここを出さして貰えますが、どうか、存分に、お遊びなすって。一時間ほどしやしたら、また、帰ってめえりやすから……」

若い男は、ドアを開けて出ていった。客の一人は、あわてて、錠を下ろす。

待ちきれなかったとばかり、浣腸器のポンプを握っていた客が、嘴管をアヌスへ近づける。指先がふるえて、なかなか目標が定まらないのを、他の一人が手を添えて、ズブリ。

「ア、アアア、アーア」

顔をのけぞらしていた三枝が呻く。その顎に手をかけてキッスしようとする客。なにしろ、一人当り大枚二万円也のプレイ料を払っているのだから、楽しむだけ楽しまなけりや損だという気持がある。

二本目を一気に注入し終わると、

「ヒイー、イー、イー」

三枝の口から、奥歯を噛みしめたような悲鳴が洩れる。可愛い菊花の蠕動が一入、は

げしくなってきたようだ。

「便器、便器、早く」

叫んだと同時に、プシュツ、空気が抜けたような音がしたかと思うと、四人の見ている前で、耐えきれなくなった三枝は、排泄しはじめた。

ころりと丸い糞塊がころがったあとは、噴出するように、激しい黄流が溢れて、便器の中央に堆高く盛り上がった。

すべてを見られてしまった三枝は、顔を垂れて、目から涙を一すじ二すじ流している。

便器を始末してからは、両足首を縛った紐を、二人の客で左右に引っばいておいて、バィブ責めをやった。

一番恥かしい浣腸と排泄の模様を、すっかり見られてしまった三枝は、四人から、かわるがわる施されたバィブ責めには、恥も外聞も忘れて、思いつき悶え泣いた。

結局、浣腸で、きれいになった三枝のアヌスを使ってA交をやったのが一人。バィブ責めのあとV交をやったのが二人。私は最後まで、見る役に回ってしまった。

○

マンションを訪れた際の合言葉まで教えて貰ったのだが、かなしいかな、数字に迫いまくられるサラリーマンの経理課生活の多忙さにまぎれて、再び行く機会はなかった。

それから暫くして、ふと、目にした地方新

聞の小さな記事。ああ、なんたること、あのマンションの名が、活字になって、出ているではないか。

○

〔森田組、組長ら管理売春で逮捕〕

暴力団による強制ワイセツ、並びに売春事件を調べていたK署は、六月五日までに、暴力団組長ら四人を売春防止法違反(場所提供管理売春、強制ワイセツ、暴行)の疑いで逮捕した。捕えられたのは神戸市生田区山手通×××、〇〇マンション、進川組系森田組、組長森田九鬼(六二)同山手通×××、同組舎弟大前田三郎次(四三)同区生田町一の×××、吉村助二(二四)と吉村の内妻曾根綾子(二二)の四人。

調査によると、森田は四十五年一月から、捕まるまでの一年半の間に、山手通の〇〇マンションを借りて、いろいろな手段で集めた良家の子女、六乃至八人をおどし、自宅から通わせたり、大前田ら三人に客引きさせて客をつけたたり、いかかわしいショーをさせていた疑い。森田らは正常な方法では、もうけの少ないのを知り、サドマゾ流行に目をつけSMプレイと称する卑猥な演出を売りものにして、女を縛りあげ全裸にして鞭打つほか、さまざまな羞恥責めを施し、果ては客に浣腸させるなど、言語道断の行為をさせ、月約六百万円、一年間余りで七千万円の荒かせぎを

して組の資金源にしていた。

調べでは、組の帳簿や強迫のために使用された破廉恥な写真などから、前記以外に、多くの良家の子女や、結婚間もない若妻が強迫されているものと推定し、森田組の背後関係や余罪を追究するため、極秘のうちに調査を進めている。

○

私の見た三枝という若妻は、ストライキの日に、気易く乗せてもらった車が、地獄送りの棺桶になったわけだが、先日新聞の社会面に、自動車を利用して数十人の女性に、いたずらをしたという男が捕えられたことを、報じていた。

見知らぬ男に、車に乗せてやると云われて単純に乗り込む女性の多いことを、巧みに悪用した犯罪だと思う。

SMが暴力団の資金源や犯罪に利用されるのは、マニアとしては極めて遺憾であるが、サドマゾ・マニアには甘い誘惑だ。

麻薬入りの秘薬まで、使ったということだが、それにしても、僅か三カ月あまりで、心から積極的に、そのマンションに通いはじめる良家の子女も多かったとは、女性のマゾ性の謎といってもよいだろう。

良家の若妻が、全裸で縛られて浣腸されるのを、この目で、じかに眺めた私は、この夢よ再びの気持を、今でも抱いている。

「耽奇房」我楽多控 〈第六回〉

海外SMポルノ漫考

辻村 隆



同好者の層が広がってきて、信頼出来る同好の仲間に、海外にかなりの出張所や支社を持つ商社の、部長さんクラスが加わった。

出不精の私にとっては、誠に都合のいい人で、せっせと海外のSMフォトや雑誌類を提供してくれて、いながらにして世界中のSM情報が分かるようになったのだから有難い。

SM専門の雑誌のハシリは、アメリカがポルノ解禁と共に「チェリーブロッサム」というのを出した。大半が、日本で手に入れたSMフォトのナマの奴の紹介で、日本の活字などを、意味もなく羅列して、東洋趣味を煽り立て、私のカメラ・ハント女性なども、勝手に借用されていて、私にとっては、一生一代の悔恨であるが、その出先が、どこのだいであることは分かってはいても、モノがモノだけに切齒扼腕するだけで、どうしようもな

かった。奇クにも投稿していて、私のカメラ・ハントにも、しばしば登場したMという奴であるが、悪い奴はどこ迄も悪く、同好仲間唯一の、煮え湯をのまされた、SM仲間の風上にもおけぬ奴である。坊主憎けりや袈裟までたたぐいで、その当時、Mと交友のある連中にまで怒りをブチまけ、敬遠したぐらいであった。だから「チェリーブロッサム」については、余り深く言及したくはない。折角、納まりかかった、腹立ちの虫が又ぞろ眼をさますからである。

ボブ・セントビンセント社から出した「チェリーブロッサム」に続いて、その亜流で、海賊版的な「ドミネーターズ」「ジャンハイ」などが登場するが、これにもカメラ・ハント女性が、時々登場する。いずれは「チェリーブロッサム」と出所は一緒なのだろう。

SM同好の紹介誌には「EXOTIQUE」というのがあって、これはSMフォトのあとに、読者通信式に、自己のフォトをのせて、SM同好者を求めている。いわば同好者仲間の機関誌的なものである。

解禁の普及と共に、SM誌もそろそろ出廻り始め、「FORTY PLUS」「BUS-

TY」「BUTTOCKS」「WHIP」「ROD」「CONTRASTS」「UNIQUE WORLD」等の答打ち、尻叩き、ワグナ責めをテーマにしたSMポルノ誌がどんどん出版され、漫画や動画ブームは、アメリカでも同様らしく、サ

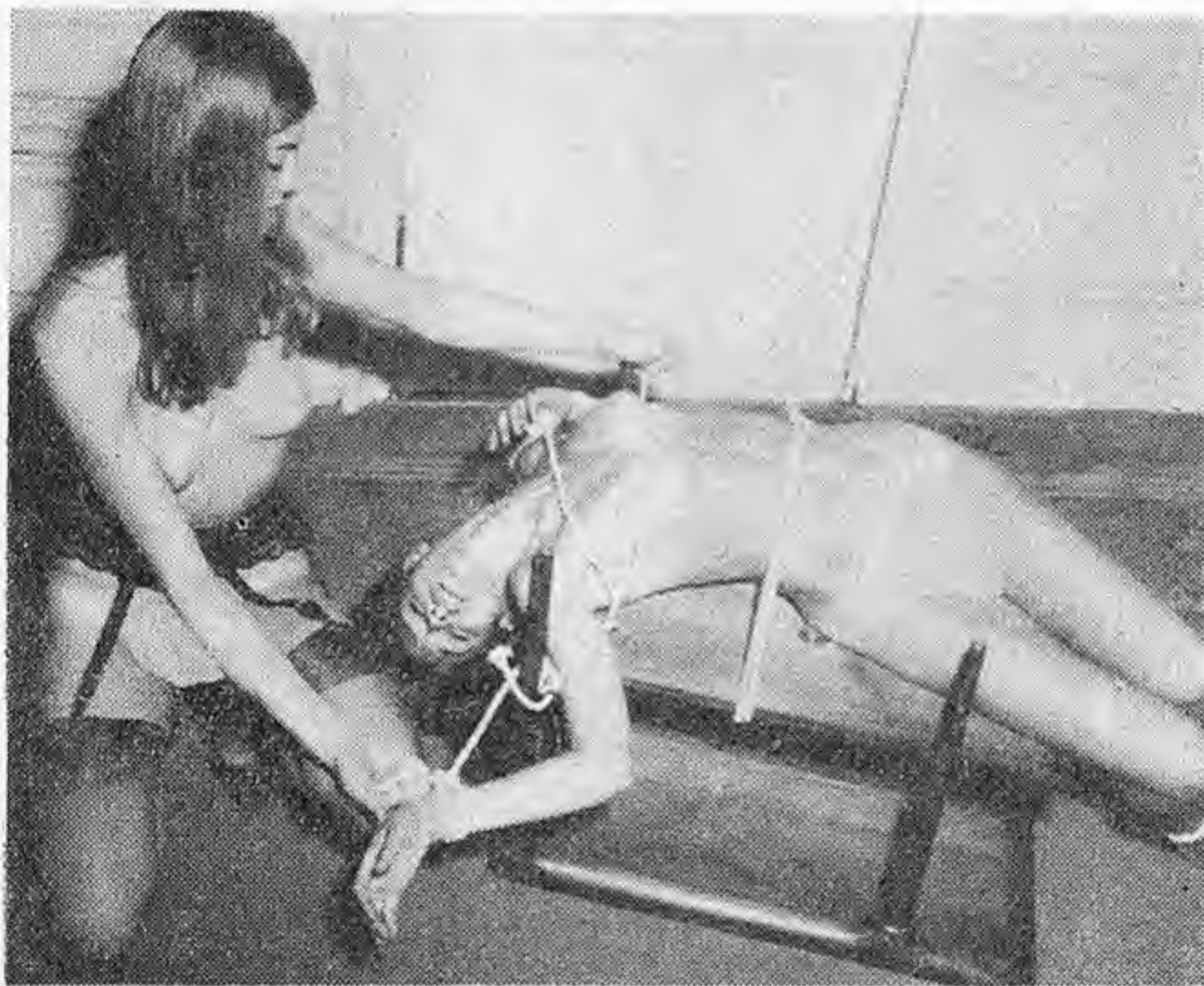
ジステイックな漫画雑誌「SOME ONE」や「REVENGE of the WANTONS」というような派手な表紙のSM漫画誌が、店頭を賑わし始めたのであった。

最近発刊の「BIZARRE LOVERS」という

SMポルノ雑誌で、私はその見出しの中に「S & M IN COMICS」と銘打ってスーパーマン式の漫画のヒロインが、緊縛されているのを各種掲載してあるのを見たが、正直いって、この漫画は、いただけの程のシロモノではない。日本の動画や漫画週刊誌の方が、遥かに強烈な緊縛漫画を描いているからである。興味を惹いたのは、S & M イン・コミックスというタイトルであった。

SMという語源は、奇クに発祥し、これは紛れもなく、サドマゾを省略した日本式の省略イニシャルの筈である。それが、今やアメリカのSMポルノ誌に、堂々と逆輸入されて使われるようになったのだから、苦笑と共に、痛快に感じざるを得なかった。

謂わば、SMという言葉は、もはや日本だけで通用するものではなく、アメリカ始め、世界中で通用しそうな気配で、



これが奇クの造語であるとすれば奇クのSMに対する貢献度は並々ならぬものがあるのでは、なからうか。

最近のアメリカでは、大判の週刊誌型ではなく、小型の雑誌、単行本型の読物的なSM誌が、相当発刊され出している。

「セックス・サディズム・アンド・ソサイティ、著ジョセフ・エデン」は、全篇SMの初歩的な教科書本で、形態はもっともらしく、SMについて説明しているが、目的はいう迄もなく挿入のフォトにある。ここにも、かなり日本の画や写真が挿入されていて、奇クの読者通信の方の、私も知っている夫婦のフォトが、奇クから無断で転載されてあった。

「アナルセックス・アクト、著アーノルド・フリードマン」というのは、SMには関係ないようであるが、全篇これ、第三の性といわれるアナル一遍倒で、これは私の如く、最近殊にアナルに対して関心の強い者にとっては変哲もないSMポルノ誌より、遥かに愉しく



くなつてやめてしまった。

アメリカでは、携帯に便利なのかこの小型雑誌の方が、近頃、特に氾濫の傾向にあって、面白いことに、各誌の値段が、まるで協定のように一律で、四ドル七五セントである。

最新刊「SEXUAL APPETITES」も殆どが、ポルノフォトであるが、この誌は珍しくも、カラーフォトで斑紐で両手、両足首を縛られて繋がれた女性が、背向上位態位で、男性の上に仰向けに乗って撮っていた。題して、サドマゾチズムのフォームだそうである。左に掲載しておくから、英語に強い方は、訳されるのも一興であろう。サドマゾチズムなんて熟語は、私も始めておめにかかったから、特に紹介します。

(Mild forms of sadomasochism-such as the bondage illustrated here- are still considered deviant according to our written code of sexual behavior)

こうした、多数のSM誌に目を通してみてつくづく思うのは、アメリカのSMが、如何にも幼稚で、大味なことである。

見様見真似で、縄を使って、縛ってはいいるが、とても緊縛といえるシロモノではない。緊縛めかして、女体一杯に縄をくまなく巻きつけたりしても、それは巻きつけているのであって、緊縛ではない。（執れ発表の折もあらう）

元来、外国人は手錠、鎖、拘束帯などを使うのが多く、縄は少ない方である。

縄を使っても、手首、足首だけを縛ってあるのが精一杯のようで、日本の緊縛の如く女体を縦横無尽に緊縛し、緊縛美に陶醉するということは少ないようである。

SMの、こと緊縛に関する限り、世界中でどこよりも日本は複雑、微妙、且、流麗である。これは既に浮世絵の昔より、又伊藤晴雨老によって大成された責め絵などによって証明されるが、今や海外では、晴雨描く責め絵が、かなり転写されて、古典的にすらなっている状態である。

ことSMフォトに関する限

り、海外のSMポルノだと、眼の色変えて捗り、海外のSMポルノだと、眼の色変えて捗りする必要はないと断言出来る。いやそれも海外SMポルノを存分に見尽したから、そんなこといえるのだらうと仰有られたらそれまでであるが、粋を凝らした庖丁捌きの日本料理と、外国のスーパーで売られている量産のパッケージした冷凍食品とぐらいの違いはありそうである。

くだんのミスター部長さんが、オハイオ州のクリーブランドに商用を兼ねて、SM探訪に出掛けた一席――。

SMポルノ誌を買い捗る部長さんが、SM好きと知られるのは当然で、クリーブランドに別荘のある貿易商社のJ・B氏。それでは一タ、レズのSMをお見せしようということに相成った。

蛇の道はヘビで、フレンドシップ精神を発揮して、サパーのあとに、二人でブラリと街へ出る。わざとタクシーを拾って、走って、ついたところは一軒の郊外の家。

既に連絡がついていたのか、脂肪肥りのオバサンが出迎えにきて一室へと案内してくれる。部長さん、バッグにポラロイドカメラを忍ばせていったことはいうまでもない。

あわよくば、レズのSMの実態をパチリとものにして、私にも見せてやろうとの、嬉しい心づもりであった。

待つ間もなく、年の頃はハタチ



前後の、全髪の可愛い子ちゃんと、ヘヤーがチャコールグレーで、よく陽に灼けた小柄な娘の二人が、部屋に入ってくる。

二人ともブルジョーズに派手な柄のスポートシャツといったラフなスタイルである。

J・B氏、たどたどしい日本語で、二人の娘は、この街の、レストランのウェイトレスと、信用協会のOLだと彼に告げた。金髪娘がOLで、チャコールグレーがウェイトレスで、いうなれば、これはSMショウではなくシロウト娘のレズ的な関係のSMのプレイであると説明するのであった。

Sが金髪娘のジェニファ、Mがチャコールグレーのエリノアで、J・B氏は、彼女達に月々、月極めの小遣いをやって、時折こうした場所で、若い娘達のSM的な戯れや、愛情を交し合うレスビアンの実態をみては、六十才のインポの欲望を満足させていたらしかった。

娘達も、割り切っているようで、安全な傍

観者がそこに存在するというだけで、娘達のサラリーの半分ぐらいのギャラを戴けるのだから、悪くないサイドビジネスらしかった。

J・B氏は彼女達に部長さんを紹介する。ジャパンと聞いて、ちょっと奇異の眼を向けたが、別段悪びれる風もない。部長さんが、みるからに紳士然だったからでもあるうか。娘達は、いさぎよくジーパンとシャツを脱ぐ。ノーブラで、薄いパンティ一枚も、あっさり、とってしまふ。

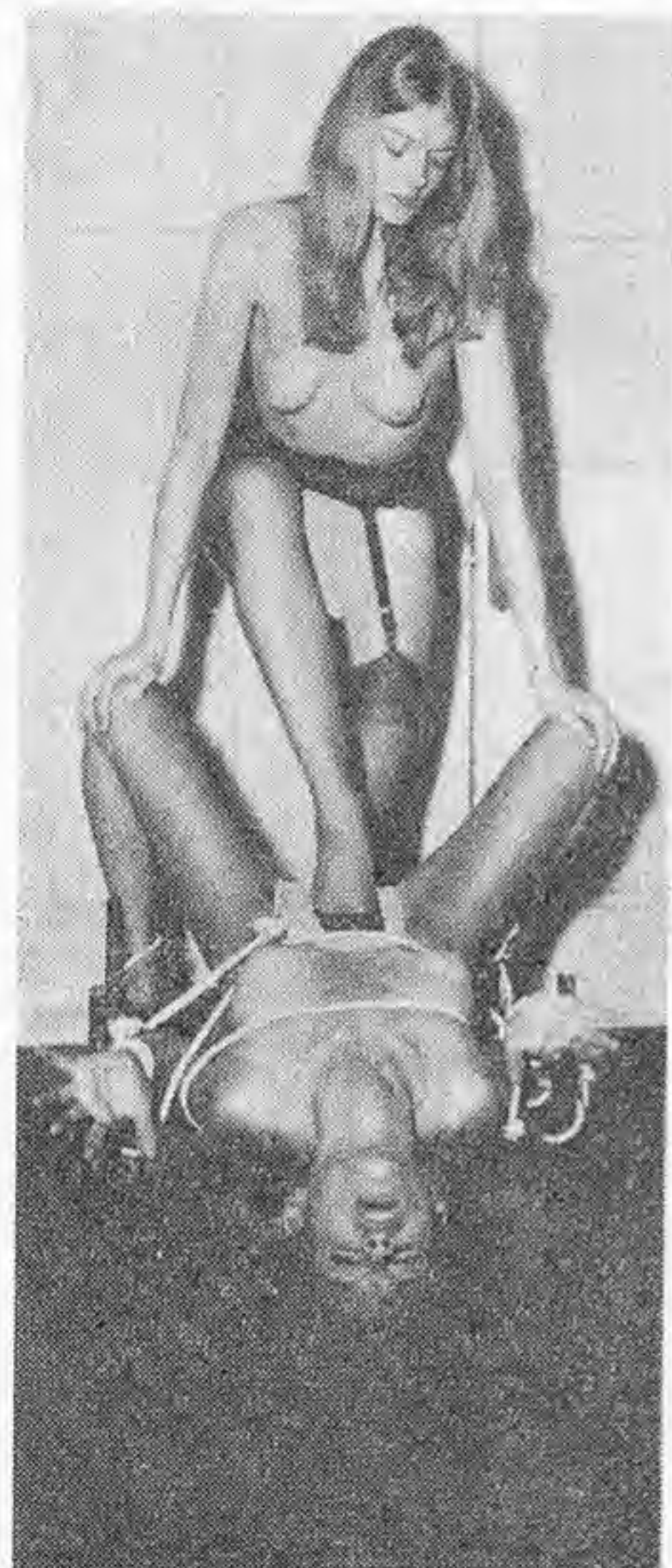
金髪のジェニファは、靴を履いたままで、靴下とガーターをつけている。アメリカや西欧では、ヌードといっても、ガーターやストッキングをつけている場合が多い。しかし

チャコールグレーのエリノアは、ジェニファの手で、珍しく全裸に剥がれてしまった。

奇妙でも何でもないが、娘達のむき出しになったヘアーは、頭髪の色に比例していた。唯、ジェニファは、金髪に染めているらしく、ヘアーはブラウンであったが、エリノアはチャコールグレーで、何とはなし東洋的であった。

ビキニのブラジャーとパンティのあとだけが、くっきりと白く、全身が、こんがり灼けて、細見の女体は、如何にも被虐的である。部長さん、ここで思わずツバをのみ込み、ぐいと体を乗り出したというが、当然――。

ジェニファは、セミダブルの、スイートベ



ッドの傍の、サイドテーブルを引っ繰り返すと、手馴れた手付で、エリノアを、その上に縛りつけてゆく。手馴れてはいても、その縛り方たるや、いかにもお義理めいていて、一寸もがけば、すぐほどこそうでありスッポリとはずれてしまいそうな、緊縛とはおよそ縁の遠い、縛りともいえぬも

のであった。

そんな縛り方でも、縄を女体に纏いつけることによって雰囲気が出され、当の可愛い子ちゃん二人は真剣で、既にエリノアは、悲鳴や嬌声をあげている。

部長さん曰くに（どうも、ピンクスターまがいの、つくり声のように思えましたわ」

金髪のジェニファは、惜しげもなく全身を曝し、羞らう風もなく

堂々と、エリノアを、逆さにした机に縛りつけて虐めてみせてくれる。（これとても、何となく演出くさい匂いがするんですなあ」と部長さんは仰有る。

ともあれ、娘達は、そこにトグロを巻く、好色紳士二人の眼を愉しませるために、精一杯努力していることは間違いない。SMの真随を知らなくてもSMポルノ誌の眼学問や、耳年増で、いっば

しSMプレイをしているつもり、真剣な娘達の躍動が愉しかったと、部長さんは述懐していた。

J・B氏に、カメラを撮っていいかと諒解を求めると、にっこり笑って、指で輪をつかって、OKのサインを送ってくれる。

彼は、ポラロイドカメラをとり出して、スタンバイにかかった時、チラリとジェニファ

が、彼に視線を送ったが、二、三度うなずくと、拒むどころか、SMプレイのポーズをつくってくれて、大いに助かったと仰有るのであった。

カメラにシンクロナイズされた小型のストロボは、カメラに組み込まれていて、シャッターを押すと、同時発光する仕掛けになっている。メカニクに出来ていて、殆ど取り損

いは、ないらしい。

エリノアの首を縄で締めてみたり、ハイヒールで踏みつけて、ぐりぐりと動かし、高い踵が、時ならぬ絶叫をあげさせたり、髪を掴んで、机ごと引摺り廻したりして、とも角も、金髪のジェニファは大活躍の、レスピアンレスピアンのSMプレイをみせてくれる。

欣喜雀躍の部長さん。撮っては引きはがして、すぐさま成果を眼で確かめては、しばしば、このプレイに熱中したことが、彼の言葉から、ありありと窺えるのであった。

この二人、外人には、つき



ものの鞭は使わなかったらしい。アチラさんの S M ショウなどでは、鞭打ちは殆ど例外なく登場するが、こうしたシロウト娘の、もともとレスビアンの人には、そんな大仰なものには必要らなかった。せいぜい時には使っても、髪梳きブラシか、なめし革の靴べらかガウンの紐程度だと、J・B氏は註釈してくれたそうだ。

おしりや太腿を平手でパシパシ叩いたり、乳房や、オーラルインターコースで、苦痛にならない程度に咬んだりすることはあるという。虐められているという感覚だけで、エリノアは充分にエキサイトし、鼻を鳴らして愛悦の呻きを洩らすというのであった。

S M プレイが一段落したところで、ジェニファとエリノアはベッドに向かい、ここで相互のオーラル・インターコースが始まる。シックスティナインの女性版というところか。快楽のハーモニーがぐもって互いの唇から洩れ、巧みな舌端が、お互いを恍惚の途へと辿らせてゆくようであった。

部長さんは、その時、久し振りにエレクトを自分に感じたかと仰有っていた。

S M プレイ、というより、S M めいた戯れは、むしろ、娘達のハートをエキサイトさせ

る前戯のようなもので、レスビアンの本命はここにあったらしかった。

娘達の瞳は、刺激の欲びにうるみ、陶酔の中で、互いを求めて、シックスティナインで果てていった。

(これは彼女達の、ある一つのフォームに過ぎません。その日、その日の刺激度の多寡によつて、あるいは、感情の昂まりの高低によつて、彼女達は、私の眼前で、あらゆるレスビアンの昂まりの過程を、みせてくれます。アナルも、情感の昂揚の一つのポイントでありますし、性感地帯は、女体のかなりの部分に存在しているのです。彼女達は興が乗るとしばらくの休憩のあと、再び、レスビアンの情熱的な行動に移り、時には器具などを使用して幾度となく、愛情を交し合つて、倦むところを知らず、私の存在を忘れて、肉体を接触させ続けるのです。改めて申しますが、今日のこのフォームは、その一つに過ぎないのです)

J・B氏の説明を、直訳的にいうと、こういう意味だと部長さんは私に語ってくれた。余りうまく撮れてもない、ポラロイドフォトだが、よかったら奇巧の諸賢にどうぞと仰有るので、拝借したのが、掲載のフォトである。

る。

毛色が変わっているというだけで、今日の本では、もっと凄いレスビアンの S M プレイのフォトが、S M 各誌に掲載されている。この程度の S M フォトなら、ごく初歩的だと思ふが、そんなことをいうと、わざわざ提供してくれた部長さんに申し訳がない。

レスビアンのシックスティナインのフォトが数葉あったが、これはもう純粋のポルノ。ここでは割愛します。

× × ×

もう一つ、部長さんの土産話――。

カリフォルニア州のサンディエゴは、今やアメリカポルノの本場の感を呈しているが、このサンディエゴの街のナイトクラブで、彼は若い混血のシンガーをハントした。

百ダラーで、S M プレイの、一夜の相手をしてくれるということを聞き込んだからであるが、彼の関心をそそったのは、踊るシンガー、ルイズ・ジョーダンが、たぐい稀な柔軟な体の持主で、しかもブレスト(乳房)が、さながら特大の豚マンを二つくっつけたように、でっかくて、この小山の如きブレストの谷間に挟みこまれてしごかれたら、いかな粹人もダウンするという話であった。強烈なア

クロバットを演じつつ、跨倉から顔を覗かせて、ハリのある声で、吸り泣くように唄うルイズ・ジョーダンに、きくものは酔い痴れてしまう。

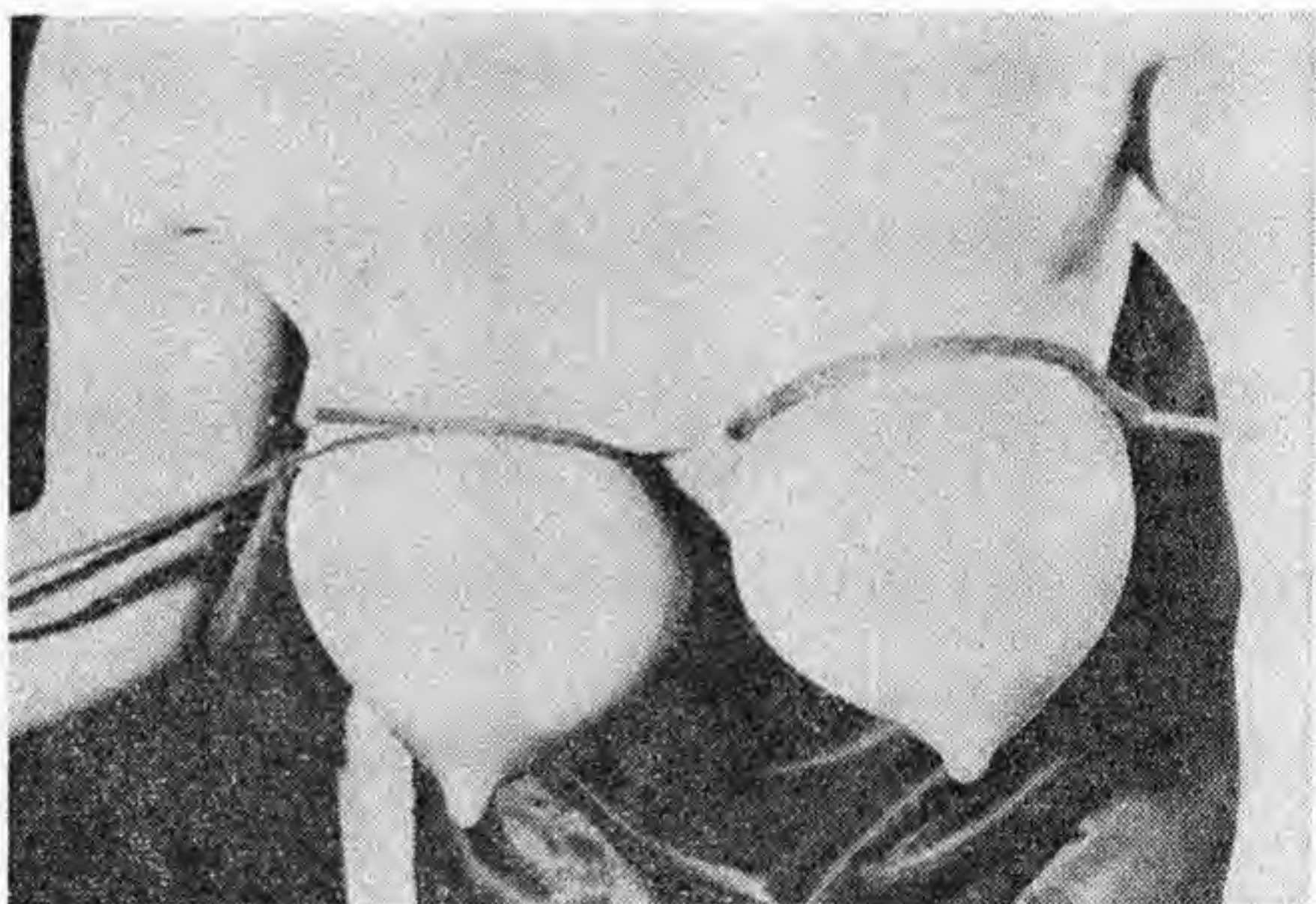
ボーイにメッセージして、部長さんは、くだんのルイズと、ホテルで二人きりの時間を持つ機会が訪れた。彼女は日本語は全然、分からない。ジャパンだと告げると、ナイスだと彼女は叫んだ。ウキヨ絵みた。ビッグだから嬉しいと、羞恥ゼロのルイズは、ジロジロと、部長さんの跨間に視線を送るのに、大いに間誤つき慌てる。

噂によれば、君はかなりのマゾヒストだそうだから、虐めさせてほしいと、部長さんが口説くと、あっさりOKして、彼の耳許で、アクロバットのフォームでのファックもOKだと囁いて、チュッと彼の頬にキスをした。

報酬次第で、アメリカの混血娘は、はっきりと割り切っているのが爽快だと、部長さんは鼻下を長くして語るのだった。

ルイズのジャンボなブレストを撮らせてくれと頼んだら、OKと、上半身を脱いで黒いドレスを腰まで引き下げる。

ブレストの根元を、ポケットからとり出した紐で締め上げたら、まるで乳房だけが別の



イキモノのようにブルンとはり切って、ムキたての巨大な玉葱が二個、肉体にブラ下がついているみたいで、余りの凄さにビクッリ。

吸いついたら、ルイズは忽ち、ええ声を立てよったと、彼はヤニ下がるのであった。

ブレストを縛った紐を背中中で結び合わせてその俤にして、いよいよアクロバットの開始である。六十キロ近いルイズの真白い巨大な裸身に比して、運動神経が極端に発達しているのか、ウエストは、ぐっとくびれて、細くせばまり、それだけに、双臂が尚更、巨大に盛り上がり、プリリンと出ツ尻で、そり返っている。

両手を伸ばして、ルイズは苦もなく背後にそってゆくと、フロアに両手をつく。両脚を開いてゆく。見る者を意識してのこの開股ポーズは、正しく男性遍歴の逞しさを物語っていた。

ルイズは徐々に、両手で自分の両脚を握り股の間からニュッと顔を出し、両脚をすばめて、顔を跨の間に挟み込んでゆく。

部長は、顔の挟まった両脚の、足首を大急ぎで紐で結え、両脚を握っている両手を、脚の前へ出させて揃えて縛った。

背骨が完全に逆に彎曲して、ポリュームのある女体が、異様なフォームで、肉の円をつくっている。こんな強烈なポーズで、ルイズは艶に笑っていたというのだから恐れいる以外にはない。

流石に、こんなフォームで立っているのが

シンドかったのか、彼女は体に弾みをつける
と、フロアの両脚をあげて、くるりと、うし
ろに転がった。

巨大な二個の豚マンが、自分の体重の重み
で蹂られて腋にハミ出して、はち切れそうに
なっている。紐でプレストの根元を締めつけ
てあるから尚更なのだろう。

フォームが崩れて首が両腿の間から抜け、
円の一角は円錐形になった。

脚首と、手の紐をとくと、ルイズは自ら進
んで、いろいろのアクロバットを、みせてく
れた。

パッと飛び上がると、両脚を水平に開けて
フロアにドサと落ちる。股が裂けないのが不
思議なくらいのものだ。水平に広げた後、両
手で上体を支え、徐々に脚をフロアから離し
てゆく。

全裸でやるから、全く、壮観そのものでは
ある。

ついで、軽々と逆立ち——。左右の脚を水
平にしてゆく。

そうなれば否応なく、部長の眼にズバリ飛
び込む。

彼はその時、アナル・インターコースの歴
然たる跡を、そこにみた。収縮すべき括約筋

が、かなり弛緩し、アナルの周囲は、重厚な
肉の盛り上がりで膨らみ、黒い深淵の影を覗
かせた、直腸が、のぞけて、ヒクヒクと、蠕
動していたのであった。

挑みかかるような態位の数々と、ポリユ
ムのあるルイズの肉体に圧倒され、反射的に
部長さんは恐れをなして萎縮してゆく一方
である。

ポンと一回転して立ち上がると、ルイズは
彼をベッドに招く。

部長さんは後しざりする。

(ファックしないの?)

と、ルイズはきく。

(アイ・キャン・ノット)

部長さんは情なく応えた。

(ファイ——どうして?)

ルイズの発する、いいようなない異臭に、
辟易したのだともいいかね、病気だと逃げて
結局何もせず、彼女の凄まじい、数々の全裸
のアクロバットを觀賞しただけで引き下がっ
たというのであった。

このアクロバットを撮りたかったが、ルイ
ズはノウと否定したので、仕方なくやめたの
だが、私にみせてやりたかったと口惜しがる
部長である。

(あの女の、異様な匂いが鼻をついた時は、
咄嗟に第四性病だと思いましたんや。ローソ
クみたい、先っちょから腐ってとけてきて
はかないまへんからな——。これは負け惜し
みやおまへん。何て証明したらええか、玉子
の腐ったのにドブの匂いを足して、魚のハラ
ワタで割ったようなエゲツナさや。何ぼ、ア
クロバットがよかって、一寸、手が出まへ
ん。いや、ホンマ)

挑発に負けて、一時の激情でファックした
ら、あきまへんで。あんたも外人には、くれ
ぐれも気いつけなはれやと、部長さん、最後
は渋い顔になって、プレストの、すごい肉マ
ン二個、紐で締めつけたフォートをみせてくれ
はった。

マリファナ、強烈な性病、自由と奔放、性
の素乱が、まるで湖上の波紋の如くアメリカ
全体に徐々に拡大してゆく現状を、つぶさに
みてきて、この部長さん、最後は病めるアメ
リカのこうした現状が日本に波及してくるこ
とを恐れるのであった。語るに落ちる——。
やっぱり、我々、大正生まれ——。根っから
の悪人には、なれまへんのやなあ。

——(この稿おわり)——

S M ハードボーイルド

ランウェイ・シルエット

(滑走路の影)

カット・名古屋S生



1

霧に重く沈んだ街は、ところどころにオレンジ色の灯をともし、銀杏並木の舗道を歩く駒木五郎の影を浮かび上がらせた。

遠くで船の汽笛が鳴り、水滴が背広の肩を重く濡らすこんな夜はバーの止まり木にでも腰掛けて静かに夜明けを待つのがよいのだろうが、アルコールが全くだめな五郎は、あてもなく歩く。

霧が深い夜はなぜ心が滅入るのかは解らないが多分アエロ・ピアンカ航空のパイロットだった父親の影響だと自分では思っていた。スペインなまりの英語を口うつしに教えてくれた父の優しい眼差しとタイピストだった日本人の母のあでやかな容姿を、彼は何時で

佐原陽一郎

も胸の中にえがく事ができた。少なくとも、あの不幸な事故が起きなければ駒木五郎の半生は今とは、かなり異なっていた筈である。海を渡ってくる風のそよぎに汗ばんだ頬をなぶらせる十一才の少年のところに不吉なクサビを打ち込んだ悲しい知らせは、父を機長とするカラヴェル旅客機が三十八名の乗客を乗せて大西洋上に消息を絶ったというものであった。

ペイルートからカイロを経てロンドンに向かったカラヴェルは途中マドリッド空港で給油を受けビスケー湾に出たままレーダーの視界から消え去ったという。

それからの十五年の歳月は駒木五郎を父ベルナルドゆずりの長身と強じんな体力を持つ若者に育てていた。

「ベルナルドは死んではいない。俺はベルナルドに生きうつしの英語で交信しているパイロットの声を傍受した」

南米に主要航路を持つヴァリグ航空会社の操縦士ミカエル・ガルシアが有力な情報をもたらしたのは駒木五郎が香港で若手のマシンガン射手として頭角を現わしはじめた頃のことであった。

「親父が生きているって？ そんなバカな」

「いや、あり得る。ベルナルドは、ハイジャックにあったのさ」

「ハイジャックだって？」

「ベイルートから積み込んだ貨物カゴの中に金の延棒がかくされていたとすれば、あり得ることだ。乗客を装った強盗の一味がキャプテンを拳銃で脅し、ピレネー山中に不時着させたとしたら？」

「もうやめてくれ、ガルシア。俺の母はあの事故のショックで廃人同然になり、小学生の俺を残して狂い死にした。美しい母の思い出をめちゃめちゃに破壊した事故を、天災だと信じていたからこそ俺は生きてこられた。親父がミスをおかす筈がない。誰にも避ける事が不可能だった何かの突発的な事故が起きたということ……」

「わかってる。しかしレシーバーに入ってきた声は確かにベルナルドだった」

駒木五郎は、その日から確かに変わった。浴びるように飲んで、た薬を、ぶつくりと止め、一勝負に五百ドルも賭けていたカード遊びにも手を出さなくなった。

人は駒木五郎を暗い影のある男と噂する。

トムプソン・サブ・マシンガンマシンガンを武器として九龍から香港島まで駒木五郎は暗黒街に君臨するボスたちを倒していった。

黒い皮コートに百八〇センチの長身を包み、しなやかな髪が風になびいて怜悧な眼差しが微かな光を帯びたとき、鋼鉄のマシンガンが紅の舌を吐き、確かな手応えが返ってきた。

ネパール国籍の名射手アガルワルの秘蔵の弟子として認められながら駒木五郎は再び母の国、日本へ帰ってきた。そして、アガルワルも自らの手で射殺した五郎にとって、胸にぽっかりと開いた空洞

は、もはや何によっても満たされることがなかった。

夜更けの舗道に反響する靴音だけが、今は唯一の味方なのかも知れなかった。

真紅のマセラティ・セブリングが、ラジアルタイヤをきしませ駒木を追い越し、三十メートルほど行き過ぎてからリバースギアにシフトして戻ってきた。

「駒木五郎っていうのは、あんたなの？」

抑揚のない投げやりな調子で問いかけてきたのは二十二、三才の若い女である。流行のマント風のケープ付コートを着たまま運転している。眠ったような目の、ものうげな光はマリファナの常用者でもあるらしい。

「もし駒木さんが、あんたなら、すぐこの車に乗ってよ。あんたを狙っているヤツがいるんだよ」

「俺を狙っているヤツだって？」

「説明したりしている暇なんかないんだよ。とにかく早く……」

女が白い皮手袋で指差す方を見ると、二条のヘッドライトが数百メートルの背後に迫りMK自動ライフルを構えた男の影が視野に入ってきた。口径五・五六ミリのスタンダードA1タイプだが有効射程距離は五百メートルを越える全自動ライフルだ。一分間に七百発も射てる高性能ライフルに狙撃されては、ひとたまりもない。

しなやかな獣のように身を低めて車の座席に転がる駒木。同時にマセラティは深夜の街を猛スピードで突っ走った。

追跡してくる車も、かなり速い。メルセデス・ベンツ三〇〇SE L六・三リッターを巧みに操っているのは白人らしく、後部座席リアシートには二人の人影が見える。

大型サルーンに普通エンジン（二五〇〇CCと二八〇〇CC）の二倍以上もある六二九〇CC V8エンジンを搭載し、SS $\frac{1}{4}$ マイル一四・五秒、最高速度二二〇キロとフェラーリ並みの高速車に仕上げた車である。

普通のベンツだと思ってあなどっているとドラッグ・スター並みのダッシュ力で追い越されるオバケのような大型乗用車なのだが、さすがに、かつてのグランプリレースの名門として世界に知られたマセラティは、三四八五CC、二六〇馬力、マキシマムスピード二三五キロの性能をフルに発揮してベンツを寄せつけない。

ハンドルを握る女は眠ったような、しゃべり方をしていた時とは別人のように全身に緊張感をみなぎらせ、ひんぱんにギアをシフトしながら横路へ入り、狭い路地すれすれに際どいコーナリングを繰り返しながら、ベンツとの距離を少しずつ、ひらいていった。

「どこへ連れて行く気だ？」

「殺し屋さんには似合わない事を聞くのね。一度、身柄をあずけた以上は黙ってついてくるものよ」

「素性もよくわからない女と心中は、ごめんだぜ。それになぜ俺が狙われるのか本当のことが知りたいのだ」

女はそれには答えようとせず、波打ち際に白い波が夜目にも微かに見える海岸道路を、荒っぽい運転で駆け登って行った。

「やっぱり先廻りしていたわ。ねえ殺し屋さん。あんたの腕前を、ほんのすこし、見せてくれてもいいでしょ？」

全長五メートルはある大きなベンツのボディが前方に立ちふさがり、三人の男が無気味な銃口を向けている。

駒木五郎は、いわれるまでもなくマシンガンの組立を終わってい

た。オイルで丹念にみがき上げられた銃身は獲物を狙って蛇のように前方の闇をうかがう。

男たちのMK自動ライフルが、鈍い衝撃音とともに青白い光芒を吐き、急ブレーキを踏んで車を立てなおす女の正面に白い幕をつくった。フロントガラスが防弾になっていなかったら二人とも蜂の巣になるところである。

「おい、もっと姿勢を低くしていろっ」

五郎は女に指示しながら銃口でサイドドアのガラスを叩き破り、トムプソン・サブ・マシンガンの重い引金を一杯に絞った。

銃声よりも連続発射時の直線的な反動の方が激しく射手を襲ってくる。

重厚なベンツのサイドモールには、またたく間に弾痕があき、葉がきれいに、はじき出されて、座席の下に積み重なっていった。

ベンツのフロントマスクには欠かせないエンブレム・マークが吹き飛び、デュアル・ライトの破片が路上に散乱する。

駒木のマシンガンは相手に殆ど立ち直る隙を与えない。窓を貫通した弾丸に気をとられた敵の一人が頭を打ち抜かれ、路上に転がり出たまま昏倒し、アスファルトに点々と散る血痕が、霧にかわった小雨に、にじんで波紋を広げてゆく。

「運転席にいる外人がルドルフよ」

「あいつは何者だ」

「もとはアメリカ空軍の搜索救難機関（SARS）にいた男で名パイロットらしいけど、今はある事件でCIAに追われる身よ」

「なんだって？ 航空機の遭難に関係がある機関なのか？」

「当然よ。遭難機を、わざと隠しておいて積んでいる貴重品を盗む

などは朝めし前よ。特に戦争中はね」

「戦時中でなくなつて、うまく誘導すれば、できるな」

「とにかく、まともな過去を持つてはいない男よ」

「どうして、あの男にくわしいのだ」

「あたしの両親は、あの男に殺されたのよ。通称はチャーリー、本名はルドルフ。元アメリカ空軍情報部員」

MK自動ライフルとトムプソン・マシンガンとの対決になったが駒木は冷静に着弾距離を見きわめ、もう一人の殺し屋を数分間で沈黙させた。

運転席のチャーリーは、モーゼル・ミリタリーモデルの拳銃を發射して駒木の弾道を乱してからベンツを反転させ、ジグザグ運転をしながら逃走にかかった。

「無理に追わない方がいいわ。空にはヘリコプター、海にはモーターボートを、ちゃんと用意している様な抜け目のない男だから。それにしても、チャーリーの親衛隊を簡単に二人もやつつけるなんてさすがに見事なガンさばきね」

「そんな事より、名前ぐらいは名乗ったらどうだい。俺の方は、やりにくくっていいねえ」

「人間の名前なんて唯の記号にすぎないじゃないの。そんなに重要じゃないと思うわ。無理に呼びたかったらイロイロっていう名にしておいてよ」

「何だと？」

「バカね。変な顔して。イロイロというのはフィリピンのビサヤ諸島にある町の名よ。私の両親は、そこで行方不明になったの」

「飛行機に乗っていたのか」

「そうよ、フィリン航空のダグラスDC4がエンジン・トラブルも何もないに突然、消えてしまったのよ、チャーリーの管制区域に入った飛行機には、とても信じられないようなことが起こるわ」

イロイロと名乗る女は、車をスタートさせた。ベージュ色のミニスカートから、すんなり伸びた脚がアクセルを踏み込み、強力なパワーを秘めるマセラティを自在に乗りこなし、海岸道路を登り切って山の中腹に出た。

「海に見える別荘地」というキャッチフレーズで売り出された宅地造成区域がガケ崩れの恐れで一坪も売れず、昼間は子ども達の遊び場になっていた。

車は、ぼっかりと口をあいた様な洞窟の中へスピードを落として入って行く。

しめった土の匂いの中にまじって、かすかな刺激臭があるのは、ここがかつて旧陸軍病院の跡で、大量の医薬品を処分した名残りであるらしく、中は広さ十平方メートルぐらいだが天井は、かなり高く、岩肌を伝って、したたり落ちる水滴が駒木の首筋を濡らした。

「お待ちしていましたよ、駒木さん」

手に大型のフラッシュライトを掲げた恰幅の良い男が近付いてきた。

ダブルの背広は地味なツイードだが、衣地は英国製に特有の一種の気品を持ち、ネクタイと同色のポケットチーフを胸にのぞかせ、真珠のカフスボタンといい、腕にはめたジラル・ペルゴーといひなかなかのダンディぶりである。

「私はインターポールのフレディ尾崎です」

「インターポールとは国際刑事警察機構のことかね？」

「そうです。チャーリーのことは、すでに連絡員の口からお聞きでしょうが、われわれは十五年前の航空機遭難事件とチャーリーとの関連性を追求してきた結果、あなたの協力を必要と感じて接触する機会を待っていました。チャーリーと殺し屋一味があなたを襲う計画をしているのを事前にキャッチできたので情報連絡員のイロイロを差し向けた訳です」

「彼女は連絡員だったのですか？ 俺は最初マリファナ中毒で頭がいかれた女かと思いましたぜ」

「イロイロは特殊な訓練を受けており、咄嗟の場合に麻薬中毒患者になったり、精神病患者になったり、自在に振るまえる演技力を身に付けています」

「なるほど、これは一杯くわされたなあ」

駒木五郎は精悍な引き締まった体躯と鋭利な顔立ちを持つインターポールの捜査官に対し事件に関する全面的な協力を了承した。

父が残した謎に、その子として挑戦することは当然の義務だと思っただのである。

「フレディさん、現在の時点で最も重要な手掛かりとなるものは何ですか？」

「チャーリーは潜行してから、なかなか用心深くて身近に接近できないが、部下への指令には何人かの女を使っていることはわかっています。面が割れている女についての資料は提供します」

「オーケー、私も全力をつくします」

国際刑事警察秘密捜査官フレディ尾崎と駒木五郎は相方から歩みより、しっかりと両手を握り合った。

湘南有料道路を鎌倉から逗子に向かって走るランボルギーニ・エスパードのカーマインレッドの車体が、海からの逆光を浴びてきらめく。ベルト・ネ製のボディは、ファストバックの極致ともいえるフラットルーフで空気抵抗を少なくしている。

四つの豪華なバケットシートと、高いセンターコンソールを持つエスパードのインテリアは、八角型のダッシュパネルに包まれたスピードメーターの針が敏感に動いて時速一六〇キロを示さなければ王室のサロンのように優雅であり、カーステレオからはジョルジュ・ジュバンのトランペットソロがハイトーンを響かせていた。

ランボルギーニは、もともとエアコンディショナーのメーカーだけに、室内の換気は万全を期しており、快適なドライブのためにメーカーが細心の注意を払っていることが、わかる車である。しかし助手席に坐っている松岡夫人は、しきりに白いハンケチで額の汗をぬぐって心の動揺を隠そうと必死になっていた。

「チャーリーのことは、主人だけが知っているのです、私はただ手紙を回送していただけですわ」

「その、回送先のアドレスを俺は知りたいのさ。思い出せねえ程、遠い昔の話ではないんだがね」

「本当です。わたくし何も知りません。主人に聞いて下さい」

「御主人の松岡助教教授はチャーリーの連絡で見事に雲隠れさ。航空局研究機関の技術担当者として航空機の新しい誘導装置（VOR）の開発を依頼されながら、その技術をチャーリー一味に邦貨七千二百万円で売り渡した。そこまでは、きわめて明快に解っている。さ

て、それからが話の核心さ。この事件には、松岡助教授令夫人、松岡悦子も共謀していたのさ。いや、むしろ主犯は、あなたの方だ。チャーリーとは彼がキャノン機関時代からの知り合いだった。それも唯の付き合いではなく、週に一度は米軍専用のホテル山王で逢う瀬を楽しむ間柄だった」

「もうやめて下さい。わたくしは、そんなふしだらな女じゃありません。何を証拠に、そんな事をおっしゃるのです。脅迫するなら警察に訴えます」

「それ程いうなら、六一五号室に仕掛けた無指向性マイクロフォンの性能テストをしようかね、奥さん」

ランボルギーニは路幅いっぱいセンターラインをまたいで追越しを邪魔するダンプカーの荷台すれすれに猛烈なスピードで後塵を浴びせ、挑発的に追いつがるホンダ三五〇にまたがった赤ヘルメットの若者などを独特の重和音を響かせたクラクションで追い散らしながら国道一三四号線を長井から三崎方面に向かって邁進した。

三戸浜入口のバス停先に立っているトーテムポールを目標にラジアルタイヤをきしませながら右折して、せまい砂利道に入り、「サーフサイドビレッジ」の車庫にすべり込む。

神奈川県三浦市初声町三戸浜にあるモーテル形式のレジャー施設であり、キッチン、バス、トイレ付のハウスが海岸線に沿って五棟ほど立ち並んでいる。

荒崎から油壺にかけての海岸線は入江が多く、三戸浜には大学ヨット部の合宿所が各所に点在し、薄暮の海は強風に波頭が千切れ、岩礁にだけ散る波がスローモーションのように遠くからも見分けられた。

車から降りる時「両手を前に出せ」と駒木に命令されて何のことかわからず、とまどっていた松岡夫人は突然、手錠をはめ込まれて声も上げられず、女囚のように首うなだれてハウスへ通じる細い石段を上って行った。

純白のスーツを着ているが、短いスカートの裾からスリッパのレースが、はみ出し、坂を登るために前こごみになるので黒いストッキングを吊っているガードルまで、あらわになっていた。

夫人を部屋に入れると、鍵をロックしてカーテンを下ろし外界の光と音を遮断した。

ボーイには多額のチップを渡してあるので少し位の悲鳴が外へもれた所で心配はない。

駒木は夫人を背後から抱き上げ、手錠にロープを結んで、天井に両手吊りにした。

やっと、つま先で立てる位に縄を調節してから、獲物をいたぶるように煙草の煙を夫人の顔に吹きつけ「さあて、これからゆっくりと思いつつ責め上げるぜ」と駒木は用意してきた黒い皮鞭を見せつけるように白い喉を逆に撫でたり、鞭の先で鼻孔を上向きにさせたりして夫人を、あえがせた。

つま先で立っているのでミニスカートは太股の方まで、まくれ上がり、赤い水玉模様が入った短いレース付のパンティまで、ながめられた。

「この、ママごと遊びのようなパンティは、ダンナの好みかい」といいながら駒木は、パンティに鞭をこじ入れて左右に揺り動かした。

夫人は小さな唇から真珠のような白い歯をのぞかせて悲鳴を上げ

たが、やがて鞭の動きが前後にかわって行くと表情が変わり、悲鳴はしだいに低く、むせび泣くようになかすれたものになって行った。

「助教授夫人ともあろう方が、こんなことでパンティに地図を書くのは早過ぎるということさ」

駒木は美容院に行ったばかりのように、美しくセットされた夫人の髪を容赦なく右手でつかみ、荒々しく顔を上向きにさせた。

逃がれようと、もがけばもがく程、頑丈な手錠は手首に喰い込み堅く締めつけてゆく。

元外務次官を父に持ち、学習院女子短期大学を卒業すると、すぐ松岡家に嫁いだ夫人にとって、恐らく手錠を映画やテレビ以外に見たのは初めてであろうし、まして、犯罪人のようにそれを手首にはめ込まれ、ロープで高々と吊られる身になろうとは夢にも考えたことはないのかも知れない。

「ああっ、もうお許し下さい。こんな事、やめて下さい」

「奥さん、何か思い出したのかい？」

松岡悦子は二十六才の成熟した肉体を駒木の前に投げだし、身をよじって助けを乞うが、駒木はブラウスのボタンを引きちぎりブラジャーのホックを外ずして夫人の乳房を引き出した。子どもを生んだ事がない女性に特有の艶やかな色をした乳頭が螢光灯の下にさらされ、水々しく息づくような、はち切れるばかりの弾力を感じさせた。

下半身はいえ、たくし上がったスカートを押えることもできず、パンティは、かろうじて腰を覆ってはいるが、ストッキングは足首まで下げられている。

駒木はジャックナイフでスリッパの薄いナイロン生地を魚の腹で

も切り裂くように裾の方から上へ切っていった。

スカートも裏地と共に簡単に切り開かれ、ボロ切れのように夫人の足元へ捨てられた。

最後に残ったパンティのゴムを、ぴんとはじくように切り取ると綱が切れたエレベーターのように落ちて行き、一糸まとわぬ松岡夫人の姿体がなまめかしく、部屋に備え付けの等身大の鏡に映った。

身長一メートル五八、体重四十八キロの肉体は、つま先立ちを強いられたまま、くるりと一回転し、うっすらと汗をかけた肌からは夫からのフランス土産である『ミス・ディオール』の香りが漂っている。

すっかり観念したらしい夫人は、片脚で立ちながら、もう一方の膝をくの字に折り曲げ、押し殺したような鳴咽で、あえぎ続けるのだったが、肌の色が抜けるように白いので、打ち下ろした皮鞭の痕がたちまち朱色に染まり、なまめかしさを、より深く増してゆく。

強烈な鞭の洗礼は下肢から次第に上半身へ移り、汗と涙に濡れた夫人の顔は、もはやメーキャップもくずれ、つい今しがたまで助教授夫人の誇りを堅持していた、人を見下ろすような目差しは、すっかり消えて、女奴隷のように哀願の色を瞳に浮かべるのだった。

かつての「奇ク」モデル若原明子を思わせるような、くびれたウエストラインを持つ女奴隷は、息もつがせず打ち下ろす皮鞭の波状攻撃に、とうとう耐えきれず失禁してしまい、まだ真新しい畳を濡らして「神酒」が、ほとばしった。

「どうだ、自分のを飲んでみるかい？」

駒木は「神酒」の一しずくを掌にすくい取り、顔をそむける夫人の頬に撫でつけた。

「ホルモン入りだから、美容には、いいぜ」

駒木は続いて二度、三度と夫人の頬を勢いよく平手打ちした。

「勘忍して下さい。私の負けです。何でも話しますから、もうこれ以上いじめないで……」

「やっつと、世の中は甘くないってことがわかったようだな」

「はい、お許し下さい。この上、まだ恥かしいことをされたら、死んでしまいます。もう責めないで下さい」

「チャーリーの連絡場所は、どこだ？」

「わ、わかりません。あたくし知らないんです。ああーっ、もう打たないで下さい。ウソは、いいません」

「まだまだカラダでは話が、わかっていねえようだね。それじゃ、いよいよ責めのハイライトが登場するぜ。今度は上の方の口からもよだれを流さねえようにしてくれよ、奥さん」

駒木五郎は車庫へ降りて行き、トランクから妙な機械を部屋の中へかつぎ上げた。それは直径三〇センチほどの円筒型の空気溜を母体にしたエアークンプレッサーである。エンジンは一〇〇ボルトの電源から取り入れモーターを廻し空気を圧縮して吹き付け等の作業用に使用する。約三気圧から四気圧に圧力を上げる能力を持つ「ヒタチベビーコンプレッサー」である。

「これは空気を送り出すだけでなく、吸い込む役目もするんだぜ。奥さんが気がすむまで、水分を抜き取ってやろうというのさ」

駒木は夫人の乳房に円いパットのようなものをかぶせ、背中に回した留金に鍵をかけた。

それは丁度ブラジャーのように二つの乳房を覆いかくしたが、フイゴのように伸び縮みする部分があり、空気の圧力を調整するバル

ブがついていた。

コンセントを差し込むと小さなモーターが快的なうなりを上げ、コンプレッサーのピストンが動いてボンベに空気が入ってゆく。

圧力計のゲージを見ながら、駒木はゴム管を「スクリーム・パッド」につなぎ、バルブを自在に切り替えながら松岡悦子の乳房を責めはじめた。

強い圧力で一度、押しつぶされた乳房は、次に吸い込む力によって瞬時の休みもなく打ち震え刺激される。

松岡夫人は、もはや恥入る風情もどこかへかなぐり捨てて、唇を半分開き、言葉にならない溜息と悲鳴を上げ始めたのだった。

「ああーっ、やめて、やめて。ううーっ、お願い、かんにんして。許して……」

さすがに「スクリーム・パッド」（悲鳴を上げさせるパッド）といわれる新兵器だけに、女の急所を責める効果は抜群である。

「聞いて下さい。あ、あのチャーリーの居場所はわかりませんが、主人が、わ、わたしに地下鉄銀座駅のロッカーの鍵をあずけて行きました。それはハンドバッグにあります。もうやめて下さい。これだけしか知りません」

駒木は、夫人のハンドバッグから、小さなプラスチックの番号プレートが付いたロッカーの鍵をとり出した。

「ふん、これを思い出すまでに大分、時間がかかったようだな。だが、これを渡しただけで無罪放免になると考えたなら大間違いだ。この鍵が本物かどうか、お前も俺と一緒にロッカーまで行って立ち合おうのだ」

「はい、わ、わかりました」

イメージギャラリー

『耐熱テスト』

須坂

旭



「急に素直になったようだな。それじゃ早く仕度をしな」

駒木は夫人の手錠を外してやり、パッドの空気も抜いて楽にしてやった。夫人は両手が自由になっても、しばらくの間は放心したように、ぐったりと畳の上に身を横たえて起き上がれなかった。

「あとう、仕度をしろとおっしゃっても、お洋服がありません」

「そんなものはいらねえよ奥さん。生まれたままの姿で手錠を両手

に掛けられ、腰縄を引っぱられて銀座通りを歩くんだ」

「まあ、そんな……」

「なさない顔をするな。スケスケルックのミニスカートぐらいは途中のスーパーマーケットで買ってやるよ」

夫人は急いでパンティだけを身につけ、ズタズタに切り裂かれたシュミーズを、うらめしそうに胸に当てて、立て膝になっている。

「今さらそんなに恐がることはねえ。俺は人の女房とファックするほど飢えちゃいねえんだ。安心して出すものは出していなよ」

3

現在世界で最も強大な諜報機関はアメリカの CIA (CENTRAL INTELLIGENCE AGENCY) だ、直訳すれば中央情報局である。

CIA 本部はワシントン市の郊外ラングレーにあり、ホワイト・ハウスからは車で約二十分の距離である。ビルの総面積は十一万四二〇〇平方メートルで八階建の威容を誇っており自動ライフルで武装した軍隊と、コルト45・M1911をホルスターに吊った私服ガードが二十四時間シフト勤務で部外者の出入を厳重にチェックしている。

CIA は米国中央情報局法によって、職員の名前、任務、給与など、いっさいを秘密にすることが認められており、たとえ国防省付の新聞

記者といえども、その全容を知ることとは不可能である。ただ、建物の広さや駐車場、食堂などの収容能力から推定して一万人前後の職員が、いるとされている。

CIAでは、直属の諜報員を『事件担当情報官』^{ケースオフィサー}と呼び、彼等は一流大学を優秀な成績で卒業した後、アストップという語学研修機関でロシア語と中国語を徹底的に教育され、日常会話に不自由しなくなるまで、わずか四〇日から六〇日あれば十分である。

それから各自の適性に合わせ職業技術を身につけるが、これは潜入を命じられた国でさまざまな職業につき、身分を擬装するのに役立つからである。

射撃術、爆破術、放火術、無線通信技術、重要書類を偽造する技術、尾行法、毒殺に使用する薬品の知識などをマンツーマン方式で訓練したスペシャリストたちは、それぞれの特命を受けて世界中に散って行く。

CIAの協力機関としては『陸軍情報部』^{ジョイント} (G2)、『海軍情報部』^{オーエスアイ} (ONI)、『空軍情報部』^{エーアウ} (A2) などがあり、国内外にいる敵国スパイ逮捕を担当するのがFBI (連邦捜査局) である。もちろんFBIは一般犯罪の捜査活動もするが、最近では国外にも刑事を派遣してCIAと密接な協力体制をとっていることが明らかになっている。

チャーリーことルドルフ・グスタムは、A2の特殊工作員であり、同時にソビエトの諜報組織KGB (国家保安委員会) にも接触していた、いわゆる二重スパイであった。

名前からもわかるように、ルドルフはロシア系の血を受けておりラトビア共和国の首都リガ市に生まれている。祖国を売ったルドル

フがKGBの諜報員に命を狙われるのは当然であるが、CIAからも行方を追求されているのは、彼自身の不可解な行動に端を発している。

航空機の捜索救難機関 (SAR) に所属して諜報活動を行っていたチャーリーは、元パイロットのキャリアを生かして軍用機ばかりでなく一般民間機の遭難にも触手を伸ばしてきたのである。

遭難通信は三回にわたる『MAYDAY』^{メイデー}ではじまり、この通信は地上のSOSと同じで他の航空機通信に対して絶対的な優先順位を持ち、これを認めたすべてのコントロールタワーは管制区域の航空機に混信の恐れがある無線使用を中止させる。

メイデー緊急発信をキャッチしたチャーリーは強力な妨害電波を出して管制塔と遭難機との交信をはばみ特殊な誘導装置 (VOR) を使って何か重大な秘密事項を企んでいたのであった。

駒木五郎の父ベルナルドが乗務していたアエロ・ビアンカ航空、シンド・アビアシオン社製カラヴェル旅客機の失踪事件は実にチャーリーの魔手による最初の犠牲なのである。

日本航空太平洋線七二便は毎日夜十時二〇分に東京国際空港を出発しホノルルに向かう。

ホノルル国際空港に到着するのは時差の関係で前日の朝十時三〇分である。つまり日曜日の夜に羽田を出発するとハワイでもう一度日曜日の朝をむかえることになる。

日附変更線が存在する限り、こんな現象は、別に珍しくもなく、たまたま、海外旅行は初めての観光客が喜ぶ位のものであるが、CIAの諜報員が連合赤軍の未確認情報として本部に打電してきたハイジャック計画には、この日本と米国の時差が大いに関連を持つ

であった。

なぜなら土曜日の午前中に東京の銀行で振り出した小切手を、ハワイで翌日に現金化できるのである。東京では日曜日であるが、ハワイでは、ふたたび土曜日をむかえることができ、金融機関を利用できる。

たとえば土曜日の午後、銀行の金庫破りをしてでも発見されるのは月曜日の朝になる。

その間に有価証券をハワイの金融機関に持ち込めば発覚しない計算になる。

しかしワシントンのCIA本部は首をひねった。日本の赤軍派がM作戦を唱え、数多くの金融機関を襲撃し現金を奪っているのは事実であるが有価証券には手をつけていない。

また軽井沢事件で幹部が根こそぎ逮捕され壊滅状態になった彼等が、ジャンボ・ジェット機を乗取る程の余力があるとは思われなかった。そこでCIA極東地区情報部はこのハイジャック計画に関する信憑性を、あくまでも未確認として扱い、重要視しなかった。

駒木五郎はヴァリグ・ブラジル航空の主席パイロット、ガルシアを国際電話で呼び出し、至急に東京へ飛ぶことを依頼した。

地下鉄のロッカーから入手した松岡助教授のメモからCIAがキヤッチしたジャンボジェット、ハイジャックは赤軍派の計画ではなく、チャーリー一味の最後のあがきである、駒木は感じたからである。

日本航空が太平洋線に就航させている、ボーイング・747は全長七〇・七メートル、全幅五九・七メートルの「怪物」で乗客収容能力は三六一名である。

その夜、東京国際空港は大陸から張り出した高気圧に覆われ、快晴北東の風五メートル、A滑走路に入ったジャンボは赤いコンソールライトを点滅させコントロールタワーからの離陸許可を待っていた。フライト前の計器チェックもすべてOKのサインが出され、ロールスロイス社製造のジェットエンジンは快調なバーストで空港の夜空にきらめく無数の星にむかって地軸を揺るがす咆哮を、くり返していた。

駒木五郎はガルシアと前後して通路側の座席に坐っていた。いざというときに、とび出せる体勢を敷いたわけである。

十八個の巨大な車輪が滑走路の震動を座席に伝えたが、それもすぐさま力強い機体の上昇角度と共に消え去り、東京の街の灯が宝石箱を、くつがえしたように、あざやかな色彩を伴って飛行機の窓にじませた。

ほぼ満席に近いエコノミークラスの乗客は思い思いに談笑したり窓外に目をやったりしている。

「ガルシア、あいつ等は乗っているのだろうか？」

駒木は身体を斜めにずらし、前を見たまま、低い声で後席のガルシアに話しかけた。

「いるとも。俺とお前以外は全部、疑わしい奴等ばかりだ」

ラテン系に特有の人なつこい風貌を持ったガルシアは、口ではのんびりしたことをいっているが、背広の内側にひそませたベレッタ・ブリガデール自動拳銃を、いつでも抜き出せるように用意している。

ルーガー用の九ミリハイスピード弾を発射できるイタリア製の拳銃であり、八連の弾倉を持っているにしては、さすがにイタリア的

な流れるようなデザインで、口径九ミリのオートマチック拳銃の中では最も軽量である。

「ガルシア。残念だが、その自慢の拳銃は使えないぜ」

「わかっているさ。ただこれが上衣に入っていないと女がパンティを忘れたみたいでね」

いうまでもなくジェット機の巡航高度である三万フィート前後は三〇〇ミリバールの気圧で丁度、地上の三分の一しかない。機外の温度は零下四四・六度である。

拳銃でキャビンの壁にヒビでも入れれば、中にいる人間は絶対に助からない。

飛行機は水平飛行に入ったらしく、シートベルトのサインが消えミニスカートのスチュワデスが職業的なつくり笑いを顔面に浮かべながらキャンデーや軽い飲みものを客席へサービスにきた。

そのとき、後部の調理室^{ギャレ}から、女のかん高い悲鳴が起こり、機体が激しくローリングした。

「どうした？ 何が起きたんだ」

乗客は総立ちになった。

「さわぐなっ！ われわれは機長を人質にした。死にたいヤツだけ勝手に動け」

スピーカーから重々しい英語のアナウンスが機内に流れ、婦人客の中には、すでに恐怖で頬を引きつらせ泣き出している者もいる。

通路の中ほどで二人のスチュワデスが背の高いニグロの男にばかり、腕を後にねじ上げられ緊急脱出用の細いロープで後手に縛られている。

ナイロンストッキングで覆面をした黒人は、ときおり含み笑いを

しながらスチュワデスの白いブラウスを引きちぎり、あらわになった乳房を掌で、もみ込むようにしながら、きつく縄目を掛けてゆき二の腕を引き絞ったロープを前へ回して、短いスカートをまくり上げ、右の太股を縛って縄止めをした。パンティストッキングから透けて見える白いパンティが、なまめかしい。

犯人の黒い指先がスチュワデスの肌からみつぎ、まだ二十歳前後のみずみずしい肢体を乗客の中にさらされて、二人の顔は恥辱と哀願の涙で濡れていた。

ブラジャーの紐が引き千切れ、乳暈^{にゅううん}の小さな上を向いたピンク色の水々しい乳嘴^{にゅうし}が縄の刺激で慄えている。スチュワデスの誇りも女の恥らいも容赦なく、はぎ取られた二人の女は、息も絶えだえに身をよじり、黒い肌の前に、ひざまずくのであった。

黒人の男は、皮の長靴をはいたまま、野卑な笑みを浮かべながらスチュワデスの背中を踏みつけ、ストッキングと一緒にパンティを引きずり下ろした。

豊かなヒップの線が、むき玉子のようにあらわとなり、恐ろしい力で蹴り上げられて、縛られたまま横転した一人のスチュワデスは開股した姿勢を乗客の視線の下に、さらけ出さなければならなかった。

しかし汗臭い皮ベルトを無理やり、口にこじ入れられ、手ぎわよくサルグツワをされたので、どんなに哀願しても言葉にはならず、空しい、うめき声をもらすだけであった。

黒人の目が淫らに光り、スチュワデスの裸体をのぞき込むようにした。その、背後への注意がおろそかになった瞬間、ガルシアと目くばせをした駒木五郎が肉弾と化した。体当たりをくって、すっと

び、うつ伏せに転倒した黒人に、のしかかった五郎は、す早く両腕を後へねじ上げた。

黒人は振りほどこうと意味のわからない罵声を、わめき散らしながら必死に暴れたが、ジャックナイフを首筋につきつけられ、抵抗をあきらめた。

しかし叫び声を聞きつけた五、六名の男が通路の両側から二人に迫ってきた。

その時、ガルシアの斜め前の座席からパンタロンスタイルのアメリカーナらしい中年婦人が立ち上がり、素早く向き直るやいなや、鋭くきらめく小さなナイフが白線を描いて飛んだ。

矢継ぎ早にくり出す手練の武器は男たちの顔面をえぐり、脚に突き刺さった。折り重なるように通路へ倒れこんだ犯人を見て、乗客の中の若者が勇敢に反撃を開始した。

「やあどうも、とんだ仮装行列でして……」

中年婦人がカツラをとり、ハンケチでメーキャップを落とすと、^{インターポール}国際刑事警察のフレディ尾崎捜査官が、いたずらを見付けられた少年のような顔付で駒木に会釈した。

「あなたも、この飛行機に？」

「本部から情報が入りましたね。ある程度の動きは暗号テレタイプで毎日、把握できますからね。しかしあなた方も同じラインに到達していたとは驚きました。とにかく操縦席^{コックピット}へ行きましょう」

傷ついた犯人たちは乗客によって取り押さえられ、武器は全部、回収された。

客室と操縦席をへだてるドアは、かなり頑丈にできており、内側からロックされると体当たりぐらいでは絶対に開かない。

「チャーリー、聞こえるか？ ハイジャックは失敗した。君の部下は逮捕されている。人質を放して早く出てこい」

フレディ尾崎の呼びかけに、最初は無言だったチャーリーも操縦室での緊張に耐えきれなくなったのか、機内スピーカーを通して返事をしてきた。

「ハイジャックはあきらめたが、^{キャプテン}機長を放すことはできない。必要があれば、いつでも殺す。機長が死んでもオレが操縦する」

「チャーリー、君がアメリカ空軍のパイロットであつたことは認めるが、この巨大なボーイング・747を操縦することは不可能だろう。君にはもう十数年の空白^{ブランク}がある。ジャンボ・ジェット機はプロペラ式のムスタング戦闘機とは、わけが違うのだ」

尾崎捜査官がチャーリーとの対話に成功して時間をかせいでいるとき、内部で突然はげしく何かがぶつかり合う音がし、つづいて拳銃が三発、発射された。

「どうした？ 大丈夫かっ」

ガルシアが身を乗り出すように叫んだ。静かになった操縦室のロックが外ずれ、頭部から出血して制服の肩まで血まみれになった副操縦士^{コパイ}が転がり出てきた。

チャーリーの隙^{すき}を見て飛びかかり、格闘となって頭を撃たれたらしい。

チャーリーは腹部を蹴り上げられ苦悶の表情を浮かべてフロアに倒れている。

^{フライトエンジニア}機長と航空機関士は銃弾を浴び鮮血が胸から噴き出して制服の袖口を濡らし、金筋ににじんで床に糸を引いている。

「ガルシア、頼むぞ……」

機長の死体は、しっかりと操縦桿を両腕でかかえ込み、うつ伏せになっているが、慣性航法装置（INS）とオートパイロットをコネクタクトしているので、飛行機はINSの発信を受け、自動的に定期航路上を水平飛行していた。

ヴァリグ航空主席操縦士のガルシアは、機長を丁重に副操縦士席へ移すと、慣れた操作で計器をチェックし、マイクを取って東京空港管制塔を呼び出した。

「こちらJAL、72、聞こえるか？」
ジスィズ セブントー ハウユウヒアミー

尾崎捜査官がチャーリーに手錠をかけた。日本の警察はどんな重大犯人でも前手錠にするが、米国式では両手首を背中へ回し手錠をロックする。

「チャーリー、どうして拳銃を使ったんだ。もし外したら飛行機が大変なことになる」

「わかってるさ。しかし俺はもう死んでもいい命だ。何もかも承知のうえさ」

「チャーリー、親父のベルナルドについて教えてくれ」

駒木五郎はチャーリーの答を待った。

「ベルナルドの飛行機にベイルートから西ドイツの特別情報局、ザーレン機関に宛てた秘密文書が乗っていた。それが対ソビエトに世界一の諜報網を持つといわれるザーレン機関の手に入れば俺が二重スパイであることが秘密にできない。それで妨害電波を出して事故が起きるようにしむけたのだ」

「そのために、何も関係のない三十八名の乗客まで巻き添えにしたのか？」

「止むを得なかった。しかし我々は大きな誤算をした。フランス領

海のビスケー湾で墜落させようとしたのが、ベルナルドの操縦技術がよかったので、ブルターニュ半島を越えて英領のチャネル諸島まで飛ばしてしまった」

「親父の操縦が君たちに勝ったというのか」

「そう。たしかに一時は、我々は彼に負けた」

「一時は？……」

「ベルナルドは、そこで必死の海上着水を試み丁度満月の夜だったので、うまく成功して機体は波に浮かんた。そこで潜水艦を急行させ機体処理させた。一片の破片も一滴のオイルも残さず物体を回収する技術を我々は持っている。乗客は全部、射殺したが、我々はベルナルドの卓越した操縦技術を惜しみ、組織の中で働らかそうとして生命を助けた。ベルナルドはいま南米のある基地で戦略偵察機SR・71のテスト飛行をしている筈だ」

「本当に生きているのか？」

「確信はないが、アクシデントがなかったとすれば現在も南米のどこかにいると思う」

高度一万フィートの月明に照らされた雲海の上をジャンボ・ジェットは東京国際空港に向かって引き返している。

駒木五郎は静かに目を閉じ、歳月と共に遠のいていった父の面影を手繰り寄せようとしたが、それは、深い霧の彼方に見る対岸の景色のように色あせ、記憶の残像は空しく同じ個所の周囲を回るだけであった。

トウキョウコントロール ジーイーエーエル セブントー エンルート レットイレブン テンタウダ
「東京管制 JAL72便は高度一万フィートで空路R-11に乗り
ンドアイエフアール エストメイトトウキョウ ツー スリー ファイブ アイテム オーバー
計器飛行中、東京到着は二十三時三十五分の予定」

ガルシアは無線機のチャンネルを緊急通信にセットしてエンジン

出力を一杯に上げた。

ボーイング・747は銚子沖のハドックを通過し誘導電波に乗って東京空港へ接近しつつあった。

東京湾の灯がきらめきC滑走路の誘導ランプが点滅して72便の優先着陸を告げていた。

羽田上空には数機が空中待機させられ、72便のために滑走路をあけていた。

そのとき、一二・六メガサイクルの無線から、太い、かすれた英語が入ってきた。

「私は、ベルナルドだ。五郎、聞こえるか？ 滑走路で待っているぞ。オーバー」

ガルシアは巧みな降下角度で、全長七〇メートルを越す巨大なジャンボ・ジェット機をC滑走路に着陸させた。

緊急着陸なので救急車や空港消防署の化学消防車などが待機し、数台の大型のスポットライトが、ジャンボ機の側面を明るく照らしていた。

駒木五郎はタラップを真っ先に向け降り、滑走路の末端にたたずむ一つの影に向かった。

わざと光が届かない場所を選んだのか、父ベルナルドは黒い影となり、航空会社の制服であるベルト付の長いコートに身を包んでいた。

滑走路に冷え冷えとした夜気が流れ、双方とも無言のまま、ある間隔を置いて立ち止まった。

「五郎、私は生きていたよ。チャーリーの手先となって今まで祖国を売り、お前たちまで欺き通してきた。私を父と思わないでくれ。」

私は国際スパイのモルモットして秘密偵察機のテストパイロットになり各地を転々として地下に潜ってきた。私の身边は多くの目が監視している。二度と日本の土を踏もうとは思っていなかったが、チャーリーのハイジャック計画のためやってきた。もしハイジャックが成功したら私が操縦する戦闘機で太平洋上のある基地へ誘導する手筈だった。しかし失敗したことがわかったので、私もこれまでと思ひ無線でお前に連絡したのだ。私に近寄るな。私のフライト・バグには時限装置が仕掛けである。お前にも逢えてもう思い残すことはない。お前の目は母に生きうつしだ。あれも可哀そうな事をした。しかし、もうすべて終わったことなのだ。終わったのだよ。アディオス、ゴロー」

果然と立ちすくむ五郎に、ベルナルドは身を伏せるように手で合図をした。

激しく目を射る閃光とともに、滑走路をゆるがすように爆風が突き抜け、地面に身を伏せる五郎の背中にアスファルトの破片が降りかかった。

「お父さん……」

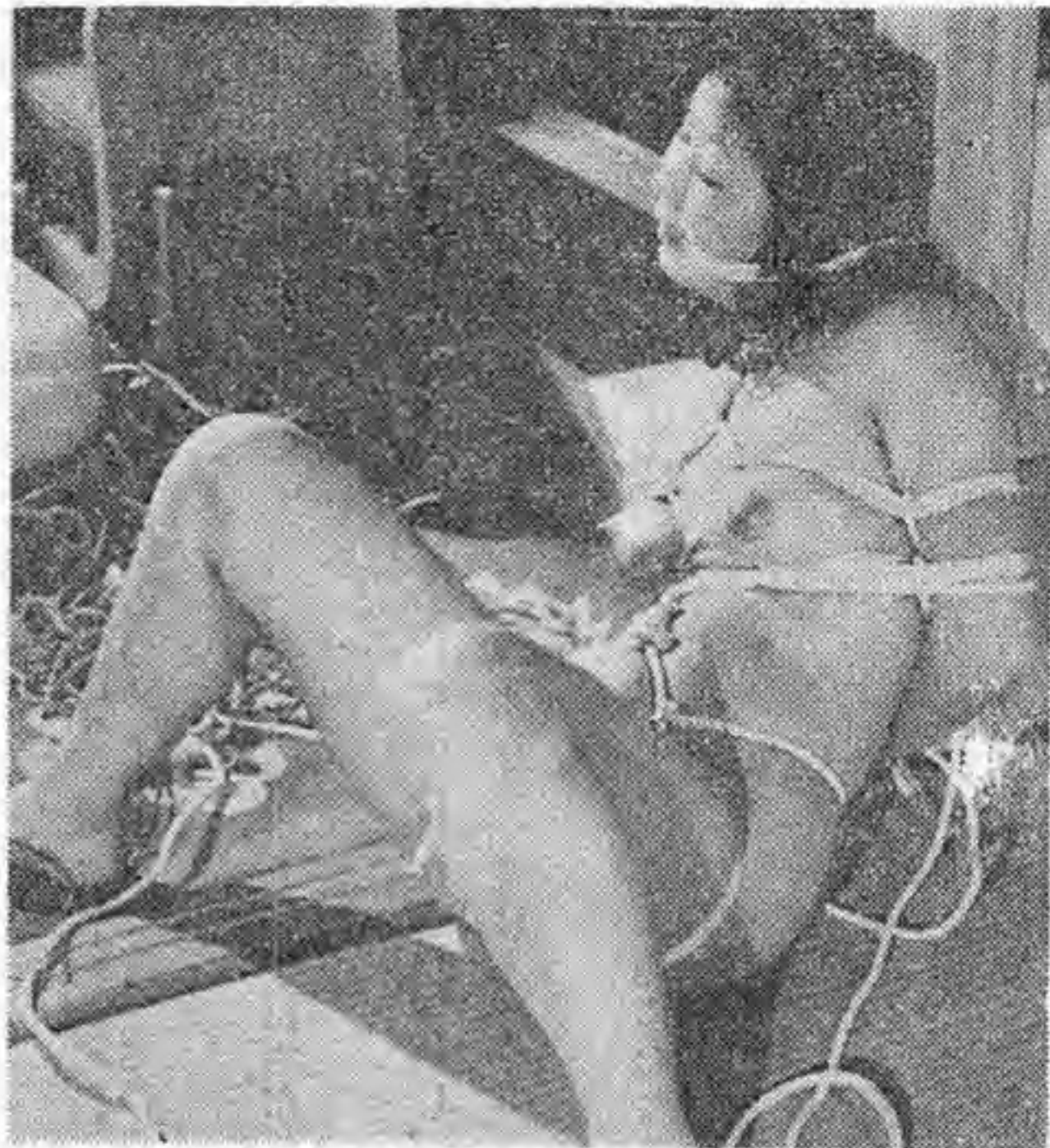
駒木五郎は黒い影が立っていたあたりに向かって、はじめて父の名を呼んだ。そしてマシンガンを組み立て、空港の上を包む闇に向かって弾倉が尽きるまで撃ちつくした。薬莢がはね、トム・ソン・サブ・マシンガンの銃身が赤熱して〇・二三三センチメートル弾が曳光を引いて夜空に消えていった。それは空しいが、しかし壮大な夜の花火のようであった。

—（おわり）—

奇蹟サロン

再び咲いた紫陽花の花

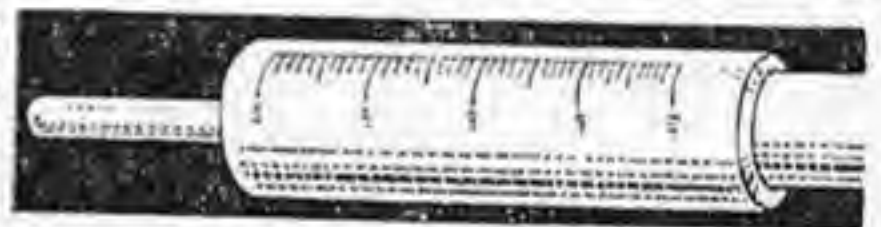
アジサイ
笠井奈保子



去年の九月号に「紫陽花の咲く朝」という私の自由日記帳をのせてもらいましたけど、早いものであれから、もう一年たってしまいました。私はなんだか、泣きたいような感傷的な気持ちになってしまっています。これで一年たってしまったんだわと思いますと、自分がうんと変わってしまったようで、心

もどなく思います。

それなのに、青や赤のアジサイの花は、やはり去年と同じように咲いているのです。女の人の縛られたシャシン、今でも興味は、あります。でも、最初の頃のような感激は、あまり味わえません。どうしたんでしょうね。私、少しはやせたようで、うれしいです。と



夏の浣腸余話

「浣腸ヤケ」について――

竹 迫 誠 也

豆腐にガソリンといった具合にピンカトリオではないが、兎に角ピンからキリまで最近の値上げはひどい。値上げといえば、浣

腸器まで値上げになっているのに

驚かされる。浣腸器がよく売れる

ようになったので浣腸器メーカー

が強気になったのか、それとも原

材料の高騰のためか？ その理由は

判らないが、たしか二月に買った

時は二百CC硝子浣腸器は三二

〇〇円であったのが先般、買った

時には、なんと八五〇〇円になっ

ていた。それでも店内に陳列して

あるところを見ると矢張り浣腸器

の王者として、よく売れているの

だろう。

あの二百CC浣腸器を手にした

時のズシリとした重量感は、何と

もいえず、浣腸器を手に持ってい

るという実感を持つ。二月に買った

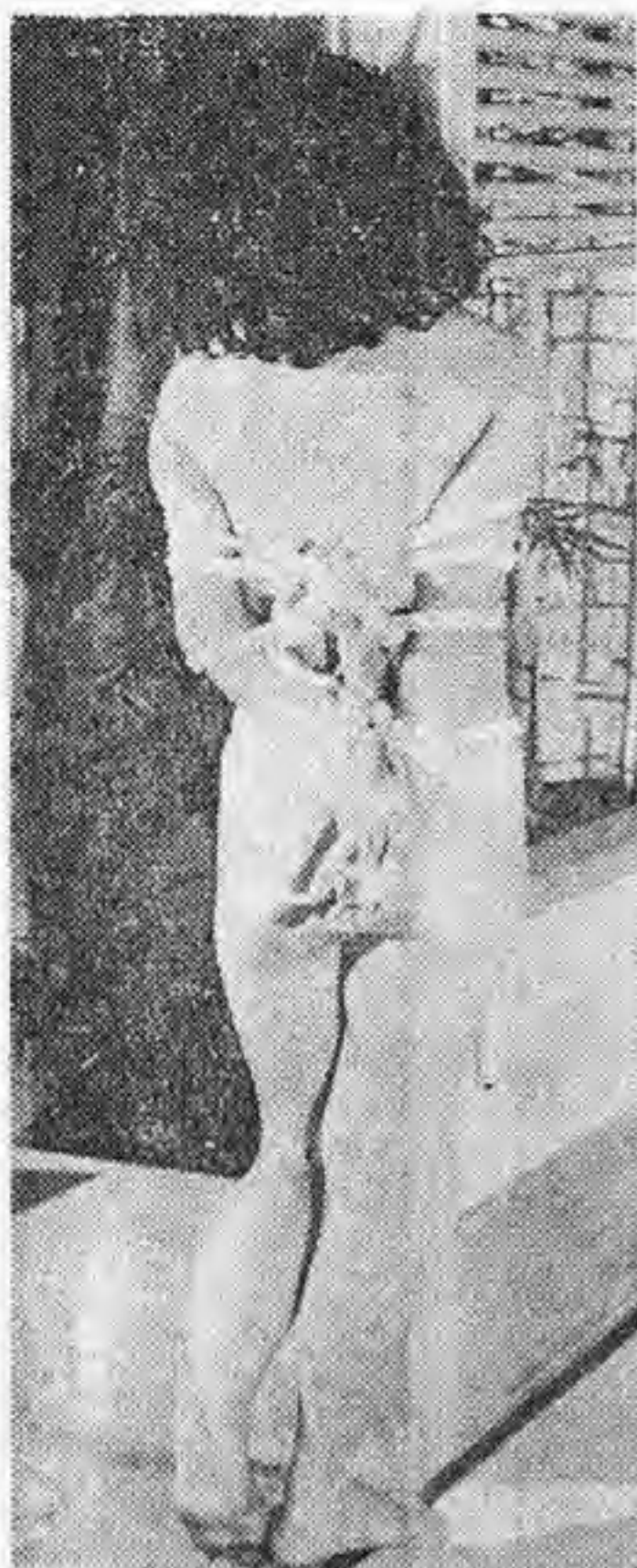
のに半年もたずに何故、買い

換えたか、確か硝子浣腸器は減る

ものでもなく、大事に使えば何年ももつのが常識なのだが、ところが十数年間、浣腸器を使い馴れ、浣腸に関しては少なくとも名人と自負している小生でも、浣腸器を扱うのに失敗したのだから吾れながらイヤになる。

というのは、小生が常時プレイする女性に対しては、浣腸法のひとつのテクニクとして、浣腸器のポンプの方を抜き取って、いわゆる噴管のついている外筒を、もろに彼女のアヌスに挿入し、大体二百CCであれば、外筒の半分位アヌスに埋まってしまう。

いうまでもなく、この方法は、色々な浣腸プレイが終わった後のひと休みとして、こうするのが彼女の時として外筒を半分位アヌスにのみ込んだまま、浣腸プレイの疲れであろうか、ウトウトする場が多い。なにしろ先端の噴管は腸の中の可成り奥まで挿入されているわけで、しかもグリセリン浣腸から食酢浣腸、はては水道浣



はいっても、お風呂へ入るとき、鏡にうつしたら、やっぱり、むくむく肥えているようで悲観です。

甘いものや御飯は余り食べないようにしてるんですけど、私って肥えるタチなんですのね。この間私にとっては大変うれしい贈り物をいただきました。それは徳島の四国三郎さんから、たくさんの土鈴を送って下さったことです。荷造りを嚴重にして下さったのに三つも割れていて悲しかった。でも土鈴なんて、なにのことか知らない人が殆どなのに、わざわざ編集部を通じて送って下さった四国三郎さんに厚くお礼申し上げます。私の部屋に、いついつまでも飾らせていただきます。

朝起きたときに感ずる気のめいるような淋しい気持が、こんな土鈴を見ていると、少しは休まりま

す。以前はシャシンを見ていたら何か胸のワクワクするようなパッションを感じたのですが、この頃は、かえって胸がつかえるような気づまりを感じます。

一体どうしてでしょうか。日常のお仕事に忙しくて、欲求不満が私をこんなにイライラさせるのでしょうか。それとも孤獨的な私のクセで、物事を悲観的にしか見ないからでしょうか。この頃、また、日記帳をノートで書いています。自分の気持をノートに、ありのまま、書いているときが楽しいです。人に見せるつもりは絶対にありません。それだから、楽しく書けるのです。読んでもらうために苦痛だということが、よくわかりました。四国三郎さま、ありがとうございました。お礼申し上げます。お手紙は書いておきましたけれど。

腸と数通りの浣腸をし、中のものを、これ以上、排泄物も何もない位までに出した後なので、腸内の通りは極めてよい。

さて、話を元に戻すが、そうして数時間たち、彼女が起きたいというので、半分のみこまれた外筒をアヌスから抜き出し、内筒のポンプを元通りすべく、外筒に一寸入れた処、どうしたわけか、これ以上、中にはいらす、かといってポンプを抜こうと思っても抜けず無理して入れようとした途端、バリッという音とともに、外筒の入口、三センチ位の処まで割れたというわけである。

幸い、彼女と浣腸プレイで散々楽しんだ後であったのでよかったが、浣腸器の扱いも余程慎重にやらないといかんと痛感した。しかも今の浣腸器は八五〇〇円もしたので、大事に扱いたい。グリセリンは今のところ、まだ値上がりしてないが、これも遠からず値上がりするだろう。そうなる余程、浣腸プレイも合理的に、かつ効果的にしないと結構、高いものになりかねない。

さて、余談になるが、浣腸ヤケというのを御存知か。いわゆるグリセリンを余り使いすぎると、ア

ヌスの周囲や内腿あたりが薄むらさき色になることだ。薬ヤケともいうが、小生、日頃、浣腸プレイの時は、濃ゆい時でもグリセリン一に水二に薄めてやるのが常だが過日、グリセリン百分のあのドロリとした濃ゆいので連日二回乃至三回浣腸していたら一週位たつといわゆる浣腸ヤケになった。

あわててグリセリン百分は使わないようにしたが、それから五、六日たったら浣腸ヤケもなくなりホッとした事があった。矢張り浣腸プレイは百分グリセリンを、もろにアヌスに注入した方が強烈である事はいうまでもない。その強烈な排泄感を長く耐えさせる為に上野広小路で売っている一本二百円の直径四センチ位のソーセージでアヌスに栓をし、双尻がおののきふるい、目に涙をためて排泄をこらえさせるのが、小生の浣腸のパターンでもある。

このパターンに隆開孔器または十五号ネラトンほか、色々な器具を駆使してアヌスを責めまくる処に、アヌスプレイの無限の奥深さと喜びがあるのだ。

六月十三日、午前十一時三十分
東京駅八重洲地下街
喫茶「バリ」にて。外は小雨。



おれは妬ける——焼持焼夫——

妬けてくるじゃありませんか。塚本先生の大活躍には、愛読者として大喝采の毎月ではあります。女性のアソコは何度見ても面白いと平然と語られたりすると、おれがアソコを見た女は何人いたつてと指折り勘定してみても、ガッカリするのです。

六月号では、深田菊子嬢に妙なバイブレーター責めを敢行して、ヒヤヒヤ、ドキドキさせられたりしたもので、あれぐらいの著想がなければ一人前のサディストとはいえないのかと納得もしました。以来、デパートなんぞへ行くと、バイブレーターを、はさんだ女がいるかもしれんと、妙な妄想に悩まさせられることもあり、そうすると、前の方がモコモコしてきて困る事態も生じますが、それは塚本先生の罪ではありますまい？！

さてさて、七月号に於いて、とうとう我々が前田真知子サンを責めまくり、その写真と文章を見て、頭がくらくらしてきて、フンマンやる方ない、といった想い。やるせなくなります。

べつに怒っているのじゃございません。内心望んでいて、それでいて、やってほしくないといった妙な欲望もあるのですが今回もそれと同じ。真知子サンが浣腸されているフォトがグラビアに出て、るのを見たとき、ドキドキして、息が詰まる思いをしたことがあります。その経過が今回ハッキリと分かりました。

テープレコーダーに真知子サンの嬌声を録音しようとして、くすぐり責めにしてみたり、どこやらをどうにかして、これはなんと云う！と真知子さんに恥ずかしい

／＼カッパ／＼というアダ名の私

.....余 田 曉 子.....

私は奇クを読んでいた、佐野みさ子さんを、いつも羨ましいと思っていました。私も、みさ子さんのように自分の考えの通り、自由に生きたいと思っています。私は海で泳ぐのが大好きです。燦々と太陽の輝く沖に出たら、私は、いつも水着を脱いで素裸になります。



自然に返って、身に何もつけずに自由に沖で泳ぐのは、大変気持ちがいいです。殊に、誰も人のいない沖の海面で仰向けになって浮かんでいるのは最高に気持ちがいいです。この写真はモーターボートの上から昨年の夏うつしてもらったものです。私はみんなからカッパとアダ名で呼ばれています。一夏、裸で泳ぐと真黒に日焼けして黒ンボのようになります。

一度、脱いだ水着をウキに結びつけておいたところ、それが風で遠くへ流されて困ったことがあります。その時は必死になつてウキのところまで泳ぎました。なにしろ、素裸なので海岸へは上がることができませんものね。でも水着も何もつけないで人混みの海岸を歩いてみたいと、ちよっぴり思う曉子です。佐野みさ子お姉さま、崇拜しています。また、誌上にお顔を出して下さいね。お待ちしています。



言葉を吐かせたり、我らがアイドルを羞恥に悶えさようというハッスルぶり。おまけに舌を使って体を愛撫したりして、このへんの描写は、ぼかされていて、明瞭には分かりかねて、かえって想像力が働き、頭にカッカしてクヤシイの

です。

まあ、他のマゾの女性を責めるときのようにバイブレーターなどを直接に行使して、責めまわるということのないのが唯一の慰め。理由はハッキリしていて、我々が真知子サンが男を知らぬためで、

バイブレーターを使う段階に至っておらぬため。その点で同じなのは、笠井奈保子嬢や西条紀代嬢でこう考えると塚本先生は意外と？紳士なのでしょう。

それにしても真知子サンも変われば変わったもので、最初に全裸

別嬪じゃないけど凄く可愛い娘に惚れた男が現われた 出雲強造

いつもつよいぞ

俺は最近の奇クの誌上にあらわれた女の子の中で、西条紀代というカワイ子ちゃんに、滅法いかれた。あの塚本のおっつあんが書いてたように別嬪じゃないけど凄く可愛い子なんだ。奇クに載ってた写真を見てい

ると、たまらなくなつたぜ。そこの街の中で、ふっと見かけるような顔なんだな。きつく縛られてながら、あのあどけない表情がまたイカスじゃないか。ウーマンリブだとか、女上位だと言われる世の中で、この西条紀

世なんて子は、貴重な存在だぜ。男の言いなりに飼育されるなんて凄じやないか。三月号から五月号まで、俺は西条紀代の生長ぶりを見て、思わずデートを申し込みたくなつたな。これこそ、俺にとっては理想的な相手だよね。

俺も実際のところ、田舎のボツと出の男なんだ。それだから知らねえけど、この紀代という子の顔にひかれるんだな。どうやら岐阜近くに住んでるらしいんだが、俺の住んでるところからも遠くないので、特に親近感を覚えたよ。俺は24才、ろくな男じゃないが、こんな俺でもよかつたら、一つファンとして、つきあってくれよな。それから、これからは誌上で顔を出してほしいものだ。俺は待ってるぜ。

写真を撮られて、ヒザがガクガク全身の力がぬけたような感じという告白からは、思いも及ばぬ進歩をして、開股なんぞは当たり前、しまいには、粗相をするところまで塚本先生にご披露するとは、あの清らかな顔で、どんな風にするんだらうと、現場に居合わせたかったのに、所詮それもかなわぬ夢。さすれば、ただひたすらに、あんまり真知子サンに手荒なことをしないでと、塚本先生にお頼み申すぐらいが関の山らしい。前田真知子サン。見れば見るほど、いい女とは、あなたの事ですぞ。女子大生時代の清らかにして豊かな肢体。やや細目になったOL時代。そして今はまさに女盛りへの入口。脂肪ものつてきて、たまらないくらい色気が出てきた。もっと厳しく責められて、あられもない肢体を開陳して、マゾとして、女として、一段と開眼させられて、これから益々色っぽくなることを期待しています。それを愛読者に逐次、報告するのは塚本先生、あなたの義務ですぞ。こんなに妬きもちをやかせているからには、それぐらいのことは、してくれなきゃ困ります。

【モグサ】と共に青春を

山口 幸子



私の家は福井県の片田舎で、代々続いた灸治療所です。父で家業も五代目になり、門口には、「家伝の名灸」と彫り込んだ古くさい板の看板が、ぶら下がっています。

代々続いてきただけあって、灸をすえにくる人は、口づてに後を絶たず、かなり遠くからも訪れます。私は一人娘なので家業を継ぐ意味もあって、針灸学院へ通わせ、資格をとって、いまは家業を手伝っています。

お灸というと、年寄りだけの古くさい治療法と思われ勝ちですがいくら医学が進歩しても、やはり東洋医学にも、捨て難いところがあるのか、最近はやングの連中も時折は訪れます。勿論、年寄りが

大半ですが、時折、若い人に灸をすえることがあると、こちらも若いせいかな、熱さに耐える姿に接して胸が高なるものです。

先月の日曜日のことでした。まだ二十才前と思われる若い女の子が母親につれられて治療に来ました。なんでも生理が不順とかでアトがつくと嫌がる娘を母親が無理につれて来たようです。

女の子は恥かしそうに、ためらい勝ちに、セーターを脱ぎすてブラジャーだけの上半身になって父に背を向けて腰のあたりに灸点をつけられ私のところに来ました。

線香に火をつけている私を横目で眺めながら、不安そうな表情で顔を赤らめています。背中の灸点を数えますと、ずりさげたジーパンの腰に四点、それに肩口に左右一点ずつ、合計六本の印がつけてありました。

私は慣れた手つきで、モグサを灸点に貼りつけました。家伝の名灸だけあって、モグサは、かなり大きなものです。うすいノリを灸

点につけてモグサが落ちないように貼りつけるのですが、小指ほどの大きさはあります。

私は腰のモグサ四点に一度に火をつけました。普通は二点ずつ火をつけるのですが、年若い同性が熱さに耐えることに興味を感じていましたので、わざと四点、同時に火をつけました。

つややかな色白の腰から、四筋の紫煙が静かに立ち昇ります。やがて、モグサが燃えつきかけますと、「ウーン、アツ、熱い」と、急に女の子は口から声を出して腰を、よじり出しました。

「イヤーン、熱い。ウーン」悲鳴を挙げて熱さに耐えています。私は、わざと冷静をよそおいふくらとした白い肌に喰い込むモグサの燃えカスを見守っています。したが、内心は、なんともいえぬ興奮状態になってゆく自分にハッとしました。

モグサが燃えつきると、すぐに新しいモグサに置きかえて線香の火をつけてゆきます。肩口のモグサが燃えつきる頃、熱さに耐えかねて、涙をポロポロ流していました。まだ二十才にも満たないカワイ子ちゃんの肩口や腰に、黒々とした灸痕が点々と残っているのが

いかにも痛々しく私の目に飛び込んできます。

同じ年頃の同性をお灸でいじめることに、密かな楽しみを知っている今日は、若い女性の訪れを待っている今日この頃です。同性とは別に、若い異性の熱さに悶える姿もまた性的な美しさがあります。

先日、二十過ぎのサラリーマン風の男性が胃が、なかなか治らないといって訪ねました。ハンサムな青年で、父に灸点をつけられた若々しく艶のある背中を見ていると胸がドキドキします。胃のうしろあたりの四つの灸点に、モグサを貼りつけて火をつけました。

彼は背中を丸めて熱さに耐えています。さすがに男性だけあってうめき声は出しませんが、小指大のモグサが四つも同時に背中で燃え出しては凄く熱い筈で、必死になって熱さに耐えている様子が、私の胸にも、ジーンと感じられます。

背中の灸が終わり、寝ころんで貰って、胃の上にも二つ、すえることになりました。お腹の方は背中と違って皮膚がやわらかいため熱さは、きわめて強く、家へ来て灸をすえる人は、誰もが額に汗を浮かべて必死でこらえます。

彼の胃の上に二つ、大きな艾柱を立て、線香の火をつけました。若い女性の私に灸をすえられることで、恥かしそうな顔をして、横

サロ

穂抄

⑥

T・T生

八月号の「パロディ花と蛇」を読んでいると、桂子が岩崎親分からホリモノをしてやろうか、と言われる場面が出てくる。「お前に

ハブの急な階段を昇った物置のような部屋に連れ込まれたことがあった。

暫くして連れてきたのは年の若いのだけが取り得といった色が黒くて背の低いブスだったので、も

「高うてもよい、飛び切りの美人を連れて来い」と怒鳴ると、横つとびに出ていった。三十分程待たされて入ってきたのは、あつと驚くほどの美人だった。スタイルも

一つ、うんとエロなのを彫ってやろうか」と岩崎が言うのと、桂子が「あたし、あたし、皆さんが、そうお望みになるのですたら……」と答えるところである。

自分の女の肌に自分の持物だというシルシの彫り物をするということはやくざの世界ではよくあることらしい。私も一度そういう女に会ったことがある。それは暴力バーのキャッチガールにちよっかいをかけたたり、売春窟に沈没していた頃のことだ。釜ヶ崎の裏街でポ

じめました。

人でないような気がしました。

私はモグサが落ちないように、彼のお腹を押えつけました。なんだか妙な気持で、彼が行きずりの

私は、これから、他人にお灸をすえつづけてゆきますが、ヤングのお客の多いことを祈ります。



早速、追い返した。次に入ってきたのは、色は来たのは、色はたしかに白いがサンダルをはいた足が大根のよう

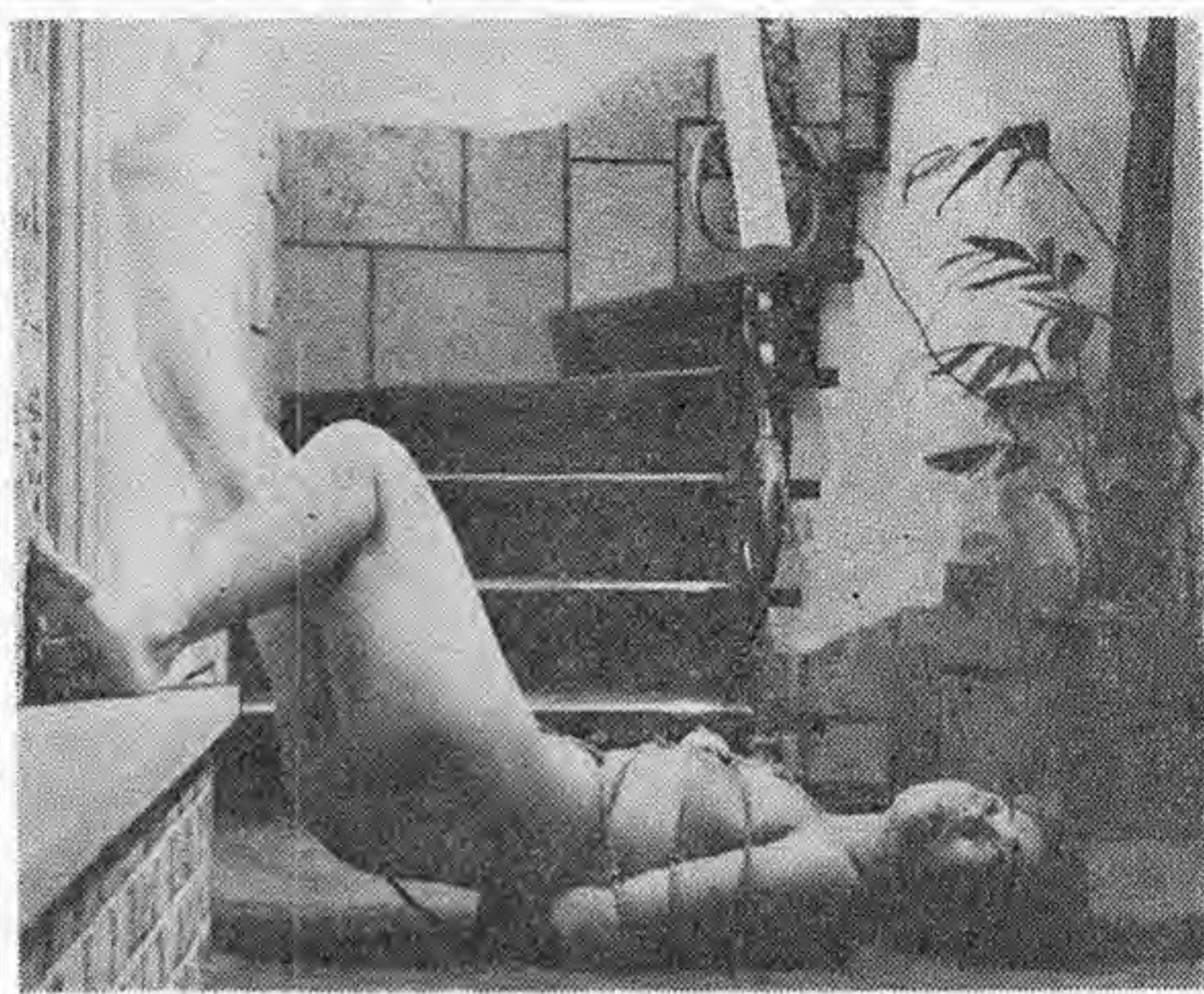
洋服や下着を全部脱がせて、例によって例のポーズをさせたが、彼女、内股の一部を掌でしっかりと押さえて放そうとしない。いやがるのを無理にはらいのけて、私は、あつと驚いた。内股のつけ根の真白い肌に淫らな文句の彫り物がしてあったではないか。家出してきて魔手に落ちたのか、或は誘拐されたのか、私は愁いを帯びた女の悲しそうな、諦めきった女の表情を忘れることが出来ない。

「こんな屑しいのかッ」の怒ったら、オバハンは、私の権幕にびっくりして「いることはいますが、ちよつと高こうなりますか」と耳元で、囁きやがった。

『美しき縛しめ』と『責め』のビジョン

＜口絵写真の解説に添えて＞

塚 本 鉄 三



「美しいものは恒に美しい」殊にSMに関心を持つ人達にとっては女性の緊縛姿態のなかに、心のときめく妖しい魅力を抱かせられるに違いない。単にエロチックなものの一分派としてではなく、SM愛好家のための解説を試みてみたいと思う。

△美への憧憬▽（前田真知子）
伸びやかで若々しい肢体の背後に潜んでいる彼女の底知れないマゾは、神韻標渺として、その麗姿に漂っている。私は彼女を縛るたびに、何故、この美しい女性は、かくまで、緊縛に憧れるのだろうかかと思ふ不思議に思うことさえある。

どのように強烈に縄を掛けても、「辛抱します」と、彼女の口から洩れてくる。そして、羞かしくて耐えられないような格好にさせたときも同様に――である。

土壇場の女囚（美木乃々子）

胴体を真二つに試し斬りされようとしている、うら若き女囚の観念しきった全身の表情の中に、哀れさと共に、限らない被虐の情が満ち溢れている。生身の女体が、名刀の一閃のもとに、上半身と下半身とが、その所を異にするという緊迫した一瞬。私は彼女が目隠しされたとき、そんな感じを、ぐっと受けたものである。

猪吊りの女体（左近麻里子）

手と足を一緒に括って吊ったとき、ぐぐぐと、瞬間、伸びたように長くなった女体。そうして吊り縄を中心として、くるり、くるりと回りだした。頭を見せたときよりも、お尻を見せたときの方が、より色気があった。

マゾに惑溺した目（中河恵子）

彼女の裸身に縄を掛けたとき、私の手にビリッと電気のようなものが伝わってきた。そして、ぽっちりと可愛い、くふくらんだ蕾のような乳首が、途端にピクッと動いたような気がした。それは気だ

ったかもしれない。でも、私にはそう思えたほど、彼女の胸からお臍へかけて、まぶしかった。

溢れるナミダ（南加津子）

何故なのだろうか。縛られて、

彼女は何故泣くのだろうか。私はその涙の中に彼女の肉迫的なマゾに対する情熱を見たと思った。

そら怖ろしいまでの執念でもって、すがりつくような目から涙が溢れて、一粒二粒、頬を伝って落ちる涙を私は美しいと思った。

もがきたい年頃（西条紀代）

こんな縛り方にしておいて、私は、じろじろと彼女の全身を足の爪先に至るまで、とっくりと眺めてから、足の裏や首筋、お尻などを擦ったものだ。薬をかけられた芋虫のように、もがきまわる彼女の肢体の変化を、いろんな形でフィルムに残すことが出来た。

擦りたいポーズ（川路むら子）

素直で上品な若奥さま――といったタイプ。この淑かさを、どのようなにして、一皮むいてゆくか。こんなポーズで腕の下を擦ったら狂ったように暴れだす筈だが、彼女は落着いて「およし遊ばせ」と言って微笑んだ。こんな女性を、妻にしている男性は幸福だと、しみじみ思った。

緊縛の法悦境（笠井奈保子）

ノンプロタレントの彼女に、演技の指導や要求をしたって無駄である。自分で好きな表情かしない女である。はち切れそうに若々しい二十才の肢体は、どこを押してもピンと、はねかえすように弾んでいた。私は、そんな女の体を貪婪に、ただ好色の目でだけ、眺めていた。と、彼女の表情に、カメレオンのような変化が、あらわれてきた。

カメラの狙う目標、晒す裸身のすべて（鈴木千鶴子）

柔らかくて、ふわふわとしている

で、それでいて、要所要所は、適度に締まりのある彼女の体であった。タコのように吸いついてきそうな若さのパッションに、私はいたく魅力を感じて、私は完全に溺れきってしまった。三脚にのせたカメラでは、彼女のどんなところを、アップで撮ろうかと、そんな淫らな想念を燃えたたせていた。彼女は、なんといっても、素晴らしいタレントであった。

脚を挙げさせる（玉木章子）
「脚を挙げてみよ」と口で命令し



て挙げさせてみるのも面白い。だが、自分で挙げるというのは限度がある。その点、縄で無理矢理、挙げさせると、思わぬ絶妙な場面が展開するものである。彼女のよいうな飼育経験を持つ女性には、いささかも躊躇することなく、直ちに核心に迫っていった方が、彼女も如何にも責められた——という感じがするのではなからうか。

禪式縛りの謎（松本たえ）

パイプ責めの場面である。装置して蠕動をつづける、その小型の悪魔が、とび出さないための股間縛りである。私は彼女がどんなに

ころげまわって悶えに悶えぬいても、その奥深い装置をはずしてやらない——という非情さを、徹底して持っていた。もっともっと苦しめ、そして、もっともっと喘ぎ呻き、悶えろ——と。

麻縄のトゲに耐う八三浦純子V この淑かな女性にだったら、このトゲトゲのある麻縄で思いつきり縛って、ホエ面をかかせてやろうと思った。チクチクと陰性的に刺さっていったら、この夫人は一体どのような悲しい目つきを、するだろうかと、私は大いに、興味を持っていた。でも、そんな私の期

待を裏切って、どんなに悪どく責めていても、彼女の目は澄んでいた。彼女は、やはり女菩薩の一人であったのだ。

股間縛りが痛い（江口淑子）

立ったり坐ったりして縛っておいて、さて、転がして横臥させると、思わぬところで縄が交に締まってきて、どうしようもなくなってくる時がある。如何に縛られることが好きな女性であっても、その場所によっては、とても耐えられないことがある。最初から、それを意地悪く狙ったというわけではないが、どうしても、その部分を点検せざるを得ない程、切迫した場面が展開したことがある。

白人の日本式縛り（ケニー）

椅子の生活に慣れている金髪女性のシーラー・ケニーに、机の上に正座させるとのことだけでもこれは苦痛であろうが、彼女の国のように前手縛りというわけにはいかない。やはり、日本式とばかり、私は後手に縛ってやった。白人女の体の中へ侵入した時も、人種が違っただけに、如何にも征服してやったという感をしたものだったが、こうして、縛り上げた金髪女を眺めていると「ざまあ見ろ」と冷笑したくなったが、そのあと



で、ちよっぴり可哀いそうになった。

妊婦の浣腸責め（南加津子）

妊婦だから——って、浣腸を施すのに特別に変わった筈もない。しかし、妊婦も八カ月ともなれば普通と違って、浣腸されるといふことは、うんと恥かしいに違いない。彼女の場合も、縛ってからではなかったら、とても、浣腸なんて出来なかった。

操り人形責め記（深田菊子）

縄に操られる人形（深田菊子）

いつ見ても、あどけない顔つきだ。それでいて、不意をつかれてドキリとさせられるような不敵なマゾ精神の持主である。私の手にした縄を引いたり緩めたりすることによって、彼女の手足が、どのように、あられもなく動くか、私は最大にハレンチな考えで、この仕掛けを操った。

彼女から、SMプレイをやらうと誘いかけてきたのを幸いに、私

は前々から考えついていた、この奇妙で、その上、悪趣味的な責めのアイデアを實施に移した。イヤイヤと口と口では言いながらも、彼女はカメラの前に、いろんなポーズを展開してくれたのだった。

ツインのベッド（荒尾慶子）

惚々とするような艶と丸味を帯びた裸身である。こんな女性とだったら、いついっまでも一緒にいたい——と、思う彼女であった。

ツインベッドの白い毛布の上で初めて縛られた彼女は、消えいりたいたばかりの表情で、顔を埋めていたが、あとで聞けば、興奮のため、何もかも、わからなかったそう。私は縛っていて、彼女の体の、どこもかしこも、奇麗に見えて仕方がなかった。

引き回しの出発（富田由美子）

稚妻の、ぼってりとふくらんだ可愛いお腹を見せて、彼女は後手に縛られていた。これから責めの祭壇へ連れてゆかれようとして、いるところだ。さんざんごてて、やっこのことで衣服を脱いで見せた裸身である。仕方がないというアキラメの表情で、責められて行く哀れさが、全身から、にじみ出ている私の好きなムードである。

浴室での余情（前田真知子）

房々とした黒髪を、なびかせていても、後手高手に縛られていては、それを隠すことも出来ない。僅かに長身をかませるようにして、羞らいを見せているが、その澄んだ瞳だけは、じっとカメラの方を凝視している彼女特有の、あでやかなポーズである。

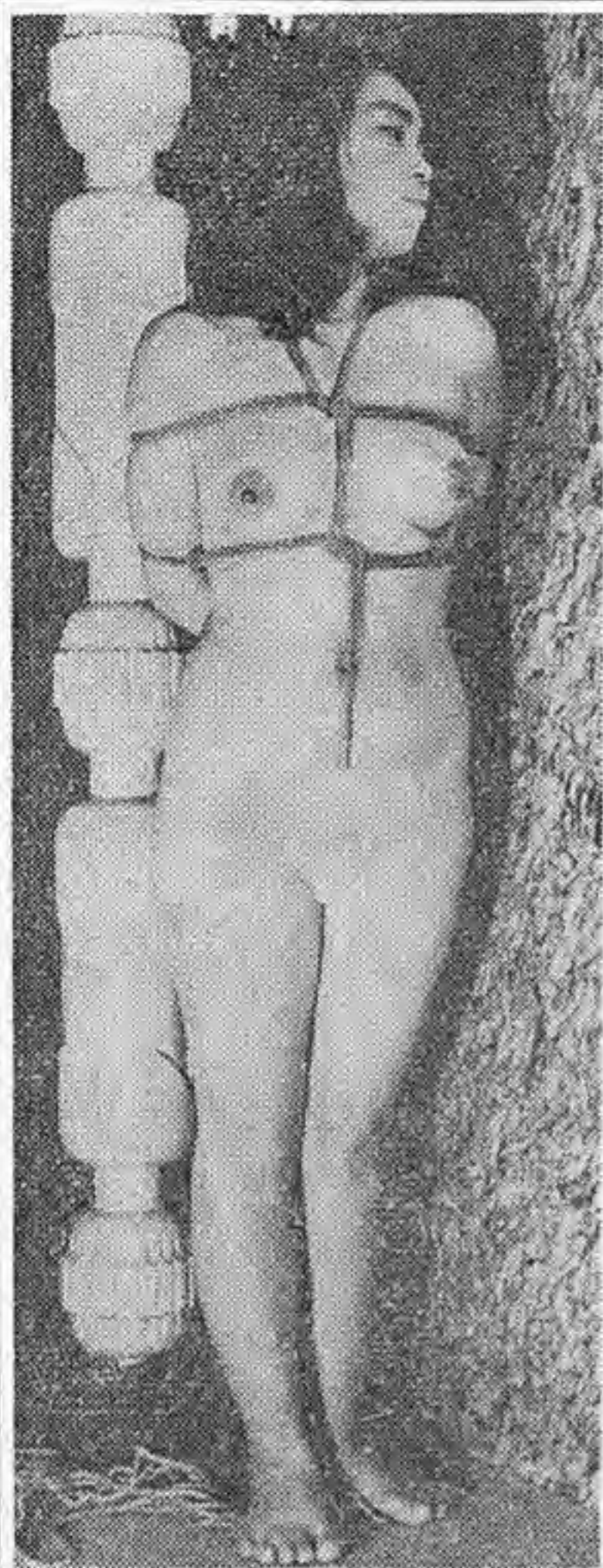
ブランコ吊り（高村浩子）

両方の膝頭と後手縛りの縄尻とを、鴨居から吊り下げてみた。思ったより、案外、苦痛を訴えたのだが、彼女のM性と体重の軽さに助けられて、数枚のシャッターを切る間は、なんとか辛抱させた。あわてていたので、小道具に用いたスツールを取り除くのを忘れたが、私が彼女の被虐姿態を鑑賞するときには、この腰掛けが、結構

役にたつのである。
脚光を浴びた想念

（木村洋子）

彼女こそは、もう私の手にも負えない物凄いマゾだなあと、幾度思わせられたか知れない。柱の宙縛りにしたって、開股縛りにしたって、それこそ、平ちゃらだ。もっと強烈な羞恥責めをと願う彼女に対して、開股の中心部目がけてストロボを一閃させた。痛さよりも、みじめさと汚辱に燃えるM女の生態を狙ってパチリ。彼女のマゾ性を満開させて昇天



させる自信のある方は、私に御一報、頂きたいものだ。私と一緒に責めてみようではないか。私は潔くアシスタントを、つとめよう。

強調したメロン腹

（南加津子）

卓の前で、いよいよ、これから本格的に責めようという時

に彼女の八カ月の妊娠美を正面から狙いをつけてみた。勿論、まんなかいお腹を少しでも大きく見せるために紐を利用したのであるが、妊み女が比較的、多いという今年でも彼女の写真は貴重な資料といつてよいだろう。縛られた妊婦が、こうしてカメラの前にポーズしてくれるということは極めて稀有なことなのだから。

白さを見る内股

（笠井奈保子）

肉づきがよくて陽にかくされている内股の白さは、また格別である。紙のような白さでなくて黄色人種特有のぬめり気のある肌の色が、私の目には一層、白く見えた。そして自分から、もうこれ以上は開かれないうというくらい開ききった彼女の心情に、秘められたM性を、ひしひしと感じたものだ。縄という媒介があつてこそ、彼女のマゾの芽生えも、安堵して、開花したのだらう。

（写真は左近麻里子）

僕の妄想
絵そらごと

秋野美水

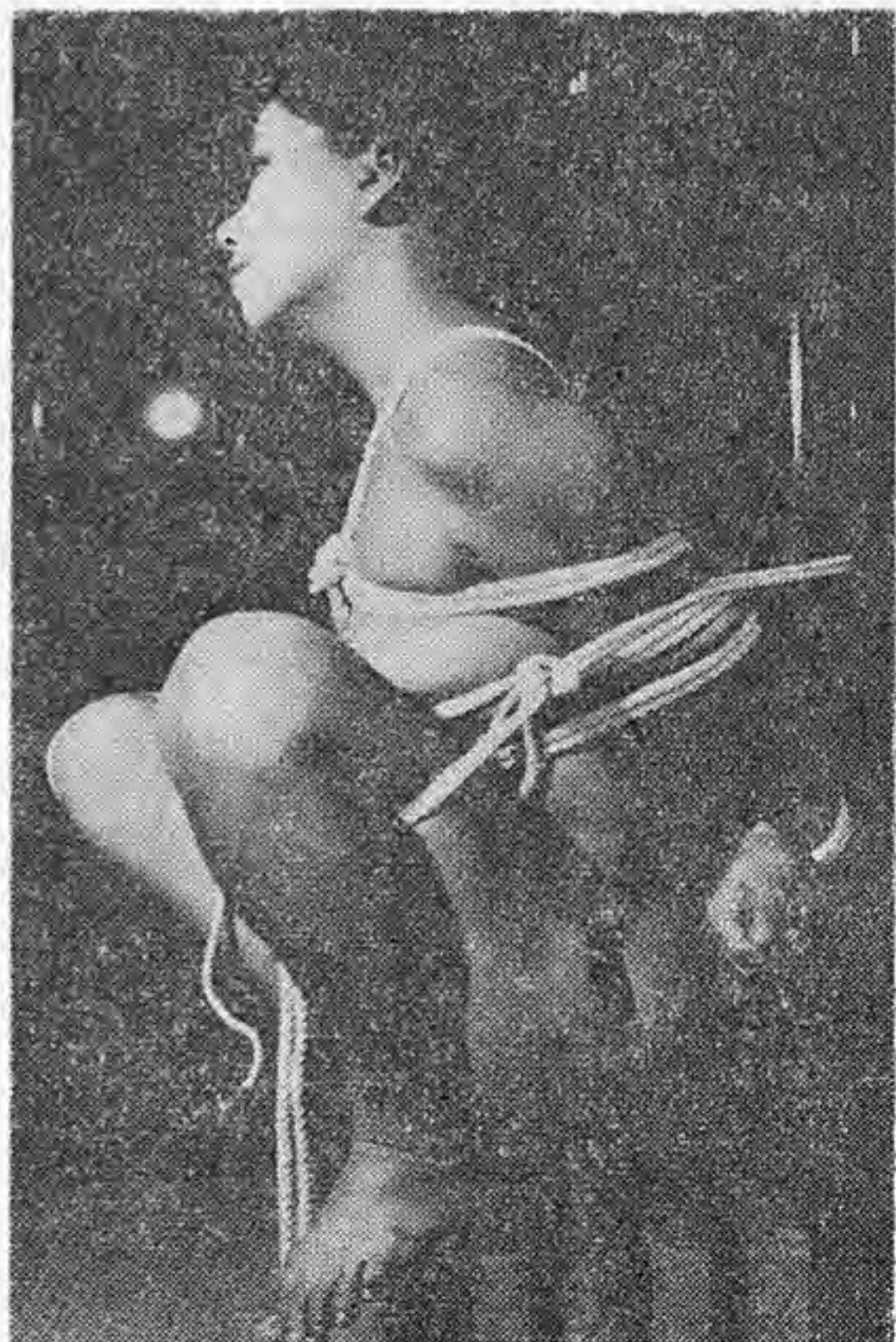
最近はおルノブームとかで、世界的にフリーセックスじみた事が氾濫し、常識ある人たちは、さぞマユをひそめておられることと思います。けれど最近の事件、O映画雑誌、その他、いろいろなものを見たり、あるいは聞いたたりしておりますと、近い将来、こういう状態は、さらに進展し、そして、それが、ごく普通の出来事として考えられるようになるのではないかとこのような気がします。

例えば身近なところでTVに例をとってみますと、山本リンダという女性歌手が、ノーブラで背中まる出し、太腿まで割れた衣装を着て、身体を異様なまでに躍動させ、挑発的な歌を歌い始めた時、よくも、あんな恥かしげな恰好をと思ったものですが、それが今では他の歌手が彼女の身振りを真似て歌ったり、子供に覚えさせて、のど自慢番組に出演させたりしています。

また、私の住む市内のある大手デパートには、かなり公な売春グ

ループがありますし、あるマンションでは乱交パーティなども開かれたりしております。これらと同じように、現在サドとかマゾとかいわれて貴誌に載せられているようなものも、今に自然に生活に融け込んでくるように思います。

映画雑誌などは、より大胆なものを描くであろうし、それを見る側の人々にとっては単なるSEXだけでは、ものたらなくなっていくのは当然です。各種パイプリーターが店頭に並べられたり、パンタロンに裸の線を浮きあがらせて街を行くようになるかもしれませんが、体内に埋め込んでも、美しい音色の鈴などというようなものが作られ、かわいい音をさせながら散歩したりするようになるかもしれない。そうになると、NHKの体操番組などは「はい、氣をつけ。両足を心持ち広げて、真っ直伸ばして下さい。はい、そのまま上半身を倒し、頭を両腿の間に入れます。ヒザを曲げないように、そのままの姿勢を十分間、保ちます。出来ない人は、誰かに頼んでナワで縛ってもらって下さい。その人には罰として、お流腸をいただきます。容器の持ち方は……」などと、やらないでしょうか。



——マニアの願い——

明日も縛りを

早木夢二

まあ、ちょっと考えても、いい年をした大の男が、素っ裸に菱縄股間縛りを受け、後手高手小手に縛られて拷問プレイを楽しんでいる図なんて、他人目から見たらバカバカしい限りだろう。

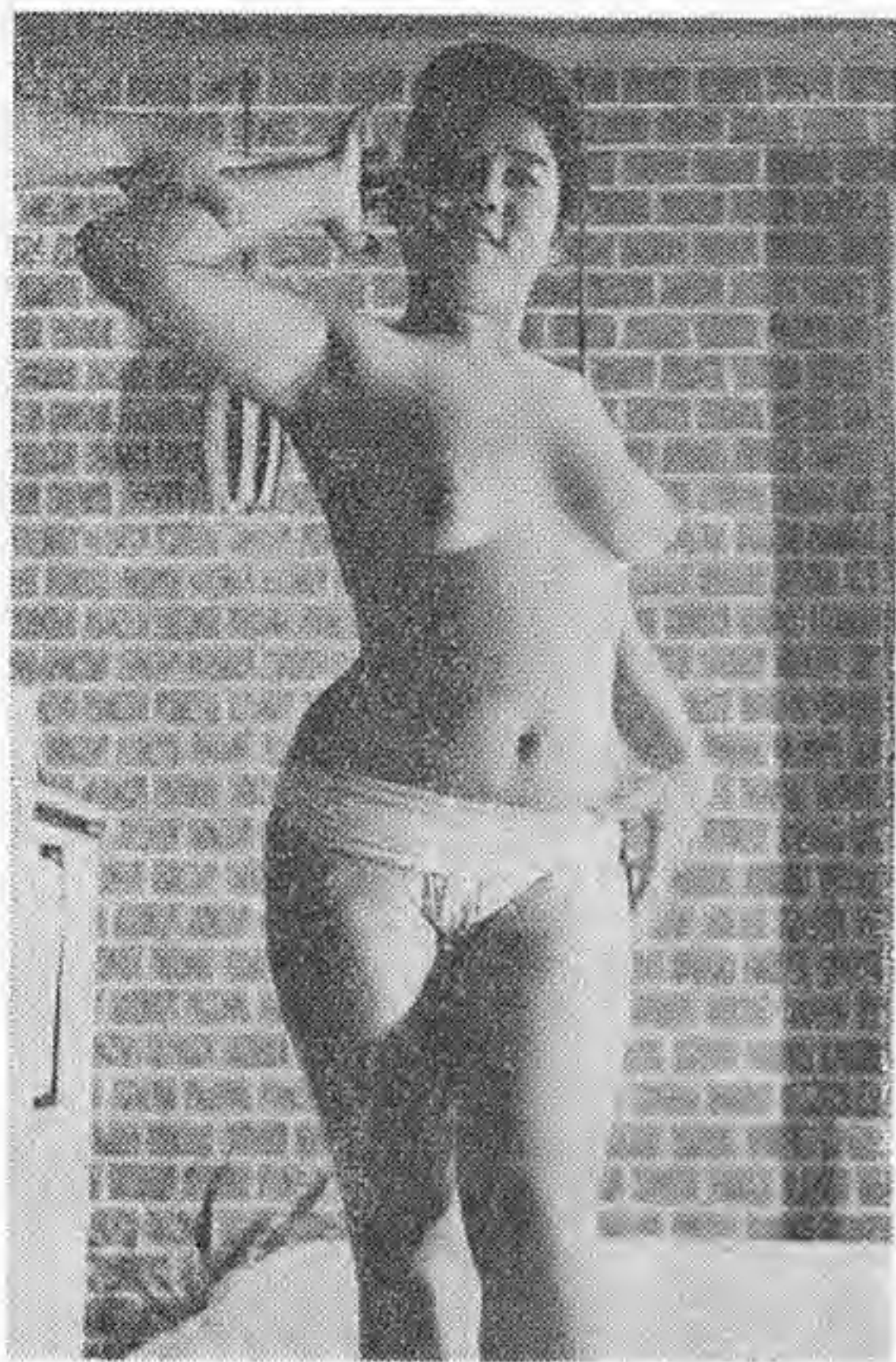
水々しくピチピチした若い女なら、奮にのってのお白洲通いも、弥次馬連中の視線がドカッと集ま

ることだろうが、こんな野郎ときては「チエツ、うす汚ねえ！」位のもんだろう。

せいぜい胸をはって菱縄縛りを誇示しているつもりでも、こんな野郎の裸引き回しなんて、見せられる方でサマにならないもんだらう。

そんなことは百も承知。だが、止むに止まれぬ、縛り心。

慶子に縄尻をとられて拷問部屋へ引き立てられ、席の上に引き据えられて責め問いを受ける時、拷問台にのせられて、二、三枚の石



このように、欲望を満たす表現が変わってくれば、欲望の対象も当然、変わってくるでしょう。ホモセクシュアルとかレズビアンとか、いわゆるものなどです。女性的な男同士、男性的な女性同士。これに異国人が交わったりするともっとユニークなカップルが出来ることでしょう。

カップルでなくても、S的夫婦がM的人間を共用したり、また、その反対の事があったり、もっとたくさん人間が一つ家に住み、さまざまな愛や欲望を得る生活を

営むかもしれません。そして、何れも性欲の対象は人間でなくてもいいわけです。本人が犬が好きであれば、犬を夫あるいは妻の代りにすれば、いいし、別に犬でなくても、その他にゴリラ、チンパンジー、ヘビ、羊、金魚。砂糖があれば、アリさえ遊んでくれます。このように欲望の表現と相手は無数にあります。こういうふうにかえっていきますと、行き着くところがありません。やはり、手の届く範囲で出来る限り精一杯、楽しんでいけば、いいのでしょうか。

を抱いている時、海老縛りに固められて、己が股間に直面している時。さては、便器の上に跨がって尻を高々と振り上げ、したたかに排便する時……

慶子は興味がないことはないのだが、現実はそのうだ。器用な人はハリツケ柱を作っているようだが、不器用な私には、とてもそんなことはできない。だけれど「江戸市中裸引き回しの上、鈴ヶ森に於いてハリツケの刑に処す」というのが、私に裸せられたお処刑だ。それに、素っ裸の体を大の字に大きく開いて、もう慶子には珍しくないというものの、私たちの拷問プレイの名義上？の帰結であるハリツケにかかって何もかも、さらけ出している姿もまた何か新しい感興を、そるよ

うに思われる。

「何か考えましょう」

と、慶子は言うてくれるのだが

とりあえずハリツケの形だけ、と

って壁の前に立ってみたり、あり

なぐり捨てて慶子の前に私の「本

当にお前らしい」姿を晒している

ようだ、誇らしさを、しみじみ

と感ぜずにはいられない。

この頃、私が慶子にお願いして

いるのは、拷問プレイが一段落つ

いて、恒例の裸引き回しが終わる

と、ハリツケにかけてもらいたい

ということだ。

「だけど、ハリツケ柱なんて、な

いじゃないの」

慶子に縄尻をひかれて……

お処刑のハリツケの段階にきたから、私たちのプレイも、そろそろ終わりに近づいたというのではない。キリストのようにハリツケから、よみがえって、あすも早木夢二は行くのである。一糸まとわぬ全裸の菱縄股間縛りをいただき慶子に縄尻をひかれて……

マゾ恋歌

静子のうた

北川まりこ

出番だと淫らな笑いを浮かべつつ
檻の戸開く調教師の影
両手をば背中に組みてうなだれる
諦めの身にマゾの火点る
手首より巻かれゆく縄ヒシヒシと
胸に廻りて乳房締めあぐ
手慣れたる縄のさばきに縛られぬ
全裸のわが身がなじがらめに
ぎっしりと肌に喰い入るこの縄目
わが血騒がす魔力ぞ憎らし
縄掛けを点検する目に晒されて
すくみしお臀を平手打ちさる
内心に燃え上がりたるマゾの火と
おんなの誇りの斗いぞ悲しき
着飾りし女にとられた縄尻に
追い立てられる裸身ぞ羞かし
踏みしめる石の階段冷たくも
嘲ける女は尚さらに冷たし
好色と嘲笑の目につつまれて
うしろ手の肌あかく染まりぬ
騒がしく群がり来たる客たちに
いたずらされつつ化粧されゆく
見世物のメスはこれぞの口上に
ルージュ引かれし唇ぞわななく
縄目からくびれ出したる肌山に
触手覚えてマゾの火ひろがる

「M」女通信

雨の日の妄想 高村浩子



「女王様への通信」

家畜プレーと道具プレーを

高岡三夫

久し振りで投稿致します。
六月号、読者通信の高千穂様、
御投稿拝見致しました。永い間、
私が探し求めて居た、まぼろしの
女王様は、貴女様ではなからうか
と思われる程、理想の女王様であ
ります。

奇クを読み始めてから二十年近
く、その間、数々の名作の中のド
レイに身を置き換えて、如何に数
多く、空想の中で、作中の女王様
に御仕えしてきたことか。然し現
実に戻ったとき、如何に空しいこ
とか。

女性上位とか、ウーマンリブと
か云われて言動の端々にサジスチ

今日は朝から雨が降っている。
こんな日は、私は、なんとなく責
められたいという気持がしきりに
する。写真にとってほしいという
気持は、この頃は余りしない。

写真をとられることは好きだけ
ど、そんなことで時間がとられる
のが惜しいから、アグラ縛りでも
坐禅ころがしでも一番恥かしい縛
り方にして思いきり責められてみ
たい。浣腸責めで汚物にまみれて
放っておかれるなんて、考えただ
けでも、胸がわくわくしてくる。

私は相変わらず平凡な生活。四
月号で諏訪大路健さまへ答えた返
事をのせて貰ったけれど梨の蔭。
いつものように判で押したように
会社へ毎日、通っております。

ツクな傾向の見られる現代女性も
心からプレーを楽しむと云う程の
真の女王様は稀な様です。

成程、巷には報酬に依っては形
だけはSの女王様の真似事を行な
って下さる中途半端な職業的な女
王様も見られない事ありません
が、鞭打ちや緊縛は出来ても、屈
辱プレーと云う事になりますと、
理想の女王様には程遠い感じが致
します。形は真似られても、心は
真似られないから無理もない事と



惨めなる悦楽求むる胸底の
血汐の叫びにうろたえるなり
あさましき全裸縛りの牝と化し
客に向かいて責めねだるなり
仕込まれし芸のうちでも情けなき
果物あそびを見せよとの掛け声
拒みても許さるはずのあらばこそ
腿なげられつつ承知のうなずき
果物を手に手にわれに襲いくる
まえもうしろも狼の列
ほほ染めて口ごもりつつ前口上
教えこまれし微笑みもこわばる
諦めてなぶるに任せしわが肌を
冷たく滑るくだものハダ
屈辱にマゾ火ますます燃えあがり
悶え狂いし細目もわすれて
(まりこの「静子プレイ」から)

思います。

貴女は会って居て、相手の方が
圧倒されるとか。生れながらにし
て威厳のある、まことに女王様に
打ってつけの方のようです。そして
精神的なSで、屈辱プレーをお好
みの由。私も鞭や緊縛に依って調
教されるドレイプレーよりも、既
に調教されつくして、女王様の意
のままに駆使される家畜や道具と
してのプレーを好みます。

屈辱の最たるものは、人格を否
定される処にあると思います。ド
レイとて、人格を無視されること
は勿論ですが、人間であることに
は違いありません。人間とは認め
られない家畜、最早、生命さえも
認められない道具プレーこそ、M
プレー(女王様からはSプレー)
の最高、いや最底の段階ではない
かと思ます。

失神するまで鞭打ったり、逆さ
吊りにしたり、血を流したり、残
虐な事がMプレーとは、私は決し
て思っています。又好みも致
しません。家畜として心から女王
様を御慕いし、道具として御役に
立てば何より幸福なのです。たと
え、人間の形をして居てもプレー
中はゴム人形に等しい人間便器に
使って頂くも宜し。跪いて椅子代

りに、又舌人形として快樂のため
の道具として使用されようと、工
夫次第では、まだまだ、いろいろ
と使い途はあるかと存じます。

女王様の優越感を満喫なさるに
は、家畜プレーが最適かと思いま
す。私は肩幅広く骨太の筋肉質で
ありますので、頑丈な体格と温順
な性質は、女王様の馬になるため
に生れて来た様な男であります。
平常は勤務先にあつては、それ相
応の職にある中年男を、肩車や馬
にして、自由自在に乗りこなす爽
快さを充分に味わって頂ける筈で
あります。

普通の正常な交りでは不感症の
由ですが、人格無視の家畜プレー
や道具プレーに依り、徹底的に女
性上位の優越感に浸って頂く様、
是非共、御試用の程、願わしゅう
存じます。勿論、私とて、一人の
社会人。家庭もあれば、又職場に
あつては多少の責任ある仕事も致
して居りますれば、四六時中、S
Mの事を考えて居るわけでもあり
ませんが、時には仕事の事や家庭
を忘れて、ひたすら女王様にお仕
え致します。快樂のための道具
として御奉仕申し上げてみたいと
思います。

それが日頃のストレスを解消し

明日の活動力の源泉となるなら、
又、人生を更に楽しくすること
あり、大変結構なことではないか
と思います。

幸いに、貴女様には一泊程度の
旅程なら遠出も出来るとの由。当
北陸は、いろいろ観光地もあり、
風光明媚な処もありますので、是
非一度、御清遊の程、御願ひ申し
上げます。

尚、私も関西地方なら時々出掛
ける事もありますので、当方から
出掛けても結構です。御互いに迷
惑をかけず、プライバシーを尊重
し、且、終始、紳士的に行動する
事は、勿論、プレーの初歩的常識
であります。それを裏付ける誠
実さを、特に忘れないつもりで居
ります。

御返事を賜れば甚だ光榮に存じ
ます。又御差支えなければ、プレ
ーの事など、拙文ではありますが
御話を致しまして御指摘等、頂け
ましたら幸いに存じます。

最後に、より楽しく、より明る
い人生を御送りになれます様、
陰ながら、御祈り申し上げており
ます。

五月二十一日

富山県 高岡三夫
高千穂順子様

〔中野春雄氏への通信〕

☆奇クに魅せられた一年☆

北 零 人

奇クを愛読して一年になる男性です。一年前に入院し、隣の患者より借りて読んだのが奇クを知るキッカケでした。

初めは全てが驚きで、信じられませんでした。読んでるうちにぐんぐん引きつけられ、共鳴し、あっ、私が求めてたものは、これだったのだと、気がつきました。おそまきながら、奇クのあることも知ったことは幸運でした。以来御送付願って毎月、待ち兼ねる思いで愛読させて頂いています。

独りよがりの誤った道徳観でセックスを処理していた自己の無智にあきれました。妻は私の無智にあきれて耐えきれず去って行きました。奇クを早く知って居たらと今は、悔まれてなりません。

便秘性でもないのに、便秘だといつて浣腸を私に求めていた妻の心を理解しようともせず、断わっていたということとは、可哀想でもあったし、私も残念でした。

奇クを知って、私の人生観も変わったためか、体の方もぐんぐん

快くなり、退院も近く、感謝しています。昔は療養所ではセックスに関する文書、絵画、写真等は、病人にはタブーとされていたのですが、最近は、すっかり変わり、すべて自由です。

医業の発達と共に医師の考えも変わって来て病院とは思えぬほど明るく、患者同士の交遊も自由です。多から、多くのSM雑誌が読まれています。これは奇クが他のSM誌と異なり内容が一貫してSMへの真摯な編集方針の結果である

しみに期待しています。六月号の読者通信で拝見しました埼玉県草加市の中野春雄様のSM愛好者の集まるクラブの如きものを東京近辺にお造りになる案を読み、小生も是非参加させて頂きたく思います。

小生としては奇クで大分、勉強し、いろいろと頭では解って来たのですが、何分、妻が居ず、看護婦で私に好意を持ってくれている婦人と旅行して、二、三回、プレイの初歩的なことをして見た程度です。是非、先輩諸氏、同好者の方の高度なプレイを御教示願いたい所存です。

(東京都・北 零人)

△日本のどこかでフッフ……▽

奴隷妻々まりこに宛てて

橘 房 由

まりこさん。いつも「奇クサロ」の、ほんの小さな一角しか占めていないけれど、貴女の書かれる短文、詩、短歌などは、とてもスバラシイと思います。素直な表現

ら仕えておられる日々の様子が、その短歌や詩によって浮かびあがってくるように、見える思いがするから不思議です。

で、フム、と納得させられるところが多々あります。貴女が、ご主人の縄を受けなが

寒中、水の中につけられたり、野外に晒されたり、ご主人以外の男に辱められたり、奴隷妻としての生活をさりげなく書いておられますが、考えてみると大変なこと

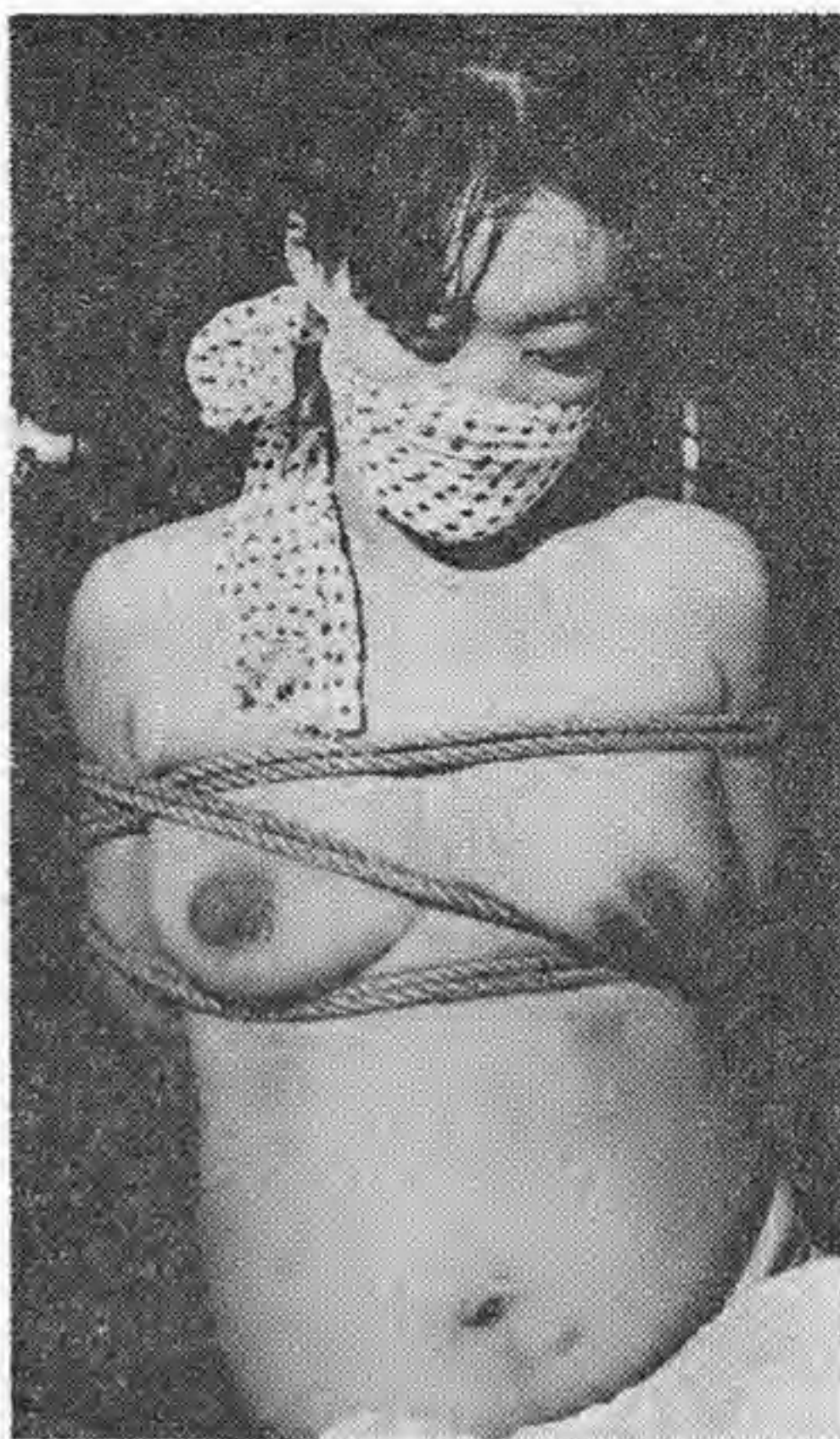


蛙腹の哀感

金原奈加子

腹ふくらみし頃

中河恵子



△感想▽ 最上卓也氏に期待する

小池明男

奇ク7月号誌上で久し振りに最上卓也氏のSM体験記『あるマンションで泣く裕子』を拝見しペンを取った次第です。

初めて最上氏が裕子さんと云うスバラしいパートナーをとまなつて奇ク誌上に投稿された時、大変うらやましいと云った文を奇クに寄せたが、不幸にして掲載されなかった。

昨年8月号で、『ゆう子を責め

る』と云うプレイルボを投稿されたから、どうしておられるのかと思っていた所、7月号で裕子さんとのプレイ記事と写真を拝見し、相変わらずの活躍を又、うらやましく思っています。

最初、誌上で発表された写真に比べ、裕子さんの体全体がたるんで来ている様に見受けられる様です。特に乳房が最初の頃の写真では、ういういしさが感じられたの

すね。ボクは健康のために毎朝、冷水をかぶっています。実感として、寒中に水の中につけられるということが、どんなに辛いことか理解できるよう気がします。また、ボクは女ではないので、その時の恥ずかしさなどは、ハッキリとはわかりかねますが、ご主人以外の男に罵られることなど、言葉だけなら、いとたやすいことです。が、現実となるとスゴイものでしょうね。

そんなことをさせるご主人もご主人だと思ふけれど、それに耐えて尚、ご主人に縛りを求めてゆかれる貴女は、正真正銘の完全な奴

が、7月号に発表されていた写真では乳房が外人の女性の様にダラシとして張りがない様に思われますが、如何なものでしょうか。

前にも投稿したのですが、乳房は外人のダブダブしたのより小さめでも張りのあるのが最上だと私は思っています。最近、誌上で活躍している前田真知子さん、西条紀代さん等の乳房に魅力を感じていますので、裕子さんの写真を見てファンの一入として、どうされたのだろうかと心配しています。辻村氏がカメラハントをやめら

隷妻です。

しかるに、優秀なM女である貴女が、どうして『飼育中のミジメな緊縛写真』を発表されないのでしょうか。貴女の告白文など、きつと濃厚な、いい作品になるのではないかと思います。勿論、まずいと、ご主人のお仕置が一段と厳しいものになるでしょうけれど。

ともあれ、きつと今夜も狂喜の拷問に感涙を流し、あられもないミジメな姿を強要されていられるであろう貴女を想像しながら、日本どこかで、フフフ……と悦にいつているボクが居ることをお忘れなく……。

れて、塚本氏が孤軍奮闘と云った所です。し、編集部宛もつと愛読者の中の愛好家の写真と文章の体験記を掲載してほしい旨、投稿する一方、前に誌上に体験記を発表されていた方の、その後の活躍を誌上に発表してほしいと思っていました。なので最上氏の約一年ぶりの体験記、大変うれしく思いました。

大変スバラしいパートナー裕子さんを持っておられる最上氏の今後の活躍を期待しますと共に、これから誌上に、どしどし発表して下さるよう、お願いいたします。



△編集長さまへのお便り▽

アゲラタムの花に添えて

宇津木清子

編集長さま。私は
御誌六月号を、ふと書店で手に
して、はじめて、お便りを出しま
す一女性です。

たった一冊だけの御誌を拝見し
て、こんなお手紙をだします私は
非常識かもしれませんが、悪しか
らず、お許し下さいませ。

お便りを出さずにいられないほ
ど、御誌に強くひかれるものがあ
ったのです。なんと申しますか、

こう、胸がキューツと、しめつけ
られるような、下腹の方が、たま
らなく熱くなるような気持が私を
おそってまいりました。

その気持のうすれないうちにと
こうしてペンをとっております。
実は、御誌の古い雑誌がほしくて
書店を探してみましたが見当りま
せんので、ここに代金同封してお
きます故、どうか、別紙の通り、
お送り下さいますよう、お願い申

し上げます。

実は御誌六月号で、小松裕子が
「モデル志願」という文章と写真
を出しおられたので、びっくりし
てしまいました。私のお友達に、
ほんとうに、よく似ていたからで
す。でも、手記を読んだとき、ト
ルコに勤めておられるとかで、や
はり別人であったかと、ほっとし
ました。こんなに美しく清楚な
人がモデルを志望なさろうとは考
えられませんでした。

私は、叔母がやっています駅構
内の花の店を手伝っていますの
で、小松さんのようにハダカの写
真は持っていません。それで昨年
うつしてもらった着衣のを同封致
します。もし、およろしければ誌
上に掲載して下さい構いません
。と申しましたが、私はモデル
に志願しようという気はなく、
御誌を愛読しておられるような理
解ある方々とお友達になりたいく
てお便りした次第です。

編集長さま。

こんな私でもよかったら、是非
愛読者の方を御紹介下さいませ。
たった六月号一冊だけを読んで、
こんなお願いをするのは、大変あつ
かましいのですが、よろしく、
お願い申し上げます。

編集部だより

○八月号で△S M落書帳▽『香港
紀行』を寄せられた長谷田亀治氏
は敏腕の新聞記者。要を得て適確
な文章は、この文章を読まれてわ
かる通り、お手のもの。今月号で
は『刺環の魅力』を執筆下さった
が、第三回の△S M落書帳▽即ち
十月号では『北欧ポルノ紀行』を
執筆して下さいのため、目下渡欧中
である。東京からアンカレジ経由
でフランクフルトへ直行。それか
らオーストリアへ入って、ザルツ
ブルグ——ウィーンを経てストッ
クホルム——マルメ——コペンハ
ーゲン——東京のコースでの取材
旅行。西ドイツが先日、ポルノ解
禁になったので相当面白い見聞記
もとれそう。第三回の△S M落書
帳▽は俄然楽しみになりそうだ。
因みに氏は今後、毎月△S M落書
帳▽の執筆を続けて下さる由。豊
富な資料と、練達した文章で誌面
を賑わしてくれることと思う。
○敗戦直後の北満州に展開した日
本女性の悲劇を描いた鈴鹿晶子氏
の生々しい文章を今月よりオムニ
バス形式で掲載することにした。

申しおくれましたが、私は小松さんと同じ24才で身長一六一センチ、体重五一キロの中肉中背ですが、特徴としては足が少し太目なことです。高校卒業後、都会へ出てきて今、叔母の家に同居しています。今のお仕事は、美しい花に囲まれていて楽しいですが、水を使うことが多くて、ゴム手袋をしていても、どうしても手が荒れるのが苦になります。喫茶店のウェイトレスになりたいと申しましたら、叔母に反対されました。

叔母は子供がないので、ゆくゆくは私にムコを取らして、お店のあとを継がせたいらしいのです。大都会の玄関駅の構内のよい場所にありますが、店員は私以外に五人もいて繁昌しております。叔父の生存中は、市内の目抜き通りに大きなお店があったそうですが、当時の出店だった駅のお店が、今やっているところだそうです。

私はアゲラタムの可愛い花が好きです。はなやかな濃い色の大輪の花に混じって、つつましかに咲いている花が、いかにも自分のように好きなのです。ここに、少しばかり同封しておきますから、ごらん下さい。

前にも申し上げました通り、私は御誌の六月号を、拝見しただけで、何も知らない女です。ただ、その素質だけは、十分にあるような気がしてなりません。こんな私を、手をとって導き下さる方は、ごさいませんでしょうか。

編集長さま。

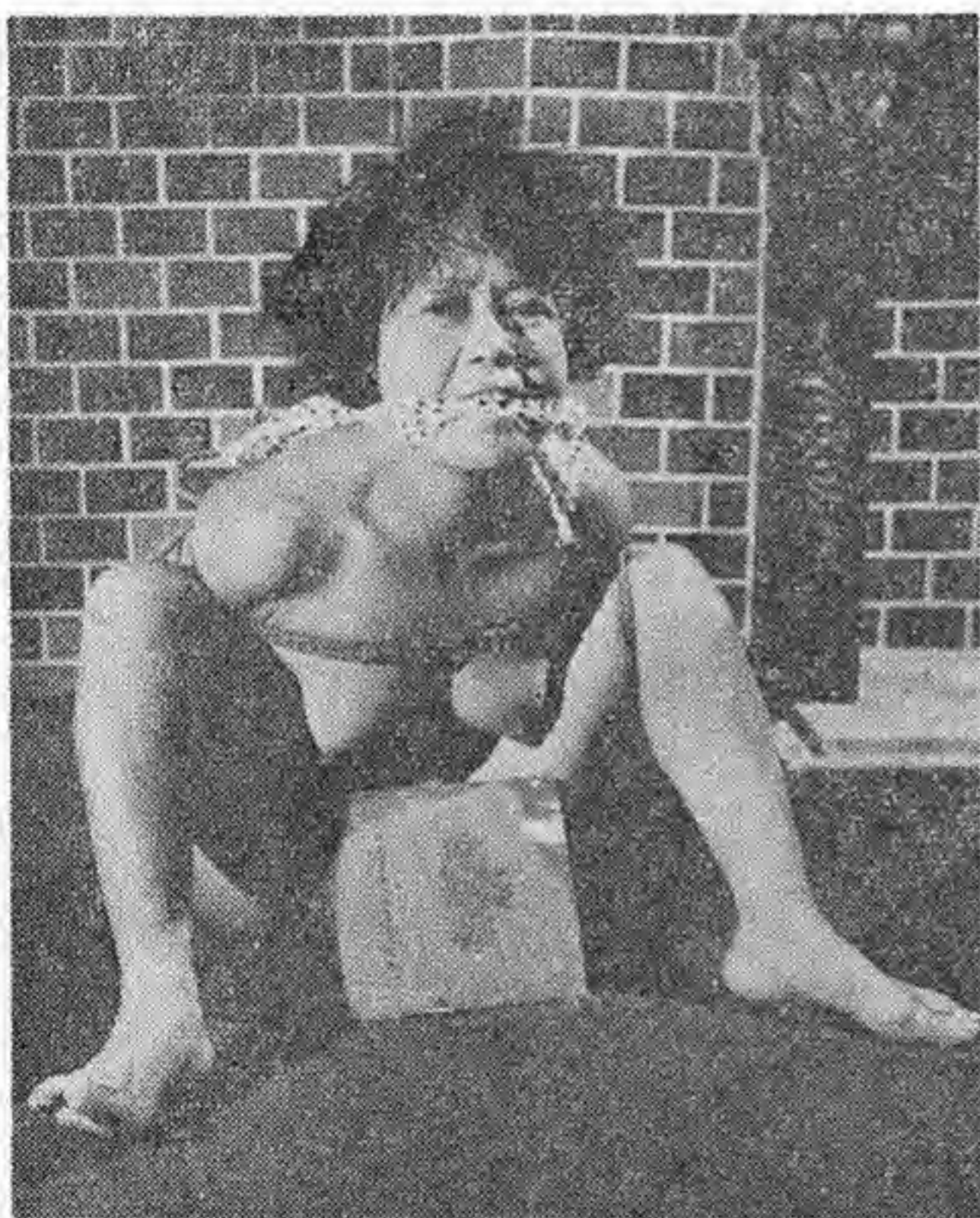
私は今、表面的には幸福な日々を送っております。でも、心の中では、火がついたり消えたり、とても複雑で苦んでおります。

これから出る新しい御誌は、毎月、読ませていただきたいと思っておりますので、もし私のような者でもよろしければ、どうか、私に適当と思われるような方を御紹介下さいますよう、お願い申し上げます。

末筆ではございますが、御誌の御発展を心から、お祈り申し上げます。

宇津木 清子

杉原編集長さま



.....谷 山 久 美 子.....

一回一回、読切りで完結する筈であるが文中に漂うSM的ムードを感じとって頂ければ幸いである。○本号で若干の積み残しが出た。中でも、春日ルミの告白と『パロディ花と蛇』を翌月回しにしたのは残念であった。その代り、SM小説を書かしては定評のある久留木栄氏が長枚数のコクのある力作『花いばらは病みぬ』で生彩を放ってくれた。往年の麗筆が今後の誌上に再び蘇ってくれる筈だ。○三原寛氏のMストーリーは八月号と今月号とで完結したが、M小説を書かしては流石にうまい。詩情漂う異境風俗の中に妖しく咲いたSMの妖花、単なるSM小説ではなくて推理小説風のところが、ファンの支持を受ける所以か。○本誌の独壇場の感ある妊婦緊縛の素材として南加津子さんが登場し塚本鉄三氏のペンとカメラで紹介して貰うことになった。なにしろ、取材期間が限られた対象なので優先的に掲載することにした。西条紀代嬢、玉木章子さん等のルポもあるそうだが、いずれ書いて頂くことにしよう。奇く女性読者の中で新しく誌上に登場してもよいという方もあるので今後が一層楽しみである。

人と獸との交りへの誘惑

〔獸姦部落〕の提唱

甲斐千恵子

地の底より呻くような、狂おしいばかりの情念。めらめらと燃えほとばしる情欲。そのからみ合いのうちに、止めようのない荒々しい行為の火花の中で、私は自分のペットと共に生きております。

七月号に『ペット飼育法』を発表して頂きました千恵子でございます。誌上で活字になりますと衆人の中に晒されて哀れに思われる反面、抑え切れない激しい昂奮が湧いてきます。もっともっと、私を皆様の前に晒したくなってペンを走らせております。

自慰に溺れて過ごした少女期を経て、幾人かの男友達と激しい交わりを重ねてきた青春期に「女というものは移り気の多い勝手なものだ」と幾度か身を以て味わってまいりました。男と別れ、ふと真空状態に陥って淋しい時、身辺にいた愛犬の飼育を初め、新しい男友達をつかむ迄の孤独の支えとしていました。

子犬が大きく育って参りますと体当たりの直情的な魔力（人間にない、或種の力で表現の仕方がわ

かりませんが）で迫り、私を一体感に引きずり込み、情欲の沼に溺れさせてしまいます。私の体の中にひそむ獸欲に火をつけます。

人犬一体。獸姦の激悦さを度重ねている裡に、私の方がケモノの世界に引きずり込まれていることに却って安らぎさえ覚えるようになります。物言わぬケモノに犯されるマゾ感。心ゆくまで昂ぶらせ狂わせてやるサド味。二人（二匹）の間で必ず守れる秘密感と他に移らぬ信頼感等、二人の世界は密着感に溢れております。

私は狂っているのでしょうかね。ケモノの三文字をみただけでも気が昂ぶってくるのです。街を歩いていても通り行く人々が、自分と別の世界の人達のような気がします。私はマモノです。その方が私は住み易く、楽しく、うれしくさえ感じるので。そして獸姦に生きていく千恵子を、もっともっと皆様の眼前に晒したい気持でおります。

人獸の相關関係を研究しておられる心理学者や医学の専門家の方

々のモルモットになりたい気持でございます。愛犬との行為を大鏡に写して自ら自分の情欲を昂揚させることは長年の自慰癖の続きかと思っておりますが、奇巧誌上に告白してから、皆様のどなたかに見て頂きたいと思っております。

今の私のもう一つの夢は、生まれたばかりの小犬三、四匹を飼育して複数のケモノによって同時に犯されたいことです。（子犬の時から飼育しないと彼ら同士でケンカするので成長犬を集めての試みは危険です）更に、男でも女でもよいから、人間側も複数として獸姦部落を作りたい衝動にかられております。

淡泊な人間同士の愛欲に飽きたせいでしょうか？ それとも私が変質なんでしょうか？ 私の一番

住み易い世界を求めて真剣に考えているので、私にとって自分は正常健全であると信じております。読者の皆様にも、きっと御理解頂けると思っております。

皆様の御考えをお示し下されば幸いです。尚、獸姦問題について編集長様の格別の御取扱いを懇願申し上げます。外国には、そんなショーもあると聞いておりますが日本にはございませんか。こっそり出来るものなら、出演してもいい気も御座います。この辺の事情も誌上で御紹介下さいますよう御願い致します。

プライベートなショーに求められる方法は、どうしたら、よろしいものでしょうか。私は人側の友が欲しいのです。

（東京都・甲斐千恵子）

刺青と女体責め 山原清子

女の柔肌に血が噴きだしてくるまで針の束を突きさして、墨を埋め込んでゆく、あの痛さと辛さ、を思えば、どのような苦痛を伴った責めでも、私は甘んじて受け入れることが出来るように思う。その責めが厳しいものであれば

あるだけに、私はその苦痛のなかに溺れきって陶醉することが出来る。中途半端な生ぬるい責めではなくて、私の生身に一针一针彫ったホリモノが感泣して思わず涙を流すような徹底してスゴイ責めをやってほしいもの

ペット

飼育に対する考え方

田中或文

尼崎市の南政子さん。

東京の甲斐千恵子さん。

私は初投稿の奇クのオールド・ファンです。現在、ペットとして三頭の犬を飼育しています。愛玩用として教育したのですが、三頭の犬を飼育中に、私の脳裡にはプレイをしてみたい、使ってみたいという願望が強烈でした。

ところが、場所、その他のチャンス（仲間）に恵まれず、半ば諦めていました。

尼崎市の南政子さんの呼びかけには感激しました。素直な御意見を拝見し、仲間がいるという近親感から夢中でペンをとりました。

東京の甲斐千恵子さんの飼育方法は、まことに具体的で、愛情をもつて交歓しておられる様子が想像され、ペット愛好の者として、大変、嬉しい限りです。

甲斐さんの飼育中の犬は中型以下のもので、ペットとして愛し、交歓に使用するのには中型で雑種と云われるもののほうが、本当は、いいようです。純粹の血統書のあるものより、雑と云われる混

合種のほうが頭がいいようです。

ペット犬飼育の第一の要諦は愛情だと思えます。恋人に接するような優しさが必要です。飼育から交歓迄進むのは、現代のように、真実味の乏しい時代に、誠実と忠実さを求めるなら、当然の過程のように思われるし、被虐性も充分満足させて呉れるはずで。

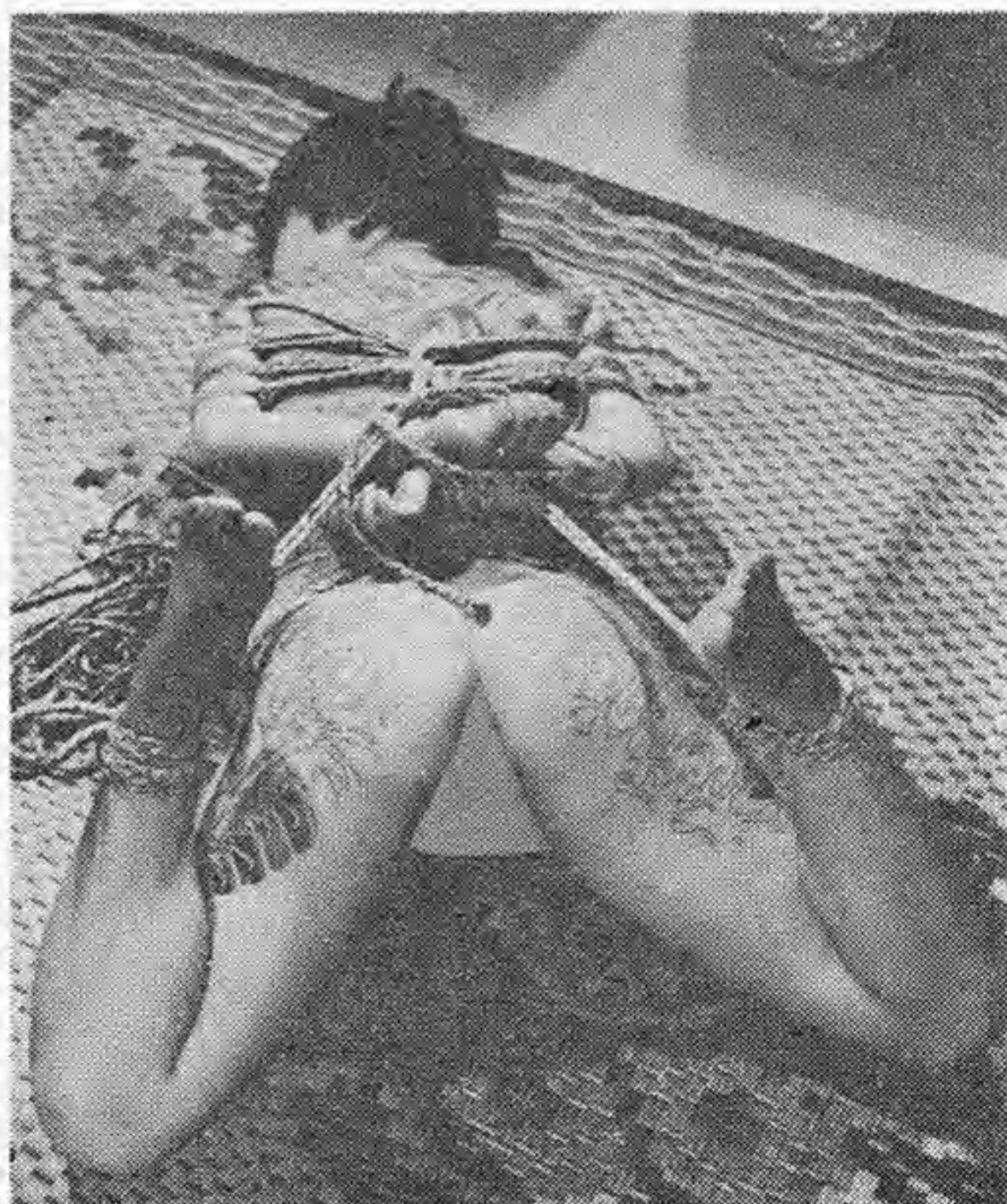
旧い時代の洋の東西を問わず、各種のペットを愛し交歓した人々は多く、然も、その影響性の重大さを恐れた為政者、又は、これを好んだ権力者等、数も勘ぐらない。そして、戒律だとか何だとか云っているものの、実は、その影響の素晴らしさに反発を感じたためだと思えます。

ペットとの交歓には、舌戯によるものと、交歓行為とに大別出来ます。いずれをとり上げても、その持続性と快美性は、全く想像以上であるとともに、忠実なナイトとして又、力強いボディガードとしても、信頼出来るはずで。

南政子さんがペットとの交歓に成功したら、きっと日々の生きが

だと願う。女一匹どこまで耐えることが出来るか、一つ試してみる気はないだろうか。

私は、意地にでも絶対に誰にも負けないという自信があるのだが……。



いが、全く別の素晴らしいものとなるでしょう。このことについて、甲斐千恵子さんも立証しておられます。

ドッグを、ここ迄愛して呉れる人に対して、本当に感謝します。

私は動物愛好家は、すべて善人で素晴らしい人ばかりだと信じていま

す。飼育については、少々自信もありますし、カメラのほうは、この地方では多少、知られているつもりです。時間的その他についても充分、余裕をもっています。当方、四十八才、商店主です。

（名古屋市・田中生）

開股高手小手縛り逆吊り

大手札二枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号八つほ

高手小手縛り逆さ吊り正面

大手札二枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号八つふ

髪を引き廻される豊満美女

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号八ほむ

縄目に悶える妖艶な肉体

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号八ほく

股間縛りに喘ぐ刺青女性

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号八ほき

立縛り髪責めの哀歎

大手札四枚一組 六〇〇円
安井喜久子 略号八おけ

片足吊り上げ羞恥責め

大手札四枚一組 六〇〇円
安井喜久子 略号八おて

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号八ちつ

後手吊りにもかく裸女

大手札三枚一組 五〇〇円
川越美佐子 略号八むた

芋虫コロコロ責めの女

大手札四枚一組 六〇〇円
川越美佐子 略号八むせ

ムチ打ちの陶酔境に遊ぶ

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号八へさ

両手吊りで痛めつける肌

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号八へし

後手縛り竹棒開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号八へす

股間縛りに苦悶する乙女

大手札五枚一組 七〇〇円
一宮百合子 略号八るり

膨満臀部責めの魅力

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号八なに

ゴムカバーの猿ぐつわ責め

大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号八せな

逞ましき臀部の無茶責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号八せね

首枷手枷責めに泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号八みき

豊麗全裸の女体を縛る

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号八ゆり

両手り吊全裸の晒しもの

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号八ゆひ

煙草責めに喘ぐホステス

大手札二枚一組 四〇〇円
佐々木真弓 略号八こぬ

海老責めに苦悶する女体

大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号八こお

禪の前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 七〇〇円
横尾 峯子 略号八ふか

強烈縛りに悶悦する裸女

大手札三枚一組 五〇〇円
刑部 典子 略号八けそ

強烈エビ責めの美しき女

大手札三枚一組 五〇〇円
松本アサ子 略号八まと

緊縛写真に埋れた緊縛裸女

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号八けお

柱の前に晒す全裸緊縛麗姿

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号八はの

羞恥責め寸前の妖艶姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号八はひ

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
愛知 葉子 略号八つお

逆さ吊りと足吊り責め

大手札四枚一組 六〇〇円
愛知 葉子 略号八つよ

強烈エビ責め地獄

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田美佐子 略号八ねむ

羞恥のアグラ縛りで責める

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号八えめ

海老縛りで悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円
水本 茂美 略号八えひ

菱縄縛りの美と愛の表情

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号八その

コードで柔肌を喰いちぎる

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号八しく

狙われた和服の娘襲わる

大手札十二枚一組 一五〇〇円
愛川 悦子 略号八ねい

美しき臀部を晒して泣く

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号八つや

全裸の刺青女後手強烈縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号八けの

羞恥の足挙げ御開帳責め

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号八これ

柔肌にムチは弾けて喘ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号八こな

ホステスの爛熟した女体責め

大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号八こち

悦 虐責めの終着駅

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号八こた

全裸の強制開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号八ゆみ

陽光に映える裸身の縄目

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号八せい

菱縄雁字搦目ヤケクソ縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号八せえ

瑞々しい裸身に本縄を許す

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号八せゆ

大の字に磔けムチ打つ

大手札四枚一組 六〇〇円
関谷富佐子 略号八わま

淫らな開股羞恥縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号八やす

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相撲つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪の掴み合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士争い髪押さえ込み

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しほ▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原・清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止とめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中の裸女死闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲禪着用連続フット

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚・啓子 略号△すま▽

相撲禪を締ゆ込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面展開

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦さながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力抜群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽

浣腸責め地獄の妊産婦 大手札四枚一組 六〇〇円 増田みゆき 略号△ほな▽	浣腸責めの甘い恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とか▽	浣腸液注入直後の状況 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とま▽	強制浣腸の各美姿態 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とみ▽	浣腸責めの美態開陳 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とめ▽	浣腸を待つポーズ 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△とも▽	エネマと縛りの恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よて▽	エネマ責めの恐怖 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よる▽	浣腸器を弄び愛撫する女 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よる▽	イルリガートルの浣腸責め 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よた▽	浣腸にむせび泣く女 大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号△つゆ▽	身動き出来ぬ浣腸地獄 大手札四枚一組 六〇〇円 大島 照代 略号△つえ▽
浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 六〇〇円 大塚 啓子 略号△ひそ▽	強制浣腸責めの序曲 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△よか▽	襲いくる浣腸器嘴管の先 大手札三枚一組 五〇〇円 長井葉津子 略号△より▽	鼻孔の奥を探索魔手 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はむ▽	開孔器にてひらく鼻孔 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はら▽	なぶられる拘束裸身の鼻 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はれ▽	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△はに▽	美女の鼻をもてあそぶ 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちる▽	美女の鼻孔を觀賞する 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちれ▽	開孔器で検査する鼻孔 大手札三枚一組 五〇〇円 左近麻里子 略号△ちき▽	鼻孔に煙草挿し込み責め 大手札三枚一組 五〇〇円 美木乃々子 略号△ぬと▽	可愛い鼻責めのアップ 大手札五枚一組 七〇〇円 美木乃々子 略号△ぬは▽
強烈縛りで顔面翻弄 大手札八枚一組 一二〇〇円 美木乃々子 略号△ぬほ▽	可憐乙女の鼻をいたぶる 大手札四枚一組 六〇〇円 一宮百合子 略号△るえ▽	鼻責めと鼻孔のアップ 大手札三枚一組 五〇〇円 中河 恵子 略号△ねけ▽	鼻責めの陶醉境 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△なは▽	淫虐鼻なぶりの形相 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△ない▽	鼻の穴を責める 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△なく▽	夫婦連縛にて鼻責め 大手札十枚一組 一五〇〇円 増田みゆき 略号△らか▽	鼻責めに悶える女 大手札七枚一組 九〇〇円 木村 洋子 略号△むる▽	顔面を凌辱される女 大手札四枚一組 六〇〇円 木村 洋子 略号△むよ▽	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号△うい▽	鼻責めによる悦楽 大手札二枚一組 四〇〇円 東浦・大塚 略号△きな▽	美しい鼻をいたぶる 大手札三枚一組 五〇〇円 遠藤百合子 略号△ゆは▽
乳房いじめの責め 大手札二枚一組 四〇〇円 大塚 啓子 略号△とお▽	豊かな乳房を責める 大手札三枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号△とき▽	逆エビ吊り責め 大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号△りつ1▽	逆胴吊り責め 大手札六枚一組 一〇〇〇円 梨花悠紀子 略号△りつ2▽	大の字逆さ吊り 大手札二枚一組 四〇〇円 増田みゆき 略号△むの▽	豊満乳房しばり責め 大手札三枚一組 五〇〇円 長野 良子 略号△うは▽	吊り打ち責め 大手札三枚一組 五〇〇円 関谷富佐子 略号△やり▽	腰元の吊り責め 大手札二枚一組 四〇〇円 村井知可子 略号△こり▽	乳房強調膨隆責め 大手札三枚一組 五〇〇円 佐々木真弓 略号△こわ▽	エネマシリシ挿入責め 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号△えね▽	ワシづかみ責めの乳房 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚・東浦 略号△えう▽	強烈乳房責め五態 大手札五枚一組 七〇〇円 山原 清子 略号△てら▽

妊婦資料と妊婦責資料

妊婦のヌードと妊婦の責め写真

未婚の妊婦の両手吊り

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△わさ▽

突き出た若妻妊孕美の腹部

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△わし▽

麗わしの妊婦責めの魅力

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おひ▽

身籠った美しき裸身縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おも▽

裸身縛り恵子の妊孕美

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おす▽

初妊娠の裸身を羞らう

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おぬ▽

妊婦全裸の羞恥フォト

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やま▽

妊婦全裸縛りフォト

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やむ▽

妊婦の九カ月腹フォト

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にみ▽

妊娠六カ月のヌード

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にそ▽

双胎妊婦腹全裸の鑑賞

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△にえ▽

膨満双胎の腹部強調縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にく▽

妊婦の豊かな乳房と腹部

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にま▽

羞らしいの妊婦媚態をさらす

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほこ▽

便々たる腹を突き出す妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほろ▽

双胎臨月腹の威容を誇る

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りて▽

見事に垂れた太鼓腹開陳

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りな▽

臨月の蛙腹のアップ写真

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りに▽

仰臥する臨月の蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りね▽

双胎の臨月の剣玉子腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りふ▽

堂々と誇示する双生児腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りま▽

素晴しく巨大な臨月の蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りは▽

豆絞り猿轡をされた妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りの▽

蛙腹に腹帯をする妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りへ▽

臨月妊婦を革具で責める

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りむ▽

全裸の見事な臨月腹を鑑賞

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りす▽

出産間際の垂れた太鼓腹

大手札三枚一組 五〇〇円
安原さゆり 略号△りみ▽

臨月妊婦腹のヌードフォト

大手札二枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りく▽

臨月腹の背面ヌードフォト

大手札二枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りも▽

膨隆七カ月妊娠腹を見る

大手札五枚一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にひ▽

妊娠七カ月の妊娠線

大手札五枚一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にほ▽

七カ月の妊娠腹大写真

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にも▽

孕んだ若妻裸身に羞らう

カラ一四枚一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬね▽

孕んだ美女の妊婦腹観賞

カラ一四枚一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬめ▽

羞恥を晒す女体棒縛り

カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すそ▽

柔軟肢体二つ折り緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬに▽

全裸正面の縄掛け艶姿

大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れる▽

柔肌の高手小手縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れほ▽

後手首を縛られた全裸体

大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れへ▽

飼育された可憐な美少女

大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れと▽

猿くつわ着用全裸縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号△ぬへ▽

真紅の腰巻着用縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬち▽

可憐な表情の全裸縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆめ▽

股間縛りの柔肌いじめ

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆも▽

雁字搦目の後手縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆあ▽

浴室での全裸刺青さらし

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号△よな▽

全裸の高手小手重女縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よの▽

血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号八せんV

女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号八せい12V

血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八せぬV

首桶に落ちる女的首

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号八せへV

愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号八せほV

切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号八せはV

血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚・東浦 略号八きつV

介添え切腹の女

大手札四枚一組 六〇〇円
甘木 春子 略号八あかV

自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号八えしV

自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八やいV

自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八やえV

自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八やおV

血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号八くえV

哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号八るなV

絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号八るくV

引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号八るにV

血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号八わいV

殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八わこV

切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号八わはV

女体自刃の美態

大手札三枚一組 五〇〇円
細川アヤ子 略号八ねにV

女体切腹媚態

大手札二枚一組 四〇〇円
細川アヤ子 略号八ねはV

肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
長野 良子 略号八なせV

禪裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 七〇〇円
絹川・大塚 略号八らはV

和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 八〇〇円
田中・愛川 略号八らりV

血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 一〇〇〇円
絹川 文代 略号八らふV

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号八らくV

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号八らみV

斬首の瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号八のきV

晒台の女の生首

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号八のくV

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八のみV

切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号八のそV

切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号八のいV

美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号八のりV

屠腹される女体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号八のるV

立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号八のさV

切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号八のむV

絞首された女体

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚 啓子 略号八のひV

斬首処刑場面

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号八くしV

絞首刑にされる女

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号八こけV

血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 二〇〇〇円
山原清子外 略号八えみV

ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号八こまV

ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 六〇〇円
東浦ひかる 略号八こはV

メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号八もかV

白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円
山原 清子 略号八ひにV

白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円
山原 清子 略号八ひぬV

ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
水本 茂美 略号八みすV

メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号八ゆおV

月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号八ゆすV

両足首括り逆さ吊り

大手札五枚一組 略号ハ〇〇円

手 足 逆さ宙吊り

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

逆さ吊りの女体を析檻

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

メンスバンド着用替ゴム見せ

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

股に喰い込む黒フンドシ

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

股を開いた黒フンドシ姿

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

開 股 逆さ吊り姿態

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

強 烈 責め被虐の果て

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

踊り子の美しき緊縛

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

股間縛りの法悦境

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

相 撲 着 用 の 艶 姿

梨花悠紀子 略号ハ〇〇円

美木乃々子

略号ハ〇〇円

六尺裃着用の艶姿

大手札七枚一組 略号ハ〇〇円

パリスマスバンド着用

美木乃々子 略号ハ〇〇円

サカエメンスバンド着用

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

サカエ軽便型バンド着用

東浦ひかる 略号ハ〇〇円

パリスマスバンド前開き

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

携帯用白色メンスバンド着用

東浦ひかる 略号ハ〇〇円

パリスマスバンド着用縛り

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

バビアメンスバンド着用

東浦ひかる 略号ハ〇〇円

相 撲 着 用 の 締 め た 女

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

メンスバンド着用開股ポーズ

東浦ひかる 略号ハ〇〇円

黒 ゴ ム 衣 後 手 縛 り

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

ゴム衣緊縛悶悦姿態

木村 洋子 略号ハ〇〇円

ゴム衣とゴムの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

甘美なる椅子ブレイ

木村 洋子 略号ハ〇〇円

開股拷問椅子の正面責め

中河 恵子 略号ハ〇〇円

オムツ着用の股間縛り

大手札四枚一組 略号ハ〇〇円

オムツ着用フェチフォト

東浦ひかる 略号ハ〇〇円

オシメをつける二人ブレイ

大手札七枚一組 略号ハ〇〇円

ゴムのオムツカパー強制着用

大塚 啓子 略号ハ〇〇円

生ゴムの猿ぐつわ責め

山原・東浦 略号ハ〇〇円

オシメ着用と女学生

大手札四枚一組 略号ハ〇〇円

六尺フンドシの女性像

木村 洋子 略号ハ〇〇円

黒フンドシを着用した女

大手札七枚一組 略号ハ〇〇円

黒フンドシの女(背面)

大塚 啓子 略号ハ〇〇円

黒フンドシの女(正面)

遠藤百合子 略号ハ〇〇円

黒フンドシを誇る姿

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

黒フンドシ背面刺青模様

遠藤百合子 略号ハ〇〇円

黒フンドシ入墨姿

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

黒ふんどし媚態の魅力

山原 清子 略号ハ〇〇円

白晒六尺フンドシの姿態

大手札五枚一組 略号ハ〇〇円

黒六尺フンドシを締めた女

刑部 典子 略号ハ〇〇円

フンドシ姿の羞らい

大手札五枚一組 略号ハ〇〇円

フンドシ姿の女の魅力

栗本 ミチ 略号ハ〇〇円

六尺裃の羞じらい

大手札三枚一組 略号ハ〇〇円

双 臀 に 喰 い 込 む 裃

横尾 峯子 略号ハ〇〇円

裃 美 に 羞 じ ら う 女

横尾 峯子 略号ハ〇〇円

玉田美佐子

略号ハ〇〇円

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

S M組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇〇円

十組十枚 一五〇〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇〇円

百組全部百枚 八〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清纯に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一面に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにS Mの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)
2 柱に晒す全裸女(玉木 章子)
3 猿轡に呻く縛女(玉木 章子)
4 開股縛りの片足(玉木 章子)
5 菱縄縛りに泣く(玉木 章子)
6 右足挙げ柱縛り(玉木 章子)
7 日陰の女の羞恥(玉木 章子)
8 開股責めの正面(玉木 章子)
9 ハの字開脚責め(玉木 章子)

10 乳房縛り真正面(玉木 章子)
11 開股縛りの強要(玉木 章子)
12 正座正面晒縛り(玉木 章子)
13 バイブ責め姿態(玉木 章子)
14 絶叫！開脚責め(玉木 章子)
15 手吊り足吊り責(玉木 章子)
16 臀部からの苛虐(玉木 章子)
17 正面で足を開く(玉木 章子)
18 卓上の開股痴態(玉木 章子)
19 縄は女を泣かす(玉木 章子)
20 強烈縛りに開脚(玉木 章子)
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)
23 強制する開股責(江口 淑子)
24 辱恥をさらける(江口 淑子)
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)
27 耐久力ガシ責め(江口 淑子)
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)
41 足の裏の温い女(深田 菊子)
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)
44 強制開股椅子責(深田 菊子)
45 交叉した手首結(深田 菊子)
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)
47 のけぞる両の足(深田 菊子)
48 開股で見ないで(深田 菊子)
49 縄猿轡海老責め(三浦 純子)
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)
51 引回された裸女(福井 桃子)
52 色気発散の脚線(福井 桃子)
53 さあどうするの(福井 桃子)
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)
56 高手小手臀部晒(福井 桃子)
57 長髪的美女緊縛(福井 桃子)
58 縛られてお喋り(福井 桃子)
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)
60 高々と上る手首(福井 桃子)
61 ポリウムを括る(笠井奈保子)
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)
67 首縄高手小手縛(笠井奈保子)
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)
71 美少女逆エビ責(前田真知子)
72 足吊りくの字指(前田真知子)
73 股間縛りで開脚(前田真知子)
74 交差した後手首(前田真知子)
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)
77 高々と後手縛り(松本 たえ)
78 強烈海老開股責(松本 たえ)
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)
81 責められた乱髪(大塚 啓子)
82 後手縛り足吊り(大塚 啓子)
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)
84 太ロープ首縄責(大塚 啓子)
85 麻縄亀甲縛縛り(荒尾 慶子)
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)
96 半減した浣腸液(長井葉津子)
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)

〔秘蔵版写真一掃分讓品〕

昭和四十年頃より四十二年頃に
かけて天星社に於て分讓して
ましたSM資料写真は、その後分
譲中止になつておりました。最
近になつて再開を強く要望され
おりますので、特に希望者に限
りて、御注文の方には、早速に
五日間の予定で、作成の上、早
御送付申上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

両足の首絞め責め 略号八〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ 略号八〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

女王様の腎臭をかかす 略号八〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

足舐めの強制 略号八〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

女王様の牡犬調教 略号八〇〇円

花田沙登子 略号八〇〇円

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号八〇〇円

山原 清子 略号八〇〇円

全裸の入墨女賊折檻 略号八〇〇円

山原 清子 略号八〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

△日本女性拷問刑罰集▽

入墨女答打ち白洲糾問 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

ハリツケ女賊拷問 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

凄絶エビ責め拷問 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

全裸の四つ這い木馬責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

逆さ吊りのお仕置 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

大の字磔女賊処刑 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

抱き算盤責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

凄惨女囚海老責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

女囚竹棒羞恥責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

白洲答打ち折檻 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

非情の囚女開股責め 略号五〇〇円

山原 清子 略号五〇〇円

美木乃々子 略号八〇〇円

土壇で胴斬りの仕置 略号五〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

美木乃々子 略号五〇〇円

白洲調べに悶える囚女 略号五〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

美木乃々子 略号五〇〇円

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号五〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

大塚・山原 略号三〇〇円

二女にいじめられるM男 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

山原・大塚 略号三〇〇円

美女二人から縛られる男 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

大塚・山原 略号三〇〇円

男馬を乗り潰す裸女二人 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

山原・大塚 略号三〇〇円

痛烈、ムチ打ちのご馳走 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

大塚・山原 略号三〇〇円

首絞めでM男に止とめを刺す 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

山原・大塚 略号三〇〇円

汚臭と足舐めの強要 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

大塚・山原 略号三〇〇円

二女の腎臭にむせび泣く男 略号三〇〇円

大手札十二枚一組 略号三〇〇円

山原・大塚 略号三〇〇円

パンプスの下に喘ぐM男 略号三〇〇円

大手札十枚一組 略号二〇〇円

大塚・山原 略号二〇〇円

豊満な太股で首を股責め 略号二〇〇円

大手札十枚一組 略号二〇〇円

大塚・山原 略号二〇〇円

男奴隷緊縛虐待への過程 略号二〇〇円

大手札十枚一組 略号二〇〇円

大塚・山原 略号二〇〇円

顔面騎乗の女王様 略号二〇〇円

大手札五枚一組 略号一〇〇円

大塚・山原 略号一〇〇円

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号一五〇円

大手札十枚一組 略号一五〇円

大塚・山原 略号一五〇円

全裸の切腹悦楽 略号七〇〇円

大手札四枚一組 略号七〇〇円

大塚・山原 略号七〇〇円

全裸の切腹悦楽 略号七〇〇円

大手札四枚一組 略号七〇〇円

大塚・山原 略号七〇〇円

マニヤの切腹 略号七〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

甘木 春子 略号五〇〇円

血紅切腹決定版 略号一五〇円

大手札十枚一組 略号一五〇円

大塚・山原 略号一五〇円

血紅切腹凄惨姿態 略号一五〇円

大手札十枚一組 略号一五〇円

大塚・山原 略号一五〇円

血紅切腹連続写真 略号二〇〇円

大手札十二枚一組 略号二〇〇円

大塚・山原 略号二〇〇円

血紅美女の切腹 略号二〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

絹川 文代 略号五〇〇円

豊満腹を切り裂く女 略号五〇〇円

大手札三枚一組 略号五〇〇円

長野 良子 略号五〇〇円

明瞭な臨月腹の妊娠線 大手札四枚一組 略号八りき 増田みゆき 六〇〇円	膨満の妊娠腹の緊縛 大手札四枚一組 略号八おみ 中河 恵子 六〇〇円	産み月の膨大な腹 大手札三枚一組 略号八よま 安原さゆり 五〇〇円	膨満腹も露わな両手挙げ縛り 大手札三枚一組 略号八のろ 木戸 悦子 五〇〇円
双胎の臨月腹を鑑賞する 大手札四枚一組 略号八りけ 増田みゆき 六〇〇円	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号八わう 中河 恵子 六〇〇円	麻縄でくびった妊婦腹 大手札四枚一組 略号八よは 中河 恵子 六〇〇円	竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦 大手札三枚一組 略号八のは 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦の乳房を縛り弄そぶ 大手札四枚一組 略号八りさ 増田みゆき 六〇〇円	八力月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号八わの 中河 恵子 六〇〇円	ころがされた緊縛の妊婦 大手札四枚一組 略号八よほ 中河 恵子 六〇〇円	十文字縛りの妊婦腹 大手札三枚一組 略号八のに 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦後手縛り引き回し 大手札四枚一組 略号八りし 増田みゆき 六〇〇円	妊婦腹誇張の開股縛り 大手札四枚一組 略号八わえ 中河 恵子 六〇〇円	臨月妊婦の革紐縛り 大手札四枚一組 略号八よに 中河 恵子 六〇〇円	柱縛りに苦しむ九力月の妊婦 大手札三枚一組 略号八のほ 木戸 悦子 五〇〇円
亀甲縛りの臨月妊孕美 大手札四枚一組 略号八りた 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態立像 大手札四枚一組 略号八わお 中河 恵子 六〇〇円	見事に美しい臨月腹妊婦 大手札四枚一組 略号八よち 中河 恵子 六〇〇円	開股責めと椅子縛りの妊婦 大手札三枚一組 略号八のへ 木戸 悦子 五〇〇円
乳房緊縛の双胎臨月腹 大手札四枚一組 略号八りち 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態坐像 大手札四枚一組 略号八わき 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦麻縄縛り 大手札四枚一組 略号八よら 中河 恵子 六〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号八こふ 中河 恵子 五〇〇円
臨月双胎蛙腹の股間縛り 大手札四枚一組 略号八りぬ 増田みゆき 六〇〇円	両手吊り片足挙げの妊婦 大手札四枚一組 略号八わく 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦全裸鑑賞 大手札四枚一組 略号八よへ 中河 恵子 六〇〇円	猿轡にうめく臨月妊婦腹 大手札三枚一組 略号八この 中河 恵子 五〇〇円
浣腸される妊産婦 大手札三枚一組 略号八りひ 増田みゆき 五〇〇円	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号八わす 中河 恵子 六〇〇円	羞らう妊婦の裸身前向立像 大手札三枚一組 略号八のま 木戸 悦子 五〇〇円	革紐による臨月腹股間縛り 大手札三枚一組 略号八こや 中河 恵子 五〇〇円
臨月妊婦の全身像 大手札二枚一組 略号八りせ 安原さゆり 四〇〇円	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号八わせ 中河 恵子 六〇〇円	九力月の妊婦腹を晒す 大手札三枚一組 略号八のめ 木戸 悦子 五〇〇円	逆さ吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号八さめ 金原奈加子 五〇〇円
臨月妊婦腹の側面 大手札三枚一組 略号八りそ 安原さゆり 五〇〇円	臨月の妊婦三態 大手札三枚一組 略号八わち 中河 恵子 六〇〇円	九力月の妊娠腹を縛る 大手札三枚一組 略号八のや 木戸 悦子 五〇〇円	両手吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号八さも 金原奈加子 五〇〇円
妊婦臨月腹のアップ 大手札二枚一組 略号八りと 安原さゆり 四〇〇円	動物的な臨月妊婦の腹 大手札三枚一組 略号八よみ 安原さゆり 五〇〇円	便々たる太鼓腹に縄掛け 大手札三枚一組 略号八のし 木戸 悦子 五〇〇円	強烈縛り妊婦責め 大手札三枚一組 略号八さる 金原奈加子 五〇〇円
恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号八おに 中河 恵子 六〇〇円			妊婦全裸縛りの全身 大手札三枚一組 略号八さに 金原奈加子 五〇〇円



七月号の三木令子さん、アヌスから酒、ビールを浣腸する体験、面白く読みました。確かに貴女が言われるようにアヌスから酒、ビールを浣腸すれば、酔って来ることは事実です。ただ二百CCの酒を浣腸して眠れるという点は疑問に思う。小生も、すでに恋人に実験ズミだが、二百CCも浣腸すれば当然、アヌス栓なんかを、しなければ排泄されます。貴女は二百CCの酒が吸収されるといって、いますが、それはアルコール分が吸収されるということであって、浣腸された酒にしてもビールにしても、しばらくすればアヌスから出て眠ることなんて出来ません。た

だ浣腸で馴らされている人は排泄までの時間が長く耐えられるし、余り浣腸していない人は、腸内のぜん動作用で、わずかの時間で排泄感が来ます。まして、ビールをイルリガートルで二本乃至三本も浣腸されれば、如何に浣腸に馴れた人でも排泄感がないことはありません。もし貴女が、それでも出ないよう出来るといわれれば、お互いに浣腸熱心な私と貴女で実際に試みたい。まだ二十一才の貴女の臀部はモチモチとした、ふれればブルブルと打ちふるような弾力性のあるお尻と思います。しかも、酒とビールを浣腸しなれた貴女のアヌスは、ほんの少し、めくれて、今にも浣腸器の嘴管を、のみ込みそうな表情をしているでしょう。そんなとっても百の議論より一つの実行の方が、より明確です。二百CC浣腸器、イルリを持参しますので、酒、ビールを貴女に浣腸して、洩らさずに眠ることが出来るか否か、本誌上で結果を発表しようではありませんか。

(東京・浣腸キチ)

五月号の読者通信にのせてもら

ったおかげで、いろんな方からお便りをいただき大へん参考になりました。東京の甲斐千恵子さんのようなベテランの方があらわれて、本当に心強く思います。この頃、暖くなりましたので私は家の庭で素裸になって、よく日光浴をします。他には、誰もいませんので、誰に気がねする必要も、ありません。家のまわりは樹が茂っていて隣近所がありませんから芝生にねそべっていても、のぞかれる心配はありません。七月号で小杉千恵さんの書かれた「犬と人との性」は素晴しかったです。甲斐さんの「ペット飼育法」を参考に、私も是非、犬とのプレイをやってみようと思います。私は人間嫌いなところがあるのですが、犬とプレイするところだけは他の方々に見ていただきたいと思います。そして、私を犬畜生以下のメスとして、さげすんで下さい。私は、そんなことを考えただけで燃えてしまします。(尼崎市・南政子)

ゴムにつかれた私、夜寝るときも生ゴムのシート(薬局で求めました)を、お尻の下へ敷いて、そのぬめぬめとした感触を楽しんでいます。夏は冬のように、ぞっとす

る冷たさがなく、それに汗でヌヌラするので、ゴムにたわむれるのには良い季節です。私は生ゴムにくるまっていますときに一番性感がシゲキされます。ですから素裸になってゴム布を腰の下へ敷いて寝たり、ゴム製のスロースをはいて外出するのが好きです。下半身の次は、やはりブラジャーにしたり、口の中へゴムを入れたりするプレイも好きです。自分ながら変わっていると思観するのですが、どうすることも出来ません。先日弾六夫様からアメリカ製のゴムのブラウスを送って下さいましたので本当に感激しました。それから、時々直接、肌につけて寝ます。私はゴムを肌にまとっている時が最高に幸福です。弾様のお便りではゴムマニアは孤独だと書いておられました。が、本当にそうですわね。私もそう思います。男性の方と違って女性では一層そういう傾向は強いと思います。こんな変わった性向を他人の方に直接お話しすることなんて、とても恥かしくて出来ません。このように、せめて通信を出させていただいて孤独感をなぐさめるといことが私の唯一の楽しみです。

(大阪府・佐々木信子)

○

小杉千恵様、浣腸、排泄の強要
アヌス責めと倒錯の世界での最も
羞恥を伴った甘美で官能的なプレイを貴女に求める一人の男性がア
ブニシテイな囁きと誘いの手を差
し延べ度く思います。アヌスに取
りつかれ、アヌスを責める事が唯
一の欲びである自らの心に空しさ
を感じ乍らも、ついアヌスプレイ
を追い求め、それに溺れて日夜、
願望と期待を抱き続けている私で
すが、今、貴女に様々な姿態を求
め、貴女の神秘的な蕾が繰り広げ
る数々の羞恥を許容していただける
なれば、そして貴女自身が歓喜の
炎に身悶えるなれば、どんなにか
心の空白を満たせる思いが致しま
す。又、貴女の意志とは関係なく
拒絶を示す括約筋を無理矢理押し
拡げ挿し込まれた浣腸器の嘴管を

Ⅱ御送金についてお願いⅡ

現金を普通郵便物に封入する
ことは、郵便法によって禁止さ
れています。現金での御送金の
場合には必ず「現金書留」でお
願ひ致します。他に、振替、定
額小為替、普通小為替等の方法
もありますのでご利用下さい。
便宜上「切手代用」にても結構
ですが、その場合は必ず一割増
にてお願い致します。

締めつける蠕動は、貴女の心を直
接、私に感じさせる事でしよう。
貴女の体内に送り込まれた淫らな
神の使いは、貴女を羞恥と官能の
淵に立たせ、やがて起こる刹那的
な瞬間が貴女をやるせない恍惚の
るつぽに酔わせる事と思います。
又、私の指先が生ゴムに締めつけ
られる様な感触を求め、ガラス棒
やプラスチックが貴女のアヌスを
冒瀆する時、貴女の魂がバラ色に
包まれ、倒錯の血がめくるめく思
いに燃えたぎる事を期待して止み
ません。それらの行為が現実には
いかにリアルなものであるにもか
かわらず、貴女の羞恥の姿態の数
々は冷たいカメラのレンズが的確
に捕え人生のやるせない一瞬の思
い出として、記録されて行くので
す。奇ク六月号で貴女のサロン告
白を読ませていただき、私の心の
奥底に潜み続けるスカトロジック
な欲望が尚倒錯の縁を求めてお便
りする次第です。人妻である貴女
に此の様なお便りをする後ろめた
さも、アヌスと云う限られた部分
にプレイを求めるが故に、わずか
乍らも、心の救われる気も致しま
す。もちろんアヌス以外の貴女の
羞恥の部分も、あからさまに見る
事になるでしょうし、ユリンにも

興味を持つ私ですが、唯、信じて
いただける事のみ、祈っております。
（枚方市・大木喬）

○

小生30才、妻22才のSM初心者
です。どなたか御夫婦でSMの一
から御指導いただける方をさがし
ております。我々の持ち物はボラ
ロイドカメラとねまきのひもだけ
で、今までプレイと言え程の事
もしたことがありません。しかし
奇クに出ているすべてに興味を持
っており、是非共色々教えていた
だきたいと思っています。我々は
生徒のつもりで先生お二人の御指
導通りに勉強するつもりです。先
生はソファにすわって、あれこれ
指示して下さい、あるいは実
地にお手本を見せて下さり、その
通りにすることも、すべて先生の
指示通りに行動することを約束致
します。「花と蛇」の文夫と小夜
子の様にあつかっていただいても
かまいません。と言うより、その
様にも又あつかってほしい気持を
もっております。先生としては東
京以外の方を希望致します。なお
場所は車がありますので何処へで
も出掛けられますし、父が那須に
別荘を持っておりますので、そち
らでもかまいません。

（東京都港区・内山好雄）

○

手元に今、便せんをさらしてお
りまして、このようにノートの切
れはしにて御返事致します失礼お
許し下さい。私の写真を送るよう
にとのことでございますが、自分
の裸の写真はございませんし、ま
して縛られましたものは写したこ
ともございません。ふだん着のも
のでしたら旅行時のものをはじめ
友人達と写しましたものが、だい
ぶあるのですが、顔（大した顔で
はございませんが）が写っている
ものは、やはり困りますし、かと
申しまして、よく週刊誌などで目
の部分、黒く隠しているものが
あるようですが、あのようにしま
しては奇クに載せましても意味が
ないのではないかと思います。お
送り頂きました写真、本当にすば
らしいものばかりで何と申してよ
いやらわかりません。深田菊子さ
ん、笠井奈保子さん始め前田真知
子さんなど奇ク誌上で拝見してお
ります方々も、このように印画紙
焼付のものでは、また美しさも格
段とすぐれているようでございま
す。女のくせに、同性の被縛写真
（しかも裸の）に憧れるなんて、
私って本当に、変わった女ですわ

ね。やはりアブノーマルなのでしようかしら。これから文房具店に行きまして、これらのフォトを貼るためのアルバムを買ってこようかと思っっています。そして今まで買いました奇クと共に大切にしまっておこうかと思っいます。末筆ではございますが、編集長様始め奇クスタッフ御一同様の御健康御活躍を心からお祈り申しあげます。

(神奈川県・村田恭子)

七月号で「Mの性に泣く私」を書いた木村洋子さん。あんたは、本当に真底からのマゾのようですね。僕のような気の弱いサド男には、うってつけの人のように思っいます。あんたの告白を読んていて僕、うれしくなりました。それから塚本先生に、お願いしたいんですけど、僕、玉木章子という人の大ファンです。先生はあの人をベテランのように扱って始めからスゴウ縛りはったけど、一回きりであと、誌上にルポものりまへんけど、あれ、どないなりましたん。僕あれから、ずっと待っていますんやで。是非是非、あとも書いておくれやす。御本人も希望しておいでやすんやから、どうぞお願い申します。僕らの魂をぐっと掴んで

天にまで飛ばしてしまおうような奴を頼んまっせ。なにしろ、毎月毎月、変わった女のお人のお相手でお忙しいことは、よくわかってますけど、あの玉木章子さんという女子はただだけは一回ぼっさりということはいかにも惜しいどっせ。僕、今月出るか今月出るかって、待っていますねん。よろしゅう、たんなまっせ。そら、新しい女子はんを追うのもよろしおますけど、こんな宝のような貴重な玉木章子さんを放っておくのは、よろしゅうおまへんで。大のファンの身にもなっておくれやすや。八月号、今手に入れました。読みながら、この手紙、書いてるところだす。来月こそは、よろしゅう、お頼み申します。

(京都市・伏見三郎)

夫婦そろって二年ほど前からの愛読者です。七月号に長谷田真知子さんが書かれていた「あたしの演じたライブショー」を読んで、とても感銘を受けました。主人も「少しは見習ったらどうだ……」と言っいます。一番、やさしそうな卵から練習を始めましたが、勢いよくとばす、なかなか思っようにはなりません。私は二十四才で、まだ子供はありません。花電車は

☆OLとなった美女の悦虐を探索する

カラー・プリントの部

女子大生の時に、奇クの緊縛モデルを志して、優美きわまりない文章と共に、上栖して、多くの緊縛の姿態を誌上にのこした前田真知子は、卒業してOLとなった最近、大学を卒業してOLとなった最近、は、更に一層成熟度を加え、艶麗さを増してきました。前田真知子嬢の全裸の緊縛肢体を、総天竺色のカラーフォトによって、アンの方々のコレクションの一端に加えて頂くため撮影しました。

胡坐縛りで悶える

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
凝脂の乗った全裸の後手高小手縛りの上に、組んだ左右の足首を括って引き寄せれば、彼女のマゾ心に火がついて燃えさかる。

操り責めに呻めく

カラー 三枚一組 略号八〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇〇円
あからさまに、さらけ出された性経験が豊富で子供を生んだ人の方が早く上手になると聞きました

が、本当でしょうか？ どんな順序で練習されたのか、長谷田さんくわしく教えて下さい。早く上手になつて、主人をよろこばせたいのです。(神戸市・大森和子)

悦虐の裸身を晒す

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
裸身の最も鋭敏な個所に、執拗な触手が襲いかかれば美女は忽ちに悦虐の快感をのけぞらす。

成熟した女体の謎

前田真知子 三枚一組 略号八〇〇〇円
ヌメヌメとした臀部の肌の女臭を、ふんだんにふりまきながら縛られた美女のマゾの謎は、その色づいた肢体の中に充満している。

明眸を汚す縄目

カラー 三枚一組 略号八〇〇〇円
前田真知子 略号八〇〇〇円
澄んだ明るい眸でじっと、こんな妖しい悦虐の魔物を秘めているのかとムゴイ縄目を見て考へる。

御誌の大ファンです。SM誌の満ちあふれる今日此頃ですが、奇クは他誌に感じられない真面目さがあり、奇ク以外のSM誌を私は継続して読む気が致しません。この真面目さが、かえって邪魔をし

編集部にそうした企画があればと思ひます。同好の紳士を讀者より極秘裡に募り、ショーをやられては？と思ひます。いかがでしょう。私は瀬戸内に住んでいますので、無人島などにそのステージを求めるともできると思ひます。たとえば宿称島などがあります。令子さんや真知子や裕子さんなども適任者かとも思ひています。

(広島・瀬戸内楽夫)

玉木章子さんが再度フォト撮影を望まれているとか七月号で知り楽しみにしております。自分からもっと凄い責めを、との便りですから、期待に答えて頂けることだと思ひます。全裸に縛り上げて自由を奪い、浣腸責めにして排泄はかつての幻の少女の幻想美を再演出し、熱れきった姿で、また違った妖しさを表現して下さい。お待ち致しております。七月号で愛読者、小杉千恵さんが人獣交婚を投稿されておりましたが、ぜひ、「花と蛇」で実現して下さい。小夜子さんがこれを実現する様子で筋は運んでいるようですが、静子夫人にも必ず、この妖美な羞恥責めを行なつてほしいものです。相当、Mに飼育されてしまったとはいえ

作六鬼団



決定版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

●瞳目のサディズム小説総集篇遂に成る！

第一章	発狂の美少年
第二章	人狼の探偵
第三章	華やかな洗滌場
第四章	救済者の来
第五章	救済者の来
第六章	救済者の来
第七章	救済者の来
第八章	救済者の来
第九章	救済者の来
第十章	救済者の来
第十一章	救済者の来
第十二章	救済者の来
第十三章	救済者の来
第十四章	救済者の来
第十五章	救済者の来
第十六章	救済者の来
第十七章	救済者の来
第十八章	救済者の来
第十九章	救済者の来
第二十章	救済者の来
第二十一章	救済者の来

第二十二章	身代金奪取の失敗
第二十三章	運命の逆転
第二十四章	奇妙な三々九度
第二十五章	飼育される白い動物
第二十六章	悪魔と悪女の悪業
第二十七章	悪魔と悪女の悪業
第二十八章	悪魔と悪女の悪業
第二十九章	悪魔と悪女の悪業
第三十章	悪魔と悪女の悪業
第三十一章	悪魔と悪女の悪業
第三十二章	悪魔と悪女の悪業
第三十三章	悪魔と悪女の悪業
第三十四章	悪魔と悪女の悪業
第三十五章	悪魔と悪女の悪業
第三十六章	悪魔と悪女の悪業
第三十七章	悪魔と悪女の悪業
第三十八章	悪魔と悪女の悪業
第三十九章	悪魔と悪女の悪業
第四十章	悪魔と悪女の悪業
第四十一章	悪魔と悪女の悪業
第四十二章	悪魔と悪女の悪業
第四十三章	悪魔と悪女の悪業
第四十四章	悪魔と悪女の悪業

第四十四章	生れかわるスター京子
第四十五章	激しいスターへの訓練
第四十六章	低脳男と令夫人の結婚
第四十七章	愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章	羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章	悪魔たちの哄笑
第五十章	地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章	珍芸を開演する令夫人
第五十二章	淫靡な時代劇ショー
第五十三章	華々しきショーの展開
第五十四章	野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章	ズベ公達の邪悪な責め
第五十六章	屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章	悪魔の執拗ないたぶり
第五十八章	文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章	勝ち誇る悪魔一味
第六十章	中国伝来の秘法
第六十一章	緊縛された美女の涕泣
第六十二章	新しい餌食への触手
第六十三章	苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章	恐怖の責め続
第六十五章	結末なき責めの結末
第六十六章	甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章	新しい檻の到来と静子の狂騒
第六十八章	あくなき汚辱に泣く美女
第六十九章	ニューフェイスに飼育開始
第七十章	肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章	熱氣を帯びたマゾの競演
第七十二章	女盛りの妖美な肉体
第七十三章	優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章	美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号。
T558 曉出版株式会社宛

(神戸市・国川栄一)

静子夫人の成熟ぶりは、あまたのファンに憧憬の的です。夫人が長らく登場しないのは淋しい限りでもあります。もし積極的に巨犬を受け入れないなら、義理の娘桂子を代役にする」と、おどかさね悶えながら巨犬を相手とした時、千代の発案で8ミリに記録される

昨今、内容の浅いポルノ書籍が氾濫する中であって、一貫して変わらぬ格調ある編集態度をとっておられる貴誌は、出版界異色の存在であると思ひます。小生、医療従事者ですが、かの偉大なるフロ

イトに関心を抱き勉強をしています。小生個人としては、女性のフェティシズムに興味があります。今年一月号の読者欄を何気なく見て宮城県の西郷房子様の記事を見いたしました。いろいろと御教示たまわりたく、また御意見を交換いたしたく思いますのでお便り下さいませ。貴女様にぜひ、お目にかけて資料もご置きます。他のフェティの女性の方もお便り下さい。(大阪府・フロイト生)

○ 当方、徳島在住の二十九才になる独身公務員です。奇クを読み始めて二年になります。今までSMプレイ同好者にめぐり会いたくとも、なかなかめぐり会える機会がなく、思いきって通信欄に投稿する決心をした次第です。大方のプレイは奇クにて吸収し、さてそれを実行したくとも相手がいないのです。この時の、やるせない気持ち小生と同じ思いをした人も、多い読者の中には、いると思います。いじめられたい女性の方との交際を希望します。貴女をがんにがらめに縛り上げての羞恥責めに興味があります。相手の身体に傷が残るようなムチ責めには、あまり興味はありませんが、相手がしてほ

しいというなら、これもやりましょう。全国の羞恥責め愛好の女性の方のお便りをお待ちします。

(徳島県・阿波正博)

○ ナルシストの武井綾子様。私は二十三才、身長百六十七、体重五十四の会社員です。奇クを始めて手にしたのは二年半ほど前になります。それ以来、たのしく拝見させていたのですが、SMについて私の知識は余りにも浅くただ、驚きのみ大きく、胸をときめかせております。私は女性を縛ったこともなく、ただ縛ってみたいという衝動にかられますが、私の心の中に眠っているS性の故か、それとも、ただの興味本位の仕業か、私自身にはわかりません。私の部屋には大きな鏡があり、いつもその鏡を見て生活しています。そして俺の顔は素晴らしいなあ、とか思ったりしています。ギリシャのナルシスは自分の身体に色情を感じ、自分の美しさに焦がれて死んだといえます。私の場合、ただ一人では、さびしいので、鏡に自分の姿を写しているにすぎないと解釈しているのですが、このナルシスの感情が多分にあるような気がします。私の全身がうつる鏡が

欲しくもなりました。風呂屋に行った時なんか、なにげなく眺めるのですが、やはり、いいなあ、と思ってしまう。武井綾子様、あなたは全くのナルシストだと、おみうけしました。私は、あなたほどではありませんが、やはりナルシストには違いありません。今まで奇クを読んでいて、今回はじめて、これだという女性に、めぐりあったような気持ちです。いろいろと語り合い、また二人で一緒に鏡に写してみようではありませんか。私はカメラを得意としています。DPEは、すべて自分でやってのけます。これは、あなたのナルシズムを大いに助けるのではないでしょうか。

(大阪市・山彦海彦)

○ 高橋千寿代様。早速、奇ク誌上を通じての最初の御命令をいただきました。身の引きしまる思いでございます。本当に、この一カ月間、女王様からの御命令を心待ちにいたしておりました。その間、私は僭越とは存知ながら、夜な夜な女王様に調教していただいているところを夢想しながら一人、身悶えていたのでございます。女王様の足元に奴隷としての装飾を施された

卑しい体を後手に縛られ、ひれ伏している奴隷の姿を思い浮かべながら、女王様に、お召しいただきたいと思っております。私は今一度、千寿代様の奴隷として、この体を捧げることが誓います。夏の暑さでムレた千寿代様の、かぐわしいおみ足を舌と口で清めて差し上げます。千寿代様の愛液を私に賜りましたら、一滴たりとも無駄には、いたしません。奴隷は犬、豚にも劣る身分であることは、よく存じております。私の生殺与奪は女王様のお心次第です。真に千寿代様だけの私有物として、きびしく調教をして下さるようお願いいたします。千寿代様の馬として、残飯を食べる豚として、たんつぼとして、テーブルとして、懸命に御奉仕いたします。偉大なサジスチンの女王様のお召しをいただけることを、ひたすら、お待ちしております。

(京都市・光林裕二)

○ 七月号で私の「花と蛇雑感、犬と人の性」を、ご採用下さり、ありがとうございます。私が「花と蛇」の甘美な責めにつかれて、奇クにお手紙を差し上げ始めましたのは確か丁度、小夜子が朱美と

奇譚クラブ

〽女体緊縛写真集〽臨時増刊

〽定価一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と続肌の明暗 前田真知子
鋭い縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女 シーラ・ゲイ
答打ちの態勢 関谷富子
鞭撻の痛さ 関谷富子
腕縛りの序曲 長井葉津子
亀甲縛りの美態 左近麻里子
陽を浴びた柔肌 中河恵子
狼ぐつわに喘ぐ 中河恵子
緊縛裸身の放り 中河恵子
責め疲れの境地 中河恵子
没我の末の悦 関谷富子
痛打の人の悦 関谷富子
沖縄美人の縛り 座間明子
剣玉子の縛り 佐々木真弓
狂変する裸女 佐々木真弓
責めくたびて 佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める 佐々木真弓
海老責の狂態 川路・ゲイ
ボリウムの挑戦 関谷富子
鞭打の下に挑戦 関谷富子
祭壇の人身御供 渡部好美
雅妻は縄を知りぬ 金原加奈子
開股の正面と背面 中河恵子
華麗な開股責め 中河恵子
イルリガイトルを前に 長井葉津子
非情な責めの終末 長井葉津子
両手吊りの晒し 中河恵子
柱縛りの完了 中河恵子
処女縛りとまどう 三浦純子
麻縄に身をゆだね 中河恵子
盗視するSMの目 佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め 川路・ゲイ
柱縛りに浮く 長井葉津子
後手吊りに苦しむ 中河恵子
どこでも責めて 佐々木真弓
鞭の法悦境 関谷富子
ムチが痛い、許して 関谷富子
柱を挟んだ連縛 関谷富子
花と蛇の静子です 中河恵子
針責めをして頂戴 渡部好美
二つ折りの女体 中河恵子
狼ぐつわの哀歌 中河恵子
日本式縛りの白人 関谷富子
マソ子の女王に 関谷富子
柱縛りの悦 関谷富子
夫婦の悦 関谷富子
長井葉津子の悦 関谷富子
豊満ボディを誇る 関谷富子
美少女の悦 関谷富子
折檻にも汚れる 関谷富子
責めたい 関谷富子
海老責の悦 関谷富子
責めてみたい 関谷富子
日本式高小手縛 川路・ゲイ
猫の目のような女 中河恵子
足吊りの悦 中河恵子
亀甲縛りの悦 中河恵子
M女二輪の花 中河恵子
苛責に乱れた黒髪 中河恵子
開股縛りの幻想 中河恵子
愉悅のひととき 中河恵子
ハリツケ晒し 中河恵子
これから、どうするの？ 長井葉津子
美しき吊り 前田真知子
苦痛の悦 前田真知子
一筋の縄の魔術 中河恵子
逆エビ縛りに入る 中河恵子
愛撫の責め 中河恵子
俯臥撮影 中河恵子
黒縄と白肌 中河恵子
身動きできぬ境地 中河恵子
浮上した女体 中河恵子
汚辱の悦 中河恵子
高小手縛り 中河恵子
責めの悦 中河恵子
失神したマソ子 中河恵子
柱縛りの悦 中河恵子
荒縄の悦 中河恵子
美と縛の悦 中河恵子
可憐な悦 中河恵子
酒の悦 中河恵子
妖蛇の悦 中河恵子
奔弄される悦 中河恵子
海老縛りの悦 中河恵子
痛さをこらえる悦 中河恵子
責めの悦 中河恵子
痛打の悦 中河恵子
ホステス裸人生 佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

キッスしながら花瓶の中へオシッコをする模様が、つづられていた頃だったと思います。あのときから私は、あの甘い羞恥責めに、あこがれる女性になってしまったのでございます。でも早いもので、相当、長い奇クとのおつき合いでございますわね。バロディの方も

益々好調の有様で、岩崎組に貸出した責めの雰囲気にも違いないと、わがことのよう、わくわくしております。「借り物」は大事に扱わねばと思いつつも、同じ借り物なら骨の髄までシャブリ抜いて、たのしまねば損と、岩崎

組の連中に紅涙をしばられる桂子想像して待っております。阪田展明様、読通を読ませていただき、写真を現像して下さるか、ありがとうございます。本心に心から喜んでおります。独りで撮影したものより、許されることでしたら、貴方の手で縛っていた

だいて写してほしいと思います。裸に引き剥いて柱に立位開脚縛りにしたり、海老責めに緊縛したりして、いじめて撮影して下さい。恥かしい姿勢でお小水を強要したり、流腸をして目がまわるような羞恥責めを記録して下さい。六月号の「幻の少女」のような写真がほしいと思います。汚いという貴方なら、あきらめてしまうようなことを夢見る女ですが、お許し願えるでしょうか。夫にも頼めないような官能が燃え、私は耐えきれないのです。アヌスが信じられない相手を求めてしまうのです。タププリとコールドクリームを塗り込んでアヌスオナニーをおこなっても所詮、孤独なプレイは羞恥のたかまりが生じません。アヌスをアヌスを、というのが私の本音です。(神戸市・小杉千恵)

ゴム衣着奴様。「五月号のゴムマニアの花嫁を求む」を拝見いたしました「どのようにして夫婦になったのか」とのお尋ねのようでしたが、事小生にしましては、妻は元来、ゴムマニアでも何でもありませんでしたし、また現在もゴムマニアでは決してございせん。全く夫唱婦隨の結果、現在の

ゴムのサルグツワ責め、あるいはゴム衣による羞恥責めを甘受しているにすぎず、ただ長年の繰りかえしの条件反射として、ゴムの臭気や、ヌメヌメした嫌な感じが逆に被虐の感度を昂める結果となっている次第です。小生は、そこにかえってSの喜びを見出しているのであって、妻が自らゴムマニアになってしまったのなら、決してゴム責めが楽しくないだろうと考えております。いずれにしても、限られた傾向の我々は、なかなか同好の士と話し合い、資料の提供をし合うことは困難ですね。それだけに時折、奇クに同好の士の便りや告白をみる時の喜びは、たえようもございません。なお、文中に貴殿が最近、購入されました女子用サイクルコート、レインダッシュ200のことがございましたが小生も早速、電話帳をみて五、六軒、たずねてみましたが、どこも取り扱っていないとのこと、入手できず弱っております。もし御支障なければ購入されましたお店を御教示おねがいできませんでしょうか。また、このレインダッシュのみでなく、他のゴムレインコート（ただし婦人用）、ゴムズボン等々も売っているお店をご存知

でしたら、合わせてお教え下さるよう、おねがいいたします。

（青木順一）

○

名古屋市の武井綾子様。なにもあなたは変わっているのではありません。あなたの考えすぎです。あなただけでなく、私もだれもない自分一人の部屋で、あなたと同じようなことをしています。綾子様。自分自身の体の一部を見て美しいと思うことは、決して変ではありません。あなたの形よいお臀、白い丸いお尻、美しいかわいなお乳。どれ一つをとっても、人にはこれるものを持っている、あなたです。でも、あなたは自分の気づかないところに、かわいい小さな、ほくろがあるかもしれません。その小さな、ほくろを私が見つけて差し上げましょう。私自身も体のどこかに、自分で気づかないほくろがあるかもしれません。ほくろがあなたのほくろを見つけたかわりに、あなたもほくろのほくろを見つけて下さい。奇クを愛読して日の浅い私は、まだまだ無知で知らない部分が、たくさんあります。私はムチや縄をつかうことは好みません。でも綾子様の強い希望なら別ですが。私は、二人だけ

の楽しい恥かしい時間を持ちたいと思っと思っていますが、綾子様どうぞお便り下さい。

（四日市・太申登）

○

しばらく、ごぶさたいたしましたのに、七月号で神戸の若木一夫さまのおたよりを拝見し、嬉しく存じました。また読通欄では東京の芥川さまからの呼びかけがあり、私のような女をお忘れにならず、こんな、お手紙を頂けることに感謝の気持ちで、いっぱいです。実は、大阪の北田様の奴隷を志願したつもりでしたところ、北田さまからは、別段お呼びかけもありませんでしたので、少々がっかりしておりましたところ、実は思いがけなく……今のところ、詳しく書くことはできない事情もあり、また、その気にもなれないのですが——大へんな体験をさせられてしまいました。そのことは、またもう少し落ちついたら誌上に告白させて頂くこともあると存じます。が、とにかく頭の中だけで考えていることは、実際とは及びもつかないものだと思いますし、今は一寸思い出しても顔が紅くなるような恥かしさ、みじめたらしさの思い出で一杯なのです。それな

のに若木さまのおたよりを見たりしますと、また妙な気持ちの起きることも否定できません。若木さまのおたよりにあるような奴隷の生活、私なら耐えられる自信がつかしました。私は鞭で打たれることは痛さが先に立って、苦しいだけです。が、奴隷としては当然、鞭打ちも甘受しなければなりません。一番、印象的な若木さまのプランは「田舎道を粗末な服装で荷車を引っぱる」ということです。ぜひやってみたいと思います。むしろ人通りの多い道を、みすばらしい恰好で、ほこりまみれで荷車を引く、そんなことをさせられたら、と思います。到底、実現困難とは存じますが、裸体にふんどし一枚のような姿で、それに鼻へ鎖でもつけられたら、どんな気持ちだろうと思います。そんなスタイルで牛のように重い荷車を引くのです。また、釜ガ崎で男に変装させ、肉体労働をさせるというお話も、私の体験したいことのようです。男に変装するのは一寸、どうかと思えますが、薄汚れた労働者の一人として激しい労働を強制されるのは、よい経験になると存じます。それから丁度、若木さまのおたよりのあるページに「連繫縛り」と

次号(十月号)は八月二十二日に発売いたします

いう黒田様のカットがありますね
あのようなスタイルで鼻環をつけ
しかも猿ぐつわと乳首につながれ
る、あんなふうには私自身がされ
てみたいような気がしました。あの
絵では体も縛られています、む
しろ私は、あの鼻、口、乳
首を拘束された上、あとは自由の
体で、裸のまま労働させられる自
分を想像してしまいます。また、
いろいろと書いてしまいました。
今のところ、しばらくの間は奴隷
体験をしようという気には、ふみ
切れないと思いますが、誌上では
皆様に責めていただき、奴隷とし
て扱っていただきたいと存じてい
ます。
(東京・山下悠子)

七月号で保田忠氏から呼びかけ
をいただき、私にもファンがいた
のかと少々ビックリしたり照れた
り、しています。保田氏の外にも
七月号では青木順一氏、伊勢国男
氏等の文章の中にはロマン派生な
どという妙なペンネームが登場し
て、いささか、くすぐったい感じ
です。その一方、あまり目立つと
つまらないブライバシーを、せん

さくされたりしては困るという元
来の憶病心が、首をもたげて来ま
す。SMに関する興味の傾向は、
著しく個人差があつて、派閥に分
類すれば、数限りなく細分される
でしょう。その中で、特殊性の強
い派(例えば、男性Mとかコプロ
趣味など)は、おそらく所属する
人数は少ないと思うのですが、し
かしその少数派の人達ほど活潑に
発言したり活動したりするので、
雑誌等では、その割に目立つよう
です。それに反して、小生の唱え
るロマン派は、恐らく圧倒的な多
数派だと思いますが、各人が余り
活潑に発言しないのが共通の特徴
のようです。それは、あまり発言
しなくても編集者の方で心得てい
て、その要求を、かなり満たして
くれているという事も原因の一つ
ですが、それよりも、ロマン派に
属する人々は、あまり極端なこと
はできないし、目立ちたくないと
いった心性の持主が多いからでは
ないかと考えています。テレビの
画面に女の縛られたシーンが出る
と、何となく自分の心の奥を見す
かされたような気分がして、女房

に「お茶を入れろ」などと、必要
もない用事を言いつけたりする人
がロマン派の中核群ではなからう
かと思えます。そんなわけで、私
は憶病で照れ屋なものですから、
全国のロマン派を組織して要求貫
徹のため闘うといったことは全然
不得手で、趣味の合う方々と細々
と、おつき合い願えば、それが
一番結構な事だと思っています。
保田氏が小生に何を期待してい
らっしゃるのか分かりませんが、余
り毒にも薬にもならない私でよろ
しかったら、どうぞ御手紙を下さ
い。
(ロマン派生)

○ M女性の方、お便り下さい。私
は二十九才で大学の研究室に勤務
しております。SMプレイは一方
的であつてはならないように思わ
れます。SとM両者の相手への十
分な理解と尊敬。そして優しさが
必要であり、そういうものがあつ
てこそ、SMプレイも楽しく行な
われるものと思います。もうすで
にSMプレイは異常なことでもな
く、人目をさけてこそソコソコす
べきものではありません。お互いの
見と好みを十分に話し合い、明る
くのびのびとプレイを楽しみまし
よう。未経験のあなたも、ふるっ

てお便り下さい。ためらう理由は
どこにもありません。私自身、殆
ど経験ありませんし、読者通信で
M女性に呼びかけることも、なぜ
か、ためらわれていました。しか
し、自分のS傾向は、少しも隠す
必要のないものであり、SMプレ
イを楽しみたいのに、その気持を
抑えているのは、かえっておかし
な事だと気づいたのです。私の好
みは主に縛りで、肌にアトが残る
ようなことは好みません。あなた
も、ぜひ勇気をふるって下さい。
(東京都目黒区・中村生)

○ ある大学の工学部に籍を置く二
十二才の学生です。奇巧は毎月、
購入していますが、自分の中にあ
る性倒錯への嗜好をおさえること
ができずに、今ペンをとっていま
す。何故、女性をはずかしめ、彼
女の人格を傷つける行為に私がひ
かれるのか、と煩悶した時期もあ
り、そのような自分の性状に嫌悪
を覚えたこともありましたが、その
ような自分の心の暗さを、もてあ
ましたとき、奇巧の存在が私の慰
めになったようです。この手紙を
出す直接の動機として、失恋があ
ります。その女性にはノーマルな感
覚の持ち主で、結局、私の性状を

☆既刊雑誌在庫案内☆

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫、折返し急送致します。○送料は、総べて当社にて負担致します。○ご希望は、一括して、多数まとめて御注文の際は、一括して、多数まとめて御注文の發送申し上げます。

昭昭昭昭昭昭
和和和和和和
4242414141
年年年年年年
116111087
月月月月月月
号号号号号号
送送送送送送
共共共共共共
三三三三三三
〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇
円円円円円円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
4444444444444444444443434343434343
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
10987654321121165432
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
 和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
 46464646464646464646454545454545454444
 年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
 111098765432112118653211211
 月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
 号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

[illegible]

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
和和和和和和和和和和和和和和和和和和和和
48484848484848474747474747474747474746
年年年年年年年年年年年年年年年年年年年年
8 7 6 5 4 3 2 1 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 12
月月月月月月月月月月月月月月月月月月月月
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号

送送送送送送送送送送送送送送送送送送送送
共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
四四四四四四四四四四四四四四四三三三三三
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

理解できず、私から去っていきま
した。結婚も考えていた相手だっ
たのですが、人間と人間とのつな
がりの根本において、この相違は
決定的だったようです。私自身、
このような悲しみを繰り返したく
ないためにも、マゾ性向のある女
性と交際したいのです。と言って
これは決して、ひやかしではあり
ません。SMプレイという、私に
充実したものを与えてくれる遊戯
以上に、私を理解してくれる女性
と長く交際したいと思っていますの
です。人間が、たった一人で生き

ていけるなら、どんなによいかと常々思っています。しかし、私を含めて人間には誰かの存在がなくては生きていけない、もろいところがあるようです。せつなな愉悅に溺れれば溺れるほど、人間は淋しさに、いたたまれなくなるのでは、と思います。常に私のそばに存在する女性といえ、わかつていただけると思います。よいお便りを待っています。

高千穂順子様。六月号の通信欄

〔静岡県・吉村勲〕

にて貴女のお便りを拝見いたしましたので早速お返事をお書きしました。私は小さな会社を経営しており、妻と二人暮らしの三十三才の男です。私は軽い責めは好いと思いますが、身体に傷が残るほどのひどい責めは好みません。貴女様がおっしゃる精神的SMプレーは望んでいません。私は家庭を破壊する気持はありませんので貴女の私生活までタッチする事はありません。その点ご安心下さい。貴女のおっしゃる精神的、男性上位の線で御交際いたしたいと思っています。

す。
(横浜市・竹田利夫)

○ 山下悠子さん。貴女は非常にまじめで清純な、その反面、淫婦のような方だと思っています。私の心身のすべての情熱をささげて貴女を飼育して、心身を燃焼させたいと思います。奴隷女のみじめさ、悲しさ、と歓喜を、身体のみすみずみまで感受して、どれい女性としての心情、思想を会得して下さい。私は、どうしても貴女にお会いしたいと思っています。ぜひ、お便り下さい。

(東京・芥川生)

編集後記

○湿った空気のムシ暑い中で、本月号の目次原稿を今、書き終えたところですが、今月はとくに、本文、口絵、フォト共に項目が多く、目次スペースに納まってくれるヤロカ……とアタマをヒネっています。それだけ盛り沢山に収録し得たことを喜ぶべきだとはワカッチャいるんですが、サテ、どうして押し込めようかとなると、ムシムシが一段と身に滲むように思え、クーラーの季節を実感します。

○その不快指数とやらを示す指針を押し戻す……とまではゆかなくとも、しばしでも忘れて頂くのに役立つてほしいものと思ひながら改めて眺めますと、本文のみでも二十六項目の秀作、労作がズラリと肩を並べ、口絵、フォトでは二十一人の美女が妍を競っていて、マカシトキ……と胸をたたくてくれているように編集子には感じられるのだから妙です。

○「幻の記録」とかの原爆被災写真が返還され、その一部が公開されたのを記念して……かどうかは知りませんが、鈴鹿晶子さんが、『ソ連兵の餌食になる日本女性』と題した敗戦時の体験記をお寄せ下さいました。三十年近く胸の中に納めていた秘話の数々を、連載の形で吐き出そうという構えが窺えます。同じく自由と抵抗を奪われた女性の屈辱体験記として、小坂多美枝さんから『女囚懲罰房』のご寄稿を頂きました。片や捕虜女性、片や囚人女性というわけで、S M 的土壌に咲く哀花二輪というところですね。単なる煽情ものでないことを期待して、注目しましょう。

読者原稿募集

告白、手記、体験

読者の皆さまが御自分で親しく体験されたことや秘められた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には五千円以上の謝礼を贈ります。

小説、読物、創作

本誌の編集内容に適した異色ある力作を大いに期待いたします。すべて自作の未発表

奇クサロン向原稿

小品、写真、挿絵、通信、短信往来、感想、批評、読後感、モデル編集者執筆への通信、夫婦プレイの報告、S M ニュース、映画雑誌新聞からの見聞記など、本誌独特の奇クサロンに適した投稿を求めます。記念品、写真資料又は二千元以上の謝礼を採用篇に対して、お贈りします。

イラスト、カット

本誌の内容に適したS M 画を求めます。大きさは自由ですが必ず白い紙に黒色で描いて下さい。優秀な作品は誌上に継続的に掲載の上、当方からテーマを与えて制作して頂くたいと思います。腕に自信のある方は、どうか、習作をお見せ下さるようお願いいたします。画料については、作品に応じ、御相談申し上げます。

◎御応募下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故悪しからず御諒承願います。

☆本誌御購読の榮☆

予約に限り
 一月分(1冊) 四〇〇円△送共△
 三月分(3冊) 一一〇〇円△送共△
 半年分(6冊) 二四〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

九月号 (第二十七巻第九号)
 (通刊第三百七号)

昭和四十八年八月二十日 印刷
 昭和四十八年九月一日 発行

編集人 杉原虹児
 発行人 吉田俊夫
 印刷人 北村俊夫

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
 △振替口座大阪四二七八三番
 (昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
 (昭和四十二年四月二一日)
 国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意して編集いたしております。したがって、本誌の発行を企図して下さる関係上、十八才未満の方には絶対販売し上げません。特にくれぐれもお願